

日本福音ルーテル教会史資料集

2004年に『日本福音ルーテル教会百年史』を刊行した後、2006年より、本教会常議員会の下に教会史資料編纂委員会を設置し、『日本福音ルーテル教会百年史』に関連する資料の蒐集・確定・編纂に取り組み、2017年6月に作業を完了した。

ここにまとめた資料集は日本福音ルーテル教会の百年通史として纏められた『日本福音ルーテル教会百年史』の章・節項目に従い、教会史を検証するための必要な資料(日本語・英文の228資料)を編纂したものである。

この資料集の作成において、出展となった主な議事録・文書は以下の通りである。

日本関係資料：

日本福音ルーテル教会常議員会資料、総会議事録、機関紙「るうてる」、礼拝式文、憲法規則条文、教会・組織設立趣意書、「20年史」、「日本福音ルーテル教会史」、委員会記録、声明文書、その他。

海外関係：

アメリカ教会・関係文献、総会議事録、ボード・議事録、機関紙(The Lutheran Visitor、Lutheran, The Church Visitor)、在日宣教師会議事録、その他。

2017年6月1日

教会史資料編纂委員会

委員長 青田 勇

解説・解題

第1章 日本伝道の開始（1880年～1901年）

第1節 「明治二五年」

第2節 宣教師来日

第3節 佐賀での伝道開始と展開

資料1 南部一致シノッド・ボードの日本伝道開始報告 (USS. 1887.11.24-29)

南部一致シノッドは、1886年にアメリカの南部の5州であるバージニア、南西バージニア、北カロライナ、南カロライナ、ジョージアの5シノッドによって結成され、その規模は教職が146人、教会数が217、総会員は2万2千人であった。南部一致シノッドのインドへの海外伝道は、シノッドの成立以来、ジェネラルシノッド(General Synod)への協力伝道という形でなされていた。具体的には、ジェネラルシノッドが招聘し、インドのグンターに宣教師として派遣したスワーツ (W.P.Swartz) の必要経費を協同で支援することで、インド伝道に参加していた。だが、1887年4月頃に突然、スワーツはボードに無断で帰国し、8月30日に派遣シノッドと宣教師自身の所属意識の問題および神学的問題から宣教師の辞表を提出し、それがボードに受理された。意外な展開を迎えたインド伝道報告を受けた4月27日のボード会議は、「新しい拠点での自前のミッション活動を行うための必要な情報収集を次回ボード会議までに行う」という歴史的に重要な決議をし、海外伝道の新しい可能性を別な拠点に探ることにした。それから7ヶ月が経った1887年11月の第2回南部一致シノッド総会において、ボード書記は、綿密な調査と検討を加えた結果として、本資料に示されている日本伝道開始を告げる報告を行った。

資料2 シェーラーの日本からの第一信 (LV. 1892.3.31)

最初の宣教師シェーラーは、1892年(明治25)2月4日、サンフランシスコより汽船ゲーリック号で太平洋の船旅を経て、同月25日に横浜に着いた。3月9日に電信による第1信をボードに送っている。「日本での伝道には大きな期待が持てるが、ことに日本語の学習には困難が伴う」との将来の不安も併せて、当面の住居となった築地12番地から送信した。この第1信は、3月31日号のシノッドの機関紙『Lutheran Visitor』にさっそく載り、その後も毎回、日本報告が第1面で報じられ、日本伝道に強い関心もつシノッドの牧師と信徒に海外宣教活動の期待と信頼を呼び起こしていった。

資料3 シェーラーとピーリーの紹介 (USS. 1892.6.22-27)

南部一致シノッド第4回総会に最初の宣教師、J. A. B. シェーラーと R. B. ピーリーの紹介と経歴が報告された。この資料で二人の経歴が示されている。シェーラーは、1891年8月にローノーク大学を卒業後、南西バージニアシノッドの牧師資格を得る。プラスキーの教会の牧師を経て、海外伝道を志し、サウスキャロライナ・シノッドでの試験を経て、11月、チャールストンの聖ヨハネ教会で按手礼を受ける。ピーリーは、1891年の初秋、ローノーク大学を卒業後、ゲティスバーク神学校に籍を置いている時に、宣教師志願をボードに提出。試験を経て、バージニアシノッドの支援の下に、日本に立つ前に、按手が施されることが記せられている。

資料4 ピーリーの日本からの第一信 (LV. 1893.1.19)

この資料は1892(明治25)年11月23日に汽船で日本に到着したピーリーが明治政府の居留地対策からして、東京・築地から12月19日付で最初の手紙を発信し、それが翌年の『Lutheran Visitor』1月19日号に載せられものである。ピーリーが最初に旅装を解いたのはシェーラーが居住していた築地の居留地内、つまり築地12番で旅装を解いた可能性が高いが、手紙の発信場所は水路を挟んで向かい側に米国長老派の新栄教会がある「築地18番」となっている。シェーラーは8月に築地を発ち、大阪の友人を訪ねつつ、九州に向かったので、シェーラーと離れて一人暮らしになった後、ピーリーは3月下旬までは築地18番に移り住んでいたと思われる。この中で、「現在、家を借りており、日本人の助手(ヘルパー)を雇っている。チャペルも将来は取得したい。色々な経費が必要である。最も必要とされているのは人材の確保であり、新たな宣教師の派遣をボードは行うものと確信している。だが、ボードの経済状態は苦しい。……そのために、ある人々は伝道資金の充実のために特別な支援態勢を望んでいる。例えば、日本人助手のために特別に支援したいという人がいるかもしれない。もしそうなれば、その費用は毎月、二十ドル(四十円)で賄えるであろう。」と記しているが、この「日本人の助手」は最初の牧師となった山内量平に他ならない。

資料5 佐賀での最初の礼拝 (『ピーリーの日本伝道開始の記録』, p16-18)

この資料はピーリーが1900年に出版した『Lutherans in Japan』(青山四郎訳)からの引用である。ピーリーは、山内量平夫妻とともに佐賀の地を踏み、んだ、1893年3月の翌月である4月2日の夕、イースターの日(イースター)に宣教開基日となる最初の礼拝を明治橋通78番地での借家にて、改革派教会から来た数名のクリスチャンも含めて20名ばかりの出席者を得て、山内量平が主に司会して行わ

れた。

資料 6 志水徳松洗礼（ピーリー授洗） 1893.3.26 （『ピーリーの日本伝道開始の記録』,p18）

佐賀市内及び周辺部に講義所開設による伝道活動に伴い、最初の洗礼・志水徳松の洗礼式がシェーラーの書齋で行なわれたことを伝える資料である。式文は1870年代より、当時のアメリカのルーテル教会の、ゼネラルシノッド、ゼネラルカウンスル、南部一致シノッドの3つの主要シノッドによる礼拝式文の共同作業の結果、1888年に出版された「The Common Service」にある「洗礼式」を訳したものを採用したと思われる。

資料 7 シェーラーの病気と帰国の報道（LV. 1896.11.26）

この1896年11月26日号『Lutheran Visitor』は突如、シェーラーが病気のため帰国せざるを得なくなったことをシェーラー夫人の手紙を引用して、シノッドの会員に報じた。ここでシェーラーの病名は「cerebroastheni」というものであることを明確に伝えている。この報道の前の、10月19日に長老派の医師としてカナダ・メソヂストの宣教師として都合20年間、日本に在住し、当時、東京築地で伝道と医療に従事していたマックドナルド博士による診察結果から、このままでは宣教師としての仕事を継続して行うことはできないことが言い渡されていたことを伝える資料である。

資料 8 シェーラーの辞任受理（BMU. 1897.4.6）

シェーラーが辞任を表明することになったボード会議の議事録である。1897年4月6日、バージニア州のウィンチェスターにあるグレイス教会でボード会議は開かれた。このグレイス教会は、1759年に設立されたバージニア州のルーテル教会として最も古く、最初の会衆がペンシルベニア・ミニステリアムにより組織された教会であり、同時に日本伝道に対してはピーリーの支援教会であった（The Lutheran Church in Virginia, 1717-1962）。このボード会議にシェーラーは文書で辞任を伝えたが、それは午後の協議で読まれたが、その時に彼はすでに退席している。シェーラーによる辞任理由は、「健康」と「資金不足」の二つであったことが述べられている。

資料9 ルーテル福音教会『礼拝式』、1897.6.1

現存する日本福音ルーテル教会の最古の「礼拝式」である。資料として記したのは、「早朝礼拝と聖餐式」の箇所である。この「早朝礼拝と聖餐式」の原典は、当時のアメリカのルーテル教会の式文に依っている。1870年代より、当時のアメリカのルーテル教会の、ゼネラルシノッド、ゼネラルカウンシル、南部一致シノッドの3つの主要シノッドによる礼拝式文の共同作業の結果、1888年に出版された「The Common Service」が原典となっていると思われる。

資料10 シェーラー病氣と帰国報告 (USS, 6th. 1898.5.11-16)

これは、シェーラーの病氣に関連して正式報告となった第6回南部一致シノッド総会議事録である。この中には、ボード報告の項目として、築地でシェーラーを診断した、医療宣教師マックドナルド博士の診断結果が載っており、ここで「シェーラーは脳の病氣 (head-trouble) で働くことができなくなった。このような慢性の持病は日本ではよくある病気で、回復には長期を要する。用意が整い次第、休暇を取ってアメリカに帰国することを勧める」との報告が記されている。この南部一致シノッド総会議事録は教会の公的行政機関の報告書に基づく記録文書にもかかわらず、その病名「cerebroasthenia」を記録から意図的に削除し、単に「head-trouble」と記録しているだけである。一方、シノッドの広報誌である1896年11月26日号『Lutheran Visitor』は、病名「cerebroasthenia」を明らかに載せて、どのような病氣であるのかを歴然たる事実として伝えている。

資料11 ピーリー報告・1898年—1899年日本伝道報告 (USS. 1900.5.16-20)

これは南部一致シノッド第7回総会に提出されたピーリーの日本伝道の公的な報告である。報告の冒頭から「キリスト教主義学校の経営が困難になってきている。これらの学校は政府系学校と比較すると、多大の不利がある。法律的には拘束を受けているからである」とピーリーが報告しているように、1892年以降、保守的、国民主義的風潮が強まる中で、欧化主義の花形であったミッションスールは、熊本英学校、新潟の北越学館、仙台の東華学校などで生徒数が著しく減少し、財政的に窮地に陥っていった。同様に、教会の伝道も同様に会員の増加も一時の勢いがなくなり、伝道は困難に直面していった状況下にあったことを示す資料である。「熊本伝道」「佐賀教会の設立」「山内量平と山内直丸の按手式」「神学生と佐賀及び久留米伝道」「ウィンテル夫妻の来日」「伝道に関する要望」「教勢・統計」が綴られている。

資料 12 1898 年度日本伝道統計 (LV. 1900.5.31)

1898 年度の統計である。1898 年 11 月の上旬に第 3 番目の宣教師 C.L.ブラウンが横浜に到着しているが、この統計表の宣教師にまだ加わっていない。そのため、宣教師はシェーラーとピーリーの 2 名である。邦人教職の 2 名は山内量平と山内直丸である。

資料 13 第一回教役者会 1900.5.31-6.2 (路帖教報創刊号 1900.7.12 7 頁)

1900 年以前、宣教師と日本人教職の全てが佐賀に住んでいたこともあり、殊更に宣教師と日本人教職による協議会の必要はなかった。だが、熊本及び久留米に伝道が拡大したことで、日本人教職が散在したことで、少数であるが、定期的で公式な「教役者会」が必要となり、1900 年 5 月 31 日から 6 月 2 日にかけて佐賀教会で開かれた第 1 回教役者会の報告である。

資料 14 「発刊の主意」 (路帖教報創刊号 1900.7.12)

この「路帖教報創刊号」は、1900 年 5 月 31 日から 6 月 2 日にかけて佐賀教会で開かれた第 1 回教役者会の決議により、『路帖教報』を発行することが決議されたことを報じている。その年の 6 月から発行兼編集者山内直丸の作業に取り掛かれ、発行所は熊本市上通町 58 番地の路帖教報社、印刷所は熊本市藍屋町 16 番地の林活版製造所として、7 月に創刊され、教会の広報的役割を担う機関紙の誕生が実現した。毎月 1 回着実に刊行されていたが、惜しくも 1902(明治 35)年 1 月 19 日第 19 号をもって、機関紙は一時廃刊となる。

資料 15 内務省令第 39 号 1900.8.1 (路帖教報 1900.8.9 4 頁)

当時の内務大臣・西郷従道より通達され、各教派にキリスト教の伝道とそれに関連する礼拝・儀式の執行に関する事柄と共に、財団・社団設立等に関する規程を定めたものである。

資料 16 1893 年 4 月～1900 年 9 月佐賀教会会員統計 (路帖教報 1900.11.8, 4 頁)

佐賀での実質的伝道拠点を与えた佐賀教会の教会組織の確立したのは、1898 年であるが、その 2 年後の 1900 年 12 月 13 日、念願の会堂が完成する。この年の佐賀教会の会員数(総会員 66 名)記した資料である。

**資料 17 佐賀教会献堂式礼拝式文、1900年12月13日（路帖教報 1901.1.10
1頁）**

南部一致シノッドは佐賀での教会資産と会堂の所有に強い意欲を示し、ボードはバージニア州ウィンチェスターのルーテル教会の会員である G.F.ミラーによる 500 ドルの献金を佐賀教会会堂建築のために用いた。さらに、シノッドの会員による遺産の献金が加算され、合計 839 ドルが建築資金とし、『ミラー・メモリアル』基金として会堂建築のために供した。教会建築費は 1,000 ドル、その内の 250 ドルは佐賀教会員の献金によるものであったと言われている。1900年6月30日に市内花房小路に教会の敷地を購入し、3ヶ月の工事期間を経て、12月31日に会堂は完成した。法的に外国人の資産所有が1909(明治42)年10月の「外国人土地所有法」の成立まで禁止されていたので、日本人の教会員である長老の溝口、和佐、久米などの3名名義で土地の登記を完了した。献堂式はピーリー、ブラウン、ウィンテル、山内直丸4人の牧師と2人の役員が式を執り行った。司式はピーリー、聖書はブラウンとウィンテルが読み、山内が説教した。

資料 18 フィンランド宣教師来日（路帖教報 1901.3.14 3頁）

1900年9月にフィンランド福音ルーテル協会（LEAF）より日本伝道のために派遣され、長崎に到着したウエルローズ牧師一家と、17歳のクルヴィネンのことが「路帖教報」で報じられた。突然の愛娘の死の後、ウエルローズ牧師一家は帰国したが、信徒宣教師のクルビネン女史とその後、来日したウーシタロ女史の二人は、佐賀でリップード夫妻と共に伝道活動に継続的に従事した。だが、二人は日露戦争中に九州の地を離れ、東京を経て、長野県下諏訪に移る。

資料 19 路帖会員表（路帖教報 1901.8.8 3頁、4頁）

1893年4月2日の夕、イースターの日に宣教開基日となる最初の礼拝が明治橋通78番地で持たれて以来、8年を経た佐賀教会の会員の名簿である。

資料 1 ボードによる南部一致シノットの日本伝道開始報告

II. FOREIGN MISSION

5. In April last, after hearing the verbal report of Missionary Swartz, the Board resolved that the officers of the Board be requested to obtain all desirable information in regard to establishing a Mission work of its own at some new point, and that they report the result of their investigation to this Board at its next meeting.

According, our Secretary has made diligent inquiry, the results of which may be summarized as follows: Japan offers peculiar advantages for such an undertaking. An interest in Christianity as the mainspring of civilization is spread throughout the empire. No obstacle is put in the way of missionaries; they are welcomed. Yet there are no more than 50,000 Christians among the millions of Japan. Canadian Methodists and Methodists of our own country, Presbyterians and Episcopalians, and the American Board have missionaries there; but there are not any Lutheran missionaries. It will cost no more to send a missionary to Japan than it costs to send one to India, nor will his annual expenses there be greater. And there need be no long delay before his work may begin.

資料引用

Minutes of the Second Convention of United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, 1887.11.24-29

資料 2 シェーラーの日本からの第一信

FROM MISSIONARY SCHERER

12 Tsukiji Tokyo
March 9. 1892

The Gaelic arrived safely on the 25th ult, and the above is my address until further notice. Kind words from home have already come to cheer me, and the prayers so generally offered have been thus far answered visibly, for every day has been full of encouragement and blessing. Japan is not disappointing, but the language is difficult beyond western conception. Shall send a letter soon. Meanwhile let the church accept greetings from the first Lutheran mission home in the Island Empire. A Jap does my cooking, and does it well. He joins me in best wishes.

J. A. B. S.

資料引用

Lutheran Visitor, 1892.3.31

資料 3 シェーラーとピーリーの紹介

REV. J. A. B. SCHERER

In August of 1891, Rev. J. A. B. Scherer, a graduate of Roanoke College and a licentiate of the Southwest Virginia Synod and at that time the successful pastor of the Church at Pulaski, Va., signified to the Board his willingness to go to the foreign field if called. After careful investigation had been made as to his character, ability, and qualifications for the work, Mr. Scherer was called by the Board. In November, he was recommended by the Board to the South Carolina Synod for examination and ordination. He passed a most satisfactory examination, and by direction of the Synod he was ordained in St. John's Church, Charleston, S.C., November 22nd, 1891. After a brief tour of some of the principal Churches in the United Synod, Mr. Scherer sailed for Japan on the 4th of February of this year, 1892. He arrived safely at his destination, and is at present located at Tokyo, Japan.

The Board made a regular contract with Mr. Scherer, by which they are bound to pay him an annual salary of \$750, or \$1,050 after his marriage, and to provide a house for him and the Mission after his arrival at the station at which the Mission is to be carried on. We found ourselves unable to grant the large sum which other Boards appropriate for outfit or to allow him to carry more than one ton of baggage at our expense. We fitted him with necessary clothing, and provided a good working library, as the property of our Mission. In addition we have bought the furniture for the hired house in which he lives at Tokyo, while studying the Japanese language and gathering the information we need in the final location of the Mission. This furniture remains our property. By the terms of the contract made with him, Mr. Scherer can resign only after three months notice to the Board; he may contract no debts for the Board without written direction and authority; the Board may suspend him for cause, but is bound in case of discontinuance of the Mission to bring Mr. Scherer back to his home in North Carolina.

Mr. Scherer's letters since his arrival in Japan have been full of interest.

He has been kindly welcomed by other missionaries in Yokohama, Tokyo and Kyoto, and in the company of some of them visited several cities. He is diligently studying the language.

The selection of a place for the Mission is beset with difficulties. Our

successors must look to God, who(it seem to us) has committed us to this undertaking by so many remarkable interpositions, for further guidance; and can, we feel assured, depend on our Missionary's intelligence and fidelity.

A SECOND MISSIONARY--- MR. R. B. PEERY.

During the early fall of 1891 Mr. R.B. Peery, another graduate of Roanoke College and at that time a student of theology in the Lutheran Theological Seminary at Gettysburg, offered himself to the Board as a foreign missionary. Inquiries, addressed to the faculties of Roanoke College and of Gettysburg Seminary, brought the best of recommendations as to Mr. Peery's moral character and ability as a student. At this time the Virginia Synod was seeking a man to become its foreign missionary, to be supported by it while at the same time it proposed to pay its quota into the United Synod's treasury. Mr. Peery was therefore referred to the Mission Committee of that Synod, with the assurance that if the Virginia Synod recommended him, this Board would accept him as a Missionary at the end of his theological course. The Virginia Synod's Mission Committee signified its willingness to support Mr. Peery as above specified. The formal call of the Board was thereupon given to Mr. Peery to become its Missionary. It is understood that he is called to be the Missionary of the Board of the United Synod, but that he is to be supported by the Virginia Synod; and his call is therefore conditioned by his passing an examination successfully and receiving ordination by the Virginia Synod at its meeting this summer; and his engagement with the Board will then begin.

資料引用

Minutes of the Forth Convention of United Synod of the Evangelical
Lutheran Church in the South, 1892.6.22-27

For The Lutheran Visitor

OUR OWN WORK

BY REV. R. B. PEERY

“Amount pledged and sent by the Synodical Society of the Southwest Virginia Synod to the Board of Missions. For Home Missions,\$500.00; For Foreign Missions,\$15.32; For Prayer House in India,\$17.48.

This is the record of our leading Woman’s Missionary Society during the past year. Her zeal is certainly commendable, but we must question the wisdom of the disposition of the funds gathered. Look for one moment at the proportion. Considering the great demands of the home field just now, we think it perfectly project that the majority of the funds should have been turned into that channel. But when more money is given to erect a prayer house in India, which is the property of a wealthy Northern Board, than is given to our own work, when it is in to its infancy, and struggling for its existence, then we must improve our objections. If any synod in the South should feel an especial interest in this Japan Mission, the Southwest Virginia Synod is that synod; for both Mr. Scherer and myself came from that synod, and our youth was spent within our bounds. Certainly the ladies of our own synod should have more interest in their own work, manned by their own men, than in the work of the General Council.

This society is not the only organization in our Southern Church that sends its money to the Northern Board either. I happen to know personally of several instances in which this is done. Now, friends, this ought not be. Look squarely at the situation. Both the Boards of the General Synod and the General Council are immensely wealthy as compared with our own Board. One single district synod of either of those bodies is stranger than our whole United Synod. They are well able to care for their own work. Formerly it was very proper for our contribution to go these Boards, for we had no work of our own. But now we have our own work, and it is in need of all our funds. We think we are just ready to permanently locate our own mission, and considerable expense will be incurred in founding it. A house will have to be rented, a native helper employed, very soon we will want to

build a chapel, and various other expenses will have to be met. Aside from this, we can utilize more men, just any time the Church will send them to us. I happen to know that our Board is even now in straitened circumstances, and I can't see why our people persist in sending their money to the wealthy Northern Boards when we need it at home. The Church has undertaken this work, she has already committed herself to it and she must support it. It is the work of the Church and not the Board. It is not the business of the Board to provide the funds, but to expend them in the manner indicated by the Church. Our officers are wise, discreet men, who are thoroughly consecrated to the work; and they deserve the hearty support of the whole Church. Then, in consideration of our poverty and the urgent need of our own work, we sincerely trust that our people will hence forth send all of their funds to our own Board.

Some desire special channels in which their funds shall go. Such can now be found in the Japan Mission. Some one who desired such a work might employ for us a native helper. The price would be about twenty dollars per month. We will want to train some catechists as soon as we can obtain them, and they will have to be supported. The different Sunday schools could easily support them. Some one might give the funds necessary to build a chapel for us; and in various other ways your moneys can be expended in special channel.

I wish some Sunday school, missionary society, or individual, who would like to do something for our work, would spend us an organ. It would not only contribute much to our own personal pleasure, but would be of great benefit to our church. The Japanese are very fond of music, and we could get much greater audiences if the attraction of instrumental music was presented to them.

12 Tsukiji, Tokyo, Japan, December 19, 1892

資料引用

Lutheran Visitor, 1893.1.19

佐賀についてから、私たち（シェーラーとピーリー）の最初の仕事は、説教を始めるために、礼拝堂（チャペル）を借りることであった。家を手に入れるのに、大きな困難を経験した。借りられそうなくつかの適当な場所があった。しかし私たちがその家をキリスト教の集会所にしようとしていることが分かったと、どんな価格でも入手出来なかった。遂に私たちは、誰れも相手にしない荒れ果てた古い家屋を貸してもいいという医者を見つけた。その場所はすばらしかった。私たちは喜んでそれを借り受け、礼拝所に変えるのに必要な修繕をほどこした。それ以来、私たちは同じその場所を使用している。それが今の私たちの「教会」（チャーチ）である。

佐賀での最初の公のキリスト教の礼拝は、1893（明治26）年3月2日（注・正確には4月2日）のイースターに、この礼拝が行われた。シェーラー氏も私もうまく言葉が話せないで、集会は山内さんによって勧められた。会衆は少数であった。市の西側にある改革派教会から来た数名のクリスチャンが、私たちをはげますために、親切に参加してくれた。そしてたくさんの恐らく未信者たちが、珍しい光景を見ようと、家の前に集まった。それは故国でのキリスト教の礼拝とは、大分変わっていた。私たちは、土地の習慣に従って藁のマット(畳)の上に座った。部屋は小さくて、道路寄りの端は開放していたので、外にいる人々を見ることも聞くことも出来た。讃美歌と祈祷は、私にはまだよくわからなかった。集会は静かにすすめられ、私たちは実際に自分たちの伝道地で、祝福された福音の説教を始めたことで、勇気づけられ、幸いを感じた。

それ以来、私たちは、この礼拝所で、週に二回公開の説教のため、定期集会を開いた。ところが、近所の人々は、私たちが実際に平気で公開説教を始めたと悟るや否や、最も激しい反対がその中から現れて来た。集会の席に、説教者に侮辱的な態度で、怒号や妨害が行なわれた。時には石や泥が家に投げ込まれ、集会をぶちこわすために、あらゆる手段が講ぜられた。私たちは普通は無視していたが、時には妨害がひどくて、集会を中止することもあった。毎晩のように、礼拝所はそこに止まるのが危険だと思われる程、石を投げ込まれた。在る時は集まった暴徒があばれて仕末におえず、警官を呼んだ。「宣教師は出て行け」、「クリスチャンは殺せ」という呼び声が、まわりに聞こえた。扉はこわされ、狂った暴徒が叫びながら家の中に飛び込んで来た。しかし丁度その時数名の警官が到着して、直ぐに彼らを家に追い帰した。こうして反対は、それから2年間、いくらかの暴力とともに続いた。

資料引用

『ピーリーの日本伝道開始の記録』,P16-18

私（ピーリー）が佐賀に到着して直ぐ、集会所を手に入れる直前、最初の回心者が洗礼を受けた。私の日記からひろい出した以下の記事は、どうしてそうなったのかを説明している。

「1893（明治26）年3月16日

今夜は、神への感謝にあふれる心をもってペンを取り上げた。神の豊かな恵みによって、神は今日最初の改心者シラヤマ村の大工、年は26才の志水徳松に洗礼を授けることをお許しになった。彼は次のような方法で、私たちのもとに連れてこられた。即ち山内さんは、東京で貧しい漁師たちに精神的な面倒をみていたが、ある者はクリスチャンであり、ある者はそうでなかった。その後その中からある者たちが、九州のシラヤマ村に移って来た。私たちは佐賀に来た時、彼らは山内さんが私たちと一緒にいることを聞き、その中の一人が75マイルも離れたところから山内さんに逢いに来た。彼は自分たちの村のいく人からの仲間が洗礼を希望しており、あるいはキリスト教を学びたいと望んでいる、と報告し、そこで働きを始めてくれるよう熱心に求めた。私たちは、私たちのヘルパー（山内）と一緒に派遣することを決め、彼が行って事情を調査するように依頼した。

山内さんは、報告されたような事情を見聞きした。しかしそこにいる大多数の人々は、キリスト教に対しては極めてきびしく、迫害の気持ちがみなぎっていた。ある親は、クリスチャンになろうと望んでいる子供たちを、殺すと脅かした。彼らは、私たちのヘルパーを殺害することまで話し合っていたが、役人の一人が保護して呉れた。迫害にもかかわらず、求道者たちはしっかりしていて、その中の一人が山内さんと一緒に佐賀に帰り、洗礼を志願した。ヘルパー（山内）は、一年間彼をしっかりと教育した。しかし志願者はクリスチャンになるため、3年間の期間を希望していることを私たちに告げ、いつも自分の聖書を学んでいた。私たちは聖礼典を受ける彼の決意に満足し、今日の午後、彼に洗礼をさずけた。式はシェーラーの書齋で行われた。役に立つ最良の式文が、そのために作られていた。それは、私たちの礼拝式文（Book of Worship）の中にするされている式文の自由訳であった。山内さんが聖書を読み、祈りを捧げ、シェーラーが式文を読み、私が洗礼を施した。そこには、役目を持つ者と受洗者以外に、クリスチャンの使用人徳次郎さんとその妻、及び池田さんという名前の学生がいた。」

資料引用

『ピーリーの日本伝道開始の記録』,P18-20

REV. J. A. B. SHERER TO RETURN TO AMERICA

It is with sincere regret that I announce to the Church in the South that one of our missionaries in Japan, Rev. A. B. Scherer, has broken down, and by the advice of eminent physicians needs absolute rest for at least a year. The Board was informed in July of his serious condition, and early in that month he left Saga for Sapporo—a health giving resort in mountains—hoping the change would restore him. Dr. Henry Hartshorne, an eminent specialist, pronounces his trouble congestion of the brain, and proscribed rest for him. In August, on the advice of his physician, he resigned his position in Government School at Saga, of which action the Board communicated to him its cordial approval. This was done to lessen his labors the coming year, preferring to give his time and strength solely to the Mission. Remaining in Sapporo until about October 1st, he went to Tokyo for a few weeks, hoping then to return to Saga about November 1st, to take up his labors. I publish, for the full information of all, Mrs. Schere's letter, with the certificates which will satisfactorily explain the reason of his return. I know this will be sad discouraging news to many of our people deeply interested in the Mission and Mr. Schere's work, and let me urge all to pray our heavenly Father to sustain and bless our missionary in his affliction. Let this trial give us all a renewed and deeper interest in the great cause.

I would urge increased offerings for the work, and that every pastor seeing the need for more funds will present the great cause of our Japan Mission to his people.

L. L. SMITH

President Board of Missions

Strasburg, Va., Nov.19,1896.

The following is Mrs. Schere's letter, Mr. Schere having been positively forbidden to write for several months:

8 TSUKIJI, TOKYO, OCT. 19,1896.

Rev. L. L. Smith, President Lutheran Board of Missions, Strasburg, Va.

DEAR SIR: Mr. Schere received your kind sympathetic letter yesterday. It did us both good, coming as it did, at a crisis. Mr. Schere is worse since

became to Tokyo. He improved at Sapporo; but leaving that bracing air has told on his health as the enclosed certificate shows.

No one could be more surprised at the turn of affairs than Mr. Schere, but under the circumstances, we feel that there is nothing to be done but to follow the doctor's advice, and apply for means to return to America at once. It is for this purpose we write. Dr. Macdonald is an eminent physician, having the confidence and patronage of all the foreign residents of Tokyo. He is himself an ordained minister. As this is a matter of great importance, we enclose a note concerning Dr. Macdonald, written by a well known third party, Dr. T. T. Alexander, of the Presbyterian Mission. All Mr. Schere's friends agree that a trip home is necessary. Mr. Swift (Y. M. C. A. Sec.) is especially earnest in urging him to go home, as he experienced the same trouble. We ourselves cannot but think that going home is positively necessary. While my husband deeply regrets the necessity of his demand upon you, he is comforted somewhat by the facts that he has earned 3,000 yen (\$ 1,500 gold) for the use of the mission by his work in Saga school, and that his services have already extended over a period of five years.

So will arrange to leave Japan December 25th, hoping that you will let us hear from you as soon as possible.

Your sincerely,
MRS. SCHERE

The Board will please regard the above as a letter from me, as it was written by my suggestion, and with my entire approval.

J. A. B. SCHERE
Tokyo, Japan, Oct. 19, 1896.

The following are the certificates mentioned above:

Tokyo, Japan, Oct. 19, 1896.

The Rev. Mr. Schere has been suffering for sometimes from head-trouble(cerebroasthenia), which entirely incapacitates him for work. This ailment is quite common in Japan, and is the cause of a large proportion of the Missionary break-downs. The recovery will involve a long period—say a year—of complete rest. In this case, I deem a change of conditions and climate essential. I therefore recommend that Mr. Schere go to America on furlough as soon as arrangements for going can be made.

D. MACDONALD, M. D.

Dr. D. Macdonald who has given Mr. Schere's certificate is an entirely competent physician who has been in Japan for more than twenty years, and who has had a very wide experience with Missionaries of different Boards and different nationalities. His certificates are recognized by all Boards having representations of long standing in this country.

T. T. ALEXANDER
Am. Presby'n . Mission
Tokyo, Japan, Oct. 19, 1896.

資料引用
Lutheran Visitor, 1896.11.26

資料 8 シェーラー辞任受理

South Vest Virginia – We approve of the response made by our Secretary,
Rev. L. K. Probst to the letter of Rev. J.A. Hufford relative to the Board taking charge of the mission work of the Southwest Virginia Synod.

At the call of the President, read the following paper.

To the Board of Missions and Church Extension of the United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South.

My dear Brethren;

With deep regrets I herewith lay before you my resignation as your missionary to Japan. It is no light thing to alter the course of one's whole life, or to bring in any way discouragement to our foreign work, which is as near my heart as yours. But it is my sincere belief, after the most serious consideration of which I am capable, that in offering this resignation I am subserving the best interests of the church.

Following are the chief reasons that lead to this step.

I. Health.

As you are aware, the peculiar trouble from which I have for almost a year been suffering, is a common one in Japan. Men and Women in good physical health, but of sensitive nervous organization, are affected by it. It is superior by worry, overwork, and climatic influences. And it is practically irrecoverable in Japan, though generally yielding readily to complete, protracted and longer rest. You can inform yourself fully on the subject by reference to any physician with experience in Japan, or to any Board having work there.

Now it is the opinion of many informed persons that if a man succumbs to this trouble with his first five years of residence, this is prima facie of his inadaptability to the field, as the same trouble is likely to recur with increased seriousness. And those nearest me confirm my own belief that to return to Japan under existing circumstances would be almost

certain to invite a recurred attack of this same trouble within a short period. Apart from personal considerations, it is not right to burden our work with such liability.

2. Lack of Means

There are only three ways of treating our foreign work; to abandon it, to extend it = naturally expands, or to continue it under limitations. We have met with too great blessing and encouragement on the field to make proper any thought of abandonment; and the Board has already been forced by its meager resources to declare against equipment commensurate with the natural expansion of our mission. There remains only the policy of continuation under limitation. The Board has settled its policy of confining our field to Saga and the immediate neighborhood. Now it is my honest conviction that, since this policy must perforce be pursued, it is a far wiser and more economical plan to support and equip one man properly than to have two men do the work of one. I by now means say that there is not work for more than one man, provided the policy extension be adopted; but I do say, without hesitation, that is the Board can command no more means that it has thus far had, and must limit its work to Saga, then one missionary is sufficient to its capacity, and the Salary hitherto paid the other could be more wisely used in properly equipping and supporting the work already in hand. This conviction has been fully expressed in letters to you and to the former Board, and would alone have been sufficient to cause me seriously to consider resignation, had not a doctor's certificate sent me home on another account. As it is I respectfully suggest that circumstances being as they are, you welcome this opportunity of retiring one missionary from the field, where our means will not allow us properly to support and equip the work of two. These two convictions make it a duty to you and to the church to lay before you my resignation. In so doing I have warm love for our foreign work, in the highest interest of which I am trying to act, gratitude to you for your courteous and fraternal treatment; and deep affection for the people, whose love, and prayers have been a source of sweet consolation to strangers in a strange land. To sever all these ties is by far the hardest thing I have ever had to do, but it is done in obedience to the same voice that led me to Japan, where my work, which has not been in vain, seems now to have ended.

I shall be glad to converse full with you concerning the subjects which have been barely touched upon in this letter, or to give you any information

about our work that I can.

(Signed) J.A.B. Scherer
Winchester, PA
April 6 , 1897

The paper was received for consideration, pending its consideration the Board adjourned for dinner till 2:30 p.m.

Second Session

Prayer was offered by Rev. J.A.B. Scherer. The minutes of the morning session were read and after being corrected were adopted.

The consideration of the pending paper was commenced and after being duly considered, it was moved that the resignation of Rev. J.A.B. Scherer be accepted. The motion was sustained.

The Board decided to extend a call to Rev. H.F. Scheele of Stannton, VA. to become Rev. J.A.B. Scherer's successor, upon the concurrence of Rev. Dr. L. G.M. Miller.

The Board now adjourned to meet at the call of the President Rev. L.L. Smith.

J. P. Stirewalt , Secretary Pro Ten

資料引用

Board of Missions and Church Extension of the United Synod of the South of the Evangelical Lutheran Church in the South. April 6, 1897.
(pp. 109- 117)

禮 拜 式

ルーテル福音教会

そうちょうれいはいあるい せいさんしき
早 朝 禮 拜 或 は 聖 餐 式

はじめに聖靈降臨歌を歌ふも可なり
會 衆 は 起 ち 會 師 は 聖 卓 の 側 に 立 ち て 左 の 如 く 言 ふ
聖 父 と 聖 子 と 聖 靈 の 聖 名 に よ り て
會 衆 は 左 の 如 く 歌 ひ 或 は 言 ふ

アーメン

茲にて左の懺悔をなす
懺 悔
主 に 在 て 愛 す る も の よ 我 ら 眞 心 を 以 て 聖 父 なる 神 の 聖 前 に 來 り て 己 が 罪
を 懺 悔 し 其 宥 赦 を 主 イ エ ス キ リ ス ト の 聖 名 に よ り て 希 ひ 奉 る べ し
會 師 會 集 俱 に 跪 き 或 は 立 ち て 次 の 語 を 歌 ひ 或 は 云 ふ
我 ら の 助 は エ ホ バ の 聖 名 に あり
エ ホ バ は 天 地 を 創 造 た ま ひ た り
我 謂 く 我 が 愆 を エ ホ バ に い ひ あ ら は さ ん と
會 衆
主 は 我 罪 の よ こ し ま を 宥 し 給 へ り
會 師 は 言 ふ
我 ら を 創 造 り 我 ら を 贖 ひ 給 ひ し 全 能 の 神 よ 我 ら 稟 性 罪 ある も の に し て 清 潔 き
こ と な く 且 つ 我 ら と 思 と 言 と 行 を 以 て 罪 を 犯 せ し こ と を 謹 で 懺 悔 す 。 然
れ ば 吾 ら 主 イ エ ス キ リ ス ト の 為 め に 主 の 恵 を 求 め そ の 無 量 憐 恤 に 依 り 頼 み
奉 る

會 衆 は 會 師 と 俱 に 云 ふ
獨 の 聖 子 を 予 へ て 我 ら の 為 に 死 な し め 給 ひ し 最 も 憐 み 深 き 神 よ 。 願 く は 我
ら を あ わ れ み て 聖 子 の 為 め に 諸 て の 罪 を 宥 赦 し た ま へ 。 又 た 聖 父 の 恵 を 以 て 遂
に 無 窮 生 命 を 得 ん 為 に 聖 靈 に よ り て わ れ ら に ま す ま す 深 く 聖 旨 を 曉 ら せ 又 た
常 に 聖 語 に 順 は せ 給 へ 。 此 等 の 祈 禱 を 主 イ エ ス キ リ ス ト に よ り て 献 げ 奉 る

アーメン

會 師 立 ち て 言 ふ

てん ちち ぜんのう かみ あわれ ひひとり こ あた われ ため し かつ
天の父なる全能の神はわれらを憐みその獨子を與へて我らの為に死なしめ且
み こ ため われ つみ ことごとく ゆる たま しゅ ま その み な しん ひと ちから
聖子の為めに我らの罪を悉く宥るし給ふ。主は又た其聖名を信ずる人に力
を與へてこれを神の子となし且其聖靈をあたへんと約したまへり。故に信じて
あた かみ こ かつそのせいれい やく ゆえ しん
バプテスマを受くる者すくはるべし。神よ願くはこの恵を我らにあたへたま
へ

くわいしゆう うた あるい い
會衆は歌ひ或は云ふ

アーメン

こ こ ぐわい し ぐわいしゆうとも さだま さんびしやう うた あるい しょう ただしとくとう
茲にて會師會衆俱に定れる讚美頌を歌ひ或は誦す但特禱を
おわ つつい たつ
終るまでは續て立べし

讚美頌

さんびしやう しょうかしやこれ うた あるい さんびしやう ぐわい し
讚美頌とグロリアパトリは唱歌者之を歌ふ或は讚美頌は會師こ
れを誦しグロリアパトリは會衆これを歌ひ或は誦するも可なり
しょう ぐわいしゆう うた あるい しょう か
ただししへんもし うたいししょう もつ さんびしやう だいう ぐわいし ずい
但詩篇若くは歌一章を以て讚美頌に代用するも會師の随意なり

グロリアパトリ
ちち みこ せいれい えいこう はじめ いま よよがざりなく
聖父と聖子と聖靈に栄光あれ元始にあり今方あり世々無窮あるなり アー
メン

キリエ

ぐわい し ぐわいしゆうとも これ しょう あるい うた またくわい し そのねがい い
キリエは會師會衆俱に之を誦し或は歌ふ又會師其願を云ひ
ぐわいしゆう これ わ うた あるい い
會衆は之に和して歌ひ或は云ふべし

主よあわれみたまへ

キリストよあわれみたまへ

主よあわれみたまへ

こ こ さ うた ただし しゅくじつ せいさん
茲にて左のグロリアインエキセルシスを歌ふ但し祝日にして聖餐
しき をこな とし ほか さんびしやう だいう か
式を執行ふ時の外は讚美頌を代用するも可なり

グロリアインエキセルシス

ぐわい し い
會師は云ふ

いとたか
天上きところには栄光神にあれ

ぐわいしゆう うた
會衆は歌ふ

いとたかきところには栄光神にあれ地には平安人には恩寵あれ全能の父天の
わうしゅ かみ しゅ ほ しゅ たた しゅ おが しゅ あが しゅ おおい えいくわう
王主な神よわれら主を頌め主を讚へ主を拝み主を崇め主の大なる栄光のゆへ
かんしや たてまつ かみ う たまひ ひとり ごしゅ よ つみ のぞ たま かみ こひつじ
感謝し奉る神の生み給し獨子主イエスキリスト世の罪を除き給ふ神の小羊
ちち み こ しゅ かみ われ あわれ たま よ つみ のぞ たま しゅ われ いのり う たま
聖父の聖子主な神よ我らを憐み給へ世の罪を除き給ふ主よ我らの禱を享け給
ちち みぎ ぎ たま しゅ われ あわれ たま しゅ われ いのり う たま
へ聖父の右に座し給ふ主よ我らを愍み給へキリストよ主のみ聖なり主の王な
り主のみ聖靈と俱に聖父の栄光のうちに在て最も高し アーメン

ぐわい し い
會師は云ふ

ねがわ しゅなんぢ とも いま
願くは主汝らと俱に在すことを

くわいしゆう うた あるい い
會 衆は歌ひ或は云ふ
ねがわ しゅなんぢ れい とも いま
願くは主 汝の靈と俱に在すことを
くわいし い
會 師は云ふ

われ いの
我ら祈るべし

ここ くわいしたうじつ とくとう とな
茲にて 會 師當日の特禱を唱ふ

とくとふ
特禱

とくとふ をは くわいしゆう うた あるい い
特禱を終りて 會 衆は歌ひ或は云ふ

アーメン

ここ くわいし たうじつ しとしよ よ ただしとしよ よ まえ せいしよ ほか ところ
茲にて 會 師は當日の使徒書を讀む但使徒書を讀む前に聖書の他の處

を讀むも可なり然し常に定られたる日課は用ゆべし

くわいし しとしよ よ はじ ととき さごと い
會 師は使徒書を讀み始める時左の如く云ふ

しとしよ なにしよなしやうなにせつ はじ
使徒書は何書何章何節より始まる

たうじつ
當日の使徒書

よ をは くわいし い
讀み了れば 會 師は云ふ

しとしよ おは
使徒書は終る

つぎ くわいしゆう うた また しよう ただしじゆくせつ これ もち
次に 會 衆はハレルヤを歌ひ又は誦す但受苦節には之を用ひず

ハレルヤ

とも せいせつし うた う
ハレルヤと共に聖節詞を歌ふことを得

ただし うた おわ のち しへんもし うた うた か
但ハレルヤを歌ひ終りて後、詩篇若くは歌詞を歌ふも可なり

せいせつし
ハレルヤと聖節詞

こうりんせつ
○降臨節

ハレルヤ エホバよ なんじ あはれみ めぐみ いにしへ た
汝の憐憫と仁慈とは古昔より絶へずありエホバよこれ
を思ひいだし給へ

ハレルヤ

げんいほうせつ
○現異邦節

ハレルヤ もろもろのくに なんぢ ほ たみ なんぢ
國よ 汝らエホバを讃めまつれもろもろの民よ 汝らエ
ホバを稱へまつれそは我らにたまふ其憐恤は大なり神の眞實は永遠にたへる
ことなし

ハレルヤ

じゆくせつ
○受苦節

イエスは己をおのれ ひく し にいたるまで したが じゅうじか し う
を卑ふし死にいたるまで 順ひ十字架の死をさへ受くるにいたれり

ふくくわつせつ
○復活説

ハレルヤ われ すぎこしすなは
我らの逾越即ちキリストはほふられたまへり ハレルヤ

せいれい かうりんせつ
○聖靈降臨節

ハレルヤ なんぢみたま いだ たま すべてのもの つく ぜんめん あら
汝 靈を出し給へは百物みな造らる全面を新たにしたまふ ハ
レルヤ

○三位一躰主日より降臨節にいたる

ハレルヤ 願くは 汝の憐憫に従ひて 汝の僕をあしらひ我に 汝の法律を教へたまへ 我は 汝の僕なり我に 智慧を與へて 汝の證詞を知らしめ給へ ハレルヤ

ハレルヤ 我らの先祖の神エホバは 頌むべき哉彼を 頌め又た彼を 永遠に大にたかめよ ハレルヤ

茲にて 會師は 當日の福音書を報して云ふ
(何々日の) 聖なる福音書は何の何章何節より始まる
會衆は歌ひ或は云ふ

願くは 主に 榮光あらんことを
茲にて 會師は 當日の福音書を讀む
當日の福音書
讀み終れば 會師は云ふ

福音書は終る
會衆は立ちて歌ひ或は云ふ

願くは キリストに 讚あらんことを
茲にて ニケヤ信經 或は使徒信經を誦し 或は歌ふ 但 聖餐式を執行と
きはニケヤ信經を用ゆべし

ニケヤ信經

我は 唯一の神 全能の父 天地と 凡て見ゆる物と 見へざる物の 造主を信ず。
我は 唯一の主 イエスキリストを信ず。主は 萬世の前に 父より 生まれた 唯一の聖子。神よりのかみ、光よりのひかり。眞の神より 眞のかみ。造られずして 生まれ。父と一體なり 萬のもの主に たりて 造られたり。主は我ら人類のため 又われらを 救はんが 爲に 天より 降り。聖靈によりて 處女マリヤより 肉體を 稟け 人性を取り 我らのために ポンテオピラトのとき 十字架に 釘られ 苦楚を 受け 葬られ。聖書に 合ひて 第三日に 復活り。天に 昇り 父の右に 坐し 給へり 又 榮光をもつて 再び 來り。生る人と 死る人を 審き 給はん。其國は 終ることなし。
我は 聖靈を信ず。聖靈は 生命を あたふる 主。父と子より 出て。父と子と 俱に 拝み 崇められ。預言者によりて 語り 給ひし 主なり 我は 使徒等よりの 唯一の 聖公會を 信ず。罪の 赦免を得る 唯一の 洗禮を 信認す。死し人の 復活と 來生の 生命を 望む。アーメン

使徒信經

我は 天地の 造ぬし。全能の 父なる 神を 信ず。
我は 獨子われらの 主 イエスキリストを 信ず。主は 聖靈によつて 胎り。處女マリヤより 生まれ ポンテオピラトのとき 苦楚を受け 十字架に 釘られ 死て 葬られ

よ み くだ みつかめ しに もの なか よみがへ てん のぼ ぜんのう ちち かみ みぎ ぎ
陰府に降り。第三日に死し者の中より復活り天に昇り全能の父なる神の右に坐
し給へり。彼処より來りて生る人と死る人を審き給はん。
われ せいれい しん ま せい きりすとうくわいすなは せいと まちはりつみ ゆるしからだ よみかえりかぎりな
我は聖靈を信ず又た聖なる基督教會 即ち聖徒の交際罪の赦免 躰の 甦 永遠
き生命を信ず。アーメン

こゝに ぐわいしゆうさんびか うた くわいし せつけふだん あが
茲にて會 衆讚美歌を歌ひ 會 師説教壇に上る

説教

せつけふ おほ くわいしゆう たち くわいし い
説教を終りて會 衆は立ち 會 師云ふ
かみ いで ひと すべ をも ところ すぎ へいあん なんぢ こゝろ をもひ
神より出て人の凡て思ふ所に過る平安は汝らの心と意をキリストイエスに
よりにて守り給はんことを

みぎをわ くわいしゆう ぎ さ しへん うちひと あるひ これ てきたう ほか しへんひと
右終りて會 衆座して左の詩篇の内一つ或は之に適當する他の詩篇一
つを用ゆべし

詩篇

第一

かみ もと そなへもの くだ たましひ かみ なんぢ くだ く こゝろ かる
神の要めたまふ祭物は碎けたる靈なり。神よ汝は碎けたる悔ひし心を輕し
め給ふまじ。願くは聖意に順ひてシオンに祝福しエルサレムの石垣を築きた
まへ。其時汝義の供物と燔祭と全き燔祭とを悦び給はん

第二

あ あかみ わ た きよ こゝろ つく わ うち なお れい あらた おこ たま わ みまへ
嗚呼神よ。我が為めに清き心を造り我が衷に直き靈を新に起し給へ。我を聖前
よりすてたまふ勿れ。汝の清き靈を我より取りたまふ勿れ。汝の救の喜び
を我に歸し自由の靈を與へて我を保ち給へ。

しつじけんきん あつ くわいし もちきた くわいし これ と せいたく お
執事献金を集めて會 師に持來り 會 師之を取りて聖卓に置く

も とくべつ きとうあるい かんしゃ のぞ こゝろ そのほうこく ま くわい
若し特別の祈祷或は感謝を望むものあらは茲にて其報告をなすべし又た會
員中に死亡者あらは之を報告すべし

こゝに そうたう さき すなはつぎ いのり もち うただ せいざん をこなは とき
茲にて總禱を捧ぐ即ち次の禱を用ゆることを得但し聖餐を執行ざる時には
嘆願或は適當なる他の祈祷又は特禱を撰びて用ゆるも可なり

總禱

いとあわれ ぜんのう かみしゆ ちち われら みめぐみ た こと その み こ
最憐ふかき全能の神主イエスキリストの父よ我儕に恩恵を垂れ殊に其聖子を
予へて其聖旨と聖恵を顯し給ひしことを感謝し 奉る

ねがは われ こゝろ しゆ みことば う わ せいちよく これ たも たへづよきこと をこの み
願くは我らの心に主の聖語を植へ我ら正直に之を保ち不絶善事を行ふて實
を結ぶことを得させ給へ

ねがは あまね きりすとうくわいおよ そのけうしぼくし まも かれら みことば きよ けふり たも ま
願くは普き基督教會及び其教師牧師を護り彼等に聖語の清き教理を保ち益
す益す神を信じ益す益す人を愛する心を起させ給へ

ねがい すべ けんい も ものこゝろ てんのうへいかとうけん ち じおよ すべ さいばんくわん けんこう
願くは凡て権威を有てる者殊に天皇陛下當縣知事及び總ての裁判官に健康と
幸福を與へ且つ我等が敬虔と正直を以て穩かに世を迭らんが為めに彼等は義

を賞し悪を防ぎ且つ罰し聖旨に従ひて統治るの聖恵を彼らに與へ給へ
ねがは われら てきたい もの そのうらみ す へいわ われ あいまちほ ため かれら
願くは我等に敵對する者が其怨恨を棄て、平和に我等と相交らんが為め彼等

ころ ひるが たま
 の心を翻へし給へ
 ねがは すべて なや もの まづし もの や もの にんしん くつう もの し ひん ものあるい
 願くは凡て懊悩む者、貧き者、病める者、妊身の苦痛ある者、死に瀕する者或
 その他 かんなん ものこゝしゆ みな まこと ため くるし もの しゆ ちち みこ
 は其他の艱難ある者殊に主の聖名と眞理の為に苦めらるゝ者が主の父たる聖
 ころ あらほれ そのかんく う か しの え ため せいれい もつ かれら ながさ たま
 旨の顯現として其艱苦を受け且つ忍び得んが為に聖靈を以て彼等を慰め給へ
 いとあわれ ふか ちち われら しゆ ただ いかり いろいろ ばつ う べ もの われら
 最 憐み深き父よ我等は主の公義しき怒と種々の罰を受く可き者なれども我等
 わか とき つみ おおく とが みこゝろ と たま ふか あわれみ し ひ もつ からだ たましひ
 が若き時の罪と多の愆を聖旨に留め給はず深き憐恤と慈悲を以て肉軀と靈魂
 すべて がい あやうき われ まも たま ねがい いたんじやせつせんそう さつしやう えきびやう
 の凡ての害と危より我らを守り給へ。願くは異端邪説戦争、殺傷、疫病、
 こうずい くわさい ぼうふう きやうさく ききん ま こゝろ いた みめぐみ え のぞみ うしの
 洪水、火災、暴風、凶作、饑饉、より又た心の痛みと聖恵を得るべき望を失
 ふこと、無惨の死より我等を護り、且つ主は艱難の時に富て凡ての人、殊に信
 ずる者の眞實なる助主たらんことを
 ねがは われ しきおりおり ち ひつよふ さんぶつ もち う ため これ まも
 願くは我らが四季折々に地の必要なる産物を用ゆることを得る為に之を護り
 たま ねがは せいねん きりすとけふしゆぎけふく かいりく お すべて せいとう しょくげふ すべて
 給へ。願くは青年に基督教主義教育と海陸に於ける諸々の正當なる職業と諸
 じゆんけつ げいじゆつならび ゆうえき ちしき せいかう あた これら しゆ をんさいわい こうむ
 ての純潔なる藝術並に有益なる知識とに成功を與へ是等に主の御祝福を蒙
 らせ玉へ

とくべつ ねがひかんしゃ こゝろ これ
 特別の請願感謝あらば茲にて之をなすべし

かみ ねがは そのほかねが ひとり み こ はげ
 神よ願くはこれらと其他願ふべきものを、獨の聖子イエスキリストの酷しき
 くるしみ し ため われ あた ちち せいれい とも いったい ぎ よ
 苦楚と、死の為に我らに與へたまはんことを、聖父と聖靈と俱に一軀に在して世の
 かぎりなくいき つかさ たま み こ われ しゆ こいねが たてまつ
 無窮生て宰どり給ふ聖子、我らの主イエスキリストによりて希ひ奉る

こゝろ くわいしくわいしゆとも しゆ いのり ささ
 茲にて曾師曾衆俱に主の祈禱を献ぐ

○主の祈禱

てん われ ちち みな みくに
 天にまします我らの父よ、ねがはくは聖名をあげめさせたまへ、神國をきたら
 みこゝろ てん ち な にちよう かけて けふ
 ぜたまへ、聖旨の天になるごとく地にも成せたまへ、われらの日用の食を今日
 つみ われら
 もあたへたまへ、われらに罪をををををを我がゆるすごとく我儕のつみをも
 ゆる こゝろみ あく すく くに ちから さかえ
 赦したまへ、われらを誘惑にあはせず悪より救ひだしたまへ、國と權威と榮光と
 なんぢ たも とこゝろ
 は汝のかぎりなく有ちたまふ所なり アーメン

つぎ さんびか うた
 次に讚美歌を歌ふ

せいさん をこなは ときこゝろ さんびか うた くわいし せいたく かたわら たち しゆくたう
 聖餐を執行する時茲にて讚美歌を歌ひ曾師は聖卓の傍に立ち祝禱を
 なす祝禱

をわ くわいしゆう もくたう
 終りて曾衆は黙禱す

○祝禱

ねがは なんぢ めぐ なんじ まも たま ねがは そのかほ もつ なんぢ てらし
 願くはエホバ汝を恵み汝を護り玉へ。願くはエホバ其顔を以て汝を照ら
 なんじ たま ねがは そのかほ あ なんぢ かへり なんぢ へいあん
 し汝をあはれみ給へ。願くはエホバ其顔を上げて汝を顧み汝に平安をたま
 はんことを

くわいしゆう うた あるい い
 曾衆は歌ひ或は云ふ

アーメン

くわいしゅうさんびかを うた このあいだ くわいしせいたく いた せいさんしき じゅんび
會衆讚美歌を歌ふ此間に會師聖卓に到りて聖餐式の準備をなすべし
うたおは くわいしゅう た ただし おは つづい た
歌終りて會衆起つ但アグナスデイ終るまで讀て立つべし

適用語

かいし い
會師は云ふ †
ねがは しゅなんぢら とも いま
願くは主汝等と偕に在すことを
くわいしゅう うた あるい い
會衆は歌ひ或は云ふ
ねがは しゅなんぢ れい とも いま
願くは主汝の靈と偕に在すことを
くわいし なんじら ところ しゅ あふ
會師 汝等心にて主を仰げよ
くわいしゅう われらあふ しゅ のぞ
會衆 我儕仰ぎて主を望まん
くわいし われ かみ かんしゃ たてまつ
會師 我ら神に感謝し奉るべし
くわいしゅう そ せいとう
會衆 其は正當にしてなすべきことなり
くわいし いときよ ちち いま ぜんとう かみ いっいつく
會師 至聖き父、とこしへに在す全能の神よ何時何處

にても主に感謝し奉るは正當にしてなすべき務なり

せいせつてきようご ここ これ しか かぐ ゆへ うんぬん
聖節適用語あらば茲にて之をなす然らざれば直に(故に云々)

適用語

○降誕日

さ しゅ ことばにくたい おくぎ そのゑいくわう あら もくし たま
然らば主は道肉躰となりし奥義によりて其榮光を新たに黙示し給へり。これ
われ み こ せい かみ み み もの あい ため
我ら聖子の性によりて神を見ていまだ見ざるところの者を愛せんが為めなり
(故に云々)

○受苦節

しゅ じゅうじか き お すく ひとびと あた たま これし おこ ところ いのち おこ ひと
主は十字架の木に於て救いを人々に與へ給へり是死の起りし處に命も起り一
たび木を以て勝ちしものは亦我らの主イエスキリストによりて木にて勝たれん
ため ゆへ うんぬん
が為めなり(故に云々)

○復活節

さ こと み こ われ しゅ たうと よみがへり しゅ ほ たてまつ
然れど殊に聖子我らの主イエスキリストの尊き復活のゆへ主を頌め奉る
み こ まこと すぎこし こひつじ われ そ な よ つみ のぞ そのし もつ
聖子は眞の逾越の羔にして我らのために犠牲へられ世の罪を除き其死を以
て死を亡ぼし其復活を以て無窮生命を與へ給へり(故に云々)

○昇天節

こと われ しゅ しょうてん かんしゃ たてまつ み こ よみがへり のちあきら
殊に我らの主イエスキリストの昇天のゆゑ感謝し奉る聖子は復活の後明
そので したち あら そのめのまへ てん のぼ たま こ われ か しんせい たも
かに其弟子等に顯はれ具眼前にて天に昇り給へり是は我らに彼の神性を有たし
ため ゆへ うんぬん
めんが為めなり(故に云々)

○聖靈降臨日

こと しゅ あい たま み こ われ しゅ やくそく をう たま かんしゃ
殊に主の愛し玉ふ聖子我らの主イエスキリストの誓約に應じ給ひしことを感謝
たてまつ しゅ てん のぼ かみ みぎ ざ このときえら たま でし せいれい そぞ たま
し奉る主は上天に昇り神の右に座し此時擇び給ひし弟子らに聖靈を注ぎ給へ
よろずのくにびと ため いた よろ こ ゆへ うんぬん
り萬國民はこれが為に甚く喜悅ぶべし(故に云々)

○三位一躰祝節

しゅ その う たま ひとりご せいれい とも ひとり かみ ひとり しゅ さ われ
主は其生み給ひし獨子と聖靈と共に惟一の神にして惟一の主なり然らば我ら
まこと ひとり かみ いったい さんい みいつひと しゅ をが たてまつ ゆへ
眞の惟一なる神を一躰にして三位あり稜威等しき主として拝み奉る（故に
うんぬん
云々）

てきしょうご のちさき ごと い ふ
適用語 後左の如く言ふ

ゆえ われ てんし てんし おさおよ てん くわいしゅう とも しゅ たうと みな あが つね しゅ
故に我ら天使と天使の長及び天の會衆と供に主の貴き聖名を敬崇め常に主を
たたむ い
頌讚て云はん

つぎ うた あるい と な
次にサンクタスを歌ひ或は唱ふ

せい かなせい かなぼんぐん かみ しゅ えいこうてんち み いたか ところ しゅ
聖なる哉聖なる哉萬軍の神。主の榮光天地に充てり最高き所にホザナよ。主の
みな きた さいはい
聖名によりて來るものは祉福なり

いたか
最高きところにホザナよ

こ こ くわいしき すすめ
茲にて會師左の奨勵をなす

すすめ
奨勵

あい きょうだい われ しゅ せいさん あづか ほつ しとぼふる
愛する兄弟よ、我らの主イエスキリストの聖餐に陪らんと欲せば使徒保羅が
すすめ こと ふか みずか そもそもこのせいさん しゅ けんぞん ところ もつ そのつみ
勧めし如く深く自らただすべし。抑此聖餐は主が謙遜なる心を以て其罪を
ざんげ か うへかやく ごと ぎ した なぐさめ ちから あた ため もう たま
懺悔し且つ饑餓が如く義を慕ふものに慰と能力を與へんが為に設け給ひし
せいてん
聖奠なり。

しか われ か く みずか とき い か おのれ ちから のが がた つみ し ほか
然るに我ら如斯自らたゞす時は如何にも已が力にて免れ難き罪と死の外
なもの みいだ ゆへ われ しゅ あはれみ た みずか ひと
何物をも見出さざるべし。故に我らの主イエスキリストは憐恤を垂れ、自ら人
せい と たま しゅ これ かみ まつた みこころ をきて じゃうじう かつわれ そのつみ
の性を取り給へり。主は此により神の全き聖旨と法律を成就し、且我ら其罪
によりて自ら受くべき死と苦みを受けて、我らを救出さんが為なり。主は亦
われら このしんこう ま こころよ しゅ みこころ かな ため せいさん まふ たま
我らをして此信仰を増し快く主の聖旨に従はしめんが為に聖餐を設け給へ
われ このせいてん しゅ からだ ち やしなひ う ゆへ ひと
り。我ら此聖奠によりて主の身と血の養を受くことを得るなり。故に人若
みことば かた しん このぼん く このさかづき の かれ
しキリストの聖語を堅く信じて、此麵包を食ひ此盃より飲まば、彼キリスト
を またかれ いま かぎりなきいのち あずか え われ このせいさん まも
に居りキリスト亦彼に在して無窮生命に與ることを得ん。我らも此聖餐を守
りてキリストの死を示し、我らの罪の為にわたされ、我らの義とせられんが為に
よみかへ たま きおく たてまつ またわれ ため
復活され給ひしことを記臆し奉るべし。又我らが為にキリストに感謝し、
じゅうじか お しゅ したが かつそのめいれい まも われ あい たま ごと われ
十字架を負ふて主に従ひ且其命令を守りキリスト我らを愛し給ひし如く我ら
たがひ あいあい われ みなこのひと ばん くら このひと さかづき の もつ
互に相愛すべし。そは我ら皆此一つの麵包を食ひ此一つの盃より飲むを以て
とも ひと ばん ひと からだ
共に一つの麵包一つの身となればなり

くわいしせいたく むき い
會師聖卓に向て云ふ

われ いの
我ら祈るべし

てん われ ちち みな みくに
天にまします我らの父よ、ねがはくは聖名をあがめさせたまへ、神國をきたら
せたまへ、聖旨の天になるごとく地にも成させたまへ、われらの日用の食を今日
もあたへたまへ、われらに罪ををかすものを我がゆるすごとく我儕のつみをも
ゆる ころみ あく すく くに ちから さかへ
赦したまへ、われらを誘惑にあわせず悪より救ひだしたまへ、國と權威と榮光と
なんぢ たも ところ
は汝のかぎりなく有ちたまふ所なり

くわいしゅう うた あるひ い
會衆は歌ひ或は云ふ

アーメン

くわいしゅう
會師云ふ

われ しゅ わた ばん ばん と このときさら て と しや
我らの主イエスキリスト賣さるゝ晩に麵包を取り(此時血を手執るべし)謝し
のち これ でし あた い と しよく こ なんぢら た
て後、此をさき弟子に與へて云ひたまひけるは取りて食せよ此れは爾曹の爲め
あた わがからだ なんぢらこれ な われ きねん
に與ふる我身軀なり。汝等是を爲して我を紀念せよ。
またしよく の さかづき と このときさかづき て と しや かれら あた い
又食して後ち、盃を執りて(此時盃を手執るべし)謝し、彼等に與へて云ひ
なんぢみなこのさかづき の これ しんやく わがち つみ ゆる
たまひけるけるは爾曹皆此盃より飲め、是は新約の我血にして罪を赦さんと
なんぢおよ おおくのひと ため なが ところ なんぢ これ な の ごと われ
て爾曹及び衆人の爲に流す所のものなり。汝ら是を爲して飲む毎に我を
きねん
紀念せよ。

つぎ くわいしゅう
次に會師云ふ

ねがは しゅ へいあん つねなんぢ と
願くは主の平安常汝らと俱にあらんことを
ここ くわいしゅう うた あるひ との
茲にて會衆アグナスデイを歌ひ或は唱ふ
そのときぶんさんしき はじ
其時分餐式を始む

アグナスデイ

よ つみ のぞ たま かみ こひつじ われ あはれ たま
世の罪を除き給ふ神の小羊なるキリストよ我らを愍み給へ
よ つみ のぞ たま かみ こひつじ われ あはれ たま
世の罪を除き給ふ神の小羊なるキリストよ我らを愍み給へ
よ つみ のぞ たま かみ こひつじ しゅ へいあん われ あた たま
世の罪を除き給ふ神の小羊なるキリストよ主の平安を我らに與へ給へ

くわいしゅう ばん わた とときさ ごと い
會師麵包を付す時左の如く云ふ

と しよく これ なんぢ ため あた たま からだ
取りて食せよ此は汝の爲に與へ給ひしキリストの身なり

くわいしゅう さかづき わた とときさ ごと い
會師盃を付す時左の如く云ふ

と の これ なんぢ つみ ため なが たま しんやく ち
取りて飲めよ此は汝の罪の爲めに流し給ひし新約の血なり

せいさん あずか ひと ふくせき とときくわいしゅう ごと い
聖餐に陪りたる人を復席せしむる時會師左の如く云ふ

ねがは われ しゅ からだ そのとうと ち まこと しんこう おい なんぢ
願くは我らの主イエスキリストの身軀と其尊き血は眞誠なる信仰に於て汝
つよかぎりなきいのち まも たま
らを強無窮生命にいたるまで護り給はんことを

もしちゅうかん せいべつ つ ぐわいしまえ せいべつ ふみ したが さら
若し中間にて聖別したるもの盡きなば會師前の聖別の文に従ひて更

た ばん あるい ぶどうしゅ せいべつ
に他の麵包或は葡萄酒を聖別すべし

すべてのひとう をわ のちくわいしこの せいひん うやうや おおひ
衆人受け終りて後會師残りたる聖品に恭しく覆すべし

ここ くわいしゅう ばん たちて ナンクヂミツチス うた あるい い
茲にて會師會衆立ちてナンクヂミツチスを歌ひ或は云ふ

しゅ ことば した しもべ あんぜん よ さら
主よいまその言に従がひて僕を安然に世をば逝せたまふ

わ め ばんみん まえ もう たま すくい み
我が眼すでに萬民の前に設け給ひし救濟を見たり

これ いほうじん てら ひかり またしゅ ほまれ
是れ異邦人を照さん光なり。又主のイスラエルの名聲なり

ちち こ せいれい さいこう
父と子と聖靈に榮光あれ

はじめ いま よよ ある
元始にあり方今あり世々かぎりなく在なり アーメン

ここ さ ごと かんしや
茲にて左の如く感謝をなす

かんしや
感謝

くわいし かんしゃ そのめぐみ ふか
曾師 エホバに感謝せよ、其恵は深し
くわいしゆうた あるい い
曾衆歌ひ或は云ふ

しゅ あわれみ
主の憐恤はかぎりなし
くわいし ぜんのう かみ こ ゆうえき たまもの もつ われ やしな きゆう こと かんしゃ
曾師 全能の神よ、此の有益なる賜を以て我らを養ひ給ひし事を感謝し
たてまつる ねがひ しゅ めぐみ われ はげ われ かみ しん
奉る。願くは主の慈恵によりて我らを勵まし、我らますます神を信じ
またひと あい み こ われ しゅ
亦人を愛することを得させたまはんことを、聖子我らの主イエスキリ
ストの聖名に因て希ひ奉る。主は聖父と聖靈と俱に一躰に在て世
かぎりなくいき つかさ たま
の無窮生て宰どり給ふ。

アーメン

くわいしゆうた あるい い
曾衆歌ひ或は云ふ

アーメン

うた あるい い
次にベネヂカムスを歌ひ或は云ふ

ベネヂカムス

くわいし ねがは しゅなんぢら とも いま
曾師 願くは主爾曹と俱に在すことを
くわいしゆう ねがは しゅなんじ れい とも いま
曾衆 願くは主汝の靈と俱に在すことを
くわいし しゅ ほ め たてまつ
曾師 主を讚美奉るべし
くわいしゆう かんしゃ かみ き
曾衆 感謝は神に歸せんことを

ここ くわいしき しゅくたう ただ こりんたのちふみじゅうさんしゅうじゅうしせつ ことば い
茲にて曾師左の祝禱をなす但し哥林多後書十三章十四節の語を云
ふも可なり

しゅくたうをは くわいしゆうもくたう
祝禱終りて曾衆黙禱す
しゅくたう
祝禱

ねがは なんぢ めぐ なんぢ まも たま ねがは そのかほ もつ なんぢ
願くはエホバ汝を恵み汝を護り玉へ ○願くはエホバ其顔を以て汝を
て なんぢ たま ねがは そのかほ あ なんぢ かへり なんぢ
照らし汝をあはれみ給へ ○願くはエホバ其顔を上げて汝を顧み汝に
へいあん
平安をたまはんことを

くわいしゆうた あるい い
曾衆歌ひ或は云ふ

アーメン

明治三十六年六月一日印刷

全 年六月四日發行

合 譯

アール、ビー、ピーリ

大 塚 義 信

發 行 者

佐賀縣佐賀市松原町七十八番地

山 内 量 平

印 刷 者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

高 田 乙 三

印 刷 所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

株式会社 秀 英 舎

資料引用

(元所蔵 エゼ・スタイワルト)

資料 10 ボードによるシェーラーの病氣と帰国報告

RETURN TO AMERICA AND RESIGNATION OF REV. J. A. B. SCHERER.

In July, 1896, the Board was informed of the serious condition of the health of Rev. J. A. B. Scherer, and early in that month he left Saga, for Sapporo, a health resort in the mountains, hoping the change would restore him. Dr. Henry Hartshorne, an eminent specialist, pronounced his trouble congestion of the brain and prescribed rest for him. In August, on the advice of his physician, he resigned his position in the Government school at Saga, of which action the Board communicated to him its cordial approval. This was done to lessen his labors the coming year, preferring to give his time and strength solely to the mission. Remaining in Sapporo until about October 1st, he went to Tokyo for a few weeks, hoping then to return to Saga about November 1st, to take up his labors.

The Board sincerely hoped the rest and change would restore Mr. Scherer, but in November the following letter and certificates were received, in which Mr. S. requested that he be permitted to return to America. The Board granted his request. The letter and certificates are here given:

8 TSUKIJI, TOKYO, OCTOBER 19, 1896.

REV. L. L. SMITE

PRESIDENT LUTHERAN BOARD OF MISSIONS, STRASBURG, VA.,

Dear Sir :-Mr. Scherer received your kind sympathetic letter yesterday. It did us both good, coming as it did at a crisis. Mr. Scherer is worse since he came to Tokyo. He improved at Sapporo; but leaving that bracing air has told on his health as the enclosed certificate shows.

No one could be more surprised at the turn of affairs than Mr. Scherer, but under the circumstance, we feel that there is nothing to be done but to

follow the Doctor's advice, and apply for means to return to America at once. It is for this purpose we write. Dr. Macdonald is an eminent physician, having the confidence and patronage of all the foreign residents of Tokyo. He is himself an ordained minister. As this is a matter of great importance, we enclose a note concerning Dr. Macdonald, written by a well known third party, Dr. T. T. Alexander of the Presbyterian Mission. All Mr. Scherer's friends agree that a trip home is necessary. Mr. Swift (Y. M. C. A. Sec.) is especially earnest in urging him to go home, as he experienced the same trouble. We ourselves cannot but think that going home is positively necessary. While my husband deeply regrets the necessity of this demand upon you, he is comforted somewhat by the facts that he has earned 3,000 yen (\$1,500) for the use of the mission by his work in the Saga school, and that his service have already extended over a period of five years.***** So we will arrange to leave Japan. December 25th, hoping that you will let us hear from you as soon as possible.

Yours sincerely,
MRS. SCHERER

The Board will please regard the above as a letter from me, as it was written by my suggestion, and with my entire approval.

Toyo, Japan, October 19, 1896.

J. A. B. SCHERER.

4 TSUKIJI, TOKYO, JAPAN, OCTOBER 19, 1896.

The Rev. Mr. Scherer has been suffering for some time from head trouble (*****), which entirely incapacitates him for work. This ailment is quite common in Japan, and is the cause of a large proportion of the missionary breakdowns.

The recovery will involve a long period, say a year, of complete rest. In this case, I deem a change of conditions and climate essential. I therefore recommend that Mr. Scherer go to America on furlough, as soon as arrangements for going can be made.

D. MACDONALD, M. D.

Dr. D. Macdonald who has given Mr. Scherer's certificate is an entirely competent physician who has been in Japan for more than twenty years, and who has had a very wide experience with missionaries of different Boards and different nationalities. His certificates are recognized by all Boards having representatives of long standing in this country.

Tokyo, Japan, October 19, 1896

T. T. ALEXANDER
Am. Presbyterian Mission.

Mr. Scherer left Japan, January 10, 1897, and arrived in this country February 10, 1897. After recuperating at New Concord, Ohio, and Laurinburgh, N. C., he requested that the Board grant him a conference which was held at Winchester, April 6, 1897. The Japan Mission in every phase was considered at this conference, together with the position of Mr. Scherer and his health. At that conference Mr. Scherer tendered his written resignation, stating as his reasons: 1, health; 2, lack of means. It was with deep regret that the Board accepted his resignation, and the loss of his services to our mission is keenly felt by all interested in this great work. Mr. Scherer had inaugurated the mission at Saga, and his labors had been eminently successful, and to Mr. Scherer no less than the Board his resignation caused the deepest regret.

資料引用

Minutes of the Sixth Convention of United Synod of the Evangelical
Lutheran Church in the South, 1898.5.11-16

REPORT OF DR. PEERY

The following report of the mission has been made to the Board by Dr. Peery, and is given for the information of the church:

Report of the Lutheran Mission in Japan For 1898-99.

GENERAL SITUATION.

The conditions under which missionaries live and labor in Japan now are very different from what they were two years ago. When the revised treaties went into effect last June the treaty ports and consular jurisdiction were abolished. All foreigners living in the country became amenable to Japanese laws, and answerable to the native country. For the first time in history the Christian nations admitted a non-Christian power into their fellowship on terms of equality, and entrusted the lives and property of the citizen to her laws. People were not wanting who thought the time premature for such a change, and who felt a great deal of apprehension concerning it. But the old order passed quietly away, giving place to the new; and everything has gone well thus far. There has been some friction at times, but hardly more than would accompany such a radical change in the West.

Mission work has profited in many respects by this change. Passports have been done away with, and we are free to travel or reside where we wish. We now enjoy all the privileges granted to Japanese subjects, except the right to own land. For a sentimental reason no foreigner is permitted to own real estate; but he can lease it for long periods say five hundred years -- and can hold in his own name all houses and improvements that he may put thereon. These are decided advantages to our work. Such incidents as that of the Doshisha need not now occur, and missionaries no longer have to spend their precious time and strength teaching English, in order to gain permission to reside in the interior.

Following the operation of the new treaties, official recognition has been extended to Christianity. Heretofore Christianity has existed in Japan only

by toleration; but henceforth it is to have a legal status, and equal rights with other religions. This will answer the common objection that Christianity is a foreign religion: and will make it easier for the intensely patriotic Japanese to become Christians. Official recognition also carries with it exemption from taxation for church property.

But as an offset to these advantages, we will have to endure a great deal of government interference with our work. Minute regulations have already been promulgated concerning the building of churches, holding of meetings, selection and appointment of pastors, collection of moneys, etc.; and to comply with them all will be irksome. These regulations are also framed in such a manner that the local officials can interfere with our work and hamper it in many ways, if disposed to do so. Christian ministers, with the teachers of all other religions, are denied the right of speaking publicly on political questions, and some of the leading native Christians object seriously to this part of the regulations.

The Educational Department has decided that religious schools can no longer enjoy official recognition, and the privileges which that recognition carries with it. These privileges are exemption from conscription, and access to the higher schools and universities. Up to this time the leading mission schools have been granted these privileges regardless of their religious character; but from this time forward all religious instruction and exercises must be put away from them, or the privileges must be relinquished. Without them the Christian schools will labor at a great disadvantage in comparison with the government schools, and this new rule comes as a great blow to them. Strong efforts are being made to have these drastic regulations modified, but without success so far. The government disclaims any intention of opposing Christianity in this matter, and affirms that it is only carrying out a long cherished policy of separating education entirely from religious influences. But there are many people who do not believe this, and who think that it is but part of a general plan to impede the progress of the Gospel as far as it is possible to do so without exciting a scandal.

The cost of living has been rapidly rising in Japan for several years. Real estate and houses cost twice what they did a few years ago; wages have doubled; and the prices of other things have risen in proportion. This is partly the effect of the Japan-China war; but it is chiefly the price Japan must pay for her Western civilization. Oriental simplicity cannot long continue in the midst of Occidental civilization. With material progress has

necessaries come increased wants. Formerly a man was content with a cheap native garment, but now he must have a Western suit; formerly he went bareheaded, but now he must have a stiff hat; formerly he satisfied his hunger with rice and vegetables, but now he must have a meat diet at least once per day. Thus his wants grow, and the cost of living is greatly increased thereby.

This rise in the scale of living, and the appreciation of the price of commodities, makes the prosecution of mission work in Japan to-day much costlier than it was in previous years. The various missions have been forced to pay their pastors and evangelists larger salaries than they formerly paid; and they must also pay much higher rents for houses and chapels. One yen now does not go more than half as far as it did when I came to Japan eight years ago.

PROGRESS OF OUR OWN WORK.

Turning to our own particular work, we find a record of steady and substantial progress. We have done nothing remarkable, and yet we have accomplished something, and are in a much better condition for future work than we were two years ago.

The first step forward was the organization of the Saga Church, which was accomplished in the summer of 1898. Four of our leading men were chosen as deacons; Yamanouchi san was elected pastor; and a constitution in strict accord with Lutheran doctrine and polity was adopted for the congregation. In fact, the constitution adopted was simply the translation of a constitution sent us by President Smith. All business matters of the congregation were turned over into its own hands, the mission agreeing to assist it with a certain proportion of the monthly expenses.

In September, 1898, we began work in Kumamoto. This is the largest and most important city in Kyushu except Nagasaki, and has a population of 80,000. It is the seat of the fifth higher school (corresponding to the American colleges) with almost 1,000 students in attendance; and is also the location of a large barracks, with 10,000 soldiers. It is an excellent field for Christian work. The situation is convenient to us, being only five hours distant by rail from Saga. Our second evangelist, Yamanouchi Naomaru, was put in charge of this station, and he is doing good work there. He

preaches publicly twice each week, and gives private instruction in the Gospel to all who will receive it. Since he began work there three young men have been baptized. The opening of this station in Kumamoto was one of the most important steps our mission has yet taken.

The next thing to encourage us was the coming of Rev. and Mrs. Brown, in November, 1898. We had been waiting, rather impatiently, for help for two years, and were very happy to greet these new fellow-workers. Our Japanese Christians, too, were glad to see them, and gave them a cordial welcome. It was a great comfort and support to me to have some one with whom to talk over mission problems again, and to share the responsibility.

Not long after Rev. Brown came, on the authorization of the Board, evangelists Yamanouchi Ryohei and Yamanouchi Naomaru were ordained. They were carefully examined in the most important branches of theology, and the examinations proving satisfactory, they were set apart to the holy office of the ministry, according to the solemn and impressive order given in the Book of Worship. The older man was ordained as pastor of the Saga Church; the younger one as missionary pastor in Kumamoto. It is hardly necessary to say that this was a decided forward movement. We are very glad to have two earnest and reliable native ministers in our work.

Two of the three theological students, who had been under instruction for two years, completed a partial course in 1898, and after passing satisfactory examinations were authorized to preach, and placed in charge of chapels here in the city, where they have since labored. The third man Koike Kesao, was given a fuller course, and was graduated in 1899. He is a young man of good mind and heart, and we trust and believe we make a faithful minister. Last summer he had charge of the work in Kubota, near Saga.

In September of last year we decided to begin work at once in the prosperous city of Kurume, about midway between Saga and Kumamoto, and sent Koike san there. Kurume is a progressive town of 30,000 people. It is an excellent field for work, and we are very thankful that we have a station there. Koike san secured a good chapel in the center of the city, and has begun the work under favorable circumstances. I hope we may be able to lead many people to Christ in that town.

Besides opening two new stations, we have carried on the work regularly in all the old stations, with varying success. Not many converts have been gathered; but we have published the blessed Gospel widely in these regions. I find twenty-three baptisms recorded for the two years.

In the fall of 1899, Rev. and Mrs. Winther came to Saga at our invitation, and are temporarily residing here. Rev. Winther is a Danish Lutheran minister who studied theology in the Seminary at Blair, Nebraska; and was sent as a missionary to Japan in 1898 by the Lutheran Missionary Society of West Slesvig, Germany. It is his desire to permanently locate somewhere in our field, and to co-operate with us in building up one Lutheran Church in Japan, and in this desire Rev. Brown and I heartily concur. At present Mr. and Mrs. Winther are simply here studying the language, and assisting us as they are able in the meanwhile. They are very excellent people, and we are glad to have them with us.

NEEDS OF THE MISSION.

- I. Our greatest need at present is a Foreign Missionary for Kurume and another for Kumamoto. It is very important that we have foreigners associated with the native brethren there from the beginning of the work. At present I go to each of those cities once a month; but this visitation is insufficient. We should have one man in each of those cities, who could give all his time to that work. Then he and the native minister together would be in a condition to do good work. We hope a Foreign Missionary can be put in each of those cities soon.
2. Our next need is a church building here in Saga. We have used a rented house long enough, and should now have a church home of our own. The Lutheran Church in Japan has not a single church building yet, and we greatly need a church as a rallying point for our forces. It seems that this want will be supplied in the near future. The congregation here is ready to purchase a good lot, and the Board has now sent us the Miller bequests for a building. Eight hundred dollars will not build a much better church in Japan than it would in America, and in a city of this size and standing we ought to have a good, stately church; but if that sum is all the help we can get from home we will do what we can with it, and be thankful. The native converts are poor, and can do little more than buy the lot.
3. Another crying need of the mission is comfortable homes for the missionaries. A single man can manage to get along in a Japanese house, but a man with a family fares badly in it. This is the judgment of all the missions operating in Japan; and the usual rule is for them to build

foreign houses for their foreign workers. It should be the settled policy of our Board to build foreign homes, or homes as nearly foreign as possible, for its missionaries, as soon as they are definitely located. I am convinced that the permanent interests of the work would be enhanced by such a course.

STATISTICS.

Missionaries	2
Native ministers	2
Unordained helpers	4
Stations	4
Out-stations	3
Sunday Schools	4
Scholars in same	150
Baptized members	82
Converts in 1898—99	23
Native contribution in the two years	534.92yen
Monthly salaries of missionaries	\$175
Monthly salaries of native helpers	109yen
House rents per month	57.80yen

R. B. PEERY.

資料引用

Minutes of the Seventh Convention of United Synod of
the Evangelical Lutheran Church in the South, 1900.5.16-20

資料 12 1898年度日本伝道統計

STATISTICS OF OUR JAPAN MISSION.

Missionaries	2
Native ministers	2
Unordained helpers	4
Stations	3
Out-stations	5
Sunday-schools	4
Scholars in same	150
Baptized members	82
Converts in 1898-99	23
Native contributions in the two years	534.92yen
Monthly salaries of missionaries	\$175
Monthly salaries of native helpers	109 yen
House rents per month	57.80 yen

A yen is equal to about fifty cents in American money.

資料引用

Lutheran Visitor, 1900.5.31

資料 13 第一回教役者会

福音路帖教會教役者會

我教會創設以來教役者は悉く佐賀に住めることとて殊更に會合するの必要
なかりしが熊本に傳道して以來役者漸く散在するが故にこゝに其必要を生し五
月三十一日より六月二日迄三日間佐賀教會に於て第一回教役者會を開きたり其
執行順序左の通りなりし

五月三十一日	司會者	ピーリー教師
午前九時	祈	禱 會
全九時半	懇	談 會
傳道の目的及び其方法	主題者	山内 牧師
午後二時		傳道報告會
六月一日	司會者	久米傳道師
午前九時	祈	禱 會
全九時半	講	筵
路帖神学に於ける神の道の地位		ピーリー博士
オグスボルク信仰ヶ條の歴史		ブラウン教師
路帖神学に於ける聖禮典の地位		ウィンテル教師
午後二時	懇	談 會
教役者の讀むべき書籍及新聞	主題者	山内 教師
六月二日	司會者	和佐傳道師
午前九時	祈	禱 會
全九時半	懇	談 會
聖書を研究する方法	主題者	小池傳道師
又三十一日と一日の両夜講義所に於て演説會を開けり即ち		
三拾一日	南 講 義 所	
國家と基督教		ピーリー博士
文明の源		小池傳道師
壹日		
社會改造論		山内 教師
文明と基督教		小池傳道師

なりし。而して該會に於て決議せられたる重要なことは教會の機關新聞
として月刊新聞を發行すること次回を秋再び佐賀に開くこと等なりし

(因に日路帖教報はこの決議に基きて生れ出たるなり)

資料引用

路帖教報創刊号 1900.7.12, 7 頁

発刊の主意

我等の主「イエス進みて彼等に語りいひけるは天のうち地の上の凡ての權を我に賜はれり是故に爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とし且わが凡て爾曹に命ぜし言を守れと彼等に教へよ夫われは世の末まで常に爾曹と偕に在なりアメン」是によりて斯教を公布する義務起り聖徒等は方言を護れり、多くの傳道會社は組み立られたりと雖ども猶有聲の言の達せざる所無聲の言を送るの必要あり
我路帖教報は紙面狹少、筆碩脆しと雖も亦此使命の幾分を遂行せんか為に生る。全能の主よ、願くは微衰を憐みて常に「至美の賜」を與へて誤謬なく爾名の榮光を顯はすことを得させ給へ アメン

資料引用

路帖教報創刊号 1900.7.12

資料 15 内務省令第 39 号(1900.8.1)

内務省令第三十九號

宗教の宣布又は宗教上の儀式執行を目的とする法人の設立等に關する
規程を定むること左の如し

明治三十三年八月一日

内務大臣 侯爵西郷從道

第一條 宗教の宣布又は宗教上の儀式執行を目的とする社團又は財團を法人
と為さむとするときは設立者は定款又ハ寄附行為の外左の事項を記載し
たる書面を提出すべし

- (一) 宗教の名稱及所属教派宗派の名稱
- (二) 儀式及布教の方法
- (三) 布教者の資格及選定方法
- (四) 信徒と法人の關係
- (五) 信徒及社員たるべき者の員數
- (六) 宗教の用に供する堂宇、教會所、
會堂、説教所又は講義所の類を備ふるものに在ては其名稱、所在地及設
立許可の年月日

第二條 前條の法人が前條第一項第一號又は第四號の事項を變更したるとき
は直に届出づべし

第三條 第一條の法人が第一條第一項第二號又は第三號の事項を變更せむと
するときは認可を受くべし

前項の規定に違背したるときは民法第七十一條に依り其設立の許可を
取消すことあるべし

第四條 本令に依り書面を差出す場合に於て神佛道の教派又は宗派に属するも
のにありては凡て管長の添書を付すべし

資料引用

路帖教報 1900.8.9, 4 頁

資料 16 1893 年 4 月～1900 年 9 月 佐賀教会会員統計

明治廿六年四月乃至卅参年九月佐賀福音路帖教會會員統計表

	受洗	轉入	轉出	除名	死去	差引増加
二十六年	六	四				拾
二十七年	拾壹	四				拾五
二十八年	廿四	貳	壹		貳	廿参
二十九年	拾参	壹	参	四	貳	五
卅年	六		参			参
卅一年	八	五		壹		拾貳
三十二年	拾貳	参				拾五
三十三年	拾四		参		貳	九
計	九十四	拾九	拾	五	六	九拾貳

内譯

現在数	大人	四十八人	小兒	拾八人	計六十六人
旅行者	大人	貳拾四人	小兒	貳人	計貳十六人

全能の神よ願くは我福音路帖教會を恵みてますます幸福を蒙らせ給へ
アメン

資料引用

路帖教報 1900.11.8, 4 頁

資料 17 佐賀教会献堂式礼拝式文、1900年12月13日

献堂式禮拝文

左の一遍は佐賀福音路帖教會の献堂式に於て用ひられたる禮文なり、掲げて同好の士に頒つ
(教師及び長老等は聖卓に達せんが為に會堂の通路を進む時歩みながら左の讚美頌を唱ふ)

教師曰 萬軍のエホバよ汝の偉幕は如何に愛すべきかな
長老曰 我靈魂は絶入るばかりエホバの大庭を慕ひ我心我身は活る神
に對ひて呼ぶ汝の大庭に住む一日は千日にも優れり
教師曰 門よ汝の頭を擧よ永遠の戸よ揚れ
長老曰 榮光の王入り給はん
教師曰 此榮光の王は誰なるか
長老曰 萬軍のエホバ是ぞ榮光の王なり
(教師等聖卓に達する時會衆は起て左のグロリヤパトリを歌ふ)

聖父と聖子と聖靈に榮光あれ元始にあり方今あり世々無窮あるなり
アメン

會師曰 願くは主汝等と俱に在すことを
會衆曰 願くは主汝の靈と俱に在すことを
(會師左の如く云ふ)

我等祈らん……永遠に在す全能の神よ汝は榮光の王なり至高く至潔き位に座し給ふ汝にのみ天の萬軍と地の萬物の讚美と頌榮の歸せん事を。今日汝は民なる我々を聖名を顯揚す為に爾の助けによりて建設たる此堂に於て汝を拝せん為に喜悅を以て聖前に進む。我等は此に於て聖座に捧ぐる最初の禮物として我々の感謝と讚美と禮拜とを受け給へ。我等が聖き手と純潔なる心を捧げ奉ることを得る為に聖靈を降し給へ。汝の榮光は此堂に充ち憐恤は僕等の上に顯はれんことを。無究活きて幸どり給ふ主なる我等の神よ此祈禱を聞き給はん事をアメン。

(ついで會師左の勧めをなす)

愛せらるゝ兄弟よ(中略)昔惟一なる眞正の神の最初の聖別せられたる有様を聖書より聴くべし(列王上卷八章二十二節より三十節同八章五十四節より五十八節)使徒パウロの言葉をも聴くべし(以佛所二章十一節より二十二節、希伯來十章十九節より二十九節)

次に曾師曾衆俱に使徒信經を唱ふ
我は天地の造主全能の父なる神を信ず云々

(次に曾師は再び左の勧めをなす)

今此信仰を保ち云々

(次に曾師は左の如くいふ)

我等祈らん ……主よ汝は萬物を造り(中略)其宮に受られんことを
希ひ奉る

(續いて曾師共に主の祈をなす)

天に在す我等の父よ(中略)アメン

(次に歌を歌いながら集金す)

説教

(曾衆は頌榮を歌ふ)

祝禱

資料引用

路帖教報 1901. 1. 10, 1 頁

資料 18 フィンランド宣教師来日の記事(路帖教報)

フィンランドの宣教師来る

ルーテル教會員は四千餘万人ありて世界至る所にルーテル教會員のあらざるなしとは本紙第一号は記載せる所なるが、今度欧州北部のフィンランドより宣教師一家族は一女教師と共に長崎に來られたり。氏等は我ルーテル教會と共に提携して働かるる筈にて本月十五日佐賀に行き、標約せられたり。然るに去る六日我然

愛児が永眠せられたる故、期日の通りに赴かるるや否を確定せず吾人は萬里の異郷に於て此悲事に遭へる氏の一家に満腔の同情を寄すると共に永遠の生命の貴重なるを一層篤く感じて宣教の聖職を勤ゑらんことを祈るものなり。又未だ何組に属するかは知らざれども近頃一人のルーテル派宣教師が東京に來りしといふ。

資料引用

路帖教報 1901. 3. 14 3 頁

路帖教會員表

佐賀市中の橋名	ピーリ
全 花房名	ウキンテル
全 中の名	リップード
全 明治橋通	山内量平
全 辻の堂	村田虎吉郎
全 北十軒堀端	溝口新六
全 明治橋通	西牟田新八
全 裏門通	村川 宗
全 多市施町	神埼錦二郎
全 中町	西村忠一
全	山中たけ
全 中の名	副島祐二
全	高倉重次
全 伊勢屋町	執行兼種
全 八幡名	久本吉資
全	高橋巳之吉
全 元町	西田庄二郎
全 馬責馬場	副島袈裟之助
全 明治橋通山内方	關 泰
全 点合町	木下倉一
全 片田江通	大隈峯雄
全 中の橋名ピーリ方	橋口こま
全	柳川みね
全 米屋町	米村常吉
全 牛島町	古賀 清
佐賀縣佐賀郡末次村	久米祖廸
全 大井橋村	深川じつ
全 木原村	勝屋賢造
全 古賀村	小柳貞一
全 諸富津村	中村ちよ
全 小城郡三里村字米隈	松永勝次
全 三日月村字深川	副島松一
全 三日月村字袴田	石井俊夫

全 梓島郡武雄町字花島	山口源太郎
筑後國三諸郡若津港	大塚政一
全	菊池源太郎
全	鐘江健蔵
全 青木村字西青木	廣瀬善三郎
全 八女郡二川村字和泉	小崎松二郎
長崎市濱の平	ウェルローズ
全 東山手鎮西学館	横田常雄
全	溝口弾一
全 大浦澤山商會内	牧瀬源一郎
全 元大工町	下妻元二
佐世保軍港下京町	堤 秀吉
全 島瀬町	志水徳松
久留米市小頭町六十	和佐恒也
全 第四十八聯隊第一中隊	西牟田英男
熊本市新屋敷町四三五	ブラウン
全 長安寺町壺	山内直丸
全 水道端貳番丁	荒木利直
全 傘四番丁	高藤梅雄
全 新屋敷四三五	副島八郎
全 小幡町近藤方	森田つる
熊本縣飽託郡黒髪村字留毛	西野俊雄
全 宇土郡郡浦村字中	小崎晋士
全 鹿本郡芳松村字豊田	津野田信義
全 八代郡和鹿島村字鹿野	内田晋次郎
全 菊池郡泗水村	渡邊之雄
全 玉名郡南關町	津留つぎ
筑前國管崎福岡病院	松永とし
東京麻布區我善坊町	横尾さだ
全 神田區美土代町	小池袈裟雄
遠江國濱松電信局	藤田信七郎
香港灣仔洋船街	橋口かめ
韓國釜山港南濱町	伊東一次

資料引用

路帖教報 1901. 8. 8 3頁、4頁

解説・解題

2章 新しい方策で（1902年～1910年）

- 第1節 宣教方策の拡大
- 第2節 教会の伝道
- 第3節 神学教育の始まり

資料20 1901年度日本伝道統計（USS. 8th. 1902.5.7-11）

これは南部一致シノッド第8回総会にボード報告として提出された日本伝道報告である統計表である。

資料21 神学校開始と神学生の募集特別公告（路帖新報 1902.6.25 1頁）

明治初期のすべてのミッション団体に言えることだが、日本での伝道及び教会形成を堅固な態勢へ構築するための最も大きな課題は充実した神学教育による教職養成の確立にあったので、1902年6月発行の機関紙「路帖新報」にて、神学生を募集し、正式の神学教育を施すことの計画を打ち出した。

資料22 路帖新報「発刊の辞」（路帖新報 1902.6.25 1頁）

1902年1月19日第19号をもって、一時廃刊となった「路帖教報」の後、5ヶ月後の1902年6月に再度、『路帖新報』と改題し、印刷所も佐賀市中町一番地の久本如鳩堂活版所に変えて、月2回で号を新たに発行した。その後、号を重ねること58号で1911年5月に再び廃刊に至る。

資料23 佐賀幼稚園生徒募集（路帖新報 1902.9.25 1頁）

1902.9.25 発行の路帖新報でのルーテル教会の最初の幼稚園となった佐賀幼稚園の生徒募集である。この募集記事の翌月、10月に佐賀幼稚園は開園した。当初、定員12名の予定であったが希望者が多く、25名で始まったという。園長は当時佐賀の宣教師であったC.K.リパードの夫人であった。

資料24 伝道開設10周年記念特別公告（路帖新報 1903.2.25 2頁）

資料25 伝道開設10周年記念祝会日程（路帖新報 1903.2.25 2頁、3頁）

南部一致シノッドが日本伝道を開始して、すでに10年の歳月が経過し、「伝道開設10周年記念」計画の特別公告が「路帖新報」1903年2月号に掲載された。5年前の1898年に熊本伝道が山内直丸により開始され、1901年からは久留米

伝道をウインテルと米村常吉が担当し、さらに 1902 年からは和佐恒也が大牟田伝道を始め、教会数は増加し、伝道拠点も拡大への確かなる希望が持てる時期であった。

資料 26 ピーリー帰国の日程（路帖新報 1903.3.10 4 頁）

宣教開始 10 周年を翌年に控えた 1902 年 3 月 18 日から 20 日に熊本で開かれた宣教師会議の決議としてボードに自らの休暇をピーリーは申請した。4 月 8 日、ストラスブルクでの会議でピーリーの休暇を翌年の、1903 年夏から 1904 年秋までとするとの決定を伝えた。この 1903 年 3 月号「路帖新報」の報道にあるように、1903 年 4 月 15 日にピーリーは 1 年間の休暇のために長崎から出航し、満州を経てシベリアに向かった。

資料 27 ピーリー帰国報道（路帖新報 1903.4.10 1 頁）

ピーリーの帰国の旅路は 1903 年 4 月 15 日に日本を発ち、シベア鉄道により、ロシアを経由して、途中、ヘルシンキにあるフィンランド福音ルーテル協会 (LEAF) の事務所を訪問し、さらにドイツ、イギリスにも立ち寄り、6 月 15 日にニューヨークに到着し、バージニアのウイザービルに向かった。そこには、前年の秋、10 月 11 日に佐賀を立ち、朝鮮の港を経由し、太平洋の波濤を越えてサンフランシスコに向い、三人の子供を伴ひて 11 月にバージニアで旅装をすでに解いていた、妻、リッチが彼を待ちわびていた。

資料 28 伝道開設 10 周年記念祝会報告（路帖新報 1903.4.10 5 頁、6 頁）

ピーリーは一年間の帰国休暇のために 1903 年 4 月 15 日に日本を発つ前に、伝道開設 10 周年記念祝会の二日目の 4 月 2 日、「日本伝道の由来」と題して講演している。これが日本でのピーリーの最後の言葉となった。

資料 29 神学生募集特別公告（路帖新報 1903.6.25 1 頁）

南部一致シノツドのミッションの方針は他の神学校に委託して伝道師を養成することではなく、ルター派神学に基づく、自らの神学校で独自の神学教育を目指すことにあった。

資料 30 ピーリーとボード書記スミスとの往復書簡 (USS,9th. 1904.7.27-31)

ピーリー辞任に関する資料となる南部一致シノツド第 9 回総会議事録。ピー

リーは 1903 年 4 月 16 日佐賀を出発し、シベリア横断鉄道により欧州に赴き、LEAF の要請を受けてフィンランドに一週間立ち寄り、イギリスを経てアメリカに休暇で帰国した。アメリカでは、バージニア州のセーラムに居を構えつつ、シノッド会議及び宣教会議に出席し、諸教会の訪問を繰り返しながら、日本伝道について語ると共に、ボード書記 L.L.スミスとの間で宣教師の生活上の問題及び待遇・給与問題等について往復書簡を交わしたことが記されている。

資料 31 日本伝道に関するピーリーの意見書 (LV. 1904.5.12)

ピーリーが辞任届を提出する前に、自ら書き残した「アピール」と言える文書で、自らの慨嘆を述べている。それに 5 月 12 日号『Lutheran Visitor』の中から紹介する。ピーリーのいつわりない日本伝道の感想である。このような悲壮に近い「アピール」を『Lutheran Visitor』があえて載せたことは注目すべき事実である。

資料 32 ボードによる日本伝道規定 (USS,9th. 1904.7. 27-31)

1901 年から 1903 年にかけてピーリーとボードとの間での休暇と辞任の問題をめぐっての対立と相克が発生し、ついに 1903 年 6 月 13 日、宣教師ピーリーの辞任を受けた後、ブラウンとリップードの二人の宣教師の間にも偏見と誤解を生じさせることを恐れたボードは、一年近い検討期間を経て、1904 年 6 月にセーラムでボード会議を持ち、日本伝道の原則の確認と、それに基く宣教師規定を作成し、南部一致シノツド第 9 回総会に報告した。

資料 33 熊本教会献堂式、1905.6.20 (『日本福音ルーテル教会史』p79)

1904 年、水道町 18、9 番地に 200 坪の熊本教会の敷地を得るが、会堂の実現は日露戦争により遅延を余儀なくされた。同年 9 月上旬に開かれたボード会議は熊本教会の会堂建築の着工を延期する決定をした。熊本教会の会堂建築計画の模様を『60 年史』では「間口五間、奥行七間、四尺に十一尺の聖壇、一間に二間の玄関で見積もり一千八百圓であった。」とし、着工から 4 ヶ月を経て、念願の会堂は 1905 年 6 月 20 日に完成した。牧師館は会堂の右手後方に二階屋であった。会堂の裏庭を隔て隣家の塀沿いに四畳半ぐらいの部屋が四つほどとれる日曜学校室を翌年の 4 月に増設している。

資料 34 私立熊本予備高等学校生徒募集 (路帖新報 1908.9.1 1 頁)

この「路帖新報」は熊本での教育事業の先駆けとなる「熊本高等予備学校」の

開設と生徒募集を公告しているが、これによれば 8 月 12 日に設立認可を得て、場所を熊本市大江村舊向榮社跡に設立されたとなる。高等学校入学志望者に適切な予備教育を提供することを目的とした熊本高等予備学校は惜しくも開校から 1 年にも満たない、1909 年 6 月下旬、文部省の教育方針の変更により閉校となり、短命に終わった。

資料 35 在日日本アメリカ南部福音ルーテル教会ユニテッド、シノッド宣教師社団設立申請(1909.3.5)

ブラウンは、1909 年 2 月 12 日、東京に出立し、約 3 週間ほど滞在し、社団設立のための準備作業に精力的に取り組み、内務省に社団設立とその認可のための必要書類を 3 月 5 日付で提出して、3 月上旬に熊本に帰着した。

資料 36 在日日本アメリカ南部福音ルーテル教会ユニテッド、シノッド宣教師社団設立許可書(1909.6.21)

1909 年 6 月 21 日付で社団法人として「在日日本アメリカ南部福音ルーテル教会ユニテッド、シノッド宣教師社団」の認可を当時の内務省より受けた。この「社団」は、当初、神学部を包含する中学校となる九州学院の資産の保全を目的として設立され、戦前の教会の歴史においては日本福音ルーテル教会及びルーテル系諸学校・福祉施設・幼児教育施設などの前法人としての役割を果たした。

資料 37 福音路帖神学校開校・授業内容（路帖新報 1909.10.1 6 頁）

1909 年 9 月 27 日午後 2 時、開校式を挙行し、熊本市新屋敷町 412 番地のスタイワルト宣教師宅を仮校舎として開校した神学校は、まだ政府の認可を正式に得ていなかったが、教授陣は、校長のブラウン、ウィンテル、スタイワルト、それに熊本教会牧師の山内直丸であった。

資料 38 九州学院敷地購入（路帖新報 1909.12.1 1 頁）

日本の宣教師会からの追加資金増額の要請を受けていたボードは、1909 年 9 月 6 日から開催された南部一致シノツド第 12 回総会に資金増額の提案し、承認を得た。その 2 ヶ月後、ブラウンは 1909 年 11 月 22 日、熊本市外大江にミッション・スクールの敷地 1 万坪を 2 万 5,000 円で購入した。ちなみに、南部一致シノツド第 12 回総会にスタイワルトは休暇も兼ねて出席し、自らの帰国報告を行い、さらに、併せて創設されるミッション・スクールの正式名が「九州学

院」であることも報告している。その買収を知らせる特別広告が 1909 年 12 月号の「路帖新報」に掲載された。

資料 39 遠山参良プロフィール (LCV.1910.8.11)

九州学院初代院長の「遠山参良」の名前が南部一致シノットの機関紙「Lutheran Church Visitor」に登場したのは、九州学院開校の 2 年前、1909 (明治 42) 年 1 月である。それは創設者である C.L.ブラウンが九州学院の教育事業に関する進捗状況を伝え記事の中に記されているが、遠山の写真と共に彼の印象をほとんど憧れに近い描写で伝えているのが 1910 年 8 月 11 日号「Lutheran Church Visitor」の記事である。

資料 40 「日本福音ルーテル社団」定款 (USS. 12th. 1910.9.6-11)

九州学院資産の保全と有効活用・運営を目的とした社団組織の設立が 1909 年 6 月 21 日付で社団法人「在日本アメリカ合衆国南部福音ルーテル教会一致シノッド宣教師社団」として内務省より認可が下りた。この社団の定款は 1910 年 9 月 6 日から開かれた南部一致シノッド第 12 回総会にも報告され、その目的と定款内容はその議場で承認された。

資料 41 三ボードの日本伝道協同計画 (ローノーク会議) (U S S. 12th. 1910.9.6-11)

1910 年 8 月 7 日、バージニア州ローノーク大学で開催された関係海外伝道局(ボード)の合同会議による日本伝道に関する協同計画案である。参加ミッションボードは南部一致シノッド、アメリカ・デンマーク教会、ジュネラル・カウンセルである。会議の結論は九州学院の事業で共同活動することを確認し、在日宣教師共同会議を設置した。

資料 42 九州学院神学部課目・講師 (路帖新報 1910.10.1 4 頁)

1910 年 10 月頃の神学校での学科並びに教授・講師名が記せられている。ウインテルは神学部の教授に専念するために、久留米教会から熊本の新屋敷町 412 番地に移り住んだ。学生は本科 2 年生の学生である松本学明、入江徳太郎(この年に川瀬姓を継ぐ)、高橋新太郎の 3 名に、4 月から新たに久留米教会から三浦冢、亀山萬里、また 9 月からは熊本教会から本田傳喜が予科生となっており、神学生は 6 名を数えていた。

STATISTICS .

Missionaries	3
Wives of Missionaries	3
Native Ministers	2
Unordained helpers	3
Stations	2
Out-stations	3
Sunday-Schools	3
Scholars in same	140
Baptized members	117
Converts in 1900-01	38
Native contributions	640.00yen
Monthly salaries of missionaries	\$262.50
Monthly salaries of native helpers	97.00 yen
House rents per month	58.00 yen
Chapel rent	27.00 yen

資料引用

Minutes of the Eight Convention of
the United Synod of the Evangelical
Lutheran Church in the South,
1902.5.7-11, P33

資料 21 神学校開始と神学募集特別公告

「特別廣告」

本年九月より佐賀市に於て、和英兩國語を以て神学の教授を始むべし。其期限は三ヶ年にして、在学中の費用は凡て自辦とす。されども止むを得ざる事情あるものは、宣教師又は教師の証明によりて、特に其費用の幾分を補助するのもあり。依て志願の者は至急申込まるべし。

但神学生たるを得べき者は左の四項に該當するものに限る。

一、心霊上の資格

品行方正にして確實なる信仰と充分なる経験とを有する者

二、体格

生命保険會社の被保人たるを得べき程の体格を備ふる者

三、學力三、

少なくとも中学校卒業若くは之に相當する學力を有する者

四、金銭上の關係

借債なき者又は金銭借用の保証人にあらざる者

福音路帖教會

資料引用

路帖新報 1902. 6. 25 1 頁

発刊の辞

路帖新報は路帖教報の死でまた生れたる者なり。教報は明治卅三年六月福音路帖教會教役者會の決議に基づき、翌七月より吾人の神学上の立脚地を明らかにし、斯教に關する報道を確實にせんが為に、月刊新紙として生れ出しが、人事意の如くならず、卅五年一月第十九號の弱齡にて、不幸印刷の時機を誤り、廢刊の悲運に陥りて讀者諸彦の眷愛に反けり。然るに宣教の畠はますますいろづきて、工人の空しく觀風望雲するをゆるさず、再刊の擧を促さるゝを頻々加ふるに敬虔なる如鳩堂主久本氏新たに印刷所を設けて自ら印行の勞を負擔すべしと申込まれたるを以て、茲に断然意を決して斯道に貢獻せんが為に更正し、名を路帖新報と命じ時宜に應じて毎月十日、二十五日の貳回發行し、至高上の聖慮と愛讀諸彦の好意に報ひんことなれり。若し其希望の幾分を達することを得ば何の幸福か之に過ぎん。

資料引用

路帖新報第一号 1902. 6. 25 1頁

特別廣告

佐賀幼稚園生徒募集

拾月一日より開園すべし望の方は至急左の所へ申込まるべし

佐賀市中の橋小路

リッパード夫人

全松原町七十八番地

山内みきゑ

路帖新報

佐賀幼稚園

わが福音路帖教會の宣教師リッパード氏の夫人が、今度佐賀市に幼稚園を創設するを思ひたち、米國にある夫人の令姉より恩物其他一切の器具の供給を仰ぎて、十月一日より開園せらるべしといふ。佐賀市は三万有余の人口を有する名都にして、高等教育の盛んなるを、恐くは全國中第一等の地なるべしと雖ども、不幸にして未だ今日まで嬰兒教育場たる幼稚園を設立せられたるとを聞かず。嘗て小城町にありたれども短命に葬られ、當時佐賀縣下に一の幼稚園あるなしといふ。幼稚園の嬰兒教育に必要なる、更めて蝶々するの要なし。而して敬虔にして快活なる夫人が保母となりてこの要求に應ぜらる。吾人はその斯道に貢献せらるゝとの好意を多とすると共に、夫人が時間を善用するに忠實なるに感ぜざるを得ざる所なり。

資料引用

路帖新報 1902. 9. 25 1 頁

特 別 廣 告

來る四月二日午前九時、佐賀市花房小路教會堂に於て、日本福音路帖教會開設滿拾年紀念祝會相開き候間、御來曾有之たく、此段御案内申上候也

教 役 者 會

福音路帖教會員及准會員

各位御中

紀念品購入費募集

來る四月二日日本福音路帖教會滿拾年紀念祝會相催し申べく候に付ては、創立以來忠實に相働られ候ピーリ博士、山内牧師全夫人の三氏へ紀念品を贈呈して、聯か功勞を謝するの微意を表したく候間、多少に關らず三月十五日までに左記の内へ宛て御寄附之有度候也

佐賀市馬責馬場 西牟田新

八

久留米市櫛原町二六 米村常吉
福岡縣大牟田町字榮町 和佐恒也
熊本市新屋敷町参五参 山内直丸

追て該紀念物品は参月拾七日に確定致すべき筈に御座候

有 志 者

福音ルーテル教會員及准會員

各位御中

資料引用

路帖新報 1903. 2. 25 2 頁

資料 25 伝道開設 10 周年記念祝会日程

春期教役者會と満拾年紀念祝會

佐賀福音路帖教會に於て催さるべき、ルーテル教會教役者會及び満拾年紀念祝會の執行順序は左の如きよし

三月卅一日午後七時 祈 禱 會
司會 和佐 恒也氏

四月一日 教 役 者 會
午前八時半祈禱 司會 ウキンテル氏
全九時 講演
オーグスボルグ信條第十七條
(基督の再臨) ブラウン氏
全十時半 全
教役者の心霊的生涯 米村 常吉氏
午後二時 懇談及議事會
司會 山内 直丸氏
午後七時 演説會 司會 和佐 恒也氏
辨士 ウキンテル氏 山内 直丸氏

四月二日 満十年紀念祝會
午前八時半祈禱 司會 リッパード氏
全九時 祝會
日本傳道の由來 ピーリ氏
日本路帖教會の歴史 山内 量平氏
過去の友を懷ふ 山内 直丸氏
午後一時 親睦會 司會 和佐 恒也氏
全七時 講 演 會
辨士 ブラウン氏 米村 常吉氏

右紀念會上に於て、創立後満拾年間忠實に働かれたるピーリ博士山内量平全夫人幹枝三氏の功勞を表象する為に、紀念物品を贈呈せんとて、有志者は熱心に同意者の贊助をもとめつゝあり。其豫算金高は一人拾圓宛にて都合參拾圓許を集むる筈の由にて既に拾八九圓の應募者ありといふ贈呈品は未だ確定せざれども豫定金額に達する時は、時計の鎖か又は記章の如き者を協議の上新に造りて贈りたき考の由。又婦人會よりは其節永眠せられたる信徒の各墓前へ花束を捧呈せんとて協議中なりと聞く。又如鳩堂主人は翌三日に來會の各教役者を招きて改革満一年の祝會を開かんとて、既に案内書を發せられしよし。

資料引用

路帖新報 1903. 2. 25 2 頁、3 頁

ペーリー博士帰國の日取

ペーリー博士は一個年休養の見込を以て、四月十七日長崎出帆の汽船にて満州に渡り、サイベリア横貫鐵道によりて獨逸に赴き、パリ、ロンドンを経て米國に歸らるゝ筈の由。

資料引用

路帖新報 1903. 3. 10 4頁

哲學博士ピーリー教師の歸休

前々號の記事欄内に記載せし如く、アール、ビ、ピーリー博士は本月十六日任地佐賀を出發し、サイベリア横貫鐵道らよりて歐州に赴き、女教師クルビネン嬢を派遣せられたる傳道會社の懇請に應じ、一週間フィンランドに止まりて、日本の事情と宣教の必要を説き、夫より英國を経て米國に歸休せらるゝとなれり。

障子を隔てゝ博士の談話を聞く者をして、その外國人たるを識別し得ざる程に日本語に熟達せらるゝこと、日本の事情に精通して之を歐米諸邦に紹介し、また適切なる心靈的藥劑を投せられたることは、博士の講話と著作『ジスト、オブ、ジャパン』（日本の要領）『ルーサランス、イン、ジャパン（日本に於ける路帖教會）及びしばしば内外新聞紙と路帖教報時代よりのわが新報に送られたる奇書が、如何に歓迎せられたるかによりて明確に知る得べし。

然し之よりも更に吾人の記憶すべきは博士が我福音路帖教會開始以來、創立者として又主事として、拾年間教會の責務を一身に引受け、愛と祈りとを以て忠實に基督の王國の為に働かれたることにして、佐賀教會の設立と路帖教會派の三傳道會社の聯合運動とは、確かに博士が與りて大に力あることにて、わが路帖教會初代歴史よりは博士の名を抹殺し得べきからざるなり。

吾人がこの効績ある博士と一年間訣別するは甚だ忍び難き處なり、され共博士がこの一年間に於て至る處に日本の眞想を親しく紹介して、宣教の必要と日本國民の基督の聖招に答へ得るの能力あるを告知せらるゝの甚だ必要なると、博士か此大なる任務に適當なるを認識す。

吾人は茲に謹んで博士の行を送る。希くは至る處常に三一の主と共にありて健全に、而して再び主の平安なる道を踏んで來り、我邦の為に働られんことを。

資料引用

路帖新報 1903. 4. 10 1頁

第五回教役者會と満十年記念祝會

豫期の通り佐賀教會に開かれたり。今その重要な部分を挙げれば、四月一日午前

オーグスボルグ信條第十七條
(基督の再臨) ブラウン氏
教役者の心靈的生涯 米村常吉氏

の講演ありたり。ブラウン氏の講演は他日本紙に掲載して割愛することすべし。而して米村氏は先づ心靈上の發育は肉体上の行為によるにあらずして其動機如何による者なれば、外部の如何によりて断定を下すべからずとの前提を置て、教役者の生涯に祈祷及感謝、聖書の講究、書類其他の有益なる書物を讀むこと、勤勞と、休養との必要を叮嚀に説かれたり。午後二時議事懇談會を開きたり。その懇談の題目は

- 一、 若し背信教者が生じたる時は如何に取扱ふべきか。
 - 二、 信徒の婚禮取扱法。
- にて、議事に於ては
- 一、 ピーリ博士歸國に付各地ルーテル教會に於て特に祈祷會を開くこと。
 - 二、 信徒懲戒條例起草委員三名を挙て次回に草案を提出せしむること。而して委員にブラウン、米村、山内直丸の三氏を撰びたり。
 - 三、 日本路帖教會の為に働かるゝ三外國傳道會社に感謝状を送ること。
 - 四、 次回を熊本に開くこと。
- を決議せり。夜 7 時半講演會を開き

罪 山内直丸氏
詩篇二十三篇第一節 ウキンテル氏

の演説ありたり。聴衆八九十名許。

四月二日午前九時半祈祷會に續いて満十年祝會を開く。

日本傳道の由来 ピーリ博士
日本路帖教會の歴史 山内量平氏
過去の友を懷ふ 山内直丸氏

の演説ありて、ピーリ博士は外國より宣教に着手したる由来と外國傳道會社方面の歴史を語り、山内牧師は招聘に應じた事情より今日に至るまでの歴史を話されたり。其内には随分奇談ありて笑聲を漏する者もあれば迫害のありし有様を聞て傳道難を悟る者もありたり。山内直丸氏の十三氏の祝詞演説の稿は他日本紙に寄らるゝ筈なりといふ次で和佐氏は久米祖迪木内千葉太郎西野俊雄の三氏よりの祝辞を代讀せられたり右終りて司會者米村氏は拾年間忠實に勤められたる創立者にして維持者たるピーリ博士山内牧師全夫人の三氏を請ふて聖臺の前に進ましむ。彼等の座定まる時、山内直丸夫人クルビネン嬢リップード氏各紀念贈呈品なる純金指輪一個づゝを捧げて進み出でて順々に進呈し、續いて西牟田長老有志者総代として進む出で贈呈の理由を述ぶ。三教師之を受けて各指頭に挿みて謝辞を陳らる。此時歡喜拍手の聲堂に満てり而して式全く終りしは十二時過なりし。

全午後一時親睦會を前の長老溝口新六氏の川原小路の邸に開く。和佐氏の司會にて式を行ひ、後一同に巻ずしと菓子を供し、喜々談笑の間にリップード夫人の設立せられたる幼稚會員の唱歌、外國教師等の音曲、婦人會員の讚美歌等ありたり、午後四時頃川原小路の招魂社内に於て一同寫真を撮りて散會せり。因に云ふ。この寫真七枚を撮りてピーリ博士山内牧師同夫人及三個の外國傳道會社に一枚づゝを贈呈し、残り一枚を教會に保存する筈なりといふ。來會者殆んど百名。

夜七時半會堂と米屋町講義所の二ヶ所に於て演説會を開く。辨士は教會に於てはブラウン（世界最大教師）米村（成功の秘訣たる二大要素）の二氏にして、聴衆七十名なりし。米屋町にてはピーリ（基督教は信じ得べきものなるや）和佐（宗教の正邪を論ず）の二氏演説せらる。而して聴衆五十餘名なりし。

又今回教役者等がその家族を伴ふて來會せられたるが故に、翌三日午前九時半山内牧師宅に於て特に教役者の夫人等の會合をなして交情を温められたり。

佐賀在留の諸氏は今回の祝會に各地散在の諸氏の來會を得て一段の光榮を添んが為に來會者諸氏の宿泊を一切引受くることなし、其準備をせられしが、不幸にして來會せられたる者は役者及び全家族の外僅かに久留米の長濱市蔵熊本の古瀬安俊坂口仁太郎の三氏のみなりし。

資料引用

路帖新報 1903. 4. 10 5 頁、6 頁

特 別 廣 告

福音路帖教會神學生募集

毎年九月より新學生を開始すべき神學校入学試験課目を左の通り定む

數 學 四則雜題より開平開立まで

代數學 二次方程式まで

物理學 關本小倉共著新撰物理學教科書

地 理 万國地理

歴 史 フキシャー原著 万國歴史 譯

竹越與三郎著二千五百年史

支那學 春秋左氏傳又は史記本記例傳の類

作 文 記事論文 壹 題

書翰文 壹 題

英 學 第四ナショナル讀本以上譯讀

入学志望の者は至急申込まれるべし

又志願者の希望により特に一科目づゝ試験し全科目終了の後新學
年に入學するも差支へなし

熊本市新屋敷町三八四

試験委員 山内直丸

資料引用

路帖新報 1903. 6. 25 1 頁

(A Copy.)

Strasburg, Va., April 27. 1904.

Rev. R. B. Peery, Ph. D., Salem, Virginia,

Dear Brother: --- Your letter of the 25th to hand.

I regret exceedingly the illness of Mrs. Peery and your son, but am glad to know that they have greatly improved and hope that they will rapidly be restored to their usual health. I am sorry that your trip North was prematurely ended, for I have no doubt but that your addresses would have awakened interest in our Mission. I have given Mr. Eberly the receipt enclosed.

Do you expect to attend the coming conventions of the North Carolina and Georgia Synods, the former in May and the latter in June? And what are your plans and ideas for the remaining months of your furlough? The resolutions granting the furlough specify that it begin in the summer of 1903 and end in the Autumn of 1904, and only four months remain until September. I think we should have some understanding of the use of these four months and map out the best plan to awaken and quicken interest in the Mission among our Southern churches. Further, I am now preparing for the convention of the United Synod and it is important for us to know the date of your return for financial reasons as well as the wisest use of the remaining time of your furlough. I will be glad to have your views and you will please write me at your earliest convenience on this important matter. I would love to go to the Synods mentioned but fear that I can not spare the time.

We are all well and with best wishes for you and yours,

Fraternally yours,

L. L. SMITH,

Acting Secretary.

(A Copy.)

Salem, Va., April 30

Dear Mr. Smith:---Your letter is before me and I will reply at once.

I was somewhat surprised that you asked me to set a date for my return to Japan before the Board takes steps making it possible for me to return. You will remember that the Mission made formal request to the Board in writing last Summer for certain action which it affirmed to be absolutely necessary to the life and success of the work. That action has not been taken yet; and as I told you when in Strasburg, and as you might infer from a reading of the recommendation of the Mission, by declining to take that action you make it impossible for me to return to Japan.

My contract was made with the Board twelve years ago, and conditions have changed much since then. Cost of living in our Mission field has doubled; and, whereas, I was a single man then. I now have a wife and three children. In justice to my family I cannot go out again without a new contract, taking cognizance of these conditions. The changes I desire, and regard as essential are as follows:

1. The salary to be increased at least as much as the Mission's recommendation of last summer calls for. A recent letter from Missionary Brown says that even these figures are too low now.

2. A definite statement as to children's return for schooling when parents judge it to be advisable.

3. A definite and reasonable item concerning furloughs, so that my past unpleasant experience will not have to be repeated.

4. Sufficient means, willingly granted, to provide, furnish and maintain in repair, a good Japanese house until such time as the Board can build a foreign house; and a promise to endeavor to erect a foreign house in the near future. Our house heretofore have not been properly furnished. One bed room and a study was supplied with furniture --second-hand--for me; while I had to furnish the rest of the house myself. The Board's furniture is still there; but it will be necessary to add some to that at the Board's expense, in case I return.

Besides the above changes in the contract, I will expect the Board to pay what I have paid for rent while on furlough--\$120.00. This it is under obligation to do, as the cutting off of my rent and reduction of my salary against my protest were plainly in violation of the contract. I stated in a letter to you before leaving Japan that a man's salary might be reduced

while on furlough, if his time was not at the disposal of the Board; otherwise he ought to have full salary. And I certainly never contemplated such a thing as the cutting off of my house rent.

Now, I have no quarrel with the Board. The things specified here are essential, and are moderate; and when the Board grants them I will be ready to confer with you about time of return, etc. If you don't grant these things you make it impossible for me to return to the field, and force my resignation. And let me beg you to acquaint the members of the Board, or at least of the Executive Committee, with the contents of this letter, and act upon it as soon as possible. You have already waited one year before acting on the Mission's recommendation, and if the matter is left for a new Board to consider-- in case there should be a new one--it will probably have to wait a like time. You brethren are in a better condition to decide this matter than any one else can be, and I trust you will do it promptly. If I don't know until the meeting of the United Synod whether I will return to Japan or not, it will be very unsatisfactory to me, and sometime afterwards will be necessary to make the needed preparations. In the meanwhile I am kept here on an insufficient allowance, and running behind financially every day.

I am ready for any reasonable work you may assign me during the summer but I have engagements for the last week in May and one week in August that I hope will not be conflicted with. I had not expected to go to North Carolina and Georgia Synods, as I have no invitations from those bodies and no instructions from the Board. But if it is your wish that I go, I stand at your service, and that of your cause.

Trusting that you will see the reasonableness of this letter, and favor me with an early reply, I remain, Sincerely yours,

R. B. PEERY.

資料引用

Minutes of the Ninth Convention of United Synod of the Evangelical
Lutheran Church in the South, 1904.7.27-31.

The Need of Our Foreign Mission
R. B. PEERY

One of the things that have discouraged me in my visitation the churches since coming home is the complacent satisfaction with which our people regard the present condition of the Japan mission. No one could be more grateful than I am for the blessings that have attended the work so far; but I cannot be contented with present attainment. Such easy satisfaction and contentment preclude progress and cripple the work. The Church should realize that *our mission is not in a satisfactory condition*; and should honestly endeavor to supply the lack.

At the risk of being considered worldly I am going to sum up all our need in the one word *money*. I know that this is a spiritual work, and that faith, consecration, and prayer are necessary to its success; but in this modern world even these are comparatively fruitless without sufficient means to carry on the work. Even with our present missionary force, with a sufficient sum of money the work can grow and prosper indefinitely. But without more means it cannot have and permanent success.

Why are more means imperatively needed? In the first place, they are needed *to enlarge the work*. Our work is very small, so that in the eyes of the Japanese it suffers much in comparison with other missions, which are many times large and better supported. It could also far more permanent and efficient work if it were large. *We must have a theological school*, with preparatory training school. Without it we cannot hope to build up a self-respecting and perpetuating Lutheran church in Japan. And then we must open stations in the centers of population, so as to care for our members who naturally drift to those places.

A second lack, which a little money can supply, *is foreign houses* for our missionaries. The native houses are altogether unsatisfactory for men with families. They are too open, and draughts and dampness enter them at all times. Other missions invariably furnish foreign houses for their men, and ours should too. I am sure that the health of my family has suffered much because of the exposure; and unsanitary features of the native houses; and Mrs. Lippard attributes her recent critical illness to the same cause. With

moderate American homes your missionaries would be far healthier and happier.

Another need of our mission, which only money can supply, *is increased salaries* for our missionaries. I make bold to write of this, at the risk of being though immodest and mercenary, because the very continuance of the mission depends on it. The salaries were fixed twelve years ago, at the lowest figure though advisable at that time; and in the meanwhile the cost of living has almost doubled in Japan. Wages have greatly increased, salaries paid to government officials have been raised; and all incomes have necessarily enlarged. But your missionaries have been required to live on the original sum fixed, and no recognition has been taken of the increased cost of living there. It was hard enough in the beginning to live on the salary ; and now, when our men all have families, it is impossible. Every man we have sent to the field has found the salary inadequate, and any others who might be sent will have the same experience. Salaries paid by our Board are about one—third less than those paid by all other Boards working in Japan.

The mission has presented all three of these needs fully to the Board time and again; but the Board has been forced to decline the advances necessary because of the limited funds at its disposal. The Church has not been adequately supporting the work. While the number of missionaries and native workers has increased, and progress has been made on the field, the Church at home has not kept pace with that progress. General interest in the work has grown, but there has been little, if any, increased in the income of the Board for the Foreign Mission during the greatly increased the Board's income at once, if the work is to go on satisfactorily.

My purpose in writing this frank letter is to inform our people as to the real situation, in the hope that they will think prayerfully of the matter; and at the approaching meeting of United Synod take steps to supply these great and pressing needs. The Church has the money, if only our pastors and people will realize the necessity for it, and make an honest effort to secure it.

資料引用

Lutheran Visitor, 1904.5.12

資料 32 ボードによる日本伝道規定

RULES FOR THE JAPAN MISSION

The Board of Missions has never recommended to the United Synod general rules for the government of our work. The work has grown questions arising daily which assure the Board that the time has come for such regulations. With definite and specific principles adopted, misunderstanding between missionaries and Board could not arise. Therefore the Board at its meeting in Salem in June, 1904, after a long and earnest consideration adopted the rules here presented for your approval. The manuals of many Boards of the great and smaller denominations, both North and South, were consulted, and these rules here presented are the adaptation of our wisdom and experience and of other Boards to our work.

GENERAL RULES FOR THE JAPANESE MISSION OF THE UNITED SYNOD OF THE EVANGELICAL LUTHERAN CHURCH IN THE SOUTH.

1. Name.

The Japanese Mission of the United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South.

2. Aim.

As the supreme end of Missionary life and service is the preaching of Christ and Him crucified to heathen peoples, all forms or work in the Mission must be subordinated to this end. The missionaries are charged to bear the Gospel faithfully to the communities in which they are located and to seek the establishment of self-supporting, self-governing Evangelical Lutheran churches under the care of a native ministry. The missionaries must constantly encourage the native Christians in the matter of the religious education of their children, the support of their native preachers and teachers, the defraying of the current expenses of their churches and the relief of their needy brethren.

3. The Missionaries.

The United Synod through its Board of Missions calls the missionaries,

assigns their fields of labor and prescribes their duties. The missionaries are required to be sound in body, of deep piety, liberal culture and of sympathetic and consecrated spirit. They shall pledge themselves to live according to the precepts of the Gospel and to teach in accordance with the doctrinal basis of the United Synod ; to be subject to the instructions of the Board in their respective fields of service; to live and labor in fraternal relations to each other and to refrain from conduct which will awaken undue prejudice or interfere with their usefulness in the communities in which they minister.

In selecting missionaries the Board understands that candidates pledge themselves to continue the work through life, except for weighty reasons. If the missionary should prove untrue to the doctrinal basis aforesaid or defective in moral character, or disobedient to instructions, or for other reasons prove unqualified for the pursuance of his work, the Board possesses the inherent right to dissolve the connection. In the event the missionary withdraws from service for reasons considered sufficient by the Board, it will defray the expenses of his return to this country, provided the return is promptly made.

The whole time and strength of the missionaries shall be given to the work of the Mission. Additional work of an industrial, mercantile or literary character must not be undertaken without the permission of the Board.

Recalls.

If the missionary should prove physically disqualified for the work or cannot work harmoniously with his associates, or should it appear that his usefulness on the field is open to serious question for other reasons, the Board possesses the inherent right to dissolve the connection by recall. In this event, the Board will pay the expenses of the missionary's return by the most direct route to that section of this country from which the missionary came, provided such return is promptly made, and will also pay furlough salary without other allowances for three months from the date of the issuance of the recall.

Dismissals

If the missionary should prove untrue to the doctrinal basis aforesaid, or defective in moral character, or disobedient to plain instructions, the Board possesses the inherent right to dismiss him from its service. In this event, the Board will pay the expenses of the missionary's return by the most direct

route to that section of this country from which the missionary came, provided such return is promptly made; but all salaries and allowances will cease from the date of dismissal.

Resignations.

The Board will pay the return expenses of missionaries who resign on the field for reasons satisfactory to the Board, and will also pay furlough salary for three months from the date of such resignation. Should the missionary resign for reasons not satisfactory to the Board, it will pay the return expenses on same conditions as in dismissal, and salary and allowances will also cease from date of resignation. The salary of missionaries who resign while on furlough will cease from the date of such resignation, unless it can be clearly shown to the Board that such resignation grew out of contingencies which the missionary had not foreseen and could not control. In this event the Board may, at its pleasure, continue the furlough salary for any period not longer than three months from the date of such resignation.

Property.

No property is to be purchased or sold nor any building erected for the Board without its sanction. All property given or purchased for the use of the Board shall be at once transferred there to by title deeds which shall be duly recorded in accordance with the laws governing property in the mission territory. If the law will not allow such tenure, the property shall be held in the corporate name of the Board. If recorded in the name of individuals the record should explicitly show that the individuals are trustees for the Board. Copies of all conveyances with diagram of land and building thereon are to be sent to the Board. No repairs to property involving considerable sums are to be made without the consent of the Board.

Taxes and Insurance.

1. All buildings owned by the Board shall be insured, when it can be done at a reasonable rate in safe companies.

2. The Board will pay taxes and insurance on its own property while occupied by missionaries or on the property rented for its use, if that is customary; and will make such repairs to rented property as renters generally make; but will expect owners of rented property to make such repairs as are generally made by owners.

Extension of Work.

Extension of work requiring expenditures for property or the opening up of new centre for missionary operation should have the authorization of the Board. Written application with the concurrence and recommendation of all the missionaries should be forwarded to the Board for its action.

Reports.

It shall be the duty of the missionaries to make to the Board a quarterly report on uniform blanks. The report shall cover the special work and station of the reporting missionary.

Missionary Expenses And Salary.

I. The necessary and economical expenses of direct journey to their fields shall be paid by the treasurer of the Board. Any additional cost of longer or more expensive routes or of intentional delay on the way, must be borne by the missionary.

2. Each missionary shall receive \$100.00 as outfit on first going to the mission.

3. Each single missionary shall receive an annual salary according to the following schedule: First three years, \$600.00; next five years, \$700.00; next eight years, \$800.00; afterwards, \$1,000.00 per annum; and to each married missionary an annual salary shall be paid as follows: First three years, \$1,000.00; next two years, \$1,050.00; next three years, \$1,100.00; next six years, \$1,200.00; afterwards, \$1,300.00. The full salary shall commence on the day of the missionary's arrival on the field and cease on the day he leaves the field.

4. Missionaries shall receive no salary or furlough allowances during transit to or from the mission field, except in case of married missionaries necessity separated from their families, when, in view of such separation, such allowances shall be granted as the Board may deem just.

5. Missionaries are not permitted to receive for themselves compensation for services rendered to others. Any compensation or reward received for such services shall be paid into the Mission treasury, unless otherwise ordered by the Board. Moneys given or sent to any missionary for the use of the Mission must be entered to the Mission accounts.

6. The salary above stated is designed to cover all expenses of the missionary and family except these special allowances:

- (a) A dwelling for the missionary and family, with heavy furniture.

(b) The sum of \$75.00 yearly for teacher's allowances, and the sum of \$25.00 yearly for health allowances while on the field.

(c) Actual traveling expenses whilst in the service in the field or whilst visiting the churches under the direction of the Board on furlough.

(d) Official postage.

Vacation and Furlough.

1. If the condition of the work will permit, each missionary is entitled to a vacation during the warm period of each year for six weeks on full salary.

2. If the condition of the work will permit, each missionary is entitled to return home after the first eight years of service. The expenses of the direct voyage shall be paid by the mission treasurer. The length of the furlough shall be determined by the Board with regard to the physical condition of the missionary and the needs of the work, and ordinary, the furlough to extend not more than one year. During such furlough the missionary shall be entitled to receive three-fourths of his regular salary. The furlough salary shall begin on the day of the missionary's arrival in the home-land from the field and shall end on the day of his departure to return. No allowance for house rent shall be made, except at the discretion of the Board.

3. Missionaries are expected whilst on furlough to avail themselves of all reasonable opportunities under the direction of the Board to increase the zeal and interest of individuals and organizations in their mission work. Such service must not interfere, however, with due care of health and with their recuperation for their return to the field.

Mission Treasurer

The Mission shall elect one of its members treasurer, the election to be reported to the Board and subject to its approval. It shall be his duty to preserve all deeds for Mission property and all other papers connected with the work, to keep in an official book clear and accurate accounts of all receipts and payments with vouchers therefore, and to disburse the funds transmitted to him by the Board. He shall deposit these funds in an approved banking place and render a monthly statement of all financial transactions.

資料引用

Minutes of the Sixth Convention of United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, 1904.7. 27-31

熊本教會の献堂

會堂は六月に落成竣工したので、六月二十日午後3時から献堂式を執行した。ブラウンが司式し山内量平とリップードが聖書を奉讀しウィンテルが献堂の祈祷をささげた。次いで山内直丸の就職満十年を祝賀し江副巽が代表して記念品を呈し、山内は献堂説教をした。その日は朝來の大豪雨で鐵道も故障を生ずる程であったが、佐賀、久留米、大牟田、小城、葦北から各教役者及家族、有力信徒らが困難を衝いて参列した。市内からもメソヂスト教會の値賀虎之助（後ルーテル教會の教職となった）、日本基督の秋元茂雄を初め多數の信徒が参列し、總員九十餘名に達した。この夜は献堂に参列した來賓の好意を謝し、近く上京しようとする教會員江副巽、福田重義、この日受洗した四方延次郎三名の壮行會を兼ね、七時から舊會堂で音樂會を催した。河島くに子の琴、長谷檢校の三味線、リップードのバイオリン、ブラウンのギター、日曜学校生徒の讚美歌、熊本聲樂會員の唱歌、リップード、ブラウンの英詩朗吟等の曲目で、來會者二百餘名に上った。

資料引用

『日本福音ルーテル教会史』 p79

資料 34 私立熊本予備高等学校生徒募集

私立熊本予備高等學校生徒募集

本校は八月十二日設立認可を得校舎の設備竣成せり依て生徒を募集す、希望者は申込まるべし

一 入學者資格 中學校若くは中學校同等以上と認定せられたる学學
卒業生

一 募集生徒數 百二十名

一 入學申込期日 九月十二日

一 入學申込所 熊本市水道町十八番地

一 授業開始日 九月十五日

一 講師 (いろは順)

物理 第五高等學校教授 早川金之助

國語 全 本田 弘

英語 全 遠山參良

英語 高等工業學校教授 高橋正熊

修身 山内直丸

漢文 第五高等學校教授 児島献吉郎

英語 神學博士 スタイワルト

數學 第五高等學校教授 杉山岩三郎

他に化學、英語、數學、國語文の講師數名は専門医學校、高等工業學校等の有力なる教授に依頼中 始業までに確定の筈なり

資料引用

路帖新報 1908. 9. 1 1頁

在日本アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッド、
シノッド宣教師社団設立許可願

下名等民法第三十四條及び明治三十二年四月内務省令第十号ニ依リ在日本アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッド、シノッド宣教師社団法人設立仕度候依テ定款拾六條相添へ此段出願仕候也

明治四十二年三月五日

熊本縣熊本市新屋敷町三百八拾八番地	シー、エル、ブラウン C. L. Brown
熊本縣熊本市	エー、ゼー、スタイワルト A. J. Stirewalt
佐賀縣佐賀市	シー、ケー、リップード C. K. Rippard
福岡縣福岡市	エル、エス、ジ、ミラー L. S. G. Miller ミラー

内務大臣法學博士男爵平田東助殿

在日本ユーナイテッド、シノッド、アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會宣教師社団定款

第一條、名称、 本社団ヲ在日本アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッ

ド、シノッド宣教師社団ト名リ

第二條、社員、凡テ日本ニ常住スル合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッド、シノッドに属スル男子タル宣教師ハ本社団ノ社員タルコトヲ得

第三條、凡テ本員タルモノニシテ日本ニ常住スルアメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッド、シノッドニ属スル宣教師タルノ資格ヲ失ウ

時ハ之レト全時ニ本社團社員ノ資格ヲ失フモノトス

第四條、本社團ハ日本帝国外ニ在ル何等ノ団体トモ法律上如何ナル關係ヲモ有セズ又日本帝国ニ於ケル宗教的團體若クハ利益ヲ目的トスル團體ト法律上如何ナル關係ヲモ有スル事ナシ

第五條、目的

第一、本社團ノ目的ハ基督教ヲ擴張シ基督教主義ノ教育ヲ施シ且ツ慈善救濟ノ業ヲ為サシガ為メニ土地建物及ビ其他ノ財産ヲ所有シ又ハ借受ケ又ハ處理スルニ在リト為ス事

第二、本社團ガ所有スル建物ガ空家トナリタルトキハ本社團ノ損失又ハ不便ヲ防ガシガ為メニ其敷地ト共ニ之ヲ他人ニ賃借スルコトヲ得然シテ其賃借料ハ第五條ニ表明セラレタル本社團ノ目的ノ為メニ使用スルモノトス

第三、其建物ハ必ズ月極又ハ年極メトシテ賃借スベシ然シテ如何ナル建物モ七ケ年以上繼續シテ賃借スルコトヲ得ザルモノトス

第四、本社團ニ於テ受領スル賃借料ハ壹ケ年金五千圓ヲ超過セザルモノトス

第六條、財産、本社團ノ財産ハ重ニアメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユナイテ

ッド、シノッドヨリ既往ニ於テ寄附シ又ハ将来ニ於テ寄附セントスル處ノ資金ヲ以テ購買シタル土地建物ヲ以テ成立スベシ

本社團ハ其他ノ寄附ヨリ土地建物又ハ其他ノ財産ノ寄附ヲ受クルコトヲ得

第五條ニ掲ゲタル本社團ノ目的ニ從テ維持シ又ハ使用シ難キ条件ニ附セラレタル寄附ハ一切受クルコト能ハザルモノトス

第七條、理事、本社團ハ社員中ヨリ理事四名ヲ互撰シテ理事會ヲ組織スベシ

第八條、期限、理事ノ任期ハ三年ト為ス然レトモ最初ニ撰挙セラレタル四名ノ理事ハ抽籤ニ依リ二名ト一名ト一名トノ三組ニ分チ本社團設立許可ノ日ヨリ起算シテ第一ノ組ハ在任一ケ年第二ノ組ハ二ケ年第三ノ組ハ三ケ年ト為スベシ

第九條、補缺、死亡若クハ辭職若クハ退社又ハ其他如何ナル理由ニ依リテモ理事中ニ欠員ヲ生シタルトキハ理事会ハ社員中ヨリ、議員ヲ撰挙シテ未滿ノ任期中在任トシリ可シ

第十條、理事会ハ本社團ノ事務ヲ處理スベシ

第十一條、本社團ノ決議ニ依リ理事會ハ

第一、本社團ノ為メニ寄附又ハ買収ニ依リテ財産ヲ得取スルコトヲ得

第二、第五條ニ掲ゲタル本社團ノ目的ヲ成就セシタメニ財産ヲ貸シ又ハ賣拂シ又ハ賣上金ヲ管理シ又ハ支出スルコトヲ得

第三、第五條ニ掲ゲタル本社團ノ目的ヲ成就セシタメニ之ヲ維持シ又ハ使用スル處ノ日本帝国ノ法律ニ依リテ認可セラシタル一個又ハ一個

以上ノ法人ニ財産ヲ讓渡スルコトヲ得

第四、財産ヲ賣拂ヒテ其賣上金ヲアメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッド、シノッド外国傳道局ニ寄附スルコトヲ得

第十二條、總會、理事會ハ少クモ毎年一回本社團總會ヲ招集ス可シ又本社員ニ名以上ノ請求アレバ臨時會ヲ開クベシ
凡テ開會ノ通知書ハ書面ヲ以テス可シ

第十三條、凡テ集會ノ時日及其目的ハ少クモ開會ヨリ五日前ニ通知スベシ然シトモ本社團員過半数ノ承諾アルトキハ豫テ通知セザル事件ヲ議決スルコトヲ得、豫テ通知セラシタル時所ニ於テ二名ノ出席者アルトキハ其定数と為ス欽席セル社員ハ通信又ハ代理ニヨリテ投票スルコトヲ得

第十四條、本社團ハ全社員四分ノ三ノ賛成ニ依リテ解散スルコトヲ得
斯ル場合ニ於テハ理事會ハ第五條ニ掲ゲタル目的ヲ成就セントメニ之ヲ維持シ又ハ使用スル處ノ日本帝國ノ法律ニ依リテ認可セラシタル一個又ハ一個以上ノ法人ニ財産ヲ讓渡スル事ヲ得又ハ其財産ヲ賣拂ヒテ賣上金ヲアメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッド、シノッド外国傳道局ニ返附スルコトヲ得

第十五條、事務所、本社團ノ事務所ヲ熊本市新屋敷町三百八十八番地ニ置ク

第十六條、修正、本社團定款ハ社員四分ノ三ノ賛成ヲ得テ民法第三十八條ニ依リテ主務官廳ノ許可ヲ得テ変更スルコトヲ得

追 記

本社團定款第五條ニ謳フ處ノ基督教トハ、アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッド、シノッド、ノ大綱領ニ適合セル基督教ノ形體ヲ云フ
本社團ノ目的ハ社團トシテハ基督教ヲ擴張スルニ非ズ唯其目的ニ供スル為ノ土地建物及ビ其他ノ財産ヲ所有シ且ツ管理スルニ在リ

アメリカ合衆國南部福音ルーテルユーナイテッドシノッド教會

第一、目的、アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッドシノッドノ目的ハ全世界ニ基督教ノ智識ト恩澤トヲ普及セシメント為メニ在リ

第二、組織、アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッドシノッドニ屬スル各個教會ハ自治ノ要素ヲ備フレドモ教會組織ノ基礎トシテハ代議政治主義ナリ

各個教會ハ牧師並ニ會員ヨリ撰出セラシタル数名ノ長老執事ヨリ成レル「カウンスル」(評議員會ト訳ス)之ヲ管理ス

一區城内ニ於ケル總テノ教會合同シテ「シノッド」(教會部會ト訳ス)ヲ組織ス部會々員ハ教區内各教役者并ニ各個教會ヨリ撰出セラレタル一人若クハ二人以上ノ信徒總代ナリトス

アメリカ合衆國南部諸州ニ於ケル總テノ部會合同シテ「ユナイテッドシノッド」(教會大會ト訳ス)ヲ組織ス大會々員ハ各部會ヨリ撰出セラレタル教役者總代并ニ信徒總代ナリトスアメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユナイテッドシノッドハ權能ハアメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ノ憲法ニ依テ規定セラル

第三、事務所

(一)本教會事務所ハアメリカ合衆國サウスカロライナ州チャールストン市マウントプロザントニ置ク

(二)本教會ニ通告セント欲スルモノハ同所アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユナイテッド、シノッド總理ニ宛テ通信ス可シ

アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユナイテッド、シノッド外

国傳道局

第一、目的、アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユナイテッド、シノッド外国傳道局ノ目的ハ未ダ基督教ノ一般ニ傳ハザル国民ノ中ニ基督教ノ智識ト恩澤トヲ普及セシムルニ在リ

第二、組織、本局ハアメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユナイテッド、シノッドニ因リテ任ゼラレタル八名ノ局員ヲ以テ組織ス此局員ハ本局ノ財産ヲ所有シ且ツ事務ヲ處理スルモノトス

第三、事務所、該傳道局ノ事務所ハアメリカ合衆國、ノオースカロリナ州シャーロット市ヴァレス、プレースニ在リ

在日本アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユナイテッド、シノッド宣教師

社團法人ニ讓渡サルベキ財産目録

第一、現在所有セル者

一、熊本縣熊本市新屋敷町三百八十八番地

宅地三百七十四坪 價格千五百円

家屋五十三坪 價格二千五百円

二、熊本縣熊本市水道町十八、十九番地

宅地百八十七坪 價格千百円

會堂三十八坪五合 價格二千六百円

牧師館二十二坪 價格千円

- 三、佐賀縣佐賀市中橋小路百七十五番地
宅地五百五十坪 價格千六百元
家屋六十坪 價格五百円
- 四、佐賀縣佐賀市花房小路
宅地二百五十坪 價格七百五十円
會堂三十二坪 價格千二百円
幼稚園三十五坪 價格二千円
- 五、佐賀縣佐賀市米屋町百八十一番地
宅地九十三坪 價格三百七十五円
家屋二十坪 價格五百円
- 六、福岡縣大牟田町
宅地百五坪 地代一年四十円(十ヶ年借用)
家屋三十二坪 價格九百円
- 第二、所有トナルベキモノ
學校建設ノタメ宅地ト家屋トニ五萬円使用スベキ見込

資料引用

日本福音ルーテ社団保管

資料 36 社団設立許可書

内務省熊申第五七号

熊本縣熊本市新屋敷町三百八十八番地

シー、エル、ブラウン

外 三名

明治四十二年三月五日附願在日本アメリカ合衆國南部福音ルーテル
教會ユナイテッド、シノッド宣教師社團法人設立ノ件

右民法第三十四條ニ依リ許可ス

但 定款第十三條中ニ總會ノ決議方法ヲ定メ届出ヘシ且ツ毎年
一月中前年ノ事業狀況ヲ報告スヘシ

明治四十二年六月廿一日

内務大臣法學博士男爵平田東助

資料引用

日本福音ルーテル社団保管

資料 37 福音路帖神学校開校・授業内容

福音路帖神學校

當校は愈九月廿五日より熊本に於て授業を開始せらるべし。其擔當科目及教授左の如し

舊約歴史	二時間	}	ウキンテル氏
舊約聖書釋義	二時間		
聖書地理	一時間		
新約聖書釋義	二時間	}	ブラウン氏
教理	三時間		
新約歴史	三時間	}	山内直丸氏
教會歴史	三時間		
倫理學	二時間		
説教學	一時間		秋元茂雄氏
英語	三時間		スタイルワルト氏
音楽	一時間		

資料引用

路帖新報 1909. 10. 1 6頁

資料 38 九州学院敷地購入

學校敷地を買収す

吾人の久しく祈り求めし學校建築用地約壹万坪貳萬五千圓にて買収済となれり

場所は熊本市外大江村新屋敷町を離る僅かに百間許にて土地高燥、風景佳良、後來熊本發展の中樞を以て目せらるゝ所にて、學校用地としては最も適當の地なり

聞く所によれば、之より直に建設工業に着手し明年四月より中學部を開設せらるべしと云

吾人は聖主の此好良の場所を與へ給ひしことを誠實に感謝し併せて其事業のいよいよ成功せんことを切に願ふ所なり

資料引用

路帖新報 1909.12.1 1頁

SKETCH OF THE LIFE OF PROF. S. TOYAMA.

A. M.

THE NATIVE TEACER IN OUR JAPAN SCHOOL.

Toyama Saburo was born in Yatsushiro in 1866. He began the study of English under the famous Captain James, at Kumamoto, at the age of nine years, thus being a member of the famous James Band which has furnished several of the leaders in the Japanese Church of toady. In 1876 he entered Doshisha University, where he studied in the lower department for two years. Here he came in close contact with Christianity, and while not outwardly becoming a Christian, he felt that he was practically such. In 1884 he entered Chinzei Gakko in Nagasaki, from which he graduated four years later. During this course he was engaged in teaching a part of his own class, and at the same time pursuing a partial theological course, in connection with his own regular studies. In this way of teaching and doing translation work, he was able to work his way through school. A number of books which are now in standard use in the Japanese language are results of his translations.

It was during this course, one year after entering Chinzei Gakko, at the age of nineteen, that he received Christian baptism, after which he so influenced his father's family that parents, brothers and sisters, without exception, followed his example in coming to Christ. After he completed this four years course of study, he gave four more years as teacher in the same institution.

In 1899 he came to America and entered an Ohio university, from which he graduated in 1895, taking his Master's degree in 1896. During the summer vacation of the year of the Columbian Exposition at Chicago, he served as newspaper reporter of this exposition to a certain Japanese paper of high standing, thus helping to provide finance for his university course.

He was then married to a lady who had also been studying in America for two full years. After traveling one year as a lecturer, he returned to Japan at the call of Chinzei Gakko to become its head, which position he held for two years. During the last one of these two years, he also gave some time to teaching in Kwassui Jo Gakko in Nagasaki.

For reasons which justified him in doing so, he resigned as head of Chinzei Gakko, to the great regret of that school, and accepted a call to the English

department of the Fifth Higher School at Kumamoto in 1899, which position he occupied until the end of June of this year. After one year's teaching he was made head of this department. That he has given entire satisfaction as head of this department, is shown by the fact that the principal of this school of one thousand students resolutely refused, for a long time, to consider his resignation, which went into effect June 30th, of this year, on occasion of his coming to us, as the Japanese head of our own Kyushu Gakuin.

Professor Toyama's family consists of a wife—an excellent woman—and two children, the youngest of which was born in January of this year.

He was born in the same village, only six months apart, was classmate in Yatsushiro school, Doshisha University, and in Kumamoto school with Mr. Uchida, the present Japanese ambassador at Washington, who is one of Mr. Toyama's intimate friends.

In Mr. Toyama we believe we have a man possessing a solid character, high intellectual ability, careful and conservative ideas, a moral and Christian life which might be held up as a model before his own people, together with whose experience abroad and whose experience in educational work admirably fit him to fill the position to which we have called him.

Being a Japanese by nature, partly assuming, and thoroughly understanding American ideas and life, we believe that no more fit person could be found to occupy this difficult and delicate position where East and West meet,

when the latter undertakes the education of the former youths.

We hereby introduce and commend to the home Church our fellow worker, Prof. S. Toyama, A. M.



資料引用

Lutheran Church Visitor. 1910.8.11

資料 40 「日本福音ルーテル社団」定款

OUR MISSION IN JAPAN INCORPORATED.

Our Mission in Japan, in order to hold property and transact business as a body politic, made application to the Japanese government to be constituted a juridical personage.

In pursuance of the requirements of the laws of Japan, our four missionaries, Rev. Messrs. C. L. Brown, C. K. Lippard, A. J. Stirewalt and L. S. G. Miller, were constituted an “association”, and as such were granted articles of incorporation.

This document is here presented in full for the information of the Church, and is interesting as illustrating the methods which Christian Missions must adopt to secure corporate right in the Empire of Japan.

ARTICLES OF INCORPORATION.

ARTICLE 1.

This Association shall be styled the Association of Missionaries in Japan of the United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, United States America.

ARTICLE 2.

All male missionaries of the United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, United States America, permanently residing in Japan, shall be eligible to membership in the Association .

ARTICLE 3.

Any member of the Association ceasing to be a member of the United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, United States America, permanently residing in Japan, shall thereby cease to be a member of the Association .

ARTICLE 4.

The Association shall have no legal connection with any organization or association in a foreign country, or with any organization or association in Japan that is ecclesiastical, or whose object it is to make profit by the conduct of its business.

ARTICLE 5.

1. The object of the Association shall be to own or rent (i. e. from others) and manage land, buildings and other property for the extension of Christianity, and carrying on of Christian education, and the performance of works of charity and benevolence.

2. In order to secure the Association from loss or inconvenience, when a building owned by the Association becomes vacant, it may be rented with the land on which it stands to another party; and the rent so received may be expended for the object of the Association as set forth in Article 5.

3. Buildings shall be rented from month to month or from year to year; and no building shall be rented continuously for more than seven years.

4. The amount of rents received by the Association during any one year shall not exceed yen 5,000.00.

ARTICLE 6.

1. The property of the Association will consist for the most part, of land and buildings purchased by funds contributed, either in the past or the future, by the United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, United States America.

2. The Association may receive gifts of land, buildings and other property from other donors also.

3. No gift shall be received that is accompanied with conditions whereby it cannot be held or used in accordance with the object of the Association as set forth in Article 5.

ARTICLE 7.

The Association shall elect from its own members four directors who shall constitute the Board of Directors.

ARTICLE 8.

The term of office of a Director shall be three years. But the four Directors first elected shall be divided by lot into three classes of two, one, and one respectively.

The first class shall hold office for one year; the second two years; the third for three years from the date of the incorporation of the Association.

ARTICLE 9.

When through death, resignation, ceasing to be a member for the Association, or for any other reason, a vacancy shall occur in the Board of Directors, the Board of Directors shall fill such vacancy by the election of a member of the Association to fill the office for the remainder of the unexpired term.

ARTICLE 10.

The Board of Directors shall transact the business of the Association.

ARTICLE 11 .

By a vote of the Association the Board of Directors may:

1. Acquire property for the Association by gift or purchase.
2. Rent or sell property and invest or expend the rent or the proceeds of the sale for the furtherance of the object of the Association as set forth in Article 5.
3. Transfer property to one or more juridical persons recognized by the laws of Japan, who shall hold for use the same for the furtherance of the object of the Association as set forth in Article 5.
4. Sell property and return the proceeds of the sale thereof to the Board of Foreign Missions of the United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, United States America.

ARTICLE 12.

The Board of Directors shall call a stated meeting of the Association at least once during every year. It shall also call special meetings at the request of two or more members of the Association. Notice of all meetings shall be in writing.

ARTICLE 13.

Notice of any meeting and its object shall be given at least five days before the time of meeting; but, with the consent of a majority of the members of the Association, matters may be decided regarding which previous notice has not been given. Two members present at the time and place appointed shall constitute a quorum. Absent members may vote by letter or by proxy.

ARTICLE 14.

The Association may be dissolved by a vote of three-fourths of the members. In that case the property may be transferred by the Directors to one or more juridical persons recognized by the laws of Japan, who shall hold or use the same for the furtherance of the object of the Association as set forth in Article 5; or, the property may be sold and the proceeds of the sale returned, to the Board of Foreign Missions of the United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, United States of America.

ARTICLE 15.

The office of the Association shall be located at Furu-Shinyashiki, Kumamoto. Kyushu.

ARTICLE 16.

These Articles of Association, subject to the sanction of the proper authorities as required in Article 38 of the Civil Code, may be changed by a vote of three-fourths of the members of the Association.

OUR PRESENT WORKING FORCE IN JAPAN.

The following presents our staff of regular workers in the mission field:

NAMES OF OUR MISSIONARIES.

Rev. C. L. Brown, D. D., Kumamoto.

Mrs. C. L. Brown, Kumamoto.

Rev. C. K. Lippard, D. D., Saga

Mrs. C. K. Lippard, Saga

Rev. A. J. Stirewalt, Kumamoto.

Rev. L. S. G. Miller, Fukuoka.

Mrs. L. S. G. Miller, Fukuoka.

資料引用

Minutes of the Twelfth Convention of United Synod of
the Evangelical Lutheran Church in the South, 1910.9.6-11, 65-68

資料 41 三ボードの日本伝道協同計画（ローノーク会議）

PLAN FOR A WORKING COOPERATION IN
EVANGELISTIC
WORK OF THE THREE AMERICAN LUTHERAN BOARDS
DOING WORK IN JAPAN.

Believing that it is to the interest of God's kingdom, and to the welfare of the establishment of the Lutheran Church in Japan, we, the representatives of the undersigned Boards agree to recommend to our respective Boards the following plans of cooperation of the missions in Japan under our respective control, leaving the details of said plan to be worked out and executed by the Japan Conference, which will be called into being as a consequence thereof:

1. (a). That there be granted a Common Conference, of which all missionaries belonging to the Japan mission of the Evangelical Lutheran Church in the South, of the United Danish Evangelical Lutheran Church in America, and of the General Council of the Evangelical Lutheran Church in North America, shall be members, to whom shall belong equal votes and privileges.

(b). That said Conference be convened annually, and whenever deemed advisable by the proper officers, in view of necessary business, and that it elect its own officers, make rules for the conduct of its meetings, and immediately after each meeting report through its officers to each one of the home Boards. The report shall be in duplicate, written by the secretary and countersigned by the president.

2. That said Conference be given power to formulate rules for the prosecution of the evangelistic work, subject to the approval of the Boards.

3. That said Conference be given power to locate, or change the location of its pastors, evangelists, or workers, as it may deem to be to the general interests of the Evangelical Lutheran Church in Japan; only, that no pastor, evangelist, or worker, shall be located, or have his location changed, without the majority vote of the members of the Joint Conference, including the unanimous vote of the members of the mission under which the person in question is at that time working.

4. That said Conference be given power to locate, or to change the

location of its missionaries, subject to the unanimous vote of the mission involved, together with the approval of the Home Board under which the person in question works.

5. That said Conference be given power to elect a common mission treasure, who shall receive and disburse all moneys sent by the three boards involved, keeping a separate account for each board, and using the funds of each board in behalf of its own respective work, subject to an order of a duly appointed agent of each mission, and reporting to each board in monthly report, in such form as each respective board may require.

6. The plans herein contained are to become operative as soon as the respective boards shall have agreed thereto, and so notified their missionaries in Japan, to whom the carrying out of these plans shall be entrusted.

GEORGE DRACH

Representative of General Council's Board

A. S. NIELSEN, Per A. J. S.

Representative of United Danish Church Board

ROBERT C. HOLLAND

Representative of United Synod in the South

JNO. A. CLINE

J. E. COOPER

ARTHUR J. STIREWALT, Secretary.

This paper, as presented, met with the approval of the conference of the representatives of the three Boards held at Roanoke August 7, 1910, and has been referred to the several Boards for further consideration.

The United Synod Board of Foreign Missions would ask this body to authorize it to continue negotiations upon the basis of the plan here presented and to prosecute the same to a final issue. Also the same authority is sought in regard to cooperation in educational work.

資料引用

Minutes of the Twelfth Convention of United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, 1910.9.6-11.

九州學院神學部

當部も漸く一年を經過した。未だ完全ではないが段々と形を成して來た。一年間に變つたことの重なることを云ふと、先づ教會史や基督傳を講じて居られた山内直丸氏が博多に行かれることとなつてから同氏の講義はウキンテル氏や秋元氏が代はつてせらるる事になつたのとウキンテル氏が神學部に専心力を盡さるるが為に、多年の任地なりし久留米を去つて當地に來らるる事になつた事、又五高の教授なりし遠山參良氏が今度主として九州學院の普通科を經營せらるる事になつたので其余暇に本部に於て講義を開かるる事になつた事もう一つは本部の校舍は従來スタイルワルト氏方にあつたのであるが、ウキンテル氏が來られたために移轉することになり當市傘四番丁に家を見付けて寄宿舍を移したことである。教場は今探して居るがなければあるまでは教會を使用することになるだろう。學生は本科の方は二年級のみであつて、従來の三人。豫科は今まで二人であつたが、今度新たに本田傳喜君が參られた。同君は元陸軍の學校に居られたが都合ありて退き今年感ずる所ありて入學せられたのである。

今左に學課目並に講師諸氏の名を列挙するが、一週間の時間數は此稿を書くまでは定まつて居らない。本科の學課配當を見ると、聖書の教義が非常に多い様であるが、本部は聖書中心主義を以て特色として居るからである。

本 科

禮拜研究 (リテルジチツクス) 教理問答、	
教義神學、羅馬書講解	ブラウン博士
教會史、舊約史、イザヤ書講解、聖書、總論	ウキンテル氏
説教學、ヨハネ書講解、ポーロ傳	秋元 茂雄氏
辯證論、基督教倫理	遠山 參良氏
音樂 (豫科と共に)	高橋長七郎氏

外にブラウン博士のバイブル、バイオグラクヒー、及ブルース著、アポロジチツクスの講讀、ウキンテル氏のルターの著書の講讀等あり。

豫 科

心理、論理、	奥 太一郎氏
英語、歴史、	村上 二郎氏
聖書、地理、	ウキンテル氏
英語、	ブラウン博士

外に聖書、漢文、數學等あれども講師未定。

資料引用

路帖新報 1910. 10. 1 4 頁

解説・解題

第3章 自立への第一歩（1911年～1920年）

第1節 九州学院の開設

第2節 宣教二〇周年事業と伝道戦線の拡大

第3節 憲法規則制定と教会組織化の始動

資料43 機関紙「るうてる」第一号創刊の辞（るうてる 1911.5.15 1頁）

58号まで発行された「路帖新報」を廃刊し、1911年5月より「るうてる」として改題し、発刊した。主筆は高橋邑重、発行人は米村常吉が担うこととなった。

資料44 明治天皇崩御「哀悼の辞」（るうてる 1912.8.15 1頁）

近代日本の形成と大日本帝国の成立にカリスマ的な存在として君臨した明治天皇の死は、一大秩序の終焉であり、かつ新しい時代の幕開けでもあった。明治天皇の死去に際して、8月号『るうてる』は「特別廣告」を掲載した。

資料45 「明治天皇陛下御大葬敬弔式」（るうてる 1912.10.15 5頁～6頁）

1912年9月13日、明治天皇の大葬の開始を報じる号砲が東京の空に鳴り響いた日の夕、佐賀で日本基督教会と合同でルーテル教会は「明治天皇陛下御大葬敬弔式」を行っている。その模様を10月号『るうてる』は報じている。

資料46 婦人宣教師派遣報告（USS. 13th. 1912.11.12-19）

婦人宣教師の日本伝道への派遣は日本のミッション会議（宣教師会）の要望に応じて、ボードが決定し、アトランタで開かれた婦人海外宣教会議の協議を経て、最終的な決断を行った。

資料47 博多南博幼稚園設立告示（るうてる 1913.3.15 6頁）

資料48 博多南博幼稚園開園式（るうてる 1913.5.15 6頁）

南博幼稚園が設立されたのは、博多伝道が開始されてから11年を経た1913（大正2）年4月である。これは幼稚園開園の公告である。当初の園舎の土地と建物は借地・借家であった。開園当初の園長は山内量平、保母は山内幹枝、石井タキが担当した。

資料 49 宣教 20 年記念（るうてる 1913.6.15 5 頁）

1913(大正 2) 年はシェーラーとピーリーが佐賀に伝道を開始して満 20 年にあたる。4 月 29 日から 30 日の 2 日間、各教会からの出席者 30 数名を得て、佐賀で宣教 20 年記念会が開催された。その模様を 1913(大正 2) 年 6 月号『るうてる』が伝えている

資料 50 1913 年教勢統計（るうてる 1913.7.15 6 頁）

1903(大正 2)年は、宣教が開始されて満 20 年を迎えた年であった。大正の新たな時代を迎え、社会変化と共に、教会内部の充実も叫ばれるときであった。この教勢統計報告は、ある個人による 1913(大正 2)年 4 月末の調査により、機関紙『るうてる』に記載された。

資料 51 ブラウン議長報告「日本伝道」(JCLM.1913.11.4)

1913 (大正 2) 年 11 月 4 日に熊本で開催された「在日宣教師共同会議」の第 4 回総会でのブラウンの「議長報告」である。最初の婦人宣教師となったエカード、バウスの来日への期待と憧憬が率直に表現されている。

資料 52 九州学院文部省認定 (1913.12.16)

九州学院の第 3 回入学生を迎えた年、1913(大正 2)年 12 月 16 日、文部省より正式の中学校とする「認定」が下りた。これは申請して 3 年目である。その「認定」は「徴兵令十三条第一項第二号の規定に依る中学校の学科程度と同等以上の学校と認定せられる」という内容であった。

資料 53 創立 20 年記念史紹介（るうてる 1914.5.15 付録 3 頁）

1912(大正元) 年 11 月 4 日より 3 日間、久留米教会で開催され第 17 回の教役者会において、宣教 20 年記念会の実施の件が決議された折、和佐、山内量平、米村、リッパードの 4 名が実行委員に選出された。記念事業の骨子は記念会の開催と附属事業として教会史を編纂することにあつた。時代は明治から大正へと巡回する時勢において、ルーテル教会の将来の方向を確定して行くためにも、過去の教会の歴史を振り返り、後世の教会の遺産とする教会史の編纂は重要な作業となった。

資料 54 『創立 20 年記念史・序』(1914.4.15. 創立 20 年記念史 1 頁)

執筆編纂の主な任にあたった田中は『創設二十年記念史』を作成するために沈着で勤勉な作業を続け、翌年の 1913(大正 2) 年 4 月に脱稿した。だが、改稿と校正で手間取り、1 年後の 1914(大正 3)年 4 月ようやく出版の完成を見た。記述の特徴は、初期の伝道から通じての功労者と言うべき初代宣教師のシェーラー、ピーリー、牧師・山内量平と家族を記し、第 2 期の宣教師ではブラウン、ウインテル、リップード、スタイワルト、スミスなどの宣教師を載せ、日本人教職では山内直丸、和佐、米村などに触れている。

資料 55 九州学院略史(1914.4.15. 創立 20 年記念史 99 頁)

ブラウンは『創設二十年記念史』の中で「九州学院略史」を自ら執筆し、そこで彼の従来の主張である九州学院創設の目的を三点から述べ、九州学院の設立の目的は牧師養成と社会で活躍する有能な信徒の育成にあること明言している。

資料 56 博多南博幼稚園概略(るうてる 1914.6.15 4 頁)

1909(明治 45) 年 10 月にミラーが博多に赴任した時、山内幹枝は教会附属幼稚園の設立の必要性をミラーに説いている。その熱意に動かされたミラーは、在日宣教師会共同会議に幼稚園事業を諮り、そこを通してボードに申請をするなどして設立のために努力を払った。その結果、念願の教会附属の南博幼稚園が実現したことに博多南博幼稚園概略は触れている。

資料 57 1914 年度日本伝道統計(JCLM. 1914.6.26)

1914 年 6 月に開催された在日共同宣教師会(Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan)の総会の議事録に記載された日本福音ルーテル教会の 1914 年度の、各個教会(東京、下関、博多、金崎、佐賀・小城、久留米、日田、大牟田、熊本)の会員総数、現住会員数、陪餐会員数、一年間の増加人数、献金額が載っている。

資料 58 婦人宣教師エカードとバワス派遣(USS. 14th. 1914.11.10-13)

エカードとバワスの二人は 1913 年 11 月 13 日にジョージア州サバナの『Ascension』ルーテル教会で派遣式を受けて、日本伝道に婦人宣教師として任命された。約 1 ヶ月半、出発の準備をして、翌年の 1914 年 1 月 8 日、サンフランシスコより横浜港に向けて旅立ったことが記されていると共に、彼女たちの

派遣を具体的に可能ならしめた背後には、教会の伝道に献身的に奉仕する純真で家庭的な女性たちによる各個教会の婦人会、その群れのシノッドの婦人海外宣教協会、それらの連合体である海外海宣教会議による組織的で計画的な支援、それに人材派遣に主体的責任所在を明確に受けとめるボードによる確かな準備と整いが事前にあったことが明記されている。

資料 59 小城幼稚園園舎建築 (USS. 14th. 1914.11.10-13)

1910(明治 43)年 1 月から佐賀より小城に出張伝道が再開される。12 月には民家を借りて小城幼稚園が開設した。佐賀幼稚園と同様に園長はリッパードであったが、保母には佐賀幼稚園から転任してきた野中みさと平田はや子の両名が奉仕した。

資料 60 E.T.ホールン博士への山内直丸の弔詞 (るうてる 1915.5.15 3 頁)

1915 年 3 月 4 日、ゼネラル・カウンスル海外伝道局長 E.T.ホールン (Rev.Edward.T.Horn,D.D.)が死去に際して、機関紙「るうてる」5 月号に山内直丸の言葉で彼の死去に対する弔辞が載った。

資料 61 九州学院文部省指定認可 (1915.11.29)

1915 年 11 月 29 日、「指定」の認可通知が九州学院に伝えられた。この認可により、九州学院中学校を卒業した者は、日本全国にある高等レベルの学校である、高等学校、専門学校、海軍兵学校、陸軍士官学校に受験できるようになった。「指定」は、卒業生に高等レベルの官立学校への進学之道、つまり高等学校の入試試験の道を開くために大事な特権である。高等学校への入試は、当時の学生にとって最も厳しいものであった。というのは、高等学校への入学により、帝国大学に進学できるか否かの自らの将来のすべてが決まってしまうからである。つまり、その試験に合格し、高等学校の教育課程を修得できれば、ほぼ自動的に大学入学資格を取得できた。

資料 62 九州学院神学部専門学校認可 (1916.4.23.『日本国政事典』第六巻図書センター)

スタイワルト宣教師宅で産声をあげ、その後、熊本市内東子飼町に仮校舎を設けて神学教育の充実と継続を図ってきた神学校は九州学院中学部の開校から 2 ヶ月後の 6 月に九州学院内に移転し、九州学院神学部と呼ばれるようになった。なお、九州学院神学部が文部省より専門学校令により正式「認可」を受け

るのは、1916(大正5)年4月23日、九州学院開校から5年後のことであった。

資料 63 九州学院財団法人認可・定款 (1916.5.5)

資料 67 九州学院財団法人認可・定款(英文) (USS. 15th. 1917.11.9-13)

財団法人の申請手続きをしたのは、ブラウンが帰国する二ヶ月前の1916年1月10日であり、認可が下りたのは5月5日付で、九州学院財団法人の認可が熊本県内務部長よりブラウン宛に通達された。

資料 64 第1回年会、1916.9.26 (『日本福音ルーテル教会史』p157)

19回続いた教役者会の名称を取り止め、「年会」と名づけ、最初の年会が1916年9月26日開かれた。その後、1919(大正8)年の第4回年会で承認した憲法規則及び宣教師会との協同基礎章項に従い、年会と宣教師会の二院制からなる総会が1920(大正9)年4月に開かれる。

資料 65 博多教会献堂式 (LCV. 1916.11.23)

L.S.G.ミラーは、1908(明治41)年に福岡に着任し、約12年間、南博幼稚園の創設と教会堂実現等により博多教会の、明治末期から大正中期にかけての伝道の充実と躍進に山内量平と共に積極的な努力を払った。ことに博多教会の会堂建築には心血を注いだ。1916年9月28日に献堂式を迎えた会堂はイギリス風の赤レンガによる73.5坪の会堂が9,400円余を費やした。

資料 66 特別公告「久留米教会会堂建築」(るうてる 1917.2.15 4頁)

米国より25歳で来日したクリスチャン建築家 W.M. ヴォーリス(William Merrell Vories)の設計により、博多教会会堂に続いて久留米教会会堂が実現した。

資料 68 教会資産一覧 (USS. 16th. 1918.11.10-13)

南部一致シノッドの第16回総会に報告された、日本の教会建物、宣教師館、土地、並びに九州学院の土地、建物、設備の総資産を示した一覧表である。

資料 69 神学校再編成調査委員会報告 (JCLM. 1918.8.20-26)

1917年12月4日、第7回在日宣教師会共同会議が名古屋教会で招集され、神学校機構の改革について協議し、E.T.ホールン、A.J.スタイワルト、それにJ.P.ネルセンの「三人委員会」を設置した。「三人委員会」は在日宣教師共同会議の決定に従い、一年間かけて、中学校と併設されている神学校である、関西学院、青山学院、同志社、明治学院、東北学院の5つの学院長との間で文書による聞き取り調査を行い、その各院長からの回答内容の大筋を翌年、1918年8月20日より軽井沢にて開かれた第8回在日宣教師共同会議に報告した。三人委員会の提案は、神学校を九州学院から分離させていくことを目指すという点に力点が置かれていた。

資料70 神学校移転問題 (JCLM. 1918.8.20-26)

三人委員会による三つの提案を受けた在日宣教師共同会議は、それを逐一審議し、神学校は九州学院の一部として存続するが、設置場所は福岡とすることで、この時点での宣教師会での一応の方向性を確認した。

資料71 久留米教会会堂献金依頼 (るうてる 1918.10.15 8頁)

久留米教会は教会組織発足から20年を経て、長年の祈願ある会堂建築の実現を1918年10月26日に迎えるにあたって、建築予算の不足額2,500円の寄付を一般有志に募った。

資料72 1918年度日本伝道統計 (るうてる 1918.11.22 7頁)

この教勢統計報告は1918(大正7)年6月末の調査により、機関紙『るうてる』に記載された。教会数15、教師数日本人19名、宣教師14名、会員総数923名、現住陪餐会員数472名、一年間の受洗者数112名と記せられている。

資料73 予定協約案全文 (るうてる 1918.11.22 7頁)

1918年10月22日から佐賀教会で開催された第22回年会で協議された予定協約案全文が機関紙「るうてる」(1918.11.22)が載った。この協約案により、年会を廃止し、宣教師と日本人教職による連合教職会が設けられることとなった。

資料74 日本福音ルーテル教会憲法原案 (第1回総会 1920)

1920年の第1回総会で可決された「協同基礎章項」の締結と「日本福音ルーテル教会憲法」の制定は、宣教開始から4半世紀を経た日本福音ルーテル教会が宣教の業を日本において残していくための、教会の信条、組織、信仰的価値の基本原理を見定めるためにも、またボードと宣教師から指導された時代から協同する時代への端緒を開く出来事となった。

資料 75 協同基礎章項（第1回総会 1920年）

1919年3月25日より博多教会にて四日間、開催された臨時年会において、日本福音ルーテル教会と北米一致ルーテル教会(ULCA)に所属する在日宣教師会との「協約」となる「協同基礎章項」の逐条審議を行い、修正の上、それを決議した。これに伴い、年会と宣教師会の二院制からなる総会が1920(大正9)年4月に開かれた。

資料 76 女学校設立調査と場所検討委員会報告 (JCLM. 1920.4.6-13)

1920年4月に開催された第1回総会の宣教師会での「創設調査と場所検討委員会報告」で、設立場所を「久留米」とする案が3月25日のボード会議で協議され、「久留米」案は一応の承認を受けていた。

資料 77 第1回総会記録（るうてる付録 1920.5.25 1頁）

最初の教会憲法に則り、第1回総会が、1920年4月6日より熊本で開かれた。総会の2日目には憲法第2章「信仰」条項をもって宣誓式が行われた。なお、この総会で新憲法に沿って、年会議長として選出されたのは久留米教会の牧師・米村常吉であった。

資料 43 機関紙「るうてる」第1号創刊の辞

創刊の辞

人間が此世に生れ出づると學ばねばならぬものばかりで、凡百の事物を研究學習せねばならぬけれども、限ある力、限ある壽命を以て此等凡百の事物を研究學習することはできぬから、止むを得ず性質に近き一二科を専門に考究することとし、他を他の人の専攻に委し、勢分業することとなるが、茲に各人が是非其自ら究めねばならぬ即ち他に委せられぬ一科がある。之れは何であるかと云ふと「人間とは何ぞや」と云ふことを研究することである。之れは人間に取ては當の問題であつて他所事でないから、どうでもかうでも研究せずにはおかれぬのである。かゝる研究は我邦に於ては小中大の學校で正科としては課してないから、此問題の研究と人間の本分を全ふするための理性と情性の涵養とは、之を他に待たねばならぬさらば之を何れに究むべきかと申すと、天啓の教を有する眞の宗教こそ其適役であると申さればならぬ。

「人間とは何ぞや」とは六ヶしく云へば人觀と云ふことである。人觀を究むれば、人間を創造した者の誰れであると云ふこと即神觀の問題が出で來り、來世問題が続いて出で來るのであるが、此等の研究を穩健に説明し人を至安の途に立しむるものを基督の活教と云つて差支ないのである。基督の教が人を活地に導き出す力があるから之を福音と稱するのである。講壇からは数多の傳道者が基督の福音を宣べ傳へて居るのであるけれども、まだ筆を以て同じ福音を幡布する餘地は充分あるのである。今般教法改革者マルチンルーテルの名を取つて題號と爲し、初號を刊行するに當り、發刊の趣旨を略述して讀者諸君に見へたのであります。今後號を重ね毎月一回つゝ見へるつもりであるから、信徒諸氏の深厚なる後援と讀者諸君の御愛讀を願ふのであります。

資料引用

「るうてる」 1911. 5. 15 1頁

資料 44 明治天皇崩御「哀悼の辞」

哀悼の辞

陛下 には去る十九日俄然御発病にて、爾来畏くも 皇后陛下を御始めといたし、侍醫諸國手其他の方々の御手厚き御看病に因り、一時は御喜ばしき御容態に見へさせ給ひしが、三十日午前一時頃、俄に御病革らせられ、遂に御崩御遊ばされたり。我等誠に憂愁に堪えず。謹みて哀悼の意を表し奉る。

資料引用

「るうてる」 1912. 8. 15 1頁

資料 45 明治天皇陛下御大葬敬弔式

佐賀福音路帖教會

●明治天皇陛下御大葬敬弔式

當市に在る日基、路帖の兩教會聯合し九月十三日午後八時より花房小路の會堂に於て奏樂リッパード夫人。讚美科九一番會衆一同。聖書奉讀。祈禱。開式の辞。和佐恒也讚美歌二一四番會衆一同。明治天皇の御畧傳古瀬敏道。敬弔の辞岡林寅五郎。敬悼説教高田銀造。哀悼の歌會衆一同。祈禱リッパード博士。主禱會衆一同。奉悼『明治天皇陛下御葬儀』今霄龍體辞玉池哀誅牛牽靈車遲炊煙不是家千萬奉悼悲風宇内吹。和佐恒也謹韻以上會場の裝飾は最も欽恪に綠葉に支那水仙を用て質素なる花環に黒色のリボンを結びたるを聖壇の正面に掲げ百燭の電燈に映じ莊嚴に敬神尊重の教旨を奉て誠意を表しぬ。

久留米福音路帖教會

●敬弔式

九月十五日午後八時より市内各教派連合の敬弔式は當教會に於て執行せられたり米村路帖教會牧師司會中で會衆一同讚美歌第四十五番を唱ひ次て中野聖公會牧師詩篇を朗讀せらる開會の祈禱を伊地知美以教會牧師捧けられ會衆一同左の御製を讚美歌第百十六番の譜にて齋唱すれば蓮見浸禮教會牧師は哥前五章を朗讀せらる次て瀬川日基教會牧師は立ちて明治宗教史の回顧及び先帝の御盛徳を頌したる一場の説教を試みられ一同讚美歌三百三十一番を歌ひ米村牧師の祝禱をもて閉會せり會する者七十一人となりき

(一) 葦原の瑠穂の國の萬代も乱れぬ道は神ぞ開まし

(二) 目に見へぬ神に心の通ふこそ人のこゝのまことなりけれ

(三) わがこゝろは及はぬ國の果までも夜晝神は守りますらん

資料引用

「るうてる」 1912. 10. 15 5頁、6頁

THE SENDING OUT WOMEN MISSIONARIES.

Information has reached us of action taken by the United Synod Mission Conference in Japan, to the effect that the time is near at hand when two women missionaries could be used advantageously in connection with the work there.

The Board has taken action as follows:

Inasmuch as the expense of the extra work must be secured over and above present sources of income—and we are so warned by the brethren in Japan—it was resolved to submit to the Woman's Missionary Conference called for November 12, at Atlanta, the following proposition:

Resolved, That the Board stands ready to commission as missionaries to Japan two young ladies, having the qualifications specified in the action of the Japan Conference, should the Woman's Missionary Societies provide for their support in a way which will not subtract from the financial aid they are now giving the general cause in Japan; and that if the said Woman's Missionary Conference take favorable action upon this proposition, then the Board asks said Conference to appoint a commission of two or three ladies with whom the Board may hold consulting relation in regard to the selection of said missionaries and the conducting of woman's work in connection with our missionary work in Japan.

資料引用

Minutes of the Thirteenth Convention of United Synod
of the Evangelical Lutheran Church in the South,
1912.11.12-19, 72-73

資料 47 博多南博幼稚園設立告示

教會報欄

博多福音教會

●幼稚園設立

今般ミッション幼稚園を博多大乗寺前町八番地に設けらる四月一日より開園の豫定、希くば神の導きにより主の名の榮へん事を祈る。

資料引用

「るうてる」 1913. 3. 15 6頁

教會報欄

博多教會

○幼稚園開園式

兼て報じたるが如くミッション設立の幼稚園開園式を四月七日執行し山内老牧師開設の辭を述べられ、式を終りし後園児を初め保母等一同紀念の爲め撮影したり、保婦には當教會の山内夫人川瀬夫人石井姉等熱心に働かれ居れり、目下入園兒貳拾四名あり尚引續き申込者ある模様なり、名稱は南博幼稚園と命名せられたり

資料引用

「るうてる」 1913. 5. 15 6頁

資料 49 宣教二十年記念

宣教二十年記念會概況

路帖教會宣教二十年記念會は去る四月二十九三十の兩日傳道開始地なる佐賀に於て催されたり、二十九日午後三時同市花房町の私立幼稚園に於て歓迎會を開き和佐氏司會し開會の辭ありて後準備委員を代表して山内氏の挨拶あり、二十年前傳道開始の當時の困難なる状態の回顧談あり今昔の感に堪へざらしめたり、閉會後茶菓の饗應あり歡語を交へて午後六時頃散會す。

同夜花房小路教會堂に於て演説會あり九州學院長遠山參良氏「基督教の活機」と題して一時間許の熱切なる演説あり、次でウィンテル氏「耻ずる所なき宗教」と題して演説あり、聴衆百三十餘にして堂内餘席なく堂外三四十名許熱心に聴聞せり。

翌三十日は雨天なりしが午前九時より會堂に於て祈禱會あり十時より禮拜あり山内牧師説教す、後瀧本牧師司式の下に聖餐式あり陪する者男女共四十九名ありたり。式後一同米屋町宣教處に於て晝飯を共にす、席上傳道開始當時の宣教師たるシェラー、ピーリー兩に對し感謝状を送らんとの議ありて可決して準備委員に委任す。又三浦神學生に對し慰問状を送らんとの提議あり是可決せらる、記念のため撮影す。

同夜會堂に於て演説會あり折柄雨勢強かりしたため來會者前夜の如くならざりしも尚七十名を得たり、九州學院教頭藤井氏は「理想と現實」と題しブラウン氏は「神の能たる十字架」と題して演説せられたり。

因に日ふ各地方よりの來會者三十餘名ありたり。

福音ルーテル教會外國傳道局長より二十年記念會に寄せられたる書簡

拝啓目下ウインストンセーム市に開催中の南部福音ルーテル教會大會外國傳道局は諸氏の提出に係る諸種なる重要問題の討議中茲に日本宣教二十年記念會に祝詞を呈し將來御事業の上に益々神恩の豊ならんことを祈り上候。

諸氏が多年我等の等しく愛する事業の爲めに御儘瘁下されしことは感謝の外なく此の傳道行程の第二里標に恙なく達することを赦されし聖恩を深謝する次第に候。

我等は諸氏に深厚の同情と厚意とを送り諸氏の犠牲と労苦との美はしき果を見て諸氏と共に喜申上候素より身親しく其の辛酸を嘗められし諸氏ならでは到底其の眞味を翫賞することは困難と存候何卒今後益々良果を収められんことを切望致候。

最後に主常に諸氏と共にあらんことを祈上候 草々。

キリストに在る兄弟外國傳道局長
ロバート、シー、ホーランド

一九一三年三月二十六日
在日本ルーテル教會宣教師及會員御中

資料引用

「るうてる」 1913. 6. 15 5 頁

教會報欄

ルーテル教會教勢統計

(本統計は一個人の調査に成るものなるも、一々各教會講義所に照會して、其の責任ある報告により編成せるものなれば大體に於て誤謬なきを信ず。尚ほ本表は大正二年四月末の調査にかゝる。松本生)

- ◎ 信徒總数 (現在正會員) 五百五十七名
- ◎ 教役者数 二十二名
 - ▲ 法人十一、同婦人一、外人十
- ◎ 傳道地 十七ヶ所
 - ▲ 定任教役者ある他 八ヶ所
 - ▲ 教會講義所以外の説教所 九ヶ所
 - ▲ 定住者なき出張傳道地 九ヶ所
- ◎ 日曜学校 貳拾校
 - ▲ 生徒数 一千〇十五名
 - ▲ 職員数 四十八名
- ◎ 神學校 壹校
 - ▲ 學生数 六名
 - ▲ 職員 六名
- ◎ 中学校 壹校 (三學年マデ)
 - ▲ 學生数 三百二名
 - ▲ 職員 廿二名
- ◎ 幼稚園 三ヶ所
 - ▲ 園兒数 百三十三名
 - ▲ 職員 拾三名
- ◎ 學生寄宿舍 壹ヶ所
 - ▲ 寄宿生 四名

資料引用

「るうてる」 1913. 7. 15 6頁

REPORT OF THE PRESIDENT

In making this report before the Joint Conference my first feeling is that of one addressing men who have been hard pressed in the battle and who have returned for mutual counsel, not defeated but terribly broken in the ranks.

The sudden return home through ill health of two families and temporarily of a third family, for other reasons, leaves a gap which it is difficult for those remaining to fill, even for a season.

And, while they are not members of this Conference, I feel that in this connection mention should be made also of the trials of our Japanese workers.

Two theological students lay smitten for weeks with dangerous diseases. A third has been in the hospital for a year and only now seems to have good hope of recovery. The others, at one time, were so broken in nerve, that the Seminary had to be closed for a few weeks.

One pastor and his wife were given leave of absence for three months that they might regain some measure of health. Another was stricken with fever for a part of the summer.

One worker had to be dismissed because of unfitness, and still another must be suspended for a more serious cause. When we remember the mere handful of men with whom we must labor, we are tempted to exclaim that an overwhelming calamity has befallen us in the present year.

Yet we are far from uttering such an exclamation. We know too well that where God is our weakness may easily count for strength. The theological students have recovered and appear to be physically stronger; and we know by their own confessions that some of them have been greatly benefited spiritually.

The broken pastor returns to his work with assurances of the congregation's affection such as otherwise could not have been known. The dismissal of an inefficient worker has acted, we believe, as a spur to others; and the suspension of another will emphasize a point in Christian life that needs to be more carefully heeded by many.

There are also other encouraging facts. The Rev. Frisby D. Smith has

returned to Japan with his family and resumed his work in Tokyo. Mrs. L. S. G. Miller, after one of the most dangerous and difficult operations in the history of the Battle Creek Sanitarium, is just now leaving that institution apparently well. This happy result gives us a sure hope that we may claim Rev. Millet and his family again by the time that this Conference meets again next autumn. We would that a similar report could be made concerning Mrs. C. K. Lippard. For, though she and Dr. Lippard have reached Chicago in safety and are already settled in their home on Willow Avenue, we must await with faith and hope the effects of the surgeon's knife. The United Synod Board has called to Japan two single lady workers, Miss Bowers and Miss Akard. These young ladies have accepted the Board's call and should arrive in Japan in the summer or fall of next year. One of the ladies will make a speciality of kindergarten work for which she is well trained, and the other will likely give more attention to the work for women. Both Miss Bowers and Miss Akard are highly trained Christian workers. We shall give them a hearty welcome to the field of our labors.

STATIONS

TOKYO : Beginning with Tokyo in the North, we can say that the work is in an encouraging condition. A number of our Lutheran people from Kyushu are being spiritually cared for and others too, notably young men, are being instructed in the Gospel. The combined chapel and parsonage acts, at the same time, as a student's dormitory. Some four or five young men here find a safe home. The rule of the dormitory is that all student's must attend the Chapel services. The evangelist in charge has gained entrance to a group of medical students, and seems encouraged over the prospects for work among them. He seems to be active and optimistic and is doing as well as can be expected under the trying conditions of work in Tokyo.

SAGA: We would like to give the entire report of Dr. Lippard as it is interesting and suggestive, but we shall have to be content with only a summary. The report is jubilant throughout and indicates that a great deal of good hard work is being done with encouraging results. The points which he mentions may be summed up as follows :

I--Peace and good will among the workers and unusual fervor among the Christians.

2--A regular attendance of thirty on Sunday and fifteen at prayer meeting. Baptism of twelve persons during the year. Every member canvass for church funds and a grater emphasis laid on Christian giving.

3--The good results of kindergarten work, being all that was ever claimed for that form of effort. Number of pupils in Saga Kindergarten, forty enrolled, thirty in attendance.

4--Constant improvement in Sunday School. Enrollment at Chapel one hundred, regular attendance sixty. Attendance at Komeya Machi Chapel less regular with enrollment of about one hundred. Preaching service well attended.

5--Evangelist appointed spiritual adviser for the post office. Lectures to about sixty employees every month.

6--Two physicians living near Saga have offered their homes for services and have asked that preaching be begun. These requests have been responded to once or twice each month. In Ogi, near Saga, a new kindergarten building is just being completed, enabling the teachers to increase the number of children to fifty. This building with land cost Yen 2900.00. The entire village is friendly to this work. Ogi is now an example of prosperous country evangelization. The Missionary holds services there twice per month. Attendance at service ten to twenty, Sunday School fifty. There is a Bible Class for Middle School students. One has applied for baptism. He will be the only Christian in the School. The Missionary also lectures once per month to about fifty men belonging a certain manufacturing company.

7--In the Mission Home at Saga, an English Club and a circulating library have done good work, bringing at least four persons into the Church.

HAKATA : We believe that Hakata and the out-lying districts towards Moji is one of the most important sections in all Kyshu. It is the business section of the Island and is undergoing phenomenal development. There is every reason why strong effort should be made to occupy large sections of this general district.

Unfortunately, Hakata is undermanned. The resident missionary is on furlough with no one to take his place, and the assistant Japanese must be suspended from the ministry. This leaves only our most aged evangelist almost past his days of usefulness in direct charge of the work. We believe that at least three new men should be located one each in Moji, Hakata, and the intervening district. In the meantime, much good work is being done by those in charge. The regular attendance at the Sunday Morning Service is

about twenty five. Hardly more than one-fourth of the enrolled membership is now living in Hakata. The number of Sunday Schools in the city and the out-lying districts is twelve with an attendance of about four hundred children. Mr. Kawase has been making regular tours through the interior districts, caring for scattered Christians and holding special meetings for children. There is a kindergarten with thirty children and a trained teacher.

The small groups of Christians at Kanazaki and Nogata are cared for from Hakata as a center, services being held for them bi-weekly.

OMUTA : At Omuta there are only nine resident members at present. This station has suffered greatly from frequent change of evangelists and removal of the best members to other parts. We are glad to report that, since the summer, conditions are much improved. Church attendance is much better, and there are ten interested inquirers, seven of whom will be baptized in the present month. Sunday School has improved and the general out-look is promising. Mr. Stirewalt or Mr. Hepner has gone to Omuta from Kumamoto every Sunday evening to teach special classes at the chapel and local hospital.

Special thanks must here be given to Mrs. Nielsen who teaches foreign cooking to a class of women once every month. Through this class and the Sunday School, Mr. Washiyama, the evangelist, has gained entrance to a number of homes.

KUMAMOTO : The past year has witnessed an encouraging increase at the Sunday morning service, the number ranging from forty to sixty-five; Evening service, from fifteen to forty. There is a meeting for children in the morning, and also adult Bible classes in English and Japanese with a combined attendance of sixty. On Sunday evening, there is a special Bible Class taught by one of the missionaries; on Monday evening, a similar class of Government School teachers is taught in one of the missionary homes; and on Thursday evening, Rev. Winther teaches the Bible to about thirty operatives in a spinning factory. During the year, there were seventeen admissions by baptism and confirmation.

In addition to the work at the central chapel, there are two prosperous Sunday Schools in the city suburbs with a combined attendance of about one hundred and thirty. In all the Sunday School work the theological students are very active. As a whole it may be said that the past year has been the best in the history of the Kumamoto field, having the best attendance, the largest communions, and the largest number of baptisms.

As a member of the United Synod Mission, I should like to offer my sincere appreciation to the Rev. and Mrs. J. M. T. Winther, and the Rev. and Mrs. Edward T. Horn, Jr. for their constant readiness and willingness to assist in all church work at the Kumamoto Station. We interpret these services, however, not as rendered to the United Synod Japanese Church, but rather as contributed to the one united Japanese Church in whose interest we all, in our several spheres, are giving our time and our strength.

KURUME: The Kurume Station seems to maintain its usual vigor and aggressiveness. Rev. Nielsen writes:- "The general attendance has possibly been a little less than last year, and we have had only about three-fourths as many baptisms. The Sunday School has had an average attendance of about ninety." But this does not mean that the work is less hopeful. Besides the Central Chapel, there are two other preaching places well attended. Advertising is done by leaving tracts at homes with an invitation written on the back. After meetings, Christian literature is distributed and New Testaments offered for sale. Also there are three Sunday Schools besides the one at the Chapel, having a combined attendance of one hundred children. There is also a kindergarten with thirty-five children. As a result, interest has been aroused among the parents leading, in some cases to earnest inquiry.

At Hida, the work is under the care of Mr. Matsumoto. There the evening service is better attended than the morning. There is also preaching once each week in a different part of the town from that in which the chapel is located. The most encouraging feature about this work is the Sunday School with a regular attendance of seventy-five. In addition to the work in Kurume, and in Hida, regular biweekly meetings are held in two small towns, some miles in the interior.

Including Sunday School and kindergarten children, attendants at women's meetings and the regular church services, we may conclude therefore, that approximately fifteen hundred persons receive regular weekly or monthly instruction in our various stations. Add to these those who attend the special or

"Kogisho" meetings, and we have a total of about two thousand persons who hear the Gospel every week through the efforts of the three missions composing this conference. The total number of baptisms and confirmations during the year is seventy-one.

KYUSHU GAKUIN

Theological Department: Five young men are receiving the second year course of study. Five others are in various stages of preparation, expecting to enter the Seminary from one to five year hence. In the meantime, it is hoped that others will come forward. Those in the present class are serious, hard-working young men, and we believe that they will develop into efficient evangelists.

Middle School Department: The Middle School Department has three hundred boys. The impression is abroad, which is doubtless correct, that our faculty is one of the very best in South Japan in intellectual attainments and clean living. Including the missionaries, there are thirteen Christian and seven non-Christian regular teachers connected with both departments. So far as is known, none of the non-Christian teachers show any antipathy to Christianity and several of them attend Christian services more or less regularly.

On Sunday morning, a service is held in one of the class rooms at the School for those dormitory boys who do not return to their homes on Saturday; on Wednesday afternoon, there are Bible classes taught by the Principal and several of the Christian teachers, with an enrollment of seventy and an attendance of about fifty students; and on Thursday and Saturday afternoons, teach personally two classes at my home, having an enrollment of fifty and the attendance being about thirty-five. All attendance at present is voluntary. Last April, there were fifteen applications for baptism, eight of whom were received. They were the first fruit. During the present academic year, we expect larger results.

Thus, while a measure of success has been attained, we are far from being satisfied with the present efforts and religious equipment for reaching the students. We are convinced, however, that little more can be done until a chapel is built for the School. There are relations and inter-relations that can not well be directed and used without the aid of a chapel. Up to the present practically everything has developed according to a previously adopted plan, but, from this time on, it will require patience and watchfulness to insure final success and escape from the evil of indifference and uninformed criticism.

We should like to mention here that, according to reports received from an impartial source, the discipline of Kyushu Gakuin is said to be the best among schools of similar grade in this city. As the statement comes from a non-Christian source in a non-Christian school, and as one of the chief criticisms of mission schools by non-Christian educational authorities is

their lack of discipline, the School accepts with thanks this compliment and hopes it may be true to fact.

In closing this report of the School, I would make the announcement that the General Council Board of Missions has assumed a part of the regular running expenses of the School, this amount to be determined annually upon the basis of a budget to be submitted by the School. This support will likely amount to approximately one-third the regular expenses.

GENERAL REMARKS

Tuning again to the purely evangelistic side of our work there is no more pressing problem than the supply of efficient Japanese workers, men filled with a passion for souls and a knowledge of the Word, but, at the same time, men whose training will admit them to the society of the strong. The three Missions composing this body have, omitting kindergarten teachers, just eight evangelists. Of these, one is already incapacitated by age, the days of three others are numbered, while two more are passing the line of fifty. Kyushu Gakuin was established by the United Synod that this problem might be solved, but, in the last analysis, the institution will fail of its primary and supreme object unless we as individuals and as a conference long and pray and work to the end that young men choose the Christian Ministry as a life work; not men who have failed at everything else and who come with broken bodies and fortunes offering themselves as a great favor to the Missions, but young men who have felt the burden of sin and who would help others to escape front its curse. My conviction is that if every member of this Conference will pledge himself to daily prayer and constant effort with regard to this maker, God, in His Providence, will hear our cry.

A less pressing, perhaps, but yet highly important question is that of the missionary force. Here we can not make our calculations in terms of the present or in terms of short five-year periods. We must extend the base line over distances of from twenty to twenty-five years. Of the six missionaries, not including wives, of the United Synod and Danish Boards who came to Japan more than ten years ago, four or two-thirds of them have returned to America, three of them permanently. The future of the fourth depends largely upon the outcome of a serious surgical operation. Of the six who came to Japan in the second ten years of the Mission's history, including the Council Missionaries, only two have barely exceeded five year's residence in Japan and one of these is now in America through dangerous family illness. Of the remaining four, two have lived in Japan less than five years, and two

may be said to have just arrived. The fact is that the average missionary life in Japan is astonishingly short, and, if we are able to retain fifty per cent of our men over a period of twenty-five years, we shall do well.

Then, are we prepared to meet the responsibilities of our field for the next twenty years without a decided increase of our missionary force? Bearing in mind the likelihood of a fifty per cent loss, the necessity for furloughs, and also the fact that the first term of a man's service is very largely preparatory to future effort, it is our conviction that the force in Kyushu should be increased fifty per cent in the near future; and, if the General Council Board is to occupy much of the territory South of Tokyo, they should lose no time in greatly augmenting their number of missionaries. We understand they have already used every effort to increase their forces. As a Conference, we should pray for their success. The United Synod can not be asked at this time to materially increase the number of its missionaries beyond the two ladies due next year, owing to the pressing needs of Kyushu Gakuin in the way of buildings which must be erected; hence any decided advance in this direction would have to be provided for at present by those Boards not heavily involved in the School.

We have but three recommendations :

1--That the members of this Conference address themselves to daily, specific prayer that God will call into the Lutheran Ministry young men whom he can make strong for the Gospel.

2--That the Conference place itself on record as earnestly desiring an increase in the number of missionaries and that the Mission Boards be requested not to cease their constant effort in this direction.

3--That the territory from Moji towards Hakata be occupied at the earliest possible moment.

Respectfully submitted,
C. L. BROWN.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan, 1913

「 徴兵令十三条第一項第二号の規定に依る中学校の学科程度と同等以上の学校と認定せられる」

資料引用

1913. 12. 16

紹介

本欄には専ら永遠の参考書として適當なる書籍を撰びて紹介批評す。強ちに新刊書とのみ限らず

日本福音ルウテル教會創立二十年記念史

これは昨春四月三十日佐賀福音ルウテル教會に於て開催せられたる、吾が日本福音ルウテル教會宣教二十年記念會の記念出版物である。改稿やら校正やらに手間どれて漸く昨月その出版を見た。菊版百二十頁、總クローズ金文字入のあつさりした綴方である。内容は過去二十年間の佐賀、熊本、久留米、大牟田、博多、日田、東京等の各教會略史、二三先輩の改宗顛末、并に其他の地方傳道の事蹟を至極平易に叙述したものである。寫眞銅版も二十六種斗り挿入しありて光彩を添へて居る。筆者は佐賀教會の主筆を務めて居らるゝ田中新作氏である。英文にはピーリー博士のものせられた稍や悉しきものがあつたと思ふが邦文を依て出版されたのは之れが嚆矢であると思ふ。非売品であるが少数の残本を印刷實費金一圓にて望みの方に分與せらるゝさうである。希望者は佐賀教會の和佐牧師又はスタイルワルト教師に申込まるべし。

資料引用

「るうてる」1914. 5. 15 付録 3頁

序

大正二年四月日本福音ルーテル教會傳道二十年記念會を、佐賀に於て開催するに就ては、附属事業として傳道二十年記念史を刊行し、永久の記念にしやうとの發議が、當時の佐賀定住宣教師リツパード氏と余との間に起つたのは、大正元年の秋であつた。取敢へず該歴史執筆のことを、佐賀教會の主事にして県立佐賀農學校教師なる田中新作氏に依嘱したが、其の承諾を得た。始め自分等の考は、單に二十年の傳道略史を編纂する積であつたが、後教役者會の議題に上り、而して各地教會の歴史をも網羅して、比較的大部のものにしやうとの議が決せられて、リツパード氏山内量平氏及び余は擧げられて、記念會委員に任ぜられた。依つて再び田中氏に其の旨を告げ、歴史の眞を傳ふると共に、傳道の一助となるやう編輯せられんことを依頼したが、氏は非才其の任に堪へずとて辭せられた。併し再三の勧誘に蓬ひ、終に承諾せらるることとなつた。これは大正元年の冬である。直ちに材料を蒐集して、執筆者に送つた。久留米教會博多教會が、卒先して其の教會記録を送られたのは、感謝に堪へない次第である。大正元年の冬より翌二年の四月まで五ヶ月、執筆者は多忙なる業務の傍ら、これらの記録を悉く調査し、苦心努力の結果、遂に大正二年四月記念大會開催の時までには、博多久留米佐賀三教會の歴史が脱稿した。大牟田教骨の記録及び九州學院の略史が到着したのは、記念會後のことで、熊本教會史の原稿は大正二年の夏、東京教會史は超えて本年一月に委員の手許に届いた。委員は其の都度執筆者田中氏に渡して、調査精書を願つた。これら諸教會の歴史は、その文牋及び記事の撰擇を悉く執筆者に一任したので、執筆者はすべて熟慮黙禱を重ねて編輯を了へた。尤も熊本教會及び東京教會の歴史のみは、山内直丸氏の手になつたもので、山内氏の申出に依り字句の書替をも行はず、僅かに一二の文字を變更したに過ぎない。これらの為に執筆者計畫は中途にして多少の更改を要することとなり、甚だ詳細なるものと稍省略せられたるものとの差を生じ、首尾一貫せざるものとなつた。かくして一切の記事を整へ脱稿したのが本年の一月であつた。其の後は當地印刷所の全部を歴訪して交渉を重ね、寫眞銅版を福岡に注文する等に又一ヶ月を費して、漸く出来上つたのがこの一書である。委員は全力を以て事に當つた積もりであるが、リツパード氏は不意に米國に歸られ、老山内氏又病床に呻吟する身となりて、余獨りこの大任を負はざる

べからざることとなりたるがため、別してこの書の内容外形共に會員諸賢の期待に反いたこどが多々あると信ずる。只寛大なる諸賢の宥恕を乞うて止まない次第である。最後に執筆者田中新作氏の労を多とすると共に、各地諸教會よりの盡力に對し、尚スタイルワルト氏がリツパード氏に代わりて、多大の補助

を與へられしことを感謝し、併せて教會員諸兄弟の健康を祈り、益々信仰の道を進まれ、神國建設の為に奮励せられんこと、偏に希望に堪へない所である。

大正三年三月

和 佐 恒 也 識

資料引用

「創立二十年記念史」 1 頁 1914. 4. 15.

15 九州學院略史

宣教師 ブラウン 執筆

我がルーテル教會は、二十年間日本に傳道して居るが、尚比較的小さな教會である。思ふに、かくの如く其の發達の速ならざるは、幾多の方法を用ゐて居るにも拘らず、近年まで傳道事業の一として、基督教教育を実施しなかつた結果であらう。宣教師は早くよりこの缺點に留意してゐたが、之を実施せんとして一定の方針を定むるに至つたのは、今より僅か七年前のこどである。當時宣教師シーエルブラウン氏ば擧げられて、傳道局及び合衆國南部ユナイテッドシノツドに、具に事情を訴へ、中學程度の學校を設立せんが為に、資金を得んことを計つた。幸に傳道局もシノツドも、直ちに之が必要を認めて、學校設立の為に金五万圓を募集することを許した。さりながらこの間に、日本における地價及び建物の價額著しく騰貴し、五万圓を以て最初計畫せしが如き學校を建てることは、全然不可能のこととなつたので、宣教師エージェースタイワルト氏を送り、更に土地校合を廣めんとて、別に五万圓を募集することとなつた。則ち今日我が九州學院の財産は、十万圓以上の價格を以て得たものである。併しながら吾人の本校に對する計畫は、未ど全く實施するの域に達しない。四百乃至四百五十名の學生を收容するに足るべき設備を全うせんとして、今尚資金募集に全力を盡してゐる。で遠からず禮拜堂も出來、又速に科學特別教室並びに神學校室をも建てやうとの計畫を有してゐる。

中學校を始めて開いたとき、まづ一年生をのみ募集し、之を基礎として校風を作るの方針を取つた。爾來本校に入學するもの約三百四十名。第一、第二、第三の三學年に亘りて、現今在籍者は三百名である。而して本校の成功と名聲とは、主として院長遠山參良氏の手腕と經驗、並ひに職員諸氏の教育家としての位置高く、經驗と學識とに富めること歸するのである。

我が教會は三個の目的を以て、この學校を設立した。即ち

一、我がルーテル教會の教職を得、且之に一層適當なる教育を與ふるの道を開かんが為

現今何れの國に於ても、基督教傳道事業は、各派夫々自ら良とする所の方法に徒つて成されてゐる。我がルーテル教會も亦教派の一として働かねばならぬ。故に九州學院の主要なる目的は、あまねく各地に赴き、イエスキリストの純福音を教ふる基督教々役者を得、また之を教育する道を開かんが為である。これを似てこの學校にして、若しこの大目的を達すること能はずば、則ち其の設立

の重要目的たる働を果すことに失敗したものである。

二、基督教主義によりて教育されたる基督教平信徒を出し、以て最も高尚なる市民を作るの道を開かんが為

三、以上二個の目的を達して、我がルーテル教會の眞の右手となり、日本全國に福音を傳ふるに、偉大なる助を得んが為

我が九州學院が以上の目的を達せんが為には、全基督教徒並びに基督教々役者の同情と後援とを要すること、甚だ大なるものがある。この學校が、教會の為に設立されたる以上は、教會はこの校の為に盡力するは、當然の事である。

特に神學校に関してはこの通りでなければならぬ。故に教役者に對する吾人の希望は、有為の青年が身を傳道事業に捧げんことを求め、また之が為に祈らんことである。蓋しこの種の青年は、指導なく後援なくして、一身をこの事業に捧げんことは、望むべからざる故である。

資料引用

「創立二十年記念史」, 1914. 4. 15. 99 頁

教 勢

◎博多南博幼稚園

南博幼稚園は博多福音路帖教會の傳道婦山内幹枝女が宿年の企望を實現せるもの也。同姉は去る明治拾八年即ち今を去る参拾年前和歌山縣田邊教會所属の教友の家庭に三四の幼兒ありしが其頃は基督教當時の如く盛ならず動もすれば社會は基督教徒を蛇蝎視し隨て其子女の如きも他の子供仲間より排斥されしかば之を見るに忍びず、幼稚園を設置せば我教徒の子女を慰むるに便なるべしとして同志相謀り大阪市より竹谷小末女を聘して會堂を保育室に當て一幼稚園を設け自ら竹谷氏の助手としていそしみしが此園次第に發展して町費を以て維持することとなりぬ。其後山内氏の一家東京に移り次て佐賀市に來る。此間も迫害多く教徒の子女の迷惑思ひやられたる故に明治廿六年の頃獨力幼稚園を設立せんとせしも種々なる故障ありて意を果さざりしが遂に意を決して明治三十二年一小屋を佐賀市水ヶ江裏町へ造り姪松枝を助手として將に開園の運に至りしも不幸にして再び頓挫を來たしぬ。されど神は我等の祈を開き給ふて明治三十五年リッパルト夫人を當地に迎へたれば好機逸すべからずと同夫人に此宿望を話したりしに夫人は素より斯道に精通し且熱心なりし為め意氣相投じて該水ヶ江裏通りの家に於て幼稚會の設け次で三十八年其の筋へ出願して愈々幼稚園の設立を見ぬ。今の花房名幼稚園の前身是なり。而して山内牧師が明治三十九年一月博多に轉任せらるゝや姉は其の翌年に市立の幼稚園より聘せられて保姆と成りぬ。然るに此の市立幼稚園は基督教主義に基けるものに非ざるを以て如何にもしてミッション幼稚園の設立を希望し居りしに幸ひ明治四十二年十月宣教師ミラー氏來博せられたれば該意見を吐きしも氏は容易に手を下さんとせざりしが懇求数度に及びし末明治四十五年協議進んで其年より大樂寺前町八番地の家屋を借受けて諸般の設備に着手し翌年一月完成せしかば南博幼稚園と命名して其の筋に請願し同五月五日認可せられいよいよ山内夫人は助手池田より石井たき兩女を率ひて毎日出張して教授することとなりぬ。園兒は大正二年四月中入園せしもの廿四人五月中八人合計三十二人は認可の當時より有することとなり其の後四十二人となりぬ。されど山内夫人は前述の市立幼稚園に午前中勤務せらるれば本園には午後勤務せらるゝこととなりしが園兒は市立同様午前の授業を希望しぬ。されど何分山内夫人は市立幼稚園を去るのは不利なるを思へり。盖し基督教徒は一般の社交界に投じ社會事業に従事して機を見時に隨て傳道するの必要なるはポーロが言の如く即ち其人を得んとならば其人の群に入るの要ある故に市の幼稚園を去る不利益なりとせり。故に同年九月より寺田ふしの女を聘して南博幼稚園の主任として石井たき女を助手として保育の任に當ら

しむることとなりぬ。寺田姉は斯業に経験ある基督信徒にして石井姉亦然り。而して本園の目的は言ふ迄もなく基督の聖名を以て立ち聖名を布き聖名を播くの機關にして之に由て先づ嬰兒の心に斯教を傳へ次で其母に感化を與へ更に進んでは其親戚を誘導するの端給となさんとするにあり。南博幼稚園は設立満一年にして己に卒業者十六名を出し代て其の缺を補ふべき新園児の数は今や五十六名に達し尚ほ三五の出願者あれば本月末には六十餘人の在籍者を有するに至るべし。あゝ此業の斯くまで發展せるは山内老夫妻の努力に基くと共に亦ミラー宣教師の功績なり。ミラー姉は本國に訴へ同情者を募り多額の金員を募集して始めて設立せられしものにして其の後本國に於て南博幼稚園の同情者増加し不日保育所新建築の豫定なり。之と共に又我等の忘るべからざるはミラー氏の歸米中同氏に代りて監督の責任を負へるスタイルワルト師也とす。我等は兩教師に深く感謝し併せて今日に至るまで指導を垂れ給ひし大能者に感謝し奉る次第である。

資料引用

「るうてる」 1914. 6. 15 4頁

BRIEF STATISTICS COMPILED BY THE PRESIDENT OF
CONFERENCE.

Lutheran Stations.	Number of admissions from beginning of work.	Present enrolled membership.	Present Communicant resident membership.	All admissions for 1914- 1915.	Money collected for all purposes in 915.
Tokyo	28	28	25	13	¥120.00
Shimonoseki	2	2	2	—	—
Hakata— Kanezaki	125	109	22	15	¥80.72
Saga-Ogi	249	151	38	17	¥92.57
Kurume	144	122	47	21	¥149.22
Hiida	16	16	12	13	¥ 31.37
Omuta	74	57	14	13	¥ 74.80
Kumamoto	225	186	96	74	¥300.00

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions
Cooperating in Japan. 1914.6.26

資料 43 機関紙「るうてる」第1号創刊の辞

創刊の辞

人間が此世に生れ出づると學ばねばならぬものばかりで、凡百の事物を研究學習せねばならぬけれども、限ある力、限ある壽命を以て此等凡百の事物を研究學習することはできぬから、止むを得ず性質に近き一二科を専門に考究することとし、他を他の人の専攻に委し、勢分業することとなるが、茲に各人が是非其自ら究めねばならぬ即ち他に委せられぬ一科がある。之れは何であるかと云ふと「人間とは何ぞや」と云ふことを研究することである。之れは人間に取ては當の問題であつて他所事でないから、どうでもかうでも研究せずにはおかれぬのである。かゝる研究は我邦に於ては小中大の學校で正科としては課してないから、此問題の研究と人間の本分を全ふするための理性と情性の涵養とは、之を他に待たねばならぬさらば之を何れに究むべきかと申すと、天啓の教を有する眞の宗教こそ其適役であると申さればならぬ。

「人間とは何ぞや」とは六ヶしく云へば人觀と云ふことである。人觀を究むれば、人間を創造した者の誰れであると云ふこと即神觀の問題が出で來り、來世問題が続いて出で來るのであるが、此等の研究を穩健に説明し人を至安の途に立しむるものを基督の活教と云つて差支ないのである。基督の教が人を活地に導き出す力があるから之を福音と稱するのである。講壇からは数多の傳道者が基督の福音を宣べ傳へて居るのであるけれども、まだ筆を以て同じ福音を幡布する餘地は充分あるのである。今般教法改革者マルチンルーテルの名を取つて題號と為し、初號を刊行するに當り、発刊の趣旨を略述して讀者諸君に見へたのであります。今後號を重ね毎月一回つゝ見へるつもりであるから、信徒諸氏の深厚なる後援と讀者諸君の御愛讀を願ふのであります。

資料引用

「るうてる」 1911. 5. 15 1頁

資料 44 明治天皇崩御「哀悼の辞」

哀悼の辞

陛下 には去る十九日俄然御発病にて、爾来畏くも 皇后陛下を御始めとい
たし、侍醫諸國手其他の方々の御手厚き御看病に因り、一時は御喜ばしき御容態
に見へさせ給ひしが、三十日午前一時頃、俄に御病革らせられ、遂に御崩御遊ば
されたり。我等誠に憂愁に堪えず。謹みて哀悼の意を表し奉る。

資料引用

「るうてる」 1912.8.15 1頁

資料 45 明治天皇陛下御大葬敬弔式

佐賀福音路帖教會

●明治天皇陛下御大葬敬弔式

當市に在る日基、路帖の両教會聯合し九月十三日午後八時より花房小路の會堂に於て奏樂リッパード夫人。讚美科九一番會衆一同。聖書奉讀。祈祷。開式の辞。和佐恒也讚美歌二一四番會衆一同。明治天皇の御畧傳古瀬敏道。敬弔の辞岡林寅五郎。敬悼説教高田銀造。哀悼の歌會衆一同。祈祷リッパード博士。主禱會衆一同。奉悼『明治天皇陛下御葬儀』今霄龍體碎玉池哀誅牛牽靈車遅炊煙不是家千萬奉悼悲風宇内吹。和佐恒也謹韻以上會場の裝飾は最も欽恪に緑葉に支那水仙を用て質素なる花環に黒色のリボンを結びたるを聖壇の正面に掲げ百燭の電燈に映じ莊嚴に敬神尊重の教旨を奉て誠意を表しぬ。

久留米福音路帖教會

●敬弔式

九月十五日午後八時より市内各教派連合の敬弔式は當教會に於て執行せられたり米村路帖教會牧師司會中で會衆一同讚美歌第四十五番を唱ひ次て中野聖公會牧師詩篇を朗讀せらる開會の祈祷を伊地知美以教會牧師捧けられ會衆一同左の御製を讚美歌第百十六番の譜にて斎唱すれば蓮見浸禮教會牧師は哥前五章を朗讀せらる次て瀬川日基教會牧師は立ちて明治宗教史の回顧及び先帝の御盛徳を頌したる一場の説教を試みられ一同讚美歌三百三十一番を歌ひ米村牧師の祝禱をもて閉會せり會する者七十一人となりき

- (一) 葦原の瑠穂の國の萬代も乱れぬ道は神ぞ開まし
- (二) 目に見へぬ神に心の通ふこそ人のこゝのまことなりけれ
- (三) わがこゝろは及はぬ國の果までも夜晝神は守りますらん

資料引用

「るうてる」 1912. 10. 15 5頁、6頁

THE SENDING OUT WOMEN MISSIONARIES.

Information has reached us of action taken by the United Synod Mission Conference in Japan, to the effect that the time is near at hand when two women missionaries could be used advantageously in connection with the work there.

The Board has taken action as follows:

Inasmuch as the expense of the extra work must be secured over and above present sources of income—and we are so warned by the brethren in Japan—it was resolved to submit to the Woman's Missionary Conference called for November 12, at Atlanta, the following proposition:

Resolved, That the Board stands ready to commission as missionaries to Japan two young ladies, having the qualifications specified in the action of the Japan Conference, should the Woman's Missionary Societies provide for their support in a way which will not subtract from the financial aid they are now giving the general cause in Japan; and that if the said Woman's Missionary Conference take favorable action upon this proposition, then the Board asks said Conference to appoint a commission of two or three ladies with whom the Board may hold consulting relation in regard to the selection of said missionaries and the conducting of woman's work in connection with our missionary work in Japan.

資料引用

Minutes of the Thirteenth Convention of
United Synod of the Evangelical Lutheran
Church in the South,
1912.11.12-19, 72-73

資料 47 博多南博幼稚園設立告示

教會報欄

博多福音教會

●幼稚園設立

今般ミッション幼稚園を博多大乗寺前町八番地に設けらる四月一日より開園の豫定、希くば神の導きにより主の名の榮へん事を祈る。

資料引用

「るうてる」 1913. 3. 15 6 頁

教會報欄

博多教會

○幼稚園開園式

兼て報じたるが如くミッション設立の幼稚園開園式を四月七日執行し山内老牧師開設の辭を述べられ、式を終りし後園児を初め保母等一同紀念の為め撮影したり、保婦には當教會の山内夫人川瀬夫人石井姉等熱心に働かれ居れり、目下入園兒貳拾四名あり尚引續き申込者ある模様なり、名稱は南博幼稚園と命名せられたり

資料引用

「るうてる」 1913.5.15 6頁

宣教二十年記念會概況

路帖教會宣教二十年記念會は去る四月二十九三十の兩日傳道開始地なる佐賀に於て催されたり、二十九日午後三時同市花房町の私立幼稚園に於て歓迎會を開き和佐氏司會し開會の辭ありて後準備委員を代表して山内氏の挨拶あり、二十年前傳道開始の當時の困難なる状態の回顧談あり今昔の感に堪へざらしめたり、閉會後茶菓の饗應あり歎語を交へて午後六時頃散會す。

同夜花房小路教會堂に於て演説會あり九州學院長遠山参良氏「基督教の活機」と題して一時間許の熱切なる演説あり、次でウィンテル氏「耻ずる所なき宗教」と題して演説あり、聴衆百三十餘にして堂内餘席なく堂外三四十名許熱心に聴聞せり。

翌三十日は雨天なりしが午前九時より會堂に於て祈祷會あり十時より禮拜あり山内牧師説教す、後瀧本牧師司式の下に聖餐式あり陪する者男女共四十九名ありたり。式後一同米屋町宣教處に於て晝飯を共にす、席上傳道開始當時の宣教師たるシェラー、ピーリー兩に對し感謝状を送らんと議ありて可決して準備委員に委任す。又三浦神學生に對し慰問状を送らんと提議あり是可決せらる、記念のため撮影す。

同夜會堂に於て演説會あり折柄雨勢強かりしたため來會者前夜の如くならざりしも尚七十名を得たり、九州學院教頭藤井氏は「理想と現實」と題しブラウン氏は「神の能たる十字架」と題して演説せられたり。

因に日ふ各地方よりの來會者三十餘名ありたり。

福音ルーテル教會外國傳道局長より二十年記念會に寄せられたる書簡

拝啓目下ウインストンセーム市に開催中の南部福音ルーテル教會大會外國傳道局は諸氏の提出に係る諸種なる重要問題の討議中茲に日本宣教二十年記念會に祝詞を呈し將來御事業の上に益々神恩の豊ならんことを祈り上候。

諸氏が多年我等の等しく愛する事業の爲めに御儘瘁下されしことは感謝の外なく此の傳道行程の第二十里標に恙なく達することを赦されし聖恩を深謝する次第に候。

我等は諸氏に深厚の同情と厚意とを送り諸氏の犠牲と労苦との美はしき果を見て諸氏と共に喜申上候素より身親しく其の辛酸を嘗められし諸氏ならでは到底其の眞味を翫賞することは困難と存候何卒今後益々良果を収められんことを切望致候。

最後に主常に諸氏と共にあらんことを祈上候 草々。

キリストに在る兄弟外國傳道局長
ロバート、シー、ホーランド

一九一三年三月二十六日

在日本ルーテル教會宣教師及會員御中

資料引用

「るうてる」 1913. 6. 15 5頁

教會報欄

ルーテル教會教勢統計

(本統計は一個人の調査に成るものなるも、一々各教會講義所に照會して、其の責任ある報告により編成せるものなれば大躰に於て誤謬なきを信ず。尚ほ本表は大正二年四月末の調査にかゝる。松本生)

- ◎ 信徒總数 (現在正會員) 五百五十七名
- ◎ 教役者数 二十二名
 - ▲ 法人十一、同婦人一、外人十
- ◎ 傳道地 十七ヶ所
 - ▲ 定任教役者ある他 八ヶ所
 - ▲ 教會講義所以外の説教所 九ヶ所
 - ▲ 定住者なき出張傳道地 九ヶ所
- ◎ 日曜学校 貳拾校
 - ▲ 生徒数 一千〇十五名
 - ▲ 職員数 四十八名
- ◎ 神學校 壹校
 - ▲ 學生数 六名
 - ▲ 職員 六名
- ◎ 中学校 壹校 (三學年マデ)
 - ▲ 學生数 三百二名
 - ▲ 職員 廿二名
- ◎ 幼稚園 三ヶ所
 - ▲ 園兒数 百三十三名
 - ▲ 職員 拾三名
- ◎ 學生寄宿舍 壹ヶ所
 - ▲ 寄宿生 四名

資料引用

「るうてる」 1913. 7. 15 6頁

REPORT OF THE PRESIDENT

In making this report before the Joint Conference my first feeling is that of one addressing men who have been hard pressed in the battle and who have returned for mutual counsel, not defeated but terribly broken in the ranks.

The sudden return home through ill health of two families and temporarily of a third family, for other reasons, leaves a gap which it is difficult for those remaining to fill, even for a season.

And, while they are not members of this Conference, I feel that in this connection mention should be made also of the trials of our Japanese workers.

Two theological students lay smitten for weeks with dangerous diseases. A third has been in the hospital for a year and only now seems to have good hope of recovery. The others, at one time, were so broken in nerve, that the Seminary had to be closed for a few weeks.

One pastor and his wife were given leave of absence for three months that they might regain some measure of health. Another was stricken with fever for a part of the summer.

One worker had to be dismissed because of unfitness, and still another must be suspended for a more serious cause. When we remember the mere handful of men with whom we must labor, we are tempted to exclaim that an overwhelming calamity has befallen us in the present year.

Yet we are far from uttering such an exclamation. We know too well that where God is our weakness may easily count for strength. The theological students have recovered and appear to be physically stronger; and we know by their own confessions that some of them have been greatly benefited spiritually.

The broken pastor returns to his work with assurances of the congregation's affection such as otherwise could not have been known. The dismissal of an inefficient worker has acted, we believe, as a spur to others; and the suspension of another will emphasize a point in Christian life that needs to be more carefully heeded by many.

There are also other encouraging facts. The Rev. Frisby D. Smith has returned to Japan with his family and resumed his work in Tokyo. Mrs. L. S. G. Miller, after one of the most dangerous and difficult operations in the history of the Battle Creek Sanitarium, is just now leaving that institution apparently well. This happy result gives us a sure hope that we may claim Rev. Millet and his family again by the time that this Conference meets again next autumn. We would that a similar report could be made concerning Mrs. C. K. Lippard. For, though she and Dr. Lippard have reached Chicago in safety and are already settled in their home on Willow Avenue, we must await with faith and hope the

effects of the surgeon's knife.

The United Synod Board has called to Japan two single lady workers, Miss Bowers and Miss Akard. These young ladies have accepted the Board's call and should arrive in Japan in the summer or fall of next year. One of the ladies will make a speciality of kindergarten work for which she is well trained, and the other will likely give more attention to the work for women. Both Miss Bowers and Miss Akard are highly trained Christian workers. We shall give them a hearty welcome to the field of our labors.

STATIONS

TOKYO : Beginning with Tokyo in the North, we can say that the work is in an encouraging condition. A number of our Lutheran people from Kyushu are being spiritually cared for and others too, notably young men, are being instructed in the Gospel. The combined chapel and parsonage acts, at the same time, as a student's dormitory. Some four or five young men here find a safe home. The rule of the dormitory is that all student's must attend the Chapel services. The evangelist in charge has gained entrance to a group of medical students, and seems encouraged over the prospects for work among them. He seems to be active and optimistic and is doing as well as can be expected under the trying conditions of work in Tokyo.

SAGA: We would like to give the entire report of Dr. Lippard as it is interesting and suggestive, but we shall have to be content with only a summary. The report is jubilant throughout and indicates that a great deal of good hard work is being done with encouraging results. The points which he mentions may be summed up as follows :

1--Peace and good will among the workers and unusual fervor among the Christians.

2--A regular attendance of thirty on Sunday and fifteen at prayer meeting. Baptism of twelve persons during the year. Every member canvass for church funds and a grater emphasis laid on Christian giving.

3--The good results of kindergarten work, being all that was ever claimed for that form of effort. Number of pupils in Saga Kindergarten, forty enrolled, thirty in attendance.

4--Constant improvement in Sunday School. Enrollment at Chapel one hundred, regular attendance sixty. Attendance at Komeya Machi Chapel less regular with enrollment of about one hundred. Preaching service well attended.

5--Evangelist appointed spiritual adviser for the post office. Lectures to about sixty employees every month.

6--Two physicians living near Saga have offered their homes for services and have asked that preaching be begun. These requests have been responded to once or twice each month. In Ogi, near Saga, a new kindergarten building is

just being completed, enabling the teachers to increase the number of children to fifty. This building with land cost Yen 2900.00. The entire village is friendly to this work. Ogi is now an example of prosperous country evangelization. The Missionary holds services there twice per month. Attendance at service ten to twenty, Sunday School fifty. There is a Bible Class for Middle School students. One has applied for baptism. He will be the only Christian in the School. The Missionary also lectures once per month to about fifty men belonging a certain manufacturing company.

7--In the Mission Home at Saga, an English Club and a circulating library have done good work, bringing at least four persons into the Church.

HAKATA : We believe that Hakata and the out-lying districts towards Moji is one of the most important sections in all Kyshu. It is the business section of the Island and is undergoing phenomenal development. There is every reason why strong effort should be made to occupy large sections of this general district.

Unfortunately, Hakata is undermanned. The resident missionary is on furlough with no one to take his place, and the assistant Japanese must be suspended from the ministry. This leaves only our most aged evangelist almost past his days of usefulness in direct charge of the work. We believe that at least three new men should be located one each in Moji, Hakata, and the intervening district. In the meantime, much good work is being done by those in charge. The regular attendance at the Sunday Morning Service is about twenty five. Hardly more than one-fourth of the enrolled membership is now living in Hakata. The number of Sunday Schools in the city and the out-lying districts is twelve with an attendance of about four hundred children. Mr. Kawase has been making regular tours through the interior districts, caring for scattered Christians and holding special meetings for children. There is a kindergarten with thirty children and a trained teacher.

The small groups of Christians at Kanezaki and Nogata are cared for from Hakata as a center, services being held for them bi-weekly.

OMUTA : At Omuta there are only nine resident members at present. This station has suffered greatly from frequent change of evangelists and removal of the best members to other parts. We are glad to report that, since the summer, conditions are much improved. Church attendance is much better, and there are ten interested inquirers, seven of whom will be baptized in the present month. Sunday School has improved and the general out-look is promising. Mr. Stirewalt or Mr. Hepner has gone to Omuta from Kumamoto every Sunday evening to teach special classes at the chapel and local hospital.

Special thanks must here be given to Mrs. Nielsen who teaches foreign cooking to a class of women once every month. Through this class and the Sunday School, Mr. Washiyama, the evangelist, has gained entrance to a number of homes.

KUMAMOTO : The past year has witnessed an encouraging increase at the Sunday morning service, the number ranging from forty to sixty-five; Evening

service, from fifteen to forty. There is a meeting for children in the morning, and also adult Bible classes in English and Japanese with a combined attendance of sixty. On Sunday evening, there is a special Bible Class taught by one of the missionaries; on Monday evening, a similar class of Government School teachers is taught in one of the missionary homes; and on Thursday evening, Rev. Winther teaches the Bible to about thirty operatives in a spinning factory. During the year, there were seventeen admissions by baptism and confirmation.

In addition to the work at the central chapel, there are two prosperous Sunday Schools in the city suburbs with a combined attendance of about one hundred and thirty. In all the Sunday School work the theological students are very active. As a whole it may be said that the past year has been the best in the history of the Kumamoto field, having the best attendance, the largest communions, and the largest number of baptisms.

As a member of the United Synod Mission, I should like to offer my sincere appreciation to the Rev. and Mrs. J. M. T. Winther, and the Rev. and Mrs. Edward T. Horn, Jr. for their constant readiness and willingness to assist in all church work at the Kumamoto Station. We interpret these services, however, not as rendered to the United Synod Japanese Church, but rather as contributed to the one united Japanese Church in whose interest we all, in our several spheres, are giving our time and our strength.

KURUME: The Kurume Station seems to maintain its usual vigor and aggressiveness. Rev. Nielsen writes:- "The general attendance has possibly been a little less than last year, and we have had only about three-fourths as many baptisms. The Sunday School has had an average attendance of about ninety." But this does not mean that the work is less hopeful. Besides the Central Chapel, there are two other preaching places well attended. Advertising is done by leaving tracts at homes with an invitation written on the back. After meetings, Christian literature is distributed and New Testaments offered for sale. Also there are three Sunday Schools besides the one at the Chapel, having a combined attendance of one hundred children. There is also a kindergarten with thirty-five children. As a result, interest has been aroused among the parents leading, in some cases to earnest inquiry.

At Hida, the work is under the care of Mr. Matsumoto. There the evening service is better attended than the morning. There is also preaching once each week in a different part of the town from that in which the chapel is located. The most encouraging feature about this work is the Sunday School with a regular attendance of seventy-five. In addition to the work in Kurume, and in Hida, regular biweekly meetings are held in two small towns, some miles in the interior.

Including Sunday School and kindergarten children, attendants at women's meetings and the regular church services, we may conclude therefore, that approximately fifteen hundred persons receive regular weekly or monthly

instruction in our various stations. Add to these those who attend the special or "Kogisho" meetings, and we have a total of about two thousand persons who hear the Gospel every week through the efforts of the three missions composing this conference. The total number of baptisms and confirmations during the year is seventy-one.

KYUSHU GAKUIN

Theological Department: Five young men are receiving the second year course of study. Five others are in various stages of preparation, expecting to enter the Seminary from one to five year hence. In the meantime, it is hoped that others will come forward. Those in the present class are serious, hard-working young men, and we believe that they will develop into efficient evangelists.

Middle School Department : The Middle School Department has three hundred boys. The impression is abroad, which is doubtless correct, that our faculty is one of the very best in South Japan in intellectual attainments and clean living. Including the missionaries, there are thirteen Christian and seven non-Christian regular teachers connected with both departments. So far as is known, none of the non-Christian teachers show any antipathy to Christianity and several of them attend Christian services more or less regularly.

On Sunday morning, a service is held in one of the class rooms at the School for those dormitory boys who do not return to their homes on Saturday; on Wednesday afternoon, there are Bible classes taught by the Principal and several of the Christian teachers, with an enrollment of seventy and an attendance of about fifty students; and on Thursday and Saturday afternoons, teach personally two classes at my home, having an enrollment of fifty and the attendance being about thirty-five. All attendance at present is voluntary. Last April, there were fifteen applications for baptism, eight of whom were received. They were the first fruit. During the present academic year, we expect larger results.

Thus, while a measure of success has been attained, we are far from being satisfied with the present efforts and religious equipment for reaching the students. We are convinced, however, that little more can be done until a chapel is built for the School. There are relations and inter-relations that can not well be directed and used without the aid of a chapel. Up to the present practically everything has developed according to a previously adopted plan, but, from this time on, it will require patience and watchfulness to insure final success and escape from the evil of indifference and uninformed criticism.

We should like to mention here that, according to reports received from an impartial source, the discipline of Kyushu Gakuin is said to be the best among schools of similar grade in this city. As the statement comes from a non-Christian source in a non-Christian school, and as one of the chief criticisms of mission schools by non-Christian educational authorities is their lack of discipline, the School accepts with thanks this compliment and hopes it may be

true to fact.

In closing this report of the School, I would make the announcement that the General Council Board of Missions has assumed a part of the regular running expenses of the School, this amount to be determined annually upon the basis of a budget to be submitted by the School. This support will likely amount to approximately one-third the regular expenses.

GENERAL REMARKS

Tuning again to the purely evangelistic side of our work there is no more pressing problem than the supply of efficient Japanese workers, men filled with a passion for souls and a knowledge of the Word, but, at the same time, men whose training will admit them to the society of the strong. The three Missions composing this body have, omitting kindergarten teachers, just eight evangelists. Of these, one is already incapacitated by age, the days of three others are numbered, while two more are passing the line of fifty. Kyushu Gakuin was established by the United Synod that this problem might be solved, but, in the last analysis, the institution will fail of its primary and supreme object unless we as individuals and as a conference long and pray and work to the end that young men choose the Christian Ministry as a life work; not men who have failed at everything else and who come with broken bodies and fortunes offering themselves as a great favor to the Missions, but young men who have felt the burden of sin and who would help others to escape from its curse. My conviction is that if every member of this Conference will pledge himself to daily prayer and constant effort with regard to this matter, God, in His Providence, will hear our cry.

A less pressing, perhaps, but yet highly important question is that of the missionary force. Here we can not make our calculations in terms of the present or in terms of short five-year periods. We must extend the base line over distances of from twenty to twenty-five years. Of the six missionaries, not including wives, of the United Synod and Danish Boards who came to Japan more than ten years ago, four or two-thirds of them have returned to America, three of them permanently. The future of the fourth depends largely upon the outcome of a serious surgical operation. Of the six who came to Japan in the second ten years of the Mission's history, including the Council Missionaries, only two have barely exceeded five year's residence in Japan and one of these is now in America through dangerous family illness. Of the remaining four, two have lived in Japan less than five years, and two may be said to have just arrived. The fact is that the average missionary life in Japan is astonishingly short, and, if we are able to retain fifty per cent of our men over a period of twenty-five years, we shall do well.

Then, are we prepared to meet the responsibilities of our field for the next twenty years without a decided increase of our missionary force? Bearing in mind the likelihood of a fifty per cent loss, the necessity for furloughs, and also

the fact that the first term of a man's service is very largely preparatory to future effort, it is our conviction that the force in Kyushu should be increased fifty per cent in the near future; and, if the General Council Board is to occupy much of the territory South of Tokyo, they should lose no time in greatly augmenting their number of missionaries. We understand they have already used every effort to increase their forces. As a Conference, we should pray for their success. The United Synod can not be asked at this time to materially increase the number of its missionaries beyond the two ladies due next year, owing to the pressing needs of Kyushu Gakuin in the way of buildings which must be erected; hence any decided advance in this direction would have to be provided for at present by those Boards not heavily involved in the School.

We have but three recommendations :

1--That the members of this Conference address themselves to daily, specific prayer that God will call into the Lutheran Ministry young men whom he can make strong for the Gospel.

2--That the Conference place itself on record as earnestly desiring an increase in the number of missionaries and that the Mission Boards be requested not to cease their constant effort in this direction.

3--That the territory from Moji towards Hakata be occupied at the earliest possible moment.

Respectfully submitted,
C. L. BROWN.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan, 1913

「 徴兵令十三条第一項第二号の規定に依る中学校の学科程度と同等以上の学校と認定せられる」

資料引用

1913. 12. 16

紹介

本欄には専ら永遠の参考書として適當なる書籍を撰びて紹介批評す。強ちに新刊書とのみ限らず

日本福音ルウテル教會創立二十年記念史

これは昨春四月三十日佐賀福音ルウテル教會に於て開催せられたる、吾が日本福音ルウテル教會宣教二十年記念會の記念出版物である。改稿やら校正やらに手間どれて漸く昨月その出版を見た。菊版百二十頁、總クローズ金文字入のあつさりした綴方である。内容は過去二十年間の佐賀、熊本、久留米、大牟田、博多、日田、東京等の各教會略史、二三先輩の改宗顛末、并に其他の地方傳道の事蹟を至極平易に叙述したものである。寫眞銅版も二十六種斗り挿入しありて光彩を添へて居る。筆者は佐賀教會の主筆を務めて居らるゝ田中新作氏である。英文にはピーリー博士のものせられた稍や悉しきものがあつたと思ふが邦文を依て出版されたのは之れが嚆矢であると思ふ。非売品であるが少数の残本を印刷實費金一圓にて望みの方に分與せらるゝさうである。希望者は佐賀教會の和佐牧師又はスタイルワルト教師に申込まるべし。

資料引用

「るうてる」1914. 5. 15 付録 3頁

序

大正二年四月日本福音ルーテル教會傳道二十年記念會を、佐賀に於て開催するに就ては、附属事業として傳道二十年記念史を刊行し、永久の記念にしようとの發議が、當時の佐賀定住宣教師リツパード氏と余との間に起つたのは、大正元年の秋であつた。取敢へず該歴史執筆のことを、佐賀教會の主事にして県立佐賀農學校教師なる田中新作氏に依嘱したが、其の承諾を得た。始め自分等の考は、單に二十年の傳道略史を編纂する積であつたが、後教役者會の議題に上り、而して各地教會の歴史をも網羅して、比較的大部のものにしようとの議が決せられて、リツパード氏山内量平氏及び余は擧げられて、記念會委員に任ぜられた。依つて再び田中氏に其の旨を告げ、歴史の眞を傳ふると共に、傳道の一助となるやう編輯せられんことを依頼したが、氏は非才其の任に堪へずとて辭せられた。併し再三の勧誘に蓬ひ、終に承諾せらるることとなつた。これは大正元年の冬である。直ちに材料を蒐集して、執筆者に送つた。久留米教會博多教會が、卒先して其の教會記録を送られたのは、感謝に堪へない次第である。大正元年の冬より翌二年の四月まで五ヶ月、執筆者は多忙なる業務の傍ら、これらの記録を悉く調査し、苦心努力の結果、遂に大正二年四月記念大會開催の時までには、博多久留米佐賀三教會の歴史が脱稿した。大牟田教骨の記録及び九州學院の略史が到着したのは、記念會後のことで、熊本教會史の原稿は大正二年の夏、東京教會史は超えて本年一月に委員の手許に届いた。委員は其の都度執筆者田中氏に渡して、調査精書を願つた。これら諸教會の歴史は、その文牋及び記事の撰擇を悉く執筆者に一任したので、執筆者はすべて熟慮黙禱を重ねて編輯を了へた。尤も熊本教會及び東京教會の歴史のみは、山内直丸氏の手になつたもので、山内氏の申出に依り字句の書替をも行はず、僅かに一二の文字を變更したに過ぎない。これらの為に執筆者計畫は中途にして多少の更改を要することとなり、甚だ詳細なるものと稍省略せられたるものとの差を生じ、首尾一貫せざるものとなつた。かくして一切の記事を整へ脱稿したのが本年の一月であつた。其の後は當地印刷所の全部を歴訪して交渉を重ね、寫眞銅版を福岡に注文する等に又一ヶ月を費して、漸く出来上つたのがこの一書である。委員は全力を以て事に當つた積もりであるが、リツパード氏は不意に米國に歸られ、老山内氏又病床に呻吟する身となりて、余獨りこの大任を負はざる

べからざることとなりたるがため、別してこの書の内容外形共に會員諸賢の期待に反いたことが多々あると信ずる。只寛大なる諸賢の宥恕を乞うて止まない次第である。最後に執筆者田中新作氏の勞を多とすると共に、各地諸教會よりの盡力に對し、尚スタイルワルト氏がリツパード氏に代わりて、多大の補助を與へられしことを感謝し、併せて教會員諸兄弟の健康を祈り、益々信仰の道を進まれ、神國建設の為に奮勵せられんこと、偏に希望に堪へない所である。

大正三年三月

和 佐 恒 也 識

資料引用

『創立二十年記念史』 1頁 1914. 4. 15.

15 九州學院略史

宣教師 ブラウン 執筆

我がルーテル教會は、二十年間日本に傳道して居るが、尚比較的小さな教會である。思ふに、かくの如く其の發達の速ならざるは、幾多の方法を用ゐて居るにも拘らず、近年まで傳道事業の一として、基督教教育を実施しなかつた結果であらう。宣教師は早くよりこの缺點に留意してゐたが、之を実施せんとして一定の方針を定むるに至つたのは、今より僅か七年前のことである。當時宣教師シーエルブラウン氏ば擧げられて、傳道局及び合衆國南部ユナイテッドシノツドに、具に事情を訴へ、中學程度の學校を設立せんが為に、資金を得んことを計つた。幸に傳道局もシノツドも、直ちに之が必要を認めて、學校設立の為に金五万圓を募集することを許した。さりながらこの間に、日本における地價及び建物の價額著しく騰貴し、五万圓を以て最初計畫せしが如き學校を建てることは、全然不可能のこととなつたので、宣教師エーヂエースタイワルト氏を送り、更に土地校合を廣めんとて、別に五万圓を募集することとなつた。則ち今日我が九州學院の財産は、十萬圓以上の價格を以て得たものである。併しながら吾人の本校に對する計畫は、未だ全く實施するの域に達しない。四百乃至四百五十名の學生を收容するに足るべき設備を全うせんとして、今尚資金募集に全力を盡してゐる。で遠からず禮拜堂も出來、又速に科學特別教室並びに神學校室をも建てやうとの計畫を有してゐる。

中學校を始めて開いたとき、まづ一年生をのみ募集し、之を基礎として校風を作るの方針を取つた。爾來本校に入學するもの約三百四十名。第一、第二、第三の三學年に亘りて、現今在籍者は三百名である。而して本校の成功と名聲とは、主として院長遠山參良氏の手腕と經驗、並ひに職員諸氏の教育家としての位置高く、經驗と學識とに富めること歸するのである。

我が教會は三個の目的を以て、この學校を設立した。即ち

一、我がルーテル教會の教職を得、且之に一層適當なる教育を與ふるの道を開かんが為

現今何れの國に於ても、基督教傳道事業は、各派夫々自ら良とする所の方法に徒つて成されてゐる。我がルーテル教會も亦教派の一として働かねばならぬ。故に九州學院の主要なる目的は、あまねく各地に赴き、イエスキリストの純福音を教ふる基督教々役者を得、また之を教育する道を開かんが為である。これを以てこの學校にして、若しこの大目的を達すること能はずば、則ち其の設立の重要目的たる働を果すことに失敗したものである。

二、基督教主義によりて教育されたる基督教平信徒を出し、以て最も高尚なる市民を作るの道を開かんが為

三、以上二個の目的を達して、我がルーテル教會の眞の右手となり、日本全國に福音を傳ふるに、偉大なる助を得んが為

我が九州學院が以上の目的を達せんが為には、全基督教徒並びに基督教々役者の同

情と後援とを要すること、甚だ大なるものがある。この學校が、教會の為に設立されたる以上は、教會はこの校の為に盡力するは、當然の事である。

特に神學校に関してはこの通りでなければならぬ。故に教役者に對する吾人の希望は、有為の青年が身を傳道事業に捧げんことを求め、また之が為に祈らんことである。蓋しこの種の青年は、指導なく後援なくして、一身をこの事業に捧げんことは、望むべからざる故である。

資料引用

1914. 4. 15. 「創立二十年記念史」 99 頁

教 勢

◎博多南博幼稚園

南博幼稚園は博多福音路帖教會の傳道婦山内幹枝女が宿年の企望を實現せるもの也。同姉は去る明治拾八年即ち今を去る参拾年前和歌山縣田邊教會所属の教友の家庭に三四の幼兒ありしが其頃は基督教當時の如く盛ならず動もすれば社會は基督教徒を蛇蝎視し随て其子女の如きも他の子供仲間より排斥されしかば之を見るに忍びず、幼稚園を設置せば我教徒の子女を慰むるに便なるべしとして同志相謀り大阪市より竹谷小末女を聘して會堂を保育室に當て一幼稚園を設け自ら竹谷氏の助手としていそしみしが此園次第に發展して町費を以て維持することとなりぬ。其後山内氏の一家東京に移り次て佐賀市に來る。此間も迫害多く教徒の子女の迷惑思ひやられたる故に明治廿六年の頃獨力幼稚園を設立せんとせしも種々なる故障ありて意を果さざりしが遂に意を決して明治三十二年一小屋を佐賀市水ヶ江裏町へ造り姪松枝を助手として將に開園の運に至りしも不幸にして再び頓挫を來たしぬ。されど神は我等の祈を開き給ふて明治三十五年リッパールト夫人を當地に迎へたれば好機逸すべからずと同夫人に此宿望を話したりしに夫人は素より斯道に精通し且熱心なりし為め意氣相投じて該水ヶ江裏通りの家に於て幼稚園の設け次で三十八年其の筋へ出願して愈々幼稚園の設立を見ぬ。今の花房名幼稚園の前身是なり。而して山内牧師が明治三十九年一月博多に轉任せらるゝや姉は其の翌年に市立の幼稚園より聘せられて保姆と成りぬ。然るに此の市立幼稚園は基督教主義に基けるものに非ざるを以て如何にもしてミッション幼稚園の設立を希望し居りしに幸ひ明治四十二年十月宣教師ミラー氏來博せられたれば該意見を吐きしも氏は容易に手を下さんとせざりしが懇求數度に及びし末明治四十五年協議進んで其年より大楽寺前町八番地の家屋を借受けて諸般の設備に着手し翌年一月完成せしかば南博幼稚園と命名して其の筋に請願し同五月五日認可せられいよいよ山内夫人は助手池田より石井たき兩女を率ひて毎日出張して教授することとなりぬ。園兒は大正二年四月中入園せしもの廿四人五月中八人合計三十二人は認可の當時より有することゝなり其の後四十二人となりぬ。されど山内夫人は前述の市立幼稚園に午前中勤務せらるれば本園には午後勤務せらるゝこととなりしが園兒は市立同様午前の授業を希望しぬ。されど何分山内夫人は市立幼稚園を去るのは不利なるを思へり。蓋し基督教徒は一般の社交界に投じ社會事業に従事して機を見時に随て傳道するの必要なるはポーロが言の如く即ち其人を得んとならば其人の群に入るの要ある故に市の幼稚園を去る不利益なりとせり。故に同年九月より寺田ふしの女を聘して南博幼稚園の主任として石井たき女を助手として保育の任に當らしむることとなりぬ。寺田姉は斯業に経験ある基督信徒にして石井姉亦然り。而して本園の目的は言ふ迄もなく基督の聖名を以て立ち聖名を布き聖名を播くの機關にして之に由て先づ嬰兒の心に斯教を傳へ次で其母に感化を與へ更に進んでは其親戚を誘導するの端給となさんとするにあり。南博幼稚園は設立満一年にして己に卒業者十六名を出し代て其の缺を補ふべき新園兒の数は今や五十六名に達し尚ほ三五の出願者あれば本月末には六十餘人の在籍者を有するに至るべし。あゝ此業の斯くまで發展せるは山内老夫妻の努力に基くと共に亦ミラー宣教師の功績なり。ミラー姉は本國に訴へ

同情者を募り多額の金員を募集して始めて設立せられしものにして其の後本國に於て南博幼稚園の同情者増加し不日保育所新建築の豫定なり。之と共に又我等の忘るべからざるはミラー氏の歸米中同氏に代りて監督の責任を負へるスタイルワルト師也とす。我等は兩教師に深く感謝し併せて今日に至るまで指導を垂れ給ひし大能者に感謝し奉る次第である。

資料引用

「るうてる」 1914. 6. 15 4頁

BRIEF STATISTICS COMPILED BY THE PRESIDENT OF CONFERENCE.

Lutheran Stations.	Number of admissions from beginning of work.	Present enrolled membership.	Present Communicant resident membership.	All admissions for 1914-1915.	Money collected for all purposes in 1915.
Tokyo	28	28	25	13	¥120.00
Shimonoseki	2	2	2	—	—
Hakata— Kanezaki	125	109	22	15	¥80.72
Saga-Ogi	249	151	38	17	¥92.57
Kurume	144	122	47	21	¥149.22
Hiida	16	16	12	13	¥ 31.37
Omuta	74	57	14	13	¥ 74.80
Kumamoto	225	186	96	74	¥300.00

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions
Cooperating in Japan. 1914.6.26

THE TWO WOMEN MISSIONARIES.

On the eighth day of January, 1914, the two young ladies, Miss Martha B. Akard and Miss Mary Lou Bowers, sailed from San Francisco for Yokohama. Having been duly called, and formally commissioned, they go forth under the auspices of the women of our Southern Church, to begin work especially among the girls and women, in connection with our missionaries already on the field. During this year they have taken up residence in Tokyo, for the purpose of attending the Language School in that city. In a few months they will probably locate at Saga, as the post of their first service. The kindergarten work at Saga and Ogi will be largely under their charge. It is hoped that this special form of work will eventuate on a substantial and profitable agency in behalf of the girls of Kyushu- a branch of service too long neglected, yet full of promise for good.

The women, through the Woman's Missionary Conference of the United Synod, have pledged adequate support of these missionaries and their work, while affirming their purpose to aid the general cause as heretofore.

Miss Martha B. Akard, daughter of Abel B. Akard, and granddaughter of Rev. J. K. Hancher, is a native of Sullivan county, Tenn., and member of Immanuel Lutheran church of same county, having been confirmed at its altar at the age of twelve years. At the age of fourteen years she lost both parents by death. She is a graduate of Marion College, Va.; and a few years ago consecrated herself to the services of the Church of her fathers, and in 1910 entered the Lucy-Webb Hays National Training School for Deaconesses and Missionaries, and while there completed a course in kindergarten training. For the two years preceding her call as a missionary, she was further preparing for her life work in the Lutheran Deaconess Mother House, Baltimore. After prayerful consideration she accepted the call of our Board to be a missionary in Japan.

Miss Mary Lou Bowers is the daughter of Rev. Prof. A. J. Bowers, D.D., of Newberry College. She was confirmed in the church of the Redeemer, Newberry, S. C., and graduated from Newberry College in 1904, receiving the degree of Bachelor of Arts. Having an ardent desire to give her life to the service of the Master, she availed herself of all the advantage of training for Christian service, and ultimately entered the Lutheran Deaconess Mother House, Baltimore, and having finished the prescribed course there, was about to be formally ordained as a deaconess, when the call of our Board was received. She accepted the call as coming from the Lord, in the fulfillment of her cherished hopes, and in prayerful submission to the divine will.

資料引用

Minutes of the Fourteenth Convention of United Synod of
the Evangelical Lutheran Church in the South,
1914.11.10-13

NEW BUILDINGS.

During the biennium, there has been built on the campus of Kyushu Gakuin the Science Hall, at a cost of \$6,000. This was imperative, according to requirement of the Educational Department of the Japan government. Otherwise there had been a serious setback to the influence and usefulness of the school. It had to be done largely on borrowed money, and by postponement of the erection of the chapel so greatly needed.

The Kindergarten School building at Ogi, costing a little over \$1,300, has been completed and is being used greatly to the advantage of the work in Ogi. These two buildings have been fully paid for, and add materially to the equipment of our Mission.

MEMORIAL BUILDINGS.

The Kindergarten School building at Ogi is a memorial to Dr. Francis Marion Setzler, of South Carolina. Dr. Setzler was born in Newberry county in 1846, and died July 29, 1906. His Children in fulfillment of his known wishes have set apart a child's portion for missions. Upon final settlement of the estate, the amount set apart for this purpose was named at \$1,275. The parties assenting, this kindergarten building was adopted as a memorial to their father, and it is so designated, in appreciative recognition of this beautiful token of filial piety. The first installment has been paid, the residue pledged in annual payments.

Following close upon the Chapel Memorial by the Church of the Ascension in Savannah, of which note was made in our report two years ago, the good people of St. Paul's, Wilmington, have assumed to build the Theological Hall, upon the Mission School grounds, at a coat of \$4,000, and have pledged that amount to be paid in full, if called for in May, 1916.

For these generous acts, by individuals and congregations, indicating as they do, an awakening to larger vision and greater efforts in behalf of the kingdom, the Board feels that it speaks the voice of the whole Church, in putting on record grateful recognition of these timely and liberal benefactions.

資料引用

Minutes of the Fourteenth Convention of United Synod of
the Evangelical Lutheran Church in the South, 1914.11.10-13

噫——ホールン博士

山内 直丸

米國福音路帖教會ゼネラル・カOUNシル派外國傳道局長エドワード、テ、ホールン博士は近頃健康を害はれたりし由聞及びしが、三月四日遂に長逝して不歸の靈客となられしとの悲報に接せり。

博士は一八五〇年六月十日ペンシルバニア州イーストンに生れ、大學及び神學校を卒へて一八七二年聖職につき、以來一九一一年迄三十九年間四個の教會に歴任し、後ヒラデルヒヤの神學校教授となりて後進の士を啓導扶掖し、遂に其教授館に於て眠られしなり。年六十五。

博士學殖深遠、頭腦明哲にして路帖教會の教義に就ては一代の泰斗を以て目せられ、之に關する疑義紛騷博士によりて解決せられざる者、殆んど無しといふ。殊に禮拜學と基督教倫理とはその長所にて、著はず處今日猶その主權を有せらる。

然れ共學者としてよりも寧ろ敬虔にして權威ある牧會者として、主の知遇を添ふせんことは博士の希望なりしが如し。ゼコブス博士の弔詞に述べられし如く、常に手に書冊を離さざる博士は聖職を勤むべき時來らば、忽ち卷を捨て、復讀書の人たるを忘れ、欣然として其職に服事し、以て唯一の任務となせしが如く。教會の會員も亦長幼貧富の差別なく皆その天稟の教會的指導に悦服して、長くその牧羊たらんことを希へりといふ。

廿一年間博士が南カロライナ州チャレストンの聖約翰教會牧師たりし時、ユナイテッド、シノッド派の基礎を定めんが為に大に力を盡し、撰ばれてその最初の首長となれり。博士はもと宣教師として海外に主の羊群を養はんことを望まれしも事情に止められて果さざりしが、今やその宿志を達するの時期到れりとなし、ミラー博士（博多のミラー師の父君）スミス博士（東京のスミス師の叔父君）等と共に海外傳道の必要を唱道し、一八九二年博士の秘蔵弟子シェラ、ピーリ両教師を送られたり。是れが日本福音路帖教會の始めにて、九州に於る久留米、日田を除ける諸教會は博士等の熱烈なる祈禱とその唱道によりて生れ出しなり。

一九〇一年博士は招かれてゼネラル、カOUNシル派に属するペンシルバニア州三一教會に移り、撰ばれて該派の外國傳道委員長となるや、同局長ゼコブス博士と共に萬艱を拜して外國傳道の必要を説きて印度傳道の基礎を強固にし、一九〇七年ゼコブス博士に次で外國傳道局長となるや、復日本傳道を始むべき理由を唱へて之を可決せしめ、翌年スミス師を派遣せられたり。東京に於る教會は亦博士の熱意により該派よりて贈られたる最初の賜物なり。之に續いて送られしエドワード、テホールンなる、博士と同じ氏名の教師は、實に博士の第三子なり。博士さきに秘蔵弟子シェラ博士を送り、終りに若エドワード、ホールン師を遣はさる。我日本の同胞を愛し、福音路帖教會を思ふて、半生の血涙を披瀝せられしやを追想して、その深厚なる友情を衷心より敬謝すを禁ずるを得ざるなり。

博士三男二女あり、長女ロバード氏はミューレンベルグ大學の教授次子ウキリアム

氏紐育市アドベント教會の牧師にて、弟子エトワド氏は熊本に居られ、何れも聖職を奉じて父君の遺業を継承せらる。二女母堂と共に猶家にあり。

神の殊遇を添ふせし忠良なる牧羊者、福音路帖教會の偉人、日本教會の恩人エドワード、テ、ホールン博士四十三年間聖國建設の偉績を齎らして永遠の生命に入らる。博士の生涯や祝福ありし、働きや榮之ありし、終焉や幸福なりし。而してその遺業や後世の人々をして永遠の甦りを受けしめ、此世をしてますます聖國と化しむるの威力あるを深く信ずる處なり。謹んで畧歴を記して弔詞に代ふ。

資料引用

「るうてる」 1915. 5. 15 3頁

資料 61 九州学院文部省指定認可

九州學院五ヵ年の課程を終えたものは、専門学校入学者規定第八条第一号により、中学卒業者と同等以上の学力を有する者と指定する

資料引用

1915. 11. 29

資料 62 九州学院神学部専門学校認可

文部省告示第七十六號

熊本縣熊本市ニ私立九州學院神學部ヲ専門學校令ニ依リ設置シ大正五年五月ヨリ
開校ノ件認可セリ

資料引用

1916. 4. 23. 『日本国政事典』第六卷図書センター

資料 63 九州学院財団法人認可・定款 1916.5.5

熊本縣熊本市新屋敷町三百八十八番地
チャールス、エル、ブラウン

大正五年一月十日付願

九州學院財團法人設立ノ件民法第三十四條ニ依リ許可ス

大正五年五月五日
文部大臣法學博士高田早苗^印

九州学院財団法人寄附行為

- 第一條 本法人ハ九州學院財團法人ト稱ス
- 第二條 本法人ノ目的ハ基督教主義ニ基キ普通及高等ノ教育ヲ施シ殊ニ其神學部ニ於テハ基督教々師タルベキ者ヲ養成スル為メ次條ニ規定スル條件ニヨリテ九州學院ヲ設立維持スルニアリ
- 第三條 本法人ニ依リ設立維持セラル、九州學院ハ永遠ニ基督教主義ノ學校タルベシ而シテ其教義ノ標準ハオーグスバルグ告白中ノ最初ノ貳拾壺ヶ條ニ示サルルーテル教會ノ根本義タルベシ
- 第四條 本法人ノ事務所ハ熊本縣熊本市新屋敷町参百八十八番地ニ之ヲ設ク
- 第五條 本法人ノ資産ハ左ノ参種トス
壺、本寄附行為ニ添付セル目錄ニ記載ノ動産及不動産
貳、アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會ユーナイテッド、シノッドヨリ年々金一萬圓寄附ノ豫約金
参、本寄附行為ヲ承認シテ本法人ニ寄附セラルル土地建物金錢其他ノ財産
- 第六條 本法人ハ三名以上十名以下ノ理事ヲ置キ在日本アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會之ヲ選任ス
本寄附行為許可ヲ得タル後最初ノ理事ハ左ノ五名トス
シ、エル、ブラウン シ、ケ、リップード
エ、ゼ、スタイワルト エル、エス、ジ、ミラー
シ、ダブリユウ、ヘプナー
- 第七條 理事ノ任期ハ該理事ガ在日本アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會宣教師社團ノ社員タル期間ト同一トス
死亡辞任其他ノ事故ニヨリ理事ニ缺員ヲ生ジタル時ハ理事會ノ決議ニヨリ第六條第一項ノ資格ヲ有スル者ノ中ヨリ之ヲ選任ス
- 第八條 本法人ノ所有スル不動産ヲ賣却又ハ讓與シ若シクハ抵當トナシ其他所有權ノ全部又ハ一部ヲ喪失スベキ處分ヲナサントスル時ハ理事全体ノ

三分ノ二ノ同意ヲ要ス

重要ナル動産ニ就イテモ前項ノ規定ヲ準用ス

第九條 本法人ノ收受シタル寄附金ハ之ヲ確實ナル銀行ニ預ケ又ハ確實ナル有價證券トシテ保管スベシ但シ寄附金ノ收受ト使用トノ期間一ヶ月ニ滿タザルモノニ就テハ此限ニアラズ
前項ノ保管方法ヨリ生ズル利子ハ銀行ノ規則又ハ證券ノ性質ニ從ヒ遲滞ナク之ヲ元本ニ繰入ルベキ方法ヲ取ルベシ

第壹拾條 理事會ニ議長書記及會計ヲ置ク但書記及會計ハ理事タルヲ要セズ
議長ハ議事ヲ整理シ理事會ヲ代表ス
書記ハ庶務ニ従事シ理事會議ノ記録及其他ノ記録ヲ整頓保管シ又理事會ニ提出スベキ報告書ヲ作ル
會計ハ一切ノ出納ヲ掌リ又理事會ニ提出スベキ會計報告書ヲ作ル

第拾一條 定期理事會ハ少クモ毎年一回開クベシ理事會自ラ會議ノ時ト處トヲ定メザル時ハ議長ハ書記ト協議ノ上之ヲ定ムベシ
定期會ノ時ト處トハ開會ノ五日前ニ書面ヲ以テ通知スベシ
定期理事會ニ於テハ理事過半數ノ出席ヲ以テ定數トシ其過半數ヲ以テ議決ス但事故ノ為メニ缺席スルモノハ書面ヲ以テ議決ノ數ニ與ル事ヲ得ルモノトス

第拾二條 臨時理事會ハ議長ノ意見ニ依テ開クモノトス臨時理事會ヲ開ク時ハ必ラズ開會ノ五日前ニ會議ノ時ト處トノ外議事ノ事項ヲモ各理事ニ通知スベシ
臨時理事會ニ於テハ理事過半數ノ出席ヲ以テ定數トシ其過半數ヲ以テ議決ス但事故ノ為メニ缺席スルモノハ書面ヲ以テ議決ノ數ニ與ル事ヲ得ルモノトス

第拾三條 理事會ハ九州學院ヲ管理スル義務及權利ヲ有ス

第拾四條 理事會ガ九州學院ヲ管理スル權利及義務中ニハ左ノ事項ヲ包含ス

第壹、總理及其他ノ職員ヲ任免スル事但總理ヲ任免スル場合ニハ理事全體ノ三分ノ二ノ同意ヲ要シ其他ノ教授以外ノ職員ヲ免ズル場合ニハ理事出席者ノ三分ノ二ノ同意ヲ要ス但事故ノ為メニ缺席スル者ハ書面ヲ以テ議決ノ數ニ與ル事ヲ得ルモノトス

第貳、教員ヲ任免スル事及其受持課目ヲ指定スルコト神學部教授ノ選任及總テ教授ノ免職ノ場合ニ於テハ理事全體ノ三分ノ二ノ同意ヲ要ス但事故ノ為メニ缺席スル者ハ書面ヲ以テ議決ノ數ニ與ルコトヲ得ルモノトス

第參、總テ職員教員及其他學院ヨリ俸給ヲ受クル者ノ俸給額ヲ定ムル事

第四、豫算及決算ヲ議決スル事又總テ出納ヲ監督シ毎年會計年報ヲ作りテ記録ニ留ムル事

第五、各學部ノ教授會ヲ監督スル事

第拾五條 本法人ハ特ニ関カレタル理事會ニ於テ理事總數ノ四分ノ三以上ノ同意ヲ得テ之ヲ解散スルコトヲ得

- 第拾六條 本法人ノ解散スル場合ニ於テハ最終ノ理事ハ第拾壹條ノ規定ヲ準用シ左ノ標準ニ由リ財産ノ歸屬權利者ヲ指定スベシ
- 第壹 本寄附行為第參條ニ記載スル如キ基督教主義ノ學校ニシテ青年男女ニ基督教主義ノ教育ヲ施ス為メ其財産ヲ維持使用スベキ一個若クハ數個ノ法人ニ讓與シ得ル事
- 第貳、右ノ條件ニ相當スルモノ無キトキハ財産ヲ賣却又ハ評價シ其賣却代金又ハ其現物ヲ最初本法人ニ寄附シタル團體若クハ個人又ハ其各繼續者ニ寄附ノ割合ニ應ジ配分シ得ル事
- 第拾七條 本寄附行為ハ第貳條、第參條、第拾五條ヲ除ク外特ニ開カレタル理事會ニ於テ理事總數ノ三分ノ二ノ同意ニヨリ主務官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ變更スル事ヲ得但事故ノ為メニ缺席スル者ハ書面ヲ以テ議決ノ數ニ與ルコトヲ得ルモノトス

九州學院財團目錄

一 金五百圓

設立者チャールス、エル、ブラウン寄附

追而法人設立許可ノ上ハ在日本アメリカ合衆國南部福音ルーテル教會
ユニテッド、シノッド宣教師社團ヨリ左記目錄ノ財産ヲ寄附セラレ
ベキモノトス

熊本縣飽託郡大江村大字九品寺及大字本

- 一 郡村宅地 壹万壹千壹百參拾六坪
時價貳万九千七百四拾四圓壹錢也

同所大字本

- 一 田 壹畝六歩
特價七拾貳圓也

熊本縣熊本市新屋敷町參百八拾八番

- 一、宅地 參百七拾四坪
時價五千六百圓 但神學部基本財産

飽託郡大江村大字九品寺及大字本

- 一 木造瓦葺二階 壹棟
建坪 貳百五拾四坪
二階 貳百四坪五合
時價貳万七千圓也

同所

- 一 木造瓦葺二階 壹棟
建坪 百參拾八坪五合

二階 九拾坪
時價壹万壹千圓也

同所

一 木造瓦葺平屋 壹棟
建坪 百八拾坪貳合五勺
時價七千圓也

同所

一 木造瓦葺二階 壹棟
建坪 參百參拾五坪七合五勺
二階 壹百六拾四坪
時價貳万六千圓也

同所

一 木造瓦葺二階 壹棟
建坪 四拾坪五合
二階 拾壹坪
時價貳千圓也

同所

一 木造瓦葺平屋 壹棟
建坪 五拾八坪七合五勺
時價貳千五百圓也

同所

一 木造瓦葺平屋 壹棟
建坪 拾五坪五勺
時價六百圓也

同所

一 木造瓦葺平屋 壹棟
建坪 參拾壹坪七合五勺
時價壹千圓也

熊本縣熊本市新屋敷町參百八八

一 木造瓦葺二階 壹棟
建坪 九拾壹坪
二階 五拾壹坪
時價參千四百圓 但神學部基本財産

一九、最初の年會

昨年第一九回教役者會に於て、爾來教役者會を年會と稱する件が決議されて、本年度より回數はそのままで教役者會を年會と呼ぶこととなった。それで正式には第二〇回年會とした。會は九月二十六日から四日間新築の成った博多の新會堂で開かれた。

第一日は午後二時半から禮拜式、山内量平司會、説教「聖餐と自省」スタイワルト、米村司會の懺餐式、聖餐式、陪餐者三十三名。同夜は傳道説教會、「贖罪の寶血」和佐恒也、「勝利の生涯」川崎升、五十餘名。

第二日は祈禱會に續いで講演會、「法則の世界に如何にして攝理は可能なりや」川崎升、「聖禮典の恩寵」リップード。午後は議事會。夜は前夜と同じく傳道説教會、「靈の共鳴」三浦冢、「悔改の必要」米村常吉、五十名餘。

第三日は祈禱會に次いで講演會「前講のつづき」川崎升、夜は前項で述べた博多教會の獻堂式で舉行された。

第四日は祈禱會に續いで議事會、極楽寺町宣教師館で午餐の後、午後は懇談會、傳道、神學生の養成、教役者の修養問題等が議題に上った。年會に於いて議せられた重なる議案は、(一) ミッション提出の議案。(1) 憲法起草委員選舉の件で、兩側より二名づつの委員を選んで事に當たることを決し、教役者側から米村、瀧本二名が選れた。(2) シノッド組織の件を可決、但し教會の資格に就いては當分次の標準に従うことを定めた。會員數、在籍會員五十名以上、現住陪餐者十五名以上。經濟狀態、教會の諸雜費を自辨し、少くとも牧師給の十分の一以上を支持し得るもの。(3) 教會名稱の件、自今教會は「日本福音ルーテル〇〇教會」と稱し、教會の資格無きものは「日本福音ルーテル教會〇〇講議所」と稱することを決定、なお「ルーテル」は必ず暇名で「ルーテル」と書く事に一定した、(二) 議長、書記改選、議長瀧本幸吉郎、書記松本學明(共に重任)、(三) 年會經費の件、教會より年額一圓、講議所より年額五十錢を出金する事を可決した。(四) 新聞紙に關する件、「るうてる」發行人、編輯人共に重任、新聞紙委員も重任。(五) 傳道委員改選、自後毎年改選と決し、米村、瀧本、山内直丸三名が選ばれた。(六) 教法改革(宗教改革)四百年記念會開催の件、記念特別大傳道をなすことに決定し、委員山内直丸、松本學明、米村常吉三名を擧げた。(七) 集注傳道の件、本年明年の集注傳道を中止し、その資金を前項記念特別傳道のために使用することにした。(八) 次年度年會開催地は久留米教會、その他數項の件が議せられた。

資料引用

『日本福音ルーテル教会史』 p157-158

Dedication of Lutheran Church in Hakata, Japan

Only Building in the City for Worship of the True and Living God

I am almost too happy just now to write a formal article so I trust the LUTHERAN CHURCH VISITOR will permit me to put in the form of a letter what I wish to say to the Southern Church at this time. I believe, too, that I can say better what I have to say in this way rather than by writing an article for acceptance or rejection as may be seen fit.

As the subject of my letter will show, I wish to tell the Church about our new church home here at Hakata. In your issue of August 3rd, there was a picture of the church in course of construction. At that time I told you that I would try to send you a picture of the completed building, and now I am fulfilling that promise. I am sending you by this same mail two pictures, one of the outside and the other of the inside.

If you will now look at the pictures they will speak for themselves. The outside picture is the front view as seen from the street. The construction is of brick to the eaves and from that point up in front it is stucco. The sides are brick all the way up and roof of slate. On the left as you face the church you will see a little bit of the mountain in the front yard jutting out. This mountain is said to date back three hundred years and is much admired by the Japanese. It is a historical spot here in the city. From the covered entrance on the side you enter a square vestibule almost surrounded with little box shelves for the Japanese to put their wooden shoes in when they enter the church. From the vestibule one door leads into the church proper and another into a room on a line with the vestibule used as a class room and for small gatherings. This room and the vestibule are under the gallery, the room being separated from the main room by sliding doors which can be taken out on special occasions and thrown into the main auditorium. This room and the gallery can seat about one hundred people and the main room about one hundred and fifty so that when necessary we can seat about two hundred and fifty people.

To us who have seen the original it seems that the picture of the interior does not do it justice. Personally I can not say that I like the picture of the interior very much, although I am much pleased with the appearance of the original. However, this interior view will give you some idea of the arrangements. The altar is in the center and by looking closely you will be able to distinguish the pulpit, lectern, baptismal font and pulpit chairs. The pews are plain but look very nice and are comfortable. There is no closed ceiling but all open, with exposed timbers, so by getting the line of the roof from the outside you can imagine about what the appearance would be on the inside.

Our first service was held in the new church on September 17th. The Sunday school children were the most anxious to see the inside of the new “Jesus church,” and they were there bright and early. At this first Sunday school service there were about 230 in attendance and the church was filled pretty well. The children seemed to enjoy the new church very much. It was interesting to take a look at them from the back with the black heads of many just visible above the backs of the pews. At the morning service there were about forty present, which was more than we have been accustomed to have. Since that time we have been having all our services in the new church and the tendency seems to be for a little better attendance than formerly.

On September 28th we held the dedicatory service. Almost all our missionaries and pastors were present, as the dedication was in connection with our annual conference which was being held here at that time. The church was pretty well filled. We opened with singing “The Church’s One Foundation.” Then followed the full dedicatory service as contained in our Southern Book of Worship, after which a dedicatory hymn was sung. Revs. Winther and Yamanouchi Naomaru preached the sermons and we then closed with singing “A Mighty Fortress is Our God.” Everything was of course in Japanese.

This beautiful church now stands as the only building in the city of Hakata dedicated to the worship of the true and living God. It stands first of all for this but is also a memorial to the Young People’s Society of Winchester and several of the members of Grace congregation now gone to be with Christ, who gave building. May others seeing their devotion be led greater deeds of love!

Yours with cordial greetings,

L. S. G. MILLER

15 Gokurakuji Cho, Fukuoka, Japan, October 13, 1916.

資料引用

Luthern Church Visitor, 1916.11.23

特別廣告

拝啓時下御恩寵の下各位愈御健榮奉賀候陳者當久留米市に於て斯教傳道開始以來茲に三十六年の星霜を経たるも未だ一箇の會堂だにもなく各市の状勢に此し甚だ遺憾とする處に御座候即はち我等會員は少額なりと雖も傳道開始以來十數年間熟禱と共に建築費として蓄積したるもの約四百圓に達したるも之僅に九牛の一毛だにも過ぎず然るに今日定例集會に於てすら極めて狹隘に感じ殊に日曜学校の如き其収容に多大の困難を來し居候様の有様にて會堂建築の要愈切迫到來候のみならず去年は當市に於て我教會傳道開始以來滿十六年に達し又本年は宗教改革四百年の記念に相當するを以て此機會に於て年來の希望たる會堂を建築致度候處建築豫算は少なくとも一萬圓を要し其費用は一般有志の寄附を仰ぎ幸に七千圓の寄附ある事殆ど確定せるも尚三千圓の不足を生じ候に付此不足額を補ふ為め各位の御同情に訴へ御援助を希ひ度應分の御寄附被成下候はば幸甚の至りに不堪候

右貸意を得度如此御座候

敬具

追而御寄附金は一時拂又は月賦拂等 御随意に被成下度且御送金の節は振替拂を以て御拂込勞御便宜と奉存候

構造備考

総煉瓦建 間口五間半奥行七間 左右及後方二階付 鐘樓四階

其他相当の造作

大正六年一月

久留米市日吉町五十三番地

日本福音ルーテル久留米教會

(振替口座福岡三四一三番)

會堂建築委員長 米 村 常吉

外委員一同

主に在る

兄弟姉妹 各 位

資料引用

『るうてる』 1917. 2. 15 4頁

KYUSHU GAKUIN ZAIDAN HOJIN DEED OF TRUST.

Article 1.

This Hojin (Legal Person) shall be styled *Kyushu Gakuin Zaidan Hojin*. ..

Article 2.

The object of the Hojin is the establishment and maintenance of Kyushu Gakuin for the carrying on of common higher education upon Christian principles; and, especially in the Theological Department, for the training of men for the Christian ministry, in accordance with the conditions set forth in the following Article.

Article 3.

Kyushu Gakuin established and maintained by the Hojin, shall always be a Christian institution; and its Standard of Doctrine shall be the fundamental principles of the Lutheran Church as set forth in the first Twenty-one Articles of the Augsburg Confession.

Article 4.

The office of the Hojin is located at No. 388 Shinyashiki, Kumamoto City, Kumamoto Ken.

Article 5.

The property of the Hojin is of two general classes:

1. a) The movable and the immovable property described in the list of property accompanying this Deed of Trust.

b) Annual grants of Yen \$8000.00 from the Evangelical Lutheran Church of the United Synod South, U. S. America.

c) Land, buildings, donations of money, and other kinds of property which may be given to the institution in accordance with this Deed of Trust.

Endowment which consists of:

2. a) Yen-500.00 which was donated by C. L. Brown to establish the *Zaidan*.

b) A city lot of 274 tsubo of land and estimated at a value of Yen-560.00 which is held for support of the theological department at 5 per cent. interest.

c) City home containing 91 tsubo downstairs and 51 tsubo upstairs and estimated at Yen-3400.00 which is held for support of the theological department.

d) All other gifts given according to Article 5, Item 3, and designated as endowment.

None of the property held as endowment shall be rented or sold without the approval of the proper government authorities. But the approval of the government authorities is not necessary in case the *Zaidan* be dissolved and disposition made of the property, as provided for in Articles 14 and 15.

Article 6.

The number of Trustees shall be not less than three and not more than ten, and they shall be elected from the Association of Missionaries of the Evangelical Lutheran Church, United Synod, South, U. S. A., in Japan.

The first persons thus to become members of the Hojin after the recognition of this Deed of Trust (by the Department of Education) shall be the following: C. L. Brown, C. K. Lippard, A. J. Stirewalt, L. S. G. Miller, C. W. Hepner.

Article 7.

The term of the office of a Trustee shall continue so long as he is a regular member of the Association of Missionaries of the Evangelical Lutheran Church, United Synod, South, U. S. A., in Japan.

When through death, resignation or any other cause a vacancy occurs among the Trustees, the vacancy shall be filled in accordance with the provisions in paragraph one in Article 6.

Article 8

A two-thirds vote of All the Trustees shall be necessary to enable the Hojin to sell, transfer, mortgage, or take any other measure affecting its title to the whole or a part of the real estate belonging to it; and this provision shall apply to valuable personal property also.

(The distinction here is between land and buildings on the one hand and equipment and like valuables on the other).

Article 9.

Excepting in the case of funds to be expended within a month, gifts of funds received by the Hojin shall be deposited in some safe bank or invested in trustworthy bonds; and the interest so derived shall be added to the principal without any delay beyond that occasioned by the regulations of the bank or the terms of the bonds.

Article 10.

The Hojin shall have a President, a Secretary, and a Treasurer. The Secretary and the Treasurer need not themselves be regular members of the Hojin.

The President shall preside at the meetings of the Hojin and shall represent the Hojin.

The Secretary shall attend to the ordinary business of the Hojin; keep the

minutes of the Hojin and also any other records; and shall prepare reports for presentation to the Hojin.

The Treasure shall receive, disburse and keep account of funds; and shall prepare financial reports.

Article 11 .

The Hojin shall hold at least one stated meeting during every year. When the time and place of meeting have not been determined by the Hojin itself, they shall be determined by the President in consultation with the Secretary.

Notice of the time and place shall be given five days before the day of meeting.

As stated meetings of the Hojin, when not otherwise provided for in this Deed of Trust, a majority of the members shall form a quorum, and a majority of those present shall decide questions. Absent members may vote by letter.

Special meetings of the Hojin may be called at the discretion of the President.

When a special meeting is called, the same procedure and law of decision shall obtain as in the case of stated meetings.

Article 12.

It is the right and duty of the Hojin to manage Kyushu Gakuin.

Article 13.

The rights and duties of the Hojin in managing Kyushu Gakuin are the following:

1. The appointment and removal of the President, and all other officers of the institution. For the appointment or removal of the President a two-thirds vote of the entire Hojin is necessary.

2. The appointment and removal of teachers and the assignment of their subjects. For the appointment of a professor in the Theological Department, and for the removal of any professor, a two-thirds vote of the entire Hojin is necessary. Absent members may vote by letter.

3. The fixing of the amount of salaries of all teachers and others who receive their salaries from the institution.

4. Decision upon the budget and Treasurer's report; oversight of all the finances; and the preparation and preservation of annual reports.

5. The superintendence of the Faculties of the several Departments.

6. Decision upon all other matters that may be provided for in this Deed of Trust.

7. Decision upon all other important matters pertaining to the administration of Kyushu Gakuin.

Article 14.

The Hojin may be dissolved by a three-fourths vote of all the Trustees at a

meeting specially called for that purpose.

Article 15

If the Hojin be dissolved the last Trustees shall dispose of the property in accordance with the following stipulations:—such disposition to be made in accordance with Article 11:

1. The Board of Trustees may transfer the title to the Property to one or more incorporated Christian schools as described in Article 3, which shall hold and manage the property for the carrying on of Christian education for young men or young women.

2. In case there be no Hojin which meets the above condition, the Board of Trustees shall sell the property or make an estimate of its value, and shall return the proceeds of the sale or the property itself to the original donors, either bodies or individuals, or to their successors, proportionately to the amount received from them.

Article 16.

With the sanction of the proper authorities, this Deed of Trust, excepting Articles 2, 3, and 14, may be amended by a two-thirds vote of all the Trustees at a meeting specially called for that purpose. Absent members may vote by letter.

KYUSHU GAKUIN ZAIDAN HOJIN LIST OF PROPERTY.

Yen

500,00- Donation by C. L. Brown, to establish the *Zaidan*. (The above is simply to conform to the legal procedure in establishing a *Zaidan*. Government gave assurance that they would ask no questions as to where money is deposited, etc. All that is necessary is to hypothecate the above sum, and in calculating the income of school each year to include a sum of interest from this Y. 500.00 rated at 5 per cent.)

	Tsubo	
29744.01- School land.....	11136	
72.00- School land.....	36	
5600.00- City lot.....	374	Held for sup. Theo. Dept. Rated 5 per cent. int.
27000.00- Main Building.....	254	Down-stairs
	204.5	Upstairs
11000.00- Science Hall.....	138.5	Down-stairs
	90	Upstairs
7000.00- Gymnasium and hall-		

Way.....	180.2.5	
26000.00- Dormitory and Dining hall.....	492.7.5	Down-stairs
	164	Upstairs
2000.00- Dwelling.....	40.5	Down-stairs
	11	Upstairs
2500.00- Dwelling.....	58.7.5	
600.00- Infirmary.....	15.5	
1000.00- Theo. Dormitory.....	31.7.5	
3400.00- City home.....	91	Down-stairs held for sup. Theo. Dept
	51	Upstairs held for Theo. Dept.

資料引用

Minutes of the Fifteenth Convention of United Synod of the Evangelical Lutheran Church in the South, 1917.11.9-13

UNITED SYNOD PROPERTY IN JAPAN
(September I, 1918)

CHURCH PROPERTY

	Original Cost	Present Est. Valu
Saga Church and Furnishings.....	\$ 900.00	\$ 1,500.00
Saga Parsonage.....	672.20	1,250.00
Saga Komeya Machi Chapel.....	50.00	150.00
Kumamoto Church, Parsonage and S.S.Room	1,150.00	2,500.00
Kumamoto Church, Furnishings.....	125.00	250.00
Hakata Church and Parsonage.....	4,431.13	7,000.00
Hakata Church and Furnishings.....	273.42	450.00
Omuta Chapel.....	400.00	400.00

MISSION HOMES

Saga Home and Teachers' Home.....	\$ 3,380.00	\$ 5,000.00
Saga Home Furnishings.....	250.00	250.00
Kumamoto Home.....	1,750.00	2,250.00
Kumamoto Home Furnishings.....	150.00	175.00
Hakata Home and Teachers' Home.....	3,664.17	5,000.00
Hakata Home Furnishings.....	250.00	250.00
Hakata Home Furnishings, Ladies.....	150.00	150.00
Osaka Home Furnishings.....	150.00	150.00
Saga Kindergarten.....	1,300.00	1,500.00
Saga Kindergarten Furnishings.....	150.00	150.00
Ogi Kindergarten.....	1,317.23	1,500.00
Ogi Kindergarten Furnishings.....	125.00	125.00
Hakata Kindergarten.....	2,150.00	2,150.00
Hakata Kindergarten Furnishings.....	100.00	100.00

LAND

Saga Church and Kindergarten Land.....	\$ 250.00	\$ 3,000.00
Saga Home Land.....	300.00	3,500.00
Saga Komeya Machi Land.....	50.00	600.00
Ogi Kindergarten Land.....	226.00	1,500.00
Fukuoka-Hakata Church Land.....	4,242.65	8,000.00
Fukuoka Home Land.....	3,300.37	5,500.00
Hakata Kindergarten Land.....	2,651.90	3,500.00
Fukuoka Ladies' Home Land.....	2,550.00	2,550.00

Kumamoto Church Land.....	400.00	1,000.00
Kumamoto Home Land.....	500.00	1,370.00

KYUSHU GAKUIN

Land.....	\$ 25,404.43	\$ 60,820.00
Buildings.....	53,500.00	80,250.00
Equipment.....	12,750.00	19,125.00
	-----	-----
	\$ 129,272.50	\$ 222,815.00

資料引用

Minutes of the Sixteenth Convention of United Synod of the
Evangelical Lutheran Church in the South, 1918.11.10-13

REPORT OF THE COMMITTEE ON INVESTIGATING THE
RE-ORGANIZATION OF THE THEOLOGICAL SEMINARY.

Your Committee begs leave to make the following report:-----

- (a) The experience of other Theological Seminaries in connection with Middle School departments was sought through correspondence with the heads of the following five institutions: Kwansei Gakuin, Aoyama Gakuin, Doshisha, Meiji Gakuin and Tohoku Gakuin. As the letters received in reply to our enquiries are brief the Committee prefers to read them verbatim and permit you to draw your own conclusions. The letters are as follows :

(1) "From Kwansei Gakuin." In reply to your recent favor, I wish to say that we recently had from the Northern Baptists a question similar to yours, the difference being that they expect to open a College Department as well as a Middle School Dept. at their new place in Yokohama. I laid that before our Theological Faculty at Kwansei Gakuin, and they were almost unanimous in the opinion that it would be better to locate the Theological Department on the same grounds provided it could stand well apart from the Middle School, and could have its own faculty, building and dormitory.

I rather think the same view would obtain even though there were no College Department, though they would not be so clear on it, perhaps.

The chief advantages in having them together would be:

- (1) The Theological students, if of the right kind, would exert a wholesome influence on the Middle School students.
- (2) The Theological students would not be withdrawn from the world of men so much as they would be if set off entirely to themselves.
- (3) Expenses might be reduced somewhat by interchange of faculties to some extent. But do not rely on this too much.

The chief disadvantages would be:

- (1) The disposition of the Middle School students to think meanly of the Theological students because the latter were not perfect.
- (2) This might cause some Middle School students who were thinking of entering the ministry to turn away from it.
- (3) The dwarfing effect of the large numbers in the Middle School on the Theological Department.

The pros and cons come very near balancing one another, I think, and unless the grounds are fairly large and each department had its own faculty, recitation building and dormitory, I had rather have the Theological Department

in an entirely different place, or even in a different city.

(Signed) THOS. H. HADEN

(2) From Aoyama Gakuin: "Here at Ayama we have not only the Theological School in connection with the Middle School – but also with the College. The presence of the latter adds greatly to the advantage of having the schools together.

I am personally all in favor of having the schools together—and so far as I know all of us here feel the same.

I think that theological students should receive their education in as close contract with the actual world—in which they are to work and which they are to try to save—as possible. Putting them into the compound of a big school— in as close relationship as possible in all the common life of the school— certainly does keep them in contract with the rest of the human world. But I find that the students themselves like to flock by themselves and hold aloof from any real relationship with the rest of the school- and so to make the plan work something must be done besides merely having the schools physically in close connection. It is a constant spur to the Theological Schools physically in close connection. It is a constant spur to the Theological Schools physically in close connection. It is constant spur to the Theological School— and here I mean the faculty as much if not more than the students— to be connected with other schools where there is apt to be a stricter holding to educational standards. Here at Aoyama now- the Theological Honkwa Course comes after graduation from the College- and that fact compels us to keep the Theological work up on a much higher level and with higher ideals in every way than would be the case if we were off alone by ourselves—even with the same entrance conditions. The Theological School is at the top of the institution and it must maintain that position honorably.

There are other advantage- very great ones in the line of economy. Our teachers are able to do work in all three departments. While we who are primarily theological teachers might find it personally pleasanter to be in a separate school where we would not be troubled by Middle School and College demands—still from the standpoint of the Mission and school economy of men the advantages are all in the united work. And personally I myself am very glad that I do have the connection with the other departments even though it does take a good deal of my time and strength. I think my theological work is helped by it— just as it is helped by getting out into the evangelistic work as often as possible. Not only in the exchange of teachers—but to other ways more directly financial —there are economical advantages in the connection of the schools.

These two sides seem to me to sum up the advantages— the economical side — and the belief that a theological school should be as little as possible a

monastery but constantly and vitally in touch with the world. There may be other advantages which would not come under these two heads— but on this hot day they do not present themselves to my mind! I should by all means urge every other Mission or Church to put their Theological School in close connection with their other schools— the closer the better for both teachers and students.

Yours cordially,

ARTHUR D. BERRY.

(3) From Doshisha University: “I regret, that your favor of June 25th has been laid without answer until now owing to multitudinous duties crowding at the time when your letter was received. It may now be too late, but let me briefly answer your questions.

(a) Theoretically speaking from the principle of education, the two educational institutions of different grades should not be located in the same compound. Theological and Middle Schools are not only different in curriculum, but the management of the students should be unlike. Theological should be given more freedom than the Middle School students. Moreover, there is not infrequently a tendency among the middle students to slight the theologians and that tendency is very harmful to the cause of theological education.

(b) But, speaking from practical experience, Doshisha had those two kinds of institutions in the same grounds for many years and worked well to the advantage of both schools, until other higher departments were established. Theologians or older students were made (some are still in the same work) dormitory masters and leaders for the younger students, and their influences were good for the school. I must confess, however, when the institution grew to the present dimensions we are now quite convinced of the advisability of locating the Middle School separate from the University departments. As a whole, I am inclined to think the separation will be the better and safer method.

(Signed) TASUKU HARADA.

(4) From Meiji Gakuin: In reply to your letter of June 25th I would say that in my judgment it is better to separate the Theological department from the Middle School.

To mention only one of the reasons, the Theological students who are usually young men, can not, and should not, be put under the same rules of discipline.

And it is not conducive to good discipline to have two different sets of rules for the students of the two departments in the same institution.

Moreover, the teachers for the Theological department are of a different class from those for the Middle School.

(Signed) K. IBUKA.

(5) Tohoku Gakuin: “ I have just received your letter, and would reply that I think it is better not to have a Theological School on the same premises with a Middle School. It is a case where “familiarity breeds contempt.” or at least both theological professors and theological students become too common to appeal to the Middle School students, and thus influence them for Christ and the Christian ministry. Then too students do not like to be on the same spot too many years. They get tired.

However, I think it is all right to have the Theological School somewhere else in the same city, if possible a nicer place than where the Middle School is located. In this way the theological professors can go to the Middle School occasionally and help its spiritual life, and be looked up to by the Middle School students. Also the theological students can become big brothers to the Middle School students and help them in various ways without becoming too common.

(Signed) D. B. SCHNEDER.

(b) In regard to the question whether the Seminary might be located in another city and still continue officially as a part of Kyushu Gakuin, Mr. Stirewalt (through the personal introduction of Hon, Shimada Saburo, former Speaker of the lower House in the Diet) called on the Vice Minister of Education in Tokyo, who, after consultation with the head of the department of schools for specialization, informed him that officially there would be no difficulty about such separation of Seminary and Middle School, and it would not necessarily involve any change in the name and status of either department.

(c) It was not considered necessary to investigate at any length the matter of requirements made by the Government of an institution wishing recognition as a specializing school, as this question need not arise even though it be deemed advisable to re-locate the Seminary in another city.

Your Committee would therefore make the following recommendations :

- (1)The Committee agrees unanimously in recommending that the Theological Seminary be left in the Island of Kyushu.
- (2)The Committee also unanimously agrees in recommending that the Theological Seminary shall remain a part of Kyushu Gakuin.
- (3)The Committee recommends that the two departments, middle and

theological, be located on separate compounds.
(4)The Committee further recommends that the Seminary be located in either Kumamoto or Fukuoka.

RESPECTFULLY SUBMITTED,

E. T. HORN.
A. J. STIREWALT.
J. P. NIELSEN.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan.
1918.8.20-26. p 37-43

SEVENTH SESSION.

Karuizawa, Aug. 24th, 1918.
Saturday, 9:00 A.M.

The Conference united in the use of the Main Service led by the Rev. A. S. Stirewalt.

After the devotional service the President called the Session to order for business.

The Minutes of the two former Sessions were read and approved.

On motion, it was decided that a report of the meeting of Aug. 23rd, at which a plan of cooperation between the Mission of the United Lutheran Church of America and the Mission of the Danish American Lutheran Church was considered be printed as an appendix to our Minutes for 1918.

On motion the recommendations of the Committee on Reorganization and Location of our Theological Seminary were again brought up for consideration.

After a thorough discussion of the whole subject, on motion, it was decided to take a recorded vote on the first recommendation, viz., "The Committee agrees unanimously in recommending that the Theological Seminary be left in the Island of Kyushu."

Affirmative.	Negative.	Not Voting.
Winther	Smith	Lippard
Stirewalt	Hepner	
Miller		
Nielsen		
Horn		
Akard		
Linn		
Kipps		
Thorlaksson		
Bach		
Norman		

Second item: "The Committee also unanimously agrees in recommending that the Theological Seminary shall remain a part of Kyushu Gakuin."

On motion, this recommendation was adopted as read.

Third item: "The Committee recommends that the two departments, Middle and Theological, be located on separate compounds."

On motion, this recommendation was adopted as read.

Fourth item: The Committee further recommends that the Seminary be

located in either Kumamoto or Fukuoka.”

After a discussion of this item, the Rev. E. T. Horn submitted the following motion :

Be it Resolved: That, we as a Joint Conference recommend that our Theological Seminary be located at Fukuoka, and

On motion, it was decided to take a recorded vote on this motion, which resulted in the following:

Affirmative.	Negative.	Not Voting.
Winther	Stirewalt	Lippard
Miller	Smith	Bach
Nielsen	Hepner	
Horn	Norman	
Akard		
Linn		
Kipps		
Thorlaksson		

The Session adjourned with prayer at noon.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1918.8.20-26 p 59-61

廣 告

謹啓残暑の砌聖恩の下各位倍々御清榮奉賀候借當教會々堂建設に付き幸に主の御恩恵と内外諸愛兄姉の御賛同により壹萬壹千圓の資金を與へられしにより去る五月二十日より工を起し己に竣成に近き愈々本月廿六日午後三時献堂式挙行の運に相成候は生等の感謝に堪へざる所に有之候を以て献堂式挙行の豫定に御座候然るに物價騰貴の爲め豫算超過し殆んど貳千五百圓の不足を生じ候に付ては何卒右御高察の上應分の御寄附被下候得ば幸甚不過之候先は貴意を得度如此御座候 敬具

大正七年十月

久留米市日吉町五十三番地

日本福音ルーテル久留米教會

(振替口座福岡三四一三)

會堂建築委員長

米村 常吉

同委員

ゼ、ピ、ネルセン

坪池 隆

諸富 定太

吉田 泰一郎

岩倉 惣藏

坪池 正潔

熊丸 虎雄

石橋 遠次郎

中殿 藤太郎

熊丸 喜次郎

南 守雄

謹白

資料引用

『るうてる』 1918. 10. 15 8頁

日本福音ルーテル教會

教 勢 統 計

大正七年六月末の調査による統計左の如し。

- ▲ 教會又は牧師を有する傳道地。 十五
- ▲ 教師數。日本人十九名、外人十四名。外に若干の補助傳道者及婦人傳道師あり。
- ▲ 會員總數。九二三名（内居所不明五五） 現住陪餐者數、四七二、一ヶ年間受洗者一一二。轉入者、一六。就眠者、二〇。除名者、一。轉出者、四。差引増員一〇三。聖日出席平均朝二八六。夕二〇八。
- ▲ 日曜學校校數、三六。教師數、六九。生徒總數、二八五。毎週出席平均一〇二〇
- ▲ 會計、(概算) 収入二〇八〇圓、支出一五〇〇圓。
- ▲ 事業別。神學校、一。中學校、一。幼稚園、三。學生寄宿舍、一。新聞、一。文庫、二。

資料引用

『るうてる』 1918. 11. 22 7頁

資料 73 予定協約案全文

年會に提出せられたる豫定協約案の全文

議 案

日本ニ於ケル神ノ王國及福音ルーテル教會建設ノタメ最善ノ利益ナルヲ信ジ、且獨立總會ノ開設ヲ期スルガ故ニ、日本ニ於ケル福音ルーテル派各傳道會社ノ聯合會議ハ、茲ニ該聯合會議ト其配下ニ屬スル日本人牧師トノ間ニ左ノ豫定協約ヲ提供ス。

- (一) 現在ノ日本人年會ヲ廢止シテ、聯合教職會議と稱スルーノ新ナル機關ヲ組織スルコト。
- (二) 右聯合機關ハ聯合會議ニ屬スル按手禮ヲ受ケタル投票權ヲ有スル總テノ議員及ビ按手禮ヲ受ケタル總テノ日本人牧師ヲ以テ成立シ、同等ノ投票權及特權ヲ有ス。而シテ總テノ按手禮ヲ受ケザル外國人並ニ日本人教役者ハ發言權ヲ有ス可シ。
- (三) 該聯合教職會議ハ毎年開會シ、此ノ協約ニ從ヒ該會議ノ憲法規則及細則ヲ制定スル權ヲ有ス可シ。
- (四) 該聯合教職會議ハ傳道事業ニ關スル總テノ事項ヲ討議スルノ權ヲ有ス。而シテ各傳道會社ノ協賛ヲ經テ總テ右ノ事項ヲ決定スル權ヲ有ス可シ。
- (五) 該聯合會議々員ニヨリ司牧セラルヽ教會ハ一千九百十九年ヲ始メトシ、該會議ニ列席スル日本人牧師及傳道師ノ要スル旅費及宿泊費總額ノ三分ノ一ヲ支拂フ可シ。而シテ此等ノ費用ハ聯合教職會議ニヨリ制定セラレタル規則ニ據リ各教會ニ割當テラル可シ。

資料引用

『るうてる』 1918. 11. 22 7頁

資料 74 日本福音ルーテル教会憲法原案（1920年施行）

日本福音ルーテル教会憲法

序 文

吾人ハ日本帝國ニ於ケル神ノ御國ノ擴張ヲシテ一層迅速有効ナラシメ、且日本福音ルーテル教會燭立總會ノ設立ヲ期シ之ヲ助成センガ為メニ、大正八年三月二十五日、日本福音ルーテル博多教會ニ於テ開カレタル臨時年會ニ於テ本憲法ヲ議決制定ス
日本福音ルーテル教會燭立總會ノ設立セラル、迄、本教會ノ傳道及牧會上一切ノ件ハ本憲法ノ條文ト其ノ精神エ從ヒチ處理セラル可キモノトス

第壹編 總 則

第一章 名 稱

第一條 本教會ハ日本福音ルーテル教會ト稱ス

第二章 信 仰

第二條 日本福音ルーテル教會ハ舊新約全書ガ聖靈ニヨリテ賜ハレル神ノ聖語ニシテ信仰ノ唯一明確且完全ナル規範タルコトヲ信ス

第三條 日本福音ルーテル教會ハ使徒信經、ニケヤ信經及アタナシオ信經ノ三ツノ一般信經ハ此ノ規範ニ適合セル基督教會全般ノ信仰ヲ表示セルモノナルコトヲ公認ス

第四條 日本福音ルーテル教會ハ西曆紀元一千五百三十年ニ出版セラレタル改竄ヲ經ザル最初ノアウグスブルグ告白ハ明カニ此ノ規範ト一致シタル教義ヲ正確ニ表ハシ、アウグスブルグ告白ニ關スル辨證論、ルーテルノ著ハセルニツノ教理問答、スモルコルド信條、及コンコルド信條ト共ニ神ノ聖語トアウグスブルグ告白ノ教義ヲ發揚シ且保持スル善良ナル書籍ナルコトヲ告白ス

第五條 日本福音ルーテル教會ノ教職又ハ會衆ノ信仰及神ノ聖語ノ宣傳ト聖禮典ノ執行ニ關スルー一切ノ疑點ハ皆此ノ規範ト是等ノ信條ニヨリテ審議決定セラル可キモノトス

第三章 政 治

第六條 日本福音ルーテル教會ノ政治ハ凡テ總會ニヨリテ行ハル

第七條 日本福音ルーテル教會ノ會衆ハ其代議員ニヨリテ政治ニ參與ス

第八條 日本福音ルーテル教會ノ總會ハ年會及宣教師會ノニツヨリ成立ス

第九條 年會ハ日本人ノミニヨリテ宣教師會ハ外國宣教師ノミニヨリテ組織シ兩者ノ權利ト責任ハ各同等ナリトス年會ト宣教師會トノ權限並ニ關係ニ就テハ別ニ協約ヲ以テ規定ス

第十條 年會ト宣教師會ノ正議員タル教師ハ聯合教職會議ヲ組織ス

第貳篇 年 會

第四章 集 會

- 第十一條 正式ノ年會ハ宣教師會ト同時同所ニ開會ス
第十二條 定期年會ハ毎年秋期開會ス
但定期年會ノ期日ト場所ハ聯合行政委員會ノ決議ニヨリテ之ヲ變更スルコトヲ得
第十三條 臨時年會ノ必要ヲ認メタル時ハ協約ノ規定ニ基キテ之ヲ開クコトヲ得但臨時年會ニ於テハ招集ノ目的タル特別議案ノ外議スルコトヲ得ズ
第十四條 定期年會ニ附議セラルベキ豫算並ニ其他ノ重要議案ハ少クトモ開會ヨリ貳週間以前ニ又臨時年會ノ議案ハ少クトモ壹週間以前ニ議員ニ送達ス可シ
第十五條 年會ハ正議員三分ノ二以上ノ出席アルニ非ザレバ成立セズ

第五章 任 務 ト 機 能

- 第十六條 年會ノ議スベキ事項左ノ如シ
一、日本福音ルーテル教會ノ發展ニ關スル牧會並ニ傳道上一切ノ施設及計畫
二、日本福音ルーテル教會ノ豫算及決算
三、本憲法第二章ニ記載セル信仰ノ擁護並ニ宣傳ニ關スル一切ノ件
四、神學校ニ關スル件
五、内外教職並ニ傳道師ノ任地ニ關スル件
六、傳道師及會衆ニ對スル戒規ノ適用
七、教會附属事業ニ關スル件
入、本憲法及協約ノ改訂
第十七條 年會ガ決議セル一切事項ハ即時之ヲ宣教師會ニ通告シテ協賛ヲ求ムベク宣教師會ガ議決セル事項ハ年會ニ於テ更ニ之ヲ附議シテ賛否ヲ決ス可シ、兩會議ノ可決ヲ經ザル議案ハ實行ス可カラズ
兩會議ノ決議ガ一致セザル場合ニ於ケル處置ニ關シテハ別ニ協約ヲ以テ之ヲ規定ス

第六章 議 員

- 第十八條 年會正議員ノ資格左ノ如シ
一、現任ノ教職
二、現任ノ傳道師中滿五年以上日本福音ルーテル教會ニ於繼續教務ニ従事セルモノ
三、牧師ノ基本俸給四分ノ一以上支給スル教會ヨリ選出セラレタル信徒代議員
第十九條 年會准議員ノ資格左ノ如シ
一、休職ノ教職
但教職名簿ニ其名籍ヲ保留セラルトモノニ限ル
二、前條第二號ニ規定セル以外ノ現任ノ傳道師
三、前條第三號ニ規定セル以外ノ信徒代議員
第二十條 正議員ハ發言及投票ノ權ヲ有シ准議員ハ發言權ノミヲ有ス

第七章 役 員

- 第二十一條 年會ニ左ノ役員ヲ置ク
一、議長 一名

- 二、書記 一名
- 三、會計 一名
- 四、行政委員 三名

- 第二十二條 役員ハ定期年會毎ニ改選ス可シ但再選ヲ妨ゲズ
- 第二十三條 議長、書記及行政委員ハ現任ノ教職中ヨリ會計ハ正議員中ヨソ選舉ス可シ
- 第二十四條 役員ハ選舉セラレタル年會ノ閉會後ヨリ直ニ其任務ニ就ク可シ但議長及書記ハ年會記録ノ出版迄ノ事務ヲ鞅掌シ會計ハ教會ノ年度末迄其事務ヲ繼續ス可シ
- 第二十五條 缺員トナリタル役員ノ補缺ハ得票次點者ヲ以テス

第八章 議長

- 第二十六條 議長ハ其任期中年會ノ事務ヲ管理シ、且必要ニ應ジテ教會ノ外部ニ對シ日本福音ルーテル教會ヲ代表ス
- 第二十七條 議長ハ年會ノ一切ノ集會ヲ司リ且議員ヲシテ決議事項ヲ實行セシムルコトヲ勗ム可シ
- 第二十八條 議長ハ日本福音ルーテル教會年會ノ財産ヲ管理シ且之ニ必要ナル書類ニ年會ノ名ニ於テ署名捺印ス可キモノトス
- 第二十九條 議長ハ行政委員ヲ兼任シテ他ノ行政委員ト共ニ宣教師會トノ協同上一切ノ職責ヲ盡ス可シ
- 第三十條 議長ハ定期年會ニ於テ其在任中取扱ヒタル事務ノ報告ヲナス可シ
- 第三十一條 議長ハ其職務ニ關スル一切ノ書類ヲ任期ノ終ニ議長ノ印章ト共ニ書記ニ交附シテ保管セシム可シ

第九章 書記

- 第三十二條 書記ハ年會ニ關スル一切ノ庶務ヲ取扱フ可シ
- 第三十三條 年會開期中ノ事務ヲ輔ケシメンガ為ニ書記ハ補助書記若干名ヲ指名シ之ガ任命ヲ年會ニ請求スルコトヲ得
- 第三十四條 書記ハ左ノ諸帳簿ヲ作製シテ保管ス可シ
- 一、年會記録簿
 - 二、日本福音ルーテル教會統計簿
 - 三、教職名簿及履歴書綴込簿
 - 四、傳道師名簿及履歴書綴込簿
 - 五、年會議員名簿
 - 六、往復文書控簿
 - 七、報告書綴込簿
- 第三十五條 書記ハ年會ノ開期中ニ其精密ナル議事録ヲ朗讀シ年會ノ承認ヲ受ク可シ、其議事録ハ印刷ニ附シテ之ヲ議員ニ配布ス可シ
- 第三十六條 書記ハ緊要ナル教務書類ニ署名シ年會議事録ノ稿本ニ議長ト連署スベシ
- 第三十七條 書記ハ年度末ニ一切ノ書類ヲ分類装幀訂シテ目錄ヲ附シ保存ス可シ

第十章 會計

- 第三十八條 會計ハ年會ノ金銭出納上一切ノ事務ヲ擔當スルモノトス
- 第三十九條 會計ハ任期ノ終了後直ニ自己ノ取扱ヘル出納ニ關スル精密ナル報告書ニ署名シテ議長ニ提出ス可シ
其報告書ハ次ノ定期年會ニ於テ正當ニ審査セラル可キモノトス
- 第四十 條 會計ノ備フ可キ帳簿ハ左ノ如シ
一、金銭出納簿 二、金銭領収證簿 三、領収書綴込簿

第十一章 行政委員

- 第四十一條 年會ノ決議ヲ實行シ且年會閉會中緊急ヲ要スル事務ヲ處理セシメンガ為ニ行政委員ヲ常置ス
- 第四十二條 行政委員ハ年會ノ決議セザル事項ニ對シ適宜ノ處置ヲ取りタル時ハ次年會ニ報告シテ承認ヲ求ム可シ
- 第四十三條 行政委員ハ宣教師會ノ行政委員ト共ニ聯合行政委員會ヲ組織シ協同ノ實ヲ擧グルト共ニ年會ノ希望主張、貫徹ニ勗ム可シ
- 第四十四條 行政委員ハ年會正議員中ヨリ議事委員二名ヲ選定ス可シ
議事委員ハ宣教師會ノ議事委員ト共ニ會議ノ開期中兩會議ヲシテ同一議案ヲ議了スルコトヲ得ル様斡旋スルモノトス
行政委員及ビ議事委員ノ責務ニ關スル細則ハ別ニ協約ヲ以テ規定ス

第十二章 議事及議決法

- 第四十五條 三名以上ノ議員又ハ地方部會ハ年會ニ議案ヲ提出スルコトヲ得
- 第四十六條 議員ハ議場ニ於テ動議ヲ提出スルコトヲ得
動議ハ二名以上ノ賛成アルニ非レバ成立セズ
- 第四十七條 豫算及決算ハ正議員中ヨリ三名以上ノ委員ヲ選ビテ審査スベシ
- 第四十八條 正規ノ選舉ハ總テ投票ニヨリテ為ス可シ
- 第四十九條 役員ノ選舉ハ總テ過半数ノ得點ヲ必要トス、但二回ノ選舉ガ所定ノ數ニ達セザル時ハ第二回ノ高點者二名ノ決選投票ヲ行ヒ其高點者ヲ當選トス、其他ノ選舉ハ最高點者ヲ以テ當選トス但投票數ノ三分ノ一ヲ下ル可ラズ
- 第五十 條 投票ニヨラザル決議ハ起立ニ問ヒテ多數決トス
- 第五十一條 議長ノ採決ニ不服ナル時ハ議員ハ賛否ノ投票ヲ請求スルコトヲ得
- 第五十二條 出席議員ハ投票ヲ拒ムコトヲ得ズ

第參篇 宣教師會及聯合教職會

第十三章 宣 教 職 會

- 第五十三條 宣教師會ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第十四章 職 合 教 職 會

- 第五十四條 聯合教職會ハ内外教職ヲ以テ組織ス
- 第五十五條 聯合教職會ニ於テ取扱フ可キ事項左ノ如シ
一、教職及傳道帥志願者ノ試験及推薦
二、按手禮ノ執行
三、教職及傳道師ノ任免

四、教職ニ關スル戒規ノ適用

第五十六條 聯合教職會ハ定期會議ニ於テ議長一名試験委員四名ヲ互選ス可シ
試験委員ハ内外教職各二名トス聯合教職會ニ關スル細則ハ別ニ協約ヲ以テ規定ス

第四篇 地 方 部

第十五章 地 方 部 會

第五十七條 日本福音ルーテル教會ノ全傳道地ヲ若干ノ地方部ニ分割ス
地方部ノ數及其境界ハ總會ニ於テ之ヲ定ム

第五十八條 一地方部内ニ含ム會衆團體體ノ數ハ定住布教者ヲ有スルモノ三個以上タル可シ

第五十九條 地方部會ハ毎年一回開會ス可シ

第六十 條 地方部會ノ議員タルモノハ左ノ如シ

- 一、地方部内ニ於ケル總テノ内外教職及傳道師
- 二、地方部内ニ於ケル教會ヨリ選出セル信徒代議員

第六十一條 總テノ議員ハ發言及投票ノ權ヲ有ス

第六十二條 地方部會ニ於ケル選舉及決議ノ方法ハ總テ年會ノ例ニ倣フ

第十六章 地方部會ノ任務及權能

第六十三條 地方部會ノ任務ト機能ハ左ノ如シ

- 一、所属會衆ノ幸福ト進展ヲ計ルコト
- 二、年會議長宣教師會議長又ハ聯合行政委員會ノ諮問ニ應ジ其ノ事業ヲ進捗セシメンガ為ニ勗ムルコト
- 三、地方部内ノ傳道ノ擴張及普及ヲ計ルコト
- 四、信徒ノ戒規處分ニ關シ被告ヨリ提出セル控訴ヲ受理シ之ヲ審問判決スルコト及會衆又ハ教職傳道師ヨリ提出セル教職若クハ傳道師ニ對スル訴訟ヲ受理シ之ヲ聯合行政委員會ニ取次グコト
- 五、教義又ハ實行ニ關スル問題ヲ研鑽討議スルコト
- 六、總會ニ於テ決議セル事項又ハ聯合行政委員會ヨリ委託セラレタル事項ヲ實行處理スルコト
- 七、年會ニ提出スベキ凡テノ建議案若シクハ憲法並協約ノ改訂案ヲ討議スルコト

第六十四條 各地方部會ハ本憲法並ニ協約ニ抵觸セザル範圍ニ於テ其地方部内ニ適用スベキ法規ヲ制定スルコトヲ得

第六十五條 地方部會ガ受理セシ訴訟又ハ控訴事件ノ審問及判決ノ手續ハ總テ本憲法ノ規定ニ基ク可シ

第六十六條 地方部會ハ其判決セル控訴事件ヲ再審ス可カラズ
但被告ガ更ニ之ヲ總會ニ上告シ總會ガ其誤審ヲ指摘シテ地方部會ニ廻附シ再審ヲ命ゼシ時ハ其限りニ非ズ

第十七章 地方部會ノ役員

第六十七條 地方部會ハ其所属議員中現任ノ教職中ヨリ地方部會長一名ヲ選舉ス可シ其任期ハ一年トス

- 但再選ヲ妨ゲズ
- 第六十八條 地方部會長ハ地方部内ニ居住スル傳道師志願者ヨリ志願書ノ提出ヲ受ケタル時ハ意見書ヲ添ヘテ之ヲ聯合行政委員ニ廻送ス可シ
- 第六十九條 地方部會長ハ其地方部内ニ於ケル各會衆ノ團體若クハ學校、慈善事業及其他ノ事業ノ状態ヲ記セル報告書及地方部會議事録ノ謄本ヲ定期年會ヨリ少クトモ三週間前ニ聯合行政委員ニ提出ス可シ
- 第七十 條 地方部會ハ書記及會計各一名ヲ選舉スベシ但任期ハ各一年トシ再選ヲ妨ゲズ
- 第七十 條 書記ハ地方部會長ヲ扶ケテ一切ノ事務ヲ處理シ會計ハ地方部會ノ出納一切ノ事務ヲ司リ且所属會衆團體ノ年會經費負擔金を取り集メテ之ヲ年會々計ニ納付スベシ

第五編 會 計

第十八章 信徒ノ團體組織

- 第七十二條 本憲法ノ適用ヲ受クル信徒ノ團體ヲ會衆ト稱ス
- 第七十三條 會衆ハ本憲法ノ規定ニ基キテ神ノ聖語ノ宣傳ト聖禮典ノ執行ニ關スル準備ヲナシ主日毎ニ少クトモ一回禮拜式ヲ行ヒ各自ノ徳ヲ建テ且聖國ノ擴張ニ勗ム可シ
- 第七十四條 無牧ノ會衆若シクハ按手禮ヲ受ケザル牧師ヲ有スル會衆ニハ擔任教職ヲ置ク擔任教職ノ選定ハ地方部會之ヲ為ス
- 第七十五條 會員三十名以上ヲ有スル地方ノ會衆ニシテ本憲法ニ從ヒテ團體ヲ組織シ役員ヲ選舉シ且其經常費ヲ自辨スルモノヲ教會ト稱ス
- 第七十六條 教會ハ毎年總會後一ヶ月以内ニ定期信徒會ヲ開ク可シ
信徒會ニ於テハ滿十八歳以上ノ現住陪餐會員ノミ投票權ヲ有ス
- 第七十七條 教會ハ定期信徒會ニ於テ二名以上ノ役員ヲ選舉ス可シ
- 第七十八條 教會ノ役員ハ之ヲ執事ト稱ス
執事ハ陪餐ノ資格アル滿二十歳以上ノ者タル可シ教職ハ聖日禮拜ノ席上ニ於テ執事ノ任職式ヲ執行スベシ
- 第七十九條 執事ハ會衆ノ代表者トシ牧師ヲ補佐シ其教會ノ一切ノ事務ヲ處理シ教會ノ宗教育及會計ニ關スル一切ノ事務ヲ管理シ、又牧師ト共ニ信徒ノ戒規及洗禮堅信式志願者ノ試験ヲ行ヒ或ハ信徒代議員トシテ年會及所属地方部會ニ出席ス可シ
- 第八十條 教會ハ憲法及協約ニ抵觸セザル範圍ニ於テ其教會ニ適用スベキ法規ヲ制定スルコトヲ得
但此場合ニ於テハ制定セル法規ノ謄本ヲ所属地方部會ニ提出シテ之ガ承認ヲ求ム可シ
- 第八十一條 第七十五條ニ規定セル以外ノ會衆ハ講義所ト稱ス

第十九章 會衆ノ義務ト權利

- 第八十二條 教會ハ其力ニ應ジテ牧師ノ俸給ノ全部若クハ一部ヲ支給スルコトヲ勗ム可シ
- 第八十三條 會衆ハ其力ニ應ジテ年會及地方部會ノ經費ヲ負擔ス可シ
- 第八十四條 教會ハ執事中ヨリ信徒代議員ヲ選定シ其住所氏名ヲ所属地方部會長及

- 年會議長ニ届出ヅ可シ但信徒代議員ノ數ハ牧師ノ俸給ノ全額ヲ支給スル教會ニ在リテハ二名、其他ノ教會ニ在リテハ一名トス
- 第八十五條 教會ハ所屬地方部會及年會ニ其ノ選定セル信徒代議員ヲ参列セシム可シ、信徒代議員差支アル場合ハ臨時信徒會ヲ開キテ代理者ヲ選舉シ教會ノ證明書ヲ添ヘテ参列セシム可シ、已ムヲ得ザル事故ノ為ニ缺席スル時ハ理由ヲ具シテ届出ヅ可シ
- 信徒代議員ノ年會及地方部會参列費用ハ其教會ノ自辨トス
- 第八十六條 教會ハ毎年六月末日迄ニ年度豫算書ヲ宣教師會財政委員ニ提出ス可シ此豫算書ハ信徒總會ニ於テ可決セテ且教師及關係宣教師ノ連署セルモノタルヲ要ス但講義所ノ年度豫算ハ主任布教者及關係宣教師之ヲ作製シテ提出ス可シ

第六篇 聖ナル職務

第二十章 教 職

- 第八十七條 教職トハ按手禮ヲ受ケタル牧師宣教師及神學校教授ヲ云フ
- 第八十八條 教職ハ本憲法第二章ノ信仰ニ基キテ宣教訓誨ス可シ
- 第八十九條 會衆ヲ牧スル教職ハ主日毎ニ會衆ト共ニ神ヲ禮拜シ神ノ聖語ヲ宣傳シ聖晚餐ノ禮典ヲ執行シ信徒ノ群ヲ牧シ又自ラ其模範トナリ年少者及洗禮志願者ニ教理問答ヲ教ヘ聖洗禮ノ禮典ヲ施シ堅信式ヲ行ヒ病者ヲ訪ネ死者ヲ葬リ婚姻式ヲ司リ正式ニ選バレタル執事ヲ任職シ執事ト共ニ戒規ヲ行ヒ、會衆ニ關スル學校及其他ノ事業ヲ管理シ神ノ國ノ擴張ヲ計ル可シ
- 第九十條 教職ハ年度毎ニ其牧セル會衆ノ禮拜洗禮堅信聖餐及陪餐者轉入轉出者就眠及葬式婚姻戒規處分除名等ニ關スル精確ナル報告書ヲ作成ス可シ數個ノ會衆ヲ兼牧セル時ハ各別個ノ帳簿ニ記録スベシ
年會議長宣教師會議長又ハ地方部會長ノ請求ヲ受ケシ時ハ會衆報告書トシテ其謄本ヲ提出ス可シ
- 第九十一條 教職ハ其牧セル會衆ノ幸福ヲ増進セシメ基督ノ教旨ヲ證明センガ為ニ會衆ノ眞正ノ自由ヲ疆大ナラシメ、國ノ内外ニ對スル傳道思想ヲ興起セシムル教育及貧困者寡婦孤兒ノ救済ニ意ヲ注ギ聖書及善良ナル宗教書類ノ弘布ニカヲ盡ス可シ
- 第九十二條 教職ハ自己ノ擔仕區域以外ノ地ニ於テハ其地ノ主任牧師ノ請求又ハ承諾ナクシテ宣教シ又ハ禮典ヲ執行スベカラズ
- 第九十三條 病氣又ハ老衰ノ故ヲ以テ教務ニ堪ヘズ又ハ其他ノ理由ニヨリテ聯合教職會ノ承認ヲ受ケテ休職セル教職ノ名籍ハ年會ノ教職名簿ニ留保ス可シ
年會書記ハ教職名簿ニ登録セル教職ニシテ二年以上聖職ニ従事セザルモノノ目錄ヲ作り聯合教職會ニ提出スベシ
聯合教職會ハ其定期會議ニ於テ該休職教職ノ名簿ヲ尚保留スルヤ否ヤヲ決定ス可シ
- 第九十四條 教職ハ年會聯合教職會及所屬地方部會へ出席ス可シ、已ヲ得ザル事故ノ為メニ缺席スル時ハ理由ヲ具シテ届出ヅベシ

第二十一章 傳道師

- 第九十五條 傳道師トハ未按手者ニシテ會衆ノ為ニ従事スル者ヲ云フ
- 第九十六條 傳道師ハ本憲法第二章ノ信仰ニ基キテ聯合教職會ノ監督ノ下ニ宣教シ且訓誨ス可シ
- 第九十七條 傳道師ハ神ノ聖語ヲ宣傳シ會衆ノ模範トナリ年少者及洗禮志願者ニ教理問答ヲ教ヘ弱者ヲ慰訪シ神ノ國ノ擴張ヲ計ル可シ
- 第九十八條 傳道師ハ擔任教職ノ委任ヲ受ケテ會衆ノ為ニ禮拜葬式及婚姻式ヲ司リ又會衆ニ屬スル學校及其他ノ事務ヲ取扱フコトヲ得
- 第九十九條 傳道師ハ洗禮、晚餐ノ二禮典及堅信式ヲ司ルコトヲ得ズ但臨終ノ病者ガ前項ノ式典ヲ志願シ教職ヲ招クノ暇ナキ場合ニ於テノミ之ヲ執行スルコトヲ得、此場合ニ於テハ傳道師ハ其事情ヲ具シテ擔任教職ニ届出ヅベシ、擔任教職ハ之ヲ聯合教職會ノ定期會議ニ申告シテ事後承諾ヲ請フ可シ
- 第百 條 傳道師ハ年會及所屬地方部會ニ出席スベシ、已ムヲ得ザル事故ノ為ニ缺席スル時ハ理由ヲ具シテ届出ヅベシ
- 第百 一條 傳道師ガ就任シタル時ハ直ニ聯合教職會議長ニ届出ヅ可シ、辭職スル時ハ辭表ヲ擔任教職ニ提出ス可シ、擔任教職ハ直ニ之ヲ地方部會長ヲ經テ聯合教職會議長ノ許可ヲ受ク可シ

第二十二章 教職志願手續

- 第百 二條 教職志願者ハ總會開會ヨリ四ヶ月以前ニ履歷書及成規ノ推薦書ヲ添ヘタル聯合教職會議長宛テノ志願書ヲ聯合行政委員ニ提出ス可シ聯合行政委員ノ承認ヲ得タル後之ヲ三人ノ試験委員ニ交附シテ試験セシムベシ
- 第百 三條 教職志願者ハ滿二十五歳以上ノ者ニシテ福音ルーテル教會ノ神學校ヲ卒業シ日本福音ルーテル教會ニ於テニケ年以上教務ニ従事シ内外教職二名ノ推薦アルモノニ限ル前項規定ノ資格ヲ具備セザルモノハ聯合教職會ノ推薦アル場合ニ限り志願書ヲ提出スルコトヲ得
- 第百 四條 教職志願者ノ受験科目ハ左ノ如シ
- 一、聖書緒論 二、辨證學 三、舊新約聖書神學 四、聖書譯義學
五、教義神學 六、教會歷史 七、教理歷史 八、信条神學
九、牧會神學 十、聖書解譯 十一、基督教倫理
十二、說教 十三、日本福音ルーテル教會憲法及協約
十四、教職志願理由 十五、信仰告白
- 第百 五條 志願者ハ數回ニ亙リテ受験シ若クハ不合格科目ニ就テ再試験ヲ受クルコトヲ得
試験場ハ聯合教職會議員ニ開放スベシ
- 第百 六條 試験委員ハ試験ノ成績ヲ聯合教職會ニ報告ス可シ
聯合教職會ハ成績佳良ナル受験者ノ許否ヲ投票ニ問ヒ四分ノ三以上ノ可決ヲ得タルモノヲ合格トス聯合教職會議長ハ之ニ教職試験合格證明書ヲ交附スベシ
教職試験合格證明書ニハ聯合教職會議長及試験委員之ニ署名ス可シ

- 第百七條 按手禮施行ノ期日場所及執行者ハ聯合教職會ニ於テ決定ス可シ
 第百八條 按手禮ヲ受ケタル教職ハ本憲法ノ原本ニ署名ス可シ、署名シタル教職ハ總テ年會正議員及聯合教職會議員ノ資格ヲ有ス

第二十三章 傳道師志願手續

- 第百九條 傳道師志願者ハ所属地方部會長ヲ經テ履歷書ヲ添ヘタル志願書ヲ聯合教職會議長ニ提出ス可シ
 志願者ハ指定ノ時日ト場所ニ於テ試験ヲ受ク可シ
 但シ福音ルーテル教會ノ神學校ヲ卒業セル者ハ試験ヲ要セズ
 第百十條 傳道師志願書ニハ所属會衆擔任教職ノ推薦書ヲ添フ可シ
 第百十一條 傳道師志願者ノ受験科目ハ左ノ如シ
 一、舊新約聖書神學 二、教會史及教理史ノ大要 三、聖書解譯
 四、教理問答 五、牧會學大意 六、說教
 七、日本福音ルーテル教會憲法及協約 八、傳道師志願理由
 九、信仰告白
 第百十二條 志願者ニシテ日本福音ルーテル教會ニ關係アル團體又ハ他ノ教會ニテ三ヶ年以上傳道師タリシ名譽證明書ヲ有スルモノ又ハ總會ガ承認セル神學校ニ於テ正規ノ學科ヲ修了セル證明書ヲ有セル者ハ受験科目ノ減少セラル、コトヲ得
 但教理問答、憲法及協約、志願理由及信仰告白ノ四科目ヲ除クコトヲ得ズ
 第百十三條 本章ニ規定セザル事項ハ教職志願手續ニ準據ス

第七編 戒 規

第二十四章 信徒ニ對スル戒規

- 第百十四條 神ノ命令ト基督ノ聖訓ニ違犯シ又ハ本憲法ノ規程ニ背キ、總會ノ決議ニ服セザル信徒ニ對シテハ馬太傳第十八章第十五節乃至第十七節ニヨリテ先ヅ其違犯ヲ認メタル者若クハ牧師ガ私カニ之ニ誨告シ、次ニ證蹟ニヨリテ戒飾ス可シ、若シ之ニ服從セザル時ハ教會役員會ニ托シテ之ヲ審判セシム可シ
 第百十五條 講義所ニ在リテハ牧師ハ地方部内ノ貳名以上ノ教職ト共ニ審判ヲ行フ可シ
 第百十六條 信徒ニ對スル戒規處分ハ左ノ如シ
 一、聖餐停止
 二、除名
 第百十七條 除名處分ヲナシタル時ハ禮拜式ノ席上ニ於テ之ヲ公告ス可シ
 除名ヨリ復歸ヲ許可スル時モ亦然カス可シ
 第百十八條 戒規處分ノ宣告ヲ受ケクル信徒ニシテ之ニ不服ナル時ハ一ヶ月ノ期間内ニ之ヲ所属地方部會ニ控訴スルコトヲ得
 前項ノ場合ニ於テハ地方部會長ハ他ノ二名ノ教職ト共ニ之ヲ審査判決ス可シ
 第百十九條 前條第二項ノ判決ニ對シ不服ナル時ハ被告ハ一ヶ月ノ期間内ニ更ニ之ヲ總會ニ上告スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ聯合行政委員之ヲ審査判決ス可シ

第二十五章 教職及傳道師ニ關スル戒規

第二百十條 教職及傳道師ニシテ左ノ事項ニ該當スルモノハ戒規ニ付セラル可シ

- 一、本憲法第二章ニ記載セル信仰ト抵觸セル教義ヲ宣傳シ又ハ教訓シタル者
- 二、道徳上明カニ聖職ノ資格ト一致セザル行為アル者
- 三、故意ニ本憲法ニ背反シ若クハ總會ノ決議ヲ無視シ又ハ廃棄シタル者

第百廿一條 教職及傳道師ニ對スル制裁左ノ如シ

- 一、陰密ノ警告若クハ譴責
- 二、公然ノ警告若クハ譴責
- 三、指定期間又ハ悔悛ノ事實ノ證明サルル迄ノ職權停止
- 四、免職及試験合格證明書ノ返還
- 五、除名

第百廿二條 教職ニ對スル制裁ハ聯合教職會ノ名ニ於テ傳道師ニ對スル制裁ハ總會ノ名ニ於テ執行セラル

第百廿三條 教會員ハ其教會ノ教職又ハ傳道師ニ對シテ訴訟ヲ提起スルコトヲ得
前項ノ場合ニ於テハ投票權有スル會員三名以上ノ連署ヲ以テ教會役員會ニ提訴スベシ

前項ノ訴訟ニ關スル役員會ノ議長ハ他ノ教職ヲ以テ之ニ當ラシム可シ

第百廿四條 前條ノ訴訟ガ正當ニシテ被告ノ犯罪ノ證據明確ナルヲ認ムル時ハ教會役員會ハ該訴狀ヲ所屬地方部會長ヲ經テ聯合行政委員ニ申達ス可シ
告訴セテレタル教職ガ所屬地方部會長ナル時ハ直接ニ聯合行政委員ニ申達スベシ教職若シクハ傳道師ニ對スル告訴狀ハ犯罪事項ヲ詳記シ且精確ナル證據ヲ舉示スルヲ要ス

第百廿五條 教會役員會ガ訴訟ヲ受理セザル時若クハ講義所ニ在リテハ告訴者ハ直接所屬地方部會長ヲ經テ總會ニ提訴スルコトヲ得

第百廿六條 教職若クハ傳道師ヨリ他ノ教職若クハ傳道師ニ對スル告訴ヲナス場合ニハ三名以上ノ連署ヲ以テ聯合行政委員ニ提出ス可シ

此ノ場合ニ於ケル告訴狀ノ書式ハ第二百二十四條第三項ノ規定ニ準ズ

第百廿七條 聯合行政委員會ハ重大ナラザル訴訟事件ニ對シ略式審判ヲ行ヒ第二百一十一條第一號及第二號ノ處分ヲ宣告スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ聯合行政委員ハ次ノ總會及聯合教職會ニ之ヲ報告シテ其承諾ヲ求ム可シ

第百廿八條 前條ノ審判ニ對シ不服ナル時ハ一ヶ月ノ期間内ニ正式審判ノ請求ヲナスコトヲ得

第百廿九條 教職ニ對スル訴訟ガ重大ナル事件ナル時若クハ被告ガ前條ノ請求ヲナセル時ハ聯合行政委員會ハ之ヲ聯合教職會議長ニ具申シテ該會議ノ正式審判ニ委スベシ

第百三十條 正式審判ノ請求ヲ受ケタル聯合教職會議長ハ速ニ三名ノ調査委員ヲ選定シテ之ヲ調査セシム可シ

第百卅一條 調査委員ハ調査前若クハ調査中、被告ノ重大ナル不道徳若クハ犯罪ヲ認ムル時ハ審判決定迄被告ノ職權停止ヲ聯合教職會議長ニ請求ス可シ

此請求ヲ受ケタル時ハ聯合教職會議長ハ各教職ノ意見ヲ徴シ四分ノ三以上ノ賛成ヲ得テ之ヲ許可スルコト

- 第百卅二條 調査委員ハ調査報告書ヲ作製シテ其意見ヲ附シテ之ヲ報告ス可シ
- 第百卅三條 調査報告書ニヨリテ有罪ト認ムル時ハ聯合教職會議長ハ被告ト血族姻戚ノ關係ナキ教職六名ヲ審判委員ニ選定ス可シ、但内外教職各三名トス
- 第百卅四條 聯合教職會議長ハ審判委員ノ姓名及審判ノ期日ト場所ヲ原告被告ニ通知ス可シ被告ハ通知ヲ受ケシヨリ五日以内ニ其理由ヲ具シテ審判委員ニ對スル忌避ノ申立ヲ為スコトヲ得
- 第百卅五條 審判ノ順序ハ左ノ如ク行ハル可シ
- 一、事實及證據調査
 - 二、被告ノ辯護
- 第百卅六條 審判委員ハ其調査書ト判決主文及理由書ヲ聯合教職會議長ニ廻附ス可シ
- 審判委員ノ判決ノ當否ハ聯合教職會議ノ投票ニ問フ可シ
- 議員四分ノ三以上ノ賛成ニヨリテ判決ヲ確定ス可シ
- 第百卅七條 被告タル傳道師ガ正式審判ヲ請求シタルトキ若クハ聯合行政委員會ニ於テ傳道師ニ關スル告訴ガ重大ニシテ正式審判ノ必要ヲ認メタル時ハ之ヲ年會議長ニ具申ス可シ
- 第百卅八條 年會議長ガ前條ノ請求ヲ受ケタル時ハ總會正議員中ヨリ調査委員内外各壹名、審判委員内外各二名ヲ選定シ審査判決セシム可シ
- 教職ニ對スル訴訟手續ノ規定ハ傳道師ノ場合ニ之ヲ準用ス

附 則

- 第一條 日本福音ルーテル教會ノ年度ハ一月一日ニ始リ十二月三十一日ニ終ル
- 第二條 本憲法ハ定期年會出席議員四分ノ三以上ノ可決ヲ得ルニ非レバ改竄、修正添加又ハ刪除スルコトヲ得ズ、斯カル場合ニ於テハ先ヅ前回ノ定期年會ニ於テ三名以上ノ正議員若クハ地方部會ヨリ議案ヲ提出スルコトヲ要ス、但第二章第二條乃至第五條ヲ除ク外當分此規定ニ據ラズシテ改正スルコトヲ得
- 第三條 本憲法ハ大正九年四月十日ヨリ施行ス

資料引用

1920年 第1回總會資料

亜米利加一致ルーテル教會日本宣教師會及日本福音ルーテル教會ノ間ニ締結セル

協同基礎章項

第一章 協同團體ノ性質

一、宣教師會ノ議員

イ、成規ノ任務ニヨリ少ナクトモ二年以上日本ニ在住セル亜米利加ルーテル教會宣教師ハ總テ宣教師會ノ正議員タル可シ

ロ、日本在住二年未滿ノ宣教師ハ總テ準議員タル可シ

二、年會ノ議員

イ、總テノ按手禮ヲ受ケタル日本福音ルーテル教會ノ牧師、ルーテル教會傳道會社ニ於テ五年間繼續奉職セル總テノ未按手ノ日本福音ルーテル教會傳道師、及少クトモ牧師俸給ノ二分ノ一ヲ負擔スル組織サレタル地方教會ノ選出スル信徒代議員ハ年會ノ正議員タル可シ、(牧師俸給四分ノ一ヲ負擔スル教會ハ一名ノ投票権アル代議員ヲ出席セシムルヲ得ベク、俸給金額ヲ負擔スル教會ハ二名ノ投票権アル代議員ヲ出席セシムルヲ得ベシ)

ロ、前項規定以外ノ總テノ未按手ノ日本傳道師、及牧師俸給四分ノ一ヲ負擔スルニ至ラザル教會ノ選出スル總テノ代議員ハ年會ノ準議員タル可シ

第二章 集會並ニ組織ノ一般目的

一、前記ノ協同團體ハ各此ノ協同基礎章項ノ範圍内ニ於テ各自別個ノ組織ヲ為シ之ヲ支持シ其憲法及附則ヲ制定シ且其役員ヲ選舉ス可シ

此兩團體相互ニ協定セル事項左ノ如シ

イ、兩團體ハ同時同所ニ毎年ノ集會ヲ開ク可キ事

ロ、此毎年ノ集會ハ日本ニ於ケルルーテル教會ノ總會ト稱セラル可キ事

ハ、此總會ハ毎年春季ニ開會ス可キ事

ニ、開會ノ禮拜式並ニ修養及宣教ヲ目的トスル他ノ集會ハ一般的ニ催サル可ク、兩團體ノ議事會ハ各自別室ニ開カル可ク該議事會ハ各宣教師會及年會ト稱セラル可キ事

ホ、一室ノ議員ハ招待ニヨルニ非レバ他室ノ議事會ニ出席ス可カラザル事

二、更ニ左ノ事項ヲ協定ス、即チ年會議員ガ總會出席ノ為ニ要スル旅費及宿泊費ハ當分ノ中全額ノ三分ノ二ヲ傳道會社ニテ負擔シ殘額三分ノ一ハ日本教會ニ賦課ス可ク、且該額ハ年會ニヨリテ各教會ニ割當テラル可キ事(信徒代議員ノ出席費用ハ總テ其選出教會ノ負擔タル可シ)

三、各協同團體ハ宣教の事業ニ關スル總テノ問題ヲ討議シ且決議スル權利及義務ヲ有スベキ事

四、左ノ問題ニ關スル決議若クハ他ノ決定ハ各會議ガ最後ノ形式ニ於テ該決議若クハ決定ヲ採用スルニ非ル限リハ實行セラレ若クハ阻止セラル可ラズ

イ、新シキ場所ニ事業ヲ開始シ若クハ宣教運動ノ新形式ニ着手スル件

ロ、日本牧師及傳道師ノ任免ニ關スル件

- ハ、牧師、傳道師及宣教師ノ赴任及轉任ニ關スル件
(注意、聯合行政委員ハ臨機ノ處置ヲナシ得ベシ)
- 五、神學校ニ於ル教授ノ任命及其管理上一切ノ問題ハ兩會議ニ於テ討議シ又ハ推薦スルコトヲ得、但斯カル事項ニ於ル最終ノ實權ハ財團ノ掌握スル所ナリトス
- 六、年會所屬ノ五個ノ教會ガ全然自給スルニ至ラバ日本福音ルーテル教會獨立總會ヲ組織シ得ベキ事ヲ協定ス
- 七、日本ニ於ケルルーテル教會ノ傳道地ハ若干ノ地方部會ニ區分セラレ、其境界ハ總會ニヨリテ定メラル可ク、且時々變更セラルルヲ得ベシ、且地方部會ハ定住牧師或ハ傳道師ヲ有スル三個以上ノ傳道地ニヨリテノミ組織セラル
 - イ、兩協同團體ニ屬スル正准議員ハ總テ其定住スル地方部會ノ議員タル可シ
 - ロ、各地方部會ハ左ノ目的ノ為ニ毎年一回開會ス可シ、其地方部内事業ノ擴張及發展ノ方法ヲ討議スル為メ、並ニ其事業ノ遂行ニ關スル他ノ總テノ問題ヲ評議スル為メ、且總會若クハ聯合行政委員會ニ提出ス可キ同種ノ問題ニ關セル決議ヲ作成スル為メ
 - ハ、各地方部會ハ部會長及書記ノ選舉シ、一ノ團體ヲ組織ス可シ、但總會ニヨリテ議定セル範圍外ニ於テハ何等立法及行政ノ權ヲ有スル事ナシ
- 二、此集會ニ出席スル議員ノ旅費ハ傳道會社會計ヨリ支給セラル可シ、但各地方部會ハ成ル可ク集會中其議員ノ宿泊費ヲ負擔ス可キモノトス

第三章 聯合行政委員會

- 一、兩協同團體ノ行政權並ニ總テノ教會及傳道事業ノ一般管理權ハ各會議ヨリ三名宛選舉セラレタル合計六名ヨリ成ル聯合行政委員會之ヲ有ス可シ
- 二、聯合行政委員會ハ更ニ左ノ職責ヲ有ス可シ
 - イ、總會ノ決議ガ實行セラレ居ル否ヤヲ調査スル事、總會ヨリ委任セラルル總テノ事務ヲ處理スル事、必要ノ場合ニハ臨機ノ處置ヲナシ之ヲ次回ノ總會ニ報告シテ其承認ヲ求ム可キ事
 - ロ、兩協同團體ノ中ニ立チテ兩者間ニ生ズル難問題ノ調停ニ勗ムル事
 - ハ、總テ給費學生ガ傳道會社ニヨリテ受ケ容レラルル以前ニ於テ此委員會ノ推薦ヲ必要トス
- ニ、ルーテル教會以下ノ教會若クハ傳道會社ヨリ轉入スル牧師若クハ傳道師ガ年會ニヨリテ承認セラルル以前ニ先ヅ此ノ委員ニヨリテ推薦セラル可シ
- ホ、牧師及宣教師ニ對スル重大ナル戒規問題ハ此ノ委員先ヅ眞摯敬虔ナル考慮ヲ以テ處断ス可ク、而テ其必要ヲ認メタル時ニハ最終判決ヲ求ムル為ニ該事件ヲ聯合教職會ニ提出ス可シ、假令其必要ヲ認メザル時ト雖モ、總テ斯ノ如キ事件ハ之ヲ聯合教職會ニ報告シテ其承認ヲ求ム可シ、被告ハ聯合行政委員會ノ處分ニ對シ聯合教職會ニ控訴スルノ權利ヲ有ス
- ヘ、傳道師ニ對シテ重大ナル戒規問題ノ生ゼシ場合ニハ聯合行政委員會ハ其必要ヲ認メタル時ハ總會ノ兩會議ニ之ヲ提出スベシ、未按手ノ傳道師ヲ懲戒スル權能ハ單ニ此會議ノミ之ヲ有ス、斯ノ如キ場合ニ於テハ四分ノ三以上ノ多數投票ヲ必要トス
- ト、牧師若クハ傳道師ノ辭任ヲ許可シ或ハ退職ヲ命ズル以前ニ此委員會ノ承認ヲ經ルヲ要ス
- チ、此委員會ハ満場一致ノ記名投票ニヨリテ總會ノ決議若クハ決定ヲ否認スルコトヲ得、此否認ハ總會閉會前ニ於テ為ス可シ、但兩會議ノ四分ノ三以上ノ多

數記名投票ハ其否認ニ反對シテ該決議或ハ決定ヲ通過セシムルヲ得
リ、此委員會ハ地方教會ノ維持費ノ許ス範圍内ニ於テ望マシキ事業ヲ計畫スルコ
トヲ勸奨ス可シ

第四章 聯合教職會

- 一、兩協同團體ノ按手禮ヲ受ケタル教職ハ一個ノ聯合教職會ヲ組織ス
- 二、聯合教職會ハ少ナクトモ總會開會中一回會合ス可シ
- 三、聯合教職會ハ其議長ヲ選舉ス可シ、但兩會議ノ書記ハ又聯合教職會ノ書記トシテ
日本文及英文ニテ總テ其處理セル事項ノ記録ヲ作成ス可シ
- 四、聯合教職會ハ其議員中ヨリ牧師二名及宣教師二名ヨリ成ル按手禮委員ヲ選舉ス可
シ、該委員ハ按手禮志願者ヲ試験スルヲ以テ其職責トス、總テ試験ノ結果ハ委員
全部ガ正式ニ署名セル文書ヲ以テ聯合教職會ニ提出セラルルヲ要ス
- 五、聯合教職會ハ亜米利加傳道局ヨリ正當ニ其機能ヲ與ヘラレタル時ハ、總テ按手禮
ヲ受クル資格ヲ具備セル志願者ニ按手禮ヲ施ス可シ、但出席議員四分ノ三以上ノ
賛成投票アルニ非レバ志願者ニ按手禮ヲ施ス可ラズ
- 六、聯合教職會ハ按手禮執行ノ都度議員ノ一名ヲ執行者ニ他ノ若干議員ヲ補助執行者
ニ指名ス可シ
- 七、ルーテル教會以外ノ傳道會社若クハ教會ヨリ轉入スル牧師ハ年會ノ正議員タルヲ
得ル以前ニ按手禮委員ニヨリテ試験セラレ且聯合教職會ニヨリテ承認セラレザ
ル可ラズ
- 八、ルーテル教會以外ノ傳道會社ヨリ轉入スル牧師及傳道師ハ正式ノ任務ニ就ク以前
ニ按手禮委員ニヨリテ試験セラレザル可ラズ
- 九、現ニ傳道ニ従事セル總テノ議員ノ三分ノ二ヲ以テ會議成立定數トス、但總會出席
中ノ議員ニシテ總テ聯合教職會開催ノ時日及場所ニツキ正式ニ通知ヲ受ケザル
モノアルトキハ該會議ノ總テノ決定ハ無効タル可シ

第五章 聯合定則

- 一、財 政
 - イ、各傳道地ハ其地方事業ニ要スル年度豫算ヲ編成シ、少クトモ定期總會ノ一ヶ
月前ニ宣教師會ノ財政委員會ニ之ヲ提出ス可シ、總テノ地方豫算ハ其地方ノ
主任牧師若クハ傳道師ト協同宣教師トノ連署ヲ要ス
 - ロ、各傳道地ヨリ提出セル地方豫算ニ基キテ宣教師會ノ財政委員會ハ總テノ傳道
事業ニ對スル年度豫算ヲ編成シ、之ヲ聯合行政委員會ニ送附シテ其承認ヲ求
メ聯合行政委員會ヲ通ジテ兩會議ニ提出シ最後ノ決定ヲ求ム可キノモノト
ス
 - ハ、各傳道地ニ於ル傳道會社ノ財産ニ關スル總テノ問題ニ就テハ年會ハ唯顧問機
關ノ資格ニテ參與ス可シ
 - ニ、各傳道地ノ確定豫算以外臨時補助費ノ請求ハ總テ宣教師會財政委員會ノ承認
ヲ經タル後、聯合行政委員會ニ提出シ最後ノ決定ヲ求ム可シ
- 二、議事委員會ハ每總會ノ最初ノ議事會ニ際シテ選定セラレタル各會議々員二名宛ヨ
リ成立ス、其職責左ノ如シ
 - イ、議事委員會ハ常ニ一定時ニ一會議ノ附議ス可キ議事日程ヲ作成スルコトニ盡
力シ、以テ總テノ議定ガ兩會議ニテ議了シ得ラルル様ニ配列スル事
 - ロ、議事委員會ハ一會議ニテ通過シタル決議ヲ直ニ他ノ會議ニ廻送シ討議ニ附ス

可シ

ハ、議事委員會ハ同一動議或ハ決議ガ再度各會議ノ討議ニ付セラレ尚兩會議間ノ一致ヲ缺キタル時直チニ之ヲ聯合行政委員會ニ通告ス可シ、聯合行政委員會ハ其際該問題ヲ慎重ニ討議シ之ニ關スル聯合決議ヲ兩會議ニ提出ス可シ、而シテ兩會議ニヨリテ其儘承認セラルルニ非レバ該問題ハ全然卓上ニ置カル可シ

ニ、議事委員會ハ兩會議ニ於テ協定セラレタル決議及決定ヲ其都度兩會議ニ於テ發表ス可シ

三、按手禮、聯合教職會ノ決議ヲ俟ツベキ特別ナル場合ヲ除キ、按手禮ニ關スル通常ノ手續ハ左ノ如シ

イ、本教會神學校ノ卒業者

ロ、二ヶ年間ノ満足ナル實地傳道

ハ、志願者ノ功績及操行ヲ熟知セル内外教職各一名ヨリ文書ヲ以テセル推薦

ニ、按手禮委員ノ施ス試験及推薦

ホ、聯合教職會ノ承認

四、聯合行政委員會ハ少ク共毎年一回臨時會ヲ開キ傳道地ニ於ケル一般情況ヲ討議シ緊急ヲ要スル事件ヲ處理スベシ、此集會ノ期日ト場所ハ少クトモ二週間以前ニ協同團體ノ總テノ會員ニ通知ス可シ

五、兩協同團體ノ特別集會ハ聯合行政委員會ガ全會一致ニテ其必要ヲ認メタル時若クハ兩議會ヲ組織スル全會員ノ四分ノ三ガ之ヲ要求セル時ハ之ヲ開クコトヲ得

第六章 教會及地方事業

一、總テノ地方事業ニ於テ主任者タル日本牧師若クハ傳道師ト、公式ニ任命セラレタル宣教師トハ、男子タルト女子タルトヲ問ハズ、基督ニ於テ一心ナルモノ又獨一ノ主ノ下ニ於ケル同労者トシテ、總テノ事ニ於テ眞正ノ調和ヲ保チテ相提携ス可シ

二、各傳道地ニ於ケル傳道事業ガ軋轢ナクシテ行ハレンガ為メニ、傳道事業ニ於ケル凡テノ地方補助者ハ婦人傳道者及幼稚園保姆ト共ニ、常ニ其地ニ於ル其事業ノ主任者トノ間ニ合意ニヨリテノミ雇聘セラレ若シクハ解職セラル可シ、而シテ斯卡ル補助者ハ其事業ニ應ジテ、一方又ハ地方ノ直接取締又ハ監督ノ下ニ在ル可キモ彼等ノ働作ニ關スル一般的計劃ハ可成双方協議ノ上ニテ為サル可キモノトス

三、信徒ノ地方團體ハ日本ニ於ケルルーテル教會總會ノ兩會議ニヨリテ規定セラレタ一定ノ條項ニ適合セル時組織セル教會トシテ承認セラル可シ

第七章 改正

本協同基礎章項ハ定期總會ニ於テ兩會議ノ三分ノ二ノ多數投票ニヨルニ非レバ改正スルコトヲ得ズ、但斯卡ル改正案ハ先ヅ前回總會ニ提出セラレタルモノナルヲ要ス

資料引用

1920年4月 第1回總會

REPORT OF COMMITTEE ON INVESTIGATION AND
LOCATION OF GIRLS, SCHOOL.

In connection with the Girls' School question, we were pleased to see in the Minutes of the Board's Sept. 1919 meeting that the idea of such a school is approved, and that, to quote from their Minutes, "The whole matter of a Girls' School in Japan be submitted to the Executive Board of the Women's Society for their favorable consideration, and that the Secretary for Japan be instructed to make a personal presentation of the case, if deemed necessary."

In view of this action your Committee thought it advisable to have something more concrete to present to the Board, and the Committee, considering all things in connection with the distribution of Christian work and the lay of our own work, feeling that Kurume presented the best field for such a school, visited that city and with the local pastor went over the question.

The results of the investigation were embodied in a motion recommending Kurume as the location for the Girls' School and requesting the Board to send out \$35,000.00 at an early date to invest in land before prices advance too much. This motion, as you know, was adopted unanimously by the Mission, and the papers sent at once to the Board on Feb. 3rd of this year.

As we are now awaiting the reply of the Board there seems nothing more to do just now, except what can be done thru the power of prayer. We would, therefore, like to request the members of the Mission to keep this matter in mind as a matter for special prayer, as we feel that this school is especially urgent.

(A. 24)

Respectfully submitted,
L. S. G. MILLER
J. P. NIELSEN
D. G. M. BACH

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1920.4.6-13

日本福音ルーテル教會總會記録

豫告の通り大正九年四月六日熊本市に開催せられたる第一回總會の概況左の如し。和佐恒也氏は夫人の重患のため、トラクソン氏は夫人出産のため缺席せられたるが、其他の内外教役者は全部來會せられたり。

第一日(六日、火曜)

午後七時、水道町ルーテル教會に於て開會禮拜式執行。宣教師會議長ネルセン氏司會、米村久留米教會牧師の「献身」と題する説教あり。年會議長山内直丸氏の司式にて懺悔式並に聖餐式を執行す。陪餐者男子三十四名婦人十七名なり。八時四十分閉會。

十分間休憩の後、青山彦太郎氏の司會にて熊本教會主催の歓迎會開かる。青山氏の歓迎の辭に對し、鷲山大牟田教會牧師の答辭あり。ヘプナー教師の祝辭を以て閉會す。熊本教會より茶菓の饗應あり。九時半散會す。

(以下主として年會側の記録なり、宣教師會にては英文を以て別に記録を出版せらる可し)

午後十時年會員一同は其宿所九州學院寄宿舍の一室に會合し山内議長より一言の挨拶あり。懇談會を開き十一時散會。

第二日(七日、水曜)

午前九時、年會々議室に宛てられたる九州學院修身教室に於て祈禱會を開く。北古賀吉太郎氏司會。

九時四十分、第一回の議事會を開く。山内議長の開會の宣言の後議員點呼を行ふ。正議員拾名。准議員六名なり。議長は傍聴者として武谷、椎名、高見三氏を議場に紹介す。

松本書記は缺席者和佐恒也氏の請暇届を朗讀し、満場異議なく可決す。

山内議長の發議にて新憲法の下に於ける總會なれば憲法第二章に對して宣誓式を行ふ。

議長は武藤醇氏を投票係に指名し、議事委員の選挙を行ふ。

三浦冢、値賀虎之助兩氏當選直に就任す。

松本書記の指名により渡邊潔伊藤斐夫兩氏補助書記として就任す。

午前十一時十分報告會に移り山内議長、松本書記、米村るうてる發行人の諸報告あり、十二時半閉會。

晝餐は食堂に於て内外教役者食卓を共にす。食後日本教職會を開き、聯合教職會の協議事項の打合をなす。

午後三時議事會開會、議事に入る。(便宜のため議定事項は一纏にして末段に掲ぐ。)午後三時五十分閉會。本日午前には川崎神學校教授、午後には遠山九州學院長の來訪あり。

宣教師會々議室に於て兩會出席議員一同、熊本教會よりの茶菓の饗を受く。

午後五時、宣教師會々議室に於て聯合教職會を開く。出席議員日本教職八名、外人教職十一名。衆議により瀧本幸吉郎氏座長席に就き、議長選挙を行ふ。二回投票の結果、瀧本氏議長に當選す。試験委員の選挙に移り、數回投票の結果、

米村常吉、ミラー、瀧本幸吉郎、ネルセンの四名當選す。

教職志願の志願手續の件より、憲法の効力問題に關し議論百出し、何等決定に至らずして六時半閉會す。

夜は議事委員會開催、又教會に於ては傳道説教會を催し

信仰と力 渡邊 潔氏

時代思潮と基督教 瀧本幸吉郎氏

の説教ありき。

第三日(八日、木曜)

午前九時三十分、高島牧師の司會にて祈祷會を開く。

同十時、議事會開催。瀧本氏より聯合教職會の報告あり。

松本書記は和佐恒也氏夫人の病氣に關する和佐氏の書簡を朗讀し、年會より見舞状を出すことを提議し、満場一致可決す。

憲法及び協同基礎章次修正委員を投票を以て選挙す。瀧本、値賀、松本三氏を當選す。

値賀議事委員は宣教師會の決議事項を報告す。直に之を上程して附議す。十二時四十分晝餐のため閉會。

午後は二時より聯合教職會開催せらる。昨日に引續き討議をなす。結局、高島、石松兩氏の教職試験を最近の地方部會に於て執行し、若し之に合格せば聯合教職會を開くことなくして直に按手禮を授くることを決定す。山内氏は年會側の意向として右兩氏と同時に渡邊、鷲山二氏にも教職試験を認許す可しとの動議を呈出せしが之は議決に至らずして三時半閉會す。

熊本教會よりの茶菓の饗應を受け、午後四時半より又議事會に入る。

米村氏より女學院新設候補地として久留米を適當とする旨、説明あり。

松本書記は會計代理として本年會豫算案を提出し之を附議し各教會の負擔額を決定す。午後五時半閉會す。夜は聯合議事委員會及び憲法修正委員會あり、教會に於ては傳道説教會を開く

ナザレの耶蘇 伊藤斐夫君

基督者の信仰 高島貞久君

第四日(九日、金曜)

午前九時半青山彦太郎氏の司會にて祈祷會を開く。

十時より議事會に入る。松本書記は昨日の聯合教職會議の報告をなす。

議事委員より宣教師會の決議事項の報告あり。それに就きて研究し且つ議案八題を審議決定す。午後零時四十分休憩。

午後二時再開。川瀬牧師の祈祷を以て議事に入る。

教役者修養會開催の件、教會自給促進法等重要なる協議あり、午後三時半休憩、宣教師會々議室に於て熊本教會よりの茶菓の饗を受く。

午後四時五分議事會を開く。憲法修正案を上程し、午後五時三十分食事の爲め休憩

す。

午後八時、神學校講堂に於て議事會を閉き憲法修正を議し午後十時全部を終わる。

第五日(十日、土曜)

午前九時三十分本田牧師の司會にて祈祷會を開く。

同十時議事會に移り、先づ議事委員より憲法修正に關する宣教師會の決議の報告あり、議案七題を議し、年會役員並に諸委員の選舉を行ふ。別項の通り決定す。

本田牧師より緊急動議として山内直丸氏傳道二十五年を祝する為め委員を選舉して適當の方法を講ぜられん事を望む旨の發案あり。満場一致可決。

北古賀牧師よりも三浦牧師送別に關する緊急動議の提出ありしも三浦氏の辞退により撤回となれり。

午後二時閉會、二時半再開す。宣教師會の議事事項につき協議を開始し、就中、高等學校設立問題に關しては、傍聴席に在りし遠山九州學院長の意見を尋ねしに。同氏は詳細に亘りて懇切なる説明を試み、年會員の参考に供せらるゝ所ありき。教役者の轉任問題に關しては年會側より別に案を立てゝ宣教師會に諮ることゝせり。

午後五時閉會す。

此日試験委員は傳道師志願者椎名熙一郎、高島岩男兩氏の試験を執行せり。何れも通過せり。

第六日(十一日、日曜)

本日は日曜なれば年會も宣教師會も事務を中止し、午前は教會の禮拜式に列る。高見岩男氏は堅信禮式を受けて吾教會に入會せられたり。

午後は各自、自由行動を取り夜は教會の説教會に列す。

第七日(十二日、月曜)

午前九時二十五分議長の司會にて讚美、祈祷などの後、議事會に入る。

議事委員より宣教師會の決議報告あり、それに就て討議中、宣教師會より聯合懇談會を開きて東京傳道につき主任牧師の説明を聴取し、向後の傳道方針等協議したしとの交渉あり、仍ち議事を中止して一同宣教師會々議室に會合。正午に及びて散會す。

午後二時半。議事會を開く。主として教役者任地問題を附議す。午後六時三十分休憩。

午後八時、神學部講堂に於て更に議事を繼續し午後十時に及びしも尚ほ決定を見ず、問題を明日に残して閉會す。

第八日(十三日、火曜)

午前十時、數名の祈祷の後、議事會を開く。任地問題は漸くにして大体の決定を見れば午後零時三十五分、松本書記の祈祷を以て一先づ閉會す。

山内議長は郷里和歌山に立ち寄りて歸らるゝ關係より午後の急行にて出發の筈なれば總會開期中同氏の在職廿五年祝賀會を催す機會なかりしを遺憾とし、午前十一時、特に同氏の為めに一八一の讚美を歌ひ、瀧本、米村兩氏の祝辞あり、米村同氏のために感謝及び祈祷を捧ぐ。

午後二時十五分最後の議事會を開く。議事委員より報告せる宣教師の決議事項に對して討議し、午後五時四十五分重要事項を終りたれば、宣教師會に通告して、午後五

時五十五分ウキンテル氏の司式の下に聯合閉會式を挙ぐ。讚美歌四五四を歌ひ、司會者聖書を朗読し且つ閉會の辭を述ぶ。司會者の祈禱の後、松本、米村、川瀬諸氏相次で祈禱を捧げ、頌歌四七五を歌ひ、司會者の祝禱を以て、茲に今次の總會を終了せり。

議せられたる重要事項

一、憲法修正案(可決)

修正憲法全文は協同基礎章項と共に別に印刷に附して頒布せらる可し

二、教職志願者受験認許の件

高島、石松両氏の志願を認許し、最近の地方部會の際、試験を執行し、合格せば直に按手禮を授くることに可決

三、特別傳道挙行の件

今秋全傳道地に亘りて特別傳道を行ふこと、其費用にミッション三分の二、各教會三分の一の割にて負擔すること、傳道の方法は一切委員附托に決定

四、地方部を三つに區分し、部會をひらくこと(可決)

〈東部〉は廣島以東とし、〈中部〉は廣島以西九州の中福岡縣(但し筑後一圓及び朝倉郡を除く)と大分縣(但し玖珠郡日田郡を除く)を含み、〈南部〉は中部に属せる九州各地を含む

五、神學生教育に関する件

神學校共に高等學校の卒業生にして性行學術優良なる者は米國神學校に送ること、(可決)

六、次の總會の時と場所

明年秋期、阪神地方にて開くことに決定す

七、日本教役者俸給増額の件

宣教師會の決定を是認し本年四月より實施を決定す

八、文書局創設の件(可決)

九、教育委員設置の件

凡ての教育事業に關し研究及忠告をなすものとして原案可決

十、社會慈善事業創始の件

特別會計とし一般傳道に差支なき範圍に於て經營することとし、熊本に設立することに可決

十一、會堂牧師館建設の件

東京、大牟田に會堂を、博多に牧師館を急設せるの必要を認め、ミッション・ボードに建議す

十二、教理問答急速印刷の件

譯文修正の上、至急印刷すること、可決。委員附托。

十三、總會の閉會式は聯合にて行ふこと(可決實行)

十四、教役者修養會開催の件

次の總會より修養會のために二三日を充つることに可決。委員附托。

十五、日曜學校世界大會出席るうてる教會員歡迎の件

方法は一切委員附托(可決)。

十六、教會自給促進の件

自給献金制度の創始、可決。

十七、山内牧師の在職廿五年紀念祝賀の件

(可決) 委員附托。

十八、教役者任地交迭の件

左の通決定、他は聯合行政委員に一任。山内直丸(大阪)、本田傳喜(東京)、北古賀吉太郎(佐賀)、大熊四郎(下関)、坪池全(門司)、高瀬時助(熊本)、ウキンテル(大阪)、パウラス(佐賀)、ミラー(スタイワルト氏歸國後々任として九州學院主事に任じ熊本に)、ノルマン(博多)、クーンズ(九州學院に新招聘)

十九、禮拜式文改正速成の件

(可決、委員附托。)

二十、傳道師試験執行の件

高見岩男、椎名熙一郎兩氏に試験を施行兩氏とも合格

廿一、教役者東京遊學の件

傳道補助及び遊學の目的を以て二ヶ年交代にて一名の日本教役者を東京に送ること。其の人選は聯合行政委員會に一任原案可決

廿二、神學校改善の件

神學校の程度を高め、高等科を卒へたるものを收容することし、大正十三年を以て新學年を起すこと、原案可決

廿三、眞珠續刊の件

日曜學校事業の一つとして「眞珠」を續刊し、其の經濟をミッションにて補助すること。可決

廿四、ルーテル著書翻譯出版の件(可決)

其の書目の選定共に翻譯、出版に關する一切のことは文書局に一任す

廿五、平井清君を米國神學校に留學せしむる件(可決)

(以上は年會及び宣教師會を通過したるもののみなり)

廿六、年會豫算案

右の通り決定す

一、金三百五十圓 旅費總計

一、金一百圓 宿泊費用

計金四五十圓

一、金百五十圓 右三分の一年會員擔額

一、金五十圓 印刷費

一、金五十圓 事務費

一、金二十圓 豫備費

合計金二百七十圓

右金額を左の通り割り充つ

三十圓宛(東京、熊本) 廿八圓(久留米) 廿五圓(佐賀) 二十圓(博多)

十五圓宛(大阪、名古屋、大牟田) 十二圓(日田) 十圓宛(豊橋、神戸、

下関、門司、八幡、直方、甘木、小城)

廿七、和佐牧師夫人の病氣見舞狀發送の件(可決)

廿八、教役者任期規程の件(原案否決)

- 廿九、歌米家庭制度調査委員選定の件（同）
- 三十、社會慈善事業に對する顧問選定の件（同）
- 卅一、式文急速印刷の件（同）
但改正禮拜式文の出版を急にすること
- 卅二、宣教師夫人の待遇に關する件（提出者撤回）
- 卅三、統計表用紙改良の件（可決、委員附托。）
- 卅四、教籍簿、轉會薦書用紙、會員證明書用紙調製の件（同）
- 卅五、神學校委員設置の件
之は教育委員の責任に属するを以て撤回す
- 卅六、トラクト發行の件
其必要を認め、文書局に委託
- 卅七、教會同盟加入の件
次の總會まで卓上に置く
- 卅八、傳道地整理委員設置の件
其必要を認めたるも議に至らず
（右は年會側の議に上りしも宣教師會に廻附せられず、又は廻附する必要なき決議事項なり）
- 卅九、關門に宣教師館を建設する件
宣教師會にて可決、年會にて否決
- 四十、高等女學校建設地の件
- 四十一、高等學校を他派と協同にて設立するの可否
- 四十二、聖書學校設立の件
神學校の外に豫科四ヶ年本科三ヶ年通信科二ヶ年 聖書學校を起し、此の九ヶ年の課程を修了せる者に神學校卒業者と同一の資格を與ふること
- 四十三、神學校及び聖書學校の位置に關する件
右四案は宣教師會より年會に諮問せるものなるが年會にては大体の意識を定め尚ほ教育委員をして研究せしめることとせり
- 四十四、神學生教育方針に關し當事者の説明を求むる件
年會にて可決、宣教師會に送し賛成を得たるも時間の都合にて不實行に終る
- 四十五、宣教師會より年會に對する感謝
宣教師會は憲法修正に關し年會が能く和衷協同の精神を以て其實を挙ぐることに努力せるを認め、茲に深く感謝の意を表す
- 四十六、宣教師會より年會に對する希望
宣教師會は婦人傳道師志願者少きを遺憾す。各牧師傳道師諸君は之が奨励に力を致さんことを望む

選ばれたる役員及び委員

年會議長	米村常吉
年會書記	本田傳喜
年會々計	北古賀吉太郎
宣教師會議長	ネルセン
同 副議長	リ ン
同 書記	ミラー

同 會計	スミス					
聯合行政委員	米村常吉	値賀虎之助	松本學明	ネルセン	ミラー	リパード
特別傳道委員						
委員長	リパード					
東部委員	瀧本幸吉郎	トラクソン				
中部委員	値賀虎之助	バック				
南部委員	米村常吉	リン				
文書局委員	山内直丸	ウキンテル	高島貞久	リパード	渡邊潔	バック
日曜學校委員	伊藤斐夫	ウキンテル	松本學明	リン		
新聞紙委員	米村常吉	ウキンテル				
ルーテル編輯主任	高島貞久					
修養會委員	値賀虎之助	リパード	本田傳喜	トラクソン		
日曜學校世界大會ルーテル教會員歡迎委員			東京在住の日本教役者	パウラス		
			スミス			
禮拜式文改正委員	山内直丸	ウキンテル	瀧本幸吉郎	リパード	米村常吉	
		バック				
教育委員	瀧本幸吉郎	ウキンテル	松本學明	ミラー		

以下は宣教師會の委員なり(宣教師會委員は尚ほ脱漏なきを保せず)

高等學校調査委員	ミラー	ウキンテル		
婦人傳道委員	バウス	エム・パウラス	リッパード夫人	
神學校位地調査委員	リパード	スミス	バック	
救濟事業委員	ネルセン夫人	エム・パウラス	ミラー	
新聞傳道委員	ウキンテル	リパード		
禮拜式説明書出版委員	リパード	スミス	ウキンテル	

資料引用

「るうてる」付録 1920. 5. 25 1 頁

解題・解説

第4章 充実に向けての新たな展開（1921年～1931年）

第1節 神学校の東京移転

第2節 社会福祉業の開設と九州女学院の創設

第3節 教会自給と信徒運動

資料78 東京教会会員による公開状（るうてる 1921.3.15 7頁～8頁）

1920年春から1922年春までの時期に起きた東京教会の山内直丸の転任に関する人事問題である。山内直丸は宣教開始以来、東京教会に着任してすでに9年の歳月が流れていた。教会員は、70数名を数えていた。その東京教会に全体教会の総会での人事決定が知らされると同時に東京教会会員の中から留任運動が1920年4月以降に起きた。翌年の1921年3月号『るうてる』に東京教会会員一同の名義で留任請願書と言える『東京教會に就いて』の公開状が載った。

資料79 東京教会会員による開書（るうてる 1921.6.25 6頁～7頁）

1921年2月20日付で東京教会員の代表者の数名は、山内直丸の転任人事に関する「公開状」を英訳し、連合行政委員会への怒りと失望を内に秘めて、窮状を北米一致ルーテル教会(ULCA)の、ボードの日本担当幹事ブラウンに訴えた書簡を送った。その書簡の日本語訳が6月号『るうてる』に「開書」として載っている。

資料80 夏季学校開催趣旨（るうてる 1921.6.25 7頁）

1921年6月号の機関紙「るうてる」に載った「夏季学校開催趣旨」である。主催は「献身青年祈祷團」であり、阿蘇の湯ノ谷温泉において、7月25日より31日までの一週間、開くことと呼びかけである。主な講師は九州学院長・遠山三良、日基教會牧師・佐藤繁彦、鎮西学院長・川崎升、九州学院神学部教授・久保徹、九州学院教師・ホールン、九大教授・荒川文六である。

資料81 神学校の移転決議（1921.9.12-15.第2回年会議事録19頁）

1918年夏の宣教師共同会議と秋の年会での「神学校移転」協議に関しては翌年の春のボード会議に報告された。最終的に場所の選定を最終的に決着できるようになったのは、1921年の秋に入ってからである。9月12日から15日にかけて、教役者修養会に引き続き、兵庫県有馬のユニオン教会で行われた第2回総会(年会)における協議を経て、東京を想定した移転準備を進めていった。

資料 82 神学校の移転に関する報告 (JCLM. 1921.9.12-15)

1921年9月の第2回総会において、財産の決定権を持つ、宣教師会において、神学校の移転に関する協議が先ずなされ、そこに「神学校位置調査委員会」よりの報告がされた。

資料 83 東京教会人事問題 (JCLM. 1921.9.12-15)

1920年春から1922年春までの時期に起きた東京教会の牧師人事問題が起こり、東京教会より、山内直丸を「引き続き東京教会牧師として任命を変更する」申請が連合行政委員会に提出された。これを受けて、連合行政委員会は協議を行い、申請書に対する賛否を取り、「総会決議である山内直丸を大阪に転任させる人事決定は変更しない。ただし、子供の教育問題を考慮して、山内の大阪への転任は、1921年3月まで待つこととする。山内の転任と関連する人事もこれに従うものとする」とする旨を東京教会会員に伝えた。

資料 84 石松量蔵「故ブラウン博士を憶ふ」(るうてる 1922.1.10 2頁～3頁)

当時の機関紙『るうてる』が残っているので、それに撚ると、リベリアでの伝道視察中に病で倒れて、帰らぬ人となったブラウンの死の日本への第1報は、九州学院主事のL.S.G.ミラーに電報で伝えられた。1922年1月号の『るうてる』に熊本教会の石松量蔵が書いた哀悼文である「故ブラウン博士を憶える」が残っている。

資料 85 山内直丸の人事に関する協議 (JCLM. 1922.9.9-15)

1921年9月12日から有馬で開催された第2回総会は、山内直丸を大阪から京都に再転任させる人事変更を発表した。山内直丸は総会決議による人事発令を受けて、9月下旬に新たな任地である京都に単身赴任をしたと思われる。だが、京都に腰を落ち着ける覚悟を持たなかった山内直丸は、何の理由か定かではないが、約1ヶ月を過ぎた11月上旬、事前の連絡と承諾も得ることなく、突如、東京の家族のもとに戻り、そのままルーテル教会を辞職してしまう。連合委員会ではネルセンから山内へ送られた手紙と、なぜ京都から突然引き上げたのか、その原因についての文書が読み上げられ、議論が交わされた。

資料 86 山内直丸脱会決議 (JCLM. 1922.9.9-15)

1922年2月2日、大阪での連合行政委員会は山内直丸が日本福音ルーテル教会を脱会することを認め、9月の有馬総会での連合教師会に報告した。連合教師会は、満場一致で山内の辞職報告を承認し、北米一致ルーテル教会(ULCA)のボードにその旨を伝えた。

資料 87 「C.L.ブラウンの死」哀悼文 (JCLM. 1922.9.9-15)

ブラウン死から10ヶ月を経た、1922年9月9日から16日、兵庫の有馬で日本福音ルーテル教会第3回総会が開かれ、宣教師会は議長ネルセンと書記ホルンの連名で、哀悼文を作成し、特別決議を行い、それをボードに送付した。

資料 88 稲富肇の招聘と按手礼執行に関する決議 (JCLM. 1922.9.9-15)

1911年9月、久留米教会出身で19歳になった稲富肇はウィンテルとネルセンの斡旋により、ネブラスカ州ブレリア市のダナ・カレッジに留学した。その後、1921年9月、フィラデルフィアにあるマント・エアリー神学校に編入し、ギリシャ語、新約聖書釈義を専攻して、1922年6月に神学士号(B.D)を取得すると共に、同月、稲富はウインズコンシン州ラシン市で開催されたデンマーク一致ルーテル教会のシノッド総会の中で、日本人のルーテル教会員として最初の教職授任按手式を受けることになる。ただし、稲富のアメリカでの按手は、日本での招聘問題が絡んでいたこともあり、ボード及び日本の教会・宣教師会において、半年近くにわたり、躊躇と逡巡を繰り返す問題となった。

資料 89 女学校推進委員会報告 (JCLM. 1923.4.4-9)

1923年の正月を迎えた、1月8日、宣教師会の行政委員会は「女学校推進委員会」を設置し、推進委員をホルン、リン、ヘフナー、エカード、モード・パウラスに委嘱する。約10日後の1月19日、熊本市新屋敷のリン宣教師館宅で最初の推進委員会が開かれた。その協議の様子が第4回総会の宣教師会議事録に記せられている。

資料 90 慈愛園献堂式 (るうてる 1923.5.15 7頁)

モード・パウラスはULCAのシノッドの婦人宣教協会に資金支援を訴え、2万円の献金を受けた。そり資金で1921年春、熊本市飽託郡健軍村(現在、熊本市神水町375番地)に6,200坪の敷地を購入し、老人ホーム、子供・乳児施設、女性救済施設を増設していった。1923年4月6日から九州学院で開催された第4

回総会の2日目、4月7日午後2時、慈愛園の献堂式が各教会の牧師・代議員も加わり、同園の庭にて挙行された。

資料 91 関東大震災報告（るうてる 1923.10.15 8頁）

関東大震災の発生と共に、年会と宣教師会の連合行政委員会は総合的な救済対策本部と言える救済委員会をスタイワルト、瀧本、ホールン、本田の4名で構成させ、実際の救済活動を在京のスタイワルトと本田に委嘱した。

資料 92 アメリカ政府の排日運動に関する宣教師会の宣言（るうてる 1924.8.15 1頁）

カルフォルニアで起きた日本移民排斥運動は、1924年にいわゆる「排日移民法」として米国の議会を通過し、5月にクーリッジ大統領が署名し、7月より実施された。7月25日、宣教師会は年会議長、年会会員、信徒に宛てて、大要次のような宣言をした。①宣教師は米国の代表者として在住するのではなく、神の国を宣教するためのイエス・キリストの僕である。②米国議会が取った今回の行動を深く遺憾とする。③米国民の大多数は反対であり、必ず将来改善されるからして、両国間の友情には何らの変化もない。④宣教師会及びキリスト教の諸団体が米国政府に反対の意思を表明する。⑤日本の一般国民とキリスト教徒が極めて自制隠忍冷静の態度を取っていることに感謝する。⑥宣教師は日本の最大の味方であり、日米間に貢献できるのは両国のキリスト教徒だけである。⑦この問題に対して仲介調和の任務を遂行するために両国のキリスト教徒は協力一致する。⑧日本人に対する米国人の誤解を取り除くために宣教師会は努力する、と。

資料 93 関東地方震災救護報告（1924.9.6-10.第5回年会記録 71頁）

関東大震災で焼出され、被害を蒙った信徒は1万788人、教職は73人である。このような惨事にもかかわらず、ルーテル教会の被害は極めて軽微で、東京と横浜在住の教会員約100は殆ど無事であった。

資料 94 関東大震災活動委員会報告（JCLM. 1924.9.11-24）

関東大震災のためにULCAのボードは救援募金のアピールを決定し、その支援金として3万5千ドルに送金し、それらの支援金を老人ホーム及び母子ホームでの救護活動資金として活用していった。

資料 95 排日運動に関する日本福音ルーテル教会の開書(るうてる 1924.9.15 7頁)

米国の日本移民排斥運動により、日本のキリスト教界は、一様に声明を発表し、この米国政府の法案が人種的偏見と差別を旨としたものであり、国際的信義と平和の理念に背くものであることを唱え、非キリスト教団体と共に反対運動を進めていたが、米国のミッション団体と密接な関係を有する日本福音ルーテル教会にあっては、一方において法案への批判を続けつつも、他方において相互の関係を維持していかなければならない複雑な立場に置かれていた。法案が実施されて、1ヶ月に満たない7月24日、年会議長の瀧本幸吉郎と書記の本田傳喜の名前で、穏便な解決を祈って、宣教師会に文書を作成した。

資料 96 排日運動に関する ULCA ボード決議 (るうてる 1924.10.15 7頁)

日本移民排斥運動により、日米間の教会関係の不安を敏感に感じていたボードは、1924年7月24日、バルチモアで会議を開き、決議文を作成し、9月に開かれた日本福音ルーテル教会第5回総会に送り、日米間の宣教関係に動揺と弛緩が生じないようにした。

資料 97 九州女学院建築委員会報告 (JCLM. 1925.9.4-8)

1925年9月4日から開かれた第5回総会と並行して開かれた宣教師会の特別会議の議場に九州女学院の建築に関する報告が建築委員会より、建築の経過が報告された。

資料 98 日本ルーテル神学専門学校献堂式 (『日本福音ルーテル教会史』p257)

1925年、神学校の東京に移転後の神学校の教授はネルセン校長、リン、三浦冢、佐藤繁彦、浅地昇の5名であった。神学生は本科2年の福山猛、本科1年の川桐新一、松岡幹三、予科2年の山内六郎、高瀬義正、坂井賢男、青山四郎、予科1年生の内海季秋、武藤稔の9名である。これらの学生は、敷地の西側に新築された寄宿舎に入った。3名の日本人教授は、ニューヨーク州のルーサーリーグ(青年連盟)が献金した5,600ドルを資金として、8月に新築された教師館に落ちついた。ネルセンとリンは敷地地内に宣教師館が完成するまで、阿佐ヶ谷駅の北側、阿佐ヶ谷町487番地の借家に2ヶ月ほど仮寓した。1925年の第6回総会の2日後の9月10日午後3時、神学校の仮校舎献堂式が82名の参列者を得て、挙行された。

資料 99 九州学院宗教教育方針 (JCLM. 1925.9.4-8)

1925年9月4日より軽井沢の日本人教会堂で第6回総会が開催された。その2日目、宣教師会は、九州学院チャプレンであるホールンの辞任申請を受けた。それと共に、九州学院におけるキリスト教教育を一層強化するために、九州学院宗教教育方針を宣教師会が学校経営主体である財団に申し入れた。

資料 100 九州学院チャペル献堂式 (『るうてる』 1925.11.15.10 頁)

九州学院の構内に壮麗な姿を現したブラウン記念礼拝堂として建てられたチャペルは、1925年10月30日午前9時から献堂式を挙げる。神学校長ネルセン、年会議長滝本、九州女学院院長エカード、教頭村上、三浦冢、本田伝喜、パウラス姉妹、それに遠来の宣教師と牧師、九州学院の全職員と生徒、熊本市内の牧師・信徒が参集した。11月号『るうてる』には、その献堂式の式次第が記されている。

資料 101 1926年度宣教師・日本人教職・伝道師・教師一覧表 (JCLM. 1926.1.6-7)

1926年の在日共同宣教師会(JCLM)の総会議事録に記載された、1926年度の宣教師(来日年度、住所)、日本人教職・伝道師・教師(地区、教会、施設)一覧表である。

資料 102 九州女学院献堂式 (るうてる 1926.5.15.6 頁)

1926年5月4日の午後2時より挙行された。式は、音楽教師となった渋谷浦子の奏楽で始まり、主事・村上二郎の開会の辞、女学院理事となった三浦冢の聖書朗読と祈祷、建築委員長のホールンの建築経過報告があつて、来日中のボード日本伝道担当書記・ドラックが稲富肇の通訳で「神の宮を造れ」と題し、説教を行った。

資料 103 大正天皇奉悼文 (るうてる 1927.1.15.1 頁)

1926(大正15)年12月18日付で、年会議長・瀧本幸吉郎は教会を代表して、大正天皇の逝去に関して、宮内大臣・一木喜徳郎宛てに哀悼の意を表明し、その「奉悼文」が機関紙1927年1月の「るうてる」に記載された。

資料 104 新憲法規則承認 (1928.5.4-9.第 9 回年会記録 53 頁)

1928 年 5 月の第 9 回総会は、全 6 日間にわたる会議を行った。8 日の夕刻、年会及び宣教師会の両方において、憲法規則及び内規の改正案が上程され、逐条審議を経て、満場一致で採択された。これにより、宣教師会との間で締結された「協約」は事実上、破棄された。

資料 105 東京教会献堂式 (るうてる 1928.7.15.11 頁)

東京教会は、本田伝喜を牧師として迎えて 2 年を経た 1923 年 12 月、東京の郊外となる新大久保通りの西大久保 218 番地(現在地) の土地 286 坪を買収し、翌年の 2 月にその一隅に 6,000 円で牧師館を新築し、仮会堂とし、集會が守られた。1924 年 9 月の有馬での第 5 回総会でボードより送金されてきた関東大震災の救援金の一部を活用して、会堂建築費に充てることが承認され、建築計画が始動した。それから 3 年後の 1928 年 6 月 3 日、献堂式を迎える。約半年をかけて完成した会堂は、様式はゴシック式で、延坪数 130 坪の鉄筋コンクリートの 2 階建、工事費は 31,000 円で、内教会が 4,000 円を負担し、残りの 27,000 円がボードからの補助であった。

資料 106 婦人会聯盟規約 (るうてる 1929.9.15.8 頁)

各個教会の婦人会を基盤として、日本福音ルーテル教会内部での信仰の交わりと奉仕の業を推進する婦人伝道が 1928 年に始動し、4 月 17 日から 18 日の両日、熊本教会にて第 1 回婦人会大会が開催された。婦人会連盟規約は、最終的に翌年の第 2 回大会で採択された。

資料 107 ルーテル教会信仰告白四百年記念会 (るうてる 1930.5.15.12 頁)

ルーテル教会信仰告白 400 年記念会が 1930 年 6 月 25 日、福岡の博多教会を会場に開かれこととなり、その計画が「るうてる」に公示された。

資料 108 日本福音ルーテル教会憲法、1931.4.17

1928 年 5 月の第 9 回総会で成案となった新憲法規則及び内規は 1930 年 10 月 10 日、ウィスコンシン州ミルウォーキーで開催された北米一致ルーテル教会 (ULCA) の総会で承認を得た後、翌年の 1931 年 4 月 14 日か東京教会で開かれた第 12 回総会で新憲法(第 2 次)は実施の運びとなった。

公開状

東京教會に就いて

東京福音ルーテル教會員一同

神意の下に集まり、一團は一團を加えて弘く世界に、普からんとする吾基督教徒間に、忌はしき誤解が相互の意見感情を疎隔するのは甚だ面白からず、是非避くべき事と信じ、茲に吾東京福音ルーテル教會昨今の問題と、吾教會員一同即ち一人も異論なき願望とを述べて、親愛なる同胞の同情ある御諭を受けたいと思ひます。

今日の東京教會の問題は二つあります。一つは山内牧師の轉任問題、他は教會の自給自営の問題です。而も此の二つが相關聯して一つとなり、吾教會の重大なる事件となり中々解決し難き事となりました。

昨大正九年四月の總會で山内先生の轉任が議決され、山内先生も此れに従ふことを言明されました。

東京教會員は此事を山内先生から承はつて寢耳に水の様に驚き為めに信者會を開き全會一致で留任を願ふ様に決めました。教會執事の名で請願書を差出し此れは山内先生からスミス師を経て聯合行政委員會に進達せられました。處が、昨夏輕井澤の聯合行政委員會は總會の決議を翻へす権能なきを理由として請願書は返戻されました。教會の執事は八月末輕井澤に行き宣教師會會長ネルセン師に御目にかゝり願意が衷心より出てたることを述べ、聯合行政委員會にて取扱はれなければ吾日本ルーテル教會最高権能部に御詮議下さる様に願つて再び請願書を差上げました。大正十年二月ネルセン師から聯合行政委員會の権限解釋は昨夏と異なることなきに一致し且つ願意は考慮せられざる事になつたとの御通知を受けました。

少しく第二の問題を申さねばなりません。教會の自給自営と申すのは我日本に基督教傳來以來否吾ルーテル教會の布教以來でさへ既に廿有餘年を経て居ります。

而して教會員が教會の費用を負擔してゐるのは甚だ少ないのであります。東京教會は此の費用の幾分なりとも會員が負擔し將來は全部をも負擔する様にしたいと云う願望を懷きました。費用の點です。教の事ではありませぬ。特に御注意願ひたいのは決して外國人の方々を疎ざるの日本主義を振廻はすなどの意味は毫もないことです。我々は顧みて費用の幾分を負擔することが出来はしないか、又負擔して行つて初めて教會の親しみも又神意に副ふことも増大する所以であると信じたのです。それでも初めから多額は出来ません。牧師奉給の幾分の一を負擔し今後教會が盛になるにつれ其の程度を増そうと思ひました。繰返して云ひますが、ミッションに對して其の指導援助を断る意味はなく幾分負擔すればミッションの方では其れ丈他に御手が延びると思つて居りまして、排外の意味は少しもないのです。此れを大正九年三月頃から、山内先生にお話し、そうしなくてはならぬとの御賛同を得、又スミス先生にもお話しして其方針はよろしいとの御賛成を得ました。然し總會の時期までには實現しきらずに居りました。

總會後山内先生の問題もあり、信者會を開きそのことに就き相談しましたら、今山内

先生を失つたなら、折角の我々の自給自営の方針實現も多少打撃を被るから留任を願はふ、一方幾分牧師給でも負擔しようと議決して請願書を提出し牧師給四分の一負擔の實現を見ました。

山内先生の轉任が前記の計畫上の打撃なるは當然と我等は思ひますが他から見られたなら何人が牧師であろうとも構はないぢやないかとの疑ひも考へてせう。我々の自給自営に反對の牧師はないと考えますが、然し今の東京教會員は山内先生と年來の御近づきの者多く、其間誠に親しきものがあります。それが轉任せられ他の牧師を迎ふるのは所謂人氣に差異があります。ですが山内先生の轉任も已むを得なければ永くはお止めませぬ。當分止つて戴き度いと熱望するのです。それを願ひ出た後の成行は前記した通りです。

以上が即ち二問題と其の成行及び表裏なき我々の願望であります。我々は請願をなすにも、又意志を發表するにも如何にも生々堂々と、又禮節を忘れない紳士的態度を失はないことを思ひましてそれを守り且つは誇りとさへ考へて居ります。請願不聽許については、服従の義務を考へて居るのです。然し此れが考慮せられぬ時は、何故考慮せられなかつたかは誰れしも知り度い事で有りませう。我々は此れを聴き度いひと思ふて、宣教師會會長及び日本人會々長に此れを伺ふことに致しました。

尚山内先生の轉任理由は今日迄伺つた事がありませぬ。此れを是非伺ひ度いと思ひます。尚且つスミス師御夫妻は此の六月日本在住十三年(最後の期間は八年)で御歸國になります。此の御歸國直前に牧師も轉じ、折角スミス師も賛成して下さつて御在京の土産の一部とも成らんとする我々の計畫に大頓挫を來さしめ、且つ教會員は宣教師牧師を一時に失ひ急に寂しい暗い感じを持つこと如何なれば總會聯合行政委員會は断行されるのか。その理由を承はりたいと思ひます。

總べての問題を感情で判断を誤ることは大いに慎むべき事ではありますが、以上の成行と我々の心事とを思ふと、我々の不徳の然らしむる所だと恥じなければなりません。總會聯合行政委員會又特に日本人側の御同情の薄きを感じるのは、實に意外で且つ遺憾千萬でなりません。

我々は不遜であるかも知れませぬ。が我々の疑點は前述の通りネルセン師米村牧師に御尋ねすることと致しました。同時に此の成行は米國傳道會社にも連名で一應通知致しました。山内先生は三月中に大阪に轉任せられねばなりません。我々は出來得る限り眞情を吐露し御留任を願ふべく努力します。今後の成行は判りませぬ。

最後に御参考に迄申し上げます。論理は矛盾の様ですが、吾教會員はスミス師からの仰と有るならば、山内先生の轉任の件も或は納得したかも知れませぬ。山内先生の轉任決議は實にスミス師不在の決議です。又山内先生の本意であるものなら或は涙を振つても致方なく承知ませうそれ程に間柄の親密なのをお割きにするのは如何なる理由でせう。

敢て皆様の御判断を願ひます。

資料引用

「るうてる」 1921. 2. 15 7頁

開 書

其後の東京教會

同教會員一同

過般我敬愛する先輩同胞諸賢に東京教會に就て御批判を仰ぎましたが、その後のことに就て再び我々の所信を述べたいと思ひます。

前回の文は之を英譯して左の第一の書簡に附し米國傳道會社秘書ブラウン博士に送り、その指示を待ちました。四月一日先づ電報の御返事を頂き、更に五月十四日左の第三の御返書を貰ひました。

我教會員一同は米國傳道會社幹部御一同に御心配をかけたことを深く恐縮して居ります。ブラウン博士御返書中の文意に就ては平生我々が懷抱する信念も少しも異なる所がありません。我々は御同様の考を以て公明正大に我々の弱き請願をして居る次第であります。熱心に事情と眞意とを大方の諸士に御判断を願ひます。若し許さるれば聴許を請ふと云ふ外に何もありません。神意にすぎり何とかの御決定を希ふのであります。

一、 ブラウン博士宛書簡

大正十年二月二十日
日本福音ルーテル東京教會

米國ユナイテッド、ルーサラン教會
傳道會總秘書
ブラウン博士殿

曩に我教會員古瀬安俊氏より私信を以て御通知相成候我教會牧師山内直丸師轉任の件は其後聯合行政委員會に於て考慮せられざる事と相成り山内牧師は當三月末日までに大阪に轉任せざる可からざるに立至り申候に就ては誠に教會員一同の失望譬へ難く是非共留任を熱望致候間何卒別紙御一覽眞情賢察の上何分の御同情ある御指令仰ぎ度尚時日切迫の折なれば勝手ながら御電報を以て「トウキョウ、ルーサラン」宛御垂示の程御願申上候 敬具

追而別紙は日本人教徒全般に事情を通知致候ものに御座候

信徒一同代表請願委員

佐々城 佐^印
坂田 豊喜^印
入江 晃^印

板倉準四郎^印
江副 巽^印
篠田とよ子^印
中本 省三^印

二、 ブラウン博士返電(譯)

東京教會に關する事項に付て次の郵船にて書簡を送る

ブラウン

スミス殿

拝啓小生明日亜弗利加東岸へ向け出立の豫定に有之為に御來示の東京教會問題に關し詳細を盡して御返事致し得ざるを憾むものに御座候。

乍去諸君の主イエスキリスト及其教會に對して持せらるゝ至極の愛は能く諸君をして今回起り來れる問題を友誼的に解決するを可能ならしむる様祈上居候。小生の亜弗利加行は嘗てライブチヒ組合の一派たりしルーテル教會を後援せんが為にして彼の地には凡そ五、六ヶ月間滞留の筈に御座候。今は出發前何かと心せき候儘之にて擱筆候終りに臨み諸君のために神の豊けき御恵と健康とを遙に祈上申候

敬 具

ブラウン

謹啓吾等の主イエスキリストの御名に依て遙に時候の御挨拶申上候。陳ば東京教會事業の現状及其牧師を轉任せしむべく日本福音ルーテル教會の採れる決議行動に對する諸君の抗議縷々御申越に係る御状、之に對する駐在宣教師スミス氏の御説明書(文)及醫學士古瀬安俊氏の私信何れも正しく拝受深甚の注意を拂ひて拝見致候

先ず欣賀に堪へざるは日に月に教勢榮ゑ行く一事に有之、取わけ諸君過去數年間に於けるより大にして急速なる教會の進歩を來さんことを希るゝを知り最も愉快に感ずるものに御座候

御申越の件に就き意見の衝突は吾等見る所に於ては一方牧師と會衆、他方凡ての日本牧師傳道師及外國宣教師との間に起れるものにして誠に痛嘆に堪へず候

若し本問題にして外國布教團と日本教會の聯合關係を沮害するが如きものに候はゞ仮令それが吾等の主義に違背するとも亜米利加傳道局は此際易々として確定的忠言を呈し候はんも事實は單に一教會一牧師一駐在宣教師に依て反對せられたる行動なるが故に、此行動たるや全く凡ての宣教師牧師及傳道師より成れる總會の行動と言はざる得ず、斯かる事情の許に於ては米國傳道局は此間何等干涉の除地を見出し得ざる次第御承知の通に御座候

御承知の如く昨年宣教師側より「日本福音ルーテル教會憲法」と名け日本同胞諸君も之を許容し是認せられたりと聞く或種の憲法が傳道局に呈出せられ申候。

申す迄も無く此憲法はやがて日本に於る教會及外國宣教師が共に凡ての福音傳道事業を最も有効に管理すべく強力和合の端緒を開くものとして外國布教團より非常なる満足をもて迎へられたるものに候が其第十五條は正に今回の東京教會問題の如きを處理する最も有力なる規定かと被存候

更に又疑もなく凡ての牧師傳道師會衆及宣教師諸君は既に此條文に通達せられ居るべければ若し網目の解釋に就き意見の衝突ある場合は總會々場の席上こそ是等異論

を決議するに恰好の場所ならずやと被存候處如何に候乎。少數者と雖その意見を主張し能ふべくんば多數者の意見をもくつがへすの全き権利を有する事勿論に候へ共一度多數者の意見が憲法の規定に依て保証せられたる場合には少數者は最良善良なる秩序及支配の許に服従すべき義務を負ふべき者に御座候。申す迄もなく亜米利加傳道局は日本教會の葛藤に對しては其機能に應じて出来る限り之を回避し調停するの勞を惜まざるものと小生は信じ居候へ共、小生及同僚の意見としては本問題刻下唯一の解決方法は各自飽まで憲法の規定を遵守して慎重評議するにありと存候。従て憲法その者に缺陷あらば其第廿六章の規定に依て之を變更すると云ふ迄に御座候。更に以下申上ぐるは既に本信に於て述べ來れる何れの場合に於ると同様凡て吾が同僚秘書の同意する所に有之小生又かく申上たればとて何等妥當を失せざるものと存候に付一應御聞濟み賜り度候。凡て長老會議又は總會の如き一般的組織は常に一地方集會の權利又は恩典に對し熟慮を費さざるべからざるものに有之、同時に此團體は個々の集會自身としては敢行し得ざる所を各個集會及一團としての事業に對して遂行せしむる様組織せられたる者に御座候。かるが故に自己の利益及全体の良否を保持せんがため各個分離の集會又は信徒の集團は全團體に對し會員として可及的忠誠を盡し且大團體の決議に服従する事最も肝要と存候。乍然此決議たる時に或は個々の意見に調和せざる事あるべく尚或は宛も不條理が決定せられたるかの如く思惟せらるゝ事あらん斯る場合には宜しくキリスト又は教會の為に忍ばざるべからずと愚考仕候。思ふに東京教會問題は地方集團の夫よりも利害の干與する所遙に大なるべく、此際本問題は能く大局より觀察せられ各當事者へ對し圓滿なる調停が一刻も早く招致せらるゝ様願上候。

終に臨み東京教會々員諸君に最も深厚なる同情を表すると同時に過去幾年日本ルーテル教會を結び付け來りしキリスト教徒の交誼を弛緩せしむるが如き行動は此際つとめて避られ候様致度切望に不堪候。早々頓首

西曆一千年九百廿一年四月十四日

米國傳道局日本傳道秘書

シ、エル、ブラウン

大日本東京福音ルーテル教會

牧師 會員緒兄姉 御中

資料引用

「るうてる」 1921. 6. 25 6頁

大阿蘇に於て夏季學校開催の趣旨

主催 献身青年祈祷團

此を述べんと欲するには、先づ之が主催者たる青年献身祈祷團そのものに就いて概述する必要がある。

(一) 青年献身祈祷團設立の動機。一般的に教會が行き詰れる事實は凡ゆる方面に於て暴露されつゝある。吾人は教會の中に新らしき力を感じずる能はない。過去の或墮力に押やられて漸く動いて居る様な情氣満々たる氣分が現代教會一般の状態ではないか「汝熱きにも非ず、冷かにも非ず、ただ微温が故に我汝を我口より吐き出さん。」正に此れ現代教會が蒙りつゝある主の叱責ではあるまいか。

翻つて野を見渡せば、時は満ち田の面は色づいて居る。「牧ふ者なき羊の如く迷ひ倒るゝ者多し」との主の聖言は移して以て我が同胞の上に當つべきではあるまいか。傳道の急務斯くの如しである。而も見よ教會は目を醒まさない。「預言者より、祭司に至るまで皆詭詐をなす者なればなり。彼等は浅く我民の女の傷を醫して安からざる時に平安々々と云へり」と。教會斯くの如し、青年基督者にして靈界に立ち十字架の戦士たらんと欲する者の出でざる寧ろ當然である。吾人は最早や彼等を頼む能はない。「エホバの怒我身に満つ、我れ忍ぶに倦む、故に止むなく、此を衛街にある児童と集れる年少者に泄し訴ふべし」と、エレミヤの叫べる精神、悲莊の感に堪へない。

今や眞剣なる靈的運動は起らざるを得ぬ。此の止み難き要求に應じて奇蹟の如く生れ出でしもの此れ我が青年献身祈祷團である。時は大正九年十二月八日思ひ出深き熊本バンドを歴史的背景として、花陵山下、熱烈健信なる基督者の間に、さゝやかなりとはいへども靈火は既に點ぜられたのである。

(二) 其の目的。

- 一、牧師傳道者に依つて純福音が鈍ることなく率直勇敢に宣傳されんがため。
- 二、青年基督者の中より自己の利福安逸を糞土の如く放抛して十字架の福音のために、直接献身者の起らんが為め。
- 三、然し献身とは牧師傳道師のみに適要すべき専用語ではけつしてない。今や凡ての信者が目を醒まして日々悔改め、己が生涯を一點のかくす所なく主に献げねばならぬ。確かに現代教會の大問題は信者の靈的訓練にある。
- 四、團員は全き献身の信仰を表明せる者より成り、己れ先づ献身の實を實現すると共に、以上三大箇條に付いて熱心に祈ること。

(三) 其の経歴及び事業。

- 一、我が團は誕生以來毎週金曜例會を開き、前述の趣旨目的のために祈り、且つ團員の靈的訓練に努力しつゝある。
- 二、本年一月元旦より八月まで早天祈祷會を開く。
- 三、一月卅日海老名弾正を迎へ、花陵山に於て献身の奨励を受く。此の日、飛雪紛々、歴史を語る鐘懸松の下、登り來る者百餘名。献金十七圓。
- 四、三月上旬、神戸、エスキリスト教會牧師青木澄十郎氏を迎へ特別集會を開く。
- 五、五月二十一日、夏季學校開催の資金を得るための音樂會を開く。
- 六、夏季學校。

(四) 夏季學校に就て

我が團の祈りは聴かれ、愈よ來る七月下旬大阿蘇の山腹に於て夏季學校を開催せんと

するのである。その目的は無論團員の靈的修養にある。然し我團は更に進んで、我が團の精神目的に賛成し、靈的修養を共にせんとする希望者に對して廣く入校を促して止まないののである。

大阿蘇。世界の大噴火山。海拔四千有餘尺、熊本市を去る十餘里。濛々として噴煙の天を突いて昇る所、限界一面の緑草の原に、露しげき朝又夕暮に、祈るによき千里ヶ濱、鬱蒼たる杉の森、混々として温泉の湧出する所、宮地線赤水驛下車、上ること約一里半、今や我が第一回の夏季學校は此の大自然の裡に開かれんとす。眞面目なる士は聖書を携へて登り來れ。

夏季學校長 遠山三良氏
同 牧 師 ホールン氏

場 所 熊本縣阿蘇郡湯ノ谷温泉旅館
期 日 七月二十五日より同三十一日まで一週間
入校資格 信者未信者、男女の差別なし
會 費 五十錢(但申込の際送附せられし事。此が受領證とし又ては會員章又プログラムを以て代ゆ)
宿泊料 一日三食一圓五十錢
申込期日 七月二十日まで
事務所 熊本市大江町九州學院

講演會及聖書研究會

講 演 之 部

- 一、米國に於ける學生奉仕運動
九州學院長 遠山三良氏
- 二、ルーテルとウェスレーの信仰
日基教會牧師 文學士 佐藤繁彦氏
- 三、パウロ研究
鎮西學院長 川崎 升氏
- 四、能力ある宗教
九州學院神學部教授 久保 徹氏
- 五、青年基督者の献身すべき時機
九州學院教師 ホールン氏
- 六、未定
九大教授工學博士 荒川文六氏

聖書研究會之部

- 一、詩篇研究 佐藤繁彦氏
 - 二、コリント書研究 川崎 升氏
 - 三、エペソ書研究 久保 徹氏
 - 四、黙示録研究 北川 廣氏
- 尚本間俊平氏目下交渉中

資料引用

「るうてる」 1921. 6. 25 7 頁

資料 81 神学校の東京移転決議

其の時青山議事委員より宣教師會の決議事項の報告あり。

- 一、 會堂建築委員は今回のみ之を選び、該委員は宣教師會財務委員と協議すること。
- 二、 東京教會訪問委員は内外共年會に於て指名されたきこと。
- 三、 神学學校の位置を將來は東京と定め、現在校舎は速かに改築し不用となりし後は中學部に譲渡することとし、東京に於ける敷地も出來得る限り速かに買収すること。

宣教師會の役員左の如し、

議長 ネルセン氏、 副議長 スタイワルト氏、 書記 ホールン氏、
會計 ノルマン氏、 聯合行政委員 ネルセン氏、 スタイワルト氏、
ホールン氏。

異議なく承認するに可決す。

資料引用

1921. 9. 12-15. 第2回年会議事録 18頁

REPORT OF COMMITTEE ON SEMINARY LOCATION

In studying the subject of seminary location at least six points should be considered :

1. Climate and hygienic conditions.
2. Environment.
3. Accessibility.
4. Opportunity for doing evangelistic work.
5. The possibility of securing good teachers.
6. The student supply.

1. We call attention to climate and hygienic conditions because of the prime importance of health for both teachers and students. A healthy mind can hardly be developed in an unhealthy body. During the strenuous years of study and discipline our students and teachers should have the best opportunity for physical development. The economic consideration alone should be sufficient reason for making this statement. But there is more at stake than simple economy. The sentimental element should also enter here. What can be more discouraging to all concerned than to meet the recurring problem of how to deal with the physical weakness and unfitness of both pupils and teachers for work while in the seminary or soon after leaving it? Surely considerations such as these should lead us to seek the most healthful place in Japan for our permanent location.

2. Environment plays a great part in the physical and mental development of anyone. For this reason we are told that the mother of Confucius was constrained to change the location of her home that she might be better able to educate her boy.

It is impossible for any institution that deals with the general culture of students to train their men in an isolated place. For training specialists an isolated place perhaps is best. But for training ministers of the Gospel who are to be all things to all men, an environment that would lend itself the widest culture will be the best. Some one has said that students should not be placed where they may come into contact with dangerous thoughts. But is it not better for them to come into contact with such thoughts while they are with their teachers, who may be able to direct them, than to come into contact with such thoughts when thrown alone upon their own resources. Students coming from the country especially need the city environment to give them that all round culture needful to meet the conditions of our day whether they finally be placed in cities or in the remotest country districts for work.

And again, we believe that the school environment will help in fixing that character and those habits which will remain with students until the very end of their lives, as ministers of the Word.

So we cannot be too careful in selecting a proper environment for our

seminary.

3. Our seminary is and should be the heart of our church organization. For this reason it should be accessible to our church as a whole. Pastors and evangelists should be its constant guests. Young men should be able to visit it and become acquainted with its life. Christians from all our churches should come into intimate contact and fellowship with it. For this reason we cannot afford to locate our institution in a corner of the empire. It should be in the center of our church activities where it will be most accessible to the whole church.

Another important consideration is that of evangelistic work. It should be where students and teachers can do purely evangelistic work. Here is found the one reason for educating a Christian ministry. Much practice is required for training evangelists. We learn to do things by doing them. Theoretical knowledge is worth little without the practical application of it. While philosophy and science and art are all important in their place they are worthless to men who can not apply them. We may say the same of theology in all of its branches. A seminary should therefore give its students the benefit of practical experience while they are studying. Under the guidance of practical men they will become workmen who need not be ashamed. A practical seminary must have practical teachers, and for them to make use of their abilities they should have a wide field in which to work. Do not let us forget this important point in locating the seminary.

5. It is unnecessary to affirm that the success of a seminary will depend upon the quality of its teachers. Some one has said that the quality of the teaching force is of greater importance than the location of the seminary or anything else connected with it. This is doubtless true. But will not the location of our seminary have a very important effect upon securing teachers. Under present conditions, in order to secure specialists, it is necessary for us to be near good institutions where we may secure help for special courses. It will be a great saving in men and money when the church learns to cooperate in those things where the conscience of the church is not offended. That such cooperation is possible has already been demonstrated within our own institution.

6. Finally we have to consider those things that will appeal to student nature and secure for us a supply of students. The seminary should be a winning, wooing place for students. We realize that the church should seek for quality rather than quantity for its ministry. But under present conditions there is little hope of securing a very large number of students and we dare not neglect the human appeal. If ministers were all angels we might afford to pay less attention to these things that appeal to flesh and blood, but alas, we are human and must work and live with men.

To place our seminary where there is no human appeal cripples us in the very attempt which must be made to gain a goodly number of students. We must not neglect the consideration of this point of vital importance in locating

the most important institution of our Church.

Your committee has kept these six points in mind while studying the question of seminary location. And they should be the guiding principles for our further consideration. Some one may be surprised to find that we have not put the question of finance to the front. We have not mentioned that here, for the simple reason that there are more important considerations than the financial ones. We cannot afford to put our seminary simply where land can be bought at the cheapest price. Let us say, however, that in thinking of the seminary we have constantly in view the expenditure of a hundred thousand dollars (\$100,000) as a minimum. We wish to select a place where we can spend this hundred thousand dollars or more to the best advantage.

With our such guiding principles in mind we have considered the Empire of Japan, and in connection with the Japanese workers we have been driven to select the main island as the proper place for the seminary, rather than the island of Kyushu. And on the main island only two districts fully meet the above considerations. These are Tokyo and the Kwansai district. It is very easy for us to recommend either of these districts. In fact, there is as much reason for locating here as there is for the missionaries to go to Hondo for their vocation in preference to Kyushu.

When it comes to the point of selecting one of these places in preference to the other, we would be guided by the policy to be pursued by the seminary management. If the seminary is to be eminently practical in its policy we would select a different place from what we would choose were we to lay most stress on intellectual training. So before a decision can be reached as to location in Hondo, the Mission should decide upon the future policy to be pursued in the education of its men.

Should we decide upon the intellectual policy the seminary should be located in Tokyo where we come into intimate contact with the universities, libraries, art institutes, etc., which are to be found there in largest numbers. Such a place would make a strong appeal to a grate body of students. In an institution of the intellectual kind teachers would be expected to give themselves principally to intellectual pursuits, and the students would spend most of their time in study and investigation. There would be little time for practical work for either teacher or pupil. In case this should be our policy we would not care so much about the field in which to plant our churches and kogishos where the seminary forces should occupy itself. The limited field for practical service which Tokyo affords would not be detrimental to our purpose in such a case.

On the other hand, if our church adopts the practical policy, the Kwansai district should be selected. Here we would find room for expansion. Within a radius of one hundred (100) miles we would find the second and third largest cities of Japan, and Kyoto, her ancient capital. Here too, we would find many smaller cities and a grate many towns in which to plant churches and develop all kinds of church work (See 1920 edition of Federated Mission's report).

By a practical seminary we mean something like that conducted by the

Southern Presbyterians in Kobe, where each missionary is in charge of churches and kogisho, and the Japanese teachers with their students are directly engaged in evangelistic work. Such an institution is a live wire, a working force, and a practical illustration of the Gospel method pursued by the Lord Himself and by Saint Paul His great apostle. As for ourselves we would select the practical method, for we believe it be the one best adopted to the needs of the present generation.

In contrasting the strong points of these two places: In Kwansai the climate would be better. As to accessibility, it is supreme. As to environment, it is not bad for there is optimism in the air, there is activity, there are sufficient possibilities for intellectual culture. There, too, it is possible to secure good teachers. But when we consider the student appeal Tokyo leads, simply because it is the capital and the center for intellectual culture. Any one acquainted with the psychology of the Japanese student must agree to this fact.

As a committee, we would therefore make the following recommendations:

I. We recommend that the Convention at this time decide upon the policy to be adopted by our Church in training its men for the ministry.

2. The policy of our seminary being decided upon, we would recommend that a joint committee composed of missionaries and native workers be appointed to select a definite place in Hondo for our permanent location and proceed to secure land and buildings for the institution that is to be.

RECENT STATISTICS

Theological Schools in Kwansai 6 (Excluding Roman Catholic and Salvation Army) ; Students 129

Theological Schools in Tokyo 6 (Excluding Roman Catholics and Salvation Army and Oriental Mission Society with one school of 40 students composed of men and women.); Students 131

Theological Schools in Kyusu 3 : Students 24.

According to these statistics both Tokyo and Kwansai average 21 Students and Kyushu 8.

C. K. LIPPARD.

D. G. M. BACH.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan, 1921.9.12-15

REPORT OF JOINT EXECUTIVE COMMITTEE

The Joint Executive Committee wishes to make the following report of meetings held and business transacted by correspondence since our last regular meeting at Kumamoto, in the spring of 1920:

August 12th to 14th, 1920, a meeting was held at Karuizawa attended by all members. The following business was transacted :

Rev. J. P. Nielsen was elected Chairman; Rev. N.Yamanouchi, Japanese Secretary and Rev. L. S. G. Mille, English Secretary.

The question in regard to changing the pastor of the Tokyo congregation received long and careful consideration, and the request of the Tokyo congregation to be given permission to keep Rev. Yamanouchi as their pastor was given much thought. But, as the committee was divided, three to three, as the right of the Committee to change a decision of the whole Convention taken in session, no change could be made, and, therefore, the original decision of the Convention that Mr. Yamanouchi move to Osaka remained unchanged. However, on account of many problems involved, especially changing schools for the children, it was decided that Mr. Yamanouchi might wait until March 1921 to move, and also that the other changes of evangelists connected with this change at Tokyo should wait until the same date to go effect. Mr. Yonemura, as Chairman of the Japanese Convention was appointed to visit the Tokyo congregation and take the answer of the committee making necessary explanation.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1921.9.12-15 p30-31

故ブラウン博士を憶ふ

石松量蔵

シー エル ブラウン氏は西アフリカ巡回中、去る十二月五日昇天せられたとの飛報が、ミラー氏のもとに着いた。吾人が此訃報に接して愕然痛嘆やる方なかつたのはいふ迄もない。左に博士の経歴を略叙して其動功多かりし生涯を追憶したい。

シー エル ブラウン氏は千八百七十四年(明治七年)十二月三日北米合衆國ノースカロリナ洲アイレデルカンツリーに生まれ初等教育はチャーロットの地方に於て卒へ、十四歳の時バージニア洲のリッチモンドに移られた。滞在二個年、此間ファーストイングリッシ、ルーセラン教會に出席せられ、ゼー エス モーサー牧師の指導によつて堅信禮を受けられた。此時窮ら聖職に身を委ねる事を決心せられたが、モーサー牧師並に友人達も切に之を奨励した。氏は其決心を遂行する為に、ノースカロリナ洲に歸り、サースベリーの附近にあるベタニアアカデミーでローノックカレッジ入學の準備をされた。千八百九十一年の秋、ローノックカレッジに入學四年間の勉學を重ね千八百九十五年即ち二十一歳の時、卒業の榮を荷われた。其年の秋フィラデルヒヤのマウントアリー神學校に入學、満三個年間神學を修め、千八百九十八年に業を卒へ直ちにユナイテッドシノッドに属するバージニア洲のグラム教會に職を受け、此所に數月間働かれたのであつた。氏の卓越せる雄辯はグラムの人々に消すべからざる印象を刻むたのであつたが、ミッションボードの請によつて、日本傳道の宣教師たるの任に着かれた。其年の九月二十九日セーラムのバージニア イー フランツ嬢と結婚の式典をあげ、十月十五日佐賀に着かれたのである。時は明治三十一年、日本傳道が開始されてから僅かに五年、教會は其たつた一が佐賀にあるはかりであつた。二十四歳の氏は先輩のピーリー氏と共に此教會に於て働かれると共に、日本語を勉強され、又既に明治二十三年十月二日に傳道を開始されて居た所の熊本教會の為に、同三十三年迄出張應援を試みられた。氏が熊本在住宣教師として、熊本市新屋敷四百三十五番地に居を定められたのは明治三十三年十一月十四日の事であつた。同三十五年十二月十一日に新屋敷三百八十八番地の宣教師館に移られたが、氏は來熊忽々第五高等學校に英語教師として教鞭をとられ前後四ケ年に及んだ。明治三十八年六月、水道町十八番地に教會堂を建設され、超えて三十九年五月二日休養の為歸米し、同四十一年十月十一日再び來朝された。在米二年の間、氏は其宿望である九州學院建設の為に奔走されたが、四十二年の秋、此事業は熊本市外大江村に一萬余坪の敷地を買収するの運に到つた。氏は又此頃ローノックカレッジから神學博士の称号を贈られた。四十二年九月ルーテル神學校を創設し、四十四年四月に九州學院の校舎一部の落成を見たので、中學部を開校するに至つた。爾來氏はルーテル神學校々長として、並に九州學院主事として繁務に當られ、學院の諸設備も逐次完成の域に達した。

此頃日本に傳道せるルーテル派はユナイテッドシノッド、デンマークミッション、及びゼネラルカウンセルの三派で、傳道の便宜上ジョイトカンフェレンスといふ合同

的組織を作つてみたが、氏は常に其議長であつた。大正四年六月神學校第一回卒業生及び大正五年三月中學部第一回卒業生に列して後、氏は再び休養の爲歸米の途に就かる事となつた。夫人及びマーシャル、アルフレッド、リチアドの三子息は大正四年六月、既に歸米されてみたのであつた。氏は大正五年三月二十三日霰ふる寒空に百五十名の見送を受けて午後一時二十分上熊本驛を發車された。憶へば氏は斯して此十六年の働き場から再び歸らぬべく永遠に去られたのである。

歸米後直ちにユナイテッドシノッド ミッションボードのセクレタリーに推されて日本傳道のことゝ盡力せられたが、千九百十八年の秋、ユナイテッドシノッド、ゼネラルカウンスル、ジェネラルシノッドの三派が合同して、亜米利加ユナイテッドルーテル教會を組織するに當り尚ミッションボードに於ける日本、亜弗利加及南米傳道の主事に選ばれたのであつた。日本在住宣教師は氏が來朝して直接日本傳道の爲働く様に要求したが、ミッションボードの曾議は毎度之を否決したのであつた。千九百二十年ワシントンに於て開かれた國際労働會議の際には日本委員の爲、翻譯其他に盡力して多大の便宜を與えられたとの事である。獨逸ルーテル教會の傳道地である東亜弗利加地方の傳道を亜米利加ユナイテッドシノッドルーテル教會のミッションボードが引受た爲め氏は千九百二十一年四月東亜弗利加に赴き、其傳道地を巡回された。氏の手翰によると其地は交通不便の爲三百哩も徒歩巡回したとある。此巡回を終わつて従來の傳道地である西アフリカのライベリアに向われたが、突如、ミューレンブルクに於て逝去されたのである。氏の昇天に關しては如何なる病氣の爲か、通知が電報であるので不明であるが、ライベリア地方は氣候至つて悪く、此地に傳道した宣教師は半數迄熱病の爲に離れたとあり、又宣教師は二箇年毎に休養するといふので、或は熱病に犯されたのではないかと想像せらるゝ。享年四十七歳、使命に斃れた此殉教者の奮闘的生涯を追憶するに、氏は實に篤くべき事務的才能を有すると共に、其使命に對しては何所迄も忠誠であつた。氏は高潔なる人格を有し子弟に對しては慈母の様な愛情を以て臨まれた。又氏の寛大と統一的技能とは氏をセクレタリーとして最も適任たらしめた。神學には造詣深く、辯に於ても筆に於ても卓越してみたが、何よりも尊いのは、基督の十字架を確信して世界をして基督によつて救はふとした深い信仰と愛の熱心であつた。

吾人は今此靈界の闘將を神の聖國に送つたのであるが、氏の日本に於ける事業であつた九州學院と熊本ルーテル教會とは、氏の記念碑として永く其功績を偲ばしむるであらう。實に氏は日本ルーテル教會の礎石を据ゑた有力なる一人であるが、此堅められたる礎の上に立つて、吾人は神の聖國の建設に向つて努力しなければならぬ。此努力こそ、今は神の御許にある氏の靈を喜ばしむる唯一のものであるであらう。

資料引用

「るうてる」1922. 1. 10 2頁～3頁

REPORT OF THE JOINT EXECUTIVE COMMITTEE

Sep.15th.1921. Arima. The Joint Executive Committee met for organization and elected Rev. J. P. Nielsen Chairman, and Revs. E. T. Horn and N. Yamanouchi English and Japanese Secretaries respectively.

11/17/21 A special called meeting of the Joint Executive Committee was held at Kumamoto, to discuss the case of Mr. Yamanouchi, following his sudden return to Tokyo unauthorized. The letter sent to Mr. Yamanouchi by Mr. Nielsen, and which was cited as the cause for Mr. Yamanouchi's sudden withdrawal from Kyoto, was read to the Committee and the reasons for writing it explained. A card and circular letter from Mr. Yamanouchi stated that though he did not intend to receive further financial aid from the Mission, his previous communications must not be construed to mean that he had resigned as a pastor of the Japan Lutheran Church. An abusive circular written by Mr. Yamanouchi and sent to the Japanese brethren at large was read in the Committee.

After thorough discussion, the following action was taken:

- (1) That letter be sent to the Rev. N. Yamanouchi in the name of the Joint Executive Committee asking him to return at once to Kyoto to take up his work there: and explaining.
- (2) That at the Arima Convention when his case was under consideration the members of the Joint Executive Committee had not understood that Mr. Yamanouchi wished to leave his family in Tokyo permanently or indefinitely, but only for a time: and that therefore the Joint Executive Committee insists that Mr. Yamanouchi move his family(understanding thereby at least his Wife) to Kyoto with him by the end of the year 1921.
- (3) That if Mr. Yamanouchi does not comply with conditions (1) and (2) above, we understand that he thereby automatically serves his connection with the Japan Mission and Nenkwai.
- (4) That we hereby request from Mr. Yamanouchi as soon as possible stating his intentions.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1922.9.9-15 P26-27

資料 86 山内直丸脱会決議

Sep.15th.1921. Arima. The Joint Executive Committee met for organization and elected Rev. J. P. Nielsen Chairman, and Revs. E. T. Horn and N. Yamanouchi English and Japanese Secretaries respectively.

7/3/22

Mr. Yamanouchi. In accordance with part 2 of Resolution of Joint Executive Committee adopted in special session at Kumamoto. 11/17/21, we recognize Mr. Yamanouch's withdrawal from the Nihon Fukuin Ruteru Kyokwai.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1922.9.9-15,P31

RESOLUTIONS ON THE DEATH
of
CHARLES L. BROWN, D. D.

By the Japan Mission.

Whereas it has pleased Almighty God, in His insorutable Providence, to call from earth our dear Friend and Brother, the Rev. Charles L. Brown, D. D. ,

We, the Members of the Japan Mission the United Lutheran Church in America, do hereby pass the following resolutions:

1. That it is with inexpressible consternation and grief that we have received the news of Dr. Brown's death.

2. That, as a fellow missionary, as a leader among us for many years, and later as the Secretary for the Japan Mission, as well as our warm personal friend and companion, we shall not cease to mourn his loss.

3. That we devoutly render thanks to God for His wisdom and Grace in sending to Japan in the early days of our Mission's existence a man so abundantly blessed with gifts of intellect and soul as was our beloved Brother: that we thank God for the influence of his life and work here in Japan, and especially for his successful labors in the establishment of the Church in Japan, and in the founding of our school in Kumamoto which stands as an impressive monument to his ability and devotion.

4. That we see in his death the death of a martyr for the Cause of the Gospel of Jesus Christ, losing his life in others behalf after the example of his Lord.

5. That we herewith pledge ourselves anew to the Cause for which he has so unceasingly labored, and that we strive to emulate his sterling virtues of discretion, determination and fidelity.

6. That we herewith send our condolences to the Board of Foreign Missions of the United Lutheran church in America on the loss of our esteemed Brother as Secretary for Japan, and at the same time pray God that He would raise up a successor with like sympathetic understanding of the Japan Field and its needs, who may carry forward the work that Dr. Brown had so ably begun.

7. That we offer to Mrs. Brown and her three Sons our heartfelt sympathy in their bereavement, together with the assurance of our undying affection and reverence for Dr. Brown, whose death is to us the loss of a Brother, and whose memory we shall always hold in sacred veneration.

For the Japan Mission
J. P. Nielsen, Pres.
Edward T. Horn, Sec.

THE REV. CHARES L. BROWN, D. D.

An Appreciation

The Joint Executive Committee

Representing the Evangelical Lutheran Church in Japan

The death of Dr. Brown has filled us all with sadness and consternation. When, in 1916, Dr. Brown left Japan, we all thought that his absence would be only for a year, and we confidently awaited his speedy return. When later on it appeared doubtful whether he would come back to us or remain in America in the interests of the Japan work, with one accord we petitioned the Board to send him back. When, however, finally it became evident that he was needed in America in the capacity of Secretary for the Japan Field, everyone of us here cherished the hope that as Secretary he might periodically visit Japan for purpose of investigation and supervision of the work.

One year had lengthened into more than five, and still the same affection for him kept us firm to the hope that we should one day see him here again — a hope now never to be realized on this earth. The notice of his death in Africa has been received with deep mourning throughout our churches.

Dr. Brown possessed characteristics of mind and soul which pre-eminently qualified him for the work of a missionary. He was discriminating and judicious. Eagerness to learn and readiness to serve were combined in him with signal ability to accomplish definite results. He was by common consent a leader among his missionary colleagues.

And by his Japanese Brethren he was regarded as a brother and companion, and admitted into their intimate counsels and confidence. He never strove by force to impose his will on others, but was in all things animated by sound reasonableness. He never set himself up as a master over his fellow-workers, but ever sought to render the greatest service by cooperating where they deemed he could be most useful. In frequently perplexing situations, when misunderstanding were difficult to avoid, he ever gave proof of true Christian humility and tact that is born of genuine consideration for the rights and feelings of others.

The Lutheran Church in Japan deeply mourns his loss. May the God whom he and we together worship and serve bless and keep the loved ones who survive

him. May God abundantly prosper the work which he so diligently sought to further while among us. And many God raise up many to carry on the Grate Cause for which he gave his all, even his life.

To Charles L. Brown, D. D., noble missionary of the Cross, Christian gentleman, fellow-laborer in the Lord's vineyard, discreet counsellor, true friend, elder brother, and faithful steward and overseer of the King's Business, this poor tribute is affectionately and respectfully dedicated.

K. Takimoto

J. P. Nielsen

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1922.9.9-15 p 6-7, p 34-35

REPORT OF THE JOINT EXECUTIVE COMMITTEE

2/2/22 Mr. Inadomi's Call. The Board of Foreign Missions, desiring to have Mr. Inadomi ordained by the Synod of the United Danish Lutheran Church in America, requested that a call from the Japan Lutheran Church be extended to him. The Jt. Ex.Com. referred the matter back to the Board, inviting their attention to Article V Section 3 of the Basis of Co-operation, in which it would appear that the Joint Ministerium alone may make exceptions to the regular procedure outlined there for candidates for ordination. The Joint Ex.Com. also took action requesting the Board to permit Mr. Inadomi to follow the regular procedure according to the rules of the Japan Lutheran Church.

In regard to the transfer of the enrollment of Japanese pastors, it was moved and carried that the English Secretary write out a form of application for transfer and send a typewritten copy to each of the pastors concerned for them to fill out and send to the secretaries of their respective synods in America.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1922.9.9-15

REPORT OF THE GIRLS' SCHOOL PROMOTING COMMITTEE

On Friday Jan. 19, 1923, the committee of five newly elected to secure land for the Girls' School and to promote in every way possible the interests of the future school, met in Kumamoto at Missionary Linn's home. After discussion the following actions were taken.

Ist. It was decided to send a cablegram to the Mission Board asking that all funds on land for School be forwarded to us by wire immediately for the purpose of buying land, the Mission having passed a resolution asking the Board to send out immediately the funds on hand for the land and that the balances from the 1921 and the 1922 Woman's Budgets be appropriated to the same cause.

2nd. It was decided that a map of the city of Kumamoto, with available lots indicated, should be in the hands of each member of the committee, so that they having seen these lots, might be able to vote on short notice on any proposition that might come.

The meeting was closed with prayer led by Rev. C. W. Hepner.

In answer to the request of the Mission for a definition of the sphere of our committee, we submit the following;

- (1) To determine upon the site of the School.
- (2) To purchase the land.
- (3) To recommend how it is to be held, whether by a new zaidan, or by the Kushu Gakuin Zaidan.
- (4) To draw up concrete plans for the buildings and submit same to Mission for criticism and suggestions.
- (5) To be responsible for the actual building operations.
- (6) To recommend an appropriate name for the school.
- (7) To recommend a Japanese principal and a Missionary dean, and in consultation with these two to determine questions in regard to the selection and preparation of teachers, until the zaidan of said school shall have been constituted, at which time the promoting committee shall automatically dissolve.

Respectfully submitted,
 Martha B. Akard
 Maude Powlas
 E. T. Horn
 J. K. Linn
 C. W. Hepner

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
 1923.4.4-9

慈愛園奉堂式

午後二時より新らたに建築された同園の奉堂式が開かれた。司會者は瀧本氏で先づホールン教師が開式の辭として同園創立の顛末及び事業の経過に關して述べられ當事者は同園の事業の現況を報告された。夫れから來賓の知事、市長、郡長の演説があり、同地青年會長の祝辭が朗讀せられ、教會代表者の祝辭もあつた。園長ミス、パウラスは遠山九州學院長に依て答辭を述べられた。終りて一同に茶菓を饗せられて散會された。因にホールン教師の流暢な日本語が來賓一同に多大の感激を與へたのであつた事も事實であつたのであろうが慈愛園が基督の愛に基因して宣教師ネルセン夫人を励まし教會内の内外教師の心を動かし遂に今日あるに至りし點を見落してはならぬと思ふ。慈愛園の奉堂は傳道開始三十年に於る我教會事業の花の一に數へられ大に祝さるべき大な事業であると信じて疑ひ得なかつた。

資料引用

「るうてる」 1923. 5. 15 7頁

震災彙報

焼失教會講義所及其他の被害

- 一、獨逸普及福音教會 東郷坂教會
- 一、日本基督教會(築地、芝、麴町、浅草、両国橋、日本橋、富士見町、明星、本所、神田)
- 一、日本組合基督教會(番町、本郷、京橋)
- 一、日本メソヂスト教會(中央、銀座、日本橋、下谷、浅草、根岸)
- 一、バプテスト教會(中央、芝、京橋、深川、三崎會館)
- 一、基督教會(浅草會館)
- 一、美普教會(浅草)
- 一、福音教會(築地、本所)
- 一、同胞教會(本所、日本橋)
- 一、日本聖公會(三一、月島、眞光、ヨハネ、神愛、神田、諸譜徒、聖愛、パウロ、救主、新橋教館、三一會館)
- 一、同仁教會(飯田町)
- 一、ホーリネス教會(神田、浅草、本所)
- 一、救世軍(本營、病院、浅草、下谷(二)、深川、銀座、本所(二)、京橋、芝、月島(二)、)
- 一、其他 ニコライ、築地神田両天主教會堂、青年會同盟、女子青年會本郷、東京青年會、同女子青年會、聖書會社、書類會社、教文館、興文協會、聖公會出版社、立教中學校、同女學校、東京神學社、三一神學校、婦人矯風會本部、中華青年會、朝鮮青年會、帝大青年會、賛育會、喜音、浅草ミイミ小學校、聖路加病院
- 一、破損せるもの 青山學院、立教大學
- 一、横濱の共立女子神學校、女學校、関東學院、フェリス女學校、海岸教會、指路教會、太田教會は焼失全滅。

資料引用

「るうてる」 1923.10.15 8頁

資料 92 アメリカ政府の排日運動に対する宣教師会の宣言

宣教師會の宣言

謹啓 今般北米合衆国國政府が新に制定したる移民法は、日本國民に重大なる關係を有するが故に我等が此際宣教師會なる一團體として右の法律に對する我等の態度を明にする事は我等當然の義務なるを感じ茲に本宣言書を諸君に呈し、以て我等の所懐を腹藏なく諸君の前に披瀝致候、是れ我等が滿腔の好意を以てする所にして、諸君に於ても亦同一の好意を以て之れに對せらるゝことは、我等の信じて疑はざる所に候。

一、先づ第一に申上度きは、我等は籍を北米合衆國に有する同國の公民たるに拘はらず我國の代表者として日本に在るに非ずイエス・キリストの僕として天國の擴張を唯一の目的とすることに候。我等の諸君に望む所は諸君が先づ此見地よりして我等と諸君及び諸君の同胞との關係を考慮されんことに御座候。

二、我等は米國議會の取りし今回の行動を深く遺憾とし新移民法が齎らす兩國間の不幸なる結果を悲しむものに候、而して我等は議會が斯る行動に出ですとも本問題を穩に解決すべき良案の他に存ぜし事を信ずる者に御座候。

三、我等は北米國民の過半或は大多数が該法に對して不満を抱くが故に好機を待つて必らずや之れが改善若くは撤廢に一瞥の勞を惜まざることを信じ候。我等は該法制定後と雖も事實上米國の傳統的對日友情に何等の變化なきを確信致候。

四、在日北米宣教師團及び米本國に於ける基督教徒の諸團體が政府に對し該法の不當を鳴らし日本に同情を寄せつゝあることは世間周知の事實にして又本問題が未だ今日の如き状態に立ち至らざりし以前より心ある米國民の中には日本の為めに有利なる國論の喚起に力めつゝありしことも同様の次第に御座候。

五、基督教徒中の二三者が神國の分裂を助成するが如き行動に出でしは我等の衷心より悲しむ所に候へ共。一般の國民特に基督信徒の大多数が斯る異状の際にも拘はらず極めて自制隱忍冷静の態度を持せしことは我等の感佩惜く能はざる所に御座候。

六、日本在住の宣教師及び諸外國に於ける一般の基督教徒こそは日本に對する最善の味方として數ふべきものに候。若し日米間の現状を改善するに當り何等かの貢獻をなし得る者ありとせば先づ双方をして互に能く理解せしむる點に於て其任務を果す者は日米兩國の信徒を除外しては他に求め難きことを確信致候。是れ我等信徒たる神國の民に取りては『ユダヤ人もギリシャ人もなく奴隸もなく自主もなく男もなく女もなく我等は皆キリスト・イエスにありて一體たる』(加三、二八)が故に候。

七、我等基督教徒は斯の問題に關して互に疎隔分離すべきに非ず其共通の主張によりて仲介調和の任務を全ふすべきものと信じ候。斯くてこそ我等は、ともすれば相背馳せんとする國際關係を調和善導すべき唯一の勢力たり得るものと信じ候。斯る一大難局に虚して我等信徒が歩調を紊し結束を缺くが如き自ら求めて勢力を失墜し失敗を招く所以と存候。

八、我等は此の一大難局に際會せる日本國民に對し甚深の同情を表する者に候。従つて我等は微力の許すかぎり適當の手段を講じ或は日本人に對する米人の誤解謬見を除去して真相を明にし或は數十年來繼承し來りし相互の親交を維持する事に充

分の努力を試みんとする者に候。

希くは諸君と我等との中に存するキリストの霊が御互一同を導びきて眞理の判断を誤らしめず聖旨實現の到來を疑はずして隠忍持久せしめん事を 敬具

大正十三年七月廿五日

在日米國一致ルーテル教會

宣教師會

議長 エ・ゼ・スタイルワルト

書記 ジ・ケ・リ ン

右の鄭重なる宣言書に對しては我等は衷心より共鳴感謝するものに候。希くは各位に於ても我等が愛する同労者宣教師諸氏の眞意のある所を充分に理解せられ所謂内外の差別を超越せる主に於ける兄弟としては協同一致聖旨の實現に御盡力あらんことを切望いたし候 匆々

日本福音ルーテル教會

年会議長 瀧本幸吉郎

年會議員並に信徒各位

御中

資料引用

「るうてる」 1924. 8. 15 1 頁

関東地方震災救護報告

一、 被害状況

想起す大正十二年九月一日朝來の雨全く霽れたる午前十一時五十八分日本有史以来の大地震は関東地方を襲ひ災害地域一府六縣に亘り被害罹災世帯數六十萬戸人口二百七十四萬死傷者十五萬物質損害五十五億萬圓凡ゆる文明の利器は廢燼に歸し震災地はく戦墟の光景を呈せり。

震災地に於ける教會基督教諸學校慈善事業等は同様被害を蒙り焼失せし教會七十六大破せしもの三十三、焼出された大損害を蒙りたる信者一萬七百八十八教役者の焼出されもの七十三人なりき。

此大災害の中にありて我東京教會は何等の震災を蒙らず京濱兩地に在りし會員家族共一家の焼失一人の死者もなかりしは全く神佑と申さすの外なく只管感謝の至りなり。

資料引用

1924. 9. 6-10. 第 5 回年会記録 71 頁

REPORT
OF
COMMITTEE ON EARTHQUAKE RELIEF
JAPAN MISSION OF THE U.L.C.A.

Dear Fellow Workers:

The suddenness with which the earthquake, and the subsequent destruction by fire came upon the Kwanto district one year ago, precluded any previous preparation for the relief of those who were rendered destitute. To administer relief was a stupendous undertaking for even the government which was in a position to command resources, and commander what ever was needed for its work. The undertaking was still greater for those organizations which, having points of contact in the burned districts, still lacked the resources to carry into effect relief measures whose need was evident.

In case of the efforts of our own Mission, the handicaps were embarrassing in the extreme. 1) The destroyed areas were considerably separated from the district in which our work was located. 2). Not a single person with whom we had contact lost his home. Several lost employment because of the disasters, but in no case did any of our constituency suffer privation. 3). The needs of those who were rendered destitute were met by government, as early as it was possible to meet them. This relief was, of course, of a transient nature. It was not necessary for private relief to duplicate what the government was doing. BUT it was evident, from the beginning, that the important thing needed was to give help that would serve as relief for a period, covering, at least, the coming Winter. With this idea of doing something of a more permanent nature and of a character which would in no way be a duplication of what others were doing, we held in reserve, for a while, except in certain cases so as to ascertain where our efforts would for the greatest value. 4). Also, while our Board informed us soon after the disaster that \$2,000 was available for relief, it was not until the middle of February, that we knew the full amount granted us. Being a member of the Central Christian Relief Committee, and also in contact with the government officials, we felt ourselves in a position to determine and act under the light of full information, and with a high degree of trustworthy advice.

OLD PEOPLE HOME

The City of Tokyo was to erect a ready-made barrack which was received as a gift from the city of Osaka, and turn it over to some party to equip and manage as a home for destitute old people. This was eventually turned over to the Central Christian Relief Committee which, in turn, passed it on to us. We then completed it at a cost of ¥3,115, and on Dec. 10, began to admit inmates. These

numbered 47 in January. A few later found homes with relatives elsewhere, and eight have died. They now number 39(thirty-nine).

The first ten who entered the Home were sent to us by the City Relief Hospital at Ueno. None of these were well, and some of them were clearly in need of further hospital care, and had to be returned later. Beginning with those who were ill, and having none under sixty years of age, it would be natural to expect some deaths in the Home. Those who have passed away are:

Jan 13,	Kondo Kin,	Aged 67,	Died of Cancer
19,	Tanaka Wazo,	" 77,	" General Weakness
Feb 4,	Iwasaki Kura	" 73,	" Intestinal Catarrh
Mar 10,	Yamada Kenjiro	" 68,	" Hemorrhage of the Brain
May 15,	Shimizu Bunjiro	" 65,	" Chronic Kidney Trouble
June 7,	Wakizaka Tosuke	" 78,	" " " "
14,	Takaki Jokichi,	" 77,	" Hemorrhage of the Brain
18,	Kawase Yasujiro,	" 69,	" Heart Trouble,

The religious work in the Home is characterized by a short service every morning, and a special preaching service once a week. Those who are especially interested in Christianity then receive private instructions from Rev. Honda. So far, six of the old people have been baptized.

We were fortunate in securing as matron, Miss Chima Matsunaga, a member of our Tokyo congregation, and as assistant in the Home, Mr. Okamoto, a member of the Toyohashi congregation. He has since left us.

The Home itself while maintained under many disadvantages, and in a quiet manner, has cared for people for whom no other provision was made. The spirit and harmony in the Home is rather remarkable, considering the fact that the inmates are advanced in years, and were all strangers to each other when they entered the Home.

The Spanish Legation allowed its grounds in Azabu to be used for relief work, but later ordered us to vacate. Consequently, on June 9, a tract of 639 tsubo of land was bought at Koenji, a suburb of Tokyo, at a cost of ¥10,000. The building was moved at a cost of ¥457. This is now a permanent Home as far as location is concerned; but it is unfortunate that the carpenter, in moving the building, did not do more honest work. Up to the present, this Home is limited to those people—both men and women—who are sixty years of age, or over, and who were rendered destitute by the earthquake disaster, and are without help from any other source. It remains to be decided, if after the needs of this class of people have been met, we shall continue the Home and care for those aged persons whose needs arise through other circumstances.

AZABU WIDOWS' AND CHILDREN'S HOME

Before the building for the Old People's Home was completed, we found that the funds collected in America for our relief work were sufficient to undertake another form of relief work. We were then led to erect a Home for the widows and children of men who were lost in the disaster. This building was erected at a cost of ¥9,876.80, and provided for 23 families and an assembly room which

was also used as a kindergarten room. This Home was opened to occupants at the end of December. The children of school age were sent to the city schools. Those of kindergarten age, together with a number from the community, formed our kindergarten enrollment. Two regularly trained kindergarten teachers under the direction of Miss Shirk, and with her help, constituted the teaching force. A number of women in the Home were instructed in sewing and knitting. With the exception of one who had been paralyzed, the mothers worked and supported themselves and children. The past tense has been used in these statements because this Home has come to an end, and the building is now being demolished, to meet the demands of the Spanish legation.

HONJO WIDOWS' AND CHILDREN'S HOME

Near the end of February, the Tokyo Prefecture officials, seeing the work we were doing for widows and children, asked us to make it a permanent work, promising to give us 616 koku of lumber, and ¥30,388.80 to cover the cost of erecting 205 tsubo of buildings, kindergarten equipment, and land rent for six months, requiring of us the submission of building plans for their approval, and that their approval of the ones we employ in the Home be secured, and that we maintain the Home for at least six months. This was later changed to five years. But inasmuch as our original intention was to make it a permanent work, our plans were not affected by this change of condition. This Home was, at the end of August, sufficiently completed to admit the families which had been housed in the Azabu Home, and will be entirely completed within a few more weeks.

Unfortunately, the land for this was not bought, but leased. The price of the lease purchase of 35 ½ tsubo being ¥8,549.25, and the present monthly rent being ¥101.62. This rent will naturally increase after a few years. There are three two-story buildings, each 27×60 feet, and one one-story building which provides a place for a bath and laundry. This Institution will accommodate thirty-nine families, besides the matron and family, and two kindergarten teachers. A large room 27×48 feet on the lower floor of the building facing a wide thoroughfare with street-car line, will serve as kindergarten room, and assembly room for any kind of meeting we may see fit to hold. The large room above this will be the work room where sewing will be taught, and where people having the proper qualifications will be welcomed to come and do sewing, or needle work. People of the community, as well as those of the Home, will be permitted to put their children in the day nursery, kindergarten, let them come to the play-grounds, while they themselves will be admitted to the work department, laundry, and perhaps to the bath. It is through contacts made through these means that we hope to have the Gospel reach many outside the Home, on the neglected East Side. Our opportunity here for social service, and for the spread of the Gospel, is almost without limit. However, a properly qualified corps of workers is most essential. After many months of searching, we believe that these can be secured.

In the setting forth of these facts, mention has not been made of the time and

energy spent in seeking a location for the Azabu Widows and Children's Home, for the Honjo Widows' and Children's Home, of the efforts and time spent in trying to secure from the government, lumber to which we were entitled for the erection of the Azabu Widows and Children's Home, and which we did not get, of the time and energy spent in court cases connected with our Honjo location, ect., ect. These things delayed our work very considerably, and it was only by the most persistent efforts that these difficulties were overcome. No one besides pastor Honda and myself can know just what they involved.

Respectfully submitted,

A. J. STIREWALT.

PS. Since the above report was presented to the Mission, the Mayor of Tokyo told us that he thought that if we asked the city for ownership of the house used as Old People's Home, the city would give it to us, and we could hold it in our own name. We have put in request for such ownership, and are awaiting a reply. The building in Honjo Ward will, in time, likely be turned over to us, with clear title, in like manner.

RECEIPTS FOR EARTHQUAKE RELIEF

Received from:

Mission Board, per Mission Treasure.....	¥44,958.90
Mr. Kurihara Sakutaro.....	90.00
Mr. Takami Iwao, for Chs. ¥10, for S.S. ¥8.50.....	18.50
Miss M. E. Potts, ¥6 for X' mas ¥10.....	16.00
Miss Helen Shirk.....	5.00
Moji Church.....	12.00
Mrs. A. W. Stirewalt.....	216.89
Mrs. A. W. Stirewalt, for Sewing Machine.....	110.00
Lutheran Missionaries in India, per Rev. Harry Goedeke.....	65.00
Lutheran in India, per Rev.C.K. Lippard.....	138.56
Dr. Kuglur, Guntur, India, per Miss Annie Powlas.....	43.40
Lutheran Mission Honan, China, per Rev. Lindell,.....	170.20
Naogata Church, per Rev. Wasa.....	1.50
Girls' English Class, Fukuoka, per Miss M. B. Akard.....	13.50
S. School, Haruyoshi, Fukuoka.....	15.00
Miss Akard	54.53
Black Coat Society, Asano Cement Co., Moji.....	20.00
Prince Higashikuni.....	20.00
Mr. Muro Tokuro(Relative of Tanaka San who died).....	10.00
Mr. Miura, for Iwasaki San who died.....	1.00
Mrs. Ito, on Leaving the Widows' and Children's Home.....	30.00
Miss Reba Hendrickson.....	106.65
Mr. D. H. Balke.....	100.00
Home Office, per Tokyo Prefecture Office, American Red Cross	

Funds.....	20,000.00
Home Office, per Tokyo Prefecture Office, for Erection and Equipment of Honjo Home.....	30,388.80
Mitsukoshi Department Store, per Tokyo Prefectural Office.....	300.00
Inmates of Widows' and Children's Home, for Light.....	56.50
Kindergarten Children, Tuition and Equipment.....	84.00
Miss Shirk for Kindergarten Materials and Equipment.....	78.34
Refund on Insurance Premium.....	47.49
Sale of Small Quantity of Material from Asabu Home.....	167.50
<hr/>	
Total Receipts from all Sources.....	¥97,339.29

Respectfully submitted,

A. J. STIREWALT

EXPENDITURES FOR EARTHQUAKE RELIEF

OLD PEOPLE'S HOME.

Completion of Building Received from Tokyo City.....	¥ 3,115.00
639 Tsubo of Land for New Location.....	10,000.00
Moving of Building to New Location and Extra Equipment.....	5,095.95
4 Tsubo of Cemetery Lot.....	40.00
Food, Clothing, Various Articles of Equipment, etc.....	4,445.83

Aug, 31,1924, Total Expenditure for Old People's Home..... ¥22,696.78

NOTE: We have received from government, City, Lutheran Congregations in Japan, and from Individuals, quantities of food, clothing, bedding, etc., the value of which does not enter these accounts, but which would perhaps aggregate ¥10,000. Much of these supplies are still on hand.

AZABU WIDOWS' AND CHILDREN'S HOME

Erection of Building and Equipment.....	¥10,181.81
Salaries. Kindergarten Teachers.....	470.00
Various Items, Including Assistance to Families.....	777.73

Aug, 31,1924, Total Expenditure for Azabu Widows' and
Children's Home.....¥11,429.54

HONJO WIDOWS' AND CHILDREN'S HOME

Purchase of Land Lease, 351 ½ Tsubo, and Expenses Incurred.....	¥ 8,701.96
Erection of Building, Fences, and Various accessories.....	32,467.48
Filing in of Lot	1,110.60
Installation of Elec. Light, City Water, and Various Equipment.....	2,612.83
Land Rent.....	702.68
Salaries	210.00

Various Incidentals 495.09

Total Expenditure for Honjo Widows' and Children's Home ¥46,300.64

GENERAL EXPENDITURES

Gifts of Cash to Individuals.....¥ 765.00
1 Automobile to Lend to Central Christian Relief Committee..... 1,000.00
Preaching Expenses 323.37
Maintenance to Date 246.13

Total Expenditures¥ 2,231.11

AUTOMOBILE ACCOUNT

1 Ford Sedan and Accessories¥ 2,278.90
Building of Garage According to Government Requirements..... 484.30
Maintenance to Date..... 246.13

3,009.33

SUMMARY OF EARTHQUAKE RELIEF FUNDS

Total Amount Received from all Sources ¥97,339.29
Total Amount Spent on Old People's Home..... ¥22,696.78
Total Amount Spent on Azabu Widows' and
Children's Home..... 11,429.54
Total Amount Spent on Honjo Widows' and
Children's Home 46,300.64
Total Amount Spent on General Item 2,231.11
Total Amount Spent on Automobile Account..... 3,009.33

Total ¥97,339.29 ¥85,667.30
Amount of Cash in Hand ¥11,671.99

¥97,339.29 ¥97,339.29

Respectfully Submitted,

A. J. STIREWALT

Voted to receive the report, and to take a rising vote of appreciation of the labors of Rev. A. J. Stirewalt and D. Honda.

資料引用

JCLM. 1924.9.11-24

資料 95 排日運動に関する日本福音ルーテル教会の開書

開 書

拝啓 今回の米日問題に関する貴會の御宣言書本月廿二日正に落掌仕り候、御趣意の條項に對しては我等日本福音ルーテル教會一同が満腔の好意と感謝とを以て諒承仕り候、元來今般米國教會に於て制定されたる新移民法中日本に關する條項は更に穩かなる方法を以て解決せらるべきものたりしにも拘はらず強て平地に波瀾を惹起せしむるが如き行動に出られしは我等の遺憾に堪えざる所に有之候

思ふに今日の狀態を此儘に放棄せんか兩國民間に感情の懷裂を來し如何なる結果を生ずるに至るや知るべからず誠に痛歎に堪えざる次第に有之候。此際に當て貴會の宣言書の御趣意の如く主に於ける同胞たる我等基督者が御互に人種國境を打忘れ有ゆる差別を超越して、主基督の精神に基づき人類同胞の主意を標榜して聖旨の實現に奮闘努力いたし候事は今日の急務にして又苟も世光地鹽たるべき我等基督者の當然盡すべき責務なる事を相成じ申候

御宣言書の趣意に就ては周ねく我教會講義所へ早速通知致置き候間左様御諒承被下度候先は御宣言書に對し満腔の謝意を表し候、右御挨拶迄如斯に御座候勿々敬具

大正十三年七月廿四日

日本福音ルーテル教會

年會議長 瀧本幸吉郎

同 書記 本田 傳喜

日本福音ルーテル教會

宣教師會議長

エ・ゼ・スタイルワルト殿

外

宣教師會議員各位

御中

資料引用

「るうてる」 1924. 9. 15 7頁

資料 96 排日運動に関するULCAボード決議

排日法並に日本に於ける我ミッション及び教會に及ぼす其影響に關し傳道局により左の事項を決議されたり

- 一、傳道局は米國の排日法が日本に於ける我宣教師等の事業に甚だしく影響せざりしを聞いて喜ぶ事
- 二、傳道局は又日本に於ける我ルーテル教會の會員一同の基督者的精神及び行政に關して真摯なる尊重を表示する事
- 三、傳道局は亜米利加合衆国と日本帝国との間に存続すべき好意及び相互奉仕の諸關係を温めんが為に力を儘して其の全てをなさんと欲する旨を日本に於ける日本福音ルーテル教會及び我ミッションに保証する事

右日本に於ける我ルーテル教會の諸君に御傳達被下度願上候 敬具
日本部傳道局書記
ジョージ・ドレーク

願はくは貴下が年曾議長として右の旨を年曾議員並に其他日本の諸教會にあまねく御通達下され度小生より伏して御依頼申上候 匆々

千九百廿四年九月十一日有馬に於て
米國一致ルーテル教會
日本ミッション書記
ジョン・ケー・リン

日本福音ルーテル教會
年曾議長
瀧本幸吉郎殿

資料引用

「るうてる」 1924. 10. 15 7頁

REPORT OF THE GIRLS' SCHOOL COMMITTEE.
(Kyushu Jo Gakuin.)

Deeming it unnecessary to burden the minutes with a multitude of details the report of the Girls' School Committee is brief. Suffice it to say that the building operations are proceeding satisfactorily, and that it is our confident expectation to see everything planned for in readiness for the opening of the school in April of 1926. The subjoined report of the Building Committee with the drawings and photographs on display in this building will help you to understand the present status of the work. The Committee has been handicapped somewhat by having half of its membership in America during the year. But with the return of Miss Akard and Mr. Murakami whose homes are waiting to greet them on the Campus of Kyushu Jo Gakuin, we expect to see things move on to perfection very rapidly.

In compliance with the request of the Building Committee we recommend that the Mission request the Woman's Board of the U.L.C.A. to appropriate ¥30,000.00 for the equipment of the Girls' School.

Respectfully submitted ,

E. T. HORN, C. K. LIPPARD.

REPORT OF BUILDING COMMITTEE OF KYUSHU JO GAKUIN

In order to carry out the building plans endorsed by the Mission at Arima last year, the Girls' School Committee appointed a sub-committee composed of Messrs. Miura and Horn, both residing in Kumamoto City. The services of J. H. Vogel, Esq., Architect, were secured as consulting architect first, and later, upon their removal from Shanghai to Nagasaki. he was engaged as constructing architect and clerk of the works. E. T. Horn was appointed by the Mission to officially represent it in signing contracts. Bids were secured from three companies, and the contract was finally awarded to Tsuji Chojiro of Hakata. He had already done some construction work at Kyushu Gakuin and the Jiaien and we felt we knew him and could trust him to do a good job. His bid was much lower too than that of either of the other bidders. In the presence of the Building Committee and the Architect, I signed for the Mission, on February 18th and 19th contracts as follows: For the Main Building of K.J.G., to be built, according to specifications, of cement, steel, and brick, 238 feet long and 60 feet wide, three stories high over all and 4 at center. Contract with Tsuji Chojiro for ¥163,061.00.

For steam heating plant in Main Building, electric wiring, plumbing, contract

with Tsuji, ¥13,590.00. This was later raised by 5,823.00 correction on heating plant contract, inasmuch as the company refused to install it at the price originally agreed to, and the contract had to be broken and made with another and we trust with a responsible company.

With J. E. Hayes, Engineering Corporation, Shanghai, contracts for materials for Main Building, as follows: reinforcing steel, Fenestra steel window frames, all the hardware for the M.B., and Insulite Mastic Flooring for the entire Main Building, totaling ¥57,410.00.

The total cost of the Main Building is thus ¥240,544.00 heating system and plumbing, and lighting installed, but without other furnishings. This seems at first sight a heavy expenditure, but there are over 1200 tsubo of floor space in the building; chapel to seat 600; all the science rooms, music department with a choral room to seat 100; besides reading room, dining room, kitchen etiquette room, sewing rooms, music practice rooms, faculty meeting room, rest rooms, toilets on every floor (except 4th) and many regular and special class rooms. This building ought to supply the needs of the institution for many years. One decided advantage in its construction is that the partitions are all of brick and can be knocked out and moved or removed altogether without affecting in anyway the strength of the building, as columns and beams throughout are of concrete with high tension steel reinforcement with an ample margin for any conceivable strain. The building throughout is fire proof, even floors being of a non combustible preparation to be imported from America. Stair cases of which there are 3, one in centre and one at either end, are entirely of concrete, steel and wire. The building will, we are sure, compare favorably with any average modern high school in America. Checking up its features by the standards for High School buildings set forth by the publication of Teachers' College, Columbia University, we are gratified to note that our plant ranks high. So much for the Main Building. Plans and photographs are submitted with this report so that you may get a fair idea of the plant and progress of construction to date.

Other contracts as follows were signed with Tsuji Chojiro:

Residence for Principal and accommodations therein for four other missionary ladies, ¥20,000.00. This house we have designated as Residence A. It is two stories and attic containing two emergency bedrooms and ample storage room; four bed chambers on second floor, each with large clothes closet that can be used is dressing room; toilet and bath; each bed chamber has built in book cases and window seat; first door contains small reception room, living room, dining room, sun parlor communicating with both, kitchen, pantry, two servants' rooms. toilet; basement or cellar is cemented and ready for installation of hot air furnace. Outside is a store room, washing room and garage. Construction is frame; wooden lath, covered with steel wire mesh; cement stucco finish. tile roof.

Residence designated B. for Japanese Head Teacher: Contract ¥9,300.00. Construction is same as Residence A, except that windows are in Japanese style working horizontally instead of vertically. Downstairs are: study room, dining room, living room, kitchen, servants' room, bath, storage and washing rooms and

toilet; upstairs are 3 Japanese rooms, a veranda, toilet and large storage cupboard.

Gymnasium: Contract, ¥12,560.00. Construction of frame, wood lath, steel wire and cement stucco. Roof of asbestos slate. Floor of Oregon Pine. Dimensions 45 x 75 shaku; gymnasium exercise floor clear space 45x60. Height to lowest tress 17 2/1 feet. There is a room 15x15 for instructor, and another 30x15 for bathing and dressing, a gallery and very generous store rooms are provided over these rooms. From the beginning, Miss Akard and others have insisted that this school should lay special emphasis upon physical culture. We are sure we have made a good start in this direction by providing a gymnasium of the grade we are building.

Dormitory It was the decision of the Committee from the beginning that the dormitory work of the school should be conducted on the cottage system, and that the school should be opened with one cottage unit as a kind of experiment. One unit has been constructed, according to this plan. Contract price is ¥19,900.00. It is designed to accommodate regularly 21 girls and a matron and servants. In emergency it could accommodate thirty-five girls by using several special rooms and a spacious attic. We must await the opening of the school next year to discover what will be the demand for dormitory accommodations before another unit is considered. The plan is to take in 100 girls, next year. Judging from the experience of other Mission schools in Kyushu we can hardly hope for more than 20 or 25 dormitory pupils. This building is frame, wood lath, steel wire mesh and cement stucco. All sleeping rooms are 8-mat rooms, each with 3 closets, designed to accommodate 3 girls. Halls upstairs and down are 6 feet wide. The floors throughout, even under the "tatami" are solid and of Oregon pine. The Committee thought that at some later date it might be desirable to begin to use beds; if that time comes, the tatami could simply be removed, and room furnished with beds and desks and chairs, without extra expenditure for repairs or alterations to the building itself. Very nice lavatories, toilets (flush closets). bath, are provided. Kitchen and servants' accommodations are ample and well ventilated and light. A feature of the dormitory worth mentioning is that it is built around an open court; besides being attractive, this makes it possible to leave all windows on the inside open at night, thus obviating the matter of nocturnal ventilation without fear of nocturnal intrusion.

In addition to the above a home for a janitor has been built on a near corner of the lot. This is of the same substantial and pleasing construction as the other building, and has two good rooms, one 8, and one 6 mat, plus kitchen and ordinary Japanese toilet. No contract was signed for this building. It was built by the contractor, to be occupied by himself during the construction. Rent and deterioration will be calculated and the building sold to us at the close of the operations.

Brick walls have been constructed at North and South ends of the Campus, where the adjacent properties were on nearly the same level. On East and West, bounded by roads and high above neighboring land, barbed wire fences on angle

iron supports firmly planted in concrete bases, same to be set up at foot of slope (not at top) have been contracted for. The erection of this fence will make the entire property safe from prowlers.

City water was secured to center of site at the beginning of the building operations at an initial cost of ¥1,500.00. The pipe is three inch main-sufficient for fire plugs-water pressure ample for 3 story house.

In regard to present state of construction: janitor's house, gymnasium, dormitory and Residence B are practically complete. Residence B is to be ready for Mr. Murakami's family by the 20th of this month. Residence A should be completed by the end of October. Should Miss Akard wish to occupy it earlier rooms enough for her use could be completed even earlier.

In the Main Building, the columns, beams and slabs of top floor have been poured; in two weeks more the work of setting up the roof trusses should be completed. Installing partitions and outer walls of brick has already been begun in basement and first floor.

Contract calls for completion of plans by February 18th, 1926.

As far as can be judged there is every probability that the plant will be thoroughly ready to take in the first class in April, 1926.

Furnishings: A list of furnishings necessary for equipping the school before opening, is herewith submitted and budget for same (tentative) appended. The Building Committee requests the Kyushu Jo Gakuin Committee to recommend to the Mission that the Mission pass a resolution asking the W.F.M.S. of the U.L.C. to appropriate the sum of 30,000.00 yen for equipment.

The Budget of the School stands as follows:

Obligations :

Hayes and Tsuji Building Contract.....	¥302,304.00
Architect and Engineers	20,212.87
Land Purchase, including incidentals.....	74,431.97
Grading entrance cut, securing city water	10,757.30
Brick wall and wire fencing.....	6,300.00
Roads, paths, water piping to various units and cloister from M.B. to Gymnasium	2,800.00
Total	¥416,806.14

Approximately ¥220,000.00 have been disbursed through the local committee to date on this whole budget.

EDWARD T. HORN.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1925.9.4-8

資料 98 日本ルーテル神学専門学校献堂式

神学校の假校舍献堂式は、大正十四年九月一〇日、午後三時から執行された。参列者は、第六回軽井澤の總會に出席したルーテル教會の牧師、宣教師、信徒代議員、市内在住各派神學校教授及牧師、學校職員學生等を加えて八十二名の来會者があった。米村常吉司式で、青山彦太郎の説教があり、リップードは「本校過去に就いて」、校長ネルセンは「本校の将来と目的」について語り、本田傳喜は、「本校移轉の經過に就いて」述べ、明治學院神學部長都留仙次は各神學校を代表して祝辭を述べ、瀧本幸吉郎の祝辭をもって式を終わった。夜は關係者一同寄宿舎食堂に於て晚餐を共にし、瀧本幸吉郎、稲富肇、石松量蔵、スタイワルト、平岩愼保、奥太一郎、佐藤繁彦、福山猛等の卓上演説があり歡を盡した。神學校移轉の目的が、今後に於て十分に達成せられるように、一同神の祝福を熱禱して散じた。

資料引用

『日本福音ルーテル教会史』 p257

Karuizawa, Sept. 7, 1925.
Monday, 2 P.M.

KYUSHU GAKUIN RELIGIOUS POLICY. The first order of business was the matter of the religious policy in Kyushu Gakuin. The following action was taken:

After long waiting for the realization of the Chapel at Kyushu Gakuin, we rejoice that it will be ready for use within the next few weeks. With this advance in school equipment, we look forward to an advance in the school's Christian influence and with this purpose, be it Resolved:

That we ask the Kyushu Gakuin Zaidan to request the School Administration to put into effect the following:

1. That in our catalog the school be designated as a Christian School.
2. That in the printed curriculum the hours for Bible study be specifically designated as such.
3. That the entire influence of the school's administration be brought to bear on the matter of a full student attendance at the daily Chapel service.
4. That at our exercises for graduation Tenchosetsu, Kigensetsu, and gatherings of like nature, at least an appropriate portion of the Holy Scriptures be read and prayer be offered.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1925.9.4-8

九州學院講堂献堂式

十月三十日午前九時遠来の宣教師を始め全校職員生徒並に市内各教會牧師及信徒有志の出席の下にブラウン、メモリアル、チャペルの献堂式を左の順序によりて挙行しました。

- | | | |
|----|---------------------------|------------------------|
| 一、 | 奏樂 | |
| 二、 | 讚美歌(聖なる聖なる) | 會衆一同 |
| 三、 | 聖書誦讀 | |
| 四、 | 献堂之祈祷 | 稻富 肇 |
| 五、 | 合唱(主よ今聖前に) | 合唱團 |
| 六、 | 献堂之辞 | 遠山學院長 |
| 七、 | 合唱(How firm a foundation) | 合唱團 |
| 八、 | 祝辞 | ネルセン氏
瀧本牧師
松山守善氏 |
| 九、 | 讚美歌 わがやまとの | 會衆一同 |
| 十、 | 祝禱 | ミラー氏 |

尚ほ當日はルーテル神學校長ネルセン氏、年會議長瀧本氏、九州女學院エカード氏同教頭村上氏、三浦氏、本田氏、リン氏母堂パウラス嬢姉妹等の御出席がありまして實に盛大な集會でありました。

資料引用

「るうてる」 1925. 11. 15. 10 頁)

資料 101 1926 年度宣教師・日本人教職・伝道師・教師一覽表

ROSTER OF MISSIONARIES OF THE JAPAN MISSION. 1926.

(Given in the order of seniority of service in Japan.)

Rev. C. K. Lippard, D.D. (1900)	In America on furlough.
Rev. A. J. Stirewalt, D.D. (1905)	303 Hyakunin Machi, Okubo, Tokyo.
Rev. L. S. G. Miller, D.D. (1907)	Kyushu Gakuin, Kumamoto.
Rev. J. P. Nielsen (1909)	9211 Shimosaginomiya, Nogata Machi, Tokyo-Fu
Rev. Edward T. Horn (1911)	487 Asagaya, Tokyo.
Rev. C. W. Hepner (1912)	754 Sarushinden, Ashiya, Hyogo.
Miss Martha B. Akard (1913)	Kyushu Ji Gakuin, Murozono, Kumamoto.
Rev. John K. Linn (1915)	In America on furlough.
Rev. S. O. Thorlaksson (1916)	Kyomachi, Kurume.
Rev. D. G. M. Bach (1916)	388 Furu-Shinyashiki, Kumamoto.
Rev. C. E. Norman (1917)	15 Gokurakuji-cho, Fukuoka.
Miss Maude Powlas (1918)	Ji-Ai-En, Kengun Mura, Kumamoto.
Miss Anne Powlas (1919)	Ji-Ai-En, Kengun Mura, Kumamoto.
Rev. Geo. W. Schillinger (1920)	Kyushu, Kumamoto.
Rev. A. C. Knudten (1920)	Motokoi, Chikusa Machi, Nagoya.
Rev. L. G. Gray (1921)	On furlough in America.
Miss Reba Hendrickson (1921)	On furlough in America.
Miss Marion Potts (1921)	Kyushu Jo Gakuin, Murozono, Kumamoto.
Miss Helen Shirk (1922)	Haruyoshi, Fukuoka.
Rev. J. Arthur, Linn (1923)	Tanimachi, Moji.
Rev. F. W. Heins (1924)	Nakanohashi-koji, Saga.
Miss Faith Lippard (1925)	Hirabayashi, Nishi Suma, Kobe.
Miss Any. Thoren (1925)	Bunka Apartment, Koishikawa, Tokyo.
Rev. George Sowers (1925)	On furlough in America.

ROSTER OF PASTORS EVANGELISTS, TEACHERS
AND OTHER WORKERS
IN THE
JAPAN LUTHERAN CHURCH.

TOKYO : Rev. D. Honda. Pastor.

Mr. N. Iwanaga, Evangelist.

THEOLOGICAL SEMINARY

Rev. S. Sato.

Rev. I. Miura.

Mr. N. Asaji.

KOENJI OLD FOLXS' HOME

Miss C. Matsunaga, Supt.

HONJO HOME FOR WIDOWS WITH CHILDREN

Mrs. Mamiya, Matron.

NAGOYA : Rev. A. Muto, Pastor.

KYOTO : Rev. T. Yonemura, Pastor.

OSAKA.. Rev. K. Takimoto, Pastor.

KOBE: Rev. H. Aoyama. Pastor.

SHIMONOSEKI : Mr. Y. Yoshida, Evangelist.

MOJI: Rev. T. Tsuboike, Pastor.

YAWATA : Rev. T. Kawase, Pastor.

NOGATA : Rev. S. Takashima, Pastor.

FUKUOKA : Rev. T. Chiga, Pastor.

Miss M. Kakehi, Woman Evangelist.

Miss T. Kondo, Kindergarten Teacher.

Miss Y. Shiraishi, “ “

Miss S. Yamasaki, “ “

TOSU : Mr. I. Takami, Evangelist.

KURUME : Rev. K. Shiina, Pastor.

Miss S. Sasaki, Kindergarten Teacher.

Miss C. Baba, “ “

Miss Y. Kondo, “ “

Mrs. Kameyama, Missionary's Assistant.

AMAGI: Rev. N. Washiyama, Pastor.

HITA : Rev. S. Okuma, Pastor.

SAGA: Rev. K. Watanabe, Pastor.
Miss U. Saito, Kindergarten Teacher.
Miss T. Tomioka, “ “

OGI: Miss A. Inui, Woman Evangelist.
Miss M. Matsuoka, Kindergarten Teacher.
Miss F. Ide, “ “
Miss M. Hashimoto, “ “

KARATSU : Rev. T. Wasa, Pastor.

OMUTA : Mr. S. Tominaga, Evangelist.

KUMAMOTO: Rev. R. Ishimatsu, Pastor.

KYUSHU GAKUIN

Dr. S. Toyama, Principal.

Rev. H. Inadomi, Pastor.

Rev. K. Kosaka.

JANICE JAMES SCHOOL (KYUSHU JO GAKUIN)

Mr. J. Murakami, Head Teacher.

COLONY OF MERCY (JI-AI-EN)

Mrs. M. Nonaka, Ass't in Women's Rescue Work.

Mrs. M. Hatanaka, Matron, Children's Home.

MINAMATA : Mr. H. Ouchi, Evangelist.

(Note: The title “Pastor” designates an ordained minister: “Evangelist,” unordained.)

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1926.1.6-7

九州女學院献堂式

福音ルーテル教會が日本に於ける教育的社會事業の一として計劃した九州女學院は熊本市外室園の高臺に一万二千坪の敷地を劃し鐵筋コンクリート四階建の本館を初め體育館寄宿舎職員住宅等約廿四萬圓の巨費を投じ最も理想的に竣成し本日を以て盛大なる献堂式があげられる後に遠く大阿蘇をおほひ前に春深き金峰を眺め朝夕龍峰清緑に親しむ所。

都の響をよそにして新しき恵みに育まるゝうら若き乙女等の喜び、其處にはただもう純眞と清淨と感激との美しさあるばかりで天國其まゝの賛美歌がみちみちて居る

献堂式順序

五月四日 午後二時

- 一、奏樂(ヘンデル作ラルゴ)
 渋谷浦子嬢
- 二、開会之辞
 村上主事
- 三、頌榮(四百六十番)
- 四、聖書朗讀、祈祷
 三浦 冢氏
- 五、讚美歌(三十六番)
- 六、建築委員報告
 イー、チー、ホールン氏
- 七、讚美歌(四十二番)
- 八、献堂説教 ドラック博士
 通譯 稲富 肇氏
- 九、讚美歌(九十五番一、四、五、六節)
- 一〇、演説(基督教主義教育と日本婦人)
 遠山博士
- 一一、知事祝辞
- 一二、市長祝辞
- 一三、郡長祝辞
- 一四、在熊教役者曾代表祝辞
 古坂啓之助氏
- 一五、ルーテル教會年曾議長祝辞
 瀧本幸吉郎氏
- 一六、同宣教師曾議長祝辞

ゼ、ピー、ネルセン氏

一七、院長挨拶

マーサ、ビー、エカード嬢

一八、讚美歌(九十八番)

一九、祝禱 リパード博士

献堂沿革

十九世紀の初め福音ルーテル教會に属する米國婦人連の間に日本の若い女子のために精神的内容の充實した教育機關を起したいとの意見が一致し夫等の人々は其後此為めに日夜祈りつゞけひたすら献身的努力をなしつゞあつたが今から五年前にバッアーロー市に開かれたルーテル教會婦人傳導大會の決議によつて愈々具体的に實現されることに決してそれ以來婦人會の當局者たちは特別委員を設けて文書講演其他によつて専ら趣旨の徹底に邁進した。此の聲に應じて同教會内の各方面から多くの共鳴者を續出したことは云ふまでもないが延ひては卅餘校の大學生を初め無慮数千の日曜學校生徒まで我先きにと競ひ起ち總計十万の賛同者は有形無形の援助をおしまなかつた。中にもオハヨー州スプリングフィールド市の實業家ジェームス氏の如きはかねてから日本傳導のために派遣したいと望んで居た自己の愛嬢ジャニス嬢を失つて之れを紀念するために多大の物質的援助を申出た。かくて九州女學院創設の氣運愈々熟し建築委員並に學校經營者の任命となつたが開校準備としては一方に土地の買収、校舎の建築をなすと共に一方又三名の海外留學となり學事視察となつた譯である。蓋し當學院が熊本市に決定する迄には幾多の曲折があつたことは云ふ迄もないが己に男子の九州學院もおかれて居たしかたがた有利な條件を具有するものとして最後の決定を本市に見たものである。而して堂々たる四階建の本館を初め家族制の模範的寄宿、講堂、職員住宅等悉く三月末までに完成し七十名の新人學生は清新の氣にひたりつゞ去る十日から十二名の新職員に育くみ教へられて居る。

資料引用

「るうてる」 1926. 5. 15. 6 頁

資料 103 大正天皇奉悼文

大正十五年十二月十八日日附

電 文

謹ミテ 聖上陛下ノ御平癒ヲ祈リ奉リ併セテ 皇后陛下並ニ 攝政陛下二方ノ御
機嫌ヲ伺ヒ奉ル
右御執奏ヲ乞フ

日本福音ルーテル教會
代表者 瀧本幸吉郎
昭和元年十二月廿五日日附

奉 悼 文

大行天皇ノ崩御ヲ拝聞シ恐懼惜ク所ヲ知ラズ
茲ニ謹ミテ哀悼ノ誠ヲ致シ天機ヲ伺ヒ奉ル
右執奏ヲ乞フ

昭和元年十二月廿五日
日本福音ルーテル教會
代表者 瀧本幸吉郎

宮内大臣
一木喜徳郎殿
全十二月廿五日日附

奉 悼 文

大行天皇ノ崩御ヲ拝聞シ恐懼惜ク所ヲ知ラズ
茲ニ謹ミテ哀悼ノ誠ヲ致シ
皇后陛下
皇太后陛下ノ御機嫌ヲ伺ヒ奉ル
右執奏ヲ乞フ

昭和元年十二月廿五日
日本福音ルーテル教會
代表者 瀧本幸吉郎

宮内大臣
一木喜徳郎殿

資料引用

「るうてる」 1927. 1. 15. 1 頁)

新憲法、規則、及内規ノ件

- 一、本總會ニ於テ成案トナリシ新憲法、規則及ビ内規ヲ北米一致ルーテル教會外國傳道局ニ提出シ、ソノ承認ヲ受クルコト
- 二、而シテ後之ヲ次期總會ニ提出シテ採用ノ議決ヲナスコト、之ヲ可決採用シタ場合ハ現行憲法、規則及協同基礎條項ヲ廢棄シ、即時ニ新憲法、規則及内規ヲ施行スルコト
- 三、採用ヲナスニ先ダチ、之ヲ修正セントストキハ兩議會ハ各々三分ノ二以上數ヲ得ルニ非サレハ之ヲナスコトヲ得ズ

資料引用

1928. 5. 4-9. 第9回年会記録 53頁

資料 105 東京教会献堂式

献堂式

六月三日午後二時より左の如き式序によつて献堂式を執行した。

献堂式執行順序

第一部

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 司 會 | 瀧本幸吉郎氏 |
| 一、奏楽 | スタイワルト夫人 |
| 一、讚美歌(一二二) | 一 同 |
| 一、讚美歌(式文による) | 一 同 |
| 一、讚美歌獨唱(神の家) | エム・ハーダー嬢 |
| 一、説教(此殿を捧ぐ) | 日本福音ルーテル教會 年會副議長 米村常吉氏 |
| 一、奉獻唱 | 一 同 |
| 一、献 金 | |
| 一、讚美歌(四〇一) | 一 同 |
| 一、聖書捧讀 | |
| 列王記上八〇十二—廿一 | |
| 青山彦太郎氏 | |
| 希伯來書十〇九—廿五 | |
| リン氏 | |
| 以佛所書二〇十三—廿二 | |
| 三浦 冢氏 | |
| 哥林多前書三〇九—十七 | |
| トーラクソン氏 | |
| 一、献堂の祈禱 | |
| 一、宣 言 | |
| 日本福音ルーテル教會 年會議長 瀧本幸吉郎氏 | |

第二部

- | | |
|------------------|----------|
| 司 會 | 本田傳喜氏 |
| 一、讚美合唱(汝が光を放ち給へ) | 聖 歌 隊 |
| 一、工事報告 | |
| 設計技師 | 鈴木重治氏 |
| 一、祝 辞 | 千葉勇五郎氏 |
| | ウエーンダイク氏 |
| | 柳田牧師 |
| | 溝口牧師 |
| | スタイワルト氏 |

- | | |
|-----------|---------|
| | 瀧本幸吉郎氏 |
| | 岩永則恭氏 |
| 一、祝電披露 | 田坂泰迪氏 |
| 一、挨拶 | 石丸寅吉氏 |
| 一、頌栄(四六二) | 一 同 |
| 一、祝 禱 | スタイワルト氏 |
| 一、奏 楽 | |
| 一、閉 式 | 以 上 |

長い間、本實に長い間祈りゝ待ったこの殿を捧げる時私共はもう一度過ぎし日の想ひ出を辿る。東京傳道の曙光をみてより二十年、會堂建設の計畫をくわだててより五年。その間聖靈の御導のまゝに主の御旗の下に集りしもの年と共に加はつて早二百名に垂んとしてゐる。各々電につける想ひ出は豊かに、深い。顧みる者に歴史は一つの力である。振り返つて過去の恩寵に涙する者は全時に尚未來の御指導を祈る。唇を通し、電波を通して献堂式を祝して下さつた方々の御好に抱かれて私共は今恩寵と希望を覚えつゝ未知の行手を仰ぎ見てゐる。主よ我等を捨て給ふ勿れ。アーメン

資料引用

「るうてる」 1928. 7. 15. 11 頁

日本福音ルーテル教會婦人会聯盟規約

第一章 名稱、目的、組織

- 第一條 名稱 本會ハ日本福音ルーテル教會婦人會聯盟ト稱ス
第二條 目的 婦人會相互ノ理解ヲ増シ協力シテ神國ノ建設ニ努ムルコト
第三條 組織 本會ハ日本福音ルーテル教會ニ属スル婦人會ヲ以テ組織ス

第二章 大會、會員、役員、會費

- 第四條 大會 本聯盟ハ毎年一回大會ヲ開催ス
第五條 大會員 大會々員タル資格ヲ有スルモノハ左ノ如シ
婦人會代員、教職者夫人、婦人傳道師、婦人宣教師
第六條 役員 會長、副會長、會計、書記、各々一名ヲ以テ會務ヲ處理セシム
第七條 任期 各役員ハ一年ヲ以テ任期トシ、二期以上同一ノ役ニ再選スルコト
ヲ得ズ
第八條 大會費ハ婦人會員一人ニ就キ一ヶ月金五錢宛ヲ各婦人會々計ヨリ毎年三月
末日マデニ大會々計ニ送ルコトトス、ソノ一部ヲ文書費トス

資料引用

「るうてる」 1929.9.15.8 頁

ルーテル教會信仰告白

四百年記念會

六月二十五六日於福岡

主催 西部々會

信徒修養會

プログラム(豫定)

六月二十五日(水)

午後二時～三時半

記念禮拜及聖餐式

説教「信仰の確立」 ウキンテル

午後三時半～五時

西部々會議事及懇談會

午後七時半～九時半

公開記念講演(於博多教會)

「アウグスブルク信仰告白の由来」 石松量蔵

「福音主義信仰告白の永遠性」 稲富 肇

六月二十五日(木)

午前六時～七時 早天祈禱會

奨励者 値賀虎之助

△午前八時半～十時

聖書講演

「ヨハネ傳の信仰觀」 福山 猛

△午前十時十分～十一時半

「ウイルヘルムベックとデンマーク内國傳道に就て」 バック

△午後二時～三時

「ルーテル教會の外國傳道に就て」 ノルマン

△午後三時～四時半

「傳道懇談會」

△午後六時～七時

夕 陽 會

△午後七時半～九時半

研 究 會

一、 ゼズイットに就て 川桐新一

二、 ジョウエット博士に就て リ ン

三、 聖書研究者としての内村先生 高島貞久

資料引用

「るうてる」 1930. 5. 15. 12 頁

日本福音ルーテル教會憲法

宣 言

聖父ト聖子ト聖靈トノ御名ニヨリテ アーメン

福音ニヨリテ招キヲ受ケ、神ノ恩恵ニ與ルモノトセラレ、信仰ニヨリテ主ナル救主キリストノ肢體トナレル我等ハ、主ニ在リテ一體ニシテ各人互ニ肢タルナリ

我等、日本帝國ニ於ケル福音ルーテル教會ノ會員ハ主ノ命ニ従ヒ、聖語ノ眞理ヲ明ニシ、恩恵ノ福音ヲ傳ヘ、聖禮典ヲ守リ、我カ國ノミナラス萬國ニ神ノ國ヲ來ラスルハ、神ノ選民ニシテ、ソノ祭司タル總テノ基督信徒ノ本分ナルコトヲ認ム

我等ノ裡ニ既ニコノ業ヲ始メ給ヒシ者ハ、キリスト・イエスノ日マテ之ヲ全ウシ給フ、キコトヲ確信シ、相與ニ和衷協同シテ神意ノ成就ニ努メンカタメ茲ニ本憲法ヲ制定シ、日本福音ルーテル教會ヲ組織ス。更ニ我等ト信仰ヲ一ニシ志ヲ同ウスル教會ノ之レニ参加セシムコトヲ望ム

第一章 名 稱

第一條 本憲法ニ従ヒ組織セラレタル教會ヲ日本福音ルーテル教會ト稱ス

第二章 信 仰

第二條 本教會ハ奮新約聖書カ聖靈ニヨリテ賜ハリタル神ノ聖語ニシテ信仰ト行為ノ唯一明確且完全ナル規範タルコトヲ信ス

第三條 本教會ハ使徒信經、ニケア信經、及アタナシオ信經カ奮新約聖書ノ教ヘト一致スルモノアルコトヲ認ム

第四條 本教會ハ西曆一千五百三十年六月二十五日ノアウグスブルク信仰告白カ奮新約聖書ノ教ヘニ一致シタル信仰及教義ヲ正シク表明スルモノナルコトヲ認ム

第五條 本教會ハアウグスブルグ告白ニ關スル辨證論、ルーテルノ兩教理問答スマルコルド信條及コンコルド信條カ、アウグスブルク告白ト同シク奮新約聖書ノ教ヘニ一致シタル教義ヲ表示スルモノナルコトヲ認ム

第六條 本教會教職信徒ノ信仰及行為ニ關スル疑點ハ第二條所載ノ規範ニ基キ審議決定セラルヘキモノトス

第三章 信 徒

第七條 信徒トハ本教會ニ於テ洗禮ヲ受ケ又ハ堅信禮ヲ領シテ本教會々員トナリタルモノヲ謂フ

第四章 地方教會

第八條 地方教會トハ本憲法第二章所定ノ信仰ヲ告白シ本憲法及本教會規則ニ基キ組織セラレタル各地信徒ノ集團ヲ謂フ

第五章 教 職

- 第九條 教職トハ本教會規則ニ定ムル手續ヲ經テ本教會ノ教務及事業ニ従事スル者ヲ謂フ
- 第十條 教職ニシテ按手禮ヲ領シタル者ヲ教師ト稱シ按手禮ヲ受ケサル者ヲ傳道師ト稱ス

第六章 行 政

- 第十一條 本教會ノ行政ハ總會及其機關タル總務局之ヲ行フ
- 第十二條 總會ハ教職及地方教會代議員ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第十三條 總務局ハ總會正副議長、總會書記及總務五名ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第十四條 本教會教師ハ教師會ヲ組織シテ教師相互ノ向上ヲ計リ且教師志願者ノ試験教師轉入志願者ノ試問及教師ノ戒規ヲ行フ

第七章 戒 規

- 第十五條 本教會ノ教職又ハ信徒ニシテ第二條所載ノ信仰ヲ否定シ若クハ之ト抵觸スル教義ヲ宣傳シ又本教會憲法及規則並ニ總會ノ決議ヲ無視シ或ハ基督信徒ノ體面ヲ汚スヘキ行為ヲナシタルトキハ戒規ニ付セラルヘキモノトス
- 第十六條 教職ニ對スル戒規ハ本教會規則ノ定ムル所ニ従ヒ總務局及教師會之ヲ行フ信徒ニ對スル戒規ハ地方教會役員會之ヲ行フ

第八章 附 則

- 第十七條 本教會ハ寄附行為ヲナシ又ハ金錢其他ノ寄附ヲ受クルコトヲ得
- 第十八條 本教會ニ屬スル財産ハ本教會ノ組織スル社團ノ所有トス
- 第十九條 本憲法第二章以外ノ條項ニ付改正セントスルトキハ本教會總會正議員十名以上ノ連署ヲ以テ議案ヲ定期總會ノ議ニ付スベシ該議案ハ次ノ定期總會ニ於テ之ヲ議定スルモノトス 改正ノ議決ハ全正議員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニ非サレハ之ヲナスコトヲ得ス
- 第二十條 本憲法ハ昭和 年 月 日ヨリ之ヲ施行ス

日本福音ルーテル教會規則

第一編 信 徒

第一章 會 員

- 第一條 本教會ノ信徒ハ地方教會ノ會員トシテ所屬教會名簿ニ登録セラルヘキモノトス
- 第二條 本教會ノ信徒ヲ分チテ陪餐會員未陪餐會員ノ二トス
- 第三條 陪餐會員トハ大人洗禮又ハ堅信禮ヲ受ケタルモノヲ謂ヒ、未陪餐會員トハ小兒洗禮ヲウケ未タ堅信禮ヲ受クサル者ヲ謂フ
- 第四條 陪餐會員ハ信仰ノ充實ニ努メ主日禮拜ト他緒集會ニ出席シ聖餐典ニ與リ神

- 國ノ發展ヲ祈リ且教會經費ヲ負擔シ基督信徒トシテノ本文ヲ全ウスベシ
- 第五條 非陪餐會ニシテ青年期ニ達シタル者ハ堅信禮ヲ受ケ陪餐會員トナルコトニ努ムベシ
- 第六條 他教會又ハ他教派ヨリ轉入セントスル者ハ其所属教會ノ薦書ヲ當該地方教會ノ主任教職ニ提出スヘシ
但他教派ヨリ轉入セントスル者ハ堅信禮ヲ受クヘキモノトス
- 第七條 所属教會ヨリ他ノ地方教會又ハ他教派ニ轉出セントスル者ハ薦書ヲ其所属教會主任教職ニ請求スヘシ
教會主任教職ハ役員會ノ承認ヲ得之ニ薦書ヲ與スヘシ
但薦書ヲ受ケタル地方教會又ハ他教派ヨリ轉入手續終了ノ通知ニ接シタルトキ其轉出者ヲ除籍スヘシ
- 第八條 信徒ニシテ滿三ヶ年以上消息不明ノ者ハ其氏名ヲ別帳ニ記入スヘシ

第二章 執 事

- 第九條 執事ハ當該地方教會陪餐會員トシテ一ヶ年以上ヲ經過シタル滿二十歳以上ノ篤信且令明アル者ノ中ヨリ教會總會ニ於テ之ヲ選舉ス
- 第十條 執事ノ就任式ハ主日禮拜ニ於テ主任教職之ヲ執行ス
- 第十一條 執事ハ主任教職ヲ補佐シ牧會及傳道ヲ助ケ教會ノ事務ニ當ルヘシ

第二編 地方教會

第一章 總 則

- 第十二條 本教會ニ属スル地方教會ヲ分チテ自給教會及補助教會ノ二トス
- 第十三條 地方教會ハ本教會憲法及規則ニ抵触セサル範圍ニ於テ其教會ノ憲法及規則ヲ制定スルコトヲ得
但其制定ニ先タチ總務局ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス
- 第十四條 地方教會ハ毎年定期ニ教會總會ヲ開催シ三名以上七名以下ノ執事ヲ選舉スヘシ
- 第十五條 地方教會總會ニ於テ決議權及被選舉權ヲ有スルモノハ其教會所属ノ陪餐會員タルコトヲ要ス
- 第十六條 地方教會ニ役員會ヲ置ク
役員會ハ主任教職及執事ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第十七條 主任教職ハ教會總會及役員會ノ議長トナル
主任教職差支アルトキ又ハ主任教職ニ關スル事項ヲ議セントスル場合ハ執事中ヨリ議長ヲ互選スヘシ
- 第十八條 地方教會定期總會ニ於テ處理スヘキ事項左ノ如シ
一、傳道其他教會ノ發展ニ關スル事項ノ議定
二、主任教職執事其他委員ノ報告ノ受理
三、執事其他委員ノ選舉
四、信徒代議員ノ選舉
五、年度豫算ノ協賛及決算ノ審議
六、其他必要事項ノ議定
- 第十九條 役員會ニ於テ處理スヘキ事項左ノ如シ
一、教會所属財産ノ管理

- 二、教會總會ニ提出スヘキ豫算ノ編成及總務局ニ對スル豫算並ニ決算ノ報告
- 三、教會々計ノ處理
- 四、教會所属ノ教育及社會事業ノ管理
- 五、教會ノ充實發展ニ關スル計畫及實行
- 六、洗禮及堅信禮志願者ノ信仰試問
- 七、轉入轉出希望者ニ對スル薦書ノ受理及付與ノ承認
- 八、會員名簿其他記録ノ作成及保管
- 九、信徒ノ戒規ニ關スル件
- 十、其他必要事項

第二十條 信徒ニ對スル戒規ハ左ノ如シ

- 一、警告 二、聖餐停止 三、除名

第二十一條 信徒ニシテ役員會ノ戒規ニ對シ不服アルトキハ總務局ニ上告スルコトヲ得

第二十二條 地方教會主任教職ハ總會ニ教狀報告書ヲ提出スヘシ

第二十三條 地方教會主任教職ハ毎年一月末日迄ニ前年度ノ統計表ニ通ヲ作成シ總務局ニ之ヲ提出スヘシ

第二十四條 地方教會主任教職ハ信徒代議員ノ住所氏名ヲ選舉後二週間以内ニ總會書記ニ通知スヘシ

第二十五條 信徒代議員事故ノタメ總會ニ出席スルコト能ハサルトキハ役員會ハ執事中ヨリ其代理者ヲ選出スベシ
此場合ニ於テハ主任教職ハ直ニ代理者ノ住所氏名ヲ總會書記ニ通知スヘシ

第二十六條 地方教會ニシテ其教會以外ニ於テ募金セントスルトキハ豫メ總務局ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

第二十七條 地方教會ハ總會所定ノ會員名簿、教會日誌、會計簿、教會總會記録、役員會記録、教会學校記録、函書簿及備品簿ヲ備スヘシ
總務局ニ於テ前掲帳簿ノ提出ヲ求ムル場合ハ之ヲ拒否スルコトヲ得

第二章 自給教會

第二十八條 自給教會トハ現住陪餐會員參十名以上ヲ有シ教職給並ニ教會經費ノ全額ヲ支辨スル教會ヲ謂フ

第二十九條 自給教會ヲ組織セントスル地方教會ハ定期總會開催ニヶ月前迄ニ前條所定ノ要件ヲ具記シ役員會ノ連署ヲ以テ請願書ヲ總務局ニ提出シ其推薦ヲ經テ總會ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

第三十條 自給教會ハ教職ヲ招聘スルコトヲ得
但其招聘ニ先チ總務局ノ承認ヲクルコトヲ要ス

第三十一條 自給教會ハ其執事中ヨリ一名ノ信徒正代議員ヲ總會ニ選出スヘシ

第三十二條 自給教會ニシテ第二十八條所定ノ要件ヲ具備セサルコト半ヶ年以上ニ亘リタルトキハ失格ス

第四章 補助教會及傳道所

第三十三條 補助教會トハ現住陪餐會員十名以上ヲ有シ教會經費ノ全額並ニ牧師本

- 給ノ十分ノ一以上ヲ支辦スル教會ヲ謂フ
- 第三十四條 補助教會ニシテ前條所定ノ要件ヲ具備セザルコト半ケ年以上ニ亘リタルトキハ失格ス
- 第三十五條 傳道所トハ補助教會ノ資格ヲ有セザルモノヲ謂フ
- 第三十六條 補助教會ヲ組織セントスル傳道所ハ定期總會開催ニヶ月前迄ニ第三十三條所定ノ要件ヲ具記シ主任教職及現任陪餐會員五名以上ノ連署ヲ以テ請願書ヲ總務局ニ提出シ其推薦ヲ經テ總會ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス
- 第三十七條 補助教會ハ一名ノ信徒準代議員ヲ執事中ヨリ總會ニ選出スヘシ

第三編 教 職

第一章 總 則

- 第三十八條 教師ニシテ牧會ニ従事スルモノヲ牧師ト謂フ
- 第三十九條 教職ハ本教會所在地ニ於テハ其地方主任教職及關係教師ノ請求又ハ承諾ヲ得スシテ宣教シ禮典ヲ執行スルコトヲ得ス
- 第四十條 教職ハ任命セラレタル以外ノ業務ニ従事スルコトヲ得ス
但必要アル場合ハ總務局ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス
教職カ本職ノ儘各種ノ學校ニ入學セントスルトキモ亦同シ
- 第四十一條 教職カ任命セラレ又ハ轉任ヲ命セラレタルトキハ一ヶ月以内ニ赴任スヘシ止ムヲ得サル事由ノタメ右期間内ニ赴任スルコト能ハサルトキハ總務局長ノ許可ヲ受クヘシ
教職着任シタルトキハ直ニ之ヲ總務局ニ通知スヘシ

第二章 教 師

- 第四十二條 牧師ハ福音ノ宣傳、聖禮典ノ執行、牧會、洗禮志願者及堅信禮志願者ノ教育、教會一般ノ管理ヲナシ且自ラ信徒ノ模範タルコトヲ期スヘシ
- 第四十三條 地方教會ヲ擔任セサル教師ノ任務ハ總務局ニ於テ之ヲ定ム

第三章 傳道師

- 第四十四條 傳道師ハ福音ノ宣傳、牧會、洗禮志願者及堅信禮志願者ノ教育ヲナシ、關係教師ノ指導ノ下ニ教務ニ従事シ且自ラ信徒ノ模範タルコトヲ期ス可シ
- 第四十五條 傳道師ハ聖禮典、堅信式及結婚式ヲ司ルコトヲ得ス
但臨終ノ病者ヲ右式典ヲ希望シ教師ヲ招ク暇ナカリシ場合ハ此限りニアラス
此場合ニ於テハ其事由ヲ關係教師ニ届出テ關係教師ハ之ヲ教師會ニ申告シテ其承認ヲ求ムヘシ
- 第四十六條 婦人傳道師トハ總務局ノ認容スル神學校ヲ卒業シ又ハ多年基督信徒トシテ徳操アリ且傳道或ハ教育ニ經驗アル者ニシテ本教會ノ教職ニ任命セラレタル者ヲ謂フ
- 第四十七條 婦人傳道師ハ主任教職指導ノ下ニ福音ヲ宣傳シ年少者ヲ教育シ特ニ婦人ノ指導ニ當ルヘキモノトス

第四章 教職志願手續

- 第四十八條 教師志願者ハ本教會神學校ヲ卒業シ且二年以上實地教務ニ従事シタル者ナルコトヲ要ス
前記ノ資格ヲ有セサル者ト雖モ總務局ノ推薦アルトキハ志願書ヲ提出スルコトヲ得
- 第四十九條 教師志願者ハ總會開會前少クトモ六ヶ月以前ニ志願書及履歷書ヲ總務局長ニ提出スヘシ總務局長ト總會ヲ開キ之ヲ審議シ、適當ト認メタルモノハ試験委員ヲシテ之ヲ試験セシム
- 第五十條 教師試験ハ左ノ科目ニツキ之ヲ行フ
一、聖書緒論 二、辯證論 三、舊新約聖書神學 四、聖書積義學
五、教義神學 六、教會史 七、教理史 八、信條學 九、牧會神學
十、聖書注解 十一、基督教倫理 十二、説教 十三、本教會憲法及規則 十四、教師志願ノ理由 十五、信仰ノ告白
- 第五十一條 試験委員會ハ其認定ニ基キ前條所定ノ受験科目中一及至十一ノ一部ヲ省略スルコトヲ得
- 第五十二條 教師志願者ハ數回ニ亘リテ受験シ又ハ不合格科目ニ就テ再試験ヲ受クルコトヲ得
- 第五十三條 傳道師志願者ハ志願書ニ本教會神學校長ノ推薦書ヲ添付シ總務局長ニ提出スヘシ
本教會神學校卒業者ニ非サル者ハ履歷書及本教會教師二名ノ推薦書ヲ添付スヘシ
總務局ニ於テ適當ト認メタル場合ハ教師試験委員ヲシテ其試験ヲナサシメ之カ採否ハ總務局ノ推薦ヲ經テ總會之ヲ決ス
- 第五十四條 傳道師試験ハ左ノ科目ニツキ之ヲ行フ
一、舊新約聖書神學 二、教會史 三、教理史 四、聖書注解
五、教理問答 六、牧會神學 七、説教 八、本教會憲法及規則
九、傳道師志願ノ理由 十、信仰ノ告白
- 第五十五條 試験委員會ハ場合ニ依リ前條所定ノ受験課目中一及至六ノ一部ヲ省略スルコトヲ得
但本教會神學校卒業者ハ信仰告白ノミニ止ムルコトヲ得
- 第五十六條 傳道師志願者ノ試験ニ就テハ第五十二條ノ規定ヲ適用ス
- 第五十七條 試験ノ期日及場所ハ試験委員會之ヲ定ム
- 第五十八條 試験ハ各科六十點以上平均七十點以上ヲ以テ合格トス
- 第五十九條 他教會ノ教職ニシテ本教會ニ轉入セントスルモノニ對シテハ試験委員ハ總務局ノ請求ニ基キ本章ノ規定ニ從ヒ之ヲ試問ス

第五章 教師會

- 第六十條 教師會ニ議長一名書記一名ヲ置ク
議長及書記ハ毎年定期教師會ニ於テ之ヲ選舉ス
- 第六十一條 定期教師會ハ毎年總會ノ際ニ之ヲ開ク
教師ハ教師會ニ出席ノ義務ヲ有ス、止ムヲ得サル事故ニヨリ缺席スル場合ハ事由ヲ附シテ教師會議長ニ届出ツベシ
- 第六十二條 教師會ニ教師四名ヨリナル試験委員ヲ置キ毎年定期教師會ニ於テ之ヲ

選舉シ試験委員會ヲ組織ス

第六十三條 試験委員會ハ教職志願者及教師轉入志願者ニ對シ第四章ノ規定ニ從ヒ試験ヲ行ヒ教職志願者ニ付テハ其結果ヲ教師會ニ傳道師志願者ニ付テハ其結果ヲ總務局ニ各報告スヘシ

第六十四條 教師會ハ試験委員會ノ報告ニ基キ審議ノ上無記名投票ヲ以テ其採否ヲ定ム

但可決ノ場合ハ出席者四分ノ三以上ノ賛成アルヲ要ス

可決シタルモノニ對シテハ教師會議長之ヲ總會ニ推薦スヘシ

第六十五條 教師ニ對スル戒規ハ左ノ如シ

一、警告 二、職權停止 三、按手禮證明書標奪 四、除名

第四編 總會

第一章 總則

第六十六條 定期總會ハ毎年一回十月第一火曜日ヨリ開會シ其場所ハ總會ニ於テ之ヲ決定ス

但止ムヲ得サル事故生シタル場合ハ總務局ハ之ヲ變更スルコトヲ得

第六十七條 臨時總會ハ總務局ニ於テ必要ト認メタルトキ又ハ正議員三分ノ一以上ノ連署ヲ以テ請求シタル場合之ヲ開クヘキモノトス

但臨時總會ニ於テハ招集ノ目的タル議案ノ外ハ審議スルコトヲ得ス

第六十八條 總會ハ總會議長之ヲ招集ス

第六十九條 定期總會開催ノ期日、期間、場所及執行順序ハ其開會ノ日ヨリ一ヶ月前各議員ニ之ヲ通知スヘシ

臨時總會開催ノ期日、期間、場所及執行順序ハ其開會ノ日ヨリ二週間前ニ各議員ニ之ヲ通知スヘシ

但臨時總會ノ通知ニハ其會議ノ目的タル事項ヲ記載スルコトヲ要ス

第七十條 總會ノ期間及執行順序ハ總務局之ヲ定ム

第七十一條 總會ハ正議員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ之ヲ開會スルコトヲ得ス

第二章 議員

第七十二條 總會ノ議員ヲ分チテ正議員準議員ノ二トス

第七十三條 總會ノ正議員タルヘキ者左ノ如シ

一、總會ノ任命ヲ受ケタル現職教職

二、地方教會選出正代議員

第七十四條 總會ノ準議員タルヘキモノ左ノ如シ

一、休職教師

二、傳道師及婦人傳道師

三、地方教會選出準代議員

第七十五條 正議員ハ議場ニ於テ發言權及議決權ヲ有シ、賛否ノ表示ヲ拒ムコトヲ得ス準議員ハ發言權ノミヲ有ス

第七十六條 議長ハ必要ト認ムル場合ニ於テ議場ニ計リ議員ニアラサル者ニ發言セシムルコトヲ得

第七十七條 議員ハ總會出席ノ義務ヲ有ス、止ムヲ得サル事故アル場合ハ事由ヲ附シ

テ總會議長ニ届出ツヘシ

第三章 役員

- 第七十八條 總會ニ左ノ役員ヲ置ク
一、議長 一名 二、副議長 一名
三、書記 一名 四、會計 一名
- 第七十九條 役員タリ得ヘキ者ハ教職議員ニアリテハ正議員トナリテヨリ滿三ヶ年、信徒正代議員ニアリテハ本教會陪餐會員トナリテヨリ滿五ヶ年ヲ經過シタルモノナルコトヲ要ス
- 第八十條 役員ハ毎年定期總會ニ於テ之ヲ選舉ス
選舉ハ投票ニヨリテ之ヲ行ヒ無記名トス
出席正議員過半数ノ投票ヲ得タル者ヲ當選者トス
其得票出席正議員ノ過半数ニ達セサルトキハ第三回目ノ投票ニ於テ最多數ノ投票ヲ得タル者二名ニ對シ決選投票ヲ行ヒ當選者ヲ決ス
- 第八十一條 役員中缺員ヲ生シタル場合ニ於テハ總務局ハ其倍數ノ候補者ヲ指名シ文書ヲ以テ正議員ノ投票ヲ求メ其多數ヲ得タル者ヲシテ之レカ補缺役員タラシム
得票同數ナルトキハ年長者ヲ以テ當選者トス
總務局書記ハ役員補缺選舉ノ結果ヲ全議員ニ通知スヘシ
- 第八十二條 役員ノ任期ハ選舉セラレタル總會ノ終了ト同時ニ始マリ次期總會ノ終了ト共ニ滿了ス
但會計ハ會計年度ニ於テ交代ス
- 第八十三條 議長ハ本教會ヲ代表シ議事ヲ整理シ按手式ヲ司ル
副議長ハ議長事故アルトキ之ヲ代理ス
- 第八十四條 書記ハ總會開期中議事録ヲ作成シ總會閉會前承認ヲ得ルコトヲ要ス
議事録ハ總會閉會後二ヶ月以内ニ之ヲ出版スヘシ
- 第八十五條 書記ハ議長ト共ニ議事録及總會公文書ニ署名シ且總會ニ關スル記録及帳簿ヲ保管スヘシ
- 第八十六條 書記ハ議員名簿ヲ作成シテ之ヲ保管スヘシ
- 第八十七條 會計ハ本教會ニ關スル金錢ノ出納ヲ司リ總務局長ノ署名アル請求書ニ對シ支拂ヲナシ且金錢出納ニ關スル一切ノ書類及帳簿ヲ整理シテ之ヲ保管スヘシ
- 第八十八條 會計ハ其任期ノ終リニ於テ出納ニ關スル精細ナル決算書ヲ作成シ總務局ニ提出シテ其審査ヲ受クヘシ
- 第八十九條 會計ハ總會費ノ各地方教會員負擔額原案ヲ作成シ之ヲ總會ニ提出シテ其承認ヲ受クヘシ

第四章 委員

- 第九十條 總會ニハ其開期中左ノ委員ヲ置ク
一、會計審査委員 四名
二、資格調査委員 二名
議長ハ總會開會ニ際シ所要ノ委員ヲ設クルコトヲ得
- 第九十一條 資格調査委員ハ總會開會ニ當リ正議員中ヨリ議長之ヲ指名ス

- 第九十二條 資格調査委員ハ總會開會ニ當リ各議員ノ資格ヲ調査シ速カニ之ヲ議長ニ報告スヘシ
- 第九十三條 會計審議委員ハ豫算並ニ決算ヲ審査シ之ヲ總會ニ報告スヘシ
- 第九十四條 總會ハ必要ニ應シ委員ヲ設ケ且總務局ノ下ニ常置委員ヲ設クルコトヲ得

第五章 會 議

- 第九十五條 總會ニ於テ處理スヘキ事項左ノ如シ
- 一、本教會ノ一般行政ニ關スル事項ノ議定
 - 二、本教會ノ建設發展並ニ附屬事業ニ關スル施設計畫ノ議定
 - 三、神學校ニ關スル件
 - 四、總務局執行事項ノ事後審議
 - 五、總務局教師會其他ニ關スル報告ノ受理
 - 六、教職志願者及轉入者ノ採否ニ關スル議定
 - 七、按手式ノ執行
 - 八、本教會年度豫算並ニ決算ノ審議
 - 九、本教會憲法及規則ノ改正
 - 十、役員、總務及委員ノ選舉
 - 十一、其他必要ナル事項ノ議定
- 第九十六條 按手式ハ總會開期中之ヲ執行ス
但シ已ムヲ得サル事故アルトキハ此限ニ非ス
議長ハ執行委員數名ヲ指名ス
- 第九十七條 按手式ヲ領シタルモノ並ニ傳道師ニ任命セラレタルモノニ對シテハ議長及書記ノ連署シタル證明書ヲ附與ス
- 第九十八條 總務局及各委員會ハ其委託事項ニ關スル議案ヲ總會ニ提出スルコトヲ得
議員ハ二名以上ノ賛成ヲ得テ議案ヲ提出スルコトヲ得
- 第九十九條 前條ノ議案ハ文書ヲ以テ之ヲ書記ニ提出スヘシ
但緊急動議ハ此限りニアラス
- 第百條 議案ハ議長及書記之ヲ整理シテ議場ニ提出スヘシ
- 第百一條 決議ハ特定ノ場合ノ外之ヲ過半數トシ賛否同數ナルトキハ議長ノ採決ニ依ル議長ノ採決ニ疑義ヲ生シタル場合議員ハ賛否ノ投票ヲ請求スルコトヲ得
- 第百二條 總會ハ總務局執行事項ニツキ出席議員三分ノ二以上ノ同意ヲ以テ之ヲ否認スルコトヲ得

第五編 總 務 局

- 第百三條 總務局ハ總會ノ決議ニ基キ其委託事項ヲ處理ス
但議會閉會中ニ於テ臨時緊急ノ必要アル場合ハ臨機ノ處置ヲ執リ次期總會ニ於テ之カ事後承認ヲ受クルコトヲ要ス
- 第百四條 總會正副議長及書記ハ其職務上總務トナリ其他ノ總務五名ハ總會ニ於テ之ヲ選舉ス
- 第百五條 總務タリ得ヘキ者ノ資格、選舉方法並ニ任期ニツキテハ第七十九條、第八十條及第八十二條ノ規定ヲ準用ス

- 第百六條 總務局ニ局長及書記ヲ置ク
局長ハ總會議長、書記ハ總會書記之ニ當ル
- 第百七條 總務會ハ總務局長之ヲ招集ス
但全總務四分ノ三以上ノ出席アルニアラサレハ之ヲ開會スルコトヲ得ス
- 第百八條 總務局長ハ總務會開會ノ期日及場所ヲ其開會ノ日ヨリ二週間前ニ各總務及總會議員ニ通知スヘシ
- 第百九條 總務局書記ハ總務會ノ決議ヲ二週間以内ニ總會議員ニ通知スヘシ
但人事ニ關スルモノニシテ秘密ヲ要スル場合ハ此限りニアラス
- 第百十條 總務局長ハ緊急ヲ要スル事項ニツキ適當と認ムル場合ニ於テハ文書ヲ以テ各總務ノ賛否ヲ求ムルコトヲ得
但三名以上ノ總務カ該事項ニツキ總會ノ開會ヲ要求シタルトキハ之ヲ招集スルコトヲ要ス
- 第百十一條 總務局長又ハ其委託ヲ受ケタル總務ハ毎年一回以上各地方教會ヲ巡回シテ其教狀ヲ視察シ記録及帳簿類ヲ檢閲シテ之ニ適宜ノ進言ヲナスヘシ
前項視察ノ結果ハ之ヲ總會ニ報告スヘシ
- 第百十二條 總務局長ハ教職就任式ヲ司ル
但事故アル場合ハ他ノ教師ヲシテ代理セシムルコトヲ得
- 第百十三條 總務局長ハ本教會ノ諸事業ニ關スル報告書ヲ作成シ之ヲ總會ニ提出スヘシ
- 第百十四條 總務局書記ノ處理スヘキ事項左の如シ
一、總會議事録ノ作成
二、總會決議事項ノ各議員ニ對スル通知
三、局長ト共ニスル公文書ノ署名
四、官庁其他教會外部ニ對スル文書ノ往復
五、統計表ノ作成
六、書類帳簿ノ整備及保管
- 第百十五條 總務局書記ハ總務局取扱事務ニ關スル報告書ヲ作成シ之ヲ總會ニ提出シテ其承認ヲ求ムヘシ
- 第百十六條 總務局ニ於テ處理スヘキ事項左ノ如シ
一、教職ノ任命、轉任、休職、退職、及休暇ニ關スル件
二、傳道師ニ對スル關係教師ノ任命
三、教職志願者及轉入志願者ノ考査及推薦
四、傳道師ノ戒規及信徒ノ戒規ニ關スル上告ノ審理
五、休退職手當、遺族扶助科額ノ決定
六、其他人事ニ關スル件
七、地方教會ノ組織請願ニ關スル件
八、本教會ニ屬スル土地建物ニ關スル件
九、本教會ノ經營スル教育及社會事業ニ關スル件
十、図書ノ著作、翻譯、出版及保管ニ關スル件
十一、其他總務局各部ニ屬セサル事項
但教職ノ身上ニ關スル重要事項ハ緊急ヲ要スル場合ノ外總會閉會中ニ之ヲ處理シ總會ノ協賛ヲ得ルコトヲ要ス
- 第百十七條 傳道師ニ對スル戒規ノ適用ニ就テハ第六十五條ノ規定ヲ准用ス

- 第百十八條 總務局ニ傳道部及財務部ヲ置ク
- 第百十九條 傳道部ノ處理スヘキ事項左ノ如シ
- 一、信仰、教勢及教會自給精神ノ振起ニ關スル件
 - 二、傳道ノ計畫及遂行
 - 三、新傳道地及傳道所ノ開設ニ關スル調査及推薦
- 第百二十條 財務部ノ處理スヘキ事項左ノ如シ
- 一、本教會ニ關スル一般財務ノ處理
 - 二、年度豫算ノ編成及決算ノ審査
 - 三、各地方教會經濟能力ノ調査
- 第百二十一條 各部ニ部長及部員各二名ヲ置キ總務中ヨリ之ヲ互選ス
- 第百二十二條 各部ハ其處理事項ニ關スル豫算ヲ編成シ之ヲ總務會ニ提出シテ其承認ヲ求ムルコトヲ要ス
- 第百二十三條 各部ノ經費ハ總務會ノ承認ヲ得ルニ非サレハ之ヲ他ノ費目ニ流用スルコトヲ得ス
- 第百二十四條 各部ノ經費ハ其収支ヲ明カニシテ總務會ニ報告シ其審査ヲ受クヘシ
- 第百二十五條 各部ニ於ケル事業ノ計劃ハ總務會ノ委託シタルモノヲ除クノ外總務會ノ審議決定ヲ經ルニ非サレハ之ヲ施行スルコトヲ得ス
- 第百二十六條 總務局ニ對スル請願又ハ提案ハ左ノ手續ヲ以テ之ヲ總務局長ニ提出スルコトヲ要ス
- 一、地方教會ニ關スル事項ハ該教會役員連署ヲ以テ提出スルコト
 - 二、教職ニ關スル地方教會ノ申告又ハ請願ハ該教會執事過半數ノ連署ヲ以テ之ヲ提出スルコト
 - 三、教職ノ自己ニ關スル事項ハ單獨ニテ之ヲ提出スルコト
 - 四、其他ノ事項ハ總會議員三名以上又ハ同一教會現住陪餐會員七名以上ノ連署ヲ以テ之ヲ提出スルコト
- 第百二十七條 總務局ニ左ノ常置委員ヲ置ク
- 一、日曜學校委員 貳名
 - 一、教會機關紙委員 貳名
- 第百二十八條 常置委員ハ毎年定期總會ニ於テ議員中ヨリ之ヲ選舉ス
- 第百二十九條 日曜學校委員ハ本教會ノ經營ニ屬スル日曜學校ニ關スル事項ヲ處理ス
- 第百三十條 教會機關紙委員ハ本教會機關紙ノ編輯及發行ニ關スル事項ヲ處理ス

附 則

- 第百三十一條 本規則ヲ改正セントスルトキハ定期總會ニ於テ出席正議員三分ノ二以上ノ賛成ヲ要ス
- 第百三十二條 本規則ハ昭和 年 月 日ヨリ之ヲ施行ス

日本福音ルーテル教會内規

◎地方教會ニ關スルモノ

- 一、補助教會ハ自給教會ニ傳道所ハ補助教會ニ各々速ニ達センコトヲ努ム可シ
- 二、補助教會ニシテ在住陪餐會員三十以上ヲ有シ牧師本給二分ノ一以上ト其ノ他ノ

教會經費金額ヲ支出シ得ルモノハ昭和拾年マテ總會ニ正式議員ヲ選出スルコトヲ得

三、地方教會豫算並一般豫算中ニ於ケル左ノ項目ヲ除ク總額中ヨリ原則トシテ一年五分宛ヲ削減シ之ヲ新事業費ニ當ツルコト

家賃、修繕費、税金、新事業費、宣教師ノ旅費但削減ニヨリテ得タル金額ヲ新事業費ニ當ツルコトハ毎年外國傳道局ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

四、各地方教會ハ其ノ主任教職ニ對スル俸給ヲ毎月二十五日迄ニ支拂フヘキモノトス

五、自給教會ニ於ケル牧師ノ俸給額ハ該教會ト教師トノ自由契約ニ依リテ定ム但シ教師本給（八十圓）ヲ下ルコトヲ得ズ

◎總會費ニ關スルモノ

六、各地方教會其他ノ總會費負擔割合左ノ如シ

（イ）教會ヲ擔任スル教職並ニ正代議員ノ旅費及宿泊費ハ當分ノ中全額ノ三分ノ二ヲ總會費ヨリ支出シ三分ノ一ハ各地方教會ノ負擔トス

（ロ）教育其他ニ従事スル教職ノ旅費宿泊費ハ總會費又ハ學校其他ノ經費中ヨリ支出スヘシ

（ハ）各地方教會負擔ノ割當額ハ其都度總會ニ於テ之ヲ定ム

（ニ）休職教師及教會選出準代議員ノ旅費及宿泊費ハ自辦トス

◎旅費及手當ニ關スルモノ

七、總會議員、委員ノ旅費ハ二百五十哩以上ヲ二等急行旅費、必要ナル場合ハ寢臺費ヲ支給、二百五十哩以下ヨリ三等旅費トス

但特別ノ事情アル者ニシテ總務局ノ許可ヲ得タル場合ハ此限りニアラス

八、旅行中ノ食事手當ハ一食一圓、滞在費ハ實費トス

九、教職轉任ノ費用ハ實費トス

◎教職志願者試験委員ニ關スルモノ

十、教職志願者試験委員ノ半数ヲ宣教師トシ正議員トナリタルトキヨリ五年ヲ經過シタル者ヲ以テ之ニ充ツ

◎總會一般ニ關スルモノ

十一、總會ノ用語ハ日本語トス外國語ヲ使用スルトキハ議長ノ許可ヲ得テ通譯ヲ附スヘシ

十二、投票紙ハ採票後直チニ破棄スヘキモノトス

◎議員ニ關スルモノ

十三、正議員タルヘキ宣教師ハ着任後二年ヲ經過シタルモノナルコトヲ要ス着任後二年未滿ノ宣教師ハ準議員タルヘシ

十四、婦人宣教師、婦人傳道師ハ準議員タルヘシ

十五、婦人宣教師關係ノ婦人傳道師ハ婦人宣教師ノ指導ノ下ニ之ヲ置キ總會議員タルノ資格ヲ有ス

但總務局ノ任命ヲ受ケサル者ハ議員タルノ資格ヲ有セス

◎役員ニ關スルモノ

十六、議長ハ邦人、副議長ハ宣教師、書記ハ邦人、會計ハ宣教師トス

但補助書記一名、及補助會計一名ヲ置キ前者ハ宣教師中ヨリ、後者ハ邦人中ヨリ總會ニ於テ選舉ス

十七、外國傳道局ニ對シテハ副議長本教會ヲ代表ス

十八、總務五名ノ中二名ヲ日本人、三名ヲ宣教師トス

◎社團ニ關スルモノ

十九、日本福音ルーテル教會社團理事ハ總會ニ於テ之ヲ選ヒ其半數ヲ宣教師トス

◎内規ニ關スルモノ

二十、本内規ヲ改正セントスル場合ハ本内規ヲ採用セシトキノ如ク邦人代表及宣教師代表ハ各別ニ之ヲ審議シ双方一致ノ議定ヲ要ス

資料引用

1931. 4. 17

解題・解説

第5章 嵐の時代の始まり（1932年～1941年）

第1節 ひたすら内部充実へ

第2節 宗教団体法とルーテル教会

資料109 社団組織改組（1932.10.4-6.第13回総会記録 65頁～66頁）

日米の国際関係に暗い情勢が押し寄せる気配の中で、1932年頃からボードの要請を受けて、社団所有の教会財産の委譲に関する問題の検討に入り、日本福音ルーテル教会側の検討準備委員会を坪池、ホールン、稲富で構成した。

資料110 40年史梗概（るうてる 1933.8月号3頁、9月号4頁、10月号5頁）

1933年、佐賀で宣教開始して以来、40年を迎えたので、40周年記念大会を1933年8月に、記念特別大伝道を秋に実施する案を1932年の総会で議決した。

資料111 宣教40周年記念感謝決議案（るうてる 1933.10.15.7頁）

宣教40周年記念の感謝決議案を関東及び九州の両修養会は1933年9月23日に作成した。機関紙「るうてる」は、九州修養会の感謝決議案を1933年10月号に載せた。

資料112 教会自給10年計画実施報告（1936.3.4-6 .第16回総会記録 140頁～143頁）

教会規則の改正に係る教会の重要案件の一つである、教会自給のための促進計画案が1934年から「自給独立促進作成委員会」にて検討され、39教会の内、久留米、博多、東京、大江、熊本、直方、京都の教会が自給を達成したことが報告された。

資料113 教会合同不参加の決議（第18回総会記録、1938.3.9-11）

日本基督教連盟の教会合同委員会よりの問い合わせであった教会合同参加に対しては、アウグスブルク信仰告白第7条に基づき、参加拒否の決議を1938年3月4日の総務会で行った。

資料 114 宗教団体法案の処理（第 19 回総会議事録 1939.3.8-10 93 頁）

第 19 回総会において、宗教団体法案の議会通過(1939.23)を見越して、その処理に関して、総務局の委員は議長と書記、その他に 2 名を充てることとした。

資料 115 教会合同委員推薦の決議（第 19 回総会記録、1939.3.8-10）

宗教団体法の成立・実施を前に、日本福音ルーテル教会とフィンランド系の福音ルーテル教会の合同のための委員として、三浦と本田を第 19 回総会で選任することを承認した。

資料 116 基督教連盟代議員報告(第 19 回総会記録、1939.3.8-10 151 頁-155 頁)

教会合同を取り扱う基督教全国協議会の後、基督教連盟総会を富士見町教会で開き、きよめ教会及び東亜伝道会の加盟承認と共に、国軍の将兵に対する感謝文を議決した。

資料 117 宗教団体法と基督者（るうてる 1939.4.15.1 頁）

戦時体制の強化のために、1939 年 4 月 8 日に宗教団体法が公布された。神道教派 13 派はそのまま認可されて行ったが、仏教は 56 派を 28 派に統合のうえ認可され、キリスト教では宗教団体法による教団にならなかった少数のものを除き、合同して 2 つの教団になり認可を受けた。この 2 つの教団のどちらかに属さなければ、宗教団体法によるキリスト教団体として存在することが出来なくなった。

資料 118 教団規則の作成経過（20 回総会議事録、1940.3.6-9 14 頁）

1939 年 10 月、総務局長の三浦冢と坪池隆は文部省を訪ねて意見交換し、第 1 次教団規則案を起草した。翌年の 1940 年 1 月になると、文部省は各派の協議会を開き、それぞれの教団規則に関する要項を示した。1940 年 4 月発行の宗教団体法の施行に併せて、第 1 回教団規則案の修正が求められたので、第 2 次草案を作成し、文部省宗務局の内諾を終えて、20 回総会に提出し、その賛成を得た。ただし、字句の修正は総務局に委ねられた。

資料 119 皇紀二千六百年記念伝道計画案 (20 回総会議事録、1940.3.6-9 92 頁-94 頁)

戦時体制に向けての非常時局における国民精神の高揚目的として、1940 年を紀元二千六百年記念とする 2 カ年の伝道計画案を策定し、これを実施するための中央委員及び地方委員を任命し、全教會的に実施に当たった。

資料 120 教団規則に関するボード決議(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, July 18,1940.)

1940 年 4 月 1 日より宗教団体が実施され、その団体に沿った合同する教団規則の内容がボードに伝えられ、その承認を経て、ULCA の総会に上程された。

資料 121 教団規則に採択に関する件(第 21 回臨時総会記録、1940.10.15-16)

1939 年秋から文部省の折衝の中で検討され教団規則は 1940 年 10 月 1 日の認可を目指していたが、教会合同問題が台頭してきたので、結果的に実現には至らなかった。

資料 122 教会合同の決議 (第 21 回臨時総会記録、1940.10.15-16)

1941 年 6 月 12 日に文部省は教団設立の基準を教会数 50 以上、信徒 5,000 以上と内示した。当時の日本福音ルーテル教会は教会数 44 (実際に認可された教会 30)、総会員数 5,152、教職数 (伝道師含む) 47 名であり、福音ルーテル教会 (フィンランド系) との合同(1940 年 10 月)により、当初は独自の教団設立を果たすことが可能であり、文部省との折衝を重ねたが、『皇紀二千六百年と教会合同』の機運に押されて、日本基督教団との合同を受け入れ、1941 年 5 月、東京教会で開催された第 22 回総会において日本基督教団第 5 部に参加することを決議した。

資料 123 福音ルーテル教会との合同(第 21 回臨時総会記録、1940.10.15-16)

宗教団体に適う教団設立認可基準である教会数 50、信徒数 5,000 を満たすために 1940 年に 4 月からの協議をへて、10 月に合同の契約書に調印した。

資料 124 社団財産移管に関するボード決議(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 23,1941.)

1941年1月23日のボード会議は社団の財産の内、九州学院及び九州女学院に
関係する財産をそれぞれの財団名義とすることと、日本人教職を中心に社団の
理事を構成することを決議した。同年7月、社団は名称変更を行い、「日本福音
ルーテル社団」とし、事務所を熊本市新屋敷から「東京都中野区鷺宮 2-9-21」
に変更。理事の変更は、1941年3月、定款を変更し、権限を議長・三浦冢に委
任した。教会組織的には日本基督教団に合同したが、日本福音ルーテル教会の
土地・建物（教会用地、幼稚園施設）、それに宣教師館の土地建物は合同後も日
本福音ルーテル社団が継続して所有した。

資料 125 社団財産の保全と定款(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 23,1941.)

1941年2月21日の社団理事会で理事長であったスタイワルトは日本政府に
問い合わせ、日本人の理事を中心とする理事会への変更とそれに伴う定款の改
定準備に取り掛かることを報告している（J.L.M,1941.2.21.）。これに伴い、10
月から本格的にスタイワルトは主導的な役割を担い、社団の全財産(教会、宣
教師館、幼稚園等の土地建物)の保全を図るために社団の名称を「北米合衆国一致
ルーテル教会宣教師社団法人」（1919年10月名称変更）から「日本福音ルー
テル社団」に、事務所所在地も熊本市新屋敷から「東京都中野区鷺宮 2-9-21」
に、さらに理事もスタイワルト、シリッカー、ミラーらの宣教師理事から日本
人教職で当時の教会執行部である三浦、本田、平井、稲富に変更作業を整え、
1941年7月17日、ボード会議の承認を得て、社団の移管を完了させた。

資料 126 社団の改編決議 (JCLM. 1941.2.19-20)

社団の名称、事務所を1941年2月の在日共同宣教師会で議決し、1941年3
月に定款の変更を進めた。

資料 127 宣教師帰還に関するボードの通知と関連資料 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, May 1,1941.)

1940年秋頃からアメリカ国務省や諸派のミッション団体は宣教師の離日を促
すようになっていた。北米一致ルーテル教会のボードは休暇でアメリカに帰国
した宣教師(リン、シャーク、ウィンテル、ミラー、アダルホルト、バークナー、
クヌーテン)を再度、日本に派遣することを控える措置を取ると共に、可能な限
り速やかに帰国可能な宣教師は離日をするように指示した。他のプロテスタン

ト宣教団体も一様に同じ方針を取り、翌年の 2 月から 3 月にかけて、日本での伝道に携わっていたプロテスタントの宣教師の 20%がアメリカに帰国した。さらに、1941 年夏以降、日米関係の悪化による国交断絶と戦争勃発の危機が緊迫する情勢の中で、アメリカの海外伝道局からの支援の送金は、著しく困難になっていた。1941 年 5 月の時点で日本に残っていたルター派のアメリカの宣教師は以下の通りである。

M.ポッツ (熊本)、M.パウラス (熊本)、G.W.シリンガー (熊本)、A.C.クヌーテン (名古屋)、S.O.トーラクソン (神戸)、A.パウラス (東京)、E.T.ホーン (東京)、C.W.ヘフナー (東京)、A.J.スタイワルト (東京)。

資料 128 宣教師帰還に関する報告 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, May 1,1941.)

日米関係が陰悪な状況下の 1941 年 5 月の時点で日本に残っていたルター派のアメリカの宣教師は以下の通りである。M. ポッツ (熊本)、M. パウラス (熊本)、G.W.シリンガー (熊本)、A.C.クヌーテン (名古屋)、S.O.トーラクソン (神戸)、A.パウラス (東京)、E.T.ホーン (東京)、C.W.ヘフナー (東京)、A.J.スタイワルト (東京)。

資料 129 ホーン議長報告(JCLM. 1941.5.5-8)

1941 年 1 月 4 日にスタイワルトの妻アリスが当初は軽微の感染症であったが、心臓疾患を患っていたこともあり、何カ月も深刻な状態で伏せた後、61 歳で召天し、東京教会で宣教師会長ホーンが司式して葬儀を挙行了した後、1 月 6 日、多摩霊園の外人墓地に妻アリスの遺体は土葬で埋葬した。それから 2 ヶ月後、帰国を前にして、ホーンは宣教師会長報告を書いた。

資料 130 宣教師帰還に関する報告 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, October 23,1941.)

開戦が迫った 1941 年 9 月から 10 月にかけてボードが把握していた残留宣教師の動向を伝えるボード報告。

資料 131 宣教師スタイワルトとヘフナーの帰還 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 22,1942.)

資料 132 宣教師スタイワルトの帰還の経緯(ULCA Board of Foreign Mission

Minutes, April 23, 1942.)

資料 133 宣教師三名の帰還最終報告(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, July 23, 1942.)

1942年6月9日のボード会議はスタイワルトとヘプナー夫妻がアメリカに帰還するとの知らせを国務省から受ける。これは北米海外伝道会議の東アジア委員会から国務省に入った情報にであった。1942年5月、開戦により交戦国や断交国に残された外交官や民間人及びその家族などを帰国させるための交換船に関する協定が結ばれ、第1次日米交換船として浅間丸が運航されることとなった。スタイワルトとヘプナー夫妻は、6月17日、浅間丸に基督教のプロテスタント宣教師509名(46団体、子供118名)、それにカトリック神父・修道女117名と共に横浜港より乗船した。浅間丸は、上海や香港、サイゴンで、同地を含む日本の勢力圏内に住み抑留されたイギリス人やアメリカ人などを乗せて、交換地のポルトガル領東アフリカのロレンソ・マルケス(現在のモザンビークのマプト)へ向かい、7月22日にロレンソ・マルケスに入港した。その後、7月26日に、アメリカ側から来たスウェーデン船籍の「グリップスホルム」(Gripsholm)号に乗り換え、8月25日、ニューヨーク港に帰港し、スタイワルトは長い船旅を経て母国アメリカに無事帰還した。

社団組織に関する件

左の綱領を以て社団を組織すること、前委員をして草案を作成せしめ次の総務會に提出せしむること

- | | | |
|-------------|---------------|--|
| (イ)名 | 稱 | 日本福音ルーテル教會社団 |
| (ロ)目 | 的 | 財産の所有利用及管理 |
| (ハ)事 | 務 所 | 日本ルーテル神學専門學校内 |
| (ニ)理 | 事 | 内外人三名宛 六名 |
| (ホ)任 | 期 | 三ヵ年 最初六名中二名ハ一年、二名ハ二年、二名ハ三年 |
| (ヘ)總會の推薦に基き | 之を原則として理事會選舉す | |
| (ト)財産處理 | 理事 | |
| (チ)總 | 會 | 教會總會と全時 |
| (リ)財 | 産 | 不動産壹萬円を、ミッションより譲渡くることを求め更に外國傳道局の許可を次期總會迄に受けること |

資料引用

1932. 10. 4-6. 第 13 回總會記録 65 頁—66 頁

日本福音ルーテル教會四十年史梗概

第一期 基礎工事時代 自明治二十六年 至三十五年

(開教の準備) 一八八六年、明治十九年(自今四十七年前)北米合衆國の東部太平洋に面せるヴァジニヤ洲のローノックに開かれたる教會々議の折、南部ゼネラルシノッド、ホルストンシノッド、テネシーシノッドの三シノッドは合併して新にユナイテッドシノッドを組織したが、後二年して日本傳道を決議し、三年間熟議審査の結果、神學博士ゼ、ニ、シラー氏を最初の宣教師として派遣することゝなつた。此任を受けてシラー氏が日本に來朝したのが、明治二十五年二月で、同年十一月之に次ぐ宣教師として神學博士RB、ピーリ氏が來朝したが共にローノックの學友であつた。ピーリ氏が來朝したのは尚もシラー氏が佐賀在住のブラッドベリー氏の勸告に従つて、佐賀の視察から東京の暇寓に歸つた時で、相談の結果九州佐賀に傳道の基礎を置く事に決定したのである。

明治二十六年一月先づシラー氏は佐賀に赴いたが、當時外人の居留地外の住居は容易ではなかつたので佐賀中學校の英語の教師として居住の許可を得たのである。三月にはピーリ氏が山内量平氏夫妻と共に佐賀に赴いたが、先づ英語夜學校を開いて、ピーリ氏はその教師と云ふ格で居住の許可を得た。

(宣教開始、最初の禮拜) 二十六年四月二日、復活主日、佐賀市松原町、明治橋通り七八番地の借家でシラー、ピーリ兩氏と山内夫妻及び既に傳道を佐賀に開始してゐた與賀町の日本基督教會員の應援参加で二十余人の會衆で復活日の禮拜式を守つたのが、ルーテル教會の日本に於ける最初の宣教でもあり、禮拜でもあつた。山内量平氏が司會したと記録されてゐるが説教者は不幸にして不明である。

(働き人の増加) 斯くて漸く傳道の着手が出来た、つゞいて働き人として明治二十七年鈴木直丸氏後に山内量平氏の嗣子となり山内姓をとつた。明治三十年には既にシラー氏は脳病の故を以て歸國したが、三十一年九月七日にはウキンテル氏、十一月十五日にはブラウン氏、三十三年十一月にはリップパード氏相次で來朝し、邦人教職としては三十年和佐恒也氏、三十四年(四月十日)には米村常吉氏來り働くことゝなつた。

(教派の形態成る) ピーリ氏は既に明治二十六年七月聖餐式々文を繙編したが、二十八年には「教理問答書」を繙出し、三十年には禮拜式文全文の繙編を了し、更にアウグスブルク「信仰告白書」をも繙出した。これよりさき二十九年四月には略式ながら神學教育も開始され、和佐恒也氏先づ學び、次で小池某、久米某等が研究生の名の下に教育を受けた。三十一年六月に花房小路に佐賀教會堂が新築されて茲に名實共に形態が整成したのであつた。

(傳道網の擴張) 明治二十八年には既に小城傳道を開始したが、之は断續的であつた。三十一年佐賀の教會堂新築を機として佐賀市内に、熊本に、久留米に傳道の計畫あり、熊本は山内直丸氏が事に當り。三十三年ブラウン氏亦熊本に赴き、其の基礎稍整つた。

久留米傳道は明治三十一年小池某先づ之に當つたが坐折し、三十三年和佐恒也氏新規に傳道を企てたが後デニツシュミツシヨンのウキンテル氏に譲るに及び、同年十月ウキンテル氏は米村常吉氏と共に之に代り、久留米教會の基礎を築くことゝなつた。

三十五年十一月には大牟田傳道が開始され、和佐恒也氏主任として之に赴いた。

(機關紙發刊) 明治三十三年七月十二日に最初の機關紙として「路帖教報」が發刊されたが、之は三十五年六月「路帖新報」と改題し更に四十四年五月「るうてる」と改題して現在に及んでゐるのである。

(最初の按手禮式) 明治三十二年六月には山内量平、同直丸父子が佐賀教會堂にて按手式を領されたが、之がルーテル教會に於ける按手式の最初であつた。

教勢 教會四、信徒數一一四

第二期 播種時代 自明治三十六年 至全四十五年

(佐賀中心の末期) 明治三十六年一月から一度絶えてゐた神學教育が再興され、四月には宣教滿十年記念大傳道會を開催され、フキンランド派のミス、ウスタロ、ミスクルビネンの如きも佐賀に滞留して働いてゐた。恰も日本のルーテル派の中心は佐賀だといふ觀があつたが、時代は漸く廻轉しかけた

(教會の消長) 明治三十九年三月博多傳道が開始された。主任者は老辣山内量平夫妻であつた。もと久留米のウキンテル、米村常吉兩氏により此処の傳道は着手されてゐたが、久留米傳道牧會漸く多事となつたので、山内氏の出張應援を見るに至り、斯して山内氏が乗込むことになつた。

此の時、佐賀は山内量平氏去るに及んで植田方直氏後を受けたが教勢頓に挫折し、四十一年一月には植田氏の轉任となり、同年三月までは一時なりしも教會閉鎖の憂すら見るに至つた。そこで大牟田より和佐氏を再び呼招し、漸く態勢の挽回に努めた。が既にゼネラル、カウンセル最初の宣教師としてスミス氏は三十一年に來朝して東京に在住し、新しい神學教育は陣容を整へて愈々四十二年九月より熊本に開かるゝ至り、茲に中心は佐賀を去つた形となつたのである。

(播かれし種子) 此時代博多には川瀬徳太郎氏、平井清氏、久留米には故松本學明氏、故今井良雄氏、三浦冢氏、故龜山萬里氏、坪池隆氏、稻富肇氏、武藤醇氏、坪池全氏、大熊四郎氏、佐賀には石松量蔵氏、田中新作氏、坂井一郎氏、熊本には本田傳喜氏、渡邊潔氏等、相つぎ前後して信仰に入り洗禮をうけられたが、皆教會今日の中堅分子であつて、悉く此の時代の種子でそのうち大半は熊本に開かれた新しい神學校に陸續参じたのであつた。

(教會發展) 明治四十四年三月には新に小倉市に山内直丸氏を以て同年四月には日田町に松本學明氏を以て、大正元年九月五日には東京に山内直丸氏を以て夫々教會を開設した。

(教會事業の進出) 然し何と云つても此時代の發洩たる生長力を語るものは、神學教育の開始と共に語るべき九州學院の創設である。それは明治四十四年の四月、最初の名主事故ブラウン博士と最初の名院長故遠山三良氏の深き人格的感激を以て、遠大な理想抱負の下に始められたのであつた。

教勢、教會八、信徒八四五

(舊憲法制定時代)

(新人物の登場) 大正四年六月、九州學院神學部の第一回目の卒業者が出た。三浦冢、故亀山萬里、本田傳喜、石松量蔵、渡邊潔の五氏と、やゝ遅れて武藤醇氏である。

(傳道網の擴大) 四年七月下關、(三浦冢氏)同、門司(松本學明氏)同、鐘崎(石松量蔵氏)同年十月名古屋(ホールン氏、値賀虎之助)六年四月八日復活日、大阪(ヘプナー氏、故山内量平氏)同、十月甘木(武藤醇氏)七年、直方(北古賀吉太郎)同十月四日八幡(川瀬徳太郎氏)同十二月神戸(故亀山萬里氏)十年三月六日、九州學院(ホールン氏)同十月廿八日唐津(渡邊潔氏)同十一年四月水俣(椎名熙一郎氏)同四月廿日京都(米村常吉氏)外に大阪阿倍野、豊橋の傳道開始を見たが後中止する處なつた。

(宗教改革四百年記念) 大正六年十月三十一日は恰も宗教改革四百年に相當するので、全ルーテル教會は一齊に記念の傳道集會を催したが、此時東京に於てはルーテル派と別であつたが佐藤繁彦博士は故内村鑑三氏と共に青年會館に於て記念大講演會を催したが、其時の感激の結果が「若きルーテル」となる一書となつた。此一書こそが佐藤博士とルーテル教會とを結ぶ最初の縁となつたのも奇しき摂理であろう。

(按手禮) たゞに傳道、牧會に新人を得たのみでなく、それが熟して來た。即ち大正七年三月には絶えて久しかりし我教會の按手禮式が久留米教會堂に於て執行された。而も、受按者の何れもがルーテル派神學校で養われた人々であつたことも記念すべき事であろう。即ち和佐、故松本、三浦、故亀山、本田の五氏がそれであつた。

(日本福音ルーテル教會の成立) 斯して内部は豊熟、外部の進展と云う時、更に確かなる基礎を据ふべき、大いなる事柄が起こつた。それはミツシヨンの合同による。日本傳道の新組織である。時は大正七年(一九一八年)北米合衆國に於けるルーテル派の、ゼネラルカウンスル、ゼネラルシノツド、サウスユナイテツドシノツドの三派が合同し、翌八年(一九一九)更にデニシュミツシヨンの之に加わつて「北米一致福音ルーテル教會」が成立したことである。こゝに於て、前記各ミツシヨンによつて傳道してゐた各働きは日本に於ても當然一致合同することになり「日本福音ルーテル教會」の新組織と新名稱が成立し、傳道に一大進展を期すことになつたのである。

(教會憲法の制定、實施) 斯かかる内外の充實發展の勢力溢るゝ時代に内に態影を整へて陣容を正し、外に一致した地盤を以て進出せん事は自然の要求である。茲に於て教會憲法制定の機運が到來した。即ち山内直丸、瀧本幸吉郎、故松本學明、ネルセン、リツパード、スミスの六氏を起草委員として、なりたる原案は、大正八年三月二十五日より博多教會堂にて開かれた年會に提案、審議され、遂に可決せられた。これが従來の二院組織による總會の組織で行政に關し又兩院の聯絡として聯合行政委員が置かれてあつたのである。其憲法によつて組織は出來た。其第一回目の組織は左の如くである。

年會議長、山内直丸氏。書記、松本學明氏。會計、和佐恒也氏。宣教師會議長、ネルセン氏。書記ミラー氏。會計スミス氏。

聯合行政委員山内直丸氏、米村常吉氏、瀧本幸吉郎氏。ネルセン氏、ミラー氏、リツパード氏であつた。

而して此憲法は翌九年四月六日から開かれた熊本に於ける總會から實施されたのであつた。

斯して最も時勢に適合して作られた憲法であつたが、此期に於ける教會の長足の進歩は實に目醒ましいものがあつたが、此憲法は絶えず改訂に改訂を重ねられて、爾後毎曾の總會は恰も憲法改訂のための總會の觀を呈して遂に昭和六年の新憲法制定に到つたのであつた。

(山内量平氏其他の永眠) かくて教會は内充、外展の盛運を見たが此期中途大正七年十一月ルーテル教會最初の邦人牧師として、又教會發展に大いなる貢獻ありし、山内量平氏の永眠の事あり、又教會傳道の第一線に立ち大いなる前途を望んで働かれつゝありし、龜山万里氏八年八月松本學明氏九年五月相次いで傳道戦線に倒れて昇天したることは遺憾至極であつたが、更にルーテル教會の草創から九州學院創立に盡瘁されたブラウン博士が歸米後アフリカ、ライベリヤに傳道視察中昇天されたとの報は更に哀愁をそゝつた。

(木村傳道) 而して此結實前期を結ぶに際し、誠にふさわしきものは大正十一年九州一円に試みられた、花々しき木村傳道であつた。即ち特別傳道の講師として招かれたる木村清松氏は水俣より初めて下關に迄、秋より冬に至り、神音とルーテルの精神とを説いて多數の求道者、決心者を起し併せて一生懸命の四字をのこして去つた。

(概説) 教會二一。内新設一三。信徒数一八二八名。

歴代議長

△ 年會議長(自大正九年 至昭和六年)

山内直丸(第一回)

瀧本幸吉郎氏(第二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一回)

三浦冢氏(第十二回)

△ 宣教師會議長(全 上)

ネルセン氏(第一、二、三回)

スタイワルト氏(第四、五、七、八回)

ホールン氏(第六回)

ミラー氏(第九、十、十一、十二回)

第四期 成熟期(改正憲法時代) 自大正十二年 至昭和七年

(宣教三十年記念會) 大正十二年四月折柄總會開催中であつたが特に此日を記念日として八日熊本に於て舉行された記念禮拜熊本水道町教會に於て午前十時より開會。石松量藏氏司會、ヘプナー氏が説教された。

記念會 九州學院教會に於て午後二時より瀧本幸吉郎氏司會、米村常吉氏「日本福音ルーテル教會發達史」クヌーテン氏「世界ルーテル教會」本田傳喜氏「日本福音ルーテル教會の教勢」ゼ、ケ、リン氏「日本福音ルーテル教會の神學校」遠山參良氏「九州學院」エカード氏「幼稚園」パウラス氏「救済事業」と夫々報告演説があつた此席上米村常吉氏、和佐恒也氏に對して感謝記念品を贈呈した。

記念傳道 熊本水道町教會にて午後七時より稲富肇氏「道德的苦闘より精神的平和へ」青山彦太郎氏「福音の力」の説教あり。

るうてる記念號が發行されて各教會の沿革が報告された。

(教會及び事業の消長) 熊本に於て始められし慈愛園の事業も此期に入りやゝに形を成し、大正十二年四月七日には現在の熊本健軍村の敷地購入、最初の建物を竣工せしめ、献堂式を挙行了。此年の九月一日には関東大震災があり東京教會は之が救済に努力し、本田傳喜氏スタイワルト氏により老人ホーム、母子ホーム(後に本所に移りベタニヤホームと稱す)起され、継続的な事業となり、今日に及んでゐる。大正十三年十一月東京荏原教會(岩永則泰氏)大正十五年四月九州女學院開校院長エカード嬢、主事村上二郎氏、昭和三年九月廣島教會(大熊四郎氏)同四年名古屋大曾根教會(坂井賢男氏)同六年神戸東教會(岸千年氏)東京阿佐ヶ谷教會(ゼ、ケ、リン氏)大阪住吉教會(瀧本幸吉郎氏)同七年熊本神水教會(岩永則泰氏)東京目黒教會(平井清氏)大阪塚口教會(内海季秋氏)延岡教會(大川鉄次氏)横濱教會(妹尾武夫氏)等が新設された。

尚此期に神學校の移転が實行された。従來九州學院神學部たりしが大正十四年九月東京の現在の地に新築して神學校は日本ルーテル神學専門學校と稱して獨立するに到つた。

(教會自給への進展) 本規の特色其一。信徒懇談會 大正十四年に傳道委員の手によつて東部は十月二三日京都にて、西部は十一月七八日久留米にて初めて開催され、引つゞき開催され昭和四年に到る其二。阿蘇聖書夏季學校 西部々會主催にて第一回は大正十五年八月十五日より六日間阿蘇湯ノ谷にて開催されて以來連年引續き開催其三。北米一致ルーテル教會傳道局長ドラツグ氏來朝、大正十五年春、之を機として五月四日より七日まで東西聯合大修養會を熊本にて開催した。

其四。ルーテル教會婦人會聯合大會、第一回は昭和三年四月十七日熊本教會に於て開催、會長米村夫人、副會長本田夫人、書記長尾夫人、會計近藤多恵子氏。

(自給教會續出) 昭和四年一月久留米教會、同五月一日博多教會。同十月九州學院教會、同六年一月熊本教會。同年四月東京教會。

(ルーテル教會世界大會) 昭和四年六月廿六日より丁抹コペンハーゲンに於て同第二回大會が開催されたが日本福音ルーテル教會にも代表派遣を懇請し來り、稲富肇氏へプナー氏二氏を出席せしむることゝし、稲富肇氏は二日出發米國を經由して出席し、十月歸朝せられた。

(憲法改正) 教會其後の發展と時代の情勢は新酒の如くして、到底舊憲法の古き裏には盛り得ざるに到り遂に根本的改正の議が進み、幾度か委員の替交ありて遂に、その最後の委員として坪池隆氏、稲富肇氏、三浦冢氏、値賀虎之助氏、本田傳喜氏、ミラー氏、ゼ、ケ、リン氏、ウキンテル氏(同氏歸國によりネルセン氏代る)によつて成された改正案は昭和三年四月博多に於ける總會にて通過し、米國に於けるミツシヨンボードの希望によつて、昭和五年三月神戸に開かれし總會に於て更に慎重審議して、同六年四月東京に於ける總會により採用されるに到りて新組織をなす、その最初の役員は總會議長三浦冢氏副議長へプナー氏、書記稲富肇氏會計エ、ゼ、リン、總務は以上の諸氏の外に本田氏、坪池隆氏、ホールン氏、ウキンテル氏選任さる。

(三記念事業) ルーテル教理問答出版四百年記念傳道、秋季の傳道全部を挙げて之をなし、文章委員による「小教理問答書」改正譯が新しく出版された。

アウズクブルク告白四百年記念として(一)記念會は六月二十五日福岡百道ヶ濱なる縣社會教育會館にて開催され(二)公開講演會が博多教會にて催された、石松量蔵氏「告白書の由來」稲富肇氏「福音主義キリスト教の根本要素」の講演があつた。(三)「るうてる」誌は記念號を發行し浅地氏に囑して信仰告白書の前部を掲載した。(四)文書委員は更に浅地氏に囑てその後部を追加してこゝに委員の手によりて告白書完

繹を出版するに到つた。(五) 記念傳道は秋季特傳を全部之に充て、更に四百年記念を完からしめた。

〔概観〕 教會三二。新一一。信徒三八一七。

神學校教授(舊)

ブラウン氏、ウキンテル氏、スタイワルト氏、久保徹氏、瀧本幸吉郎氏、牧野典次氏、川崎升氏、村上二郎氏、ミラー氏、リップパード氏、青山彦太郎氏、ネルセン氏、遠山参良氏、高橋長七郎氏、山内直丸氏

(現)

ホールン氏、ゼ・ケ・リン氏、佐藤繁彦氏、浅地昇氏、三浦冢氏、村田四郎氏(嘱)、木岡英三郎氏(嘱)

九州学院

遠山参良氏(昭和七年十月永眠)、稲富肇氏(現院長)

全主事

ブラウン氏、スタイワルト氏、ミラー氏、シュリンガー氏(現)

九州女学院

エカード氏(現院長) 村上二郎氏(現主事)

機関紙「るうてる」主事

高橋巴重氏	明治四四—大正元年
久保徹氏	全元—全二年
瀧本幸吉郎氏	全二—六年十一月
三浦冢氏	全六年十二月—九年四月
大熊四郎氏	全九年五月—十一年四月
高島貞久氏	全十一年五月—十三年九月
三浦冢氏	全十三年十月—十五年七月
大熊四郎氏	全十五年八月—昭和四年五月
富永俊二氏	全四年六月—現在

資料引用

「るうてる」1933.8月号3頁、9月号4頁、10月号5頁

感謝決議案

日本福音ルーテル教會宣教四十年記念傳道の為め、準備修養祈禱會が催されるに際し、我々佐賀の地に集りし下關以西九州各教會の代表者一同は、己往四十ヶ年間の優渥なる恩寵と力強き指導とに對し、満腔の感謝を神に献ぐるものである。同時に、主基督の遺命を奉じ、多大の労苦と輕少ならざる財幣とを投じて、日本傳道に着手し、善戦四十年、善く我教會の基礎を築き、今日の發達を遂げしめし米國一致福音ルーテル教會、丁抹に於るルーテル教會、丁抹一致ルーテル教會ミッション、アイスランド、ミッション、其宣教師諸彦、並に困苦缺乏の中に涙を以て植ゑ汗を以て灌ぎし邦人教役者諸彦、一般信徒諸彦に對し、亦、衷心よりの感謝を呈するものである。

然るに埃及を出し古イスラエルが、廣野行旅の四十年は、盡は雲の柱夜は火の柱となつて導き給ひし神の恩寵豊けき時代であつたとは言へ、猶それは一つの準備時代に過ぎず、一度ヨルダンを渡つてからが、眞にカナンをイスラエルのものとなす大事業の本舞臺に這入つたのである。私日本福音ルーテル教會も、己往の四十年はシナイ、アラビヤに於る四十年で、眞の日本福音化の大事業は、折柄非常時の雲暗き空の下に、之から即ち其本舞臺に入ろうとして居るのである。

此時に當り、第一に我々は一層眞剣に熱烈に、聖書の聖書こそ福音即ち基督教なりといふ我教會の信仰に生き、第二に聖書の聖言をして唯に教會の講壇より説かれるものに止らしめず、良く信者日常の糧とならしめ、家庭化され、生活されん事を期し、第二に功績なくして救はれ、價なくして受けたる神の賜物に一層痛切なる感恩を覚え、喜び勇み、又價なくして施す傳道心を信者全般に充溢せしめ、第四に我等が罪人たりし時我等の為に十字架に架り給ひし基督の為、眞に十字架を探り、時間と精力、富と力の一切を靖献し、以て教會の自給を更に強力とならしめん事を決心し、互に覚悟せん事を決議する。そうして祈禱と感激の中に此決心を高く掲げつゝ次の時代に遭遇せん事を茲に決議するものである。

昭和八年九月二十三日

資料引用

「るうてる」 1933. 10. 15. 7 頁

教會自給十年計畫實施報告

昨年第十五回總會を通過したる教會自給十年計畫が本年度に於て如何に實現せらるゝかは全教會の齋しく凝視せし處なりしが果然直方教會が昨年十一月京都教會が本年一月萬難を排して敢然自給決行せられた事は先以て神の優渥なる恩寵を感謝すると共に兩教會に對して深甚なる感謝と敬意とを表します。尚、神水、下関、水俣、大阪の半自給教會も近き将来に於て昭和十四年度を待たず自給を決行せられんことを切望致します。

次に門司教會が一躍十圓の自給金を増額せられ半自給實行せられし事に對しても神の優渥なる恩寵を感謝すると共に兩教會に對して深甚なる祝意と感謝とを表します。

次に阿佐ヶ谷、甘木、北京都、東神戸の四教會が一躍十五圓、七圓、五圓、の自給金を各夫れゝ増額せられ以て新組織に依る補助教會の地位を堅持せられし事に對しても神の優渥なる恩寵を感謝すると共に前期諸教會に對して深甚なる敬意と祝意とを表します。

尚、下関が五圓、荏原が三圓、本所、佐賀、大牟田、鹿児島諸教會が各々二圓、目黒、小城、唐津が各一圓、蘆屋が五十錢、各々増加せし事に對しても深く感謝致します。

大阪、住吉、大曾根、塚口、八幡、神戸、神水、水俣、延岡等の諸教會は前年度同様の現状維持なるが是非共本年度内に於ては相當の増額を決行せられんことを切望致します。

之を要するに本年度に於ては全般的には未だ十分自給計畫の實現をなし得しとは認め難きも二の自給教會、一の半自給教會、四の補助教會の組織を見、尚且つ其他の諸教會に於て夫々相當自給の促進を計られたるについては欣快に堪えません。

右感謝に併せて報告します。

尚別紙昭和十一年一月末現在に於ける各教會の自給状況を掲げて御参考に供します。

昭和十年三月一日

傳道部長 本田傳喜

教會自給十年計畫昭和十一年一月現在自給表

教會名	前年度自給金	本年度自給金
久留米	自給	自給
博多	〃	〃
東京	〃	〃
大江	〃	〃
熊本	〃	〃
直方	〃	〃
京都	〃	〃
荏原	三〇圓	三三圓+(三圓) (四月後三五圓)
目黒	一七圓	一八圓(一圓)六月後增加
阿佐ヶ谷	八圓	一〇圓+(七圓)
本所	八圓	一〇圓+(二圓)
神奈川	三圓	三圓 0
千種	二〇圓	三二圓+(二圓)
大曾根	五圓	五圓 0
北京都		一五圓+(一五圓)
大阪	四〇圓	四〇圓 0
住吉	一〇圓	一〇圓 0
豊中		
塚口	五圓	(三月後六圓)
蘆屋	一圓	一圓五十錢+(五十錢)
東神戸	八圓	一五圓+(七圓)
神戸	三〇圓	三〇圓 0
廣島	九圓	九圓 0
下關	四〇圓	五〇圓+(五圓) (七月後五五圓)
門司	三〇圓	四〇圓+(一〇圓)
八幡	二五圓	二五圓 0
鐘崎	一圓	一圓 0
甘木	一〇圓	一五圓+(五圓)
日田	八圓	(四月後一五圓見込)
田代		
佐賀	二八圓	三〇圓+(二圓)
小城	二〇圓	二二圓+(一圓)
唐津	四圓	五圓+(一圓)

大牟田	一五圓	十七圓+(二圓)
高瀬		
神水	五〇圓	(本年度内二六〇圓)
水俣	四〇圓	四〇圓 0
鹿児島	三圓	五圓+(二圓)
延岡	八圓	
本年度自給月額	六拾九圓五拾錢也	
同 年額	八百三十四圓也	
直方(七十五圓)	京都(三八圓)ノ	
自給ニ依ル剩餘月額	百十三圓也	
同 年額	千三百五十六圓也	
總會計	二千百九十圓也	
凡 例		
+	自給金増額	
0	現状維持	

以 上

傳道部長 本田傳喜

資料引用

1936. 3. 4-6. 第 16 回年会記録 140 頁～143 頁

資料 113 教会合同不参加の決議

教會合同問題に関する件

日本基督教聯盟内の教會合同委員會より紹曾して來れる教會合同問題に對する本教會の態度に關しては、基督の肢體たる教會の一體たるべきは我等の理想なるも、合同の基礎に就いてはアウグスブルク信條第七條に明示せらるゝ處に準據すべきものなりと信ずるを以て之に参加せざることに決す。

資料引用

第18回總會総務局報告記録、

1938. 3. 9-11 P102

8. 宗教團體法案處理委員に關する件

宗教團體法案に關聯し之に適應すべき處置を講ずるため議長及書記の外二名の總務を委員として任命し之を研究せしむることとす。

資料引用

第19回總會議事録 1939. 3. 8-10 93 頁

資料 115 教会合同委員推薦の決議

第二十四回總務會議事録

- 7 教會合同委員推薦に関する件
委員として三浦、本田兩氏を推舉することす。

資料引用

第19回總會記録、1939.3.8-10, P92

基督教聯盟代議員報告

一、 教會合同問題を主題とする基督教全國協議會は十三年十月三十一日より十一月一日迄、東京、富士見町日本基督教會に於て開催せられ、本教會よりは本田、平井、三浦の三氏、宣教師會よりヘプナー、クヌーテン兩氏が出席せられた。

合同に對し各教派本部に對し豫め其の態度を決定の上出席せらるゝ様通知しありたるを以て、本協議會の劈頭各派の態度も報告せられた。

(1) 聖公會は合同の必要を力説せられたるも、分科會に於て其合同は歴史的監督制を基礎とするものにして之を放棄する事は合同の理想た羅馬及グreek教會をも包含すべき機縁を失ひ、且又世界的聖公會より分離する事となるを以て不可能なる事を説明せられた。

(2) バプテスマ教會は最も希望する所なるも、全國諸教派の合同に先ち、バプテスト東西兩教會の合同を實現すべき任務ありと報告せられ、

(3) 日本基督教會は、合同に望ましき事で、之は我教會の十分なる理解と親善をば必要とするを以て、先づ教會同盟を作る事が其の第一歩であるとして教會同盟案を提出せられた。

(4) 我教會は、アウグスブルク信仰告白書第七條に示さるゝ如く、單なる便宜上又は經濟的目的によるべきものにあらずして「福音の教理と禮典の執行に就て一致」すべきものなる故、提示せらるゝが如き合同基礎に於て合同し難き事、さり乍ら教會の一致は我等の希望する所なるを以て、暇他教派間の合同は我等之に参加し得ずとも従來の如く相協力して神國建設のため盡瘁する事に於て何等變る事なきを表明した。

(5) 其他メソヂスト教會、福音教會等合同賛成の意を表明せられた。

以上に基づき特別審査委員を擧げ審査の上、次の如き決議がなされた。

本協議會の情勢に鑑み一日も速く教會合同を實現すべく各教會の選出する特定委員會を設置せられん事を切望す。

(説明) 委員數は四大教派より各三名づゝ、中教派より二名づゝ其他教派より各一名づゝ計廿四名とし本年中に各派より正式に擧げること。

従來の教會合同委員は自然解消につき右委員會の成立のために基督教聯盟に於てその事務の取扱ひをなす事。

(本教會二名の委員を至急選出する必要あり、三浦は印度旅行のため留守となるを以て本田、平井兩氏を委員として推薦して置いた)

尚本委員會は教會合同に約束せられたるものに非ずして、教會合同となるか教會聯盟となるかは委員會の権限である。

全國協議會に於て協議せられたる第二の問題は全國共同傳道でありて、向ふ三ヶ年間金二萬圓の豫算を以て實施せらるゝ事となつた。實行委員十五名中、本教會よりは本田氏委員に推擧せられた。

本教會の負擔は一ヶ年二百五十圓である。

更に又時局奉仕事業も引きつづき事を遂行する事となり豫算一萬五千圓が計上された。

二、第十五回基督教聯盟總會は全國協議會に引きつづき十月一日午後七時より二日午後三時迄富士見町教會に於て開催せられ、本教會よりは本田、三浦兩氏、宣教師會よりヘプナー氏出席、常規の事務的問題の他に、新にきよめ教會及び東亜傳道會の加盟承認、皇軍將兵に對する感謝並戰歿將士に對する感謝文。

本聯盟ハ皇軍ノ絶大ナル功績を歎賞シ、ソノ勞苦ヲ偲ビテ遥ニ深厚ナル感謝ヲ捧ゲ、其間戰塵の巷ニ、風土ノ難ニ陣歿セラレタル將士ニ對シテ恭シク敬悼ノ意ヲ表ス

謹ンデ右決議ヲ陸海軍最高指揮官閣下ニ致ス
が議決せられ、又聯盟創立第十五周年の記念式があつた。
三浦は本年度常議員又文學部長に推舉せられた。

右報告す

資料引用

第19回總會記録、1939. 3. 8-10, P151-154

宗教団体法案と基督者

宗教団体法案は今議會に於て貴衆兩院を通過した。かくて基督教はいよゝ法文の上
に神佛兩教に互してその名を連ね名實共に有力なる教團として祖國日本の教化に貢
献せんとしてゐるのである。

基督教の歴史は迫害の歴史である。その理由は明白だ。即ち基督教が神の眞理に立
つものである以上暗き人の心に一應嫌悪、排撃せられるのは當然の理であるからだ。
併し神は偉大である。その迫害をも御用に立てて、人を救ふ役割をなさせ給ふのであ
る。最も深刻な迫害の中から實に美はしき基督の教團が生れて来た例は歴史の上に限
りなく見られる。

愛する祖國日本にも神の御手が働いてゐたのだ。感謝すべきことではないか。八十
年の傳道苦闘史は今や栄光に輝いてゐる棘の道は神の大路に變えられ、砂漠の地は傳
道に最適の豊壤の地とせられてゐたのである。かくの如く日本は基督者の活躍を心か
ら期待するまでに變へられて来てゐるのである。神の言は人の知らざる間に深く根を
張ったのだ。傳道は人の力によってなされるものではないことがこれによって明白で
あろう。

新段階に入る我等は基督者としての責任を考えなければならぬ。なるほどお膳立て
が出来てゐるのであるから飛びついて腹一杯食べればよいようなものゝ、こゝが基督
者としての考へ所である。先づ静まって考ふべきである兄弟達よ、今日あるは恰も人
間の働きによるかの如く考へ勝ちの人間特有の自負心を根こそぎ取り去ってしまふ
べきだ「こんなに大きく育つて来たのは俺の力だ」など、思ふ人の心よ滅びよ。基督
者よ。思へ、今日あるいは實に日本に於て福音が説教せられたことを如實に物語るも
のであることを。

基督者よ、神の力の偉大さに驚嘆せよ。神はその不變の大計盡を祖國日本の上にも
ち給ふのである。時代は如何に移り行くとも、時の政府の方針は如何に變るとも、變
らざるは神の御計盡である。「神よ、オ、何時まで」と神の御行動のスローなことを
嘆く者は人間である。神の前には千年も一日の如くであつて神は悠々とその進むべき
方向に行き給ふのだ。諸々の國々は騒ぎ立つとも神は悠久に流るゝ大河の如く進み給
ふのである。これに反して人の心は如何にそは實に浮草の如く神の不變の御心を信じ
得ず、時の波に乗って得たりとし、神の御前進をはゞまんとする醜態さへも敢へてす
る始末ではないか我等は固く信ずる、日本を眞に思ふ者神にまさる者なしと。これが
眞なりとすれば、日本を愛する者は神を信じる者でなければならぬ。神を信ずる者は
神に従順をいたする者であるからその者は傳道八十年の實を一切神の御前に捧げ、神
の御名を賛美するであらう。

今後の基督者の行くべき道もこれ以外にはない。十字架の旗印の下に十字架を負ふ
者として進み行く者のみが眞に日本に貢献する者として神に用ひられるであらう。そ
は即ち日本のために人柱たらんとする者を指すのである。(岸千年)

資料引用

るうてる 1939. 4. 15. 1 頁

第二十回總會議事録

45 決議委員報告

稲富委員長左記の報告をなす。一同起立を以て之を承認し、大熊、鶴、ウキンテル三氏感謝の祈禱を捧ぐ。

- 『(一) 決議委員會は總會に於て委託されたる教團規則中審議未了の部分を慎重に逐條審議し、適當と認めらるる修正を施し全部可決したり。最も重大なる總務局機構の問題に就ては、自給教會、補助教會、宣教師會等の意見を十分に斟酌し、討議を盡せり。其間宣教師側よりは、我教會が本邦に眞に確乎たる發展をなさんがため、總務選舉に關し敢て制限を設くるの必要なしとの提案あり。これに對し自給教會及び補助教會等よりの意見を一致し、此教團規則の制定と目的とが今後更に教會自給の精神を發揚するにあるを以て相倚り相輔け以て自給の機運を促進し、この目標に向つて全教會一致し邁進せんことを決意せり。尚、自給の實現は勿論教會の發展は教職並に信徒の協力に俟つこと大なるが故に、教會の機構に於ても役員選任に於ても信徒代表の参加せんことに意を須ふべきことを高調せられたり。因つて此光輝ある皇紀二千六百年に際しキリストに對する信仰と教會に對する愛の一致により多年の懸案なりし教團規則の採決を全會一致を以て總會が決議せんことを提議す。
- (二) 新しく採決したる教團規則中の字句の訂正、條章の配置等に關しては總會は凡て之を次の總務局に一任せんことを提議す。
- (三) 本總會に於ける役員及び委員の選舉を現行規則に基き之を行ふこととす。
- (四) 新教團規則完成次第に文部省に認可申請の手續をとることとす。
- (五) 法人組織に要する教團の資産は次の總務局に考慮を求む。
- (六) 新教團規則實施可能の時、總務の不足員は新規則により選出し、其上にて新規則に従ひ總務局内部の再編成をなすこととす。』

以上

資料引用

20回總會議事録、1940.3.6-9 P14-15

27 皇紀二千六百年記念伝道計画案

左記の原案を承認可決す。

○ 皇紀二千六百年記念伝道計画

輝く紀元二千六百年を奉祝し且つは非常時局下に於ける祖國教化の大使命貫徹のため記念伝道を実施す。

期 間 二ヶ年の繼續運動とす。

組 織 中央委員六名、地方委員若干名を置き之が實行に當らしむること。

目 標

- (イ) 皇紀二千六百年を奉祝して福音を通じての傳道報國に力を致すこと。
- (ロ) 我教會の精神を強調して信仰の徹底を圖り併せて其實踐化に努むること。
- (ハ) 全國協同傳道に充分協力し實施すること。

準 備

- (イ) 傳道前に修養會又は特別祈禱會を開催して充分靈的準備を整えること。
- (ロ) 全教會を動員して傳道に参加せしむる様努むる事。
- (ハ) 傳道用トラクト(パンフレット)を公募すること。(規定については別に之を定む)
- (ニ) 地方教會内に特に傳道方面を擔當する執事を傳道委員として常置すること。

春季傳道實施要綱

一、指 針

- (イ) 主として教會内部を目標として傳道すること。(信徒家族の未信者、隣人友人等)
- (ロ) 青少年者、職業別階級別傳道にも留意すること。
- (ハ) 不在信者、別帖會員の信仰復興及び復歸に努むること。

一、時 期 毎年四、五、六の三ヶ月間に實施すること。

一、經 費 傳道部豫算よりの補助講師旅費教會補助を合して一教會宛平均七圓以内とし其他の經費は地方教會の自辦とす。

秋季傳道實施要綱

一、指 針 春季傳道が内部中心なりしたため秋季は廣く教會外部の未信大衆を目

- 標として大傳道を実施すること。
同一地方に二個以上の教會ある場合にて大集會を開催せられたし。
一、講 師 一教會に二人以内の講師を送り一名は部外より、一名は部内より選ぶこと。
一、經 費 講師の旅費は傳道部豫算より支辯し其他の經費は地方教會の負擔とすること。

資料引用

20回總會議事録、1940.3.6-9

92頁～94頁

Action on New Constitution of the Japan Lutheran Church

Voted that the new constitution of the Japan Evangelical Lutheran Church be approved by the Board and reported to the next convention of the United Lutheran Church in America for approval, on the following conditions:

1. That the constitution of the organization of missionaries remain unchanged.
2. That the first section of the Special Agreement as adopted by the United Lutheran Church in America, at its meeting in Milwaukee, Wisconsin, October 7-14, 1930, remain in force as follows:
“All matters, including financial appropriations, which require the sanction of The Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church in America, shall have the approval of the constituted organization of missionaries on the field and all official correspondence of the Church with The Board of Foreign Missions shall pass through the official channel of the constituted organization of missionaries.”
3. If the mission decides that it is necessary for the Church in Japan in order to secure government registration and recognition as Kyodan(religious body) to hold more property than it now holds, the mission may recommend to the Board what property to transfer to the Church, it being understood that the maintenance, upkeep and repair of such transferred property, shall be the financial obligation of the Church without any subsidy whatever for this purpose from the Board through the Mission, that the property now held by the Shadans(Zaidans) of the boys and girls schools at Kumamoto and of the theological seminary at Tokyo shall not be transferred to the Church, and that no mission-owned dwellings for missionaries shall be transferred to the Church but shall be held solely for the use of missionaries.
4. That The Board of Foreign Missions welcomes and sanctions the amalgamation of the Evangelical Lutheran Church in the Japan field of the Finnish Mission and the Japan Evangelical Lutheran Church (U.L.C.A) as parts of legal Kyodan (religious body) under this constitution in relation to the government of Japan, approves the agreement reached by the two churches, and authorized our mission and Church in Japan to work out the further details of this amalgamation, subject to the final approval of The Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church in America and the Lutheran Gospel Association of Finland.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of
Foreign Mission Minutes, July 18,1940.

6 教団規則採擇に関する件(總務局提案)

教団規則認可可否確定に至る迄過度期の便法として現行憲法及規則を廢止し第廿回總會に於て採擇したる教団規則草案中、施行不能の部分を除き直に施行することとす。

右案は總務局原案通り可決す。

1 1 教団規則施行に関する件

現在文部省に認可申請中の教団規則は文部大臣の認可前、審査委員をして之を審査せしむることとす。審査委員にして規則中承認し難き箇所ありたる時は適宜の處理を為すことを得。右審査委員は次總務會に於て之を選任す。

1 5 總務員數變更に関する件

教會の直面せる情勢に鑑み教會規則を修正して總務の員數を六名となすこととす。

右總務局原案は之を決議委員に附託することに決す。

1 7 決議委員報告

本田委員長より左記の諸報告ありて承認せらる。

(六) 總務員數變更に関しては總務局原案を承認することとす。

2 6 教會規則施行に関する件

第十一號記載の原案通り可決。

資料引用

第 2 1 回臨時總會記録、1940. 10. 15-16

5 頁、7 頁、9 頁、1 2 頁

7 教會合同に関する件

本教會は教會合同に関する九月二日附日本基督教聯盟主催協議會の決議に對しては既に本問題に關して本教會信條に於て一定の基準を有するを以て左記の條件を附し準備委員を選出することとす。

- (一) 準備委員の外に五名の諮問委員を設け準備委員のみにて決定し得ざる主要問題に就き協議せしむ。
- (二) 準備委員に全権を賦與するも其の決議に對する最後の決定は總務局に於て之をなすこととす。
- (三) 使徒信經、ニケア信經を教團の信條として認め教團中に在りてルーテル教會の信仰特色たるアウグスブルク信仰告白及其他の本教會の信條書に基く信仰をルーテル教會に属する教會の特色として維持繼續するの自由を保留する形態の教團組織たる事を主張する。
右總務局原案は之を決議委員に附託することに決す。

1 7 決議委員報告

本田委員長より左記の諸報告ありて承認せらる。

- (三) 教會合同に關しては原案通り可決す。

2 5 教會合同に関する件

第七號記載の原案通り可決。

資料引用

第 2 1 回臨時總會記録、1940. 10. 15-16

5 頁、6 頁、9 頁、1 2 頁

資料 123 福音ルーテル教会との合同

1 3 福音ルーテル教会との合同に関する件

本教会と福音ルーテル教会との合同を決議し両教会総務局に於て調印せられたる契約書を承認す。右総務局原案は之を決議員に附託することとす。

1 7 決議委員報告

本田委員長より左記の諸報告ありて承認せらる。
(五)福音ルーテル教会との合同に関する契約書は総務局作製の原案通り可決す。

資料引用

第21回臨時総会記録、1940.10.15-16

8頁、9頁

Property Transfer

Voted (11) a. That the Board believes that the Board of Trustees of the Mission (Shadan), should remain as it is, composed of missionaries only, and that it should continue to hold property to be use solely by missionaries, in particular the residences of missionaries.

b. That the Board reiterates its approval of a Board of Trustees for the Church (Shadan.), with a majority of Japanese members, to hold property transferred by the Mission to the church, in particular the land and buildings of congregations.

c. That, if in the judgment of the mission it seems inadvisable to have two Boards of Trustees(Shadans), one for the mission and one for the Church, and therefore the mission finally decides to reorganize the present Mission Shadan under the proposed Shadan Constitution as revised and now recommended by the mission, with a majority of Japanese members, the Board will raise no objection, provided that whatever property is to be used solely by missionaries, in particular the residences of missionaries, is to be put in a separate class, for use of missionaries only, which is not to be diverted to any other use and if diverted this property is to revert to the Board of Foreign Missions and if sold at any time the proceeds of the sale shall revert to The Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church in America.

d. That the Board approves the transfer of mission-owed property to the Board of Directors (Zaidan) of the Boy's School (Kyushu Gakuin), and to the Board of Directors (Zaidan) of the Girls' School (Kyushu Jo Gakuin) respectively, if the mission so decides, provided however, that if any of this property is diverted to any other use, it is to revert to the Board of Foreign Missions and if sold the proceeds of the sale shall revert to the Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church in America.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, January 23,1941.

Property For The Japan Lutheran Church

Tokyo, November 16, 1940

Rev. E. T. Horn, D.D., President,
Japan Lutheran Mission, U.L.C.A
TOKYO

Dear Dr. Horn:

You will recall that in Action No.2, taken at our Special Mission Meeting on October 18-19, Messrs • Stirewalt, Miller, Hepner, and Horn were appointed to meet with a similar committee representing the Japan Lutheran Church to study the question of holding property for the Japan Lutheran Church.

The members appointed by the Japan Lutheran Church were Messrs • Miura, Honda, Hirai, and Inadomi.

Messrs • Horn and Stirewalt interviewed Lawyer Katayama, a Christian and a member of the National Diet, laying our case before him. After consulting the Mombusho, about ten days later, he called these two men back and gave his advice which is indicated in the following facts:

1. Under our present method of holding property, it is subject to government confiscation.
2. The government no longer grants juridical persons for holding property to be used for religious purpose (Except the Kyodan for the united protestant church).
3. To transfer property to another juridical person, or to one or more individuals, would involve considerable transfer tax.
4. If property is transferred to one, or more, individuals, it would legally become the property of that person, or those persons; and even though that, or those persons may be entirely faithful, in case of death, the property would descend to his, or their heirs; and should these heirs ignore our moral claim to the property, we would be helpless in any attempt to recover it.
5. No adverse action has yet been taken by the government regarding juridical persons whose personnel consists solely of foreigners; but the question is under consideration, and it is likely that before very long, the government will require all such juridical persons to have in their personnel a majority of Japanese.

A fellow missionary of another denomination, spent the entire forenoon of November 9th in consultation with Mombusho officials on this and other questions, and he states that he was informed to this same effect.

6. If a mere majority of the membership of our present Shadan is Japanese, the property held by the Shadan would not be subject to confiscatio.

After securing this information, Messrs • Horn, Hepner, and Stirewalt met on November 8th, and after considering the facts secured, agreed that the wisest course before us would be to admit Japanese to the membership of our present Shadan, giving then a majority of one. At the same time, they made proposals for the revision of our present Shadan Constitution so that this could be effected.

On November 12th, the Joint Committee met. Those Present were Messrs, Miura, Honda, Horn, Hepner, and Stirewalt.(Messrs,Miller,Inadomi,and Hirai were absent.) The proposed change, as above indicated, met the unanimous approval of those present.

Lawyer Katayama,whom Messrs • Horn and Stirewalt consulted, was not able to say if these proposed alterations could be merely reported to the Mombusho, or whether they would have to be presented as a request. Mr.Miura stated that in his conference with the Mombusho officials, he was told that in case of revision, or the reissuing of a constitution of such juridical person, prompt attention would be given.

It has been made clear that both our Finnish brethren and their Japanese co-workers are not inclined to admit our property to registration in their Zaidan and representatives from our side to their Zaidan membership. It would be embarrassing to press this matter. Besides, if effected, the necessary transfer tax would be required.

Considering the fact that our work in Japan is in behalf of Japanese, in co-operation with Japanese, and that both the original and present intention is for all property used in this work to be transferred eventually to the Japan Lutheran Church; while not fully transferring it now, it seems that present circumstances indicate the wisdom of taking the first step in this direction, at this time, of course our Board's approval will be necessary.

Therefore, we present to you, along with this committee report, a copy of the proposed Shadan Constitution as revised by your committee.

While we are voting on the constitution as now presented, it is to be understood that the government may require some minor alterations before giving its approval; but we assume that such alterations would be technical and not affect the general purpose, or conduct, of the Shadan.

Our lawyer emphasizes the wisdom of speedy action.

Respectfully submitted,
(signed) A. J. Stirewalt
Chairman, Special Com. on
Property Holding.

Edward T. Horn
Mission President.
Geo. W. Schillinger,
Mission Secretary.

THE SHADAN ASSOCIATION OF THE EVANGELICAL
LUTHERN CHURCH IN JAPAN.
ARTICLES OF ASSOCIATION

Article 1. Name

This Association shall be styled the Shadan of the Evangelical Lutheran Church in Japan (Nihon Fukuin Kyokwai Shadan).

Article 2. Membership

1. All male missionaries of the United Lutheran Church in America, permanently residing in Japan, shall be eligible to membership in this Association.

2. All male members (seigi-in) of the Sokwai of the Evangelical Lutheran Church in Japan shall be eligible to membership in this Association.

3. There shall be eleven members of this Association, constituted as follows:

(a) Five missionaries of the United Lutheran Church in America permanently residing in Japan.

(b) Six Japanese, who are members in good standing in the Evangelical Lutheran Church in Japan, and who are members (seigi-in) of the Sokwai of said Church.

Article 3. Cessation of Membership

1. Any missionary member of this Association, ceasing to be a missionary of the United Lutheran Church in America, permanently residing in Japan, shall thereby cease to be a member of this Association.

2. Any Japanese member of this Association, ceasing to be a member (seigi-in) of the Sokwai of the Evangelical Lutheran Church in Japan, shall thereby cease to be a member of this Association.

Article 4. Connections

The Association shall have no legal connection with any organization or association in a foreign country, or with any organization or association in Japan that is ecclesiastical, or whose object it is to make profit by the conduct of its business.

Article 5. Object

1. The object of the Association shall be to own or rent (i.e. from others) and manage land, buildings, and other property for the extension of Christianity, the carrying on of Christian education, and the performance of works of charity and benevolence.

2. In order to insure the Association from loss or inconvenience, when a building owned by the Association becomes vacant, it may be rent with the land on which it stands to another party; and the rent so received may be expended for the object of the Association as set for in Article 5.

3. Buildings shall be rented from month to month, or from year to year, and no building shall continue to be rented for more than seven years.

4. The amount of rents received by the Association during any one year shall not exceed Yen 5,000.

Article 6. Property

1. The property of the Association, for the most parts, of land and buildings purchased by funds contributed, either in the past or in the future, by the United Lutheran Church in America, or by the Evangelical Lutheran Church in Japan.

2. The Association may receive gifts of land, buildings, and other property from other sources.

3. No gift shall be received that is accompanied with conditions whereby it cannot be held or used in accordance with the object of the Association as set forth in Article 5.

Article 7. Board of Directors

The entire membership of the Association shall constitute the Board of Directors, and each member shall be a member of the Board of Directors as long as he is a member of the Association.

Article 8. Transaction of Business

By a vote of the Association it may:

1. Acquire property for the Association by gift or purchase.
2. Rent or sell property and invest or expend the rent or the proceeds of the sale for the furtherance of the object of the Association as forth in Article 5.
3. Transfer property to one or more juridical persons recognized by the laws of Japan, who shall hold or use the same for the furtherance of the object of the Association as set forth in Article 5.
4. Sell property and return the proceeds of the sale thereof to the original donors.
5. In case of missionary residences, said properties including land and buildings shall be reserved for missionary use so long as they are needed as homes for missionaries, but in case the missionaries shall decide to liquidate, sell, or otherwise dispose of any, or all, of said properties, the Association shall interpose no obstacle to such disposition of the same, or to the disposition of the funds received therefrom.

Article 10. Decisions

Notice of any meeting and its object shall be given, at least five days before the time of meeting: but, with the consent of the majority of the members of the Association, matters may be decided regarding which previous notice has not been given. Two-thirds of the total number of members actually in Japan

assembled at the appointed time and place shall constitute a quorum, and a three-fourth majority vote of those present shall be necessary for a decision.

Article 11. Dissolution

The Association may be dissolved by a vote of three-fourths of the members. In that case the property may be transferred by the Directors to one, or more, juridical persons recognized by the laws of Japan, which shall hold or use the same for the furtherance of the object of the Association as set forth in Article 5; or, the property may be sold and the proceeds of the sale returned to the original donors.

Article 12. Office

The office of the Association shall be located at 921 Nichome, Sagimiya Machi, Nakano Ku, Tokyo shi.

Article 13. Amendments

These Articles of Association, subject to the sanction of the proper authorities as required in Article 38 of the Civil Code, may be change by a vote of three-fourths of the members of the Association.

Edward T. Horn,
Mission President.

Geo. W. Schillinger,
Secretary.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
January 23,1941.

Mission Executive Committee Actions at Tokyo, February 19th
and 20th, 1941

53. Mission Shadan Change

It was voted to instruct the Mission Shadan to revise the constitution and name in order to become the Shadan of the Nippon Fukuin Ruteru Kyokwai (Japan Evangelical Lutheran Church)

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1941.2.19-20

Immediately we sent a letter to every member of the Board stating that the only point in this cablegram not covered by previous Board action was the transfer of missionaries Alsdorf and Huddle and their wives to the India field, and saying that unless the Board members disapproved the Council of Secretaries would arrange the transfer.

Cablegram Calling Missionaries Alsdorf and Huddle

On February 21st we sent the following cablegram to our Japan Mission:

Shillinger
Kumamoto(Japan)

BOARD CALLS ALSDORFS HUDDLES TO INDIA SENDING NECESSART
PAPERS TO MCCAULEY

Drach

We also informed our India Mission by cablegram so that our missionaries may make necessary arrangements when they receive word from the Alsdorfs and Huddles in regard to travel from Japan and arrive in India. We also made necessary arrangements with the British Passport officers in New York and London through the Rev. Dr. Warnshuis, to have the Alsdorfs and Huddles admitted as missionaries to India, when they arrive.

More Japan Missionaries Evacuating

Previous action of the Board of Foreign Missions having authorized women and children to return to America, the mission in Japan has recommended that the following additional missionaries be evacuated, namely Mrs.S.O.Thorlaksson. son and daughter, Rev. and Mrs.Bach and their children, Rev. and Mrs. J. M.T.Winther, who wish to retire, and the Misses Faith Lipperd, Mary Heltibridle, Selm Bergner and Ethel Denzer. The cablegram recommending their evacuation reached the office of the Board of Foreign Missions in Baltimore on February 22nd, and a reply cablegram was sent approving the recommendations of the Japan Mission. Thus all single women missionaries are returning to America except Miss Martha B. Akard, Miss Marion Potts, and Miss Maud Powlas, at

Kumaoto, and Miss Annie Powlas at Tokyo. The men remaining are Rev.Drs.Edward T.Horn, Chas.W.Hepner and A.T.J.Stirewalt at Tokyo, Rev.A.C.Kunudten at Nagoya, Rev.S.O.Thorlaksson ay Kobe, Rev.Dr.George W.Schillinger at Kumamoto.

The cablegram from Japan reads as follows

February 22,1941

MISSION EXECUTIVE RECOMMEDS WINTHERS RETIREMENT ALSO
BACHS RETURN WITH FAMILY ACCOUNT QUOTA ALSO EVACUATION
LIPPARD HELTIBRIDLE BERGNER DENTZER STOP DENTZER WILLING
TRANSFER TSLINGTAO IF YOU THINK ADVISABLE AWAITING YOUR
REPLY CABLE STOP SHADAN REORGANIZATION PROCEEDING

Horn Schillinger

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
May 1,1941

The reply cablegram of the Council of Secretaries reads as follows :

February 25, 1941

SCHILLINGER
KUMAMOTO(Japan)

APPROVE WINTHERS RETIREMENT ALSO RETURN BACHS
LIPPARD HELTIBRIDLE BERGNER DENTZER STOP MISSIONARIES
TRANSFER TO TSINGTAO NOT ADVISABLE

DRACH

Other communications received include a copy of the actions taken by the Mission's Executive Committee at its meeting in Tokyo on January 9-10, 1941, and covering letters written by Secretary Dr. George W. Schillinger and President Dr. Horn. We also received a personal letter from Miss Maud Powlas, dated February 6, 1941, suggesting that she be allowed to go to Shanghai and work in slum districts, with no financial appropriation in addition to her salary.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
May 1, 1941.

President's Report

Looking back over the past year, among the outstanding events are the following: (1) The adoption of the new Constitution of the Japan Lutheran Church to conform to the requirements of the Religious Organizations Control Law; (2) The amalgamation of our Church with the Finnish Branch of the Lutheran Church in the one Nihon Fukuin Ruteru Kyokwai for mutual strength and advantage and to qualify for recognition as a *Kyodan*; (3) The union church movement among Protestant denominations; and (4) International and national complications which combined with movements within the Churches to induce a general withdrawal of missionaries from Japan.

You are all familiar with the progress of these, and the Board has been kept fully informed through correspondence. Hence I shall not refer to them except in bare outline.

Our Constitution, adopted last March by the Japan Evangelical Lutheran Church, was finally approved by the United Lutheran Church in America at its Omaha Convention. It was intended for the presentation to the Japanese Authorities as the organ of the Japan Lutheran Church under the new Religious Organizations Control Law; but has been pigeon-holed pending the outcome of the union church movement which has official approval.

Meanwhile, however, the Finnish branch of the Lutheran Church adopted the same Constitution and amalgamated with our Church at a Special Convention held in Tokyo, October 15th and 16th, 1940. The Lutheran Church is operating under this Constitution so far as it is applicable.

The Japan Evangelical Lutheran Church now comprise a total membership of 7,400, with ordained and unordained pastors, self-supporting churches, aided churches and preaching places.

Confronted with the alternative of uniting with others Protestant Denominations of forfeiting legal standing, the Lutheran Church, at the Convention, October 16th, took the position that under certain conditions, specifically the condition that the Lutheran Church should have freedom to preserve and propagate its characteristic as set forth in the Augsburg Confession and its other confessional books, the Lutheran Church would appoint a committee to co-operate in the consultations regarding the formation of a union.

These negotiations have been in progress for about half-a-year, and have resulted in the drafting for a Constitution for a Japanese Union Church which, in name and for purposes of representation before Government, is a union church

with a single chief executive called the *Torisha*, but which is in fact a federation of ten denominations and groups of denominations, each group of which is guaranteed the right to its own constitution, faith and practice, the right to have its own educational and other institutions, the right to hold its own convention and elect its own officers, as well as to examine candidates and ordain its own ministers. These acts, and others, will be rendered "official" by the stamp of the *Torisha* and his report to the Government. The abovementioned rights are apparently limited by the words "for the time being" ; but they are really guaranteed by an article to the effect that each group has within itself the prerogative of deciding whether it wishes to amalgamate with any other group within the union. Representation in the General Convention is denominational and regional.

The Mission held an informal meeting for one day, April 29th, when it read and discussed the proposed Constitution, and sees no adequate reason to oppose its adoption. It will be presented by Executive Board to the Japan Lutheran Church for adoption in convention, May 1st to 3rd, 1941. I am told that we are among the last to formally ratify it. It should be stated also that the Nippon Seikokai, the Episcopal Church in Japan, declined to co-operate and is hoping for recognition as a separate *Kyodan*.

In accordance with the trend of forces within and without the Church, on the recommendation of the Mission in session last fall, nearly all of our missionaries resigned their executive and administrative positions during the winter and were succeeded by duly elected Japanese. At the same time, evangelistic missionaries also found their activities much restricted. Intense nationalistic feeling, heightened by international relations of an alarming nature, resulted in such a situation that, combined with continued pressure from own Government, many missionaries were evacuated. The withdrawal was most acute during February and March but continues to the present. Indications are that still others will be leaving Japan before summer. Many of these are either regular or "advanced" furloughs, but still more are deliberate evacuation. It is stated that less than twenty per cent, of the entire Japan Missionary force is actually on field.

Our Mission, too, has suffered heavy losses; over half of our regular missionaries are now in America, including those on furlough; and within a fortnight all of the wives but one, and all the children will have been evacuated.

This seems to be the close of the missionary era in Japan which began with the opening of the Island Empire to foreign intercourse about eight years ago. No only have political events and the revival of the "Japanese Spirit" been instrumental in bringing it about, but we should make a grave mistake if we ignored the fact that is the result to a very considerable degree of the feeling of independence and ambition for leadership which prevails within the Christian Church itself. This especially is the aspect that concerns us. Laying aside all the aggravations incidental to the change, we should aim to see in it elements of

constructive progress and hope for the future.

Our veteran missionary, Rev. Dr. J. M. T. Winther, in a recent speech at the Seminary shortly before sailing to America to retire from active service, said, "If you want encouragement, study our history; if you want to become an optimist, look backward." This apparent paradox is, I believe, justified by the facts revealed in the history of our Mission and Church during the past twenty years. It may afford dry reading, but I trust you will bear with me while I refer to some of these facts, for I find much encouragement in them.

In 1919, the year after the United Lutheran Church in America was organized, this Mission adopted a "Comprehensive Policy"....."**Being an outline of principle, needs in both equipment and staff, together with important miscellaneous recommendations, intend for the information and guidance of the Foreign Mission Board of the United Lutheran Church in America.**" We stated as our objective, "to plant a self-supporting, self-governing, and self-propagating Lutheran Church on Japanese soil." We said we were already twenty years behind the procession and had to insist on an expensive and laborious plan to catch up. We needed to entrench in centers of population; we had to maintain our own institutions for the education of a ministry in order to preserve our identity. At the same time, we wanted no one-sided church, and hence outlined a plan for a well-rounded development of a Lutheran Church in its three aspects, evangelistic, educational and eleemosynary. We felt the need of raising the standard of the ministry, and we wanted to send students abroad for study. We also wanted to print and publish Lutheran literature.

In 1919, we actually had Kushu Gakuin and a small theological department attached to it ; five church properties and buildings at Saga, Kumamoto, Hakata, Kurume, and Hita ; three kindergartens, at Saga, Ogi, and Hakata ; and three missionary residences. We said we wanted an independent Theological Seminary ; church equipment in eight more places ; a girls' high school ; an institution of mercy ; and a greatly increased force of missionaries, with residences for them all.(For further details, see 1919 Minutes of The Joint Conference of Lutheran Missions Working in Japan, page 25 to 49).

Now, looking back over two decades since then, how nearly have we come to the realization of what we set cut to do.

We have built a Seminary in the Capital which is one of the recognized professional theological schools in Japan, and has a plant and equipment that would be a credit to any Church. We have a splendid girls' school in Kumamoto ; we have three eleemosynary institutions, the Jiai-En in Kumamoto, and Bethany Home and Old People's Home in Tokyo ; we have secured property and built churches in seven of the eight places envisioned, as well as in over a dozen other places besides ; kindergartens have increased from three to sixteen ; we have built up newspaper evangelism and the sale of Christian literature centering in the Shinseikwan in Fukuoka, and exerting a wide influence ; we have revised and published the Church Book, re-printed three times Luther's

Small Catechism, twice the Large Catechism, besides publishing a new translation of the Augsburg Confession, the Smalkald Articles, the Formula of Concord, a textbook for Sunday-School teachers, and other Sunday-School literature, as well as several books for the blind in Braille. Three Japanese professors of the Seminary and other professors from the boys' and girls' school and many pastors have had the advantage of from two to three years of study and observation abroad.

In 1919, we had a ministry of 18 men, seven of whom were ordained, and eleven unordained ; of these, ten were "borrowed" from other denominations. In 1940, we had a ministry of 48, three ordained and sixteen unordained, nearly, one hundred per-cent Lutheran trained men.

Now, as we consider that brief summary, shall we say that we have failed? Or shall we not rather say that under God's good providence we have been used to an expected degree in accomplishing the task we set for ourselves twenty years ago?

Perhaps all will admit grounds for encouragement but may be inclined to deplore the events of the past year which have so suddenly resulted in a change so revolutionary as we have been experiencing. But what are the factors that contributed to this extraordinary development?

One of the factors is doubtless the Mission and its co-operation ; but not missionary increase. For, as a matter of fact, the one department of our Comprehensive Policy in which we failed to come up to our expectations, or even approach them, was in the missionary staff. While there were gains, particularly in the number of women works, there were also losses to counterbalance the gains, so that the net result was that our missionary staff has been only very slightly augmented. The fact is that the growth in the Church which we have just reviewed was accomplished without the proposed augmentation of the missionary force in our Mission.

Some of the most significant developments during the past twenty years were not those represented by the figure just reviewed, but by the growth in membership, from a total of about one thousand in 1919 with two hundred communicants, to a total over five thousand in 1939 with eighteen hundred communicants. (These figures do not of course include the amalgamated Finnish Church).

Growth in the development of the Japanese Church organization which the Mission did all in its power to promote is one of the outstanding facts of the past twenty years of our history. In this there were three events of grate significance, namely, (1)The actual organization of the Japan Lutheran Church and the holding of its first Convention in 1920 ; (2)The establishment of the Lutheran Theological Seminary on an independent basis in Tokyo in 1925 ; and (3)The further development of the Japan Lutheran Church, the abrogation of the bi-cameral system and adoption of a new Constitution in Convention in 1931. This organization served admirably until 1940 with equal co-operation between

the Mission and the Japanese Church, and until it had to be superseded by a new organ in conformity with the new Law.

Doubtless there were many other important factors, but these three mark forward steps of the most far reaching consequences. Through these and their implications, our Mission has showed good statesmanship in carefully paving the way for the founding of the Japan Lutheran Church and its permanent and natural growth in accordance with the ideals we set for ourselves twenty years ago. The amalgamation with the Finnish branch of the Japan Lutheran Church was another step in same direction.

In other words, our Mission has accomplished much of what it set out to do in planting the Lutheran Church and nurturing it as a fledgling till its wings were strong enough for it fly, and then wisely withdrawing control so that it could become independent. As far back as 1917, Rev. C. W. Hepner, then a young prophet but now a veteran, in a paper read before the Joint Conference of Lutheran Missions Working in Japan, made the following remarks ; “There comes a time when a child cease to be a child and we call it a young man or a young woman. When this consciousness is felt, it is wisdom on the part of the parents to recognize the fact—indeed, it should be pride of the parent to do soMissionary domination defeats it own purpose, and will never work. We need to give more rightful authority to our Japanese pastors, as anointed of God to bear the lamp of Life to their own people. The details may be somewhat difficult to work out, but we must begin to do it, if we want to build up the work on a sound basis.” This, I submit, has been accomplished to an unexpected degree.

The necessity to conform to the demands of the Religions Control Law, and agitation for church union fostered by nationalistic and international forces has perhaps somewhat restricted the unfettered advance of our Lutheran Church, but at the same the proof that the Lutheran Church was well founded and has grown true to type has been demonstrated by the fact that (1) the Japan Lutheran Church could have qualified as an independent *Kyodan* under the new Law, and (2) though this hoped for consummation was thwarted by the somewhat misguided union movement, our Lutheran Church has been the main factor in shaping the *kind* of union in such a way that the resultant will be a federation in which there will be room for us and other denominations to preserve and perpetuate the characteristics of their faith, spirit and praxis. This is due largely to the untiring and faithful witness of the Rev. I. Miura, President of the Japan Lutheran Church, who has throughout the negotiations been a member of the most important committee entrusted with the responsibility of framing the union Constitution. With this accomplishment we may feel assured that our Church has arrive at a considerable degree of self-consciousness and a sense of mission, and that it is destined to play an important part in the work of the Christian Church in this Empire.

It is no doubt a grievous disappointment to us missionaries to see the

collapse of the Mission by the decimation of our ranks, and the door closed to us for activity in field of evangelization. But, even in the face of this apparent defeat, there are ameliorating circumstances. Some of these have already been indicated ; but, in addition, we may reflect that, (1) It seems quite likely that the strength of the Christian Movement in Japan lies not in foreign missions or the number of foreign missionaries, but in the Japanese Church itself. Perhaps we have been incorrect in thinking that a vast augmentation of foreign missionary forces was the right way to meet the task. (2) It seems likely that the logical and final step in the development of our Church to full autonomy, independence and self-support lies in the direction in which we have been compelled to go, including even the “strategic withdrawal” of the bulk of the missionary forces. Without this turn of affairs, it is possible that the native church would not have been able to come into its own for many years. (3) There seems still to be opportunity for a small missionary group to stand by here, representing the sympathy and interest of the grate Lutheran Church at home, and proffering wise aid, financial and otherwise, where practicable and acceptable. (4) There is no adequate reason to conclude that the day of foreign missions is altogether past or that the door is permanently closed. There is, on the contrary, reason to hope that when the real indigenious nature of the Church is made secure, the Japanese Church itself will invite the co-operation of the missions in the work of reaching the unevangelized millions of Japan with the Gospel message.

My reflection are confirmed by the fact that the Japanese Christians, so far as I can discern, do not seem to feel that disaster impends. They seem confident that they ought and can shoulder the load. A proud, self-reliant, and withal efficient people like the Japanese could not and should not be content to be led and for long supported by foreign missionaries and foreign aid. The Japanese Church feels that the burden of the Christianization of their own people lies squarely on them. And, once in full possession of the leadership and equipment, I believe they will rise to the opportunity.

Certain national and international factors which have helped precipitate this “revolution” have naturally made us apprehensive ; but I believe that when the atmosphere clears — as it will come day — we shall see that recent developments are definitely in line with the coming of the Kingdom of Christ in Japan. We need grace and generosity in adjusting ourselves to the change, and, above all, faith in the triumph of the Gospel which we have been including.

I know we have been calling for more missionaries. But as I see the situation now, perhaps we were deceived in thinking the missionary the chief evangelizing agent. The time has come when the Japanese Church must assume full leadership, and missionaries on the former basis would be a hindrance to the development of the Church. Foreign missionaries there will be — perhaps some day in greater numbers than heretofore—but they will be on a different footing, and will henceforth be co-operators with the indigenious church itself. I submit we are too close to the situation to see very clearly how this soon

to come about. But we believe fundamentally in the guidance of the Holy Spirit in the Japanese Church, and that He is leading it into ever fuller realization of the Truth as it is in Christ Jesus. It is the duty of Missions and Boards that have had this work at heart to stand by and do whatever they can to turn what seems to some dismal failure into a grate victory for the Gospel.

In these unusual times unusual methods must be adopted in order to meet the needs effectively and promptly. To this end, I propose that for the duration of this "crisis" we set aside our present machinery of organization, and form interim organization with a Mission Superintendent at the head, to be elected by the Mission for a term of a year, who shall have full power to supervise our missionaries and their interests, direct their work, and have responsibility for the administration of our finances, carry on the correspondence between the Mission and the Board, and be the liaison official in all negotiations between the Mission and the Japanese Church on the one hand, and, on the other, between the Board of Foreign Missions and the Japanese Church. The Superintendent should have associated with him a cabinet of two to be elected by the Mission for a term of one year ; one of whom should be Treasure, whose duties shall be to keep the accounts and act as adviser to the Superintendent ; and the other should be a member of the Women's Mission and should act as departmental director of work under the general supervision of the Superintendent.

Finances. The Board of Foreign Missions have shown a very liberal spirit in making available for the Japan Field the same Budget for 1941—1942 as was granted for 1940—1941, in spite of the greatly altered missionary situation.

There are very good reason why the Mission at this meeting should take definite steps to put its finances into such liquid form that they can be quickly and easily handed over to the Japanese Church and our institution. To this end, all possible budget balances should be pooled and made available for transfer. The reasons for this are obvious, but they may be briefly stated as follows: (1) To set up the Japan Lutheran Church on a respectable basis among the other churches composing the Union Kyodan ; (2) To guarantee the perpetuation of good work already begun ; and (3) To render our Church and its Institutions as free as possible from the dread of improvisation through untoward occurrences in the financial world, as for example possible freezing of credits ; or through the sudden and complete evacuation missionaries before the moneys in hand could be property transferred.

For the same reasons, it would be highly desirable for the Board of Foreign Missions to make available for the Japan Lutheran Church the entire budget for 1941—1942 in advance payments of as large denominations as possible, say half by the end of June and half by the end of October, the date when the regular subsidizes to the Japan Lutheran Church are scheduled to cease. Other churches have received large contributions from their affiliated Missions. Our Executive Board has asked for at least one hundred thousand yen, and it would not be unreasonable to make a grant of that amount in addition to the budget up

to October 31st, and make the actual gifts as speedily as possible. I recommend that the Mission at this session request the Board of Foreign Missions to take this under advisement and make concrete plans to accomplish it in accordance with a program to be submitted by the Mission.

The Chairman of the Finance Committee has proposed a general plan of a budget showing what portion of the Board's appropriation for 1941—1942 may be expected to be available for the Japan Lutheran Church. The Mission should take specific action at this time indicating as nearly as can be calculated what "funds" in hand and what balances from the current budget can be released for the Church. These sums, plus the grant from the 1941—1942 budget, should be presented to the Church in the form of "gifts" with all possible dispatch. In my opinion this one of the most urgent duties of the Mission at this meeting.

It should be emphasized that it is not clear how much longer churches and schools will be permitted by officials and by public sentiment to continue to receive gifts from abroad. Wisdom would seem to indicate that we ought not to bank on a very precarious future. On the other hand, however, care should be exercised in making representations to the Board to leave the way open for freewill gifts to the Japan Lutheran Church from time to time in the future. It would be a catastrophe to altogether abandon this Church now, whereas by continued gifts we may the better insure the effectiveness of nearly half a century of missionary labor in this field. Prejudice or pique or disappointment must have no place here.

Shadan Reorganization. A major practical problem with which we have been much concerned is the method of holding the property of the Mission under the new order. After long and careful negotiation with the Board of Foreign Missions, the Mission has advisedly decided on the revision of its the Shadan Articles. On March 29th, the revised Shadan Articles were submitted to the authorities. If the request of the Mission is granted, all of the property now held by the Mission Shadan will become the property of the Japan Evangelical Lutheran Church. The personnel of the Shadan will be in the proportion of three Japanese directors to one missionary director. A Special Agreement, to which the Executive Board of the Japan Lutheran Church has formally subscribed, guarantees that the missionary homes, the property of the Jiaien in Kumamoto, that of Bethany Home and the Old People's Homes in Tokyo, etc., cannot be disposed of without the sanction of the missionaries, and that the property of the Girls' School in Kumamoto will be ceded to the Zaidan of the Kyushu Jogakuin when this is organization.

Property. The Mission has responsibility for considerable property in widely scattered places. It is incumbent upon us to take steps to provide for its care and upkeep. This applies to both movable and immovable property. With our limited personnel it will be necessary to authorize someone to give careful attention by personal visits to the places in which there is Mission property, and either preserve it or dispose of it as the Mission may direct.

Eleemosynary Institutions. The Mission Executive Committee though it best for the time being to leave their holdings in the Shadan, where they will be protected under the Special Agreement so long as missionaries are able to retain their position on the field. It is expected that in emergency the Japan Lutheran Church will assume full responsibility for them and will take increased interest in them after it actually holds their property and these institutions are no longer “foreign” missionary project. In case of complete missionary evacuation, these properties would be completely within the jurisdiction of the Shadan, and if funds for their support should not be available we should have to trust the judgment of the Japan Lutheran Church as regards their continuance or liquidation.

Thanks to the generosity of the Women’s Board, the property at Kosihikawa, Oimatsu-cho, was leased and the house thereon purchased for the use of the Church for the Blind. The Rev. Ishimatsu says this is the only church for the blind in Japan that owns its equipment. The Pastor of this church, Mr. Murakami, and the members have shown grate appreciation for this concrete evidence of our interest in them, and express determination to make their church self-supporting in the not distant future.

Reports from Kyushu Gakuin show that the plan for self-support is being put into operation with good success. Dr. H. Inadomi, the Principal, writes; “Everything is going well at Kyshu Gakuin. In fact, we feel a new strength because of the new responsibility placed upon us from this spring. We had 346 applicants for entrances examination, 66 more than last year, and they were from better families, and of better quality. I am very grateful for the great sympathy and enthusiastic co-operation of parents and graduates in our new understanding. Within two months since we started the movement, we have received already ¥20,000 in cash. Of course I am thankful for the unfailing sympathy and understanding of the Mission, too. I am quite sure we will attain the goal, to the joy of us all who are deeply concerned with the future of this institution”

Inasmuch as the raising of an Endowment Fund of ¥200,000 is the mainstay of the plan for self-support for our Boys’ School, I recommend that the Mission take appropriate action to keep before the Board the desirability of soliciting gifts to this fund from interested friends of Kyushu Gakuin in America. And also, we should continue to urge the Board to send to the field at once all moneys accruing from the legacy of the Magaretta Miller Estate, already earmarked for Kyushu Gakuin.

Through Dr. C. K. Lippard, friend of the Finnish Lutheran work in Japan have sent a gift of \$245 to be used for the purpose of aiding students for the ministry belonging to the branch of the Lutheran Church in Japan affiliated with the Finnish Gospel Mission. This generosity is hereby acknowledged with sincere thanks. I recommend that its administration be entrusted to the Seminary Faculty.

The Statistics for 1940 reveal a slight net gain in membership, from 5,152 in 1939 to 5,240 in 1940. The total number of Baptisms was 198 in 1939, and 140 in 1940. It is rather surprising to find recorded a drop in the number of communicants, from 1,805 in 1939 to 1,676 in 1940. The total contributions, however, have increased by nearly one thousand yen, to ¥26,806 in 1940. This is encouraging in spite of financial stringency. The most alarming fact disclosed by the statistics is the decrease in the number of Sunday-School pupils of 767, namely, from 3,086 in 1939 to 2,319 in 1940. It is claimed that the attitude of schools and school teachers as well as the multiplication of Sunday activities are chiefly responsible for this deplorable fact. Sunday School specialists are saying that a new technique in Sunday School management and methods will have to be developed if we are to counteract the adverse trends of the times.

On the whole, however, for a "bad" year, the statistical table is not too discouraging. It must be expected that the upheaval that has been taking place in the church in the past year, and the withdrawal of such a large proportion of the missionary force, there will be a decrease. The only way in which this can be compensated for is by greater evangelistic activity and zeal on the part of pastors and other workers. For months many of our best men have been giving the major portion of their time and strength to matters of organization; it is to be hoped that after the organization of the Union Kyodan shall have been effected, the best efforts of the strongest leaders will be directed to problems of evangelization and church extension.

I am unable to summarize the work of the various Stations, as I am not in possession of any field reports from our missionaries at the time of composing this. Field Reports will be read as usual on the floor. However, they will of necessity be incomplete, inasmuch as some of the missionaries have left the field.

Personnel. Our Mission suffered its first loss by the death of a missionary on the field when Mrs. Arthur J. Stirewalt was called away on January 4th, 1941. Although Mrs. Stirewalt had been in a serious condition for many months, her death came a distinct shock to us all, particularly as she had been permitted to return to her home from the hospital for Christmas. Her funeral was conducted at Tokyo Lutheran Church, Okubo, by Rev. E. T. Horn, Rev. Dr. C. W. Hepner preaching the sermon. Her mortal remains were buried at the Tama Cemetery, Tokyo-Fu. An appropriate "In Memoriam", prepared by Dr. Hepner, has been sent to Mrs. Stirewalt's family, to the Board of Foreign Missions, and to the Lutheran Church periodicals. I recommend that the same be spread upon the Minutes of the Mission. Our hearts go out in deep sympathy to Dr. Stirewalt and the members of this family in their bereavement.

Re. A. C. Knudten resigned the Treasurership of the Mission as from the end of March 1941, but later consented to discharge the duties of that office till his departure from the field, April 21st. In accordance with Standing Rule, Section Two, Officers, paragraph 1, (4), the President of the Mission assumed the functions of Treasurer *pro tem* until this Mission meeting.

Rev. J. M. T. Winther, D.D., has gone to Americas to retire, after a long service (43 years) on the field, interrupted only by a few years of work as pastor in his native land. Dr. Winther shares with Dr. Scherer, Dr. Peery, Dr. Brown, and Dr. Lipperd the distinction of being one of the founders of the Japan Lutheran Mission and Church. In Kurume in itinerating evangelistic work, in Kumamoto for many years as a pillar of theological faculty, and latterly in Fukuoka as sponsor of newspaper evangelism in the Shinseikwan as well as in the capacity of evangelistic missionary there, Dr. Winther has left a deep impress upon the whole work of the Lutheran Church in this country. He has been the unfailing friend and benefactor of young and old pastors, and tireless in his efforts to discover and enlist men for the Lutheran ministry. For years he was a member of the Executive Board of the Japan Lutheran Church, and President of the Board of Directors of Kyushu Gakuin. In all his labors Mrs. Winther has been his constant and loyal companion and co-worker, and we missionaries as well as countless Japanese friends will never forget the genuineness and warmth of her hospitality. Especially in time of sickness and trouble Mrs. Winther was always a very present help. In the ordinary course of events it might have been possible for Dr. and Mrs. Winther to remain on the field to round out several more fruitful years of service. But recent change were accompanied by a decline in the health of both them, so that it became the united judgment of the Board and the Mission that none could misconstrue their motive if they retired at this time. We thank God for their years of service here, and pray for many more years of happy service in the Homeland.

Other withdrawals from the field which we regret exceedingly are those of Rev. and Mrs. H. A. Alsdorf, Rev. B. Paul and Mrs. Huddle, and Miss Ethel Dentzer. When wedding bells rang here last June for the Alsdorfs we were full of joy and hope for a lifetime of service in Japan. But in the face of uncertainties here, the Board has with constructive foresight called them to India. The Huddles, who arrived only last fall, had but settled down to language study when the same circumstances induced the Board to call them also to the work in India. Miss Dentzer has been here a year and—a-half and was about to complete her two years of language study with distinction. She would have been eligible to appointment at this meeting of the Mission. But, under present conditions here, when, apparently at the solicitation of the Mission in India, the Board extended her a call to that field, she felt—as well as we—that she ought to accept. Accordingly, Miss Dentzer sailed from Kobe on April 28th.

We are deeply disappointed at the loss of those five promising new missionaries, for whom we have been praying and waiting so long. We wish them Godspeed, a safe arrival in India, and many years of successful service.

Referring to our personnel in general, our Mission force stands as follows:

Home on regular furlough: Mr. and Mrs. Linn, Miss Harder, Miss Shirk, Miss Winther, Dr. and Mrs. Miller, Miss Aderholdt.

Advanced furlough: Miss Bergner.

Furlough due in July, 1941. Miss Anne Powlas.

Evacuated : Mrs. Horn and children ; Mrs. Thorlakeson and children ; Mrs. Bach and children, to be followed by Mr. Bach in May ; Mr. and Mrs. Knudtedn and children ; Mrs. Schillinger and children, May 15th.

This leaves on the field the following : Dr. Stirewalt ; Dr. and Mrs. Hepner, Dr. Horn ; Mr. Thorlaksson ; Dr. Schillinger ; and the Misses Akard, Heltibridle, Lippard, Potts, Anne Powlas and Maud Powlas.

Some of these at present remaining may have to return for special reasons ; all should and would go in a critical international situation, as the presence of any under certain circumstances could only work embarrassment and perhaps real harm to those whom we seek to serve.

It is our earnest hope that the Board will deal with evacuees on a generous basis ; and , in the case of wives separated from their husbands, that the Board will grant at least regular travel allowance to them and their children, full field salary per family, and house rent as if on furlough.

We trust also that the Board will make every effort to retain in the service of the Board all those who wish to continue, at least till the international and ecclesiastical atmosphere in Japan becomes sufficiently clarified to discern the best method of procedure. And, also in the case of those who do not contemplate returning to the field when possible, that the Board give consideration to their rehabilitation in the work of the Church at home or in some other mission field.

Just a year ago, Re. S. O. Thorlaksson presented a report on the results of his investigation of the opportunities for work among American—born Japanese in American. This investigation was made at the request of the Board of American Missions with the co-operation of the Board of Foreign Missions. The report was presented also to the Japan Lutheran Church and was received with an expression of the hope that work might be begun by the Lutheran Church along the lines suggested. I note that the Board of American Missions in its report to the Twelfth Biennial Convention of the United Lutheran Church, 1940, has the following :

“ **Work among Japanese.** At the request of the Lutheran Church in Japan, a thorough investigation was made of the possibilities of undertaking work among the Japanese on the Pacific Coast. Through the co-operation of the Board of Foreign Missions, the services of Missionary S. O. Thorlaksson, who was then in the States on furlough, were secured, and a full report made to the Board, in which were shown the possibilities in this field and the steps necessary to undertake successfully the task presented. The work proposed will be confined to American—born Japanese for whom practically nothing is being done at the present time by the churches now laboring among the Japanese in this country. The preliminary survey is being followed with additional investigations. The active interest of the Women’s Missionary Society led them to appropriate sufficient funds to start this work. As soon as a qualified

missionary can be found by the Church in Japan, the work will be inaugurated.”(Page 226.)

Under ordinary circumstance I should hesitate to recommend that a missionary in active service on the field be called away for this work at home. But under present conditions the situation here holds out so little challenge that the time seems to me to be ripe for us to take the initiative in nominating a missionary for the Board’s consideration to inaugurate this very important and attractive work in accordance with the tenor of the Report of the Board of American Missions above quoted.

Lastly, I recommend to each and all of us that in our conversation and correspondence with our backers in America we maintain a note of hopefulness and optimism, pointing out the many elements of progress and success in what is transpiring here, in the full confidence that He Who has begun this good work will carry it on to full fruition.

Finally, pardoning a personal allusion, I sometimes think that it is indeed either the irony of an evil fate or the workings of an amazing Providence that put me into this office at one of the most critical times in our forty—eight years of Mission history. For the first time in twenty—nine years have I been president of the Mission. It is an awful reflection that history many denounce the past year’s administration as the period of the downfall of modern missions in the Japanese Empire. But I am not afraid of the verdict of history. What has been done by us has been done in reliance upon God’s guidance and only through much prayer and spiritual anguish. My conviction is that this tide in the affairs of the Church in Japan is not to be regarded as destructive, but as constructive and potent with promise.

All the time, we are confronted with two major dangers. First, that in the present circumstances we may be led to go too far and approve too grate changes ; and Secondly, on the contrary, that we may be inclined to go not far enough and may really obstruct progress. Of these two dangers, I think the second the grater. By resisting the trends we might easily stultify the growth of our Church and spoil its hope of influence among the churches and the people of this Nation; by seizing the opportunity we might, by the aid of forces entirely unlooked for and beyond our control, help our Church to enter into a grater heritage in which she many exert a powerful leavening influence among the Protestant Churches in Japan.

After all, a mission is not an army occupation. There is a time when a mission can and ought to withdraw. Our objective has always been to build a Japanese Lutheran Church. If, as I believe, we have succeeded in doing this, we ought to thank God for the success that has crowned His work here and relinquish our hold, entrusting it entirely to the direction of our Japanese Christian brethren.

At the same time, we shall not cease to pray that the day may speedily come when the Japan Lutheran Church itself will call across the waters of a truly

“Pacific” Ocean, “Come over and help us”.

Respectfully submitted,

EDWARD T. HORN,

President

Tokyo, Japan,
May 3rd, 1941.

資料引用

Joint Conference of Lutheran Missions Cooperating in Japan,
1941.5.5-8, P48-62

JAPAN

1. Further Evacuations —On July 30th the following cablegram was sent to our mission in Japan : “Schillinger, Ulcamiss, Tokyo(Japan) Urge Women Evacuate Now Stop Return of Men Left to Their Best Judgment. Drach.”

On Saturday evening, September 13th, Revs. Hepner and Thorlaksson telephoned from Tokyo, Japan, to Administrative Secretary Dr. George Drach at his home. Previous notice of the hour of receiving the message(7:00 P.M.) having been given by the Telephone Company. Dr. Drach called a meeting of the Council of Secretaries and Dr. Thomas and Mr. Weitzel came to his home to receive the message. It was difficult to hear every word spoken from Tokyo, but after a number of repetitions, lasting almost an hour, the following points became quite clear, recorded in minutes of the Council of Secretaries, as follows :

1. Thorlaksson will sail for Shanghai, September 25th.
2. Send to America President Line at Shanghai Office Tickets for six(6) persons:
 - Rev. S. O. Throlaksson
 - Rev. George W. Schillinger
 - Miss Faith Lippard
 - Miss Martha Akerd
 - Miss Marion Potts
 - Miss Annie Powlas
3. Miss Maud Powlas is not decided. What do we advise ?
We advise that she also come home,—making Seven(7) in all.
4. Rev. Dr. A. J. Stirewalt and Rev. Dr. and Mrs. Chas. Hepner will remain in Japan.
We replied all right if they so decide.
5. Send to our Credit at America Express Office, San Francisco, in October, \$11,000 of the second half of the gift to the Japan Church.
6. Also to same place \$1200.00 monthly for men’s and women’s work.

7. Inform all relatives of missionaries that they are all well and happy and best greetings from all in Japan.

We replied sending our greetings and best wishes to them all.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, October 23, 1941.

Japan

Fortunately all the men and women missionaries, except Dr. A. J. Stirewalt and Rev. Dr. and Mrs. C. W. Hepner, left Japan and reached the United States before Japan began war on the United States Sunday, December 7th. The last group to leave included Rev. Dr. George W. Schillinger, Rev. S. O. Thorlakson, Misses Martha Akard, Marion Potts, Faith Lippard, Maud Powlas, and Annie Powlas. The Council of Secretaries have had conferences with them all.

Before the war began the following cablegram were exchanged :

On November 28th to Hepner, Ulcamiss, Tokyo, as follows :

URGE STIREWALT HEPNERS IMMEDIATE RETURN. DRACH

On November 30th from Stirewalt Hepner to our office in Baltimore :

“HEPNER DOING USUAL WORK CONSIDERS PRESENCE HIGHLY IMPORTANT REQUESTS PERMISSION TO REMAIN STOP STIREWALT WILLING TO RETURN BECAUSE OF LIMITED WORK BUT ALSO WILLING TO REMAIN PLEASE ADVISE STOP BANK RETURNED SEPTEMBER REMITTANCE OCTOBER SIXTH PLEASE SEND SECOND HALF OF CIFT FOR JAPAN LUTHERAN CHURCH AND MISSION SUBSIDY THROUGH COOPER DOCTOR LONG HAS JUST DONE SO FOR FINNISH MISSION. STIREWALT HEPNER”

To this we replied on December 1st , as follows,

“STIREWALT SHOULD RETURN STOP IF HEPNER REMAIN THEY MUST FACE CONSEQUENCES STOP REMITTANCES THROUGH COOPER NOW CONTRARY TO OUR GOVERNMENT REGULATIONS. DRACH”

Comment : It was manifestly impossible for our three remaining Japan missionaries to get out of Japan before war was declared by Japan on December 7th.

It is also clear that no money can be sent to them for the duration of the war.

Arrangements have been made to clear all inquiries concerning missionaries in Japan through the East Asia Committee of the Foreign Missions Conference with the States Department in Washington, D.C.

Voted that the Board commend the Secretaries for the wisdom and good judgment which they have consistently shown in meeting the difficult situations which the war has occasioned on the mission field, especially in Japan and China, and for the effective way in which they met these situations.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, January 22, 1942, p36-37

JAPAN

No direct communication has been received from our missionaries in Japan. According to a cablegram received by his daughter, Miss Ruth Stirewalt, 164 Wentworth Street, Charleston, South Carolina, dated January 13, 1942, received through the Department of State, Washington, D.C., routed through the American legation at Bern, Switzerland, Rev. Dr. Arthur J. Stirewalt was “in his usual health and comfortable at home”.

On March 16th, we addressed a mimeographed form—letter to the members of the Board, to Japan missionaries on furlough, and to relatives and friends of Missionaries Hepner and Stirewalt, quoting a press report published in the Baltimore Sun and other papers, giving a list of 219 Americans interned in Japan. In this list appeared the name of Charles William Hepner, but not Mrs. Hepner or Arthur J. Stirewalt.

The list was forwarded by the International Red Cross at Geneva, Switzerland, as received from Tokyo. “Local chapter of the American Red Cross, it was said, were expected to be able shortly to furnish information on means of communication with the interned Americans.” 90 were names of civilians interned in Japan when the war started.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
April 23, 1942, P103

Japan

Repatriated Missionaries

Our Three Last Japan Missionaries Come Home

On June 9th word was received at the office of the Board of Foreign Missions in Baltimore that Rev. Dr. A. J. Stirewalt and Rev. Dr. and Mrs. Charles W. Hepner were being repatriated. The message came from the State Department through the East Asia Committee of the Foreign Missions Conference of North America, with office at 156 Fifth Avenue, New York, stating that the names had been received from the Japanese Foreign office through Berne, Switzerland, of the Americans booked to sail in early June from Japan to Lourenco Marques, on the east coast of Africa, by the “SS ASAMA MARU.” In this list were the names of our Japan missionaries. At Lourenco Marques the repatriated persons, including diplomatic personnel and consular staff, press representative, missionaries, and other American citizens, will be transferred to the SS “GRIPSHOLM”, sailing for New York. Responsible organizations or relatives will be journey from Lourenco Marques to America.

The Swiss authorities in Japan and Japanese—controlled territories have been notifying Americans that they cannot expect the continuance of subsistence allowances after the opportunity for repatriation has been effectively offered.

A total of 146 persons have been repatriated, 75 from Hong Kong, 31 from Korea, 39 from Japan.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
July 23, 1942, P149

解題・解説

第6章 教団参加の時代（1941年～1945年）

第1節 合同と教団形成の背景

第2節 日本基督教団への参加、部制とその廃止

第3節 第2次世界大戦下の教会

資料134 教団規則に関する経過報告（第22回総会議事録、1941.5.1-3）

資料135 教会合同（第22回総会議事録、1941.5.1-3）

資料136 福音ルーテル教会との合同経過報告（第22回総会記録、1941.5.1-3）

資料137 日本基督教団との教会合同報告（第22回総会記録、1941.5.1-3）

資料138 日本基督教団設立参加関連議案の決議（第22回総会記録、1941.5.1-3）

資料139 『るうてる』終刊号論説（1942.9.15 出典：日本基督教団資料集第2編、P191）

宗教団本法の施行に伴い、日本福音ルーテル教会は教会数44（実際に認可された教会30）、総会員数5,152、教職数（伝道師含む）47名であり、福音ルーテル教会（フィンランド系）との合同（1940年10月）により、当初はこの条件で独自の教団設立を果たすために、文部省との折衝を重ねたが、『皇紀二千六百年と教会合同』の機運に押されて、日本基督教団の合同を受け入れ、1941年5月、東京教会で開催された第22回総会において日本基督教団第5部に参加することを決議した。

1941(昭和16)年6月25日、プロテスタントの34教派が合同して新たに「日本基督教団」が創設され、東京の富士見町教会で創立総会が開かれた。創立時の信徒総数は24万人であった。同教団は第1部から第11部に組織する連合体であった。第1部は日本基督教会系、第2部はメソヂスト系、第3部は組合教会系、第4部はバプテスト教会系、第5部はルーテル教会系であり、ホーリネス系は第9部と第10部、救世軍は第11部というように教派ごとに部制で設けた。

教団規則に関する経過報告

昭和十五年四月一日より宗教團體法が實施せられた。團體法の實施により教団規則は文部大臣の認可事項となり之に即應すべき教団規則作成の必要生じ、十四年十月局長は坪池總務と文部省を訪ね、其意見を徴し第一回教団規則を起草したるも十五年一月十五、六兩日文部省は各宗派の協議會を開き教団規則の内容及機構に関する要項を示された。之により第一回草案は根本的に之を修正するの必要を生じ十五年一月十七、八日兩日神戸ミッションハウスに於て前總會に於て選ばれたる機構委員會を開き根本問題を協議し、其委託を受けて局長及坪池總務第二回草案を作成、二月廿四日文部省宗務局稲田宗務課長の内閲を済せ、三月六日より開會せられたる第廿回總會に提出して其賛成を得字句の修正は總務局に委託せられた。

一月十五、六日の協議會に於て文部省は教団認可の資格について何等指示せらるゝところ無かりしたため、協議會に招かれたる基督教側廿三派は當然認可を與へらるゝものと期待し、教団規則の作成を急いでみた。然るに其後に至り教會數五十、信徒數五千を以て認可資格とする旨の内示あり小教派に一大衝動を與へた。基督教聯盟に於ては數回に亘り會合を重ね之が撤廢を求めたるも容れられず六月十二日正式に認可教會數五十、信徒數五千を以て認可資格となす旨の通知に接した。

我教會は之に先立ち福音ルーテル教會と合同を決したるを以て信徒數七千を越ゆるも、認可教會は、宗教團體法施行前に教會認可を受け得るものにして其手續を怠りたるもの多く其資格に於て缺くる所があつた。併し乍ら七月一日稲田課長より速達にて招かれ相原宗務官立會の上、文部省は認可資格を變更し得ざるも、必ずしも數に拘泥せず、質の勝れたものは數に於て缺ける所あるも認可し度き方針である。ルーテル教會に對しても文部省は認可し度き方針なる旨述べられ、種々ルーテル教會の内容につき質問あり、前總會に報告したる如き十二の點を報告し懇談した。文部省の認可せんとしたる教會は日本基督教會教團、日本メソヂスト教團、日本組合教團、日本聖公會教團、日本バプテスト教團、日本福音ルーテル教團、きよめ教團の7つであつた。

七月十三日文部省の栗田健吉氏より電話にて教団規則審査開始の通知あり、十六日より開始、平井氏之に當り、總務會中なりしを以て其間川桐氏を煩わし連日審議、廿六日第一回の審査終了、同日局長は一時間半に亘り本教團の信條につき説明した。七月廿八日より之を整理し、八月一日坪池總務の上京を乞ひ修正に基きて草案を作成、八月廿日修正草案を文部省に提出した。

第二回審査は八月廿八日より開始せられ坪池氏病氣中は川桐氏を煩はし審査終了後栗田氏の再讀を乞ふた。

第廿回總會に提出したるものとは相當異なるものとなりたるため總務局は本田、石松、岸、大熊、宮坂氏を煩わして審査をなさしめた。

以上の如き経過を経て殆ど完成したる教団規則、而して文部省の方針として十月一日迄に教団認可を與へらるべき豫定なりし所、突如教會合同問題起り、多くの時間と勞力を費して作成したる教団規則は遂に流産の運命に陥つたのは甚だ遺憾なる次第

である。文部省に於ても此間、松尾局長の轉出、次で稲田課長も轉出せられ一沫の不安と寂しさが感ぜられた。

機構に關係したる諸種の會合

坪池隆氏と文部省への出頭(十四年十月十九日)
文部省協議會出席(十五年一月十六日三浦 十七日加藤)
神戸機構改正委員會(一月十七—十八日)
宗教團體法東京府講習會平井氏出席(一月廿五—六日)
規則草案起草委員會坪池、三浦(一月三十日—二月二日)
文部省と打合せ(二月八日)
聯盟主催對策研究會(二月十四日)
文部省主催地方講習會 九州地方博多、松岡出席(二月廿六—廿七日)
大阪地方福山、小泉出席(二月十三日—十四日)
松尾局長と會見(二月廿八日)
在京總務及岸氏協議(三月六日)
稲田課長と懇談(四月十三日)
聯盟對策委員會(四月十六日)
福音ルーテル側と協議(四月十八日)
箱根起草委員會(三浦、坪池四月十九日)
宮坂、平井氏と協議(四月廿二日)

資料引用

2 2 回總會議事録、1941. 5. 1-3

P67-69

教会合同に関する経過報告

日本に於ける教会合同の運動は之を準備期、進展期、創立期の三期に分類することが出来る。準備期は門司に於ける合同教会の創立當時より、昨夏阿部メソヂスト監督の召集により有志懇談會の開催せらるに至る迄、進展期は各派より委員を挙げ數回に亘りて協議會並びに各種の委員會を開き日本基督教團の創立を決議するに至る迄、創立期は創立準備委員の挙げられた創立總會を開くに至る迄の期間である。

一、準備期

嘗て日本基督教會と組合教會との合同問題起り、將に成立せんとして遂に失敗に終わらざることとは日本に於ける基督教史上に於ける興味ある一挿話である。又信仰形體を同うする教派間の合同、例へば日本基督教會を構成するプレスビテリアン、レフォード、ダッチレフォード派の合同、メソヂスト系諸派の合同等の行はれしことも記憶すべき事である。

乍併基督教各派を打つて一丸となさんとする運動は長尾半平氏の下に門司に於ける諸教會を以て合同教会の創立せられしことを以て始まる。長尾氏上京後は門司に於ける失敗に鑑み、専ら各派本部に訴ふると共に各派の教職者信徒の有力者を糾合して同志會を組織し屢々修養會、祈祷會を開きて其機運の醸成に努められ、其勢力は漸次加はりつゝあつた。

基督教聯盟にも各派より正式に選出したものにあらざりしも、各派を網羅する委員會が設けられ信條、機構等につき研究を進められ、之に伴う聯盟の改組、神學校の合同等の問題を中心として當事者間に協議の行はれし事も一切ならずあつた。併し合同の機運は未だ容易に熟するに至らなかつた。然るに昭和十年十一月基督教聯盟主催の下に開かれたる基督教全國協議會に於て

教会合同には原則的として賛成すること。

教会合同委員は二十五名を舉げて研究調査せしむること。

が決議せられ、聯盟より舉げられたる正式なる委員會の構成を見るに到つた。委員中には急進派と自重派とありて對立したるも結局合同事務所を設置して十年を限度とし全教派の合同を計ること、合同教会の信條としては使徒信經を採用すること、組織も漸進主義を採り、次第に各派交流人事を行ふこと等が委員會の大勢を占める意見であつた。其頃日本基督教會の大會は教会合同に對し左の如き決議がなされた。

教会合同は日本基督教會の傳統精神であつて誰も意義が無かつたと思ふ。唯其取扱ひに就きて色々の意見が出たのであります。ついでに委員會はその意見のある所を考慮して左の通り立案す。

即ち合同問題は吾が委員をして其成行を注視せしめ必要あれば各教會の本質的信仰の立場に依據しつゝ慎重の態度を以て他派委員と交渉せしめ其結果を次期大會に報告せしむるを可しと思ひます。

而して滿場一致右報告は可決された。

超へて昭和十三年三十一日の二日間、富士見町教會に於て合同問題を主題とする基督教全國協議會が開かれ、此會議に於て各派の合同に對する態度を報告せらるゝやう豫

め各派に要求された。

聖公會は合同賛成を力説せられたが、其は無条件合同に非ずしてあく迄歴史的監督を認むることを条件とするものなるが分科會の討議の結果明かにされた。

バプテストは合同に大賛成なるも教派合同に先ち東西バプテストの内部的合同の達成するの必要あれば直ちに参加し難き旨報告。

日本基督は教會合同は同派の傳統的精神である。併し教會の合同に先ち教派間の深き親交と理解とを必要とする故に先づ教會同盟を作る必要を力説せられた。

メソヂスト、組合、同胞等合同賛成其速進を求められた。

我が教會はアウグスブルク信仰告白第七條に於て「教會の眞の合同に關しては福音の教理と禮典の執行に就て一致」すべき事を定め、且又我教會憲法第二章、信仰に關する部分は總會の決議と雖之を變更し難く提示される如き使徒信經のみを信條とする如き條件に於ては、我教會の信仰的立場より絶対に合同に参加し難き旨を報告した。此等の報告に基き委員を擧げて研究の結果左の如き議決がなされた。

本協議會の情勢に鑑み一日も速かに教會合同を實現すべく各教會の選出する特定の委員會を設置せられんことを希望す。

斯くの如くして初めて各派より選出してたる委員會の構成を見るに至り我教會より本田、三浦二氏委員となり信仰、職制、事業、經濟の四部門を置いて研究が進められてゐた。

二、進 展 期

然るに昨年夏(十五年)以來文部省によりて教團認可の基準を定められ多くの小教派は單獨にて教團認可を得難き事明となり、且又勃然として起つた新體制運動はさしものに長き歴史と傳統とを有する政治、經濟、學術、宗教等有ゆる部門に亘り改組統合を要求し、且又國際情勢の緊迫は外國ミッションとの従來の如き關係を維持し難き事となり、教會合同の機運は救世軍問題を一の楔機として急轉し、聯盟常議員會長阿部義宗氏は個人の資格に於て各派の有志並に基督教主義學校長、事業團體の主腦者約七十名を八月一七日、廿六日、廿九日の三日に亘つて基督教青年會館に召集し懇談會を催し、教會合同と自給獨立の即時斷行とを計られた。その結果として九月二日基督教聯盟主催の協議會が開かれ次の如き申合が行われた。

一、我等基督教會は内外の情勢に鑑み此の際外國ミッションとの財的關係を斷ち自給獨立を決意すること。

右遂行に關しては日本基督教聯盟に於て各派に推奨しその實行を期すこと。

一、我等基督者は來る十月十七日の皇紀二千六百年奉祝全國基督教大會を期して各派合同の決意を聲明し直ちに合同期成に對し全權を委ねられたる準備委員を設置す。

右聲明には各派に於て然るべき機關を通し之が決意をなし準備委員會に努力をなすこと。

我教會よりは三浦、本田、宮坂の三氏参加、第一の決議に對しては起立賛意を表明する事が出来なかつた。而して引きつゞき開かれたる各派代表者の會議に於て第二の點に賛成せざりしこと、又其理由として我教會の教會合同に對し一の基準を有すること、日本に於ける諸教派は基督教聯盟の下によく一致協力をなしつゝあるを以て政黨や榮利團體の如く教派を解消して合同する必要なき事、斯くすることは却て基督教の健全なる發達を阻害するの結果となる危険あること等を述べて教會同盟の程度を必要とすることを主張した。聖公會の佐々木監督も合同反對の意を表明されたが、日本基督教會が前協議會迄強く主張せられし教會同盟の主張を此の會議に於て聞き得なかつた事は甚だ意外の感を抱かしめた。併し同教會は既に理想的合同に態度を決し同教

會大會は十月十七日の合同聲明に参加すること、教會合同のため準備委員を選出すること、諮問機關を設けること、機構は會議制とすること、準備委員の成案は大會又は常置委員に委託し最後の決定をなすべきこと等を決定せられた。

我教會は十月十五、六兩日臨時總會を開き

(一) 奉祝信徒大會宣言に關しては「起草委員の手になれる宣言文草案に現れたる『基督信徒の大團結を完成せんことを期す』なる趣旨に於て之に参加すること、

(二) 教會合同に關しては「本教會信條に於て一の基準を有するを以て左の條件を附して準備委員を選出すること、

(イ) 準備委員の外に五名の諮問委員を設け、準備委員のみにて決定し得ざる主要問題に就き協議せしむ。

(ロ) 準備委員に全權を賦與するも其決議に對する最後の決定は總務局に於て之をなす。

(ハ) 使徒信經、ニケア信經を教團の信條として認め、教團中にありてルーテル教會の信仰特色たるアウグスブルク信仰告白及其他の本教會の信條書に基く信仰をルーテル教會に屬する教會の特色として維持繼續するの自由を保留し得る形態の教團組織たることを主張すること。

に決し委員として三浦、本田二氏、諮問委員として平井、石松、ホールン、岸、宮坂氏が擧げられた。

宣言文は十月十七日の朝、本教會に對しても又本會委員に對しても何等諮らるゝ事なくして「合同の達成を期す」と變更の上式場に於て朗讀せられた。斯かる重大なる問題が正規の手續を経ずして遂行せられし事は理解に苦しむ所である。

合同宣言に引つゞき十月十八日合同準備會は開かれた。準備委員會の開かれしは八回である。

委員會名簿は左の通りである。

日本基督教會		佐波 亘、富田 滿、林田四郎、小野村林蔵、堀内友四郎、郷司慥爾、村岸清彦、熊野義孝、浅野順一、金井為一郎、今村好太郎、飯島誠太、山本忠興、三吉 努
日本メソヂスト教會		釘宮辰生、今井三郎、眞鍋頼一、藤岡 潔、中村金次、瀬川壽郎、藤川卓郎、木村蓬伍、笹森順造、吉田 清、小泉要太郎
美 聖	普 園	伊藤與雄 岡部岩三郎
日本組合基督教會		小崎道雄、野口末彦、松山常次郎、今泉眞幸、平賀徳造、芹野與太郎、海老澤亮、阪田素夫、湯浅豊太郎
同 福 基	胞 音 督	安田忠吉、寺尾章二 篠原金蔵、廣野捨二郎 千葉儀一
基督日本バプテスト教會		友井 楨、渡部 元、熊野清樹
日本福音ルーテル教會		三浦 豕、本田傳喜
日 本 聖 教 會		車田秋次、小原十三司、菅野 鋭、安倍豊造
き よ め 教 會		工藤玖蔵、大江捨一、荒原諸兄麿
日本聖化基督教會團		土山鐵次、諫山修身、松田政一
日本傳道基督教會團		澤村五郎、西條彌市郎、野畑新兵衛、小林 壽
日本一致基督教會團		平出銀一郎

基督友會 中村萬作
 東京基督教會 齊田 晃
 日本自由基督教會 ○安部藤夫
 日本聖潔教會 ○中山量一
 日本獨立基督教會同盟 ○白戸八郎、○武本喜代蔵
 日本ウエスアン・メソヂスト教會 ○小林吉保
 日本聖公會 ○須具 止、○後藤文蔵、○蒔田 誠
 (○印ハ番外委員)

第一回十月十八日青年會館に於て、協議事項は

- 一、 教會合同の文字を用ふるも教派の合同を意味すること。
- 一、 基督教聯盟加入の教會選出代表者を以て本委員會を組織し未加盟團體は資格調査の上加入の可否を決することとし富田、小崎、金井、友井、三浦、篠原、小原、土山、上川、澤村の十氏を委員として選んだ。
- 一、 議長は決議に加はらず、従つて議長を選出したる教派よりは一名の委員を補充すること。
- 一、 議長は過半数得票者、副議長は次点者を以てすること。
投票の結果、議長阿部義宗氏(廿九票當選) 副議長富田滿(十六票當選)
外に小崎道雄、三吉努、三浦冢各二票、友井楨、金井為一郎、工藤玖蔵各一票。
議長指名により書記海老澤亮、都田恒太郎兩氏、會計松山常次郎、小原十三司
兩氏就任。
- 一、 聖公會名出監督の申出を承認同派より三名の番外臨席者を許可すること等。

第二回は十月三十、三十一日日本基督教會館に於て、重なる協議事項は

- 一、 副議長に小崎道雄氏を加ふること。
- 一、 書記海老澤亮氏の申出を承認し同氏に代り友井楨氏書記となる。
- 一、 定足数は三分の二とすること。
- 一、 決議は一般事項は出席議員三分の二以上、重要事項は四分の三以上、全教派にとりて特に重大なる關係ある事項は全教派の賛同を求ること。
- 一、 事業團體よりは委員の派遣を求めず、機構問題研究の場合番外委員として出席を求むること。
- 一、 全員を四分に分ち研究を進めることとなつた。

合同準備委員會役員

[議長] 阿部義宗 [副議長] 富田滿、小崎道雄 [書記] 友井楨、都田恒太郎
[會計] 松山常次郎 小原十三司

合同準備小委員氏名

(機構委員)

[議長] 藤川卓郎(メソヂスト) [書記] 千葉儀一(基督) [會計] 本田傳喜(ルーテル) 村岸清彦、堀内友四郎、郷司慥爾、三吉努(日基) 安田忠吉(同胞) 藤岡潔、眞鍋頼一、木村蓬伍、小泉要太郎(メソヂスト) 海老澤亮、松山常次郎(組合) 友井楨(バプテスト) 菅野鋭(聖) 工藤玖蔵(きよめ) 中村萬作(友會) 松田政一(聖化) 澤村五郎(傳道) ▽白戸八郎(獨立) ▽藤田誠(聖公)
(信條委員)

[議長] 佐波亘(日基) [書記] 三浦冢(ルーテル) [會計] 篠原金蔵(福音) 熊野義孝、浅野順一(日基) 今井三郎、釘宮辰生(メソヂスト) 今泉眞幸、平

賀徳造（組合）熊野清樹（バプテスト）安倍豊遺（聖）大江捨一（きよめ）小林壽（日本傳道）諫山修身（日本聖化）▽須貝止（聖公）

（財 務 委 員）

〔議長〕山本忠興（日基）〔副議長〕瀬川壽郎（メソヂスト）〔書記〕廣野捨二郎（福音）〔會計〕畑野新兵衛（傳道）金井為一郎、飯島誠太（日基）吉田清、岡部岩三郎（メソヂスト）阪田素夫、湯淺豊太郎（組合）小原十三司（聖教）平出銀一郎（一致）▽小林吉保（ウエスレアン・メソヂスト）▽中山量一（聖潔）

（教 職 委 員）

〔議長〕村田四郎（日基）〔書記〕寺尾章二（同胞）〔會計〕野口末彦（組合）渡部元（バプテスト）中村金次、笹森順造、伊藤與雄（メソヂスト）今村好太郎、小野村林蔵（日基）芹野與太郎（組合）荒原諸兄麿（きよめ）西條彌市郎（傳道）土山鐵次（聖化）車田秋次（聖教）▽安部藤夫（自由基督）▽後藤文蔵（聖公）

（▽印番外議員）

此陣營を見て如何に日本基督教會が信條に重きをおきたるかを窺はれる。

一、 信條機構、教職の三項につき各派の報告を聴取す。ブロック制主張者は唯少數の小教派のみにて大勢は完全なる合同の即時斷行を主張した。

日基側は信仰に於ける一致の必要と會議制度を高調、我教會は信條の教會にして之を無視して合同参加の不可能なること、及第廿一回總會の決議に基く我教會の態度を述べブロック制合同を主張す。

第三回は十一月十三日一十四日青山學院神學部

財政、機構、教職、信條の諸問題につき協議し、又四委員會を開き研究す。機構を一本建とすべきか或は二本建とすべきか、重なる議題であつて、我等は信仰的特異性を維持する必要上又信仰的立場を異にする教派も参加し得るためにブロック制合同の必要を再び主張した。

本會期中に開かれたる信條委員會に於ては

- （一） 信條と機構とは密接なる關係を有する。若し機構に於てブロック制を認めらるゝ場合信條は極めて一般的のものとして解決し易きも、ブロック制否定せらるゝ際は極めて困難なる問題として發展すべき可能性あるを以て機構問題の確立するまで信條の決定は困難なること。
- （二） 信條問題の決定には、あく迄教團自體の立場に於て之を決定する必要あること。

等が協議せられ、信條に對する各派の態度として表明せられた處を要約すれば

- （一） 聯盟合同委員會の作成せられたる信條は、基督の受肉、復活等現はされ居らざるを以て絶対に反對、使徒信經を基本としてプロテスタントの信仰を表明する一文を添へ聖書の基準性、救の恩寵性教會の自律性を明確にすること、ニケア信經は積極的には排斥せず、但し神學的色彩濃厚なるを以て寧しろ原始的なる使徒信經を採用し度し。
- （二） 使徒信經に生活信條を附加し度し、内容は皇國への忠誠、禮拜の厳守、聖禮典たる聖餐及洗禮の尊守、信仰の證言と愛の奉仕、公役勵行、禁酒禁煙等
- （三） 「使徒信經に基き」とし聯盟委員會作成の信條を採用し度し、使徒信經より、處女降誕は非科學的なる故削除希望、復活は差支えなし、ニケア信條挿入には絶対反對。
- （四） 大體前條と同意見

- (五) 最少限度のものとして使徒信經及ニケア信經を主張、プロテスタントとキャソリックとを對立せしめんとする態度には反對。
- (六) クリーダルチャルチとして最も多くの信條を有する教派であり、其信仰に於ても多くの特異性を有する。さり乍ら其固有の信仰的特色を他に強ゆることは我等の意志にあらず、さればブロック制を採用して我等にオーグスブルク信仰告白を規準とする信仰の維持繼續を認容せらるるに於ては、教團の信條としては使徒信經及ニケア信經を採用し、之を聖書、恩寵、教會、禮典に對する觀念を表明する一文を添へたし。
- (七) 使徒信經にても、聯盟案にてもよし等々。

何等の結論には到達せざりしも、使徒信經を原文の儘残すことに多數は賛意を表し、各派の特色をブロック制に於て維持することには其々派委員の反對あり、使徒信經に付加すべき前文については三浦、浅野、今井、平賀、熊野（バプ）を立案委員として選ぶ。

第一回小委員會は十一月十五日青山學院ハリス館に於て開き、協議の結果次の三氏に各自に立案を依頼した。

- (一) 信仰告白の形式をとれる日基の信仰告白を基礎として浅野氏に、
- (二) 最も自由なる立場をとれる組合の立場を基礎として平賀氏に。
- (三) 最も信條的なるルーテル教會の信條を基礎として三浦氏に。

第四回は十一月廿七日—廿八日基督教青年會館

各部委員會の経過報告の後、各部分科會に移り、更に其報告に基き諸問題を協議し、第五回委員會迄に各部共要綱を作成提出することに決す。

信條委員會は十一月二十日浅野氏宅に立案委員會を開き、更に第四回準備委員會中、二回の分科會に於て小委員提出の二案につき説明あり、メソヂスト及バプテスト側よりも自發的に各々提案ありたり、平賀氏は破棄して提出せられなかつた。協議會は相當混亂、佐波、釘宮、今泉三氏を委員に擧げて解決を依頼した。三氏は協議の結果三浦案を餘りに神學的色彩濃厚なれば困難多く、信仰告白の形式を採れる浅野案を基礎として修正し度き旨報告、決定之が検討をなす、多くの點に於て對立を生し解決容易ならず、立案委員會は十二月三日開かれ使徒信經の譯文に於て一致せざる點を發見各神學校に研究を依頼した。

第五回は十二月十一日—十二日基督教青年會館

各部委員會の報告に基き検討し協議したるも意見は常に同一の點を繰返すのみにて進展せず、故に次回迄には教團規則要綱を之迄の協議を基礎として作成し議事の進行を計ることゝなつた。

信條問題も對立解けず未解決の儘中間報告をなした。

資料引用

第22回總會 1941.5.1-3

福音ルーテル教會と合同経過報告

日本福音ルーテル教會は明治二十六年四月二日復活日佐賀市に於て禮拜を守りたる日を以て教會創立の日を定められ、福音ルーテル教會は明治三十八年七月廿五日長野縣下諏訪町を中心に傳道開始せられたる日を以て建設の日と定められてゐる。

さり乍ら同教會の長野縣下傳道開始に先ち、同派宣教師は佐賀に來從、明治三十七年十二月廿二日迄兩派の協力は續けられた。其後一方は南より、一方は北より東京に傳道開始をなすに至り兩派は再び折衝の機會を得、親善關係を保ち、殊に神學校の東京移轉と共に神學生を委託せられ、一層緊密の度を加ふるに至り、遂に日本に於て唯一つのルーテル教會を建設せんと熱意より、皇紀二千六百年を記念し宗教團體法の實施を期し兩派の合同成立するに至つた。基督教各派の合同機運に先ち、信仰と傳統とを一にするルーテル主義信仰に立脚する二つの教派が信仰を基礎として合同を達成し得ることは大いなる歡喜であり感謝である。

此合同によりて我教會は南鹿児島より北北海道迄を貫き、横は東京より長野縣に亘り、全國教化のため有利なる地歩を占むるに至り將來の發展に資することを大なるを思はしめる。

合同成立に至る過程は先づ局長と宮坂龜雄氏との會見に端を發し、四月十八日兩派全總務は神學校に協議會を開き當方は局長より、先方は溝口弾一議長より挨拶を交換し、合同を決議し、契約書起草のため兩派より委員を擧げた。四月廿九日神學校に起草委員の會合をなして原則を決定し、十月十四日兩派聯合總務會に於て正式の調印を終り、十六日總會の承認を得て兩派合同最初の聖餐式を神學校禮拜堂に於て守り、引つゞき圖書室に於て合同後第一回の總會を開き統理者を選擧した。

資料引用

第 2 2 回總會記録、1941. 5. 1-3

101 頁～102 頁

4. 教会合同の件

教会合同の件は委員の報告に基き審査の結果第二十一回總會の決議たる本教會の信條を維持繼續し得る組織たる事の條件に合致することを認め近く成立を見んとする「日本基督教団」に参加することの決定を總會に提案する事とす。

5. 添附書類の件

日本基督教団成立の暁各部は従來の規定に従ひ會議を開き教務を處理し得ることとなりたるを以て各部の規定を添附書類として文部省に提出するの要あり、依て三浦、本田、宮坂三氏を擧げて本教會の添附規定を従來の「日本福音ルーテル教會憲法規定」に基き日本基督教団規則を参照し至急立案せしめ、第三十三回總務會に於て任命せられたる審査委員（大熊、石松、坪池（隆）、ホールン、宮坂）をして審査の上決定せしむることとす。

資料引用

第 2 2 回總會記録、1941.5.1-3

160 頁

第 3 6 回總務局（1941.4.26）報告

58 決議委員報告

石松委員長左記の報告をなし報告として承認せられる。

一、 教會合同の件

総務會提案はこれを至當と認め本總會に於て日本基督教団に加入することを決議す。

付 帯 決 議

地方教會名稱は日本基督教団と冠し舊名を保持されんことを希望す。

59 教會合同の件

教會合同の件は無名投票の結果賛成三十六票、反対三票をもつて教會合同に賛成と決す。

資料引用

第 22 回總會記録 1941.5.1-3

機関紙の統合に際して

本『るうてる』も愈々本号を以て最終号となることとなつた。思へば明治卅五年五月『路帖新報』として発足して後、『るうてる』誌へと進展して来た本紙は爾来旧日本福音ルーテル教会の機関紙として四十年の長きに亘り、福音主義信仰のために戦ひつゝ御言への善き奉仕を続け来つたのであつたが、今や我らの間よりその姿を消すに至つたことは、事情の念禁じ難きものがある。一方に福音的聖書的の読物として信徒の信仰的教養の伴侶となり、他方また教報を通して各地在住の会員相互の消息親睦のよすがとなつて来た『るうてる』紙は我らにとりて誠に懐しき機関紙であつた。

行政諸機関の統合改廃、新聞雑誌の統合、出版物の統制等は蓋し現下の我国に於ける最も著しい事象の一つであるが、これは単なる思付や従来の集合離散とは全くその趣を異にするものであることは言ふ俟たない。各紙各機関は各所在の理由あつて存在し、ここには長き伝統と特質とを保持して来たのであるが、今や之等の一切が再検討せられつゝある所以のものは、それが国家の総力を集中して完遂すべき大東亜戦争の必然の要請であるからに外ならぬ。今や人も物も一切を挙げて聖戦完遂の一途に役立たねばならぬ時である。最少限度の物質を最大限度の効果に使用せねばならぬ。既に新聞界出版界に夫々大統合が行はれてゐるが、基督教界の出版物のみが超然としてその埒外に立つことは到底許される事ではないのである。

既に教会合同の実現したる今日である。一つの教団、一つの機関紙は当然予想せられる所である。部制度が恒久的の存在でなく何れかは廃止せらるべき性質のものであるとするならば、夫々の部の有し来つた機関紙も早晚合流か統合か廃止せらるの已むなきに至るは当然であらう。要は時の問題に過ぎぬ。

基督教界に於ける各種の機関紙の統合の問題は、時局の要請と共に近時益々その緊急さを増し、ここ数ヶ月来教団出版局の斡旋に依り各部の代表者の会合協議が行はれて来たのであつた。各紙とも伝統あり傾向あり主張ありて、各々その特色を維持来たつたのであるから、之等を打つて一丸とし教界に於ける最有力なる言論機関とするのには、内外仲々に問題性を含む所であることは容易に想像されよう。然るに今や幾多の紆余曲節を経て関係者諸方面の温き理解の下に凡ての機関紙が統合せられるに到り、『日本基督教新報』週刊が発行せらるゝ運びとなりその編輯局の構成も略々決定せる模様である。これは一つの週刊紙に他が合流するの謂ではなく、日本基督教団がその機関紙として『日本基督教新報』を発行するのであるから、各部の機関紙は従来を行懸りを棄てて、之に欣然参加するに至つたのである。

我が『るうてる』も『福音新報』及び『基督教世界』と共に教団の新聞機関紙の傘下に参じ文書伝道の責の一端を負はんとするのである。旧紙に別れるは何となく心残りのする所ではあるが、新に生れ出づる教団機関紙の使命を思へば、我らはこの時局に直面する我が教団のため之が健全なる隆昌進展を願はざるを得ないのである。

合同することによつて、ルーテル主義信仰は消滅するものとは我らは考えない。それは宛も教会合同に於けると同様であると思ふ。ルーテルの信仰の流れを汲む教会の

信仰と主張と実践とは、他との接触とにより全然消滅するほど薄弱にものとも思われない。合流統合は寧ろルーテル主義の信仰が今後その感化を及ぼすより拡大なる舞台に登場するものと解したい。新機関紙に合流することによりルーテル主義信仰は単に旧ルーテル教会々員の間流布するに留らずして、その活動領域を広くし、その接触面を拡張して、新しき教団の信仰と生活に対し有力なる貢献をなし得るものと信ずる。かかる意味に於いて本誌は廃刊せられるのではなく、より大きな活動への新発足をなすものであり、謂ふ所の発展解消をなすものと言ふことが出来やう。

従来本誌に寄せられたる旧ルーテル教会内外の教友諸氏の温き友情と支援とに対しては、本誌の関係者一同の衷心より感謝する所である。諸氏の理解深き支援がなかつたならば、多年に亘る本誌の活動は不可能であつたであらうと思ふ。限りなきの懐かしさと思出とを以て今や本紙の刊行を廃するのであるが、本紙を通じて養はれたる信仰的教養、主にある交わりは何時までも持続せらると思ふ。終刊号を送るに当たり我らの諸賢に願ひたきは、諸賢が本紙に与へられたと同様の温き理解と支援とを新しき『日本基督教新報』にも寄せられんことである。之を愛し之を購読し之を推薦せられて之が支持に努められんことである。蓋し新機関紙の健全なる発達は教団の一員たる信徒たるものの望ましき義務であるのみでなく、ルーテル主義信仰の健全なる拡張発達とを希ふものの当然なる負担ではあるまいかと考ふるのである。

(平井生)

[『るうてる』1942. 9. 15]

資料引用

出典:日本基督教団資料集第2編、P191

解題・解説

第7章 再建の頃（1945年～1962年）

第1節 戦後の教団とルーテル教会

第2節 戦後の世情と伝道

第3節 新しい宣教団体とルーテル教会の合同

資料 140 宣教師派遣を要請する「日本委員会」報告（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, October 24-25, 1945. P221）

資料 141 「日本委員会」報告と宣教師派遣方針（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 30-31, 1946. P10-12）

資料 142 宣教師派遣に関する報告（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, April 24-25, 1946. P68-70）

資料 143 ボード日本委員会報告 ホールンの辞退、ミラー、エカード宣教師の派遣（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June 24-26, 1946, P117-118）

敗戦後の荒廃の中で、ルーテル教会再建の動きは、1946年4月24日、九州在住の教職15名が熊本における会合をもって始まった。

この会合により合意に至った内容は、(1) ルーテル主義信仰の確立と同信仰に基づく教会の拡充を推進すること。(2) 上記精神を貫徹するために教団の改組に努めること。(3) (1)と(2)の目的によるルーテル教会の再建のために責任ある宣教師の派遣を要望することであった。

1946年6月には、通称「6人委員会」と言われる、プロテスタントの超教派による一行がアメリカより来日した。彼らは各教派のボードの要請を受けて、宣教師の派遣準備のために実情調査も兼ねて来日した。この委員会のメンバーは、ルーテル教会も含め各教派の代表によって構成されてはいないにしても、戦後の数年間、各教派のボードとの連絡機関となり、宣教師入国手続きにきわめて重要な役割を果たした。「6人委員会」との間で宣教師の再派遣に積極的な準備をすすめていた北米一致ルーテル教会（ULCA）のボードは、「日本伝道に経験のあるすべての宣教師の再来を希望する」との日本福音ルーテル教会からの要請に応えるために、1946年6月24日の会議にて、最初の宣教師派遣の手続きにこぎつけ、E.T.ホーン、L.S.G.ミラー、Miss M.B.エカードを第1陣として派遣することを予定した（ULCA, BFM Minutes. 1946.4.24-26）。だが、E.T.ホーンはパスポート取得の準備まではしたが、結果的に宣教師として再度、日本には赴任しなかった。

資料 144 「ルーテル会の誕生」の呼び掛け(ルーテル会誌、1946.7.20)

1946年6月9日のペンテコステの日に東京で全国信徒大会が開催され、引き続き10日、日本ルーテル神学校において教職者一同が参集して九州地区教職の申し合わせを確認するとともに、その具体化のためにルーテル主義信仰に立つ教職をもって「ルーテル会」を組織することを主な決定事項とした。

資料 145 日本伝道報告 宣教師着任 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, November 11-13,1946, P186-190)

再来日の宣教師の第1陣は、L.S.G.ミラー(1946年8月12日)、Miss M.B.エカード(1946年8月22日)、Mrs. L.S.G.ミラー(1946年10月16日)であった。

資料 146 伝道計画に関する建議案(再建総会記録、1947.1.23-24)

宣教師の再来日と呼応して、ルーテル教会の再建は本格的な年を迎え1947年1月23日と24日の両日には日本福音ルーテル教会再建準備総会が九州学院と九州女学院を会場として開催された。重要案件の一つとして、再建準備委員の内海季秋より、教会再建の伝道計画が提示された。「一、海外より有力なる神学者を招聘しルーテル主義神学を斯界に顕揚することに努む。二、地域的教会役員修養会の開催。三、文書傳道の計画。四、教職の神学的研鑽を助長せしむる会の開催。五、聖職献身の運動」。

資料 147 ボードへの教会再建報告 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, February 3-5,1947, P34)

日本福音ルーテル教会への強い期待と関心を抱いた宣教師のミラーは、1947年1月23日と24日に行われた再建総会の閉会礼拝直後にボードに日本基督教団からの離脱と、新たに議長として神学校校長・岸千年が選出されたことを伝えた。

資料 148 ボードへの再建総会報告 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, May 12-14,1947, P124)

ミラーは1月23日と24日に行われた再建総会報告と、新たな議長として選出された議長・岸千年及び常議員会にスタイワルトとミラーが選出されたこともボードに伝えられた。

資料 149 再建に関する声明（臨時総会記録、1947.11.13）

1947年11月12日から14日まで、臨時総会が熊本にて開かれ、教職45名、信徒代議員21名、合計66名が参集した。第1日目は九州学院において教団接渉委員・岸千年の教団問題の経過説明を受けて、総会は教団からの離脱決議として、「日本福音ルーテル教会態度決定に関する件」を諮った。

資料 150 ボードの日本報告（JELC の位置付け）（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 19-21,1948, P22）

1947年11月の臨時総会による日本基督教団の離脱の確定報告を受けたボードは、日本福音ルーテル教会の英語表記を“The Evangelical Lutheran Church in Japan.”とするとともに、1948年10月のULCA総会に友好的関係のシノッドとして教職と信徒の代表を各々1名招待することを決議した。

資料 151 ボードの日本報告（新たなる宣教師派遣）（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 19-21,1948, P26）

1946年8月に最初の宣教師ミラーの来日により、宣教師会がミラー（議長）、クヌーテン（書記）、スタイワルト（会計）が構成されたことと、1948年以降の新たなる宣教師派遣がボードで確認された。

資料 152 宣教師館と土地建物支援（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, November 8-10,1948, P225-228）

日本福音ルーテル教会再建のための土地建物支援5万ドル、宣教師館・学校・社会福祉事業の土地建物の再建支援3万ドルが1949年予算としてボードで承認された。

資料 153 再建後第一回総会「我らの決議」（るうてる 1948.12.15.1 頁）

1948年11月20日から24日、5日間にわたって、九州の博多教会を会場に、日本福音ルーテル教会の再建総会が開催された。この総会に先立って、当時の邦人教職30数名は19日午後2時から福岡近郊の二日市温泉の大丸別荘に集まり、これからの教職の使命の自覚と結束を共に誓った。総会に正式に集まった教職数は45名、教会代議員21名であった。この総会で、再建に向けての「我らの決議」と称する声明文が採択された。総会の論議を経て、作成された名文であり、総会書記に選出された稲富肇牧師の名調子により、熱意を込めて閉会

まえに読み上げられ、すべての議員は起立して聞いた。

資料 154 宗教法人組織(総会記録, 1948.11.20-24,p17-18)

敗戦後、連合国から課せられたポツダム勅令による応急的な立法である宗教法人令(1945年)が公布され、かつ新憲法が1947年5月に施行された。これに合わせて、法人格取得のために1948年11月の総会では社団所有の教会関係の財産を新設の、『宗教法人日本福音ルーテル教会』に委譲することが決議された。

資料 155 神学校土地建物報告(総会記録, 1948.11.20-24,p39)

戦中の日本基督教団と合同により、神学校も合同となり、1943年4月より日本ルーテル神学専門学校は日本東部神学校に統合された。鷲宮の校地、校舎は日本基督教団神学校財団の管理下にあったが、土地・建物は設立当初の登記が変更されることなく、九州学院財団の所有のままであった。

資料 156 神学校報告(総会記録, 1948.11.20-24,p 55-60)

1948年11月20日から24日、5日間にわたって開催された再建総会での最も大きな問題は神学校の再開であった。神学校経営責任は宣教師会の下ではなく、日本の教会の下に置かれ、その経営維持のために各個教会が相当の負担を自主的に運営していくことが強く求められた。

資料 157 教会発展計画(第26回総会記録, 1949.5.3-5,p19-25)

第26回総会での重要案件として、第1に伝道教会を目標に各個教会が5ヶ年以内に実質的自給達成に努めること、第2に教会の土地建物の補修においては経費の1割以上を当該教会が負担すること、第3に教職志願者を出すこと、第4に信徒伝道者の育成のために年1回地区において短期神学講習会を開くこと、第5に日曜学校を教会学校と改め、キリスト教育の発展と教師の育成に努めること、第6に信徒会、ルーサーリーグ、婦人会への支援を強化すること、第7に新聞、トラクトによる出版文書伝道を展開すること、その他に神学校を大学令による大学とするために教授陣の充実と適材の人材を米国に留学記させることなどの計画案が採択された。

資料 158 大学設置委員会報告(第26回総会記録, 1949.5.3-5,p93-97)

九州女学院の大学設置計画に関する当該理事と常議員により構成する設置委

員会からの報告が第 26 回総会に提出された。

資料 159 日本福音ルーテル教会と ULCA との共同 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June 20-22,1949, P154)

ULCA のボードによる日本福音ルーテル教会への支援と関係強化を確認した文書。

資料 160 国際基督教大学設立への資金援助に関して (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June 20-22,1949, P154)

1948 年度の ULCA の総会決議に沿って、ボードは国際基督教大学設置のための支援要請に関しては教会員個人の支援は各々判断でするにしても、機関的支援はしないことを表明した。

資料 161 久留米大医科専門学校の移管 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, February6-8,1950, P26-8)

1948 年 10 月の日本福音ルーテル教会の常議員会で協議された「久留米大医科専門学校の移管」に関して、ULCA のボードは更なる検討する必要性を在日宣教師会に伝えること共に、アウガスタナ・シノッドの S. H.スワンソンにそのための調査を依頼した文書。

資料 162 アウガスタナ・ルーテル教会の日本伝道参入 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, February6-8,1950, P28)

アウガスタナ・シノッド(アメリカ・スウェーデン系)は、1949 年 10 月の海外伝道局の会議で日本伝道に精力的に取り組む決議を行った。この決議に従い、海外伝道局長 S. H.スワンソンは、1950 年 4 月から 5 月にかけて日本を視察し、日本福音ルーテル教会及び ULCA 宣教師との会議を重ね、山陽地域をアウガスタナ・シノッドによる主な伝道区域とする計画案を 6 月の総会に提出し、その承認を得て、日本伝道への参入を最終的に確定して行った。

資料 163 国際基督教大学設立支援に関して (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, February6-8,1950, P30-31)

国際基督教大学設立支援に関する ULCA ボードの基本的見解を述べた文書。

資料 164 久留米医科専門学校の買収に関する報告と決議 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June19-21,1950, P127-130)

アウガスタナ・シノッドの S. H.スワンソンの報告に基づき、久留米医科専門学校の買収は不可能であることを伝えた ULCA ボードの文書。

資料 165 日本福音ルーテル教会と北米一致ルーテル教会海外伝道局との特別協約 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June19-21,1950, P189-190)

1950年10月のULCAの総会で、日本福音ルーテル教会は「友好的関係の教会」として承認された。そのことを日本福音ルーテル教会の機関紙『るーてる』(1951年2月号)は「日本福音ルーテル教会は、去る10月の総会に於いて、正式にアメリカ一致ルーテル教会の友好的関係にある教会(affiliate church)として承認を得た」と報じた。これはあくまでも日本福音ルーテル教会が「友好的」教会として認められたものであって、「自主」「自立」の独立した教会として承認されたわけではなかった。

資料 166 第27回総会議長報告(第27回総会記録、1950.5.2-4)

第27回総会での平井清議長による「一般教勢」「ルーテル諸派との協力」「神学校再開」「教会建築」「全般的財政」「教職一覧」等の報告とともに宗教法人法の施行に伴う法人登記が1949年9月19日付けで完了したことが併せて報告されている。

資料 167 神学校委員会報告(第27回総会記録、1950,5.2-4 p110-111)

三浦冢による第27回総会に報告された神学校委員会報告である。1950年1月11日、熊本市のミラー宣教師館宅に開かれた第1回委員会の協議内容である。①東京鷺宮の神学校の土地建物を九州学院財団より速やかに神学校に移譲することを求める。②東京都に神学校の各種学校認可申請のための手続きを開始することと、そのため学則を定めること。③名称は「日本ルーテル神学校」とすること。④神学校の開校式は4月17日、18日の両日とすること。

資料 168 議長報告(第28回総会記録、1951,5.8-10 p25-33)

第28回総会での平井清議長による「一般教勢」、「全般的財政」「教会建築」の報告と共に、「老宣教師の感謝」として、スタイワルトとミラー夫妻の定年・帰国に関する報告である。「対海外教会との関係」では先の第27回総会の決議

に基き、ULCA と友好関係 (affiliated Church) が 1950 年 10 月 4 日にアイオワ州デモイン市で開催された ULCA 教会総会で正式に承認せられたことが報告されている。山陽地方に於ける伝道を展開するアウグスタナ派ルーテル教会の宣教師が 1950 年 9 月より相次いで来日したことも記されている。さらに、認可申請中であつた日本ルーテル神学校が 1951 年 1 月 29 日付で各種学校として東京都知事より認可せられたことも報告されている。

資料 169 アウグスタナ・ルーテルミッションとの協約(第 28 回総会記録, 1951.5.8-10 p4,p5, p10)

資料 170 アウグスタナ・ルーテル教会との協約事項締結 (第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, P62-63,114-117)

アウグスタナ・シノドの日本伝道参入はルター派の共同伝道の下に東京及び山陽地区に伝道を展開することになった。

資料 171 60 周年記念事業委員会報告 (第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, p118-119)

1952 年に日本福音ルーテル教会は宣教開始 60 周年を迎えるにあたって、第 26 回総会で記念事業準備委員会を設置して、記念事業計画を検討してきた結果、第 28 回総会に計画案を報告した。

資料 172 神学校委員会報告 (第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, p136-137)

1951 年 1 月 10 日に開催された神学校委員会は宗教法人経営による各種学校としての神学校を将来的には大学令による学校に昇格させることを検討した。

資料 173 日本ルーテル神学校報告 (第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, p133-135)

第 28 回総会に提出された日本ルーテル神学校長・岸千年による「日本ルーテル神学校」の報告である。内容は「神学校の現状」、「カリキュラム」、「学生数」、「学生実施訓練」、「施設状況」、「神学校運営根本方針」である。

資料 174 東京学生センター(Tokyo Student Center) (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, December 5-7,1951, P247)

東京の都市圏に学ぶ大学生を対象とした「学生センター計画」が JELC にお

いて公的に最初に諮られたのは 1950 年 1 月 12 日に熊本のミラー宣教師館宅で開かれた常議員会である。学生センター設置委員会の件が協議され、学生センター設置のためにウッド姉、スタイワルト、岸、福山の 4 氏を委員として委嘱することが決定され、東京における学生伝道の活動が胎動を開始した。土地の取得費とセンター建設費という膨大な資金を賄うことは当時の JELC の手には余る難問であったので、北米一致ルーテル教会(ULCA)の海外伝道局からの支援に全面的に頼らざるを得なかった。

資料 175 日本福音ルーテル教会とアウグスタナ・ルーテル教会との共同 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, December 5-7,1951, P248-255)

1951 年に ULCA のボードに報告された日本福音ルーテル教会とアウグスタナ・ルーテル教会との間で結ばれた宣教協約書。この協約書により、アウグスタナ・ルーテル教会は広島を中心とする山陽地区(岡山～下関)と、四国の一部(広島の対岸)をその伝道地区とし、また東京での伝道にも協力することとなった。

資料 176 宗教法人「日本福音ルーテル教会」設立公告(「るうてる」, 1952.1.15, p5)

1951 年 4 月には宗教法人令の不備等が改められ、新たに宗教法人法が制定される。1952(昭和 27)年 11 月 10 日付で日本福音ルーテル教会は宗教法人としての認可を取得する。

資料 177 福音ルーテル教会との合同 (第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P102-105)

日本福音ルーテル教会とフィンランド系の福音ルーテル教会は 1950 年 12 月 12 日に合同交渉の第 1 回委員会を開き、合同案に基づき、完全合同を果たしていた。

資料 178 神学校共同経営交渉委員報告 (第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P105-106)

1951 年 10 月 10 日、神戸にて開かれた全ルーテル協議会にて日本ルーテル神学校の共同経営が協議事項となったが、実際には具体的交渉に応じたのは福音ルーテル教会 (ELC) であった。1952 年 2 月 4 日より、ルーテル神学校にて、相互間の理解と親密とを計るために、最初の会合が開かれた。ELC 側の代表は

ハンセン、ステンベルグ、ハイランドであり、日本福音ルーテル教会側は神学校共同経営交渉委員会として、平井清、稲富肇、ハドル、岸千年、三浦冢であった。この神学校共同経営交渉委員の経過が第 29 回総会に報告された。

資料 179 平井清議長報告（対外関係）（第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P27-30）

第 29 回総会に提出された平井議長による対外報告である。1951 年 8 月 8 日付でルーテル教会世界連盟への加入、北米一致ルーテル教会(ULCA)との関係、各国各派のルーテル教会の関係(アウグスタナ派教会、福音ルーテル教会（旧フィンランド派）、ミゾーリ派ルーテル教会、関西及び山陰地方に於けるノールウェイ・ルーテル教会各派の関係が綴られ、さらに北米一致ルーテル教会の総会議長フライ氏が 1952 年 3 月 29 日来日されたことが報告されている。

資料 180 平井清議長報告（対内関係）（第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P25-27）

第 29 回総会に提出された平井議長による対内関係の一般的報告である。1893 年 4 月、佐賀の地から宣教が開始されて、60 年を迎えたことも述べられている。1952 年度の受洗者数において 702 名の増加と教会伝道所総数は 43 ヶ所、牧師 37 名、宣教師 38 名、伝道師 4 名、総会員数 5,331 名であることも報告されている。

資料 181 平井清議長報告（宗教法人認可）（第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P33）

第 29 回総会において平井議長はその報告で「宗教法人認証申請」手続きに関して触れている。1951 年 3 月 31 日に実施せられた宗教法人法に準じて、本教会の教会規則を新たに作成し、1952 年 1 月号機関紙『るうてる』紙上での公告を経て、文部大臣の認証を得るために申請をしたことが報告されている。

資料 182 日本福音ルーテル社団報告（第 29 回総会記録、1952.4.22-24, P124）

宗教法人法の施行に合わせて、社団所有の教会関係の財産を新設の「宗教法人日本福音ルーテル教会」及び非包括法人の教会に委譲することとし、宣教師館関係の土地・建物の財産は日本福音ルーテル社団が管理することとなった。

資料 183 東京学生センター(Tokyo Student Center) (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, December 2-4,1952, P297)

1951年初頭より、A.J.スタイワルトが土地取得に主導的に取り組んだ東京学生センターは1952年4月9日に「日本福音ルーテル教会」の名義で土地登記を完了し、1952年秋に礼拝堂を含む学生センターが総工費566万2千円で建築工事を着工、翌年の4月に竣工、第30回総会の直前の5月3日に献堂式を行い、総会会場として使用された。ULCAのボードはそれらの諸報告を受け、その学生センターの方針を承認し、チャプレンとして田坂惇巳の就任を了承すると共に5名による理事会を承認した。

資料 184 アバコ (AVACO) (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, December 2-4,1952, P305)

1949年日本キリスト教協議会視聴覚事業部として発足した「アバコ」にはルーテル教会の宣教師クヌーテンが委員として関わった。スタジオ建設のための75,000ドルの支援要請についてULCAのボードは協議し、1954年度に5,000ドルを支援することを決定した。その内の1,000ドルはULCAの婦人宣教師会からの支援を求めるものとしている。

資料 185 福音ルーテル教会との合同準備委員会報告 (第30回総会記録、1953.5.5-7, P10,P114)

第30回総会に報告された福音ルーテル教会との合同準備委員による報告。1952年10月27日に東京池袋教会にて第1回合同委員会、同年12月1日に第2回合同委員会を開催し、第30回総会に合同提案が可決に至る準備を整えた。

資料 186 神学校共同経営委員会報告 (第30回総会記録、1953.5.5-7, P117)

1953年3月19日、静岡ルーテル教会において、福音ルーテル教会(ELC)と間で神学校共同経営問題を協議し、神学校の運営は日本福音ルーテル教会が行うことを基本線としつつ、「神の言の教理」と「神学校における協力の具体案」を協議したことが第30回総会に報告された。

資料 187 教団認証 (第30回総会記録、1953.5.5-7, P34)

1952年10月24日付で日本福音ルーテル教会が宗教法人として文部大臣の認証を受けたことと、併せて地方諸教会も非包括法人取得のために各県庁に規則を作成して申請手続きをしていくことが第30回総会に報告された。

資料 188 JLMA（日本ルーテル宣教師会）の規則（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, October 21-23,1953, P340-350）

1953年5月のJLMA（日本ルーテル宣教師会）の総会で採択され、1953年10月のULCAボードに承認を受けるために提出されたJLMAの規則である。

資料 189 全ルーテル協議会委員会報告（第31回総会記録、1954.5.4-6, P227-228）

1950年より、日本国内に宣教を展開しているルーテル各派間の文書伝道、出版等を中心とした協力と提携を図るための全ルーテル協議会を設置し、必要において開催してきたが、さらなる合同の可能性も含めての更なる一致のために、1953年10月14日、15日の両日、さらに4月21日と22日に、東京ルーテルセンターにてルーテル派合同問題に向けての会合が開かれた。

資料 190 北米一致ルーテル教会との特別協約書の破棄（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, November 9-11,1954, P525）

ULCAのボードは1930年に最初に締結し、1950年に再度更新した宣教師の特権と日本福音ルーテル教会との関係についての「Special Agreement」を破棄することを決定した。

資料 191 ルーテル各派合同接渉委員会（第31回総会記録、1954.5.4-6, P8,14,257）

日本福音ルーテル教会、日本に於ける各派ルーテル教会及びミッションとの合同を目指すためにルーテル各派合同接渉委員会が第31回総会に提案した「各派ルーテル教会合同に関する建議案」、「合同接渉委員会提案」、「合同接渉委員報告及提案」文書である。

資料 192 日本福音ルーテル教会60年史出版委員会報告（第31回総会記録、1954.5.4-6, P11）

1951年の第28回総会で記念事業の一環として「日本福音ルーテル教会60年史」を編纂することが決定し、その執筆が福山猛に依頼された。それから3年を経て、発刊された。その労苦に第31回総会では感謝報告がなされた。

資料 193 北米一致ルーテル教会への感謝決議文（第 31 回総会記録、1954.5.4-6, P17-18）

日本福音ルーテル教会の 60 周年記念に当たり、北米一致ルーテル教会に感謝の表明を第 31 回総会にて行った。

資料 194 全ルーテル合同接渉委員会報告（第 32 回総会記録、1955.5.3-5, P184-191）

第 32 回総会に全ルーテル合同接渉委員会より報告されたルーテル教会と日本伝道に協力する国内外各派ルーテル教会及宣教師会との間の基本的合意形成となる特別協約案である。主な項目の内容は「教会」、「地方教会」、「総会」、「宣教師団体」、「牧師及び伝道師」、「宣教師」、「財政」、「教理的立証」である。

資料 195 日本ルーテル神学校学校法人設立（第 32 回総会記録、1955.5.3-5, P118）

第 32 回総会に報告された日本ルーテル神学校報告において、学校法人設立のための寄附行為が 1954 年 12 月 8 日付で東京都知事の認可を得て、同月 21 日付で設立登記を完了したことが記せられている。

資料 196 牧瀬議長辞任報告（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, February 7-9, 1956, P46-48）

平井清の後を継いで総会議長となった牧瀬雄吉(市ヶ谷教会牧師)が海外支援資金の不正使用により辞任したことにする ULCA ボードの報告書である。

資料 197 全ルーテル合同接渉委員会報告(第 34 回総会記録、1957.5.7-9, P58)

第 34 回総会に提出された全ルーテル合同接渉委員会の報告である。1956 年 4 月 17 日に開催された神戸に於ける合同委員会で、ミズリーシノッド派(日本ルーテル教団)は教理的宣言の不適切さを理由に、組織的な合同に対する異議を表明したこともあり、この報告を最後として全ルーテル合同接渉委員会は当初の任務を終えた。

資料 198 故山内量平牧師記念事業委員会報告(第 34 回総会記録、1957.5.7-9, P50-51)

1918年に故郷田辺にて死去した最初の邦人教師である山内量平のために出身教会である日本基督教団田辺教会墓地内の墓地の左側に記念碑を建立することを「故山内量平牧師記念事業委員会」は第 34 回総会に提案し、承認された。

資料 199 デンマーク伝道会(DMS)との協約(第 36 回総会記録、1959.5.5-7, P3~P5)

日本の宣教に新たに参入するデンマーク伝道団(DMS)が日本福音ルーテル教会との間で 1959 年 5 月 5 日に交わした宣教協約書である。

資料 200 キリスト教仏教伝道団(CMB)との協約(第 36 回総会記録、1959.5.5-7, P5~P6)

1959 年 5 月 5 日に東亜キリスト教道友会(CMB)が、日本福音ルーテル修学院教会となることに関して日本福音ルーテル教会と交わした宣教協約である。

Japan

Dr. Strock presented the report for Japan Committee which was adopted.

Word has just come from the Japan Committee of the Foreign Missions Conference to the effect that things are shaping up rapidly in the direction of the possibility of sending to Japan, at an early date, the Administrative Group of Board Secretaries or Missionaries which has been contemplated for some time. This Group is to go for the purpose of meeting the leaders of the Japanese Christian Church and planning with them for the cooperative Christian enterprise in Japan. The whole question of the resumption of missionary work in Japan, and all questions connected with the relation of Missions and Mission Boards of the Church there are to be taken up by this Administrative group.

We are expected at this time to decide in the Japan Committee of the Foreign Missions Conference the composition of the Group that is to go to Japan and also the method of financing it. It is understood that there is to be an adequate representation of women in the administrative deputation.

The time has also arrived for us to present to the Japan committee of the Foreign Missions Conference a List of names of our priority "A" group of Missionaries of our Board whom we would like to have return to Japan.

Communications only recently received from Japan seem to indicate that a cordial welcome will be extended to American missionaries, and that therefore we need not wait to perfect plans until the deputation of four, which left the Pacific Coast for Japan on Monday, the 22nd of October, returns to the U.S.A.

1. Vote that our representative on the Committee of Japan of the Foreign Missions Conference be authorized to try to secure the appointment of the following on the second of "administrative" delegation which is to be sent to Japan in the near future, and that the names be presented to the F.M.C. Committee in the following order: First, Dr. Ed. T. Horn, second, Miss Nona M. Diehl, and third, Dr. L. S. G. Miller.
2. Vote that in accordance with the action of the Board as found on page 16, Minutes of November 9, 1944, which reads as follows: —"That we approve

the plan for a Commission of the United Lutheran Church to go to Japan at such time as feasible, this commission to include former Japan Missionaries”, the U.L.C. representative or representatives on the inter-denominational administrative delegation be appointed as our Commissioner or Commissioners to Japan.

3. Vote that all matters pertaining to finance in connection with the inter-denominational deputation and the U.L.C. Commission be considered by the Cabinet of Secretaries in consultation with the officers of the Board, the Chairmen of the Finance Committee and the Chairman of the Committee on Japan, with authority to act.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, October 24-25,1945, P221

Japan

Dr. Strock presented the report on Japan, which was adopted.

1. The Japan Committee of the Foreign Missions Conference took the following action on December 11, 1945.

1. The first group to go to Japan as soon as arrangements for travel can be made, shall consist of : George Ernest Bott (for the relief program) ; Henry G. Bovenkirk ; Alice E. Carry(for women's work) , as a missionary, not a Board secretary ; John H. Cobb ; Carl D. Kriote; and Paul S. Mayer ; with the understanding for the present that each board pays the salary of its missionary designated in this group, also travel to the field, but that also boards are requested to loan these missionaries to the Japan Committee for the common tasks that are involved, and that the Japan Committee will provide an expense account for their works in Japan.

That in keeping in mind the fact that it is the idea of the Japan Committee that the personnel now going to Japan in this first group is intended to be missionary personnel going for extended residence, should it transpire that some of those selected will not be able to go in that capacity, the committee which made this selection be given power to make necessary adjustments.

2. That these missionaries form themselves into a consultative group to give advice, through the Japan Committee, to the boards on the situation as it develops and to make requests for additional personnel; also to consult with similar groups appointed by the missionary conferences of other countries.
3. That in the interest of over-all planning we ask our constituent boards when individually approached by separate institutions or agencies to report and confer with the officers of this committee before sending missionary personnel or making major decisions on policy.
4. That in accordance with the vote taken at the Japan Committee meeting on November 27, the sending of additional missionaries for

general work and missionaries for survey should be planned in the light of reports from Japan and in consultation with the Japan Committee; and, that in accordance with the policy of our Japan Committee in making a united approach to government officials, boards be asked to clear through this committee the names of all persons requesting passports and transportation to Japan, this request to go to all boards.

5. That the Japan Committee consider the advisability of an early conference for careful study of the situation in Japan on the basis of the report of the deputation and such other reports as come to hand; and that the calling of this conference be referred to the officers with power to act when the situation is right.

It was voted that the above actions taken in this meeting today be brought before constituent boards immediately through their representatives on this committee, and that the Japan Committee be advised of the action of each board with regard to these matters.

It was voted to request the committee on the selection of personnel for Japan to continue, and add to its membership Dr. J. L. Hooper.

It was voted that the officers, in consultation with Boards, arrange a schedule of monthly meetings of the Japan Committee beginning with January, 1946, so that as far as possible important matters be decided by the committee as a whole.

1. Voted that as a Board of Foreign Missions we accept the actions of the Japan Committee of the F.M.C. and that the Japan Committee be informed that our Board expects, in view of the reports that have come to it concerning the condition of the Lutherans in Japan and their needs, to send one or two missionaries to Japan in the near future.
2. Voted that our Board inform the Japan Committee of the F.M.C. that it is prepared to clear through the Japan Committee the names of all persons whom it would like to send to Japan.
3. The Japan Committee on January 24 voted to request all of the board cooperating with the Japan Committee to assume their proportionate quotas of \$10,500, the quotas to be determined on the 1939 basis of allocation. This basis was the American Expenditure

for missionary personnel and field budget for the year 1939.

Of the total of \$10,500, \$4,000 is the Foreign Missions Conference's share of the expenses of the four-man commission that went to Japan some time ago; \$1,500 represents one—half of the expenses of a woman representative who is to go to Japan along with the representative of the United Council of Church Women; and \$5,000 is the amount which is estimated for the expenses of the six missionaries after they get to Japan. Those expenses cover such items as rent, office expenses, travel in Japan, and incidentals. This amount of \$10,500 is to be met by all of the boards, including those that are paying salaries and travel expense to Japan for missionaries in the first group of sex.

Voted that the Board inform the Japan Committee of the F.M.C. that this Board will assume its share of the \$10,500 which are required for (1) the expenses of the four—man commission to Japan, (2) the expenses of a woman representative to Japan, and (3) the expenses in Japan of the first six missionaries or commissioners.

4. The subject of a visit by Dr. Anspach, or others, to Japan was discussed.

Voted that while it is the expectation that the Board will send the Japan missionaries back to Japan as soon as and as rapidly as possible, yet it be an instruction to Dr. Anspach that that if he and/or another American missionary should find it possible to visit our Japan field in the near future, he or they should arrange, after consulting the Board, to do so for the purpose of expressing to our Japanese Lutherans our good will and Christian fellowship and of reporting to the Board concerning conditions in Japan.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, January 30-31 ,1946, P10-12

The report on Japan was presented by Dr. Strok.

1. Of the six missionaries who were selected in December, 1945, by the Japan Committee of the Foreign Missions Conference for early departure to Japan as a group to investigate conditions for all of the Protestant missions and churches, two, namely Drs. Mayer and Bott, finally secured passports and military permits and left San Francisco for Japan on the 23rd of March by a cargo vessel. These two men are to investigate conditions for all of the missions and are to report to the home boards as soon as possible. Two Maryknoll fathers have also gone to Japan to investigate matters for the Roman Catholics. It is hoped that General MacArthur will come to his final decision as to next steps concerning the return of missionaries to Japan soon after these two Protestant representatives and the two Catholic representative have reported to him on their investigations.

As to the other four missionaries belonging to the original six, at present there is no information whatsoever as to when they may be allowed to go to Japan.

2. The Rev. T. Benton Peery of Philadelphia, who has been in Japan as a chaplain, offered by cablegram to remain in Japan and investigate conditions on behalf of the Board of Foreign Missions of the ULCA. Chaplain Peery was authorized by cable and by letter to do this. All that will be expected will be the meeting of his living expenses during the period of his investigating matters on behalf of our Board. His return trip to U.S.A. is provided for by the military authorities.

Voted that the hearty thanks of the Board of Foreign Missions be extended to Chaplain T. Benton Peery for his willingness to undertake a work of investigation in Japan on behalf of the Board.

3. The Board is convinced that certainly many of the Japanese pastors and Christians do want at least some of the missionaries to return, but up to the present our hands have been tied because of the fact that we have cooperating with the Japan Committee of the Foreign Missions Conference. It is certain that at least one denomination, namely the Protestant Episcopal, has made much more progress in getting a representative into

Japan than have the Protestant bodies which have been working through the FMC's Japan Committee. As Dr. Luman Schafer put it the other day in a committee meeting, we all feel rather frustrated because of the way things have been going. When one realized that the Japan Committee's action to send six Protestant missionaries to Japan was taken about the middle of December, 1945, and that only two of these missionaries have gone to Japan up to the present, and that they did not leave San Francisco until the 1st of April and that even they went on a freighter, one begins to understand that the situation is not well in hand so far as Protestant missions are concerned. Moreover, the proposal which was made by General MacArthur and the occupation authorities in Japan to allow each of the 34 denominations with properties there to send out for a month at government expense one man to represent each, was apparently rejected in Washington, and only Drs. Bott and Mayer, two of the six selected by the Japan Committee, were given permission to go. In fact, even a week or so ago Dr. Schafer was still hoping that these 34 men might be allowed to go. He was then of the opinion from things that he had heard direct from Japan that the directive of General MacArthur was tied up on somebody's desk over in Japan and that it had not come from Japan. The remaining four of the selected six missionaries have secured clearance for Japan in Washington, and after considerable delay from Tokyo also. The securing of transportation is the difficulty they now face.

The Board wishes to assure not only its missionaries who formerly served in Japan, but also our Lutheran in Japan, that it is making every effort to send to Japan as many missionaries as possible just as soon as it become possible to send them. All possibilities for the achieving of this result are being continually explored. Moreover, the Board fully realizes the need of funds in Japan, not only for relief, rehabilitation and reconstruction, but also for the maintenance of the pastors and other Lutheran workers, as well as for institutions. At present, however, the government has not made it possible for funds to be transmitted. Even the ordinary mails have not been opened, so that all mail for Japan must be sent through A. . . addresses.

On April 8, 1946, Mrs. Charles W. Hepner informed us that on the 3rd of April her husband had been informed by the government that he was wanted in Japan immediately and that he would get an air priority. She wrote, "He has agreed to go and is now waiting for information as to the departure of the plane. "We have received no further word about Dr. Hepner, so we do not know whether he has actually left for Japan or not.

Chaplain Benjamin P. Huddle is now back in U.S.A. and is awaiting chaplain from the Army. He came to New York for conference during the

April meeting of the Board. Chaplain T. Fenton Peery is probably now on his way from Japan to U.S.A. We fully expect to have a conference with him also. The Board, of course, is awaiting with interest the action which may be taken by the Executive Board of the Lutheran Church in Japan which is going to meet in Kumamoto during the latter part of April.

On April 25, 1946, Dr. Stock attended a meeting of the Japan Committee of the Foreign Missions Conference at which meeting all questions connected with the sending of more missionaries to Japan were thoroughly considered. Probably the most important information given at that meeting came from a letter addressed to Dr. Diffendorfer, Executive Secretary of the Methodist Boards, from Dr. Charles Iglehart, formerly a Methodist missionary in Japan but now a professor in Union Theological Seminary, New York, who is in Japan under the U.S.A. Government. The decision of the committee, in view of Dr. Iglehart's letter and other information which has recently come to hand, was that additional lists of missionaries should be prepared immediately and that these lists should be in the order of priority. Just as soon as these priority lists have been received by the various Boards, the Boards themselves are to try to exert influence in Washington, but only in line with the priorities as presented to the government, both in Washington and in Tokyo, by the Japan Committee of the Foreign Missions Conference. In other words, the speeding up of the sending of missionaries to Japan is to be attempted through the cooperation of the various Boards that have missionaries in the priority lists and the president and secretary of the Japan Committee. It now appears as if all bottlenecks have been broken and that the way is clear for the sending of at least some more missionaries in the very near future. The housing and food shortage questions have, however, not been satisfactorily solved, nor the transportation problem.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, April 24-25, 1946.P68-70

資料 143 ボード日本委員会報告

ホルンの辞退、ミラー、エカード宣教師の派遣

JAPAN

Dr. Swoyer presented the report for the Japan Committee which was adopted.

1. It is reported that the three missionaries recommended by our Board to the Japan Committee of the Foreign Missions Conference for early return to Japan, namely, Dr. Edward T. Horn, Dr. L. S. G. Miller, and Miss Martha B. Akard, have all secured clearance from the Tokyo authorities. It is expected that clearance in Washington will present no difficulties. Moreover, it is hoped that there will not be so much delay concerning the securing of transportation as has been the case hitherto since the Theatre Command has requested our military authorities in U.S.A. to try to provide transportation for all the missionaries who are now being cleared.

Our missionaries have applied for their passports, although there is doubt as to whether Dr. Horn will actually go to the field or not. It may also be reported that of the 38 missionaries recommended for early departure to Japan by the Japan Committee of Foreign Missions Conference, three are our own missionaries. Only about a third of the 38 have been cleared by Tokyo.

Dr. Horn has declined the invitation of the Board to return to Japan.

It may be reported that there has been very great delay in securing transportation to Japan for the four members of the original commission of six. Although these six missionaries were selected by the Japan Committee in December, 1945, Dr. Bott and Dr. Mayer reached Japan as late as the 13th of April, 1946, and the remaining four left San Francisco for Japan on June 13. It now looks as if the U.S.A. government is willing to cooperate with the mission boards and that, therefore, from now on it will be possible for the missionaries to leave U.S.A. much more promptly.

The Rev. T. Benton Peery of Philadelphia, who was in Japan as a Chaplain and who was authorized to investigate conditions on behalf of the Board of Foreign Missions of the U.L.C.A., reported to the Cabinet of Secretaries about a month ago. As Chaplain Peery has been re-appointed to Japan, he has again been authorized to continue his investigations and in a demi-official way to represent the Board of Foreign Missions in Japan until our missionaries arrive.

This will not involve any expense on the part of the Board except perhaps something now and then for travel.

The Japan Committee of the Foreign Missions Conference recently informed the Board that a third list of missionaries to return to Japan, representing the various cooperating boards, would be prepared by the Japan Committee in the very near future. It now seems that this list will most probably be presented for approval to the meeting of the Japan Committee which is scheduled for the 27th of June.

Voted that the list of our missionaries for return to Japan in order of priority, prepared by the Cabinet of Secretaries and submitted to the Japan Committee of the Foreign Missions Conference, be approved.

Voted (a) that the Board of Foreign Missions appeal to the American Section of the Lutheran World Convention for an initial appropriation of \$10,000.00 for the physical relief, primarily of Lutheran, in Japan, said appropriation to be administered through the Evangelical Lutheran Church in Japan or, until that Church begins to function again, by the Board of Foreign Missions (through its missionaries in Japan) which will act in behalf of the three cooperating Lutheran groups in Japan, viz., the Church of Finland, the United Evangelical Lutheran Church, and the United Lutheran Church in America; (b) that the Board of Foreign Missions inform the American Section of the Lutheran World Convention that in the event that further relief is necessary and in the further event that the Board of Foreign Missions demonstrates its ability to administer such relief effectively, further appropriations will be requested.

INFORMATION

1. Rev. Mr. Reinbrecht read letter he received from the former president of the Japan Lutheran Church. Rev. I. Miura.
2. Dr. Wentz made the following report:
“As Rev. Mr. Iseri of Japan was well known to people in Gettysburg, those people hearing of his distress in Japan gave an offering for his relief and have sent the sum of \$250.00 in the care of the Board to be sent to Mr. Iseri as soon as this can be done.”

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, June 24-26, 1946, P117-118

資料 144 「ルーテル会の誕生」の呼び掛け

「ルーテル會の誕生 新しき活躍を期待さる」

敗戦に依る悲惨なる戦争の結末以来、環境の変化と内部的要求との必然から、かねて信仰的な同志の團結と活動の必要が叫ばれてゐたが、去る四月二十四日、熊本に於て舊ルーテル教會に属する九州在住の教職者十五名が會合協議したのを契機として、急速に進轉するに至り、一変に六月十日、東京に於ける會合となり、遂に「ルーテル會」の結成を見るに到った。

即ち、四月二十四日の會合には、九州在住の教職者の大多数は時節柄、各自手辨當にて、熊本市に集合、現状打開の為、極めて眞剣に討議し、左の通りの申し合わせをした。

- 一、我らはルーテル主義信仰の確立を同信仰に基く教會の拡充に邁進せんことを期す。
- 一、右の精神を貫徹せんが為、教團の改組に努力す。
- 一、以上の目的をもつてルーテル教會再建のため、速かに責任ある宣教師の派遣を希望す。右の申し合せは、直ちに米國ミッションボードに送られると同時に更に之が具体化を計るべく鋭意研鑽努力中であつたが、六月九日ペンテコステを期して東京に開かれた全国信徒大會を機會に、翌、六月十日、舊ルーテル神学校に上京中の教職を主として集合し極めて意義深い礼拝を行ひ、聖餐式を守り續いて續いて晝食後より、夜九時近くまで種々慎重協議の結果、左の申し合せをなし、所要の委員を選んだ。
- 一、昭和二十一年四月二十四日、九州在住十五名により申合せに依る三項目を確認する。
 - 一、右、三項目を具体化せんがため更に各項目に関し次の如き計画を建つ。
 - イ、前條目的を達成せんがためルーテル主義信仰にたつ教職を以て「ルーテル會」を組織す。
 - ロ、我らはルーテル死後四百年を記念し、廣く我らの主義信仰を宣傳し、眞の福音的信仰に立脚して新日本の建設に邁進せんがため、大傳道並に神学講演会を實施す。
 - ハ、我らはルーテル教會再建のため、日本傳道に經驗のある凡ての宣教師の再來を希望す。更に工場傳道、農村傳道等の特殊傳道に関して有能なる宣教師をも新たに派遣せられんことを切望す。

右申合せに基き選ばれた委員は左の通りである。

ルーテル會委員	三浦 冢
	岸 千年
	石松量藏
傳道委員	委員長 岸 千年

書 記 田坂惇己
平井 清

右地方協力委員

東 京 青山四郎
関 西 大内弘助
九 州 山内六郎

右の會合に出席した教職者は、二十一名に及び、南の果て、水俣から長沼牧師を始めてとし、最近、蒙疆より引揚られたる牛島牧師等をも加へ、大なる希望と喜びにあふれて各々其の持場に歸った。尚、田坂誠喜氏は唯一人の信徒として出席せられた。今秋より展開されるであろう全国的なルーテル會の活躍こそ、期して待つべきものがある。同期に又、之は信徒の連動として各教會員の発奮努力に待たなければなるまい。

資料引用

ルーテル会誌、1946. 7. 20

JAPAN

The report on Japan was presented by Dr. Swoyer.

1. Since the last meeting of the Board, we are glad to report that three U.L.C.A. missionaries have been “cleared” by SCAP(Supreme Commander Allies in the Pacific) for admission to Japan; their military permits have been received, passports issued, and they have now reached Japan. They are:

- (1) Dr. L. S. G. Miller, who reached Tokyo
August 12, 1946.
- (2) Miss Martha Akard, who reached Kobe
August 22, 1946.
- (3) Mrs. L. S. G. Miller, who reached Tokyo
October 16, 1946.

These three missionaries are now living in Kumamoto.

Three other missionaries have also been “cleared” and are ready to leave for Japan. However, the long — continued shipping strike has made it impossible to secure passage for them to Japan. They hope to be able to leave within the next few weeks, if shipping conditions improve. These three are:

- (1) Dr. A. J. Stirewalt, who will reside in Tokyo.
- (2) Miss Maud Powlas, who will reside in Kumamoto.
- (3) Miss Annie Powlas, who will reside in Kumamoto.
for the present.

Dr. Miller, during the two months or more that he has been in Japan, has sent the Board many full letters, describing the present situation. He emphasizes the warm fraternal welcome which he and Miss Akard received from the leaders of the Lutheran Church and the heads of our institutions in Tokyo and Kumamoto. Miss Akard, after her arrival in Kumamoto, also reported a warm welcome and mentioned the encouraging fact that both the Girls' School(Kyushu Jo Gakuin) and the Boys' School(Kyushu Gakuin) have large enrollments, 750 girls and 1200 boys respectively. In the Colony of Mercy at Kumamoto (Ji Ai En), she also reports that there are at present 45 children and 15 old folks. They also reported much destruction by bombings and fire of church property in Tokyo, Nagoya, Fukuoka, Kumamoto and elsewhere.

Missionary homes in Fukuoka, Saga and Kumamoto have either been sold or destroyed. All other property is in serious need of repairs, including paint. But building materials are unobtainable and the present rate of exchange is unfavorable, too.

All missionaries who return to Japan must take with them a quantity of foodstuffs, sufficient for two or three months. Additional missionaries have been recommended through the FMC and the Commission of Six in Japan for "clearance." However, our homes for missionaries in Japan are few. It is almost impossible to rent or build now. So it seems likely that we will only be able to send a few more missionaries under present circumstances.

An appropriation of \$10,000 has been received from the American section of the Lutheran World Federation, in response to the Board's request at its June meeting, for relief and rehabilitation, primarily for Lutheran, in Japan.

Through the FMC we were able to put in our order for \$7,840 worth of surplus food supplies of the U.S. Government in Japan. These will be used for relief for the Japanese, and also to aid the missionaries in solving their food problem.

2. In his first letter, after preliminary conferences with the Japanese pastors in the Tokyo area, Dr. Miller states that most of the leaders of the Lutheran Church in Japan seemed to be in favor of re—establishing again the Lutheran Church in Japan.

Although the first official meeting of the Lutheran Church will not be held until November, he found that the great majority of the pastors both in Tokyo area, and in Kyushu were all in favor of again constituting the Japanese Lutheran Church, as an Associate Synod of the U.L.C.A. They aim to retain some sort of relationship with the Church of Christ in Japan(Kyodan) in a Federation, if its new Constitution makes that possible.

They pray that the U.L.C.A. will continue to support and help them in this difficult task. For it will be a heavy and difficult task to gather the scattered Christians; rebuild the destroyed churches and parsonages; meet rising costs of living; and expand evangelistic endeavors in postwar Japan. They asked for some guidance from the Board as to the likely attitude of the U.L.C.A. in helping them. The Cabinet of Secretaries approved a reply to Japan assuring the Japanese Lutheran leaders that the U.L.C.A. would view favorable their efforts to re—establish the Lutheran Church in Japan, and would aid them financially to the limit of our ability.

Another request was made by the Japanese leaders through Dr. Miller. They deplore the fact that their supply of the Common Service Book, and Catechism in Japanese is completely exhausted. Therefore, they inquire whether it would be possible to have new editions of these two church books published by photogravure process here in America. They require an edition of 3,000 copies of the Common Service and 5,000 of the Catechism.

With the increased enrollments in our schools, Dr. Miller also desires a special appropriation of \$400 with which to procure in Japan sufficient copies of the New Testament in Japanese, so that each student in the Kyushu Gakuin may be given a copy. They are now available in Japan, through the efforts of the American Bible Society, and cost 33 cents a copy, or three for a dollar.

Voted (1) that we express our joy and give thanks to God that, within one year of the cessation of hostilities, missionaries of the United Lutheran Church have again been permitted to return to Japan, where they have been warmly welcomed by our Christian friends, thus re—establishing again Christian fellowship with our fellow-Lutherans there.

Payer was offered by Dr. Stirewalt.

Voted (2) that we approve in general the reply given by the Cabinet of Secretaries to the leaders of the Japanese Lutheran Church, namely, “the United Lutheran Church in America, through its Board of Foreign Missions, is willing to help in every way possible the re-establishment of the Lutheran Church in Japan” and that we affirm that our Board would look with favor upon the retaining of relationship with the Church of Christ in Japan (Kyodan) in a Federation if its new Constitution makes that possible.

Voted (3) that the Secretary for Japan be authorized to investigate the feasibility of having an edition of the Japanese Common Service Book and the Catechism printed in America by photogravure or other process; and upon approval of such a plan by the Cabinet of Secretaries to proceed the work. The cost of the same to be debited to the Reserve Fund for Japan.

Voted (4) that \$650 be granted to our missionaries in Japan for the purchase and distribution of the New Testament to the students in Kyushu Gakuin and Kyshu Jo Gakuin, the cost of the same to be debited to the Reserve Fund for Japan.

3. The Commission of Six of the Foreign Mission Conference of North America has been serving in Tokyo as a liaison agency between SCAP, the Church of Christ in Japan, other churches and agencies in Japan, and the FMC and the

Home Boards in America. Although we had no Lutheran representatives on this small Commission, they have been very helpful in arranging for the clearance of our missionaries. In fact, Dr. Miller was the first civilian missionary to arrive in Japan and undertake missionary work entirely “on his own,” without the special assistance of the U.S. Army authorities, as had been given previous to the FMC Commission of Six.

Under the auspices of the Japan Committee of the FMC, a Japan Conference was held at Yonkers, N. Y., on September 20—21, which was attended by 90 missionaries and board secretaries. Our Board was represented by Dr. Stirewalt, Miss Annie Powlas, Miss Helen Shirk, Miss Marion Potts, and Miss Ethel Dentzer, all former missionaries from Japan, and Dr. Gotwald. Reports were heard from many Christian missionaries leaders, recently returned from Japan, telling of present conditions in the Church there and the opportunities for the Gospel in postwar Japan. Future plans for the continuance of the Commission of Six are under consideration by the FMC, in view of the increasing number of missionaries who are returning to Japan, and other factors in the present situation.

Voted that we continue to cooperate with the Commission of Six in Japan, in accordance with the resolution of the Board adopted in November 1944; namely, “That our initial investigation and study of re—establishing mission work in Japan be made in full cooperation with other Boards and with the interdenominational agency; but that we reserve the right to take independent action when and in such ways as may best serve the interests of our church.”

4. However, before deciding upon further steps in our program for work in Japan, we must await fuller official information from the Lutheran Church in Japan, regarding their desires for the future, and their recommendations regarding their relations with the Kyodan in Japan. Such decisions must be based, in part, at least, on the future constitution of the Kyodan, which is only now being determined by the body itself. Our Lutheran leaders plan to hold their first official Church meeting in November. Just as was done in September 1944, it seems wise again, to convene a Conference on Japan to consider future policy for the work there.

Voted that we authorize the Cabinet of Secretaries to arrange for a Conference with representative Japan missionaries in America, the officers of the Board, the members of the Japan Committee and two representatives of the W.M.S. and report its findings to the next meeting of the Board.

5. Dr. Miller has reported that many of our Lutheran churches in Japan have been destroyed by bombings or fire.

No estimates of rebuilding costs are yet available. But Dr. Miller says, "A rather large amount will be needed for building new churches at various places as soon as this may be possible. Some plan for this purpose should be approved by our Church when it next meets, likely in November. As I see it, there is a minimum of three places where churches should be built very soon—Tokyo(Okubo), Fukuoka and Kumamoto. Of course, places like Nagoya and Omuta where we have had work for years and where we had church buildings entirely wiped out would seem to be among the first to need help."

List of Churches Destroyed

Tokyo—Okubo, with parsonage
—Ebara, with parsonage
—Koiwa, with parsonage
Nagoya—2 churches
Kumamoto—church
Fukuoka—church
Omuta—church
Shimonoseki—church and parsonage

Recommended that we appeal to the Allocation Commission of the U.L.C.A, for \$50,000 as an initial allocation for Rebuilding Destroyed Lutheran Churches in Japan. – Referred to Finance Committee

6. Through the Foreign Missions Conference and the Church World Service, we and other Protestant Mission Boards having work in Japan have had the opportunity to purchase, at less than cost, a large supply of foodstuffs, surplus supplies of the U.S. Navy in Tokyo. These foodstuffs we propose to use for two purposes. First, as relief supplies to be administered by our missionaries in Japan for the Japanese needy, and secondly, as foodstuffs for our missionaries' own use. The latter amounts, of course, will be paid for by the missionaries from their salaries, as they use the same.

However, the payment for our share of these of these supplies, namely \$7,840 had to be made at once, subject to adjustment when final reckoning is made, depending on what portion are used for relief and what portions for the missionaries.

Voted that we approve of the payment of \$7,840 for the purchase of food supplies in Japan for relief purposes and for our missionaries' use, to be

debited to Reserve for Japan and/or the accounts of missionaries.

At the end of the Japan report, Dr. Nielson, representing the United Evangelical Lutheran Church(Danish), spoke of the merger of the two missions and referred to the missionaries of his Church, Revs. D. G. M. Bach and J. M. T. Winther, who besides himself constituted the staff at that time. He raised the question of voting, thinking that he had the right to vote only on matters supported by his Board, but he was assured that he has a vote on all matters relating to the work in Japan.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
November 11-13,1946, P186-190

資料 146 伝道計画に関する建議案

20. 傳導計画に関する建議案

(再建準備委員会提案・説明者内海氏)

「我等は日本福音ルーテル教會再發足に当りルーテル主義信仰に立つ教會建設のため左の傳導計画をなす。

- 一、 海外より有力なる神学者招聘しルーテル主義神学を斯界に顕揚することに努む。
- 二、 地域的教會役員修養会の開催
- 三、 文書傳導の計画
- 四、 教職の神学的研鑽を助長せしむる会の開催
- 五、 聖職献身の運動

尚再建紀念大傳導実施に関する決議案、石松量造氏他九名により提案

「慘憺たる苦難にあへぐ祖國再建の鍵は一心にかゝって基督の福音を信じる信仰にあり、吾等は教會の再建に當って其の使命と責任を痛感す。伾て吾等は茲に新しき力を結集して広く教會の内外に一大傳導戰を展開し一は以て新日本建設の實現を期せんとす。

本田氏説明大体に於て再建準備委員会提案の傳導計画に含まれるべきものであるから両者を一括決議員に一任。

27. 決議委員報告

本田氏より傳導計画案に就て再建準備委員会提案の傳導計画を認め實施内容の第六として「教會再建紀念傳導実施」の一項を加う旨發表され承認。

資料引用

再建總會記録、1947.1.23-24

The latest letter from Dr. Miller, dated January 15, reads in part as follows:

“The Committee of Seven preparing for our meeting next week has been doing good work and feel sure we will have a good meeting. The impression continues that the only thing to do is to re—organize our Lutheran Church. There may be one or two with objections to such an action, if it involves a withdrawal from the Kyodan. But, we will not speculate, will just wait to see. I feel sure the right thing will be done. I will add that our men do not want to withdraw from Kyodan, if it is at all possible to work out a plan of cooperation with the Kyodan on the basis that we are permitted to carry on as a Lutheran Church. That will be the problem, for the leaders of the Kyodan emphasize the point of one united Church and don't seem much interested in anything else. They seem to have forgotten all about the old block system under which we entered the Kyodan at first, by which the various Churches could maintain self—respect as Churches and yet be a part of the Kyodan..... A federation is what we want, and we will continue to try to secure such an understanding so that we can continue as a part of a federation.”

On January 24, we received the following cable sent from Japan after this meeting of the Japanese Lutheran Church:

“Convention unanimously voted re—establishing Lutheran Church on basis previous constitution anticipating cooperation within Kyodan. Kishi elected President. Seminary to be re—established. Urgent plea for more missionaries. Miller—Peery.”

Voted that we send word to Japan (1) that we rejoice in the fact that the convention of the delegates of our Church in Japan have voted unanimously to re-establish the Lutheran Church; (2) that we await with interest fuller elaboration of the anticipated cooperation within the Kyodan; (3) that we request the Lutheran Church in Japan to send us full information regarding the following; (a) details of the plans for the re—establishment of the Lutheran Church; (b) details of the plans for re—establishing our Seminary; (c) details of immediate needs of more missionaries, including number, major work, and qualifications; (d) their financial needs for buget and rehabilitation; and (4) that in pursuance of the action of the Board in November, a conference on Japan be held as soon as possible.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, February 3-5, 1947, P34

JAPAN

The Report of the Japan Committee was presented by Dr. Yost.

At the time of our last Board meeting, we had just received word by cable of the Re—organization Meeting of the Lutheran Church in Japan, held in Kumamoto on January 23, 24, 1947. We did not have any detailed description of the meeting nor of the actions which were taken. On the very next day after the adjournment of our Board meeting, we received Dr. Miller's letter describing the Convention, and giving us some of the actions of the Convention.

He wrote, "We had a very inspiring Convention on the 23rd and 24th of January. The spirit of the whole Convention was very fine. There were 21 pastors present and 13 lay delegates. This included all of our pastors who could come, except one. The number of lay delegates is not large, but we think it a very good representation considering the fact that travel these days is almost impossible, and also because of the disorganized condition of some of the congregations and the weakened condition of all the congregations. At very fine evangelical Lutheran sermons."

Here are the resolution adopted, and some brief comments thereon by Dr. Miller:

1. "Whereas, we interpret the Kyodan as a federation of Churches, and not as a Church founded on one confession of faith,

Be it resolved, that we organize the Evangelical Lutheran Church in Japan with the purpose of establishing the Church and congregations found upon the Lutheran faith and practices, and to advance its cause."

Comments by Dr. Miller:

The first action taken was the unanimous adoption, by a standing vote, of the above resolution submitted by the Committee on preparations. While standing, the Convention was led in prayer by Rev. Hirai. This action was taken with the understanding that we try to remain in the Kyodan if possible, and seek to cooperate in the activities and work of the Kyodan.

2. “Whereas, there was not sufficient time to draw up a constitution and by—laws for organizing the Evangelical Lutheran Church in Japan.

Be it resolved, that we adopt the constitution and by-laws of the former Evangelical Lutheran Church in Japan for the time being, and that we elect a special committee with the institution that they make necessary revisions in accordance with the spirit that has brought about this new organization of the Lutheran Church in Japan.”

3.“Be it resolved, that we establish a Theological Seminary in order to educate candidates for the ministry of the Evangelical Lutheran Church in Japan.”

Comment by Dr. Miller:

Explanation: This dose not mean the immediate separation from the Japan Theological Seminary, with which we are at present cooperating. We intend to put this into effect when possible in the future.

4.”Whereas, we recognize the necessity of relocating pastors and readjusting parishes as soon as possible,

Be it resolved, that we authorize the Executive Committee elected at this Convention, to study the field and carry out the plan they may make.”

5. “Whereas, we recognize the need of reconstructing churches destroyed by war and repairing others at the earliest possible date,

Be it resolved, that we begin a campaign to gather funds for this purpose, with the goal of two million yen as the first objective, emphasizing the spirit of securing as much locally as possible; and that we elect eight members as a special committee (4 clerical and 4 lay delegates) for this purpose.”

6. “Whereas, we plan to establish the Church founded upon our Lutheran faith,

Be it resolved that we adopt the following evangelistic program:

- (1) That we invite influential theologians from abroad to make known Lutheran Theological in the Theological circles of Japan.
- (2) That we hold religious conferences for lay officers of the local congregations to strengthen their Lutheran faith.
- (3) That we plan for evangelism by means of literature.
- (4) That we hold conferences for ministers and evangelists to promote

their study in theology.

(5) That we start a movement to secure more men for the ministry.”

7. On behalf of the Japan Lutheran Conference in Convention assembled, the Executive Committee was authorized by a Convention resolution to send the following letter to the Board.

“To The Foreign Mission Board of the United Lutheran Church in America:

On the 23rd of January, 1947, we, representing the Lutheran Congregations in Japan, decided by unanimous vote to re—establish the Evangelical Lutheran Church in Japan. We not only rejoice ourselves, but also deem it our grate pleasure to report to the Foreign Mission Board of the United Lutheran Church in America that the Evangelical Lutheran Church in Japan has already taken this new step with hope in God and determination in our hearts. On this occasion we wish to express most heartily our sincere appreciation for the fine understanding, constant sympathy, and manifold encouragements the Foreign Mission Board has shown in our new work.

Also, in the name of the Convention assembled, we want to thank the United Lutheran Church in America, through the Foreign Mission Board for having sent to us as soon as the war was over, Dr. and Mrs. Miller, Miss Akard, Dr. Stirewalt, Miss Maud Powlas, and Miss Annie Powlas to help our Church in need.

We have renewed our spirit, and with God’s blessing are determined to build and develop the Church founded upon Lutheran principles. We request your prayers and cooperation.

(Signed) Chitose Kiski, President
Atumi Tasaka, Secretary
Evangelical Lutheran Church
in Japan.”

Dr. Miller also reports the following officers were elected:

President, Rev. Chitose Kiski
Vice President, Rev. Hirotsuke Ouchi
Secretary, Rev. Tasaka Atsumi
Treasurer, Rev. Shiro Aoyama

Additional members of the Executive Committee:

Rev. Kiyoshi Hirai
Rev. Sueki Utsumi
Rev. Yukichi Makise
Rev. Takeo Okamoto

Dr. Miller continues, "The new officers and members of the Executive Committee are all new, except Rev. Hirai and Rev. Kishi. They are a good bit younger than the former leaders of the Church. However, they are all good men, have been ordained for a number of years and should develop into good leaders in the re—organized Church. We have confidence in them, but we may have to have a little patience until they get broken into the way of running the business of the Church.

"In regard to the standing of missionaries in the Japanese Church, I will say that we were all, including Mrs. Miller, considered as voting members of the Convention. This is a little more liberal than the former constitution granted. According to that constitution, the ordained missionaries were eligible for election to office the same as the Japanese. But no missionary was elected to the Executive Committee, which is not surprising. I do not think there was any real feeling against such an election, but I think they have the feeling that it is a new Japan and that the Church therefore should be Japanese. I appreciate this feeling and am willing to trust them in it. The President and all members of the Executive Committee have been extremely courteous and most considerate in all they have done."

At the first meeting of the Executive Committee held in Tokyo on February 19 and 20, Dr. Miller and Dr. Stirewalt were both elected as regular advisory members of the Committee with the purpose to have them attend all the meetings of the Committee, and with a right to vote.

1. Under the auspices of the Foreign Missions Conference of North America, the Japan Committee of that Conference is arranging to send to Japan a deputation on behalf of all the boards with work in Japan. Although several boards desire to send their own deputation separately, SCAP and General MacArthur are not inclined to look with favor upon scattered visits by individual board deputations for the following reasons:

- (a) Scarcity of food and shelter which means sharp limitations on visitations from abroad,
- (b) SCAP wishes to deal with one responsible body rather than with various groups individually,
- (c) SCAP insists on keeping down numbers in any foreign visitation.

Our Board has the opportunity to send one individual on this deputation which will visit Japan during July and August of this year and meet in Japan a nationwide conference of the Protestant Christians of Japan and also be able to visit respective mission fields. We would be expected to pay the deputation expenses of our member and the expenses for our missionary attendants at this conference.

Voted (1) that our Board approve of sending a representative of our Church to Japan as a member of this deputation in the summer of 1947.

(2) that the Executive Committee of the Board select our representative on this deputation.

2. The Commission of Six in Tokyo act on behalf of the Foreign Missions Conference of North America and all Protestant churches having work in Japan. Recently two vacancies have occurred and the Japan Committee of the Foreign Missions Conference voted to ask the Lutheran Church to nominate someone as a member of that Commission. Dr. Knudten has received his military permit to return to Japan and has been preparing to go later this summer. After consultation with him, he has agreed to speed up his plans to enable him to reach Japan by the end of June and assist in the work of the Commission of Six as they plan for the visit of the deputation. He would also employ most of his time for other duties of the Commission's work, but at the same time would have opportunity to assist in our own Lutheran work in Tokyo and other parts of central Japan.

Voted that the Board agree to Dr. Knudten's serving as a member of the Commission of Six in Tokyo and agree to bear his travel and salary expenses while he is engaged in this work.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, May 12-14, 1947, p124-p127

資料 149 再建に関する声明

日本福音ルーテル教會再建に関する聲明

昭和十六年日本基督教團の成立を見るや我が教會は舊第五部として之に参加し今次の大試練に際しては未曾有の苦難の中に猶よくルーテル主義信仰を固守し、之を貫き通して來た。

然るに時局の進展により部制は解消せられるに至り、更に終戦と共に新しい世界に直面し、新たなる責任を自覺した時、このまゝ教團内に在つて果して我が教會の信仰を維持確立し教會の使命を全うし得るか否かに對して深い反省がなされ昭和二十一年春以來屢々相寄つて協議研究につとめて來た。

眞の教會の存立は聖言の誤りなき宣傳と聖禮典の正しき執行とにあるものなる事は宗教改革以來の我が教會の信條的傳統である。従つて眞の教會の合一は之等の點に於ける一致に基くべきものであつて信仰の一致なくして、眞の教會合同はあり得るものではない。

我々は今日の疲弊せる教界の現状を視、我らの託せられた重大なる責務を思ひ、昭和二十二年一月熊本に會して實質的に教會として新發足すべきことを決議した。

然し乍らもとより眞の公同教會の實現は我らの理想するところであり、且つ現下の非キリスト教的勢力の跳梁に抗する為には凡ての教會の協力と團結を必要とすることは言ふを俟たない。故に我々は如何にかして教團の内に止りつゝ教會を組織し協力一致教會本來の目的達成に當らんと志し、委員を設けて今日迄教團當局と種々接渉して來た。

然し教會一信條を目指して進みつゝある教團では如何なる形に於ても教團内に教會を作ることが不可能であることを明瞭に認めるに至つた。故に遂に今日熊本に於て臨時總會を開き組織上教團外に出でて再び日本福音ルーテル教會を組織することを決議するの已むなきに至つた。

今や我々は宗教改革者の眞摯なる福音的信仰に励まされ、福音ルーテル教會の歴史的信仰に固くたち自主的にして強固なる團結を保ち、盛んなる福音の傳道と主の教會の擴充のため邁進せんとするものである。

多年に亘つてわが教會が享有して來たキリスト教諸團體との友誼は之によつて變ることなく此後と雖も永く繼續することは教會の念願であつて、斯くして祖國日本及世界的に聖國の來らんために努力せん事を期すものである。

昭和二十二年十一月十三日

日本福音ルーテル教會

資料引用

臨時總會記録、1947. 1 1. 1 3

JAPAN

1. The Japan Lutheran Church at its recent meeting held in Kumamoto, Japan, took action to withdraw from the Kyodan. The Lutheran pastors were convinced that they should have an independent Lutheran Church and after very prayerful and deliberate consideration, they unanimously withdrew. (See Appendix E for Declaration.)

The Japan Lutheran Church will cooperate with all the other Protestant groups in the greater evangelization task before them and they are desirous to have a share in the work of the Protestant groups. We are striving to establish the Lutheran Church in all parts of the world and in order that the church in Japan might not have a local connotation, we desire to ask the Church to consider the name, "Evangelical Lutheran Church in Japan," as the English translation.

Voted that we request the Executive Committee of the Japan Lutheran Church to reconsider the English translation of the name of the church and suggest it be changed to "The Evangelical Lutheran Church in Japan."

2. Inasmuch as the Japan Lutheran Church is recognized by the United Lutheran Church in America as an Associate Synod and is therefore entitled to send delegates to the Convention of the United Lutheran Church,

Voted (a) that the Japan Lutheran Church be requested to elect two delegates, one a clergy man and one a layman at an early date, to attend the Convention of the United Lutheran Church in Philadelphia in October, 1948,

(b) that the Board of Foreign Missions pay the expenses of a delegate from Japan to the Convention of the United Lutheran Church in Philadelphia in October, 1948, same to be debited to the Reserve Fund for Japan.

3. All available housing facilities in Japan seem to have been acquired by missionaries and if we are to provide homes for our missionaries going out

during this year, it will be necessary that we purchase land and erect houses. After careful consideration of the use of pre—fabricated houses, we have been requested to purchase two houses to be shipped to Japan. If they are found satisfactory, it may be that we shall have to purchase this type of house for all the missionaries.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
January 19-21,1948, P22

JAPAN

INFORMATION

Two young men were ordained at the Annual Meeting after many years of no ordinations. This ceremony was most encouraging to all the older pastors. Only two students are in the Seminary but it is hoped there will be at least four next year.

The missionaries organized themselves informally into the Lutheran Missionaries Association. The purpose of this group is not to revive the former "Mission" but to have the semblance of an organization for mutual assistance to one another and for items of business concerning them. The officers are: Rev. L. S. G. Miller, D. D., President; Rev. A. C. Knudten, Ph.D., Secretary; and Rev. A. J. Stirewalt, D. D., Treasure.

We wish to report that Misses Helen Harder and Maya Winther arrived safely in Japan November 12, 1947, and Miss Harder is now living in Najima, a small village near Fukuoka; Miss Winther has located in Saga. Both missionaries are renting two small rooms in the homes of Japanese. Mr. and Mrs. Sedoris McCartney sailed on January 3, 1948, and will be located in Kumamoto. Mr. McCartney will teach in the Boys' School.

The following appointments have been made:

Rev. and Mrs. Harold Deal – Language study in Tokyo
Rev. Lloyd Neve – Language study in Tokyo
Rev. and Mrs. Alsdorf and family – Rural work in Nagoya
Miss Mary Wood – Temporarily at the Girls' School, Kumamoto
Miss Virginia Aderholdt – Teacher at the Girls' School, Kumamoto
Rev. and Mrs. Huddle – Osaka

A request for clearance for Rev. and Mrs. Wilson and child for them to leave Shanghai and go to Japan has been made. It is hoped that they will be permitted to go to Japan sometime during the coming months. They will live temporarily in Kumamoto but will be assigned to work in Fukuoka.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
January 19-21, 1948, P26

4. A request from Japan for the building of a second residence for a missionary in Tokyo at a cost of \$10,000 was received.

Voted (a) that in view of the purchase of one missionary house in Tokyo, and also the meeting of the Lutheran Church in Japan in November, and the proposed visit of a Secretary in March 1949, action to be deferred on the building of a second missionary house in Tokyo.

(b) that the Lutheran Church in Japan and the Lutheran Missionaries Association in Japan be requested to give further study to the type of residences for missionaries to be built.

(c) that the Lutheran Church in Japan be requested, in consultation with the Lutheran Missionaries Association, to make a study of the placement of missionaries in any given area and particularly in the assignment of a second missionary in Tokyo in relation to the building of a second mission house.

5. The following is a list of the repairs and new buildings needed by the Church in Japan:

<u>REPAIRS</u>	Yen
Tokyo— Tonon	50,000
" — Seminary Church	50,000
Moji	25,000
East Kobe	100,000
Noagata	30,000
Ogi (Kindergarten building)	15,000
Kurume	30,000
Hita	20,000
Kobe	20,000
Saga	415,000
Hakozaki	10,000
Yawata	20,000
	785,000

NEW BUILDINGS

Tokyo – Okubo

1,911,000

“ -- Ebara -----	1,750,000
“ -- Koiwa -----	2,300,000
Nagoya – Parsonage -----	500,000
Hakata -----	2,975,000
Shimonoseki -----	630,000
Amagi -----	400,000
Karatsu -----	500,000
Saga -----	500,000
	11,466,000

New Buildings (con't)	Yen
Brought forward -----	11,466,000
Ogi -----	50,000
Hita -----	40,000
Omuta -----	1,300,000
Kumamoto – Suido Cho -----	1,700,000
“ -- Murazono -----	1,300,000
“ -- Oemachi -----	1,500,000
Hakata – Parsonage -----	810,000
Ebara -- Parsonage -----	810,000
Takase – Church and Parsonage -----	1,500,000
	20,456,000
Total for repairs and new buildings	21,250,000

The building program for Japan as stated above is an extensive one and it does not include any residences for missionaries, kindergarten buildings nor any buildings for places where a church has never had a permanent building. The exchange rate has enabled the church to get large returns for the dollar but prices have increased during the past three months, so the prices quoted herein are no longer correct. In order that the church might be able to plan its rehabilitation program adequately for the year 1949 it is necessary for them to know how much money might be expected from Board.

Voted(a) that a land and building fund for churches and parsonages be set up and that the amount of \$50,000 be placed on the priority list of the 1949 Allocations Commission.

(b) that a sum of \$30,000 for missionary homes, buildings for schools, and social work be requested from the 1949 Allocations

Commission.

(c) that we request the Women's Missionary Society to release a definite amount from their funds for rehabilitation work in Japan to be added to the land and buildings fund for 1949.

(d) that these funds be sent to the field as requested for the Lutheran Church in Japan.

6. The Lutheran Church in Japan, reorganized in 1947, will have its second annual meeting November 19 to 24, 1948. The Board of Foreign Missions rejoices with them as they make progress in the establishment of the work and in the fact that five evangelists have been recommended for examination and ordination.

Voted that a cable of greeting be sent to the Lutheran Church in Japan and that the church be commended on the new candidates for ordination.

INFIRMATION

1. Four pre-fabricated houses arrived in Japan and have been located as follows:

Hakozaki—Hakata	———	Miss Helen Hader
Fukuoka	———	The Rev. Donald Wilson
Saga	———	Miss Maya Winther
Nagoya	———	To be assigned

and two combination chapels and parsonages at
Nagoya
Shimonoseki

2. The Rev. J. P. Nielsen, representative of the Board of Foreign Missions of the United Evangelical Lutheran Church reported that his church is raising a fund of \$7,000 for a missionary residence in Japan.

3. The following Japanese are now in America: Rev. Chitose Kishi, President of the Lutheran Church in Japan, who is on a very intensive itinerary which will take him to many of the Synods of the ULCA. He has been called home on an urgent request of the Church for the annual meeting of the church.

The Rev. Atsumi Tasaka is now a student at the Southern

Theological Seminary at Columbia, S. C.

Miss. Tokiko Kawagiri is a student at the the Biblical Seminary in New York.

4. The following list gives the locations of churches in Japan before 1940:

Tokyo – Okubo	※Church and Parsonage – destroyed
– Ebara	Church and Parsonage – destroyed
– Tonan	Church and Parsonage – repaired
– Honjo	Church in Widow’s Home – destroyed
– Koiwa	Church in rental building
– Asagaya	Church and parsonage in one building Rented
– Seminary chapel	
– Hodogaya (Tokohama area)	rented building
※	in process of building
Nagoya Area	
Toyohashi	Church in rental building
Hamamatsu	” ” ”
Nagoya – Ozone	Rented building destroyed
– Chikusa	※※Church and parsonage – destroyed
Hiroshima	Church in rented building – destroyed
Kyoto	Church in rented building ”
	Second place– Church and parsonage – rented building
Osaka	※※※Church and parsonage
Kobe – East	※※※Church and parsonage
Second place	※※※Church and parsonage
Tsukaguchi	Rented building
Ashiya	” ”
Kobayashi	” ”
Shimonoseki	※※Church and parsonage – destroyed
Moji	Church and parsonage
Naogata	※※Church and parsonage
Takase	Rented building
Nobioka	” ”
Karatsu	” ”
Kanezaki	” ”
Yawata	※※※Church and parsonage
Hita	Rented building
Hakata	※Church and parsonage – destroyed
Hakozaki	Use kindergarten building
Kurume	※※※Church and parsonage – destroyed

Saga	※※※	”	”	”
Ogi	※※※	Use kindergarten building		
Kumamoto – Suido Cho		Church and parsonage	– destroyed	
		Parsonage restored		
– Oe		Use school chapel		
–Murazono		”	”	”
—Kuwamizu		”	chapel on Jiaien Campus	
Kagoshima		Rented building		
Minamata	※※※	Church and parsonage		
Omuta		”	”	” – destroyed

※※ Pre-fabricated building
 ※※※ Repaired

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
 November 8-10,1948, P225-228

「我らは總會に於て自給獨立、輝かしい熱意に燃へて總員起立、左の決議を拝読した。特に昭和 23 年 11 月 24 午前 11 時。昭和 23 年田の面は色ずき利鎌を持てる此の日本傳道の絶好時機に際し、私共は熱い祈と慎重な審議を重ねて教会憲法規則を修正し、茲に私共の愛する日本福音ルーテル教会は左の如くその再建に力強い發足をなした。

- 一、私共は先ず憲法の宣言に述べたように、教会の首である主イエス・キリストに對する忠誠と、聖言の正しく宣傳えられ、聖禮典の正しく執行される所の教会の建設との誓を新しくするものである。
 - 二、私共の教会は使徒と預言者との基の上に建てられ、キリスト・イエスを隅の首石とする公同教会に属し、宗教改革による光輝ある遺産を継承したる教会であるから、信仰を同じゆうする世界の諸教会と交じりを厚くし、相携えて福音的キリスト教による世界教化の實を挙げんことを期する。
 - 三、主の現在を確信する私共は、殊に聖餐の禮典を重んじその厳肅なる執行を怠らないことを期する。
 - 四、私共の目標は自給、自治、更に上よりの力をうけて絶えず生長發展し、全國教化乃使命を達成し得る教會の建設である。
 - 五、私共は此の目的を達せんが為に今回採用された憲法規則に従い、教會總會を中心に一致團結秩序を保ち協力の實を挙げんことを期する。
 - 六、私共は進んで此の傳道の最好機會に乗じ、大いに新傳道地の開拓に努力する。即ち教職に在る者は自己担任の教会を守るの外、同一地區の諸教会と協力して、新傳道所の開設に励み、宣教師は数個の教會を應援する外、自ら主任教師となつて、一傳道所又は一教会の担任者として奉仕さるる道を講ずること。而して信徒は不斷に個人傳道に励むと共に、よく福音の證人となつて、宣教師の数少い事を補填することを決意した。
 - 七、本總會は斯の如く教会の自給獨立を固き決心と熱き祈りとを以て計畫した。故に各個教會は來るべき各個教会の總會に於てその具体的目標を定め、自給教會の達成實現を能う限り速かに計る事を希望する。
 - 八、從來宣教師会の事業であつた教育事業や社會事業は今度本教会との密接な關係に於て經營される事となり、殊に神学校の經營は私共の責任となつた。故に各教会は之等の事業のために祈りを捧げると共に、各個教會の能力に應じ、年々其の經營費の一部を負担すべきである。
- 今や憲法規則は新に修正され、教会自給の目標は決定し、神学校問題亦其の緒についた。聖父聖子聖靈なる神よ常にわれ等と共に在し、われ等を助け導き、聖名の榮えを顕わさせ給え。アーメン。」

資料引用

「るうてる」1948. 12. 15. 1 頁

六八 決議委員報告 三浦氏

宗教法人組織の件

- 一、 日本福音ルーテル教会(宗教法人)
組織の為 日本福音ルーテル社團に対して其の財産中、宣教師住宅・土地・建物を宣教師会に残りの全財産を日本福音ルーテル教会(宗教法人)に委譲を求むる事。
- 二、 之に必要な憲法改正に関しては本總會に於て宗教法人組織の曉に於ては本教会に属する財産及本教会に委譲せられた財産は宗教法人である「日本福音ルーテル教会が所有する」と改正の議決をなす事。
- 三、 日本福音ルーテル教会教團規則の作成は常議員会をして適当な措置を執らしむる事。原案通り承認。

資料引用

總會記録, 1948. 11. 20-24. P17-18

(三) 神学校に関する件

- (イ) わが神学校の土地、建物を昭和二十五年三月末日まで現在のまゝ教団立神学校が使用する事を承認し九州学院財団に連絡する。
- (ロ) 神学校財団新設について研究の上九州学院財団に対しこの事を申入るゝ事とする。
- (ハ) 校長選定のことは次期總會まで研究考慮の上善処する。
- (ニ) 教団立神学校に於ては明年度予科一年を募集しないがルーテル教会に於ては募集入学させることゝする其の教育に就ては神学教育委員が研究立案することゝする。
- (ホ) 奨学金については神学生を推薦した教会は勿論其他全ルーテル教会に訴へて適当な方法をとるよう立案する。
- (ヘ) 神学校及ルーテル教会本部事務員として京都教会森川氏を採用することゝする。
- (ト) 神学生の宿舎に関する事を青山氏に委嘱し善処させることゝする。

資料引用

第3回常議員会報告,1948. 4. 13-14

神學校委員報告

昭和二十二年十一月日本福音ルーテル教会總會に於て選舉せられたる本神学校委員に委託せられた責務は、神学校が未だ日本基督教団当局の管理下にある現状に直面しつつ、ルーテル教会教職たらんとする学生のために、神学教育の計画を進捗せしむることであつた。幾多の不便にも拘らずこの計画を再建し進展せしむることの必要なるは明白なる事実であつた。

昭和二十二年十二月三日全委員は構内の宣教師館に会合し、我々の直面する諸問題につき熟慮協議した結果、次の諸点を決定した。

- (一) 校舎及び土地の所属関係を明確ならしむ様教団当局の注意を促すこと。
 - (二) 修理の目的のため建築物の状態調査に教団当局の協力を求めること。
 - (三) 教室及び教会事務室用として校内の一室の協力を求めること。
 - (四) 宣教師館はこれをルーテル教会宣教師の専用とする様請求すること。之等の請求の結果に関して次の如き報告をなし得るは喜びである。
 - (イ) 校舎及土地の所属に関する必要な書類は、数ヶ月の遅延の後に当方へ返還され、所有権は日本福音ルーテル教会にあることが明白となつた。
 - (ロ) 修理作業は開始せられ目下進行中である。
 - (ハ) 一室が我が教会の事務所として提供せられた。
 - (ニ) 宣教師館は、数ヶ月後、ルーテル教会宣教師使用のため提供せられた。
- この会合に於て論議せられた今一つの重要な問題は、總會より委託せられた本委員会の権能の問題であつた。之に関しては左の通りに決定された。
- (イ) 本委員会は總會に対し總會閉会中は常議員に対してその責任を負うものである。
 - (ロ) 神学校の開設及び教授の選任、並に教団神学校との協力に関する事項は、本委員会の処理すべき事項であるが、凡ては日本福音ルーテル教会に対する建議提案の範囲を出ざることである。
 - (ハ) 本委員会の職能は、神学生の募集、入学試験の施行、並にその間に於ける神学教育を実施することである。
- 之等の決定に基き次の諸項が決議された。
- (a) 豫科の二ヶ年間に於ける神学生の教育は之を教団神学校に委託すること。
 - (b) 在京ルーテル教会教職者の一週間四時間の補習教育によりルーテル教会の学生との連絡を保つこと。
 - (c) 神学生を東京地方各ルーテル教会に配置して教会生活の実施訓練を受けしむること。

斯くして新計画に基き新しき活動とを開始したが、その結果として昭和二十三年三月十日六名の入学受験者があつた。幸にも之等六名を凡て入学試験に合格無事入学するを得た。然し入学当初に僅かに一名のみの問題であつた健康問題が時を経るに従ひ、三名の問題となり、更に一名の不健康者を見るに至つた。これは実に重

大な問題であつて、如何に之に対處すべきかは今後の問題として残されてゐる。

新入学生は次の通りである。(括弧内は出身教会名)

南里卓志(小城)	内田 哲(佐賀)
建部和夫(八幡)	谷口博幸(直方)
林 宏(八幡)	橋本よし子(水俣)

既に専門学校の卒業生である林君は考慮の結果予科二年に編入せられた。今一人のルーテル教会員吉田実君は既に自費にて教団神学校に於て予科一年を終了したのであつた。現在学生の總数は七名である。

之等七名の学生は毎週二十六時間の授業を受けてゐるが、その他に、基督教会史概説(平井清牧師担当)及び基督教育(クヌーテン博士担当)の課外補充教育を受けてゐる。

前記規定の一週に二十六時間の課程には初歩ギリシャ語(クヌーテン博士担当)も含まれてゐる。本委員会の最初数ヶ月の事業は委員長の東京在住でないことと處理事項がその性質上屢々会合し決定すべきものであつたため、若干の困難を感じた。宿舎、学資、個人事情、奨学金等の諸問題は出来るだけ敏速に決定し実行せねばならなかつた。

三月には三回の会合を催し、教団神学校の桑田校長、左近教授との会談により必要なる問題の解決に資する所があつた。

委員北森嘉蔵氏は一身上の都合により五月末委員を辞せられた。

神戸教会員山田清氏は本年四月十八日神学生奨学金として金二万四千元五百円也を寄贈せられた。委員会は感謝を以て之を受領し、神学生に奨学金として授興しつゝ今日に至つた。記して厚く同氏の好意に感謝の意を表したい。

七月十五日付九州ルーサー・リーグより八百円の寄贈を受けた。衷心の感謝を申上げたい。

校舎裏にあつて従来運動場として使用して来た土地も政府により攝収せらるゝ危険もあり、之を處理せねばならなかつた。之等の問題交渉に青山牧師の援助を得たことは感謝である。我々の請願により該土地も我々の手に還つたのは喜ばしい。この土地に関しては、他に新しい方法を考慮しなければ再び他の目的のため攝収せらるゝ恐れなしとしない。

教団神学校の大学基準の認可請願のために、我が教会神学校の土地建物の使用方申請に就いては教団当局と交渉の結果、次の如く決定した。即ち日本福音ルーテル教会常議員会の推薦に基き、九州学院財團は昭和二十五年三月末日まで日本基督教団にその使用权を許可することになつた。この時期迄には愈ゝ我々としても我が神学生の神学教育のため充全な準備を調へ置くべきは言ふを俟たない。

之等の諸問題を熟慮の結果、この報告を終るに当り本委員会は左の七項目を提案して、總會の慎重なる考慮決定を乞ふものである。

- (一) 本總會に於て神学校長を選任せられたきこと。
- (二) 我が教会の神学教育実施のため新しく財團を設置せられたきこと。
- (三) 本總會に於て、神学校(教授の任定、学制、財政)を設立し、且つ之に関する必要な一切の事項を、日本福音ルーテル教会、九州学院財團、及び北米一致ルーテル教会外國傳道局に対し夫々考慮交渉する充全なる権能を有する委員を選任せられたきこと。
- (四) 日本福音ルーテル教会は、新設せらるべき神学校の学制として、大学基準

案に基き四ヶ年の学制の採用を決定せられたきこと（カレッジの後期二ヶ年と大学院の二ヶ年）

- (五) 神学校入学志願者の資格はカレッジ前期二年を終了せるもの及び之と同等の学力ある者とする。カレッジ前期二ヶ年の課程は適宜のカレッジに於いて学修し得ること。
- (六) 日本福音ルーテル教会の各教会は神学教育の重要性に鑑み次の諸事項の実現に努力せられんことを切望する。
- (1) 有益なる青年の献身を奨励せらるゝこと。
 - (2) 地方教会の年度予算に神学校費の一費目を設定さるゝこと。
 - (3) 財的に有能なる我が會員の積極的援助支持により神学校に神学生奨励金制度を確立すること。
- (七) 神学校を昭和二十五年四月より開校するため次の計画と予算を審議せられたきこと。

(a) 専任教授 六名 講師 十二名

(b) 豫算

教授俸給（六名）	三, 〇〇〇
講師費（十二名）	一, 〇〇〇
事務員及雇傭人（二名）	八〇〇
奨学金（学生二十名分）	一, 〇〇〇
臨時費（図書費、保険費、委員会費其他）	二, 〇〇〇
修理費	二, 〇〇〇
合計	一〇, 〇〇〇

昭和二十三年十一月二十二日

日本福音ルーテル教會

神学校委員

委員長 岸 千年

書記 クヌーテン

委員 スタイワルト

委員 平井 清

資料引用

総会記録, 1948.11.20-24,p55-60

教會發展計畫

- 一、 名稱を「教會發展」とする。
- 二、 標語「他の極てまで主の證人となるべし」
- 三、 主旨 福音を宣傳へ萬人に救を齎す事はキリストに在る者凡ての特権であり責任である。わけても私共福音の眞理に固く立つ者にとっては更に切實な課題でなければならない。

今や傳道の門戸は廣く開け私共には國史に嘗て無い機會が與へられてゐる戦後の思想混亂、社會不安に相繼ぐ道義頹廢の奥に私共は「來りて我等を助けよ」と云う切なる叫びを聞かないであらうか、この時代にあつてこの國にあつて此の教會に連つて居る私共は等しく教會に課せられた歴史的使命を痛感し傳道教育、社會事業の各分野を打つて一丸とし現存せる教會及其事業を擴充し發展せしめ進んで未開拓の地にも普く主の御体なる教會を建設せねばならない。戦災を蒙り損害を受けた諸設備は米國に在る同信の友の物心兩面に於ける援助により着々と整備されつゝあるこの事は私共の感謝に堪へぬ所である。

こゝに於て私共は心を盡し物を献げ私共の最善をつくさねばならない。かくして全信徒は忠實なる主の證人としての責を果たし一方に於ては援助に報いる者となるのである。この意味に於てこゝに本教會發展計畫を樹立し大なる幻を持し一致協力してこれが實現に邁進する事を希望する。

四、發 展 計 畫

(一) 傳 道

- (イ) 各教會は五ヶ年以内に實質的自給達成につとむること、其年度豫算中に傳道費を増加し教會自体の發展に努力する事

特定日献金 顕現節献金——新傳道開始のため

克己献金——傳道のため

宗教改革紀念日献金——神學校のため

クリスマス献金——社會厚生事業のため

神學校維持費其の他特別な献金を奨励し教會内外の愛の奉仕に努め本教會の傳道事業教育事業又は社會事業の發展に參與すること。

- (ロ) 教會の土地の買収建物の建設並びに修理に際してはなるべく其の經費の一割以上を當該教會に於て負擔する事。

- (ハ) 各教會は多數の教職志願者を出すやう努力する事。

- (ニ) 傳道部は信徒傳道者の養成の爲め地區會と協力して少くとも年一回短期神學講習會を開く事

- (ホ) 従來の日曜學校の名稱を教會學校と改め新教育理念に基きキリスト教々育の成果を挙げて挙げて教會の發展に寄與し更に地區會と聯絡して講習會を開き教師養成に努むる事。

- (ヘ) 信徒會ルーサーリーグ及婦人會を援助強化し教會事業に奉仕せしむる事。

- (ト) 新聞傳道を開始シトラクトの出版をなし文書傳道を旺にする事。
- (チ) 各地區はその事情に應じ農村又は工場傳道をなすべき事。
- (リ) 教會の施設は第一に戦火を蒙りたるもの、復舊第二に現存教會施設の整備第三に新傳道地に於ける教會施設に及ぶ事を原則とする事。但し特殊の場合は常議員會議を経てこれを變更する事を得る。

(次の順序は着手順序によるものに非ず)

a. 戦災教會

教會堂 名古屋、下關、博多（以上既済）、熊本、荏原、大牟田（以上未済）。

牧師館 熊本、大牟田（以上既済）、東京、荏原、博多、下關（以上未済）。

b. 現存教會

土地 唐津、甘木、横濱、小岩（既済）、廣島、市川、箱崎、鹿児島（未済）。

教會堂 唐津、甘木（既済）、横濱、廣島、小岩、市川、鹿児島、神水、箱崎、高瀬（未済）

牧師館 室園、唐津、甘木、大江（既済）、神學校、横濱、廣島、小岩、市川、鹿児島、箱崎、高瀬、名古屋（未済）。

c. 新傳道豫定地 東京（數ヶ所）、大阪、名古屋、京都、静岡、濱松、岡山、小倉、大分、長崎

d. 宣教師配置 北九州久留米地方、熊本地方、名古屋各一名。

關西男一名女一名。以上の中一人は宗教々育の専門家を期待する。

(二) 教育

(イ) 教會學校

(ロ) 視覚教育に資する為映寫機幻燈器をなるべく各地區に整備する事。

(ハ) 幼稚園の新設及修理は學校教育法並びに兒童福祉法に適應する必要あるを以て幼稚園委員會に於て調査研究の上適當なる案を具して常議員會に提出せしむる。尚幼稚園指導者として適當なる宣教師の派遣を要請する事。

(ニ) 本教會學生の為出来るだけ速かに東京に學生寮を新設し將來に於て關西にも設置する事。

(ホ) 神學校は來年四月より開校されるにつき現在の校舎、寄宿舎、教授住宅の修理整備を速かになすこと。

(ヘ) 神學校は大學令による學校として認可を受ける必要があるを以てこれに要する施設を完備し教授陣を充實せしめる事を最も必要と認めこれが為に二名の教授の派遣方を要請すると共に教會自ら將來の教授を養成する事とし總會に於て適材を指名し米國に留學せしむる事。

(ト) ルーテル教會に大學設立の事は多年の要望たるのみならず將來教會發展の為極めて重要なるを以て現在直ちに設立する事は困難なりとするものべく速かにその實現を見る様その斡旋方を申請する事。

(チ) 九州女學院來年度四教室増築費用六百拾七萬二千圓（一萬六千五百弗）の支出は一九五〇年度豫算に計上する事。

(リ) 九州學院四教室増築費用一萬六千弗の支出は一九五一年度豫算に計上す

ること。

(ヌ) 九州女學院、九州學院の教育充實の為及現宣教師中任期満了の者あるが為適當な宣教師數名兩校に派遣せられる様要請する事。

(三) 社 會 更 生

(イ) 東京ベタニアホーム戦災後中絶しある以て出来るだけ速かに復讐する事。

(ロ) 本教會社會事業に献身する篤志家養成の為奨學金の制度を設ける事。

(ハ) 本教會社會事業を擔任する宣教師の後繼者を必要とする為社會事業専任の宣教師二名の派遣を要請する事。

(ニ) 米國より養護婦 (パブリック、ヘルスナース) 二名の派遣を要請する事。

(ホ) 大川鐵次氏より提供の申し出ありたる醫療施設を利用し久留米地方に醫療傳道を開始の事。

(ヘ) 慈愛園内に盲人及聾啞者の為ライトハウスを設置する事。

資料引用

第 26 回總會議事録 1949. 5. 3-5, p19-25

大學設置委員會報告

九州學院及九州女學院理事並に教會常議員の代表者を以て構成せらるゝ大學設置委員會は二月十五日委員會を開き外國傳道局に送るべき設置の必要を力説したる書翰を採択し、ガットワルドシャーケ兩氏の出發前に發送する事に決したが遂に間に合わなかつたので日本に於てお渡しする事とした。本大は次の通りである。

尚設置に必要な豫算及年度豫算、敷地の候補地等についても委員に於て調査中である。

委員長 三浦 冢

大學設立に關する傳道局への要請に對し現在は教會の復興につき多大の經費を要するを以て直ちに之を承認すること、困難であるが傳道局は之に對し深き關心を有するを以て、更に詳細なる具体案の提出を求められ岸前總會議長を通じても同様の趣旨を傳達せられた。依て本委員會は重ねて大學設立の急務を力説すると共に、之が實現を見る迄には相當の準備期間を必要とするを以て、今直ちに詳細に亘る具体案を作製することは困難なるも其の第一歩として敷地購入の許可並に教授養成に必要な若干の經費を要請することに決した。

大學設置の必要

日本に於ける有力なる基督教各派は多數の中學校（中學校及高等學校）と共に數個の大學又は専門學校を經營して大に人材の養成に勉めた結果今日に於ては各方面に有益なる多數の人材を有し、傳道上多大の便宜を得つゝある計かりでなく其の經營に属する教育其他の事業に自派の有力なる教師又は指導者を集むることが容易であるのに反し獨り我がルーテル教會のみは多年の要望にも不拘、未だ高等教育機關を有しない為、再建せんとする神學校の豫科教授も、或は九州學院及九州女學院の為にも自派の有力なる信徒たる教師を得る事が困難であつて、基督教主義を其の設立目的としてあるにも不拘其の教師の多數は基督者でなく、従つて十分に其の特色を發揮し得ない状態にある事は甚だ遺憾である。此の一點よりも大學設立の急務なる事は十分に理解して戴ける事と思う九州地區には、メソジスト、バプテスト及び、ルーテルの三派が學校を經營して居るが、バプテストの西南學院及び西南女學院は既に専門學校を有して居り、更に大學設立の準備として七萬坪の敷地を買収して居る。メソジストの鎮西學院は現在は中等學校だけであるが、將來大學設立の準備として十萬坪の敷地を買収し、活水女學院は専門部を有し之を大學昇格の準備として居る。福岡女學院も同様の目的を以て七萬坪の敷地買収の交渉中である。獨り我がルーテルのみが未だ其の段階に達して居ない事は甚だ残念である。

大學設立規準

學制改革に伴ひ大學設立基準が定められ既設の大學も改めて其の査定を受くることゝなつた。敷地、建物、施設と共に一定の基準に適合する必要のあることは無論であるが、特に教授の資格と陣容とに重點が置かれて居るため、多くの學校は着々其の

基準に向つて準備わなしつゝある。既に相當の施設と教授を有した學校は之が設置を申請したが、百四十九校中第一回の査定により認可せられたもの七十九校、不認可三十四校、保留五校、審議未了三十六校となつて居る、認可された學校中佛教系十一校、基督教系十一校で之も申請した全學部が認可された譚ではない。

立教大學（聖公會）文、經	青山學院（メソ）文、商、工
明治學院（日基）文、經	津田塾 學藝、數
金城學院（日學）英、文	同志社（組合）商、工
神戸女學院（組）音樂	同 女（同） 學藝
廣島女學院（メソ）英文	宮城女學院 音樂

ルーテル教會としては一躍基準に到達することは不可能であるから九州學院及女學院高等學校に設置を許されて居るが、二ヶ年程度の専攻科を少なくとも、ヂコニア一、カレチ程度に高め（近くヂコニア一、カレチ程度認可公算は大である）漸次有力なる教授を集め、又之を養成し大學昇格の準備を進める事が最も賢明なる方策であると思われる。校舎も日本に於ける物資不足の現状では到底満足なる建築をなすこと急不可能であり、大學設立の實現を見る迄には、少くとも五ヶ年の歳月を要すると思はれるから、先づ第一段階として大學設立の承認が與へられ、之に必要な敷地を買収し、同時に教授獲得並に養成に着手し之と共に建築費に蓄積して其の準備をなし度いと思う。

一、敷地は前委員會に於て約一萬五千坪と決定したが若し郊外に敷地を求むる場合は價格も低廉になるので將來のため二萬坪以上を購入し度い。

二、敷地の價格は昨年四月一坪六百圓と見積つたのが、現在では女學院付近の畑地でも一坪千圓と言ひ、或は二千圓とも言ひ、日々其價格、上昇し果して何程を要するかは實際の運動を始むる迄は判明しないが、時期を遷延すれば地價の上昇することは明であるから買収も出来るだけ速なるを要する。買収運動を始むるには先づ資金を所有する必要があるので本委員會は大學設置の第一歩として土地買収と教授養成に必要な資金の調達を傳道局に懇請することに可決した。

第一期に必要な資金は、金參千萬圓 敷地二萬坪（坪千五百圓） 金百九拾貳萬圓 教授養成五人分（一人八千圓四年分） 金貳拾萬圓 其他經費
計 參千貳百拾貳萬圓也

尚此以外に建築準備金貳千萬圓（五ヶ年繼續）以上の要請に對する外國傳道局より來訪せられんとする。

ガトワード博士及シャーク姉より明確なる回答を期待し長きを以て至急決定をお願い致します。

昭和二十四年二月十五日 九州學院大學設立委員長 三 浦 冢
エル・エス・デ・ミラー
マーサ・エカード
川 瀬 清
岸 千 年
牧 瀬 雄 吉

資料引用

第 2 6 回總會議事録 1949. 5. 3-5, p93-97

Cooperation in Japan with the Evangelical Lutheran Church

(Extracts from the Minutes of the Executive Board of the ULCA April 21-22,1949)

“After reviewing the developments since the February 7-9,1949, meeting of the Board of Foreign Missions concerning this possible cooperation, the minutes contain the following comment, and record the following action:

“After III, Section 3, of the constitution of the Board of Foreign Missions which is cited above, reads in part as follows: ‘Other Lutheran bodies may, with the approval of the ULCA cooperate with the Board.’ This constitutional provision in harmony with the entire policy of our Church makes it clear that the ULCA or the Executive Board must sanction inter—Lutheran joint missionary undertakings from the outset in addition to approving a total plan of procedure after such a plan has been developed.

Your Committee on Inter-Lutheran Interests therefore RECOMENDS that the Executive Board greet with joy the possibility of a close fellowship with the Evangelical Lutheran Church in a united support of the life and growth of the Evangelical Lutheran Church in Japan; and further that the Executive Board of Foreign Missions to develop a plan of cooperation with the Evangelical Lutheran Church for work in Japan, submitting the same to this Board for final approval.”

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, June 20-22,1949, P154)

資料 160 国際基督教大学設立のための資金援助に関して

Christian University in Japan

The Executive Board reviewed developments concerning this project since June 14-16, 1948, when the Board of Foreign Missions expressed 'its inability to participate in the plan for the establishment of ' this university.

The Executive Board took the following action:

“ In view of the prior claims the generosity of our people which have been approved by the 1948 convention of the Church, including Lutheran World Action and Christian Higher Education Year, the Finance Committee RECOMENDS the adoption of the following reply to the Board of Foreign Missions:

“ Although recognizing that many members of the United Lutheran Church in America will be solicited individually and without doubt will contribute liberally to the establishment of a Christian University in Japan, this solicitation of funds will not have the status of a general appeal of the United Lutheran Church itself.” **ADOPTED**

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, June 20-22,1949, P154

4. The following action was taken by the Executive Committee of the Lutheran Church in Japan at its meeting on October 6-8,1949:

“ Voted that we send to our Board, for its careful consideration, the offer of the “Zaidan”(Board of Trustees) of the Kurume College to transfer to the Evangelical Lutheran Church, without cost, the ownership of all its property, administration, and full possession of this institution, which consists of a Medical College, a Nurses’ Training School, a Hospital, and a Commercial Department, for it to assume and continue as an institution.”

LOCATION: Kurume is one of the largest cities on the Island of Kyushu and is in the center of the work of the Lutheran Church. At present, there is a growing Church, organized by the Danish missionaries, and a Kindergarten which has given service to the people in the community for the many years. Drs. Nielsen, Winther, and Torlaksson served this community as resident missionaries and, at present, Rev. L. Neve is living here. Other denominations at work are Presbyterian, Episcopal, Seventh-Day Adventists, and Roman Catholic.

HISTORY OF THE SCHOOL: This school was founded in 1928 by Dr. Mizoguchi, a prominent surgeon from Fukuoka, whose wife has been a member of the Lutheran Church in Hakata for many years. It was established to provide medical education for students who were unable to get admission to the University Medical School in Fukuoka.

PROPERTY AND VALUE

Land: 27,046 tsubo now owned by the school (1 tsubo is approximately six feet square).

17,575 tsubo being rented from the Government. This property, on which are discarded army building, is 2-1/2 miles from the city. The buildings are being used by the preparatory and pre-medical school. An estimate of \$56,000 for the purchase of this property is included in the \$280,000 needed for equipment and repairs.

The Bridgestone Rubber Company gave all the present land the medical college building; also loaned the money for the hospital. The latter has been paid. (Miller 12/19/49)

Buildings:

8,085 tsubo of buildings on the city, school and hospital.

3,150 tsubo on the property outside the city and owned by the government.

HOSPITAL: 330 beds; 75 full-time nurses

PERSONNEL: Students: 109 nurses in training(no tuition)
600 students in Medical School
(\$10,000 yearly tuition)
300 students in the Commercial Department
2,100 graduates

Faculty: President
122 full-time, and part-time, teachers
22 full-time, 100 part-time, 5
Christian doctors
52 Business staff
131 Technicians, mechanics
59 Servants, janitors, etc.

INCOME : 1948 Yen 36,245,297.22
1949 Yen 35,729,193.00 Total Yen 516,104,22(\$143,300)

The hospital is self-supporting and has provided enough funds to finance the school. The hospital does not charity work; has no research department. It is one of the few hospitals in Japan that has central kitchens from which the patients are fed and the families do not live in the room and cook for them.

AMOUNT NEEDED : The standard of the school must be raised to meet the requirements of a university, according to the new education laws and to do this the amount of \$280,000 is needed. \$56,000 of this amount is for the purchase of the property outside of the city, to be used for dormitories and other purposes. This amount can be paid over a period of a few years. The balance is needed for equipment and repairs.

Salaries of the professors must be increased, department for research developed, and other needs which will require a yearly subsidy of \$50,000.

Dr. L. S. G. Miller spoke to the Board of the Trustees about the Articles of Incorporation and they assured him that the Church would be able to have its own Board of Trustees and that the whole establishment could be incorporated

as a Christian institution. This may meet with some opposition on the part of the faculty for fear they will lose their jobs. The Bridgestone Company would have to have one member on the Board of Trustees. They gave the land the college building, and loaned the money for the hospital, which has been paid.

The surgical department is badly run down, and at least a half dozen missionaries would be needed at once, doctor and nurses.

Voted (a) that we express our appreciation of the confidence which the Board of Trustees of the Kurume Medical College has shown in their offer of the College to the Evangelical Lutheran Church in Japan.

(b) that we request Dr. S. H. Swanson to consult with the missionaries of all the Lutheran groups in Japan in order to ascertain the possibility of securing Christian personnel, to have a further conference with the Trustees to determine the number of years over which the payment of \$280,000 could be extended, and to determine how many years \$50,000 for maintenance would be need and to report to this Board.

(c) that the plan be referred to the Joint Lutheran Committee on Japan to consider the wisdom of accepting it as a cooperative project, to investigate ways and means of financing it, to provide the necessary personnel, and to report back to this Board.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
February 6-8, 1950, P26-28

5. The following letter was received from Dr. S. Hjalmar Swanson, Executive Director of the Board of Foreign Missions of the Augustana Lutheran Church:

“ At the meeting of the Executive Committee on November 25, I reported on your recent communication and your enclosed revision of the agreement previously drawn up between your Board and that of the Evangelical Lutheran Church. At its meeting on October 26th, our Board voted to ask your Board for a similar agreement, governing policy of proposed mission work in Japan and now the Executive Committee voted its approval to the revision which you proposed. I shall, therefore, ask that your Board approve an agreement with the Augustana Lutheran Church similar to an agreement which it has entered into with the Evangelical Lutheran Church.”

We rejoice that the Augustana Lutheran Church is ready to enter into a cooperative agreement with us for work in Japan which will help to strengthen the Lutheran Church in that land. The following resolutions, approved by the Board at the October meeting as the agreement for cooperation with the Evangelical Lutheran Church; are the basis for cooperative work with the Augustana Lutheran Church. (See October 1949 Minutes, Page 270).

Voted (a) that we welcome the cooperation of the Augustana Lutheran Church in the work in Japan, according to the following:

- (1) that the aim and purpose of the Augustana Lutheran Church, in taking up mission work in Japan, is to build and develop, together with the other Lutheran missions, one Lutheran Church in Japan.
- (2) that the Augustana Lutheran Church will, therefore, plan to enter into cooperative relationship with the Japan Lutheran Church and the institutions of this Church, as their Mission Conference and the Board may decide.
- (3) that a Joint Lutheran Committee be formed, consisting of two members from each America Lutheran Board of Foreign Missions having work in Japan. This committee shall meet at regular intervals for the purpose of considering the needs of the field and recommendations from the Church in Japan. All actions shall be submitted to the respective Boards for final action.

- (4) that Missionaries of the Augustana Lutheran Church be sent out by that Church and be under the jurisdiction of its Board. We would urge, however, that the missionaries of the United Evangelical Lutheran Church, the Augustana Lutheran Church, the Evangelical Lutheran Church, and the United Lutheran Church in America organize, in Japan, a Lutheran Missionary Conference to meet at least annually, for the purpose of fellowship, study, and consideration of their mutual interests in the work in Japan; also, that they make an effort to have all Lutheran Missionaries in Japan joint this Conference.
- (5) that the Augustana Lutheran Church, after consultation with the missionaries in Japan and the leaders of the Japan Lutheran Church, through Dr. S. H. Swanson, who will visit Japan in April, assume responsibility for the geographical areas to be agreed upon.
- (b) that we report this action to the Executive Board of the United Lutheran Church in America for their approval.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, February 6-8, 1950, P 28

7. Plans for the establishment of the International Christian University have been made and the Foundation is planning a campaign for the raising of ten million dollars. We have been asked to appoint two members, and their alternates, to the Board of Directors of the Foundation. The purpose of the Foundation is to assist, through the founding of a Christian University in Japan, in the development of personalities motivated by Christian Faith and practice, and, in this way, to contribute to the development of a democratic society in Japan.

The Executive Board of the Church reviewed developments concerning this project since June 14—16, 1948, when the Board of Foreign Missions expressed “its inability to participate in the plan for the establishment of “ this university. The following action was taken by the Executive Board of the United Lutheran Church in America, April 2—22, 1949:

“ In view of the prior claims on the generosity of our people which have been approved by the 1948 Convention of the Church, including Lutheran World Action and Christian Higher Education Year, the Finance Committee RECOMMENDS the adoption of the following reply to the Board of Foreign Missions:

“Although recognizing that many members of the United Lutheran Church in America will be solicited individually and, without doubt, will contribute liberally to the establishment of a Christian University in Japan, this solicitation of funds will not have the status of a general appeal of the United Lutheran Church itself.”

We have again been asked to appoint members on the Foundation and to consider the purpose of the Foundation. (Copy of the Constitution is on file in the Board office.)

Voted (a) that we declare ourselves in sympathy with the purpose of the Japan Lutheran International Christian University Foundation, as found in Article II, (see BELOW), and with efforts to aid in its development.

ARTICLE II- Purpose

“The Foundation is formed as an evangelical Christian agency to assist, through the founding of a Christian University in Japan, in the

development of personalities motivated by Christian Faith and practice, and thus to contribute to the development of a democratic society in Japan. To this end, it is authorized:

- (a) To acquire, or receive by purpose, gift, grant, bequest, devise, or otherwise, real and personal property of every nature and description and wheresoever situated, and to hold, deal with, dispose of and apply the same or the income and proceeds thereof in any manner consistent with the purposes and objects of The Japan International Christian University Foundation, Inc., and in accordance with the terms of any gift, devise, or bequest, within the limits prescribed by law.
- (b) The foregoing clauses shall be construed, both as objects and purposes, and it is herein expressly provided that the foregoing statement of specific objects and purpose shall not be held to limit or restrict in any manner the composers of this corporation.”

(b)That we express to the officers of the Foundation of the International Christian University, and to the Evangelical Lutheran Church in Japan, that we sincerely regret that, because of the manner in which the Foundation is constituted, we cannot participate in it by appointing directors.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, February 6-8, 1950, P30-31

18. According to the action of the Board in February 1950,(Minutes Page 28), Dr. S. H. Swanson of the Augustana Lutheran Church was asked to confer on the offer of the Kurume Medical School with the missionaries, Japanese pastors, and the Board of Directors of the institution. He was also requested to visit the school. Dr. Swanson's report is as follows:

THE KURUME HOSPITAL AND SCHOOLS

“ During my visit to Japan, I talked individually or in small groups with most of the missionaries about this matter. I also tried to ascertain the thinking of some of the Japanese pastors. I spent a full day with members of the Board at Kurume, accompanied by Missionaries Neve and Winther. We discussed with them their offer, how the institutions were to be governed, if taken over, personnel problems, financial needs, etc., and we spent some time inspecting the insides of the main buildings.

“ Our first impression is that of a tremendous challenge. Here are large buildings, housing practically a university –medical school, preparatory school, commercial school, nursing school, plus a large hospital – which may be had free, without incumbrances. It seems to be a most generous offer, and I am convinced that the Board in Kurume is sincere in making the offer. One is awed, however, by the obligations one must assume. It places one in a dilemma where I feel that you must carefully count the cost – whether you say yes or no.

“ The two main problems center about finances and personnel. The buildings are in need of much repair. The outside walls look good, but the insides need a good overhauling. The floors are in bad shape and the walls need repairs and paint. The hospital is in need of new furniture and supplies. The medical school will need new supplies and many modern instruments to place it on a par with the best of medical training institutions. A casual visit cannot determine what these needs might be. It will require a thorough investigation.

“ The personnel problem is, maybe, greater than the financial. If you decide to accept their offer, you will wish to make it a Christian institution. As far as I could ascertain, this is also agreeable to the present owners. They would, however, expect to retain some representatives on the Board of Administration. The present staff of teachers, doctors and nurses would also be retained.

Only gradually would you be able to add a few Lutheran Christian staff—members, chiefly for the reason that there are so few Lutheran Christian in Japan qualified to assume these posts. One possibility might be that some of these teachers and other workers, by a strong evangelistic program, could be won to the Christian faith. I was assured that the present teachers would not be adverse to Christianity, and that they would stay with the institution. I am inclined to think that there would be a request for increased salaries if Americans were in charge. As far as the Board knew, only one of the teachers was a communist.

“ I doubt that you could expect much assistance from the other missions, or mission boards. Most of these missions will be busy for some time launching their evangelistic work. Geography and time required for transportation play a part. People residing in Osaka to Tokyo area would find it more convenient to turn to Tokyo for hospitalization. This would not necessarily apply, however, when it comes to students for the schools.

“ In view of the big value of the physical plant which is here under consideration, as well as the future expenditures involved, I would make the following recommendations, providing you are giving serious thought to the matter.

“ That a commission of three men be sent to Kurume to make a thorough study of the whole situation. Included on such a commission should be—

- a) An architect. He should make a study of the condition of the buildings, make recommendations on all repairs needed and prepare an estimate of costs.
- b) a doctor, acquainted with the needs of a hospital and a medical school. This man should make an evaluation of what is now on hand and report on what is lacking and what it would cost to supply these needs.
- c) a hospital administrator. It would be the duty of such a man to estimate income and expenditures, not only for the hospital, but also for the schools.

“ It may seem expensive to use such a group of men, and it could probably be limited to two. But we must keep in mind that this is a million dollar proposition, and the Board should know just what obligations it assumes before it acts. It should also know how these obligations are to be met. Money spent on such an investigation would be money well used, because this is too big a matter to undertake without a good blue—print for the next five or ten years.”

In addition to this report, we have been informed that it will be necessary to provide the following amounts for repairs, new equipment, and additional buildings over a period of three years: 1950-\$100,000; 1952-\$42,000; 1953-\$150,000; Total of \$292,000. Besides this, there will be an annual monthly budget of \$50,000.(Re Kurume Hospital and School).

Other Lutheran Boards have been given all this information and most of them have considered it an unusual opportunity, but they have expressed their concern about the evangelistic opportunities in

Voted (a) that we inform the Church in Japan that the Board of Foreign Missions appreciates the offer of the Medical School, Hospital, and Nurse's Training School in Kurume but finds it impossible to assume the great responsibility for financing and providing the necessary personnel for its maintenance.

(b) that we request the Lutheran Church in Japan to express to the Board of the Kurume Medical School our appreciation of their offer and the confidence they manifested in the Lutheran Church.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, June 19-21, 1950, P127-130

資料 165 日本福音ルーテル教会と北米一致ルーテル教会海
外伝道局との特別協約

PROPOSED
SPECIAL AGREEMENT

Between
THE EVANGELICAL LUTHERAN CHURCH IN JAPAN
AND THE BOARD OF FOREIGN MISSION OF
THE UNITED LUTHERAN CHURCH IN AMERICA

1. The Evangelical Lutheran Church in Japan shall enter into affiliation with the United Lutheran Church in America, according to Article XV of the Constitution of the United Lutheran Church in America.
2. The Evangelical Lutheran Church in Japan shall have a special relationship with the Japan Lutheran Missionaries' Association of the United Lutheran Church in America, and both bodies shall work together with a common purpose.
3. The location, type of work for all missionaries, and the assignment of individual missionaries to such work shall be decided by the Convention upon the recommendation of the Lutheran Missionaries' Association to the Executive Board.
4. Ordained missionaries who have been in Japan for at least two years shall be regular members of the General Convention. Those who have resided in Japan for less than two years shall be associate members.
5. A retired ordained missionary, residing in Japan, shall be given the status of a retired national minister. He may be given a special work by the Executive Board.
6. Women missionaries shall be associate members of the Convention, with the same standing as unordained "Kyoshoku." Four women shall be regular delegates at large, elected by the general Convention.
7. The members of the Executive Board, and other Committees, shall be as follows:
 - a. Executive Board — Eight members: 4 national ministers, 2 ordained missionaries, 2 national lay members
 - b. Committee of Adjudication — Five members: 2 national ministers, 1 ordained missionaries, 2 lay members
 - c. Committee on Theological Education — Nine members: 4 national ministers, 2 ordained missionaries, 2 lay members, President of

Seminary ex—officio.

- d. Examining Committee— Four members: 3 national ministers,
1 ordained missionary.
8. The eight members of the Department of Finance shall include the President, Secretary, Treasurer of the Japan Lutheran Missionaries' Association, ex—officio.
9. The Executive Board shall appoint one of the two missionary members of the Board as English Corresponding Secretary. All such correspondence shall be signed by the President and English Secretary.
10. An annual budget and a financial report on the same shall be presented to the Board of Foreign Missions of The United Lutheran in America.
11. All subsidies from the United Lutheran Church in America shall be held by the Treasure of the Japan Lutheran Missionaries' Association, and the same shall be reported at once to the President of the Executive Board of the Evangelical Lutheran Church in Japan. The Treasurer of Japan Lutheran Missionaries' Association shall pay to the Treasurer of the Evangelical Lutheran Church in Japan all subsidies for the Church, when requested by the President.
12. Balances left in the subsidies received from the United Lutheran Church in America cannot be used for other purposes than those designated, without the approval of the Board of Foreign Missions.
13. The Constitution of the Evangelical Lutheran Church in Japan, and this Special Agreement, may be amended by the mutual agreement between the Evangelical Lutheran Church in Japan and the Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church in America.

For the vote on this Special Agreement, see Japan Committee Page 130, item number 19 (c) , as follows:

“Voted (c) that the matter of approving the proposed Agreement between the Japan Lutheran Church and the Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church in America be referred to the Secretaries for conferences with other bodies at work in Japan and with the Lutheran Church in Japan in order to clarify the whole subject.”

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, June19-21,1950, P189-190)

議 長 報 告

(一) 一般教勢

昨年は新装なつた東京教會堂に於いて、本年は更に新築壯麗なる熊本教會堂に曾して、本教會の總會を開き得るは、誠に喜びに堪えない所である。一年の歳月は極めての短く、その過ぎゆくこと誠に速かであつたが、顧みて本教會一ヶ年の歩みを思ふ時、反省すべき多くの事柄があると共に、感謝すべき事の多きを覺ゆるのである。諸般の活動が漸次正常に復しつゝあるのみでなく、着々と進展しつゝあることは、お互に感謝に堪えない所である。世界状勢の變轉に伴ふ國內に於ける社會不安の空氣は、必ずしも未だ消え失せてみないが、全國に於ける本教會の傳道戦線は、寧ろ著しく擴大されつゝある状態である。本年度に於いて羽村傳道所、蒲田傳道所、大町傳道所が増設公認せられ、受洗者數も徐々に増加しつゝあるは、何としても心強き限りであり、この事は主の召命に應えんとの教職各位の熱心なる傳道と、之に呼應する信徒各位の熱意ある協力との賜物であつて、感謝の外なき所である。

我らは先づ昨年の總會に於いて、満場一致を以て可決採擇せられた「教會發展計畫」を記憶しなければならない。本總會に依つて以て進べき原則と、着々として實現に努力すべき項目とは、擧げてこの計畫の中に提示されて居り、一ヶ年の諸活動も全てこの線に沿ふて實施されて來たものである。我らの志す所は飽くまで眞摯で高く、行ふ所はどこまでも現實に即するものでなければならぬ。抽象的原理を掲ぐるは必ずしもその實現を意味しないのである。我々は我が教會の躍進展開を思ふ時、常にこの計畫案に立ち歸つて反省すると共に、十字架の主の召命に應え奉るべく、邁進する決意を新たにしなければならぬ。

教會の數字的發展、物的條件の整備完成、信仰生活に於ける熱情等、何れも教會生活に欠くべからざる要素であることは言ふまでもない。然し、常に忘れられてならないことは、我が教會に於ける信仰生活の内面的特質である。聖言に對する尊重忠誠は、宗教改革以來の本教會の輝ける傳統である。本教會の信條書も凡てその基礎は聖言にかゝつてゐる。然るに、本教會の現實に即して考ふる時、我々は果して聖書に對して忠實なる態度をとりつゝあるのであろうか。聖書に對する愛と尊重と服従とが、事實上我が教會生活の中心的特徴をなしてゐるであらうか。各教會に、各家庭に、各グループに、聖書研究の熱意が燃え上がりつゝあるであらうか。聖書の教會が却つて聖書に不忠實であることがあり得るのである。本教會は深く思をこの點に致して、教會生活に於ける特徴を發揮すべきではあるまいか。「この寶を土の器に」もてるのみであつて、所謂「隠されたるの寶」に終わらしめてはならない。本教會の特徴ある性格も、特殊なる傳道もかくの如き觀點より展開し得るのではあるまいか。

次に我々は教會の傳道戦線に於ける全教會員の活動のことを思はざるを得ない。またとなき傳道の好機會に恵まれた現在であると言ひ乍ら、果して充分にその實績を収めつゝあるであらうか。東亞の傳道、殊にも日本に於ける傳道開始百年を迎へんとして信徒數百萬を期してゐるのであるが、我々は充分その責を果たしつゝあるのである

うか。有力なる傳道は、言ふまでもなく、教職信徒の共同事業である。教職各位の一段の勇躍献身を祈ると共に、特にこの際我々は信徒各位の奮起協力を願ひたいと思ふ。信徒傳道は常に教會發展の鍵であつた。原始キリスト教會の發展も、十六世紀に於ける宗教改革以來のプロテスタント教會の著しい進展も、その多くは信徒の活動の賜物であつた。さきに神學者ブルンナー博士が來り、引きつづき世界宣教連盟のランソン博士が來朝して、我々の注意を喚起したことは、日本傳道に於ける信徒活動の重要性であつた。今また本教會に際して、ホアース氏のノルウェイに於ける信徒活動の状況をきき得たことは我らの喜びである。信徒傳道は世界の大勢となり、基督教傳道の成否の鍵を据るものの様である。教會の傳道は凡てのキリスト者の使命であり、特権であり、義務である。この點に於いて、萬人祭司を説き、聖俗一致を主張する我がルーテル教會に於いては、特に重要性を痛感せざるを得ないのである。

(二) ルーテル教會各派との連絡協力

戦後日本に對する傳道開始は、各教會各教派を通じて著しく活發となつた。従つて各派ルーテル教會の日本に傳道を開始するものの數が急激に増加するに至つた。もとより日本に各派各様のルーテル教會が亂立割據することは望ましいことではなく、我々は出来るだけ提携し協力するため、委員を擧げて折衝して來たのである。福音ルーテル教會(舊フキンランド派)は昨年八月の同教會再建總會に於いて、本教會との合同を決議して、その旨の申入れがあつたので、本教會は折衝委員を任命してその交渉に當らしめて來た。

昨年ゴットワルト博士、シャーク女史の來訪と共に、北米スウェーデン系の福音ルーテル教會(E.L.C)のサーデル博士が來訪されて、つづさに傳道開始の調査研究をされた。その結果として同派のハンセン氏は一九四九年十一月來日された。その後米國アウグスタナ派ルーテル教會を含めた之等三大教會は、各外國傳道局間に緊密なる連絡をとり、日本に單一のルーテル教會を建設する目的を以て、協約事項を締結されるに至つた。今回は實地調査のため、アウグスタナ派外國傳道局総幹事スワンソン博士は、ベンソン博士と共に來訪され、本教會に臨席されたのは喜びに堪えない。關西地方にはノールウェイ國ルーテル教會信徒宣教團ホアース氏、アイクリー氏等が傳道を開始せられてゐる。斯く多數のルーテル派間の連絡をとるため、昭和二十五年二月二十八日東京に於いて、懇談會を開き本教會よりは平井、稲富、ミラー、スタイワルトの四名が出席し、種々懇談する所があつた。協力繼續委員を擧げて、文書、出版等の諸問題に就いて更に具体的に研究することになつた。この日これに参加したルーテル教會諸派は次の通りである。U.L.C.A 及び日本福音ルーテル教會(常議員その他で拾一名)、E.L.C(ハンセン氏)、福音ルーテル教會及びフキンランド派(溝口氏、サオライネン氏、タンミオ氏)、ミゾリー派(シュミット博士、ダンカー氏、他一名)、ルーテル派兄弟團(ワーデル氏)、ノールウェイ兄弟團(ホアース氏、アイクリー氏、他一名)。

今や文字通り北海道より鹿児島に至るまで、ルーテル主義信仰の傳道が展開されるに至つたことは、感激に堪えない。内部関係は夫々異なるが、同じ福音ルーテル教會の信仰に生きる信仰團體である。願くば能ふ限り協力提携して、日本に於けるルーテル主義信仰の發揚と神の國建設のため努力したいものである。

(三) 神學校開始

本教會再建以來の懸案であつた神學校が、昭和二十五年四月拾六日遂に開校せられ

るに至ったことは特筆すべきである。傳道者の養成は一刻も忽かせに出来ぬ問題である。學業を終えて傳道の任につくものが絶えて、やがて拾年近くになる。これは教會發展の上よりして、由々しい出来事である。この時に神學校が再開せられたのは何より感謝すべきことと思ふ。四月拾七日、岸校長、クヌーテン教授、大内教授の就任式が行われ、萬般の陣營は整つた。新入學生も拾四名を數ふると言ふ。教會の前途は多望と言ひ得やう。教會は更に責任を感じて有為の人材を神學校に送るやう努めると共に、「教會發展計畫」に於いて決議した神學校維持費の負擔の責任を果たすことに心がけたいものである。

(四)設備

傳道の門戸が各地方各方面に開かれると共に、最も必要なるものは、設備の問題である。この點に於いて、本教會の設備が着々として實現されてゆくことは、驚嘆に價すると共に、之が實現を可能ならしめた米國に於ける同信の友の贈物に對して、感謝感激にたえない。わけても外國傳道局が一九四九年度に於いて、全米國に亘つて實施せられた顕現節運動(エピファニー・アピール)や、北米一致ルーテル教會本部よりの餘剰金割當(アロケーション)の如きがなかつたならば、今日の如き設備調整は到底出来なかつたであらうことを思ひ、我々は衷心より感謝を捧ぐるものである。

いつまでも外的援助に依存する態度を持すべきでない。我らも亦應分の努力をなすべきである。「教會發展計畫」に於いて規定せられてゐる。「當該教會の一割以上の負擔」を、一片の空文に終わらせてはならない。

前總會以來、建築購入せられたる設備は次の通りである。

- 一、東京教會牧師館 昭和二十四年八月一日 完成
- 二、五反田教會堂及牧師館 同 十一月六日 献堂式執行。
- 三、下關教會堂屋根修理
- 四、日田教會堂改増築
- 五、佐賀教會牧師館改築
- 六、佐賀幼稚園改築 同 十二月十六日落成
- 七、唐津教會土地家屋購入
- 八、横濱教會土地家屋購入
- 九、熊本教會堂 昭和二十五年五月二日 献堂
- 十、東京ベタニヤ・ホーム土地購入
- 十一、東京ベタニヤ・ホーム建築
- 十二、東京菊川保育園舎 工事中
- 十三、慈愛園ベビー・ホーム建築
- 十四、小岩保育園 工事中
- 十五、水俣幼稚園 設計中
- 十六、蒲田保育園 土地購入手續中
- 十七、大牟田教會堂 設計中隣接土地百拾三坪代金は全豫算中より支出することとなる。
- 十八、神水教會堂 設計中
- 十九、名古屋牧師館 近日中起工の豫定
- 二十、廣島教會、土地、牧師館 交渉中
- 廿一、下關教會牧師館 設計中

廿二、箱崎教會敷地	購入手續中
廿三、博多教會牧師館	設計中
廿四、神戸教會修理	近日中着手
廿五、唐津教會修理	
廿六、甘木教會堂改築	昭和二十五年四月起工
廿七、東京老人ホーム増築	設計中

(五)財政

自給精神の高潮は總會毎に繰返されるべきであるが、單なる繰返しごとであつてはならない。安價な依存心の如きは、信仰を口にする者にあつては、自己撞着の感が深いであろう。國民の經濟生活の動揺に伴ひ、個々の教會の經濟事情に影響を及ぼすことのあるは、誠に已むを得ない所であるが、自給獨立の精神は一刻も忘れられてはならない。そのために財務部の盡力により、具体的構想が大いに促進せられるであらうが、各教會に於いても教會愛の精神に燃えて、この點に於いて大いに協力せられ、完全自給の精神に邁進せられんことを切望してやまない。

前總會に於いて、自給金三千圓支給能力のある教會が二拾あることを報告したが、本年度は既に自給金四千圓以上支給能力のある教會が拾六に及んで居り、最高額一萬圓を支出する教會が出来るに至つたことは、自給精神の昂揚に對する大なる刺激であり、教會財政能力の潜在力の示現でもある。

(六)宗教法人組織

本教會を宗教法人として組織登録するため、諸般の手續をとりつつあるが、昭和二十四年九月十五日附登録を完了した。

(七)教職

山内六郎氏	昭和二十四年七月二十一日就任、同八月七日ミラー氏により就任式執行
古坂剛隆氏	同年八月三十日就任、九月十一日ミラー氏により就任式執行
坪池 誠氏	同 八月二十五日就任、九月二十五日平井氏により就任式執行
岸 千年氏	同 八月三十日着任
大内弘助氏	同 八月二十四日着任
俵 貢氏	同 八月二十二日就任
岡本榮一氏	同 八月二十日就任
三浦義和氏	同 八月二十八日就任。九月三日稻富氏により就任執行
牛島義明氏	同 九月十九日 横濱へ轉任
江口武憲氏	同 八月 唐津へ轉任
ネービー氏	同 九月 久留米へ赴任、十月十五日、ヘイワード姉と結婚
デイール氏夫妻	同 十一月六日名古屋へ赴任
エカード姉	同 九月十七日、病氣にて歸米
川瀬 清氏	同 九月五日渡米留學
フロムブル姉	同 十月二十七日來日
アルスドルフ氏夫妻	同 十二月九日來日
スタイワルト	同 十二月十六日大久保宣教師館に轉宅

木野 學氏 昭和二十五年三月十一日東京へ赴任
ウキンテル氏 同 三月十七日 來日
モード・パウラス姉 同 三月 歸米

以上御報告申上げる

昭和二十五年四月十五日

総 會 議 長 平 井 清

資料引用

第 2 7 回總會記録、1950. 5. 2-4

神學校委員曾報告

一、昭和二十五年一月十一日熊本市ミラー宅にて第一回委員曾を開いた。重要なる決定事項は次の通りである。

(一) 鷺宮の土地建物を九州學院財團より速やかに移譲される様同財團に申入れること。

(二) 東京都廳に各種學校認可申請の手續を開始すること、そのため學則を作ることとし、名稱は日本ルーテル神學校に決定する。

(三) 短期大學制の件は新制大學制に到る第一次段階として學校當局に於いて研究實施することとする。

(四) 開校式は四月十七日、十八日兩日にわたつて行う。

(五) 講師招聘の件は、二月の委員曾にて決定する。

二、昭和二十五年三月一日、東京神學校にて第二回委員曾を開いた、重要なる決定事項は次の通りである。

(一) クヌーテン氏を神學校のデイーンとすること。

(二) 給與 神學校教授の俸給は、牧師と同額とする。但し、校長には校長給として月額五、〇〇〇圓を支給し、教授には研究費として月額一、〇〇〇圓を支給する。

(三) 開校禮拜に、在京米軍ルーテル教會關係將兵より贈られたパラメント、洗禮盤、カーベット、聖餐用具の贈與式を入れる。

(四) 土地 (校内凹形畑地) 買収の經過報告をきゝ之を購入することゝする。

三、四月十六日一十八日、計畫に従つて開校行事を無事終了し、續いて授業を開始した。尚十七日の就任式には、三浦理事長の司式をもつて、岸校長及びクヌーテン、大内兩教授の就任式を行つた。

四、昭和二十四年度決算は次の通りである。

神學校委員曾委員長 三浦 冢

1949年度神學校決算

収入	摘要	支出
△ 7,161.80	前年繰越	
349,424.80	前ボ婦神	
24,000.00	人大会	
8,006.60	學學校	
4,300.00	學校	
317.00	カ	
	通費	225,320.00
	（教會派遣、通學、その他）	20,542.00
	學試	16,515.00
	務	14,311.00
	器	2,224.00
	熱話	5,694.50
	件	3,774.00
	禮（ブルンナー博士外）	3,100.00
	年へ	61,685.00
	計	1,500.00
		23,226.00
		995.10
378,886.60		378,886.60

資料引用

第27回総会記録, 1950.5.2-4, p110-111

議 長 報 告

(一) 一般教勢

米國一致福音ルーテル教會（旧デンマーク派）が日本に傳道を開始してより半世紀、その主要傳道地たる久留米教會が、傳道開始五十周年を記念するに當り、時と所を同じうて本教會第二十八回の總會を開き得ることは誠に慶賀に堪えない所である。五十年の昔、この地にいと小さく蒔かれし福音の種子は、育ち來つて今日の盛大を見るに至つたのであるがその間に佛はれし多くの先輩諸氏の献身的努力と、海の彼方にある同信の友の熱き祈りとに對しては、誠に感謝に言葉なきほどである。久留米教會が當市に於ける精神生活の源泉、『世の光』として當地方に忠實なる『證人』の實を現し來たのみならず、直接傳道の第一線に立つた多數の有無の青年を輩出して、今日のわが日本福音ルーテル教會に多大の貢献をなされつゝあることは、われらの等しく感激しまた感謝惜く能はざる所である。久留米教會、五十周年記念に際し、總會は衷心よりの祝意を表し、當教會が益々祝福の裡に、その福音傳道の使命に邁進せられんことを祈るものである。

いわゆる『二つの世界』の對立による社會狀勢の不安はいつ果つべしとも思はれない。昨夏以來の朝鮮動乱は一喜一憂の變遷を経て今日に至り、わが國の社會不安に影響する所が多かつた。にも拘らず、終戦後五ヶ年を経て、わが國民も精神的虚脱状態より徐々に脱却しつゝあり、經濟生活が多少とも安定するにつれ、國民生活もいつとなく軌道に乗りつゝある感が深い。傳道方面に於いても亦この感が深い。戦後直後に於けるキリスト教歓迎の異常興奮状態も漸く平静をとりもどし、堅實な求道者が増加しつゝある模様である。受洗者の數も年毎に増加しつゝあり、その増加比率も他の諸教團に比して決して遜色はない。本年度に於いては、愛知縣下の大會根、舉母の二ヶ所の旧傳道所を復活せしめ、更に新しく長崎市と大分市に傳道を開始するに至つた。今や九州に於ける全ての縣に傳道戦線を延ばし得るに至つたことは感謝である。われらは各地域に於ける更に大いなる擴張發展を熱望するのであるが、教職者の不足は如何ともし難い有様である。各教會に於いて献身者の續出せんことを切望して己まない。

戦後の日本は外國傳道の最も有望な候補地であつて、渡來する宣教師の數も益々増加する傾向である。傳道の門戸は各方面に開かれ福音を求むる聲は誠に切實なるものがある。然し同時にわれらの注意を惹くことは、日本に於けるキリスト教傳道は、謂はば反省期に入りつゝあるものと言うことが出來よう。従來の傳道の方法、對策、人物の養成、教育機關の施設等について、果して完全にその使命を發揮したのであろうか。百年にならうとする日本の傳道は、充分にその機能を發揮して、主イエスと世界諸教會の期待に應えて來たであらうか。これらは眞剣に反省せらるべき問題である。現に日本基督協議會では昨年來、傳道方策研究委員會を設けて鋭意研究をつゞけて來たのであつて、本年三月の同協議會第四回總會は、『傳道方策』を中心に有意義な協議會を催したのであつた。われらは戦後の日本に於いて、またとなき傳道の好機會に直面しておるのである。この機會を逸したらば、われらは歴

史上挽回し難い損失を永久に蒙ることになるであろう。わが教會はこの天與の好機に最善の努力を盡しているであろうか。深く主の前に反省し、一般の飛躍を決意したいものと思う。今や我が國キリスト教界に於ける日本福音ルーテル教會の地位と、貢献すべき信仰的特質とは益々廣く認識せられつゝある。宗教改革の本流に棹さすルーテル教會たることを自覚し、われらの觀點を更に擴大して全日本に對するわが教會の使命責任を意識して、大教會建設の業に勵みたいものである。

(二)對外的教會關係

國內的に本教會の重要性が認識せられると共に、信仰的傳統を同じうする世界に於けるルーテル教會との關係も、益々その親密交渉の度を深めて來たのである。教會の世界性（Ecumenicity）が強調される現代に於いては、ルーテル教會の世界性は殊に注目されるべき歴史的現實である。

(イ) ルーテル教會世界連盟加入について本件が昭和二十五年四月の第六回常議員会に於いて決議されつゝも、事務手違いのため總會未提出の儘になつたことは頗る遺憾であつた。わが日本福音ルーテル教會が、各國のルーテル教會に伍してルーテル教會世界連盟に加入するの件は、その後緊急を要したため、昨年八月四日附書面により賛否の投票を行つたのであるが、多數の賛成を得て可決された因つて昭和二十五年八月二十五日ジュネーブなる世界連盟本部に對し加入申込みの手續をとつた。その後同事務局並に加入調査委員長ウェンツ博士より適當に考慮中との通知に接した。一九五二年ドイツ國ハーノーバーに於ける世界大會にはその承認が公式に發表報告せられるものと思う。

(ロ) 北米一致ルーテル教會（U・L・C・A）との關係

第二十七回總會の決議に基き、北米一致ルーテル教會と友好關係の教會（affiliated Church）たる本教會の正式の申込みは、總會直後にその手續を完了したのであるが一九五〇年十月四日北米アイオア州デモイン市に開かれたる同教會大會に於いて、正式に承認せられるに至つた。半世紀以上の長きに亘る同教會とわが教會との親密さは益々その度を加えてゆくことになつたのである。

デモインに於ける同大會に私は日本福音ルーテル教會を代表して出席すべき筈であつたが、財政上の故障が生じたので、再三の折衝打開策を講じて見たが遂に出席不可能となつて、本總會の期待に添い得なかつたことは頗る遺憾とする所である。幸い留学中であつた青山四郎牧師が代わつて出席され、本教會よりの挨拶の言葉を述べられたことは感謝であつた。信徒代表として八月渡米された山田清氏は、同大會に出席の後、多數の教會を歴訪し信徒團の實地調査等をして本年二月無事歸朝された。

北米一致ルーテル教會總會議長フライ博士が、北米基督協議會罹災國民救済委員長として實地調査の世界旅行の途次、本年一月五日急遽來朝せられ、計らずも一日の懇談の時を得たことは非常な喜びであつた。滞日僅かに満一日半にして早々に東南アジアより印度を経て歐洲へ向はれた。同博士は日本伝道に對して異常なる關心を寄せられていた。離日に際して日本福音ルーテル教會の諸兄弟に對し懇篤なる挨拶の言葉を議長を通じて寄せられたことを御伝え致したい。明年行はれんとするわが教會伝道開始六十年周年記念に際して、再び日本を訪れる旨を確約された。

(ハ) 他派ルーテル教會との関係

戦後各派のルーテル教會にして日本伝道を開始するものゝ数が漸次増加して、今や十ヶを数えるに至つた。文字通り北海道より鹿児島まで、ルーテル教會の名が全國に擴がりつゝあることは、ルーテル主義信仰發展のため喜ばしい現象である。われらは各國各派のルーテル教會が日本の地に新しく伝道を開始することを歓迎するものである。能う限り相提携し協力して、わが國にルーテル教會の信仰を確立したいものである。各派間の協力の具体的事實については、ルーテル教會協議會委員の報告に徴せられたい。

福音ルーテル教會（旧フキランド派）との合同問題も、わが折衝委員より數回の會合により協議検討せられ、近く具体案を得る運びになりつゝある。合同實施のため臨時の合同總會を開くこととなることも、遠き将来ではあるまいと思う。

昨年の總會にはアウガスタナ派ルーテル教會外國伝道局総幹事スワンソン博士の來訪があつたが、愈ゝ日本伝道を開始することとなり、一九五〇年九月最初の宣教師ヴィクナー、オルセン兩夫妻が來朝せられ、續いてアーリング、アンダソン、コールベルク三女史が來朝せられた。われらはアウガスタナ派教會の伝道開始を心より歓迎し、前途に祝福を祈るものである。日本福音ルーテル教會の一翼として廣島を中心として、山陽地方に於ける伝道上の責任を担當せられることになつている。

わが教會との完全なる協力を實現せんため、アウガスタナ派外國伝道局と本教會との間に協約事項を制定する運びとなり、委員の手に成る原案を提出し本總會の承認をもとめることとなつている。既に東京一ヶ所、廣島二ヶ所に於いて、最近購入せられた教會敷地は、宗教法人日本福音ルーテル教會の名義に於いて登記せられている。

(三) 財 政

福音の宣伝は教會本來の使命である。而も自給獨立による教會の建設こそわれら教會員たるものゝ自覚であり覚悟でなければならぬ。われらは世界情勢の如何に拘らず、本教會の自給獨立の精神を常に強調してゆかねばならぬ。これこそ聖旨に答える所以であり、海外の同信の友の厚意ある援助に酬いる所以であろう。多年に亘つて多大の援助を惜しまれなかつた海の彼方の諸教會の愛の奉仕に對し感謝すると共に、何時までも之に慣れることなく、年と共に自給獨立の實現に努めてゆきたいと思う。既に自給を實施しつゝある教會は二個（東京、博多）を数えるのであるが、更にまた昨年九月以降神水教會が自給を實施するに至つたことは誠に慶賀に堪えない。のみならず熊本教會の自給も近く實現する由であり、その他數個の教會も遠からず自給實施の計画内である。かくの如く諸教會が陸續として自給獨立の目標に邁進しつゝあることは誠に感謝に堪えない所である。

われわれは第二十六回總會に際し、『教會發展計劃』第一項に於いて、『各教會は五ヶ年以内に實質的自給達成につとむること』を、満場一致をもつて決議したことを思い起こさなければならない。決議以來二ヶ年の歳月を経た現状では、本教會自給の目標に相距だたること、未だ遠いのであるが、この目標と決議とは常に忘れられてはならない。

(四) 設 備

伝道態勢が常態に復すると共に、その物的條件たる會堂その他設備も徐々に整備して來り、わが教會のこの點に於ける終戦後の充實は目覚ましきものがある。これがために為された顕現節運動（エピファニー・アピール）その他の寄與貢獻は、實に感謝にたえない所である。われわれも亦応分の努力をなすべきは言うを俟たない。近頃各教會が會堂建築修理等に際し『一割以上負担』を實行しつゝあることは喜ばしい限りである。

前總會以後、建築購入せられた土地建物は凡そ次の通りである。

一、	唐津教會修理完成	昭和二十五年五月二十八日
二、	本所ベタニヤホーム	全 六月十八日
三、	甘木教會献堂式	全 六月二十三日
四、	小岩保育園落成式	全 七月十六日
五、	名古屋教會牧師館竣工式	全 八月十五日
六、	箱崎教會會堂敷地購入	
七、	蒲田幼稚園土地購入	
八、	京都教會幼稚園土地購入	
九、	下関教會、牧師館竣工	全 十月二日
十、	大牟田教會献堂式	全 十月二十八日
十一、	門司幼稚園土地建物購入	全 十二月一日
十二、	熊本白洋保育園土地建物購入	全 十二月
十三、	蒲田幼稚園落成	全 十二月十五日
十四、	廣島教會土地購入	
十五、	市川教會牧師館土地建物購入	昭和二十六年一月二十日
十六、	大阪教會幼稚園敷地購入	全 二月十七日
十七、	博多教會牧師館竣工	全 二月
十八、	東京老人ホーム増築落成	
十九、	神水教會堂	近日竣工
二十、	水俣幼稚園舎	建築中
二十一、	奈多伝道所土地購入	全 三月一日
二十二、	田園調布敷地購入	全 四月十二日

（五）老宣教師への感謝

來朝以來、或は直接伝道に、或は教育事業に、四十有餘年の長きに亘り、わが教會の發展のため盡瘁せられたスタイワルト博士及びミラー博士夫妻は、近く停年に達せられることとなつた。半世紀に近き年月の間、近代日本の歴史と共に歩みをつづけて、本邦キリスト教の發展と日本福音ルーテル教會の生長とを見守つて來られた老教師たちの愛と奉仕と努力に對しては、わが教會は感謝の言葉を知らないのである。スタイワルト博士は尚一ヶ年の在日の予定であるが、ミラー博士夫妻は今夏歸米される由、わが教會員一同は限りなき惜別の情に満たされるのである。總會は適當な處置を講じてこれら老先輩に對する謝意を表したいものと思う。

（六）宗教法人法實施

本教會は宗教法人令により登記済であつたが、昭和二十六年三月三十一日新に宗教

法人法が實施せられるに至つたので、今回改めて登記すべきこととなり目下手續中である。

(七) 神学校認可

兼ねて認可申請中であつた日本ルーテル神学校は、昭和二十六年一月二十九日附各種学校として東京都知事より認可せられるに至つた。今や諸般の設備も漸く整い、教授陣も強化されて、本年度は十一名の新学生があつた。各教會は益々多くの健康な自給精神に富んだ有為の青年を神学校に送るよう努力せられんことを切望するものである。

(八) 動 静

青山四郎氏	昭和二十五年六月十四日トロントの世界宗教々育大會に出席。その後米國各神学校に学び本年二月歸朝
長沼三千夫氏	六月二十六日—二十九日東山莊に於けるハイボー博士の『家庭問題』懇談會に本教會より出席
アニー・パウラス姉	
アデルホルト姉	兩姉とも昭和二十五年六月二十四日歸米、十月再び來日
田坂惇巳氏	二ケ年の米國留学を終えて七月七日歸朝八月十日、市川教會に赴任
アンスパック氏夫妻	月 日來日、神戸在住
白髭市十郎氏	十一月一日女兒を與へらる
稲富 肇氏	昭和二十六年三月日御尊父稲富清太氏永眠さる
岡本武夫氏	昭和二十六年四月七日御尊父永眠さる
アルスドル氏	昭和二十五年十二月熊本に轉任
ウッド氏	昭和二十六年三月二十五日歸米、結婚さる
三浦義和氏	男兒を與へらる
古坂剛隆氏	病氣療養中
クヌーテン氏夫妻	昭和二十五年八月十日歸米、同二十六年三月再び來日
増田定行氏	病氣療養中
井出尚彦氏	米國留学中
マイヤー氏夫妻	昭和二十六年四月七日來日
ハッドル姉	全上
パーンハート姉	全上
以上御報告申上げる	
昭和二十六年五月一日	

總會議長 平 井 清

資料引用

第 28 回總會記録, 1951,5.8-10 p25-33

資料 169 アウグスタナ・ルーテルミッションとの協約

第二十八回總會記録

- 27 アウグスタナ・ルーテルミッションとの協約事項作成委員報告
稲富氏報告し同委員會提出の日本福音ルーテル教會、アウグスタナ・ルーテル教會協約事項を全員起立を以て之を可決す。
- 29 アウグスタナ派、ルーテル・ミッション代表挨拶
協約事項採擇に關しビグナー氏挨拶を述べらる。三時十五分休會
- 56 決議委員報告 本田委員長次の如く報告し、承認さる。尚憲法規則改正委員は公選にすることとして承認される。

決議委員會報告

昭和二十六年五月九日午後八時久留米市六三亭にて開催出席委員本田（委員長）稲富、内海、坪池（隆）松平、田坂（書記）

- 一、日本福音ルーテル教會、アウグスタナ・ルーテル教會協約に關する件
本協約は其の中にもられたアウグスタナ・ルーテル教會の日本傳道に關する全面的協力の精神に對し我らは深き感謝をもつて第二十八總會に於て万場一致之を可決したことを議長の名をもつて同教會傳道局に表明されたい。

第五回常議員會報告

日時 昭和二十六年五月八日～十日

於 久留米市萃香園

出席 平井、山内、牧瀬、坪池（全）、徳永、ミラー、スタイワルト（缺席林）

決議事項

- 一、アウグスタナ派ルーテル教會との協約事項に關する件
委員提出の本教會と、アウグスタナ派ルーテル教會外國傳道局との協約事項の原案を承認しこれを總會に提出することとする。

資料引用

第28回總會記録，1951,5.8-10 ,p5,p6,p9-10

資料 170 アウグスタナ派ルーテル教会との協約事項締結

アウグスタナ・ルーテル・ミッション交渉委員会報告

常議員會より任命を受けた私共は、アウグスタナ・ルーテル・ミッションの宣教師ヴイクナー、オールセンの二氏と日本福音ルーテル教會との関係について研究協議し次の如き協約の草案を作成した。

御審議の上總會に提案されることを請う。

(説明 本草案は豫めアウグスタナ・ルーテル教會の外國傳道局に内示しその内諾を得たもので、總會の承認を應て更めて公式に同局に送られる。

第十一條の「修正」の八字は日本人教職の總會に於ける身分を明らかにしたものでこの修正の内容についてはヴ・オ二氏とも了解して居る)

右 報 告 す

昭和二十六年四月三十日

平 井 清
稲 富 肇

日本福音ルーテル教會

アウグスタナ・ルーテル教會 協約

日本福音ルーテル教會とアウグスタナ・ルーテル教會とは信仰並に信仰告白に於て一つであり（日本福音ルーテル教會憲法第二章）、神の國の働きに関し同じ目的を保ち（日本福音ルーテル教會憲法第五章）、且つ日本に於て一つのルーテル教會の形成を等しく志すものであるが故に、次の如き協約を結び協力の實をあげんこと期する。

第 一 章 傳 道 地 域

第 一 條 アウグスタナ・ルーテル教會は山陽道地區（岡山一関）四國の一部（廣島の對岸）をその傳道地域として責任をもち、東京都の傳道にも協力する。

第 二 章 地 方 部 會

第 二 條 山陽道地區に於て三ヶの地方教會が組織されたときは（日本福音ルーテル教會規則第十二條及び第二十九條）日本福音ルーテル教會に属する一地方部會を組織する。

（日本福音ルーテル教會憲法第三編）

第 三 條 日本在住のアウグスタナ・ルーテル教會の宣教師は山陽道地方部會の正議員となる。

第 四 條 地方部會の組織せらるゝまでアウグスタナ教會の働きに従事する日本人教職及び宣教師は、関西部會に属する（但し東京にて働くのは関東部會に属する）

第 三 章 宣 教 師 會

第 五 條 日本にて働くアウグスタナ・ルーテル教會の宣教師は宣教師會を組織し、之を日本アウグスタナ・ルーテル・ミッションと稱する。

- 第 六 條 宣教師會の目的は先の通りとする。
- 一、 純然たる宣教師自身に関する問題
 - 二、 宣教師の任地又は働きの分野に関し日本福音ルーテル教會と協議すること。
 - 三、 日本人教職の任命及び教會に関連する全ての事項について日本福音ルーテル教會と協力すること。

第 四 章 日本福音ルーテル教會總會

- 第 七 條 アウグスタナ・ルーテル教會の受按手教師は日本福音ルーテル教會の教師會員として認められる。
- 第 八 條 宣教師會議長は總會の正議員となる。
- 第 九 條 三ヶの地方教會に對し一名の受按手宣教師が總會の正議員となる。
- 第 十 條 前項以外の男女宣教師は準議員の資格で總會に出席することが出来る。
- 第十一 條 山陽道部會の日本人教職はアウグスタナ・ルーテル宣教師會と協議の上、總會の議員となる。
- 第十二 條 宣教師會議長は財務部の顧問となる。
- 第十三 條 總會は神學校委員、文書委員、教會機関紙、傳道部員等の選挙に當り、委員としてアウグスタナ・ルーテル教會の代表につき考慮する。

第 五 章 財 政

- 第十四 條 アウグスタナ・ルーテル教會は山陽道部會の發達に特別な関心を持ち、その為め日本福音ルーテル教會の會計を通じ經濟上の援助をする。
- 第十五 條 アウグスタナ・ルーテル教會は、神學校、文書、傳道等の一般經費の為にも經濟的援助をする。
- 第十六 條 日本福音ルーテル教會の年度豫算編成には宣教師會議長は顧問として參與する。

第 六 章 財 産

- 第十七 條 教會堂敷地、教會堂、牧師館敷地、牧師館は日本福音ルーテル教會の名に於て登記する。
- 第十八 條 日本福音ルーテル教會は年度事業の報告と年度豫算とをアウグスタナ・ルーテル教會外國傳道局に送付する。
- 第十九 條 日本福音ルーテル教會會議長よりアウグスタナ・ルーテルら外國傳道局に送られる公文書は發送前豫めその寫を宣教師會議長に送りその内容をしらしめる。
- 第二十 條 本協約の條項は日本福音ルーテル教會とアウグスタナ・ルーテル教會外國傳道局との合意により修正することができる。
- 第廿一 條 本協約を廢棄することが望ましいとき又は廢棄の必要を生じた時は相手の一方に對し豫め相當の期間を置いて通告した上廢棄することができる。

資料引用

第 28 回總會會議事録、1951.5.8-10, p62-63,p114-117

六十周年記念事業委員会報告

- 一、組織 委員長 平井 清氏 書記 牧瀬雄吉氏
 委員 三浦 冢氏 岸 千年氏 山内六郎氏
 徳永利雄氏 スタイワルト氏
- 二、委員会 二月十四日 於熊本 パッツ姉宅
 五月 四日 於久留米 萃香園

三、協議事項

(1) 六十周年記念會開催の件

これを東京熊本の二ヶ所に於いて開催することにする。

(2) 傳道に関する件

a フライ博士を中心とする集會を熊本、佐賀、博多、関西、名古屋、東京に於いて開催する。

b 記念一般傳道を傳道部に於いて立案し実施する。

(3) 歴史編纂に関する件

a 日本福音ルーテル教會六十年史を發行する。發行部數

發行部數 一〇〇〇部

b 世界ルーテル教會史を神学校に委嘱して發行する。

發行部數 一〇〇〇部

(4) 記念事業に関する件

a ルーテル教會六十年の歴史にかんがみ更に將來の教會發展と指導者養成のため日本に於けるルーテル大學の設置のため委員を設け研究せしめることとする。その委員は五名とする。

b 醫療傳道に関する件

醫療傳道の必要性を認め日本に於けるルーテル醫療傳道のため委員を設け研究しめることとする。

その委員は五名とす。

c 佐賀教會堂改築に関する件

六十周年を記念して本教會發祥の地たる佐賀教會堂を表彰することとする。

(5) 表彰の件

六十周年に當りルーテル教會に功勞あね信徒教職を表彰することとする。

(6) 予算の件

六十周年を記念する諸經費として次の予算を計上する。

支 出		収 入	
記念會費	350,000 圓	會員献金	250,000
傳道集會費	80,000	特定日献金	50,000
60年史出版費	350,000	ルーサーリーグ	

世界ルーテル 教會史出版費	80,000	婦人會献金	100,000
		記念ハガキ・出版	50,000
		教會学校生徒献金	30,000
		出版賣上金	120,000
計	800,000	計	600,000

残り 26 万圓は財務部にて一般予算に計上する。

資料引用

第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, p118-119

神 學 校 委 員 會 報 告

- 日 時 昭和二十六年一月十日
場 所 東京都中野區鷺宮 日本ルーテル神學校會議室
出 席 者 三浦、平井、山内、岸、林、ミラー
午前十時 三浦委員長司會のもとに開會
聖書朗讀 コリント前書 二章一 - 十
祈 禱 山内牧師
報 告 岸校長（四月以降の学事報告）
- 決議事項
- △一九五〇年度の中間報告を承認する 剰余金一〇三,三八九圓二五銭を圖書費に充當する。
 - △一九五〇年度の中間報告に於て、修繕費に関する點に於て明瞭をかくものがあるから今後はすべて校長の責任に於て遂行せられるよう注意すること。
 - △一九五一年度予算經常費歳入歳出予算四〇四九,〇〇〇圓を承認することに決議する。
 - △職員住宅建築の件
土地 九九坪三四 建物 二三坪七五 を建築することに決議する。
住宅金融公庫より二八万圓を借入れ、外國伝道局より臨時寄附として與えられたる四四七三弗中より可及的速かに返濟することとする。
 - △暖房装置設置の件
一九五二年度予算に計上し設置すること（約五〇万圓）
 - △宗教法人經營のもとに各種学校として近く認可を受けることになつておゐるが、將來は大学令による昇格することを目的として学校當局に於て研究を進めて行くことにする。
学校の土地建物の譲受けに関しても学校法人設置の關係に於て、これを設定するものとする。
 - △女子神學校の教育問題について懇談協議し、教會の方針について當局と懇談の上この問題の解決をはかることとする。
- 午後二時三十分岸学長の祈禱をもつて閉會する。

資料引用

第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, p136-137

日本ルーテル神学校報告

一、神学校の現状

(イ) カリキュラム

一九五〇年度神学校カリキュラムは、主としてルーテル教會独自の立場より考慮せられたが同時に神學大學及文部省提案のカリキュラムをも参考として立てられた。

教授三名講師十六名により各學課が担当せられた。

(ロ) 學生

昭和二十五年四月十八日入學式を行つたが教養科一年十二名、聴講生五名教養科二年五名、神學科一年五名、全二年三名計三十名が登録した。

右の中健康その他の理由によつて退學した者一名、休學した者四名（中女子一名）

昭和二十六年四月 現在で先の通りの學生が在學している。

神學科三年二名 神學科二年四名

神學科一年四名 教養科二年十四名

教養科一年八名 聴講生 四名

休 學 二名計三十八名

(ハ) 學生の自給精神

學生は各自自給を建前とし之を極力推進する方針である。已むを得ざる場合は奨學金を以て之を援助するが教會に於てもこの方針に御協力願いたい。

二、學生實地訓練

(イ) 東京都内諸教會に於て

原則として神學科第一学年以上の學生を諸教會の要求に応じて派遣し、實地指導を受くることとしている。

(ロ) 夏季訓練

神學科第二学年は七月八日以降左の諸教會に於て夏季訓練を受けた。

益田啓作 神學校、都南教會に於て

石居正巳 大阪教會に於て

林 宏 熊本教會に於て

三、施 設

チャペルは聖壇用、燭台、花瓶、中央道路、絨毯等の寄贈を受け面目を一新した。圖書館の充實は急務であり新刊書を含む圖書が購入せられたが更に神學書の購入、殊にルターの著作蒐集に努力している。

職員住宅は向井町三番地に九十九坪三合四勺の敷地を購入し二十三坪七五の建物を新築した。

学校隣接農地は向井町学校所有地と交換、学校敷地の一部とせられたが學生厚生施設の建築計画が決議せられ一九五一年度に實現せられる予定である。

四、神学校運営根本方針

神学校委員曾は日本ルーテル神学校運営の根本方針を左の如く決定した。

(イ) 神学校が将来大学となることを目指して現実に即しこれが實現に盡す。

第一各種学校の許可を受ける。

第二短期大学とし つゞいて

第三大学令による大学とする。

然し短期大学と大学とは手續その他略同一であめから短期大学案に代るに直接大学案に進むを得策とするから神学校令委員曾は（一月十日）「将来は大学令による大学に昇格することを目的として学校當局に於て研究を進めて行くこととする」と決議した。

尚ほ第一段階は既に達成せられ本年一月二十九日付を以て各種学校の認可を受けている。

五、予算決算

別表の通りである。

右 報 告 い た し ま す。

日本ルーテル神学校長 岸千 年

資料引用

第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, p131-133

資料 174 東京学生センター(Tokyo Student Center)

1. The Committee for the Student Center found a plot of land centrally located in Tokyo at an approximate cost of \$9,410. The plan is to build a dormitory for Lutheran students attending schools in Tokyo, and a building for recreation, reading-room, and lounge. The amount granted for this project was \$20,000. We now have a request for an additional \$8,000.

Voted (a) that subject to the Board's approval of the plans, the Board approve of the additional \$4,000 for the student Center in Tokyo and that the matter be referred to the Finance Committee for provision of funds.

(b) that the Women's Missionary Society be asked to contribute \$4,000 to this project.(The WMS has promised \$4,000 for the building of the Tokyo Student Center.)

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
December 5-7,1951, P247

資料 175 日本福音ルーテル教会とアウグスタナ・ルーテル教会との共同

Cooperation With The Augustana Lutheran Church And The Japan Evangelical Lutheran Church

7. "Vote that we approve of the Articles of Agreement between the Board of Foreign Missions of the Augustana Lutheran Church and the Japan Evangelical Lutheran Church." (See Appendix I at end of Japan Committee Report.) (Action of JELC)

Voted that (a) we inform the Japan Church that the Board is happy to note the Articles of Agreement between the Board of Foreign Missions of the Augustana Lutheran Church and the Japan Evangelical Lutheran Church.

(b) the Japan Evangelical Lutheran Church be requested to include all funds contributed to the work of the JELC by the Augustan Lutheran Church in their report of receipts for 1951 and that such funds be deducted from the budget requests in the future.

JAPAN COMMITTEE REPORT-- APPENDIX 1

THE SPECIAL AGREEMENT BETWEEN THE JAPAN EVANGELICAL LUTHERAN CHURCH AND THE BOARD OF FOREIGN MISSIONS OF THE AUGUSTANA LUTHERAN CHURCH

Whereas the Japan Evangelical Lutheran Church and the Augustana Lutheran Church hold the same faith and confession, recognizing a common doctrinal basis (see the JELC Constitution, Article II), and

Whereas the two bodies have the same purpose in the work of the Kingdom of God (see JELC Constitution, Article V), and in the development of one Lutheran Church in Japan.

Therefore the Japan Evangelical Lutheran Church and the Augustana Lutheran Church mutually agree to work together on the following terms:

Article I. THE AREA OF WORK

1. The Augustana Lutheran Church shall be responsible for the evangelization of the Sanyodo area (from Okayama to Shimonoseki), a part of Shikoku Island (adjacent to Hiroshima), and shall share in the Lutheran work in Tokyo.

Article II. THE DISTRICT CONFERENCE

2. When at least three congregations have been organized (see JELC By-Laws, Articles 12 and 29) in the Sanyodo area they shall be formed into a new District Conference of the Japan Evangelical Lutheran Church.

3. All missionaries of the Augustana Lutheran Church in Japan shall be regular members of this new District Conference.

4. Until the new Sanyodo District Conference shall be organized the Japanese workers and the missionaries of that area shall belong to the Kansai District. The Tokyo workers shall belong to the Tokyo District Conference.

Article III. THE MISSIONARY ORGANIZATION

5. The missionaries of the Augustana Lutheran Conference in Japan shall be organized into a missionary association, known as the Augustana Lutheran Mission, Japan.

6. The duties of this organization shall be:

- a. To deal with all purely missionary matters.
- b. To cooperate with the JELC in the stationing of missionaries, and in determining the type of work they should do.
- c. To work through the channels of the JELC in the appointment of Japanese workers and all matters relative to the problems of the national Church.

Article IV. THE GENERAL CONVENTION OF THE JELC

7. The ordained missionaries of the Augustana Lutheran Church shall be recognized as members of the Ministerium of the JELC.

8. The chairman of the missionary organization shall be a regular delegate to the Convention.

9. With every three new congregations organized one additional recognized delegate, a missionary pastor, shall be added to the roster of the General

Convention.

10. All other missionaries, men and women, of the Augustana Lutheran Church in Japan, shall be welcomed to attend the General Convention, and shall be given the privilege of the floor.

11. The Japanese pastors and evangelists of the District shall be appointed by the convention of the JELC, which shall have consulted with the Augustana missionary association.

12. The president of the Augustana missionary organization shall be an advisory member of the Department of Finance.

13. The General Convention shall consider the representation of Augustana on the important committees of the Convention, such as the Committees on Theological Education, Literature, Church Paper, Evangelism, etc.

.Article V. FINANCE

14. The Augustana Lutheran Church will have her special interest in development of the Sanyodo District Conference, and for this purpose shall give financial aid through the treasure of the JELC.

15. The Augustana Lutheran Church shall give financial aid towards the general work of the JELC, such as the Theological Seminary, Literature, Evangelism, etc.

16. In the making of the annual JELC budget the chairman of the Augustana missionary organization shall be consulted, as its advisory member.

Article VI. PROPERTY

17. Land for church buildings, church buildings, land for parsonage, and parsonage shall be legally registered in the name of the JELC Religious Corporation.

Article VII. THE FOREIGN MISSION BOARD OF THE AUGUSTANA LUTHERAN CHURCH

18. The JELC shall send its annual report on its work and the budget to the Foreign Mission Board of the Augustana Lutheran Church.

19. All official communications the President of the JELC has with the Board of the ALC shall be done with the knowledge of the chairman of the Augustana Missionary organization, giving a copy of such communications to the latter.

Article VIII. AMENDMENT AND TERMINATION

20. These terms or this agreement may be amended by natural agreement of the JELC and the Board of Foreign Missions of the ALC.

21. This agreement may be terminated by either Church (JELC or ALC) upon due notice when deemed necessary or advisable.

This formal proposal is drawn up by two officially delegated members of the Executive Committee of the Japan Evangelical Lutheran Church, President Hirai and Dr. Inadomi, and two members of the Augustana Lutheran Mission, Japan, Rev. Gorge Olson and Rev. David Vikner.

From this group it goes to the Board of Foreign Missions of the Augustana Lutheran Church for correction and approval or rejection. The next step will be to present this or the corrected Board-approved proposal to the General Convention of the JELC.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, December 5-7,1951, P248-255

宗教法人「日本福音ルーテル教會」設立公告

このたび左記の通り宗教法人法による宗教法人「日本福音ルーテル教會」を設立することになりましたので、同法第十二條第三項の規定によって(同法附則第五項の規定により同法第十二條第三項の規定に従って)公告します。

昭和二十七年一月十五日

設 立 者

東京都中野区鷺宮貳丁目九百貳拾壹番地

宗教法人「日本福音ルーテル教會」

主 管 者 平 井 清 ⑩

信者その他の利害關係人各位

記

一、宗教法人「日本福音ルーテル教會」規則(案)

目 次

第一章	總 則 (第一條— 第四條)
第二章	役員その他の機關
第一節	代表役員及び責任役員(第五條—第十條)
第二節	代務者(第十一條—第十四條)
第三節	仮代表役員及び仮責任役員(第十五條)
第四節	總會(第十六條—第二十六條)
第五節	會計審査委員(第二十七條—第二十八條)
第三章	地方教會(第二十九條— 第三十三條)
第四章	財 務(第三十四條— 第四十七條)
第五章	事 業(第四十八條)
第六章	補 則(第四十九條— 第五十二條)

附 則

第一章 總 則

- 第一條 この教團は、宗教法人法による宗教法人であつて、「日本福音ルーテル教會」という。
- 第二條 この宗教法人（以下、「法人」という）は、事務所を東京都中野区鷺宮貳丁目九百貳拾壹番地に置く。
- 第三條 この法人は、旧新約聖書を所依の經典として、日本福音ルーテル教會憲法規則に従い、キリスト教の教義をひろめ、儀式行事を行い、信徒を教化育成し、日本福音ルーテル教會に属する全ての教會を包括し、その他、この法人の目的を達成するための財務その他の業務及び事業を行うことを目的とする。
- 第四條 この法人の公告は、機関誌「るうてる」に一回掲載して行う。

第二章 役員その他の機関

第一節 代表役員及び責任役員

- 第五條 この法人には、八人の責任役員を置き、その中一人を代表役員とする。
- 第六條 代表役員を「常議員会長」（以下、会長という。）、責任役員を「常議員」という。
- 第七條 会長は、本教會の總會において、總會議員中より選挙せられた總會議長をもって、これに充てる。
- 2、 常議員は、本教會の總會に於て、總會議員中より選挙せられる。但し、副議長、書記及び会計は職務上、常議員となる。
- 第八條 会長及び常議員の任期は、夫々一年とする。但し再任を妨げない。
- 2、 補欠責任役員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3、 会長及び常議員は、辞任又は任期満了後でも、後任者が就任する時まで、なおその職務を行うものとする。
- 第九條 会長は、この法人を代表し、その事務を総理する。
- 第十條 この法人の事務は、責任役員の定数の過半数で決し、その議決権は、各々平等とする。
- 2、 責任役員の會議を常議員会という。

第二節 代務者

- 第十一條 左の各号の一に該当するときは、代務者を置かなければならない。
- 一、 会長又は常議員が死亡、辞任、その他の事由に因って欠けた場合において、すみやかに、その後任者を選ぶことが出来ないとき。
- 二、 会長又は常議員が病気、旅行その他の事由によって三月以上その職務を行うことができないとき。
- 第十二條 会長の代務者は、總會の副議長をもって、これに充てることが出来ない場合、前條第一号の場合には、常議員会において、常議員の中から選任し、第二号の場合には、会長が常議員の中から選任する。
- 2、 会長以外の常議員の代務者は、總會議員のうちから、常議員会において選任する。
- 第十三條 代務者は、会長又は常議員に代わつて、その職務を全部を行う。

第十四條 代務者は、その置くべき事由がやんだときは、当然その職を退くものとする。

第三節 仮代表役員及仮責任役員

第十五條 会長は、この法人と利益が相反する事項については、代表権を有しない。この場合においては、常議員会において、仮代表役員を選定しなければならない。

2、常議員は、その常議員と、特別な利害関係がある事項については、議決権を有しない。この場合においては、総会議員のうちから、常議員において、その議決権を有しない常議員の員数だけ、仮責任役員を選定しなければならない。

第四節 総会

第十六條 総会は、毎年一回、定期に開く。

2、臨時総会は、常議員会に於て、必要と認めるとき、又は、総会議員の三分の一以上の連署をもって請求した場合には、これを開く。但し、臨時総会に於ては、招集の目的である議案の外は、審議することができない。

第十七條 総会は、総会議長がこれを招集する。

第十八條 総会に出席し得る議員は、左の通りである。

- 一、正規の任命を受けた現職教師
- 二、地方教会選出の信徒代議員
- 三、常議員会の推薦する議員十名以内

第十九條 総会は、議員三分の二以上の出席を以て成立する。

第二十條 総会の役員は、議長一名、副議長一名、書記一名、会計一名とする。

第二十一條 総会の役員は、毎年定期総会において選挙する。

第二十二條 総会議長、副議長、書記、会計の任期は一年とする。

第二十三條 総会議長は、総会の議事を整理し、按手式を司る。

- 2、副議長は、議長に事故あるとき之を代理する。
- 3、書記は、総会閉会中議事録を作製し、総会閉会前、総会の承認を得なければならない。
- 4、会計は、此法人に関する金銭の出納を司り、金銭出納に関する一切の書類及び帳簿を整理して之を保管しなければならない。

第二十四條 総会において、処理すべき事項は、左の通りである。

- 一、この法人の建設発展及び付属事業に関する施設計画の議定
- 二、常議員会執行事項の事後審議
- 三、この法人年度の予算並びに決算の審議
- 四、この法人規則及び日本福音ルーテル教会憲法規則の改正
- 五、議長、副議長、書記、会計、常議員及び諸委員の選挙
- 六、この法人に関係ある財團理事の推薦
- 七、その他必要な事項の議定

第二十五條 総会の議事は、出席議員の過半数で決する。

第二十六條 総会閉会中の緊急必要ある事項は、常議員会が之を執行する。

第五節 会計審査委員

第二十七條 この法人に、二人の会計審査委員を置く。これは総会において総会議員の中から選挙し、その任期は一年とする。

第二十八條 会計審査委員は、この法人の財務が、適当に管理執行せられているかを

調査し、之を総会に報告しなければならない。

第三章 地方教会

第二十九條 この法人が包括する教会は、地方教会といい、その教会名の上に「日本福音ルーテル」を冠する。

第三十條 地方教会を設立しようとするとき、又は地方教会が左に掲げる行為をしようとするときは、この法人の会長の承認を受けなければならない。

- 一、宗教法人となること（この教団と被包括関係を設定することを含む）
- 二、規則を変更すること
- 三、合併又は解散をすること
- 四、その教会以外において募金をしようとするとき

第三十一條 地方教会は、左に掲げる行為をしようとするときは、地方教会総会の三分の二以上の同意を得、この法人の会長の承認を受けなければならない。但し、第三号から第五号までに掲げる行為が、緊急の必要に基くものであり、又は軽微のものである場合、及び第5号に掲げる行為が、一時の期間に係るものである場合は、この限りではない。

- 一、不動産又は、財産目録に掲げる物件を処分し、又は担保に供すること
- 二、借入（当該会計年度内の収入で償還する一時の借入を除く）又は、保証すること
- 三、主要な教会構内地建物の新築、改築、増築、移築、除却又は、著しい模様替をすること
- 四、教会構内地の著しい模様替をすること
- 五、主要な教会構内地建物の用途若しくは境内地の用途を変更し、又は、これらを教会の主なる目的以外の目的のために供すること。

第三十二條 教会は、左の各号の一に該当するときは、遅滞なく議事録の写しを添えて、その旨を会長に届け出なければならない。

- 一、予算及び決算を議決したとき
- 二、代表役員、責任役員及び代務者を選定したとき
- 三、その他、この法人に関係する議決をなしたとき

第三十三條 地方教会の代表役員、責任役員、及び代務者は、当該教会の規則で定めるところによって選定された者を、この法人の会長が任命する。

第四章 財務

第三十四條 この法人は、その目的達成の経費に充てるため、地方教会に対し、分担金を賦課徴収する。

第三十五條 この法人の資産は、基本財産及び普通財産とする。

2 基本財産は、左の財産について設定する。

- 一、土地、建物その他の不動産
- 二、公債、社債その他の有価証券
- 三、永遠保存の目的で、積み立てた財産
- 四、基本財産として指定された寄附金
- 五、歳計に剰余を生じたとき、又は、予算外に収入があった場合、総会の議決を経て基本財産に編入されたもの

3、普通財産は、基本財産以外の財産、財産から生じる果実、分担金、寄附金及び一般の収入とする。

第三十六條 基本財産の設定又はその変更をしようとするときは、総会の議決を経なければならない。

第三十七條 基本財産たる現金は、不動産、若しくは、確実な有価証券に替え、確実な銀行に預け、その他適当に管理しなければならない。

第三十八條 左に掲げる行為をしようとする時は、総会の議決を得なければならない。

一、基本財産を処分し、又は担保に供すること。

二、借入（当該会計年度内の収入で償還する一時の借入を除く）又は、保証すること

三、負担付贈与を受けること

第三十九條 財産目録は、毎会計年度終了後三月以内に、前年度末現在によって作成し、会計審査委員の監査を経て、総会の承認を受けなければならない。

第四十條 この法人の経費は、普通財産をもって支弁する。

第四十一條 予算は、毎会計年度開始前の定期総会までに編成し総会の議決を経なければならない。

第四十二條 予算は、経常及び臨時の二部に分け、歳入の性質及び歳出の目的を明示しなければならない。

第四十三條 予算超過又は、予算外の支出に充てるため、予算中に予備費を設けることができる。

2、予備費を使用しようとするときは、常議員会の同意を得なければならない。

第四十四條 予算作成後に、やむを得ない事由が生じた時は、常議員会の議決を経て、既定予算の追加、又は更正をすることができる。

第四十五條 決算は、毎会計年度終了後三月以内に作成し、翌年度の総会に提出して、その承認を受けなければならない。

第四十六條 歳計に剰余が生じたとき、又は予算外に収入があった時は、これを翌年度の歳入に繰入れ、又は総会の議決を経て、その一部若しくは、全部を基本財産に編入することができる。

第四十七條 この法人の会計年度は、毎年一月一日に始まり、十二月三十一日に終わるものとする。

第五章 事業

第四十八條 この法人は、その目的達成に資するため、出版事業を行う。

2、前項の事業は、総会において選ばれ、会長の任命した五名の文書委員よりなる文書委員会において管理運営する。

3、第一項の事業から生じた収益は、左に掲げる法人及び事業のために使用しなければならない。

一、この法人

二、この法人が援助する宗教法人

三、この法人が援助する公益事業

4、第一項の事業に関する会計は、一般会計から区分し、特別会計として経理しなければならない。

第六章 補 則

第四十九條 この規則を変更しようとするときは、総会議員の総数の三分の二以上及び常議員の定数の三分の二以上の同意を得て、文部大臣の認証を受けなければならない。この法人が合併しようとするときも、また同様とする。

第五十條 この法人が解散しようとするときは、総会議員の総数の三分の二以上及び常議員会の定数の全員の同意を得て、文部大臣の認証を受けなければならない。

第五十一條 この法人が解散した場合における残余財産は、解散の時に於いて常議員の定数の三分の二以上の同意によって、選定された者に帰属する。

第五十二條 この規則の施行に関する細則は、総会の議決を経て常議員会が施行細則で定める。

附 則

- 1、この規則は、文部大臣の認証を受けた日(昭和 年 月 日)から施行する。
- 2、従前の規則は廃止する。
- 3、従前の規則の規定は、宗教法人法附則第三項の教会については、この規則施行後も、なおその効力を有する。但し、この規則中の規定に相当するものについては、この限りではない。この場合においては、この規則中のその相当する規定に従うものとする。
- 4、この規則施行当初の代表役員及びその他の責任役員は、左の通りとする。

代表役員	平 井 清
責任役員	山 内 六 郎
同	牧 瀬 雄 吉
同	坪 池 全
同	エ・シ・クヌーテン
同	徳 永 利 雄
同	山 田 清
同	ハワード・アルスドルフ

資料引用

「るうてる」, 1952.1.15, p5~p6

資料 177 福音ルーテル教会との合同

合同交渉委員会報告

昭和二十五年十二月十二日に第一回委員会を開き合同基本案を作成し各関係方面と交渉を続けて来たが、本年四月廿一日午後四時より東京田園調布教会にて開催した委員会に於て全委員一致で次の如き

- 一、 日本福音ルーテル教会、福音ルーテル教会合同契約等
- 二、 日本福音ルーテル教会（合同後）、フィンランド福音ルーテル伝道協会日本ミッション協約草案を作成した。本委員会は総会がこの二つの草案を認め、又、可決されたる場合は、合同準備委員（三名、内一名教会代議員）を任命し合同実現のため必要なる諸準備をなさしむる事を提案する。

昭和二十七年四月二十二日

委員長 稲 富 肇
平 井 清
クヌーテン
大内弘助

日本福音ルーテル教会

福音ルーテル教会 合同契約（案）

日本福音ルーテル教会と福音ルーテル教会とは信仰並に信仰告白に於て一つであり、神の国の働きに関し同じ目的を有し、且つ日本に於て一のルーテル教会の形成を等しく志すものであるが故に先の契約を結び合同する。

- 一、 便宜上宗教法人日本福音ルーテル教会の憲法及び規則を採用して合同する。
- 二、 福音ルーテル教会に所属する教会及び伝道所（東京教会、大岡山教会、上諏訪教会、下諏訪教会、岡谷教会、赤穂教会、飯田教会、札幌教会及び伊奈町伝道所）は規則、第三編により東北信（仮称）地方部会を組織する。
- 三、 合同後の連絡を円滑ならしめんが為め当分の間東信北部会長は必要に応じ常議員会に出席し会議に参加することが出来る。
- 四、 諸委員については東信北部会の特殊な立場を考慮して適当に指命することとする。
- 五、 合同総会は昭和廿八年五月とする。

日本福音ルーテル教会へ合同せる

フィンランド福音ルーテル伝道協会日本ミッション 協約（草案）

日本福音ルーテル教会とフィンランド福音ルーテル伝道協会日本ミッションとは信仰と伝道目的とに於て一であり且つ日本に於て一のルーテル教会の形成を等しく志すものであるが故に、次の如き協約を結び、協力の実をあげんことを期する。

- 第一條 自主性。各自の自主性を認めつゝ密接なる連絡を保ち、伝道に従事し、日本に於ける福音ルーテル教会の発展につとめる。
- 第二條 伝道地域。フィンランド・ルーテル・ミッションは東信北部会の伝道地域内にて伝道し、特に同部会の発展を応援する。
- 第三條 FLM の伝道所はなるべく早く教会を組織し、日本福音ルーテル教会に加入するものとする。
- 第四條 協力委員会。実際伝道上の協力を密にするため日本福音ルーテル教会総会議長、全伝道部長、東信北部会長、FLM 会長を以て協力委員会を組織する。
FLM の伝道地及びその伝道事業に従事する教職(牧師、伝道師)の採用は協力委員会の協議を経て、宣教師之を決する。
- 第五條 総会。FLM 会長又はその代理は交友代表 (fraternal delegate) として日本福音ルーテル教会総会に出席し、発言権を与えられる、FLM の受按手教師は、日本福音ルーテル教会教師会に出席することが出来る。
- 第六條 地方部会。FLM の宣教師及び FLM の伝道事業に従事する日本人教職は東北信部会員として待遇され、部会総会には発言権を与えられる。
- 第七條 財政。FLM は東信北部会の発達に特別な関心を持ち、そのため日本福音ルーテル教会の会計を通じ経済上の援助をする。神学校、文書、伝道等の一般経費の為めにも適當の寄附をする。FLM 会長は日本福音ルーテル教会の財務部の顧問として年度予算編成に参加する。
- 第八條 財産。教会堂敷地、教会堂、牧師館、牧師館敷地は事情の許す限り日本福音ルーテル教会の名に於て登記する。
- 第九條 報告。日本福音ルーテル教会は年度事業と年度予算とを FLM 伝道局に送付する。
- 第十條 修正又は廃棄。本協約の條項は日本福音ルーテル教会と FLM 日本ミッションとの合意により修正することが出来る。
本協約を廃棄することが望ましいとき又は廃棄の必要を生じた時は相手の一方に対し予め相當の期間を置いて通告した上廃棄することが出来る。

資料引用

第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P102-104

神学校共同経営交渉委員報告

第廿八回総会において表明された「日本に一つのルーテル教会の形成に資した意図」にもとづき、その根幹ともいふべき神学校の共同経営に関して、委員会は慎重に考慮をつづけて来たのである。

昭和二十六年十月十日神戸にて開かれた全ルーテル協議会に於いて、各派ルーテル教会が、日本ルーテル神学校の共同経営に参加せられるように提案し、その考慮を要請した。之に対して、先づ考慮研究の意思を示して、研究交渉の委員を選任して来たのは、福音ルーテル教会（ELC）であった。

因って先づ相互間の理解と親密とを計るために、昭和二十七年二月四日ルーテル神学校に於いて、最初の会合を催して神学教育一般について打とけた懇談をした。本教会より全委員、ELC側よりはハンセン氏、ステンベルグ氏、ハイランド氏その他二名の出席があった。懇談は主として、

- (一) 神の言の教理に対する考察
- (二) 神学教育の性格と目的
- (三) 共同経営に於ける協力の程度

の三点に集注されて、各自隔意なき意見の交換をなした。当日は何等の確定的結論を与えることはなかつたが、出席各委員ともに、この種の会合の極めて必要にして有益なることを感じ、出来るだけ屢々会合を重ねて相互の理解を助け協力への準備工作に資したい意嚮が強かった。殊に神学的立場の理解は欠くべからざるものであることが感ぜられた。

異った伝統と傾向を持つ各派の神学共同経営は、複雑にして困難な問題であって、尚若干の月日を要し幾多の曲折を経なければならぬであろう。之は拙速をつゝしみ慎重を旨とすべき事柄である。従って、本委員会は先の推薦案を附して、この報告書を提出したいと思う。

推 薦 案

「神学校共同経営交渉委員を尚当分の間継続せられんことを提案する」

以 上

神学校共同経営交渉委員会（長）

平 井 清
稲 富 肇
ハ ッ ド ル
岸 千 年
三 浦 冢

資料引用

第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P105-106

（二）対外的教会関係

（イ）ルーテル教会世界連盟への加入

ルーテル教会世界連盟加入の件は、昨夏以来手続中であつたが、一九五一年八月八日付、総幹事マイケルフェルダー博士より、正式に加入が承認せられた旨の通知に接した。われわれはこの事を非常に光榮に思う。世界に於けるプロテスタント教会中の最大の教会として、改革者ルーテル以来の福音主義の大旗の下に結成せられたるルーテル教会世界連盟は、混濁せる現代に対して重大なる使命を有する信仰団体である。われらは今やこの大陣営の一翼としての光榮を荷うものであるが、この光榮はやがてまた非常なる責任を伴うものであることを忘れてはならない。ルーテル主義信仰の花は、世界の凡ゆる文化、民族の中に浸透して、夫々の歴史的文化的基盤に於いて独自の福音主義的教会の形成を成し遂げてきた。われらもこの国に於けるルーテル教会として、世界の諸ルーテル教会に伍して、わが国にふさわしき教会形成に努むる所があらねばならない。

第五回世界大会は一九五二年七月廿五日より八月三日まで、独逸ルーメーバーに於いて開催せられる筈であり、『責任ある教会に於ける神の言』なる主題の下に、①神学 ②外国伝道 ③内国伝道 ④平信徒運動 ⑤学生青年 ⑥教会と婦人、の各部門に別れて夫々研究討議のため、諸般の準備がとゞのえられつゝある。わが教会も大会出席の正式の招請を受けたのであるが、総会議長が正議員として出席することになってゐる。これにはU・L・C・A外国伝道局の多大なる経済的援助による所多いことを記して深き感謝を表したい。

因に多年世界連盟総幹事として尽力せられたマイケルフェルダー博士が米国へ帰省中一九五一年九月卅日急逝せられたのは誠に哀痛にたえない。謹んで哀悼の意を表したい。間もなく後任としてルンドクスト博士が専任せられた。

（ロ）北米一致ルーテル教会との関係

わが教会六十年の発展に対して終始推進力の一つとなり、之を育成して来たのはU・L・C・Aであることは前述の通りである。両者の関係が友誼関係の教会（affiliated church）として、友好関係にあることは周知の事である。わが教会がルーテル教会世界連盟の一加盟教会として承認せられるや、U・L・C・A議長フライ博士は直ちに一書を寄せられて『ルーテル教会世界連盟常議員会が、日本福音ルーテル教会がこの全世界に於けるルーテル教会の交わりの中に参加することを承認したのは、私にとって非常な喜びであり満足とする所であつた。今や北米一致ルーテル教会と貴教会とは母子関係にあるのみでなく、世界的ルーテル主義信仰の立場において、相互に愛と尊敬とを厚うする姉妹教会たるの関係に立つものである。』と語られた。この溢る友情に対しわれらは等しく感激し感謝に堪えないのである。願くば日本福音ルーテル教会が益々健全なる発展を遂げ、この深き友情に答える所がありがたい。自給自営と自己拡張とはキリストの體たる教会の特質である。わが教会はいつまでも先進教会の恩

顧に慣れることなく、成人したる教会の域にまで達せねばならぬ。これこそ伸びゆく愛児の姿を見て喜ぶであろう。彼我二つの教会の友誼益々こまやかとなり、和衷協同もつて神の国の建設に邁進したいものである。

(ハ) 他派ルーテル教会との関係

各国各派のルーテル教会が、わが国に伝道を開始しつつあるのは喜ばしい。津々浦々に至るまで福音は伝えねばならぬ。そして異なつた歴史と伝統とを持つ各派が、夫々の分派と慣習とをもつて伝道を実施し教会を形成してゆくことは自然のことである。然し乍ら同じ信仰に立つ者たちが、各派分立の儘であることは、決して望ましいことではない。欧米に於いては已むを得ない歴史的必然性があつたとしても、新しい伝道地たる日本に於いて、その儘旧態依然たる分派對立を輸入することは、決して伝道の効果を挙げる所以でもなく、徳を建つる結果とならない。何時の日かは、各派のルーテル教会が必ず一つとなつて、日本に単一なるルーテル教会が確立せらるゝ日を待望しつつその実現に努力したいものである。このためには我らは虚心胆懐に忍耐をもつて、各派と懇談協議を重ねて相互の理解に資するところありたい。E・L・C（福音ルーテル教会）との神学校共同経営懇談会の如きは誠に有意義な試みであつた。ルーテル文書刊行会の共同経営事業、例えば「福音新聞」等の刊行出版の如きは、協力実現の最も手近かな良き一面であるが、この種の協力に止まらず出来るだけ多くの部門に於いても協同作業の実現に努力したいものである。

アウグスタナ派教会とは、第廿八回総会に於いて協約事項の協定事項の協定を可決して、爾来同派はわが日本福音ルーテル教会の一翼として、主として広島を中心とする山陽道地方の伝道開始の責任を分担して今日に至つた。われらは同派の寛大なる協力に対し感謝するものである。近く広島県三原、山口県宇部の伝道に着手せられる予定である。既に昨秋以来開始せられた同派の東京田園調布教会の伝道は、極めて順調なる発展を遂げつつあることは喜ばしい限りである。

福音ルーテル教会（旧フィンランド派）との合同の問題も数年来の懸案であるが、同教会総会議長溝口弾一氏の急逝、その他の事情により、一時停頓の状態であつた。然し同教会の新陣営の整備に伴い、合同問題は再び活潑化して、近くその実現の途につくものと思われる。

ミゾーリ派ルーテル教会の新しい計画たるラヂオ東京その他に於ける『ルーテル・アワー』の放送は、ラヂオによるキリスト教伝道の最新の試みとして社会の注意を惹いている。この試みにより生じたる求道者漸次その数を増すもの様であり、わが各地の教会に道を求め来るも漸次増加する様子である。放送は極めて伝道上の有効なる近代的設備の一つであつて、新聞伝道と共に、わが教会に於いても充分利用せらるべき利器であろう。現に大阪に於ける放送に際しては、関西のわが教役者諸氏が之に参加し奉仕してゐる。

関西及び山陰地方に於けるノールウェイ・ルーテル教会各派の伝道も着々と進捗しつつある。その経営するルーテル聖書学院には、わが篤信なる信徒にして之を学ぶもの多く、平信徒伝道者の養成に新しい道を開拓しつつある。この学院を通して、同派と本教会との連絡関係も亦極めて密接である。諾威ルーテル伝道会伝道局総幹事ヴォーゲン氏は本年三月来日されてつづさに日本の伝道事業を視察され、各地に講演されて良き印象を残された。

(三) フライ博士夫妻来訪

伝道開始六十年の記念總會に際し、北米合衆国一致ルーテル教会總會議長フランクリン・クラーク・フライ博士夫妻が三月廿九日来訪され、本總會に親しく臨席せられたことは感謝である。多端なるキリスト教界の世界的指導者として、寸暇なき活動をつづけてゐられる博士が、貴重なる時間を割いて来訪されたことは、同博士の外国伝道、殊に日本伝道に対する深き関心と同情とを物語るものである。来訪以来、各地に於いて、伝道、講演、視察等に多忙なる日々を過され、教会の内外に多大の感銘を与えられたのであつた。同博士の厚意と友情に対し總會は深甚なる謝意を表したい。六十年の歳月は流れ去つたが、わが教会は今尚若年の教会たるを免かれない。わが国教化の重任を果たすに当り、博士が常にわれらの友となり常に良き援助を与えらんことを願うものである。

資料引用

第 29 回總會議事録、1952.4.22-24, P27-30

議長報告

（一）一般教勢

明治廿六年(一八九三年)四月、佐賀の地に於いて、わが教会の伝道が開始せられてより六十年、記念すべきこの年を迎へて、こゝに第廿九回総会を開催し得ることは、無量な感慨を催すとともに、誠に感謝に堪えない所である。九州の一角に、僅かに十指に満たぬささやかなる信徒の群れをもつて開始せられたわが教会が、今や全日本に伝導網を張る今日の状勢を見るに至つたことを思えば、変わらざる摂理の御手のあつたことを思わざるを得ない。

本総会を開催するに当たり、われらは先づ、伝道開始以来、六十年の長きに亘つて、北米合衆国一致ルーテル教会が、わが国に寄せられたる愛と同情と厚き援助とに対し、衷心よりの感謝を捧げたい。別にしても敗戦後の疲弊したる我が教会に寄せられたる物心両面に於ける同情と援助に対しては、実に感謝の言葉なきほどである。その厚き援助がなかつたならば、今日の復興は不可能であつたであらう。本教会の盛衰消長が常に、海外同信の友の熱き祈りの中に覚えられるのみならず、殊にもこの記念すべき総会に、U・L・C・A 総会議長 F・C フライ博士夫妻が、親しく来訪せられたことは、本總會に対して、錦上更に花を添えるものであつて、本總會の真に光榮とする所である。

顧みて六十年間の過去は、国家としても教会としても、誠に多難多端の幾世紀であつた。再度の世界大戦の試練を経て、民族生活の凡ゆる方面に变革と動揺とを経験して来た。然し乍ら教会はその間に処して、充分とは言い得ないながらも、良くその活動を継続して今日に至つたことは、神の優渥なるめぐみと指導に依ることは勿論であるが、他面今は亡き多くの先輩教職並びに宣教師と、多年に亘り異教徒的環境のただ中であつても、なお良き信仰の戦いをつゞけて来た数多き本教会の会員諸兄姉の尊き献身と熱き祈りとの賜物であることは言うを俟たない。六十周年の記念総会に際し、之等に対し衷心よりの感謝の意を表したいと思う。

敗戦後の精神的虚脱状態につゞく昂奮状態も徐々に冷静に取り戻しある模様である。基督教を求むる者の態度も徐々に真剣着実の度を加えつゝあつて、これは寧ろ歓迎すべき傾向と言はねばならぬ。講和条約の発効が近づくにつれ、保守反動の傾向が徐々に現はれ始めてある微候があり、他面社会不安を醸し出す緒種の客観的状勢にとりかこまれて、今後の基督教伝道は必ずしも容易でないことを覚悟せねばならない。而もルーテルの徒は常に醒めているのである。わが教会は徐々に地味に伝道網を拡張してゆきつゝあるのである。一九五一年度に於いては、荒尾伝道所の開設の外に、各地に多くの地方教会所属の出張伝道所が設けられている。昭和二十六年度の受洗者の数も七百二名の増加であつた。現在わが教会の状勢によれば、教会伝道所四十三ヶ所、牧師三十七名、宣教師三十八名、伝道師四名、会員五千三百三十一名である。

然し乍ら、わが教会の現勢力をもつてしては、他の諸教団と比較して、なお縮小の感を免れない。日本のプロテスタント宣教開始以来、やがて百年に及ぼんとするのであるが、わが国に於けるプロテスタント教会では、カルビニズム的傾向が圧倒的であつたことは、否定し難い事実である。これでは余りに一面的のそしりを免れない。われらは宗教改革の根源にさをさして、ルーテル的神学と伝統がこの国に更に強調せらるべき必要を感ずる。改革者マルチン・ルーテルによる基督教の福音的理解は、わが国に於ける基督教の内容に一段の深さと豊かさとを与えることを信ずる。かくて我らはわが国に於けるルーテル教会の使命の重大性を自覚せねばならない。過去に対しては感謝の外ない。現在と未来に対しては希望と使命とを意識したい。六十年の恩寵を感謝すると共に更に勇躍して伝道戦線の拡大を計り、パウロの謂はゆる「ただこの一事を努力」なものでありたい。これこそ主に購われたる者の聖なる義務であり、また長年に亘つて我が教会に援助の手を伸べられた海外同信の友の期待に酬ゆる所以である。

資料引用

第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P25-27

(六) 宗教法人の認証申請

昭和二十六年三月卅一日実施せられた新宗教法人法に準じて、本教会の教会規則を作製すべき必要が生じたことは既報の通りであるが、このほど委員によりて準備せられた原案が出来上り、昭和廿七年一月号本教会機関紙『るうてる』紙上に公告せられる運びに至った。目下文部大臣の認証を申請中であるが、その認証も近いことであろう。包括団体としての本教会の認証され次第、被包括団体としての地方教会も、夫々規則を作成し地方長官の認証を得ることが必要である。之がために地方教会規則の雛型は委員に於いて準備中である。申請期限は昭和二十七年十月三日迄である。

資料引用

第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P33

日本福音ルーテル社団報告

本社は目下スタイワルト、クヌーテン、稲富、岸、アルスドルフ及び本田の各教師理事として団務を処理致して居る。

本社の目的は本教会に属する教会及び厚生事業に供する土地及び建物を所有し管理するにあつたが、先の博多総会の決議により教会の用に供する土地建物は本教会の宗教法人に委譲する事になつたために其の手續きを採り既に大多数の教会敷地は其の委譲登記を完了し、其の残りの少数の財産も近く其の手續を完了する見込みである。

尚、教会財産の委譲後も宣教師の用に供せらるゝ土地建物は本会社に於て所有し管理せらるゝ。

従つて新に本教会に入つたオウガスタナルーテル教会の宣教師館並に其の敷地は本社の名に於て保有されておる。

本教会の用に供する土地建物の移譲完了後は当然本社は改組されるべきものと信じます。

右 報告します。

日本福音ルーテル社団

理 事 本 田 伝 喜

資料引用

第 29 回総会記録、1952.4.22-24, P124

Tokyo Student Center

The report of the Japan Committee was presented by the Rev. Dr. John L. Yost, Chairman.

1. The following action was taken by the JELC Executive Committee(7/17/52). “VOTED” that we approve of the report of Tokyo Student Center Committee; and that we submit the enclosed statement of purpose and policies for the approval of the Board; and that we request Board approval of the plans.”

The Committee reports : “At the 60th Anniversary convention, Rev. Atsumi Tasaka was appointed student pastor, the Rev. Norman Nuding, at the completion of his language study, to be student missionary pastor. A Student Board of five persons was appointed: Pastors Makise, Kishi, Knudten, Tasaka and Murai. This Board is responsible for the program and the building of the Student Center.”

“The aim of this work is Evangelism among students. The project would be carried out in close cooperation with the ten Lutheran churches in the Tokyo area. The program would include a Sunday service, and a week-day program with the following activities: Bible Study, Prayer meetings, discussion groups, pastoral counseling, and recreational activities.”

The building plans have been approved by the Staff of Secretaries. The work for students is being done in the home of the pastor until the Center is completed.

Voted that we inform the church in Japan that we approve of the statement of the purposes and policies for the Student Center.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, December 2-4,1952, P297

AVACO

20. Dr. Martin of RAVEMCCO gave a report of the audio-visual program in Japan stating that the program has made progress on the field in spite of the handicap of inadequate studio facilities and personnel. Programs have been prepared for use in local areas; workshops have been conducted throughout the country for promoting the use of films for evangelistic purposes; films have been loaned to church groups. Mr. Ogawa has been carrying on this work almost single-handed. Dr. A.C. Knudten has been an active member of the Committee, and has made a fine contribution to the work. Mr. Martin presented the urgent need for providing a studio if the program is to become effective, and if it is to do an expanded program. The cost for the studio would be approximately \$75,000. This item has not been included in the request from RAVEMCCO for 1953. It is necessary to ask the cooperating Boards to give consideration to this request, and it is suggested that the payments be completed by 1954. It is coming to each Board as a "special" and with the request that the amount of contributions be decided by each Board. The action taken was: "VOTED to approach the Boards for a figure not to exceed \$75,000, payments to be completed by 1954; those who could pay in 1953 would do so."

Voted (a) that in consideration of the action of the Japan Committee of the Division of Foreign Missions to request \$75,000 of the cooperating Boards for the erection of a studio for AVACO in Japan, we approve a total contribution of \$5,000, to be paid in full by 1954, and that the request be included in the list for 1953 Non-Recurring Specials.

(b) that we ask the Women's Missionary Society to give consideration to making a contribution of \$1,000 towards the total of \$5,000 for the AVACO Studio in Japan.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, December 2-4, 1952, P305

31 福音ルーテル教会との合同に関する件

本田氏合同準備委員会を代表して、経過報告をなし、報告として承認し、満場一致起立を以て合同を可決し、本田氏祈祷を捧ぐ。

教会合同準備委員会報告

本委員会は委員長に稲富氏を推して委員会を組織し、稲富氏外遊後は本田氏其の職務を執ることとなる。本委員会は昭和二十七年十月二十七日東京池袋の福音ルーテル東京教会にて第一回委員会開催、出席者我教会側の委員稲富、武富、本田の三委員、福音ルーテル教会側委員山田、牛丸(総五郎)、井上の三委員出席第一回の接渉を行った。先づ第一に委員は双方共正式に派遣されたる正当なる委員であることを確認した。次で福音ルーテル教会側の山田委員より昭和二十七年四月我第二十九回東京総会に於て決議されたる日本福音ルーテル教会及び福音ルーテル教会との合同契約案並に日本福音ルーテル教会へ合同せるフィンランド福音ルーテル伝道協会日本ミッションとの協約草案がフィンランド伝道協会伝道局にて承認せられ、次いで昭和二十七年十月十一日開催の福音ルーテル東京総会に於ても異議なく可決承認されたる旨の報告あり之を諒承した。次に合同契約案並にミッションとの協約草案に就いて逐条審議したが先方に於いては何等の異議なく之を諒承せられた。第二回の委員会は昭和二十七年十二月一日我東京教会に於て開催、先方山田、牛丸、井上三員及委員外に小口季美氏陪席、我方武富、本田の二委員出席接渉をなす。此日は先づ双方教会及び教職数其の他教会の現況に就いて互に報告を交換して諒承した。

先方側の報告による教会の現状は次の通りであった。

- | | | |
|----------|-------|--------|
| イ) 東京教会 | 牧師 | 牛丸省五郎氏 |
| ロ) 大岡山教会 | 〃 | 牛丸総五郎氏 |
| ハ) 上諏訪 | 〃 | 山田与八氏 |
| ニ) 下諏訪 | 〃 | 〃 |
| ホ) 岡谷 | 〃 | 〃 |
| ヘ) 飯田 | 〃 | 小口季美氏 |
| ト) 赤穂 | 〃 | 〃 |
| チ) 札幌 | 〃 牧師 | 田村 均氏 |
| リ) 函館 | 〃 伝道師 | 和田秀男氏 |

以上の中和田英男氏を除けて五人は按手札を領したる正規教師たりとの報告があった。即ち教会数九個、教師数五名、伝道師一名、計六名。

宣教師は、

パオ・サオライネン	東京教会附属	ワルトネン夫妻	札幌教会附属
マルタミエロ	全	エヂル・バッカ夫妻	東京 //
チューネ・ニエミ	大岡山教会 //	ミス・ライチネン	大岡山 //
チロメ・ポルソ	諏訪教会 //	ミス・ピーライネン	東京 //
サンナ・リッポネン	札幌教会 //	// レマール	全

即ち三家族の宣教師と七名の女教師である。

次に来る今回総会に於ては可成福音ルーテル教会の会堂も使用して合同の実をあげる事、例えば総会の礼拝が合同感謝会又親睦会等に使用することを申合す。

其の他懇談会を重ねて第二回交渉を終わる。前後二回の会合を通じて交渉は極めて友好的雰囲気の中に終始し双方共完全なる理解と一致に到達した。仍って本委員会は来るべき我総会に於て合同参加提案可決せられ両教会の合同が実現して日本に於ける一つのルーテル教会の形成を見る様推奨する。

昭和二十八年四月十日

日本福音ルーテル教会
合同準備委員 本田伝喜
武富敏彦

資料引用

第 30 回総会記録、1953.5.5-7, P10,P114

資料 186 神学校共同経営委員会報告

神学校共同経営委員会報告

- 一、 昭和二十七年十月七日日本ルーテル神学校において委員会を開く。稲富、ハドル、岸出席。平井、ヴィクナー欠席(敬称略)。稲富を委員長、岸を書記に互選。

委員会は、福音ルーテル教会日本伝道部が神学校に於ける協力に関心を持ち、神学校「教師」として宣教師一名奉仕の申出のあったことを知り、わが教会が、この申出を感謝をもって受け、神学校理事会をして福音ルーテル教会と必要なる接渉をなさしむるよう総会議長に推薦することにした。

- 二、 昭和二十八年三月十九日静岡ルーテル教会において午前十時三十分より午後三時まで神学校問題につき協議した。(日本福音ルーテル教会出席者稲富、平井、クヌーテン、ハドル、ヴィクナー、岸。福音ルーテル教会側ハンセン、ハイランド、ステンバーガ、オールセン以上十名)。稲富委員座長となり、左の事項につき意見の交換をした。

I. 神の言の教理

II. 神学校における協力の具体案

- I. 神の言の教理については左の点が討議せられた。

- (a) 旧新約聖書は神の言であること
 - (b) 旧新約聖書は聖霊のインスピレーションによって書かれたものであること。
 - (c) 人間の救に対する神の啓示は、絶対にして完全であること。
 - (d) 聖書の中には、律法と福音とがあるが福音が主たる内容であること。
 - (e) 聖書はキリスト教信仰と生活の唯一の源であり規律であり手引きであること。
- これに関連して神学研究の態度について討議した。この問題についてまた神の言の教理について全委員の意見が一致したことは感謝にたえない。

- II. 本委員会は神学校協力に関して次の事項を説明した。

- (a) 神学校は日本福音ルーテル教会によって運営せられること。
- (b) 教授の資格は、日本福音ルーテル教会の教職にして総会において選ばれた者であること。
- (c) 神学校理事の資格は、日本福音ルーテル教会の会員にして総会において選ばれた者であること。
- (d) 財政的協力について

福音ルーテル教会日本伝道部側委員は、説明につき満足の意を表示せらる。

福音ルーテル教会日本伝道部との接渉によって示された友情と実質的一致に鑑みて、委員会は総会に次の提案をする。

日本ルーテル神学校における E,L,C 日本伝道部との協力方策として左の事項を考慮する。

- (a) 福音ルーテル教会日本伝道部よりの教師の身分は神学校理事会によって承認

せられた講師とすること。

- (b) 神学校規則の中に、E,L,C 日本伝道部より(Advisory member without vote) 一名を入れる条項を挿入すること。

昭和二十八年四月

委員長	稲富 肇
書記	岸 千年
委員	平井 清
	ハドル
	ヴァイクナー

資料引用

第 30 回総会記録、1953.5.5-7, P117

(4) 教団認証

宗教法人日本福音ルーテル教会規則の認証は、一九五二年十月二十四日雑宗百十五号により、文部大臣の認証が与えられ地方諸教会も夫々規則を作成して地方長官の認証を受けつゝある。

資料引用

第 30 回総会記録、1953.5.5-7, P34

資料 188 JALMA (日本ルーテル宣教師会) の規則

Constitution of the Japan Lutheran Missionaries Association

The following constitution was adopted by the JLMA(Action #407, May, 1953 meeting)

Article I. MAME

The name of this organization shall be the Japan Lutheran Missionaries Association of the Board of Foreign Missions, United Lutheran Church in America.

Article II. OBJECTIVE

This Association has as its objective the extension of the Kingdom of God throughout Japan, through the ministries of evangelism, education, and mercy in cooperation with the Japan Evangelical Lutheran Church.

Article III. FUNCTIONS

This Association shall function;

1. As the agent of the Board of Foreign Missions of The United Lutheran Church in America in all matters entrusted to the Association.
2. As the organization having oversight of the funds and property of the Association.
3. As the organization responsible for the preparing and submitting of the annual budget of the Association to the Board of Foreign Missions.
4. As the organization having authority to recommend to the Japan Evangelical Lutheran Church the assignment of missionaries for the realization of the above objectives.

Article IV. MEMBERS

1. The membership of the Association shall consist of all missionaries duly appointed and sent to Japan by the Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church.
2. Missionaries appointed and sent to Japan on a short-term basis shall be called associate members and shall enjoy all the rights and privileges of membership except that of voting.
3. Missionaries shall be entitled to vote in the Association after they have been on the field for one year.

Article V. OFFICERS

1. The officers of the Association shall be a President, Vice-President, Secretary, Treasure, and Business Manager.
2. Any voting member of the Association is eligible for election to any office

- of the Association.
3. They shall be elected by secret ballot.
 4. They shall serve for a term of one year and shall enter upon the duties of their respective officers at the close of the convention at which they were elected.
 5. They shall be eligible for only one successive re-election, except in the case of the Treasure and the Business Manager.

Article VI. DUTIES OF OFFICERS

President

1. He shall call and preside at all meetings of the Association and Executive Committee.
2. He shall countersign all official communications from the Association to the Board.
3. He shall sign all order made by the Treasure and shall keep a record of all such orders.
4. In the event the Treasurer is unable to fulfill his duties, the President shall assume those duties until a successors to the Treasure is elected.

Vice-President.

1. He shall act for the President in his absence or at his request.
2. In case the office of the President for any reason falls vacant, he shall perform the duties of the same until the next regular election of officers of the Association.
3. He shall be the chairman of the Budget and Finance Committee.

Secretary.

1. He shall record the minutes of each meeting of the Association and the Executive Committee.
2. He shall be the official correspondent of the Association with the Board of Foreign Missions.

Treasurer.

The Treasurer shall receive and disburse all funds according to the conditions laid down by the Board and the Association.

Business Manager.

The duties of the Business Manager shall be those which are defined in the By-Laws.

Article VII. EXECUTIVE COMMITTEE

Functions.

The Executive Committee shall be the servant of the association and shall function to carry out the desires of the Association and interim in accordance with its Constitution and By-Laws.

Composition.

1. The Executive Committee shall consist of five members, namely, the President, Vice-President, Secretary and two others, to be elected annually from among the voting members of the Association.
2. The Treasurer shall be an advisory member of the Executive Committee.
3. At least one member of the Executive Committee shall be a woman missionary.
4. The fourth and fifth members of the Executive Committee shall be eligible for only one successive re-election.
5. There shall be at least one member each from Kanto, Kansai, and Kyushu areas.

Article VIII. MEETING

1. There shall be one regular Annual Meeting of the Association, the time and place to be decided by the Executive Committee unless otherwise ordered by the Association.
2. A special meeting of the Association may be called at any time by a request of a majority of the voting members of the Association on the field, or at the discretion of a majority of the members of the Executive Committee.

Article IX. AMENDMENTS

This Constitution may be amended, subject to the approval of the Board, by a three-fourths majority vote of the voting members on the field at any regular meeting, provided a resolution to consider such amendment shall have been adopted at the preceding Annual Meeting.

Article X. BY-LAWS

The Association may adopt By-Laws in harmony with this Constitution, subject to the approval of the Board of Foreign Missions.

Date of Effectiveness

Upon approval by the Board of Foreign Missions, this Constitution shall be go into effect at the time of the next convention of the Japan Lutheran Missionaries Association.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, October 21-23,1953, P340-342

全ルーテル協議会委員報告

一九五三年十月十四日、十五日の両日に亘つて、奈良市奈良ホテルで開かれ、平井委員が出席した。主題として『日本に於けるルーテル教会の一致』Lutheran Unity Japan が選ばれていて、日本に現在伝道しつつある重なるルーテル派が、各々その立場より、この問題に対する見解を述べるころがあつた。すなわち、ハンセン氏 (E・L・C)、ビクナー氏 (アウガスタナ)、ダンカー氏 (ミズーリー派)、ホアース氏 (ノールウェイ伝道会)、平井清 (日本福音ルーテル教会) の五名が、各自の立場よりその意見を披歴し、質疑応答して、お互の理解を深めることに努めた。その結果、日本におけるルーテル教会の一致合同の必要にして望ましいことは、一同の認むるところであつたので、その具体的研究のため二種の研究委員会を設立することが決議された。すなわち、

- (一) 合同の基礎としての教理に関する研究委員と、
- (二) 教会の組織に関する研究委員の二つであつて、各派より各部門に一名宛を選出することとなり、ビクナー氏が招集者に任じられた。日本福音ルーテル教会側よりは、常議員会によつて、第一部委員に岸千年氏、第二部委員に牧瀬雄吉氏が選出された。

四月二十一日、および二十二日に、東京ルーテルセンターに於いて、前記二委員会が開かれた。折よく、米国一致ルーテル教会外国伝道局総幹アープ博士が訪日中であつたので、同博士も出席され、ルーテル派合同問題について一場の講演をされた。教理研究については、岸千年氏が『教会論』について発表された。この会合には、牧瀬、岸、平井の三名の外に、坪池全氏、田坂惇己氏も臨席されていた。我ら出席委員は、日本福音ルーテル教会教職としての立場から、合同問題に関して種々な意見を開陳して、相互の理解に資するところあらんと務めた。種々懇談の結果、日本福音ルーテル教会によつて作製される合同基礎案にもとづき、アープ博士滞在中に、更に協議会を開いて研究協議を重ねることの決議が承認されるに至った。

現在日本において伝道しつつある十一の各派ルーテル派教会並にミッションが、それぞれの民族的歴史的伝統と背景とが相違するにもかかわらず、すでにルーテル文書事業刊行会の一部門において完全に協力して事業遂行に當っていることは、驚くべき事実であるが、今や日本において唯一つのルーテル教会建設の大目的に向つて邁進すべき時機が到来したものと信じざるを得ない。既に「日本におけるルーテル教会の一致」なる主題が、宣教師諸氏によつてとり上げられたこと自体がこの事に対して深い示唆を与えるものと言わねばならない。この点において、既に六十年の歴史を有するわが教会は、先進してこの大理想の実現に努力すべきであると信ずる。従つて本委員は、この報告を結ぶにあつて、次の建議案を提出して、総会の慎重なる審議を乞うものである。

各派ルーテル教会合同促進に関する建議案

既に宗教改革以来のルーテル主義信仰において一致しており、且つまた日本において惟だ一つのルーテル教会を建設するは、われわれの理想であり、希望であり、伝道上の急務であると信ずる故に、われわれは次の事を提案する。

『日本福音ルーテル教会と日本における各派ルーテル教会およびミッションとの合同実現の研究と折衝を促進するため、本総会は七名の特別委員を挙げ、その合同の原則要項を作製せしめ、本総会の議を経て、各派に交渉せしめ、合同の運動を推進せしめること。』

以 上

昭和二十九年五月一日

全ルーテル協議会代議員

平 井 清
牧 瀬 雄 吉
岸 千 年
田 坂 惇 己
坪 池 全

賛 成 者

資料引用

第 31 回総会記録、1954.5.4-6, P227-228

資料 190 北米一致ルーテル教会(ULCA)との特別協約書の破棄

U.L.C.A.Executive Board Action on Special Agreement

16. The U.L.C.A. Executive Board at its meeting on June 30-July 1,1954, took the following action:

”1. Japan Evangelical Lutheran Church, cancellation of ‘Special Agreement’ with

“ Exactly as in Argentina, (Executive Board Minutes, April 1954, pp.853-8549), the Board of Foreign Missions had had a ‘Special Agreement’ with the Japan Evangelical Lutheran Church. This document was first adopted by the Japan Church as an appendage to its constitution in 1930 and was revised at the time of its reorganization in 1950 after World War II. The ‘ Special Agreement’ specifies the rights and privileges of missionaries and their relation to the Church on the field.

“ After hearing an intimation that the Foreign Mission Board would be willing to cancel this formal agreement or compact, the thirty-first annual convention of the Japan Evangelical Lutheran Church resolved at its 1954 convention to propose that the ‘Special Agreement’ be revoked. On its own volition, the Japan Evangelical Lutheran Church went on in the following sentence to assure the Board of Foreign Missions that ‘the present status and rights of the ULCA missionaries..... will be explicitly recognized’ in future by-laws of the Church which it will itself adopt.

In response the Board of Foreign Missions voted on June 23-24;

“ Whereas the Special Agreement between the Japan Evangelical Lutheran Church and the Board of Foreign Missions of the ULCA no longer seems to serve a useful purpose, and

“ Whereas the Japan Evangelical Lutheran Church has, by action of the 1954 Convention, stated that until a new agreement, which all cooperating bodies could accept, has been drawn up, the relationship of ULCA missionaries to the JELC shall remain the same as under the former agreement;

“ Be it Resolved that the Board of Foreign Missions recommend to the Executive Board of The United Lutheran Church in America that

the Special Agreement between the Japan Evangelical Lutheran Church and the Board of Foreign Missions be canceled.’

“ The Committee on Constituent Synods RECOMMENDS that the Executive Board concur with the Board of Foreign Missions in cancelling the ‘ Special Agreement’ with the Japan Evangelical Lutheran Church.

“ ADOPTED”

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, November 9-11,1954, P525-526

資料 191 ルーテル各派合同接渉委員会

38 各派ルーテル教会合同に関する建議案

「日本福音ルーテル教会と、日本に於ける各派ルーテル教会及びミッションとの合同実現の研究と折衝を促進するため、本総会は七名の特別委員を挙げ、その合同の原則要項を作成せしめ、本総会の議を経て、各派は交渉せしめ、合同の運動を推進せしむこと。」との全ルーテル協議会よりの提案は、質疑応答の後、満場一致可決せらる。

尚七名の委員は、常議員会に於て推薦することを議決せらる。

82 合同接渉委員会提案

稲富肇氏より次の如き提案理由の説明あり、日本に於ける一つのルーテル教会形成について真剣なる意見の開陳及び質疑応答ありたる後、満場一致本提案可決せらる。

「昭和二十九年五月四日から六日に至る三週間に亘って、東京日本青年館に於て開催せられた日本福音ルーテル教会第卅一回総会は、戦後の日本の教会復興並に伝道戦線拡張のための北米一致ルーテル教会の祈祷と愛とに対し、深甚の感謝の意を表すものである。また、この主に於て結ばれた愛と聖国の働きに於ける交わりとは、永久に絶えることのないことを心から願うものである。

戦後欧米から多数のルーテル教会宣教師が来朝せられて、伝道を開始せられたことは、わが教会の福音的キリスト教が大いに強化されることと信じて、なし得る最大限の協力を尽して来たものである。今日相互に主に在る愛と信仰との一致とを経験し、日本に於ける一つのルーテル教会建設の幻を鮮明に見ることが出来るに至ったことは、われらの大きなよろこびであり、また、神に栄光を帰し、感謝せざるを得ないところである。

この時期にあたり北米一致ルーテル教会外国伝道局の代表が来朝せられ、この現状をつぶさに認識されて、今後わが国教会の向かうべき道に対しよき理解を示され、わが教会との協約を破棄し、他のルーテル教会にも同一に適用し得る新たな協約作成に力を致したいと自発的に申出られたことは、われらの大きな感激である。

日本に於いて、より強く、又有効に伝道するには、強力な一つのルーテル教会を形成することが最も願わしいことでことを確信している我らは、全く同一の意見を持つものである。故に本教会は北米一致ルーテル教会伝道局に現協約を破棄し、あらたに加はつて来るどの教会にも適応する新協約の結ばれんことを提議する。なお新協約が結ばれ、一つのルーテル教会形成に参加するすべてのルーテル教会が承認するまでは、規則を改正し、その中に宣教師の現在の身分と特権とは確保されるものとする。」

合同交渉委員報告及提案

私共委員は昨夜本会報にて委員会を組織し委員長に稲富肇、書記に田坂惇已を互選し全ルーテル教派の合同に関し慎重に研究協議致しまして左の如く二つの提案を致します。

一、 協会に関する件

(別 紙)

二、 合同に関する件

本教会は左の根本方針により合同の交渉をなすこと

一、 地方教会を持つ一つのルーテル教会の形成

二、 一つの教師会

三、 教会総会による按手礼

四、 各地方部会内に於けるミッションの伝道活動はなるべく自由にする
こと

五、 教職の任命

一、 日本教職は凡て教会総会にて。

二、 宣教師は部会の推薦を経る。

六、 予算は教会一般予算と部会予算の二つとする

七、 教理に関する宣言

新しく組織される日本福音ルーテル教会は聖言の教理その他に関し世
に対する証として信仰の立場を宣言する

資料引用

第 31 回総会記録、1954.5.4-6, P8,14,257-258

資料 192 60年史出版報告

50. 日本福音ルーテル教会六十年史出版委員報告

福山猛氏報告をなし、報告は承認せらる。引続き、山内氏より、「六十年史発刊に尽力せられたる福山猛氏の多大の労苦に対し、一同拍手を以て感謝の意を表明し、常議員会に於て然るべく感謝を具体的に善処をすること。並に本史をウキンテル、ミラー、スタイワルト、リップード、ホールン諸氏其他に贈呈すること」との緊急動議提案し、可決せらる。

資料引用

第 31 回総会記録、1954.5.4-6, P11

資料 193 北米一致ルーテル教会への感謝決議文

感 謝 決 議 文

日本福音ルーテル教会は、北米一致ルーテル教会が六十年に余る長い間、福音宣伝のため、又主の御教会をこの国に建設するため、物心両方面に於て実に深き理解と燃ゆるような熱心を以て絶えず我らを支援せられたことに対し、深甚の感謝をあらわすものであります。

殊に今回北米一致ルーテル教会外国伝道局総主事アープ博士並に同伝道局幹事シャーク女史をおくられたことにたいし、心より深く感謝いたします。

アープ博士はスチューワードシップ運動に関する同氏の専門的知識と経験に基き、我が教会にスチューワードシップ運動の更に新しい展開をなすため、各地に於て熱心に講演し、又懇切な指導をなされ、信徒の教会奉仕の精神とその具体的方策について、大いなる指示を与えられました。スチューワードシップのことは、わが教会に於て漸く問題として取り上げられている矢先きであり、同氏の指導は、最も時を得たもので、我が教会にとって大きな収穫でありました。特に日本に於けるルーテル教会諸派合同の機運の熟した今日、アープ博士、シャーク女史の御二人が来朝せられ、合同のための協議会、又は研究会等に屢々出席されて、親切且つ熱心に指導的発言をなされ、日本に於けるルーテル教会諸派の合同促進の運動のため、大いなる貢献をなされたことは、感謝に言葉がない程です。

日本福音ルーテル教会は、今回このようなよき指導者を日本に送り、その宣教の熱意と協力的好意をお示し下つた北米一致ルーテル教会に対し、第三十一回総会の名によって、熱き感謝をさゝげるものであります。

右決議致します。

資料引用

第 31 回総会記録、1954.5.4-6, P17-18

全ルーテル合同接渉委員会報告

組織に関する提案

将来、組織される日本に於ける新しいルーテル教会の憲法及附則は各地方教会の代表(各地方部会から各々信徒一名、教職一名)により適切に定められるべきものであり、又、日本に於ける新しいルーテル教会と日本伝道に協力する国内外各派ルーテル教会及宣教師会との特別協約がその責任を負う代表者によって表明されるべきものである。故に吾々は今後協議並に起草して次の諸点が考慮されるよう提案する。

一、教会

- 一、日本に於ける新しいルーテル教会の基本的組織単位は地方教会である(憲法本文)。
- 二、教会はその属する地方部会の推薦によって、全国的教団組織の成員として受入れられる(憲法)。
- 三、教会は同一の信仰告白を有し、新しいルーテル教会の憲法並に諸附則に定められた条件に従って組織された信徒の団体である(憲法委託)。
- 四、少なくとも、十五名の現住陪餐会員を有する信徒の集団を地方教会と称する。地方教会はその経費の総額及牧師給の総額又はその一部を負担するものとする(附則)。
- 五、最低十五名の現住陪餐会員を有し、その教会の経費及牧師給の総額を負担する地方教会はその地方部会の承認を得て自給教会と称し、牧師を招聘することができる(附則)。

二、地方教会

- 六、責任の分担及び活動の円滑化のために、新しいルーテル教会は地方部会にわかれる。各「地方部会」は更に「地区」にわかれる(憲法)。
- 七、各地方部会は新しいルーテル教会の憲法及び諸附則に反せない限り、又新しいルーテル教会の総会の承認のもとに、各自の憲法及び諸附則を起草採用、又は修正することが出来る。

三、総会

- 八、総会は組織せられた教会に奉職する牧師並びに地方教会から選出された信徒代表及び新しいルーテル教会の規定に定められた一般代表によって構成せられる(憲法)。
- 九、総会は新しいルーテル教会の総会議長を通じて牧師の為の有資格者の按手札を認可する(附則)。

四、宣教師団体

- 十、宣教師は宣教師会の組織に加入する(特別協約)
- 十一、これら宣教師会の義務はすべて純粹に宣教師に関する事柄を取り扱うことにある。

五、牧師及び伝道師

十二、伝道者となることを希望するもの(牧師、伝道師志願者)は志願書、ルーテル神学校々長の推薦状及び出身地方部会の推薦状を新しいルーテル教会の常議員会に提出する。

ルーテル神学校以外の志願者は志願書、履歴書及び新しいルーテル教会に属する一つの地方部会の推薦状を常議員会に提出する、常議員会の推薦を受けた志願者は試験委員に委託される。常議員会の推薦により新しいルーテル教会の総会が最後の決定をする(附則)。

十三、他教派の牧師、伝道師で新しいルーテル教会に奉職したい者は、本教会に属する一つの地方部会及び常議員会の推薦に基いて試験委員により試験をうける(附則)。

十四、牧師、伝道師が試験委員による試験をうける時は、その志願者を推薦した地方部会は、その教師試験の口頭試問の場に二人の証人を送る(附則)。

十五、牧師、伝道師の招聘は次のようにして行われる。

- 1 自給していない教会は教会本部と協議の上、その地方部会の承認によって牧師伝道師を招くことが出来る。
- 2 自給教会はその地方部会及び教会本部と協議の上、之を招くことが出来る。
- 3 「地方教会」は一定の「地区」の伝道のため教会本部との協議の上、之を招くことが出来る。
- 4 教会本部は特定の全国的活動のため牧師及び伝道師を招くことが出来る
- 5 地方教会は信徒を雇用することが出来る。

十六、新しいルーテル教会は「全信徒が祭司である」との聖書の教えを遵守する但し、礼典を執行する者は通常教会の牧師と定める(附則)。

六、宣 教 師

十七、新しいルーテル教会に働くすべての宣教師は「教職」(牧師、伝道師の意)の地位を有する(特別協定)。

十八、すべての按手礼をうけた宣教師は新しいルーテル教会の「教師会」の成員と認められる(礼遇)。(按手礼をうけた宣教師で日本の教師会の事実上の成員であるなしに拘らず、その一人として認められること)(特別協定)。

十九、すべての宣教師は在住二年の後、その任命された新しいルーテル教会の地方部会において専任の選挙権を有する正会員とする。日本在住二年以下のものは準会員と認められる(特別協約)。この区別に対する主な理由は「言語の不自由」という点である。

二十、各宣教師会の会長は職権上、総会に於ては一般代表と認められる。

二十一、総会に於ける会長以外の宣教師代表は三組の組織教会につき一人の割合で認められる(協)。

二十二、これらの宣教師代表は地方部会から選出された一般代表と認められる(協)

二十三、男女に拘らず、その他すべての宣教師の総会一の出席は歓迎し、発言の特権を与えられる(協)。

二十四、各宣教師会々長は新しいルーテル教会の常議員会の顧問とする(協)

二十五、ルーテル神学校の働に協力する外国ルーテル教会及び宣教師会は神学校理事会に各一人の代表を出す(協)。

二十六、各宣教師会から一人財務部の顧問を出す(協)。

七、財 政

二十七、各、外国ルーテル教会及宣教師会は特定の地方部会の発展に特に関心をもち、その地方部会の会計を通じて当該部会に経済的援助を与える(協)。

二十八、各、外国ルーテル教会及び宣教師会は新しいルーテル教会の全体的活動に対して本部会計を通じて財政的援助を与える。

新しいルーテル教会の取扱う予算の種目は伝道事業、牧師・伝道師の俸給、文書、教会学校教育、神学校、青年伝道、総会及び行政に関すること(協)。

二十九、各宣教師会はそれぞれの地方部会代表及び本部財務委員を通じて地方部会及び教会本部予算の成立を助ける。

三十、外国ルーテル教会並びに宣教師会からのすべての補助金は新しいルーテル教会の議長又は地方部会長の要請に応じて各宣教師会会計より本部及び地方部会々計に支払われる(協)。

委員会は次の諸団体から代表者を以て構成される。

1. 日本オーガスタナ ルーテル ミッション
2. 福音ルーテル教会 日本ミッション
3. 日本福音ルーテル教会
4. ULCA 日本宣教師会
5. ルーテル教会 日本ミッション ミズリー派
6. スォーミ派 日本ミッション
7. 日本ルーテル同胞ミッション
8. フィンランド ルーテル福音伝道会
9. ノールウェイ ルーテル自由教会
10. ノールウェイ ルーテル ミッション
11. ノールウェイ 宣教師会

教 理 的 立 証

日本におけるルーテル教会諸派及び伝道協会を代表する我等は、聖霊が我らの中に造りたまひし信仰の一致の証示として、またルーテル主義の明確な使信の宣言としてこの教理的立証を提出する。本宣言は、聖書に記せられ、三つの共同信条とマルティン・ルターの両教理問答とルーテル主義に立つ者が一致する歴史的なルーテル教会信仰告白の中に示されている如きルーテル教会教理の完全な解明と見做されるものではない。これは、むしろ聖書の根本的真理に対するルーテル主義の単純な立証である。

聖書のみ(Sola Scriptura)

- 一、我等はまことの神にしてまことの人なるイエス・キリストがもろもろの道の中の唯一の道、もろもろの真理の中の唯一の真理、生命を与うる唯一の生命であることを一致して宣教する。
- 二、この事実の確認、人間による発見でも知的業績でもない。それは神の啓示である。
- 三、十字架につけられて、よみがえり給ひし救主キリストにおいて完成し、人間に与えられた神の啓示全体は、聖書の中に忠実に記録せられて保存せられ、聖書を通してのみ我等に来ることを信ずる。
- 四、聖書は全体としてもまた部分についても、聖霊の感動によって与えられた神の

言であることを主張する。

- 五、「聖書の靈感」とは、聖霊の特殊な活動がその選ばれた者をして、聖霊が彼らをして語らしめまた記さしめんとしたもうままた語らしめんとしたもうことを語らせ、記さしめんとしたもうことを記させたもうことである。
- 六、聖書は、キリスト教の教理と生活の唯一の真正にして誤りなく、適切無比なる源また規準であると告白する。
- 七、これらの真理は信仰によってのみ理解せられる。

信仰のみ(Sola Fide)

- 八、人は代償の死によって全人類の罪をあがないたもうたキリストを信ずる信仰によってのみ神に対し和解せられまた救われることを我等は確認する。
- 九、この原理によって、信仰のみが罪の赦しと生命と救いを得るものであることを確認する。
- 十、この救いを与える信仰こそ、絶対にまた無条件に神の賜物である。何人も、これに価することのない、獲得することも出来ない、また生まれながら、受けいれようとするものでもないものである。

恩恵のみ(Sola Gratia)

- 十一、人は恩恵によってのみ救われるものであることを信ずる。
- 十二、この恩恵は福音において、また洗礼と聖餐の礼典において提供せられる。
- 十三、聖霊は、全キリスト者にキリストの体の進展と拡大に用いられるよう恩恵の賜物を与えたもう。これらの賜物は、信仰者の生活における聖霊の実と教会の生活の中で特殊な奉仕を行うために賦与された賜物を含む。
- 十四、キリストの教会は福音が正しく説教せられ、聖礼典が正しく執行される場所にあることを主張する。
- 十五、神の言は空しくならずしてそのめぐみ深き目的を成就するという約束に完全な信頼をもって言葉と行為によって我等は福音を宣教する。

右報告します。

合同交渉委員会

資料引用

第 32 回総会記録、1955.5.3-5, P184-191

日本ルーテル神学校報告

1. 神学校の現状

学校法人設立

かねて準備中であった学校法人の寄附行為が昭和二十九年十二月八日付で東京都知事の認可を得同月二十一日付設立登記を完了した。

理事（長）平井清、牧瀬雄吉、山内六郎、本田伝喜、山田清、松平順、岸千年、ウイクナー、アルスドルフ

監事 林坦、福山猛

2. 職員

現在員

教授 三名 講師 二十八名 事務 三名 傭人 三名 計三十八名

(1) 新任

小川圭治 四月十二日（英語特講、ギリシャ語、神学演習）

福山 猛 四月十二日（聖書）

内海季秋 四月十二日（教会史）

名尾耕作 四月十二日（ヘブル語）

大高篤子 九月十四日（事務）

太田和子 十一月二日（図書）

牧瀬雄吉 十一月一日（牧会学）

アウクスト 三十年一月二十九日（英会話）

(2) 退職その他

ミラー 九月十八日（英会話）九州女学院へ転任

和田千菊 九月三十日（図書）

宮本武之助 三十年三月三十一日（宗教哲学）

(3) 学生

昭和二十九年四月十三日第四回教養科卒業証書授与式並びに新入学生の入学式を行った。

卒業生七名

右卒業生は孰れも神学科第一学年に引きつづき入学を許された。

新入学生

神学科 一年 三名（内一名は休学復校一名は聴講生として第二学期より入学）

教養科 二年 一名

教養科 一年 十二名

学生の異動

教養科 二年 一名 休学

神学科 一年 二名 退学（諭旨）

神学科 二年 三名 退学

昭和三十年三月現在で左の通りの学生が在学している。

教養科	一年	十二名
教養科	二年	三名
神学科	一年	九名
神学科	二年	九名
神学科	三年	一三名
計		四十五名

○新卒業生

昭和三十年三月十五日第二十六回神学科卒業式を挙行左の十三名を卒業生として送り出すことができた。

橋野省二(久留米教会出身)「第四福音書に於ける「ロゴス」の宗教史的背景について」

宝珠山幸郎(日田 〃)「新約聖書に於ける悪の力」

緒方一誠(神水 〃)「エレミヤの告白(内的生活)」

門脇聖子(神水 〃)「イエスの説教に於ける神の国の問題」

—イエスの終末論の要点—

河島与施夫(E・L・C) 「第二イザヤに於ける僕の歌についての考察」

高倉美和(日田教会出身)「新約聖書の原始的宣教の理解—出来事に対する信仰的発言としての宣教」

内野重人(唐津 〃) 「歴史におけるキリストの主権」

久米芳也(名古屋 〃) 「中世期に於ける免罪符について」

町野 洋(聖ペテロ 〃) 「教会と社会」

真木政次(小城 〃) 「アモスに於けるヤハウエの歴史的支配」

古財克成(大江 〃) 「十字架の論理—ガラテヤ書の神学」

江副栄一(小城 〃) 「キリスト教信仰に於ける罪観」

岸井 敏(E・L・C) 「Christianity as a Healing a Christian Insight into Psycho-analysis」

○夏期訓練

神学科第二学年は例年の通り夏期休暇中夫々左の教会に於て夏期訓練を受けた。

高木重男(広島教会)

前田貞一(三原教会)

福本秀盛(田園調布教会)

白石郁夫(本所伝道所)

森 勉(西条教会)

尚、夏季期間中教会応援を行った者は左の通りである。

久米芳也(神学科 三年)健軍教会

門脇聖子(〃)神水教会

緒方一誠(〃)合志教会

江副栄一(〃)半田教会(E.L.C)

徳善義和(神学科 一年)静岡教会(E.L.C)

石橋幸男(教養科 二年)大阪教会

池田 隆(教養科 一年)諫早教会

○修養会

九月九日神学科生一同国領 Y・W・C・A 憩いの家で一日修養会を行った。岸校長の発題講演「召命について」牧瀬総会議長「教会は神学生に何を求めるか」田坂伝道部長の挨拶等があり、午後分団協議会及び合同協議会が持たれ召命について再び反省する機会を与えられ有意義な一日を送った。

3. 特別講演

月 日	演 題	講 演 者
五月二十八日	宗教改革について	同志社大学神学部長 魚木忠一博士
六月 一日		
十月十九日	エヴァンストンについて	アガスタ・プレジデント ベンソン師
十二月九日		世界ルーテル連盟外国伝道部総主事ベヤケリ博士
十二月十五日	イエスの自己証示	シェラー師
同月十六日	イエスの死の意義	〃
一月二十五日	宗教々育について	エール大学教授 ヴィース博士
一月二十六日		スオミルーテル外国伝道局主事 クノス牧師
三月八日	日本社会と基督教	東京大学教授 隅谷三喜男氏
三月九日	神学と宗教哲学(バルト・ブルンナー・ティリッヒを中心として)	文学博士 神学博士 管田吉氏
三月十日	ルターに於ける自由の問題	青山学院教授文学博士石原謙氏

4. その他

○講師ハンセン氏は五月十三日休暇で帰米した。

○十月二十六日 集団検診を行った結果、一名が発病を発見されたが、初期なので直ちに帰郷休養せしめ、科学療法の結果一月より就学出来る状態に回復した。その他の者については、現在療養中の二名を除き、概ね良好である。

5. 予算、決算

別紙の通りである。

右報告致します。

日本ルーテル神学校長 岸 千年

資料引用

第 32 回総会記録、1955.5.3-5, P118

Mr. Makise's Resignation as President and Demittal of the
Ministry

9. The Executive Committee of the J.E.L.C. has accepted the resignation of Mr. Y. Makise as president of the J.E.L.C. and suspended him as a minister because he "disregarded the constitution, regulations, and actions of the Church and the Executive Board" and because he admitted his guilt in "living a life which does not befit a pastor and which brings dishonor and disgrace upon the Church."

Mr. Makise had admitted carelessness in the use of the funds of the Church and had admitted immorality. These admissions were made to one of the two committees of the J.E.L.C. which were appointed when the suspicion became strong that there were irregularities. One committee on the personal life of Mr. Makise was headed by Dr. Kishi, the president of the Seminary in Tokyo and the other on financial matters, by Mr. Honda, a senior pastor of the J.E.L.C.

At the convention held in May, 1955 an able layman was elected treasurer. He indicated that he would not have time to serve in that capacity. Mr. Makise had taken over the books of the previous treasurer about July 1954. The Convention elected the able layman in spite of his objections. At a meeting of the Executive Committee, he turned in his resignation but they insisted that he should lend his name but that the work would actually be done in the president's office. That layman, according to all the information received, now had the books in his hands.

When Mr. Makise made a loan of 3,000,000Yen(\$8,333) and had the papers drawn to mortgage the student center to secure the loan, the irregularities were discovered and the investigations began. There had been suspicions before. The note itself was signed by Mr. Makise and Pastor T. Tsuboike, a former treasurer, but the document authorizing the mortgaging of the property was signed by Mr. Makise and by five other clerical members of the Executive Committee: Pastors Ymanuchi, M. Tsuboike, Tasaka, Kashiwagi, and Aoyama. All of them claimed they signed it because they had complete confidence in the "gicho"(president). A few of them said they realized to some

extent what they had signed. Some of them said they thought they were signing the authorization to enable Mr. Makise to cash a 2,000,000 Yen promissory note given by Mr. Fujisaki, the former treasure. Mr. Makise had borrowed 1,000,000 Yen from the bank before and had repaid the loan.

The Executive Committee(Jogiin)has appointed the Rev. Rokuro Yamauchi, 1 Shimo Iwashi Machi, Fukuoka, Japan, as president until the next convention.

The Executive Committee appointed the Japan Lutheran Missionary Association treasurer(the Rev. Robert Meynardie up to January 23 and since that time the Rev. William Billow)as treasurer of the J.E.L.C. until the next convention.

The available books and other financial records have been turned over to the auditing firm, Peat, Morwick, Mitchel and Co. for examination and audit. The executive secretary and Pastor Meynardie had a conference with Mr. Barker of the firm on January 25, 1956. The examination had not gone far enough to be conclusive. According to Pastor Kashiwagi, chairman of the Finance Committee, funds totaling 13,685,200(\$38,000 U.S.) are missing. A more complete report will not be available until the audit is completed. Mr. Makise has also provided information as to the projects for which the funds were used.

The auditing firm is recommending a system of keeping accounts for 1956 and will provide an estimate of the cost of services for setting up the books for 1956 and for a monthly review for 1956.

The executive secretary met with the Executive Committee(Jogiin) of the J.E.L.C. on January 14, 1956 in an all day session. Pastors Yamauchi, the new president, expressed the apology on behalf of the whole Church to the Board of Foreign Missions. The members of the committee assert now that they should have recognized and stopped the irregularities but they had confidence in the president. They are determined that a good system of keeping the accounts of the Church must be set up and that audited reports must be presented to all groups that provide funds. Some of the suggestions made by members of the Executive Committee as to what should be done were; quarterly financial reports; economy as in the 1956 budget to make up some of the loss; non-recurring capital requests must be delayed; no building to be begun until the funds are in hand; provision that a clergyman or a layman may be treasurer; sell some of the properties that were purchased without authorization; sell some of the land in cases where more land than necessary had to be purchased to secure the location; take 10% from all pastors' salaries.

Early in January the Board advanced the budgeted sum for the J.E.L.C. and the J.L.M.A. for the first quarter(\$43,715.75). Out of this advance the 3,000,000 Yen(\$8,333) loan on the Student Center was repaid. The J.E.L.C. treasury carried a bank balance of 323,763 Yen at the beginning of 1956. Thus it seems that the current bills can be met.

Funds for quite a few projects which had been advanced by the Board have been used for other projects or in an unexplained way. An example is in the building of additional space to provide for the central offices of the J.E.L.C. back of the Student Center building. Mr. Makise's accounts show an expenditure of 1,484,485 Yen, yet he has reported also that the cost was only 900,000 Yen. On his own records for this project are two entries totaling 408,935 Yen which were paid to Mr. Makise. Thus far no supporting papers for these expenditures have been found. The building of the additional space had never been authorized by anyone except Mr. Makise, according to reports made at the meeting of the Executive Committee. Another instance is in the account for the purchase of the land for the Koromo Church. Pastor Harold Deal handled this purchase. On Mr. Makise's records 40,000 Yen are recorded as having been paid to Mr. Makise to be paid on the land in addition to the 260,000 Yen which were paid in another transaction. Pastor Deal says that he did not receive the 40,000 Yen from Mr. Makise.

The auditors will assist the treasure in setting up the books for the month of January.

The Committee of the Church to investigate the finances will assist the auditors in making the necessary checks on items in the accounts to get as sound an audit as possible under the circumstances.

There is at least one building project completed for which there does not seem to be any funds and, of course, quite a few others that have not been begun. No others will be started before funds are in hand according to President's Yamauchi's statement at the Executive Committee meeting.

The Executive Committee will meet February 22-23, 1956 which is in the early part of Pastor Jonson's proposed visit to Japan. The convention will probably meet in mid-April. At that time the necessary actions and election to meet the situation caused by Mr. Makise's unfaithfulness will have to be taken, in addition to the usual convention business.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, February 7-9,1956, P46-48

資料 197 全ルーテル合同接渉委員会報告

全ルーテル合同接渉委員会報告

一九五六年八月三十日東京、小金井浴恩館に於いて教職退修会が開催された機会を利用して委員会を開催した。

出席者 本田、江口、青山、山内、田坂、委員の外に岸、平井

四月十七日神戸に於ける合同委員会の報告をなし、わが教会のとるべき態度について協議した。

第一にわが教会としてはルーテル諸派のうち、合同可能とみられる団体が、出来るだけ早く合同体勢をととのえることを希望する。

第二、地方部会の自主性と権威の保持に関しては、合同の当初ある程度の譲歩はやむを得ざることであるが、ことなるミッションとの特別な関係ある地方部会が長く自主性と権威を保持することは、完全な合同をさまたげるおそれがあるので、最初は特別協約によってある期限をもうけても、合同の目標は、このようなことではなく、完全合同にあることを明記にすべきこと。

第三、ルーテル教会々員の生活実践に関する規定を作製しようとする意向については、わが教会としては、それによって律法主義におちいる点と、信仰生活の基調はそのような規定ではなく、福音であるべきことを主張し、規定をさだめることには反対、むしろ。ハンドブックのようなものを作製することを提案する。

以上のことを協議した。

十一月二十八日東京YMCAの全ルーテル合同委員会には、委員平井、田坂と共に、合同接渉委員本田、江口、山内、小口の諸氏もオブザーバーとして参加種々意見を述べた。

右報告いたします。

昭和三十三年二月 日

全ルーテル合同接渉委員

田坂（長）、本田、江口

山内、青山、小口、徳永

資料引用

第34回総会記録、1957.5.7-5, P58

資料 198 故山内量平牧師記念事業委員会報告

故山内量平牧師記念事業委員会報告

一、組 織

本委員会は互選の結果、本田伝喜が委員長に選任された。

一、事 業

委員会として決定した事業は次の三つであった。

- (1) 同牧師の墓地内に記念碑を建立すること
- (2) 同牧師に関する小冊子を発行すること
- (3) 同牧師の在任せられた教会に写真を掲ぐること。この事の実施は各当該教会に一任することとなした。

- 一、(1)の記念碑建立に対しては数回の実施調査の上、令孫山内光和氏の承認を得て、和歌山県田辺市新屋敷町の同氏の出身教会たる日本基督教団田辺教会墓地内の同氏墓地の左側に花崗石材台石五寸、墓石高さ三尺、尺巾一尺二寸に次の碑文を刻した。

碑 文

主ニ在リテ終末ノ日ノ復活ヲ待チツツアル故牧師山内量平氏ハ本教会ガ明治二十六年(一千八百九十二年)四月二日佐賀市ニ於ケル宣教開始ノ際ノ最初ノ邦人教師デアッテ、佐賀教会ノホカ、博多、大阪ノ二教会ノ創設ニモ当ラレタ。誌シテ記念トスル。

昭和三十二年二月二十五日

日本福音ルーテル教会建之

一、建 碑 式

建碑工事は昨年末竣工したので、去る二月二十五日午後二時より現地において建碑式を行った。

○プログラム

	司 式 者	本 田 牧 師
一、讃 美 歌	一九一	一同
一、聖書朗読	ロマ書一〇、一一五	松 岡 牧 師
一、祈 禱		同
一、山内牧師の履歴及建碑の経過報告		本 田 牧 師
一、建碑の辞(別紙)		同
一、讃 美 歌	二一三	一同
一、説 教	「死の祝福」	スタイワルト博士
一、讃 歌	二六七	一同
一、祝 辞	日本基督教団 日本基督南部教会牧師	田辺教会長老 升崎外彦氏
一、主 栄	五四一	一同

一、祝 禱

スタイワルト博士

○建碑の辞

父と聖子と聖霊の聖名によりて

我等今全能の神の御前に於て我教会最初の邦人牧師であった故山内量平牧師の功績を長く記念するために茲に日本福音ルーテル教会の名に於いて記念の碑を建立する。

神の御名は讃むべきかな

昭和三十二年二月二十五日

日本福音ルーテル教会

来会者は東京より故山内直丸牧師夫人アヤ子刀自、令息山内光和氏及び親族、市内日基教団、聖公会、日本基督教会の三牧師、田辺教会の会員数十名出席、小雨煙る中に厳かに建碑式を終わった。

尚建碑の費用は二万五千元、総会献金は二千八百円であった。

以上報告致します。

昭和三十二年二月二十八日

記念事業委員

本 田 伝 喜
山 内 六 郎
田 坂 惇 己
徳 永 利 雄

資料引用

第 34 回総会記録、1957.5.7-9, P50-51

十四 デンマーク伝道会(DMS)との協約の件

日本福音ルーテル教会とデンマーク伝道会とが、左のような協約を結び、日本におけるルーテル教会の発展のために事業を行うことは承認された。

「日本福音ルーテル教会とデンマーク伝道会(DMS)との協約

日本福音ルーテル教会とデンマーク伝道会とは、同一の信仰と信仰告白を保持する。

両者は、神の国の働きと日本における一つのルーテル教会の発展に同じ目的を有する。

このゆえに、日本福音ルーテル教会とデンマーク伝道会は、以下の協約を結び、相共に事業を行うものである。

第一 働きの地域

- (一) デンマーク伝道会は、北海道東部における福音宣伝の働きを担当する。

第二 部 会

- (二) 少なくとも三個の教会が、北海道の該地域に組織された暁には、日本福音ルーテル教会内において新しい部会を結成することができる。
- (三) 日本にあるすべてのデンマーク伝道会に所属する宣教師は、この部会組織の正議員となる。
- (四) 北海道において新しい部会が組織されるまで、該地域内の宣教師は、東信北部会に所属する。

第三 宣教師会

- (五) 日本におけるデンマーク伝道会の宣教師は、『在日デンマーク宣教師』(DMSJ) という名の下に、宣教師会を組織する。

- (六) 宣教師会の任務は、次の通りである。

イ、 純粋に宣教師に関する事項の処理

ロ、 日本福音ルーテル教会との協議の下に、宣教師の任地およびその働きの様式を決定する。

ハ、 該地域内における日本の働き人の任命、および日本の教会に関係あるすべての事項について、日本福音ルーテル教会の機構を通じて働くこと。

第四 総 会

- (七) 日本にあるデンマーク伝道会の按手された宣教師は、日本福音ルーテル教会の教師会の議員となる。

- (八) 宣教師会の会長は、日本福音ルーテル教会の総会の正議員となる。

- (九) 該地域内における組織された教会三個ごとに、伝道宣教師一人が総会正議員に加えられる。

- (一〇) その他の日本におけるデンマーク伝道会のすべての宣教師は、男女を問わず総会の席上において準議員として待遇される。

- (一一) 日本福音ルーテル教会総会において、該地域に任命される日本人教職については、デンマーク伝道会と協議されるものとする。

- (一二) デンマーク伝道会の宣教師の一人は、財務部の顧問となる。

- (一三) 総会は、デンマーク伝道会の代表者を、総会の重要な委員—たとえば、神学校理事会または伝道部会などに参加できるような——に考慮する。

第五 財政

- (一四) 日本におけるデンマーク伝道会によって調達された資産は、北海道の該当地域に使用される日本福音ルーテル教会の働き人が該当地域に到達した時、相互間に財政的協定をする。
- (一五) 日本におけるデンマーク伝道会は、日本福音ルーテル教会の全般的事業—たとえば、伝道、神学校その他の——に財政的援助をするため、相互間の協定により、財政的能力に応じて年に特定額を支弁する。
- (一六) 日本におけるデンマーク伝道会の宣教師の一人は、日本福音ルーテル教会の年度予算作成にあたり、相談にあずかるものとする。

第六 財産

- (一七) 教会および牧師館の土地と諸建築物はすべて、『宗教法人日本福音ルーテル教会』の名の下に登記される。ただし、宣教師の住宅は、デンマーク伝道会によって所有される。

第七 デンマーク伝道会の本部

- (一八) 日本福音ルーテル教会は、デンマーク伝道会の本部に対して、事業および予算の年次報告を送るものとする。
- (一九) 日本福音ルーテル教会議長のなすデンマーク伝道会本部への公的通信は、その写しを送って、すべてデンマーク宣教師会会長に知らせる。

第八 改訂と解除

- (二〇) この協約の条項は、日本福音ルーテル教会とデンマーク伝道本部との相互協定によって、改訂することができる。
- (二一) 必要または得策と考えられる場合には、この協約は少なくとも一年通告期間において、双方(日本福音ルーテル教会とデンマーク伝道会)のどちらの側らでも、解除を行うことができる。

第九 協約が有効となる時期

- (二二) この協約は、日本におけるデンマーク伝道会の最初の宣教師が、北海道に住んで働きに着手した時から、効を発するものとする。

昭和三十四年五月五日

日本福音ルーテル教会総会議長
山内六郎
デンマーク伝道会代表者
バルトルデイ

」

資料引用

第36回総会記録、1959.5.5-7, P3~P5

資料 200 キリスト教伝道団(CMB)との協約

十六 キリスト教伝道団(CMB)との協約の件

東亜キリスト教道友会が、日本福音ルーテル修学院教会となることに関し、日本福音ルーテル教会とキリスト教伝道団が、左のような協約を結ぶことは承認された。

「 東亜キリスト教道友会が、日本福音ルーテル修学院教会となることについての日本福音ルーテル教会とキリスト教伝道団(CMB)との協約

日本福音ルーテル教会とキリスト教伝道団とは、同一信仰と信仰告白を保持する。

両者は、神の国の働きと日本における一つのルーテル教会の発展に同じ目的を有する。

このゆえに、日本福音ルーテル教会とキリスト教伝道団は、以下の協約を結び、相共に事業を行うものである。

東亜キリスト教道友会は、以下の基準によって日本福音ルーテル修学院教会となる。

- (一) キリスト教伝道団(以下 CMB という)の教会とその財産は、日本福音ルーテル教会の名によって登録される。——そして財産の所有に関する特別な協定を、日本福音ルーテル教会と CMB との間に結ぶ。
- (二) 日本福音ルーテル教会は、修学院教会のために牧師を用意する。
- (三) 修学院教会は、日本福音ルーテル教会の関西部会に所属する。
- (四) CMB は、日本福音ルーテル教会の予算(牧師給、神学校費、その他)に対して財政的援助をする。その額は、働きの実際と CMB の財政能力に従い、年々相互間の協定によって決定される。
- (五) CMB を代表する宣教師一人は、日本福音ルーテル教会総会の正議員となる。
- (六) この協約の条項は、日本福音ルーテル教会と CMB との相互協定によって、改訂されることができる。
- (七) この協約は、必要または得策と思われる場合には、少なくとも一年以上の通告期間において、日本福音ルーテル教会または CMB のどちらかの側らでも解除することができる。
- (八) この協定は、日本福音ルーテル教会総会と CMB の本部の承認を得て、発効するものとする。

昭和三十四年五月五日

日本福音ルーテル教会総会議長

山内六郎

キリスト教伝道団代表者

トムセン」

山内六郎氏は、わが教会を代表し、バルドルデイ氏は DMS を、トムセン氏は CMB を代表して、協約調印をなした。

続いてバルドルデイ、トムセン両氏は、挨拶をのべ、平井清氏は、総会を代表して祝辞をのべた。

資料引用

第 36 回総会記録、1959.5.5-7, P5～P6

解題・解説

第8章 自立に向けて（1963年～1974年）

第1節 海外教会との協力態勢 JCMの時期

第2節 「アスマラ発言」とその波紋

第3節 自立達成の努力

資料 201 日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会との協約（第39回総会記録、1963.4.30-5.2 P74～P77）

日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会の合同に関する最終的協約書が交されたのは1963年5月1日である。その翌日の2日午後3時半から東海福音ルーテル教会は市ヶ谷の学生センター礼拝堂にて臨時の解散総会を開き、日本福音ルーテル教会と合同することを可決した。こうして、教師数113名、宣教師98名、教会数138を有する日本福音ルーテル教会が誕生した。

資料 202 デンマーク伝道教会(DMS)との協約に対する覚書（第39回総会記録、1963.4.30-5.2 P55～P56）

第39回総会に報告されたデンマーク伝道教会(DMS)との宣教協約に関する覚書である。

資料 203 東海ルーテル聖書学院の移管に関する件（第5回運営委員会、1964.4.6-8 P16,P22～P23）

静岡市の古庄に、「中堅信徒の養成」を目的として、1953年に創設された東海福音ルーテル教会の聖書学院は日本福音ルーテル教会との合同により、日本福音ルーテル教会へと移譲することを第5回運営委員会にて確認し、合同総会に提案していった。

資料 204 ブラジル伝道計画案（第5回運営委員会、1964.4.6-8 P16,P20～P21）

1964年5月の熊本での総会で最初のブラジル宣教師・藤井浩牧師をブラジル・ルーテル福音告白教会(IECLB)との宣教協力により、サンパウロに派遣することでブラジル伝道は始まった。ブラジル・サンパウロでの最初の公的な礼拝が翌年の10月31日の宗教改革記念主日に守られた。

**資料 205 北ドイツ・ミッションとの協約(第 1 回定期総会、1964.5.6-7 P20
~P21)**

第 1 回定期総会に報告された日本福音ルーテル教会と北ドイツ・ミッションとの協約「Memorandum」(覚書)である。

**資料 206 日本ルーテル教団との神学教育に関する協約 (第 5 回常議員会、
1965.7.7-9 P191~P193)**

1965 年 4 月 12 日に最終案としてまとめられた日本福音ルーテル教会、日本ルーテル神学大学及び日本ルーテル教団による神学教育プログラム(神学院)の
関する神学教育協力の協約書である。

**資料 207 日本ルーテル神学大学移転経費 (ULCA Board of Foreign Mission
Minutes, June 14-16,1965, P379)**

1964 年 1 月に大学設置認可を受けた「日本ルーテル神学大学」は設置基準に
適う校地・校舎の建設とそれ伴う移転問題が課題となっていた。さらに、1965
年 7 月の日本ルーテル教団との神学教育に関する協約の実現もあり、新しいキ
ャンパスの確保が求められ、国際基督教大学の敷地 7 千坪に新たなキャンパ
スの本館、図書館、チャペル、学生寮、教職員住宅を建設することの総合計画
をまとめ、土地取得の予算は 2 億 8,000 万円、建築費は 3 億 6 千万であること
を海外支援協会に伝えた。そこで、1965 年 4 月、エルサレムにて、アメリカ
の支援教会 ALC と LCA,それに日本ルーテル教団を支える LC-MoS、さらに
フィンランド宣教師・団体 LEAF も加わり、予算案を承認した。

**資料 208 日本福音ルーテル教会とアメリカルーテル教会(ALC)協約 (第 5 回
常議員会、1965.7.7-9 P209~P210)**

日本宣教に参入しているアメリカルーテル教会日本伝道部に関する日本福音
ルーテル教会とアメリカルーテル教会との間における宣教師に関する協約書で
ある。

**資料 209 日本ルーテル神学大学学長報告 (ULCA Board of Foreign Mission
Minutes, November 8-10,1965, P650-651)**

ULCA ボード議事録に記されている日本ルーテル神学大学学長岸千年による
学長報告である。大学設置認可を 1964 年に受けたが、その条件として校地校舎
の拡充があるので、国際基督教大学の敷地(7 千坪)の購入、移転を検討している

ことが触れられている。

資料 210 東海ルーテル聖書学院寄附行為（第 6 回常議員会、1968.1.10-12 P338～P342）

福音ルーテル教会(ELC)日本伝道部が 1954 年に静岡市古庄に開設した「東海ルーテル聖書学院」は日本福音ルーテル教会との合同に伴い、新たなる寄附行為を 1968 年 1 月の第 6 回常議員会にて定めた。内容は「目的及び事業」「役員及び理事会」「教職員」「資産および会計」である。

資料 211 ドイツ福音ルーテル教会連合及び北ドイツ伝道協会と日本福音ルーテル教会との関係報告（第 4 回常議員会、1969.6.17-19 P177～P178）

1969 年 4 月、エチオピアでの国際会議での協議懇談を経て、6 月の第 4 回常議員会に提出された「ドイツ福音ルーテル教会連合(VELKD)及び北ドイツ伝道協会と日本福音ルーテル教会との関係に関する報告」である。北ドイツ伝道協会よりディアコニアの働きのために派遣されているヘンシェル女史を新たにドイツ福音ルーテル教会連合より派遣される宣教師とすることが確認されている。

資料 212 日本ルーテル神学大学報告（第 4 回定期総会報告,1970 年 5 月 5 日～7 日、p145～146）

1966 年 10 月に日本ルーテル神学大学が国際基督教大学から新キャンパス敷地(7 千坪)を 2 億 8 千万円で取得し、三鷹への移転するための校舎新築設計を建築家村野藤吾に委嘱し、1968 年 9 月末に本体工事を鹿島建設が着工、約一年後の 1969 月末に本館及び 12 月にチャペルが相次いで完工、引渡しをうけ、12 月 15 日落成感謝礼拝を行なったことが 1970 年 5 月の第 4 回定期総会に報告された。

資料 213 日本福音ルーテル教会とドイツ合同福音ルーテル教会協約案(第 6 回常議員会、1971.11.16-17 P384～P385)

1971 年 11 月の第 6 回常議員会に提出された日本福音ルーテル教会並びにドイツ合同福音ルーテル教会との間にかわされた了解事項案である。

資料 214 ブラジル福音ルーテル教会と LWF の協約書 (第 6 回常議員会、
1971.11.16-17 P385～P386)

1971 年 11 月の第 6 回常議員会に提出されたブラジル福音ルーテル教会 (IECLB) とルーテル世界連盟 (LWF) との間で締結されたブラジル国内における民族的グループのルーテル教会の統合に関する協約である。

資料 215 日本福音ルーテル教会並びに日本ルーテル教団との間における神学教育に関する協約改訂案 (第 6 回常議員会、1971.11.16-17
P387～P388)

1971 年 11 月の第 6 回常議員会に提出された日本福音ルーテル教会並びに日本ルーテル教団との間における神学教育協力に関する協約改訂案である。

資料 216 JELC と伝道協力委員会(JCM)加盟教会・協会との協約案(第 5 回
総会、1972 年 5 月 2 日-4 日 p27～p29)

1972 年 5 月の第 5 回総会に提出された日本福音ルーテル教会と伝道協力日本委員会(JCM)加盟の教会及び協会との協約である。内容は「宣教師の働き 宣教師会」、「必要経費についての支援」、「連絡」、「特別協約」となっている。

資料 217 靖国神社国営化法案抗議声明((第 6 回総会、1974 年 5 月 2 日-4 日
p14)

1974 年 5 月の第 6 回総会で採択され、自由民主党総裁田中角栄に送付した靖国神社国営化法案抗議の総会声明である。

資料 218 自立踏み出すに当たっての声明(第 6 回総会、1974 年 5 月 2 日-4 日
p18)

1970 年の熊本における第 4 回定期総会において、自立を全教会の課題として取り組み、その第 1 歩として、1974 年末をもって経済的自立の目標を達成することを 1974 年 5 月の第 6 回総会の場で総会声明として確認した。

資料 201 日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会との協約

日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会との協約

前 文

1. 日本福音ルーテル教会と、東海福音ルーテル教会(以下両教会という)は、合同して新たに日本福音ルーテル教会を形成するにあたり次の協約を結ぶ。
2. 両教会はこの協約を前提として合同する。
3. この協約は、合同創立総会に先んじて両教会の代表者が相互に署名捺印して交換し、合同創立総会に報告して承認を受けることとする。

本 文

4. 教区の形成について
 - 1) 日本福音ルーテル教会は、(新)日本福音ルーテル教会にあって3つの教区を形成する。
 - 2) 東海福音ルーテル教会は(新)日本福音ルーテル教会において一つの東海教区(仮称)を形成し、その憲法・規則を教区の憲法・規則に切りかえて実施する。
 - 3) 日本福音ルーテル教会東海部会所属の4つの教会は機の熟したとき、正当な手続きを経て、(新)日本福音ルーテル教会東海教区に編入する。
 - 4) 東海福音ルーテル教会に所属して東京地区にある三つの教会は、機が熟したとき、正当な手続きを経て東教区(仮称)に編入する。
 - 5) (新)日本福音ルーテル教会と、各個教会との連絡並びに教師の任免配置転換に関する事項は教区を通して行う。
5. 支援団体との関係・並びに教会運営費の分担
 - 1) 東海福音ルーテル教会と A・L・C・日本伝道部との間に結んである特別契約は存続する。
 - 2) 日本福音ルーテル教会が、在来各支援団体と結んでいる契約は存続する。
 - 3) (新)日本福音ルーテル教会事務局の費用分担については、東海教区に関連があって(新)日本福音ルーテル教会内の他の三教区に共通する事務処理に必要な費用の分担をする。その他共通の運営となるものの費用についても、具体的な数字に基いて必要な責任を分担する。
6. 既存並びに継続する事項
 - 1) 両教会が在来行って来ている伝道活動、各種事業ならびに現在両教会に所属する教師、伝道師の身分・待遇並びに各種の便益は互に認める。継続処理中の事柄で、第一回定期総会以前に完了したものについても同じである。
事務職員、また、施設の従事者の処遇は第一項に準じる。
 - 2) 健康保険、年金等は、凡て教会事務局において一括取扱うこととし、その責任負担と受益は共に共通とする。
7. 行政参与

- 1) 合同創立総会后、第一回定期総会に至るまでの行政は、現在の合同準備委員会を運営委員会に切りかえて行うが、その構成は次の如くする。日本福音ルーテル教会より選出されたもの8名、東海福音ルーテル教会より選出されたもの4名計12名。
- 2) 所要員数を、両教会は、それぞれ人選して運営委員会を組織し、委員会に必要な役職を互選する。
- 3) 第一回定期総会以後(新)日本福音ルーテル教会東海教区からは教区長の外、教師、信徒、宣教師各一名を常議員会の構成員中に加えることとし、教区長以外の教師、役員または局長の中には入らないときには、無任所常議員として加わるものとする。

但し、第一回と第二回定期総会において、議長または副議長の何れか一名を東海教区から選出することとする。

8. 協約の修正、または廃止について

この協約は時の推移と状況の変化によって、(新)日本福音ルーテル教会の運営上、修正または廃止を要すると考えられるに至った時は、(新)日本福音ルーテル教会の常議員会と東海教区の常議員会は、該当する事項につき、協議して、その処理に当たる。

以上の協約事項を互いに承認し、英訳文を添えてこゝに署名捺印して、後日のため調印者各一通を保有する。

昭和38年(1963年)4月 日

日本福音ルーテル教会

総会議長

合同準備委員会委員長

東京都中野区鷺宮2丁目921番地

⑩

同副議長

合同準備委員会委員

東京都大田区仲六郷1丁目23番地

⑩

東海福音ルーテル教会

総会議長

合同準備委員会副委員長

東京都文京区林町71番地

⑩

同副議長代理

合同準備委員会英文書記

東京都文京区林町66番地

⑩

資料引用

第39回総会記録、1963.4.30-5.2 P74~P77

52 D.M.S との協約に対する覚書の件

デンマーク伝道教会との協約に対して覚書を附することを承認し、新協約案と共に総会に提出、その承認を経て、今夏、協約を結ぶこととされた。

協約草案

1. DMS は日本福音ルーテル教会の憲法に従って JELC の中で完全な協力をなすものとする。
憲法 4 章第 9 条は次のようである。
本教会はキリストの命に従ってすべての人に福音をのべ伝え、教会をたて、愛をもって隣人に奉仕し、これらのことによって神につかえることを目的とする。
2. DMS は、JELC の必要とする宣教師の派遣、財政の援助、その他の申請を JELC よりうけるものとする。
DMS は、その宣教師を派遣し、その任命は宣教師との個別的協議ののち、JELC によってなされるものとする。
3. すべての土地、財産その他は、JELC の名において登記されるものとする。
(特定の土地、建物が転用せられるときは、JELC と DMS との協議によって決定せられるものとする)
4. JELC、DMS 及び宣教師の間の通信は、通信の当事者でないものに写しを送ってその内容を知らせるものとする。
5. 本協約は、協約締結後 3 ヶ年を経て改訂するものとする。

覚 書

1. DMS の宣教師は、日本福音ルーテル教会に属する教会の会員となり、その身分は、JELC の憲法規則に従って定められる。
2. 宣教師の俸給及び住宅、医療、子女の教育、税金、日本語修得、旅行等のために要する費用は、DMS によって支弁されるものとする。
但し各種委員である宣教師の委員会出席の費用は、JELC の負担とする。
3. JELC よりデンマークに留学せんとする者に対しては、相互の了解に基づき、その旅費、生活費その他必要な費用は、DMS によって支弁されるものとする。

資料引用

第 39 回総会記録、1963.4.30-5.2 P55～P56

資料 203 東海ルーテル聖書学院に関する件

8. 東海ルーテル聖書学院に関する件

接渉委員の報告を了承し、了解事項を承認し、第一回定期総会に推薦することとした。(別紙)

(別紙)

東海ルーテル聖書学院を日本福音ルーテル教会の経営に移す事についての了解事項

アメリカルーテル教会日本伝道部は、その経営に係る東海ルーテル聖書学院を、(以下単に本学院という)日本福音ルーテル教会(以下単に教会という)の経営に移したいとの申し出があったので、双方の代表、アメリカルーテル教会日本伝道部からモーリス・ソーレソン、フィリップ・ハイランド、ロイド・ネービー三氏と、教会から岸千年、田坂惇己、牛丸省吾郎、河島亀三郎四氏は事務局長坪池誠氏立会の下 1964 年 2 月 10 日午前 11 時東京都新宿区百人町 3 の 303 日本福音ルーテル教会事務局において意見の交換を行い、次の了解に達した。

1. 本学院が設立当初の目的であり、また今日まで一貫して守ってきた「聖書を信徒に教える施設」という基本線を継承すること。
2. この基本方針によって、今後本学院が教会の中で果す役割は次の三点である。
 - (1) 信徒に聖書研究の機会を与えて地域教会に奉仕する能力ある者を養成すること。
 - (2) 教会の伝道師を養成する機関とすること。
 - (3) 神学校入学志願者にとって根本的に必要条件である聖書修得の機会を与えること。
3. 本学院の修業年限は 1964 年 4 月から二年制を採用するが、教会の伝道師養成のために修業年限を増やすこと、また適宜短期講座を開く等のことが考えられる。
4. 現在本学院に勤務する教師は、学院長フィリップ・ハイランド教授、アーズランド同ミッチェル同岸井敏の四氏である。
5. 本学院は至急に各種学校としての認可をとる。
6. 土地と建物は、宗教法人「アメリカルーテル教会日本伝道部」から、宗教法人「日本福音ルーテル教会」へ所有権移転登記を行う。
7. 本学院の運営責任は理事会が負う、その構成は 7 名とし、内 1 名は校長、他の 6 名は教会の総会において選任されるが少なくとも 1 名はアメリカルーテル教会日本伝道部に所属するものから、また他の 1 名は東海教区内から理事に加わるように配慮される。

8. 本学院経営の責任は主体的に教会が負うべきものであるが、必要な支援は、大磯会談において了解し合った「新企画は協同して行う」という線にそってアメリカルーテル教会は、教会を支援する。

大磯会談による申し合せによる支援の開始される以前、即ち1965年1月から同年12月に至る予算は現在本学院が保有する予算を教会へ移管する。

9. 以上の了解事項は和文と英文と両国語で書かれ、教会側ではこれを最も近い運営委員会に提示し、運営委員会は第1回定期総会に議案として提出して、その承認を得るように計り、他方アメリカルーテル教会日本伝道部は1965年1月のミッション会議に提示してその賛同を得るように計る。

然る後、第1回定期総会において選任される理事は理事会を構成し、この了解事項に記載されたものの中の必須事項(たとえば第五項、第六項のごときもの)の処理を始めとし、その他本学院の運営に必要な諸般の責任を負うものとする。

上記の通り、第1回運営委員会において委託された小委員会は、アメリカルーテル教会日本伝道部代表者と連名して教会運営委員会並びにアメリカルーテル教会日本伝道部への報告いたします。

昭和39年(1964)2月11日

岸 千 年
田 坂 惇 己
牛 丸 省吾郎
河 島 亀三郎
モーリス・ソーレソン、
フィリップ・ハイランド
ロイド・ネービー
坪池 誠

資料引用

第5回運営委員会、1964.4.6-8 P16,P22~P23

11. ブラジル伝道委員会報告

田坂惇巳氏は、ブラジル伝道委員会において決定した計画案および1964年度～1967年度の予算案について報告をなし、審議の結果これを承認し、運営委員会より総会に提案することとした。(ブラジル伝道に関する計画案及び予算案は別紙)

ブラジル伝道計画案

昭和39年4月7日運営委員会に提案
(藤井浩牧師派遣及びその支援方法に関するもの)

1. 伝道の対策

ブラジル在住の日本人のみを対象としないで、広くブラジルにおける福音宣教とする。

2. 藤井牧師出発について

6月中旬頃とする。

3. 派遣式について

第一回定期総会期間中そのプログラムの中において藤井牧師の派遣式を行うこととする。

4. ポルトガル語の勉強について

最初の一月はポルトガル語修得に努力する。

5. 藤井牧師に続く宣教師派遣について

向う十年の間に三家族の宣教師を派遣するよう希望する。

6. ブラジルにおける協力団体について

主としてブラジルルーテル教会(ドイツミッションとALCとが最近連合してできた団体)と協力するが、その他の日本プロテスタント連盟とも連絡を保ちながら活動する。

7. ブラジル伝道に関する経済的支援について

(1) 日本福音ルーテル教会よりの支援金

1964年度は藤井牧師及びその家族の生活費(住宅費を除く)として72万円を負担することとする。

(2) LCA 世界伝道局より支援金

藤井牧師及び家族の渡航費、ポルトガル語勉強のための費用及び家賃と現地における雑費をLCA世界伝道局より支援を受けることとする。

8. 国内募金要領

第一年度(1964年)は年額 72万円(約2,000ドル)

(1) 顕現節献金見込額 35万円

(2) 支援定額献金見込額 27万円

(3) 一般寄付金又は献金 10万円

説明 顕現節献金は本年だけでなく、当分の間引続きブラジル伝道のために献げられるよう第一回定期総会に提案する。
 支援定額献金は全国にわたってできるだけ多くの教会又は教会の会員有志に金額を月額又は年額約束して献金してもらう。
 一般寄付金又は献金は幼稚園、教会学校、その他の学校、壮年会、婦人会及び青年会などよりの寄付金又は献金

9. 1964年度予算

(1) 収入

日本福音ルーテル教会献金	2,000ドル
LCA世界伝道局支援金	4,000ドル

(2) 支出

藤井牧師俸給 月額200ドルとして	1,400ドル
家賃 9月より12月まで月額50ドル	200ドル
家具のため	500ドル
ポルトガル語勉強のための費用二人分	578ドル
旅費(東京—サンパウロ間飛行機4人分)	2,087ドル
荷物輸送費	500ドル
現地における交通費	220ドル
予備費	515ドル

10. 1965年度1996年・1967年

1965

収入	日本福音ルーテル教会献金	2,500ドル
	LCA世界伝道局補助金	2,500ドル
支出	俸給 月額200ドルとして	2,400ドル
	家賃 月額50ドルとして	600ドル
	ポルトガル語勉強の費用	1,156ドル
	現地における旅費	500ドル
	現地における活動費 4ヵ月分	120ドル
	予備費	224ドル

1966

収入	日本福音ルーテル教会献金	2,500ドル
	LCA世界伝道局補助金	3,000ドル
支出	俸給 月額250ドル	3,000ドル
	家賃 月額75ドル	900ドル
	現地における旅費	750ドル
	現地における活動費 月額50ドル	600ドル
	予備費	250ドル

1967

収入	日本福音ルーテル教会献金	3,000ドル
	LCA世界伝道局補助金	3,000ドル
支出	俸給 月額275ドル	3,300ドル
	家賃 月額75ドル	900ドル

現地における旅費		1, 000ドル
現地における活動費	月額50ドル	600ドル
予備費		200ドル

11. 金銭出納について

ブラジル伝道委員会の会計業務は日本福音ルーテル教会事務局において扱う

12. ブラジル伝道委員会規則について

本委員会の性格、構成、活動等について規則を作成し第一回定期総会において承認をうけることとする。

資料引用

第5回運営委員会、1964.4.6-8 P16,P20～P21

53. 北ドイツ・ミッションとの協約に関する件

書記は、次の通り日本福音ルーテル教会と北ドイツミッションとの協約案を朗読し、議長説明をなし協約は初認された。

『日本福音ルーテル教会と北ドイツ・ミッションとの協約 Memorandum
[覚書]

- 1) 北ドイツ・ミッションは、日本福音ルーテル教会の要請により可能な人材と資金の援助をする。
- 2) 北ドイツ・ミッションとの協約による働きを始めるにあたり、日本福音ルーテル教会は(さしあたり)三鷹の家屋を提供する。
- 3) 北ドイツ・ミッションの宣教師が三鷹の家屋に居住する限り、北ドイツ・ミッションは、その借地料及び家屋に対する税金を支払う。
- 4) 北ドイツ・ミッションは日本福音ルーテル教会が更に他の宣教師派遣を要請するならば、その要請に答えるように準備する。
- 5) 北ドイツ・ミッションは、その宣教師に関する諸費用(旅費及び医療費を含む)を負担する。
- 6) 日本福音ルーテル教会は、その同意をえて派遣される北ドイツ・ミッションの働き人を、個々の教会の会員として受け、また教会憲法規則により、宣教師としてその組織の中に受け入れる。
- 7) 北ドイツ・ミッションは、日本に他の宣教師を送る時は、その前に日本福音ルーテル教会の協議決定をへるものとする。
- 8) 北ドイツ・ミッションは日本福音ルーテル教会によって選ばれた婦人を2ヶ年間ドイツにおいて、ディアコニア即ち教会の婦人の働き全般を学ぶために招く。
- 9) 日本福音ルーテル教会の要請によって北ドイツ・ミッションは日本福音ルーテル教会よりドイツに送られた留学生の面倒を見る。』

資料引用

第1回定期総会、1964.5.6-7 P20～P21

資料 206 日本ルーテル教団との神学教育に関する協約

「日本福音ルーテル教会— 日本ルーテル神学大学と日本ルーテル教団— 神学教育プログラム(神学院)との間における神学教育協力に関する協約」 (最終案・40.4.12)

日本福音ルーテル教会と日本ルーテル教団とは、それぞれ独立した教会を形成しているとはいえ、聖書とルーテル教会の信仰告白を共にしている。しかも日本においてルーテル教会が一つになることは、両者において変わらざる希望である。それ故両者間に存する一致を確立し、かつ教理や実践において分離させている事柄について相互に積極的また継続的な討議が行われることは、われらに課せられた共通の課題であるといつてよい。

このような基礎の上に、われらは喜んで神学教育における協力を実現し、その実現のため具体的な諸問題について相互に満足しうる解決を求めて行きたい。この故に、われらは次の事柄において同意するものである。

- ① 日本福音ルーテル教会と日本ルーテル教団とは、教職舎養成の共通目的を、日本ルーテル神学大学を通して、実現するよう努力する。
- ② 日本ルーテル神学大学と日本ルーテル教団の神学教育プログラムとは、一つとなるよう協力する。しかしこれが完全な実現に至るまでは、それぞれの自主性を保つものとする。
- ③ 関係教会に対する責任は、継続して保たれる。
- ④ 両者の協力は、聖書とルーテル教会の信仰告白に基くものである。
- ⑤ 上記の目的を実現し、かつ達成するために、両者において神学的、教理的、及び実践上の問題についての積極的かつ継続的な対話を持つよう努めるものとする。
- ⑥ 両者は、それぞれ教会の方針に従い、神学教育の面において一致と交わりの実現に努力するものとする。
- ⑦ 現在の状態において、相互に協力する面と、各自においてこれを行う面とは、次の通りである。

a) 施設

(イ) 土地、教室、図書館、教授室、事務所、宿舎、食堂、娯楽施設、その他必要な建築物を共有する。

両者はそれぞれの教授住宅を備える。

(ロ) 土地、建物の登記は、学校法人、日本ルーテル神学大学の名において行う。

(ハ) 寄宿舍使用の割り振りについては、教授会において協議の上決定する。

この文書において教授会にゆだねられる具体的諸問題については、日本ルーテル教団の神学教育プログラムの専任講師を含めてこれにあたるものとする。

b) 管理

(イ) 日本ルーテル教団より選出された代表者は、日本ルーテル神学大学寄附行

為に基づき、理事会及び評議員会に正規の理事または評議員として参加する。

- (ロ) 日本ルーテル教団は、その神学教育プログラムの責任者をおくことができる。
 - (ハ) 学生々活の規定、規則については、教授会で検討の上これを決定する。
 - (ニ) 教授の給与は、それぞれの属する団体において支払うものとする。
 - (ホ) 共同で一つの事務室を設置する。この事務室は管理と事務に関する人事の責任をとるものとする。但し、教授のための秘書、事務員は除外する。
 - (ヘ) 前項の事務室の運営に関しての財政的責任は、両者間の話し合いにより、全費用の適正な割合に基いて決定される。
- c) カリキュラム、フィールドワーク及びチャペル
- (イ) 正規の単位を与える科目の外、必要に応じて補足授業を行うことができる。
 - (ロ) カリキュラム及びフィールドワークの詳細については、教授会において考慮決定される。
 - (ハ) チャペルについては、教授会において協議の上定める。
- d) 人 事
- (イ) 両教団よりの教授は、両教団より推薦されたものの中から理事会の招聘により任命される。
 - (ロ) 専任講師は、所定の手続きを経て、両教団より任命されることが出来る。

⑧ 基 本 金

日本ルーテル神学大学経営については、基本金の設定が必要であるので、両者においてこのために協力する。

⑨ 協約の改訂

この協約は必要に応じ、両者の同意を得て改訂することができる。
この協約は昭和 年 月 日より発効するものとする。

昭和 年 月 日

日本福音ルーテル教会総会議長
日本ルーテル神学大学理事長
日本ルーテル教団総会議長
日本ルーテル教団(神学院理事長)
神学教育プログラム委員会委員長

書 記 石 居 正 己
シュリバー

資料引用

第 5 回常議員会、1965.7.7-9 P191～P193

資料 207 日本ルーテル神学大学移転経費

Seminary Move to ICU Campus

Ref. BWM Minutes, February 1965, Action #65-061, p.74.

The preliminary estimated costs for relocating the Japan Lutheran Theological College on the ICU campus were sent to New York on April 18, 1965.

1.	<u>LAND</u>		US\$ 777,778
	<u>BULDINGS</u>		
2.	Administration	US\$ 444,444	
3.	Grad. Study Center	138, 889	
4.	Dormitory	208,333	
5.	Prof. Residences	<u>203,334</u>	
	Total Bldg.		1,000,000.
	<u>OTHER COSTS</u>		
6.	Site Work		138, 889.
7.	Architect's Fees		<u>40,805.</u>
	Total Capital		US\$ 1,957,472.
8.	<u>PROPOSED ENDOWMENT</u>		<u>555,555.</u>
	Total Capital & Endowment Cost		US\$ 2,513,027.
	<u>LESS – INCOME FROM SALE OF ASSETS AT PRESENT LOCATION</u>		
9.	<u>Low Est.</u>		<u>\$- 784,389.</u>
10.	<u>High Est.</u>		<u>\$- 1,344,667.</u>
	Net Est. Cost to be Financed		
11.	<u>Maximum (11-12)</u>		<u>\$ 1,728,638.</u>
	<u>Minimum (11-13)</u>		<u>\$ 1,168,360.</u>

Representative from the JELC, ALC, LCA, LC—MoS, and the LEAF met in Jerusalem, May 1965, to look over the above proposal.

It was agreed to ask the JELC to check with ICU into the possibilities of purchasing the land over three year period.

Further it was also suggested that the participating groups in Japan— the JELC and the NRK(Nippon Ruteru Kyodan—the LC—Mos—related church in Japan) supply cooperating overseas boards and societies with detailed

information regarding the new institution's curriculum, faculty, and building timetable.

It was suggested in Jerusalem that the American grant to the Seminary be prorated according to the LCUSA formula.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes,
June 14-16,1965, P379

資料 208 日本福音ルーテル教会とアメリカルーテル教会 (ALC)の協約

日本福音ルーテル教会とアメリカルーテル教会(ALC)との協約に
関する件

「アメリカルーテル教会日本伝道部に関する日本福音ルーテル教
会とアメリカルーテル教会との間における協約」

日本福音ルーテル教会並びにアメリカルーテル教会とは、共通の信仰と告白を持ち、また日本福音ルーテル教会とアメリカルーテル教会とは、教会の主が召された宣教において一致せるが故に、アメリカルーテル教会は、日本に於ける伝道の目的のために、日本福音ルーテル教会と関係を持つに至った。故に、この二つの団体は、協力のため次の条項に互に同意する。

I) 宣教師会

- A. 日本福音ルーテル教会(以下本教会と呼ぶ)は、アメリカルーテル教会日本伝道部(以下伝道部と呼ぶ)を、その住居、旅行、休暇、子女の教育及び宣教師の語学修得に関する問題を扱うため並びに宣教師間の親睦のために、その必要を認める。
- B. 伝道部は、相互の理解促進の目的をもって、本教会の方策並びに計画について討議するが、本教会の行政に関与しないし、その問題につき決議することもなく、また本教会の方策並びに計画に決議権をもつこともない。
- C. 伝道部は、ALC 世界伝道局及び本教会と協議の上特別の場合において特殊の計画を自由になすことができる。
- D. 伝道部は、指定寄附以外の寄附を受取り管理することができる。
- E. 伝道部は、その行動が本教会の方策並びにその慣習に反する宣教師に対し指導することができる。

II) 宣 教 師

- A. 日本到着后、宣教師は、みな2ヶ年間の語学修得の期間を与えられる。
- B. 宣教師は、本教会において受け入れられた後は、本教会と伝道部と協議のうえ任命を受けるものとする。
- C. 本教会は、本教会の方策並びにその慣習に反する宣教師に対し、指導を与えるものとする。
- D. 本教会に派遣された正規の宣教師以外の宣教師も、伝道部の会員として扱わ

れる。

- E. 本教会は、明白なる理由がある場合は、特定の宣教師の任命を取り消すことが出来る。
- F. 宣教師は、本教会憲法規則、本協約及びアメリカルーテル教会世界伝道局の方策に基づき、本教会において任務を行う。

Ⅲ) 連 絡

日本福音ルーテル教会とアメリカルーテル教会との間における公式な連絡のすべての写しは、伝道部議長に送られる。

Ⅳ) 改 正

この協約の条項は、日本福音ルーテル教会とアメリカルーテル教会との相互の同意により、改正又は廃止することが出来る。

資料引用

第 5 回常議員会、1965.7.7-9 P209～P210

THE JAPAN LUTHERAN THEOLOGICAL COLLEGE

—A Report of Recent Developments —

By Chitose Kishi

The Japan Lutheran Theological Seminary has made a remarkable contribution toward the advancement of Lutheranism in Japan. Most of the pastors who are now serving in the JELC are graduates of Seminary. However, in order to meet the challenge which comes from inside and outside the Church, our Seminary needed to receive recognition from the Government as a degree granting college. During the summer of 1963, all of our office workers under the direction of the Seminary Board worked hard to prepare the necessary documents of application for recognition. Every things went well. The Seminary earned recognition from the Japanese Government in March, 1964.

Now our college has to continue to meet those requirements to keep up the standard set by the Government. The Government requires every college in the country to keep high academic standards as well as good facilities.

This was a very opportune time for us to open negotiations with International Christian University with a view to the relocating of our school. Thinking of the future development of our Seminary, on May 31, 1965, the Board took action to the effect that the college would relocate on the land of International Christian University. Two decisions were made at the same time, namely, the move of college to International Christian University, and the acceptance of joint management of the college with Nippon Ruteru Kyodan supported by the Lutheran Church Missouri Synod. This second development did not happen at once, but was the culmination of patient negotiations over a period of time. This has not been accomplished without the gracious help of the Holy Spirit.

We of the JELC are deeply thankful for the helpful understanding and encouragement shown to us by supporting Lutheran bodies both in America and Europe.

The final approval for relocation should be given at the Convention in 1966. But in the meantime the Executive Board of the JELC took action to the effect that they would take full responsibility for taking all necessary official steps, by approving the relocation of the college and communicating actions

taken by the JELC as to relocation(including the budget).

It is quite for fortunate for the Lutheran College to have such farsighted leaders backing this tremendous project. It is no doubt the biggest project that the JELC has ever had in its seventy some years of history.

The Seminary has three things with which to be concerned at this moment.

First, the school Board should conclude a contract with International Christian University as to the size and price of the land. At present the ICU Board proposes to sell 7,000 tsubo, and the price will be ¥40,000 per tsubo. This will be sufficient to meet the requirements of the Ministry of Education. The Administration Hall, the dormitory and residences for professors and office workers will be built on the plot of land.

Secondly, a good working system for the school should be carefully planned before we relocate. Faculty housing, office and library should be arranged and coordinated in order to function efficiently.

Thirdly, we are greatly concerned with the financial stability that is necessary that is necessary in order to meet the needs of the school. The annual budget will naturally increase. Budgeting of the school must be done in the spirit of good stewardship. Looking to our future financial stability, we are now thinking of setting up an endowment fund.

All these things cannot be accomplished without the support of the JELC and her supporting Boards. We of the Seminary are well aware of the importance of mutual confidence between the Seminary and the Church. This is also true with our recruitment of students. We will not forget even for a moment that the Seminary is by the Church, with the Church, with the Church and for the Church.

資料引用

United Lutheran Church in America, Board of Foreign Mission Minutes, November 8-10,1965, P650-651

東海ルーテル聖書学院寄附行為

第1章 総 則

第1条(名称)

この学校は、東海ルーテル聖書学院と称する。

第2条(事務所)

この学校は、事務所を静岡市古庄 432 番地に置く。

第2章 目的及び事業

第3条(目的)

この学校は、日本福音ルーテル教会の教義に基づき、次のキリスト教教育を行うことを目的とする。

- (1) キリスト者に聖書を組織的に学ばせ、信仰の確立を助け、かつ奉仕と証しの生活に導くこと。
- (2) 教会における諸事業に奉仕する者の聖書教育を行う。
- (3) 神学校入学希望者に対する基本的聖書教育を施すこと。
- (4) 教会における信徒訓練計画に協力すること。

第4条(事業)

この学校は、前条の目的を達成するために、全日制課程のほか、事情により、夜間講座、特別講座、その他を設ける。

第3章 役員及び理事会

第5条(役員)

この学校に次の役員を置く。

- (1) 理 事 7 人
- (2) 監 事 2 人

第6条(理事の選任)

理事は、次の各号に掲げる者とする。

- (1) 学院長(校長)
 - (2) 日本福音ルーテル教会総会が選任した者 6 人。ただし、少なくともそのうち 1 人はアメリカ・ルーテル教会日本伝道部に属する者、1 人は東海教区に属する者、1 人は同窓生の中から選ばれることとする。
2. 学院長および前項第 2 号ただし書きの理事は、その立場を失ったときは、理事の役を退くものとする。

第7条(監事の選任及び職務)

監事は、この学校の理事または職員(学院長、教員、その他の職員を含む)以外の者うちから、理事会において選任する。

2. 監事は、次の号に掲げる職務を行う。

(1)この学校の財産及び経理に関する監査。

(2)理事の業務執行に関する監査。

第8条(役員任期)

役員(第6条第1項第1号に掲げる理事を除く。以下この条において同じ。)の任期は、2年とする。ただし、補欠の役員任期は、前任者の残任期間とする。

2. 役員は、再任されることができる。

3. 役員は、任期満了後も、後任の役員が選任されるまで、なおその職務を行うものとする。

第9条(役員補充)

理事または監事のうち、その定数の5分の1を超える者が欠けたときは、可及的速やかに補充の手続きをとらなければならない。

第10条(役員解任)

役員が次の各号の1に該当するに至ったときには、理事総数の4分の3以上出席した理事会において、理事総数の4分の3以上の議決により、これを解任することができる。

(1)法令の規定またはこの寄附行為にいちじるしく違反したとき。

(2)心身の故障のため職務の執行に堪えないとき。

(3)職務上の義務にいちじるしく違反したとき。

第11条(理事会)

理事は理事会を組織する。

2. 理事の互選により、理事長1名をあげる。

3. 理事会は、理事長が招集する。ただし3分の1以上の理事より議題を示して請求のあつたときには、理事長はこれを召集しなければならない。

4. 理事総数の3分の2以上の出席がなければ、会議を開き、または決議することができない。

5. 議事は、理事総数の過半数で決する。

6. 理事会の決議について、直接の利害関係を有する理事は、その議事の議決に加わることができない。

第12条(業務決定)

この学校の業務は、理事会で決定する。

第13条(理事長職務)

理事会は、この寄附行為に規定する職務を行う。

第14条(議事録)

理事長は、理事会の開催の場所および日時並びに議決事項およびその他の事項について、議事録を作成しなければならない。

第4章 教職員

第15条(教職員)

この学校に、次の教職員を置く。

(1) 学院長(校長)

(2) 教授または専任講師

(3) 講師

(4) 職員

第 16 条(教職員の採用)

この学校の教職員は、次の規定によって採用される。

- (1) 教授およびこれに準ずる者にして、日本福音ルーテル教会に籍を有する教師は、理事会の議を経て、日本福音ルーテル教会総会の任命による。
- (2) 講師は、学院長が理事会の議を経てこれを依頼する。
- (3) 職員は、学院長が任命して、理事会の承認を得る者とする。

第 5 章 資産および会計

第 17 条(資産)

この学校の資産は、財産目録に記載されるものとする。

第 18 条(資産の区分)

この学校の資産は、基本資産および運用財産とする。

2. 基本財産は、この学校に必要な施設および設備またはこれらに要する資金とし、財産目録中基本財産の部に記載する財産および将来基本財産に編入された財産とする。
3. 運用財産は、この学校の経営に必要な財産とし、財産目録中運用財産の部に記載する財産および将来運用財産に編入された財産とする。
4. 寄附金品については、寄附者の指定がある場合には、その指定に従って基本財産または運用財産に編入する。

第 19 条(基本財産の処分の制限)

基本財産は、これを処分してはならない。ただしこの学校の事業の遂行上やむをえない理由があるときは、理事会において理事総数の 3 分の 2 以上の議決を得、その一部に限り処分することができる。

第 20 条(経費の支弁)

この学校の経営に関する費用は、基本財産並びに運用財産から生ずる果実、授業料収入、入学金収入、検定料収入、寄附金、日本福音ルーテル教会より補助金、その他の運用財産をもって支弁する。

第 21 条(予算)

この学校の予算は、毎会計年度開始前に理事長が編成して、理事会の議決を経なければならない。これは重要な変実を加えようとするときも同様とする。

第 22 条(決算、剰余金等の処分)

この学校の決算は、毎会計年度終了後 2 か月以内に作成し、監事の意見を求めるものとする。

2. 決算は、毎年 2 月までに、業務報告と共に日本福音ルーテル教会に報告されなければならない。
3. 決算上剰余金を生じたときは、理事会の議を経て、その 1 部または全部を基本財産もしくは運用財産中の積立金に編入し、または次会計年度に繰り越すものとする。

第 23 条(財産に関する諸帳簿の備付)

この学校の各年度末の財産目録、貸借対照表、収支決算書、予算書、証憑書類、および重要な財産に関する記録、これを事務所に保管しなければならない。

第 24 条(会計年度)

この学校の会計年度は、日本福音ルーテル教会の会計年度に従い、1月1日より始まり、12月31日に終わるものとする。

第6章 解 散

第25条(解散)

この学校は、次の各号に掲げる事由によって日本福音ルーテル教会総会が議決した場合に解散する。

- (1) この学校の事業が不能となった場合
- (2) この学校の目的が著しく変更が加えられ、発展的解消を必要とする場合

第7章 寄附行為の変更

第26条(寄附行為の変更)

この寄附行為を変更しようとするときは、理事会の議決を経て、日本福音ルーテル教会の承認を得なければならない。

第8章 補 則

第27条(書類および帳簿の備付)

この学校は、第23条に規定する書類のほか、次の各号に掲げる書類および帳簿を、事務所に備えておかななければならない。

- (1) 寄附行為
- (2) 役員の名簿および履歴書
- (3) その他必要な書類および帳簿

第28条(施行細則)

この寄附行為の施行についての細則は必要に応じて理事会がこれを定める。

資料引用

第6回常議員会、1968.1.10-12 P338～P342

資料 211 VELKD 及び北ドイツ伝道協会との関係報告

ドイツ福音ルーテル教会連合及び北ドイツ伝道協会と日本福音ルーテル教会との関係に関する報告

去る4月エチオピアのアスマラ市に於て開催された JCM 及び LWF の CWM の会議に出席した内海・田坂両名は同会議に出席されていたベッカー博士及びネーレ氏と本件について数回にわたり協議懇談した。又特にアスマラに於ける会議の後、ネーレ氏は親しく日本を訪問し、北ドイツミッションと日本福音ルーテル教会の関係及びヘンシェル女史のこの後の身分や働きについて協議懇談の機会を持った。

以上の協議懇談の結果について日本福音ルーテル教会第4回常議員会(6月17日～19日)に報告がなされて次のことが承認された。

A ドイツ福音ルーテル教会連合(VELKD) との関係について

- (1) NCC に於てもうけられたドイツ教会委員会の基本的な点について異存はない。
- (2) (1)の基本的な点があっても尚必要であって、しかも NCC に相談する必要のないものと思われる少額の助成金に関する事などは、ドイツ福音ルーテル教会連合と日本福音ルーテル教会とが直接交渉するものとする。

このような事は既に、日本基督教団とドイツにおける関係教会との間においても別に協約などを結ばないでなされている。

B 北ドイツミッションとの関係について

- (1) 北ドイツミッションと日本福音ルーテル教会との間に結ばれた協約は1970年末までに満10年を経過する。北ドイツミッションが過去10年間人的又経済的に更に大なる祈りをもって日本福音ルーテル教会を支援して下さったことを心より感謝する。
- (2) 今日種々の情勢の変化などにもない1970年、この協約を破棄することとし、ヘンシェル女史の身分とその働きをドイツ福音ルーテル教会にうつすほうがよいとの意見の一致を見た。よって日本福音ルーテル教会の常議員会はこれを承認する。
- (3) ヘンシェル女史は、(2)が実現して後においてはドイツ福音ルーテル教会連合より派遣される宣教師となる。

ヘンシェル女史の給与は VELKD より直接本人に支給せられるが、これまでヘンシェル女史の関係されたディアコニアに関係する働きのため支援される補助金については、これらも同額程度のものを要請する。この補助金は日本福音ルーテル教会の会計に送付されることとし、ディアコニア委員会において全国的な企画にもとづいて予算を作成し本教会の常議員会の承認を得て支出することとする。

資料引用

第4回常議員会、1969.6.17-19 P177～P178

資料 212 日本ルーテル神学大学報告

日本ルーテル神学大学報告

1. 三鷹移転

東京中野より三鷹への移転は、本学の発展にとり画期的ともいふべき事柄でありましたが、神の恩恵と教会員の皆様の御支援により、つぎのように無事完了いたしました。

三鷹新校地への移転は何段階かに分けて行なわれました。44年1月から2月にかけて教員住宅の移転、3月から4月半ばにかけて本館及び図書館の仮移転、4月末寮の移転という具合で、白鷺の土地を引渡しました。その後も仮事務室、仮教室、仮図書館による変則的な運営が続きましたが、次第に整備され、本年3月末の図書館の移転と整備によってほぼ移転が完了ということになりました。なお、白鷺のチャペル及び本館の一部は、日吉教会に復元され(45.10.12献堂)ていることを併せて御報告いたします。

三鷹新校地建物の概要は次のとおりです。

校地 23, 141 m² (7000坪)

本館(鉄筋コンクリート2階建) 3,383.16 m²

三鷹新校舎の新築に関しては、設計を村野藤吾氏に委嘱して検討していたが、昭和43年7月、白鷺の土地を一括して住友商事に売却することとなったので、43年9月末本体工事を鹿島建設と、12月に電気・暖房を三機、給排水を城口と契約し、44年1月末に木造住宅六戸、4月末に寮及び教職員アパート、8月末に本館、12月14日チャペルが相次いで完工、引渡しをうけ、12月15日落成感謝礼拝を行ないました。

2. 理念と将来の展望

宗教改革の精神に基づくルーテル教会の神学を基調とし、教職養成を中心目的とする本学は、その建学の精神を再確認し、さらに神学大学であることにおいて、教会の学としての神学の研究と教育の場であることを明らかにするという意味で、基本的な理念を文書にして公表いたしました。今後この線にそって進展していくために、教授陣、教科内容の充実とともに、ルター研究室、宣教研究室、アジア神学教育センターなどの計画をすすめていきたいと思っております。神大後の教育をいかにするか、すなわち、神学校か、専攻科か、大学院にするかというようなことについても、さらによく検討が必要かと思っております。

5. 紛争について

一昨年、昨年の学園紛争については学報(19号、20号)を参照下さい。現在静

穩に学業が続けられていることは感謝です。

4. 学生について

学年制を廃し、単位制度になりましたので、従来のクラス別とは違いますが、卒業予定で分けますと、1972年度大学卒業予定クラス4名、71年度9、70年度9、69年度12、神学校13。内女子3名。

5. 学長更送

長年神学校長、神学大学長であられた岸千年先生が、昨年11月17をもって職を退き、後任に間垣洋助教授が任命されました。なお本年日本福音ルーテル教会及びルーテル教団総会において承認を求めるとされました。また岸先生は、教授として改めて任命を受けられました。岸先生の長年の功績に感謝するとともに、今後のお働きに祝福を祈ります。

6. 教職員

新任及び帰任教授、石田順朗、中本光晴。海外研究及び留学、上野輝弥、山田実。病気退職予定、此屋根安定(3月31日)。

専任教員、専門－14名、一般－5名。非常勤、専門－11名、一般－15名。

資料引用

第4回定期総会報告,1970年5月5日～7日、p145～146

資料 213 日本福音ルーテル教会とドイツ合同福音ルーテル教会との間
の了解事項案

ドラフト(協約案)

日本福音ルーテル教会並びにドイツ合同福音ルーテル教会との間
にかわされた了解事項

日本福音ルーテル教会(JELC)はドイツ合同福音ルーテル教会(VELKD)と恒久的友好関係を強力にすることを欲しドイツ合同福音ルーテル教会においても日本福音ルーテル教会と恒久的エキュメニカルな関係を継続する事を欲し且つ又ドイツ合同福音ルーテル教会は、日本伝道協力会(JCM)の一員でもあるので下記の項目について相互に同意する。

1. 日本福音ルーテル教会は、日本における福音の宣教に関する情報を提供する。
2. ドイツ合同福音ルーテル教会は、ドイツにおける教会活動及び神学界に関する事情について相互に関心のある情報を提供する。
3. この両教会は、それぞれの教会内に共通にとりくまれている研究、外に目下起こっている諸問題の再評価に、お互いに関心をもつものである。
4. ドイツ合同福音ルーテル教会はドイツにおける他の機関、或は組織に対して日本福音ルーテル教会の代表機関として行動することができる。又、日本福音ルーテル教会は日本におけるドイツ合同福音ルーテル教会の代表機関として行動することができる。
5. ドイツ合同福音ルーテル教会は日本福音ルーテル教会会員が留学する場合に与えられるスカラシップの申請の受理及び仲介をすることができる。
6. ドイツ合同福音ルーテル教会は日本福音ルーテル教会の申請に従って日本福音ルーテル教会のプログラム及びプロジェクトの支援窓口となる事が出来る。
7. ドイツ合同福音ルーテル教会は日本福音ルーテル教会の要求に従ってドイツから日本福音ルーテル教会で働く人材を選考する。
8. 日本福音ルーテル教会はドイツ合同福音ルーテル教会からの要求により、ドイツ或はドイツ合同福音ルーテル教会に関係する他のルーテル教会に於いて教会活動に参加する人材を選考することができる。

資料引用

第6回常議員会、1971.11.16-17 P384~P385

資料 214 ブラジル福音ルーテル教会と LWF の協約書

協 約 (案)

ブラジル福音ルーテル教会(IECLB)とルーテル世界連盟(LWF)との間で締結されるブラジル国内における民族的グループのルーテル教会の統合についての協約

- ① IECLB 及び LWF ブラジル国内の民族的グループによってなされる教会の礼拝について彼等の相互の責任を認める。
- ② サンパウロに於けるスカンヂナビヤ、ラトビヤ、エストニア及びハンガリーの教会はそれぞれの立場において、彼等が IECLB の自主的一部であることを理解しそれをはっきり表明しているが、この度日本人ルーテル教会が IECLB のメンバーとなるべく申請をなし、1970 年これが受理されたので、IECLB はこれら諸教会の定期礼拝を用意する責任あることを認めると共にこれらの教会を見守ることとする。
- ③ IECLB はこれらの諸教会がそれぞれの母国語で教会礼拝をもつことを認めるが、それらの教会が将来 2ヶ国語で働きがなされることを期待する。それは若い世代のためであり、彼等がポルトガル語を多く用い、彼等がルーテル教会からはなれることのないためである。
- ④ それぞれ異なった国語で説教する牧師が IECLB にいない場合には、LWF は IECLB の要求により他の会員から適当な牧師を準備することとする。
- ⑤ LWF 及び IECLB はこの民族的グループの将来の問題の解決として、それぞれの教会から若い牧師をブラジルに送り、そこで神学教育をうけ、両国語で働くことが出来るようにすることに同意している。
我々は各教会がこの方向に進まれることを願うのである。
- ⑥ 必要であり、又推薦される場合には、LWF はそれらの若い牧師の一ヶ月の勉強についての方法、手段を考慮する。
- ⑦ 若し、必要であるならば、LWF はその民族的グループの牧師の給与のための援助をつづけて支給する用意がある。そのサラリーは IECLB のサラリースケールによるものであるが、すべての要求は IECLB を通して提出し、その援助は IECLB を通して支給される。
- ⑧ LWF はそれらの援助をまず 5ヶ年間支給することとする。
IECLB はその教会が経済的、自主に向かうことをすすめる。若し、その教会が経済的独立がその 5ヶ年間に確立出来ない場合には、LWF は IECLB とさらに援助する可能性について協議することとする。
- ⑨ 本協約は 5ヶ年間として若し両者必要と認める場合には延長することが出来る。

LWF

IELCB

資料引用

第 6 回常議員会、1971.11.16-17 P385~P386

資料 215 JELC と日本ルーテル教団の神学教育協力に関する 協約改訂案

日本福音ルーテル教会並びに日本ルーテル教団との間における神学教育協力に関する協約改訂案

日本福音ルーテル教会と日本ルーテル教団とはそれぞれ独立した教会を形成しているとはいえ、聖書とルーテル教会の信仰告白を共にしている。しかも、日本においてルーテル教会がその目的において一致協力することは、両者において変わらざる希望である。それゆえ両者間に存する一致を確立し、かつ教理や実践において分離させている事柄について相互に積極的また継続的な討議が行われることは、われらに課せられた共通の課題であるといつてよい。

このような基礎の上に、われらは喜んで神学教育における協力を実現し、その実現のため具体的な諸問題について相互に満足しうる解決を求めていきたい。このゆえにわれらは次の事柄において同意するものである。

1. 日本福音ルーテル教会と日本ルーテル教団とは、それぞれ自主性を保ちつつ教職者養成の共通目的を日本ルーテル神学大学を通して実現するようにする。
2. 両教会は、上記の目的の達成のため、日本ルーテル神学大学に対する責任と感心をもちその運営について協力する。
3. 土地建物の登記は学校法人日本ルーテル神学大学の名において行う。
4. 両教会は上記の神学教育を達成するため日本ルーテル神学大学敷地、建築物、施設を共用する。
5. 両教会より選出された代表者は、日本ルーテル神学大学寄附行為に基づき、理事会、及び評議員会に正規の理事または評議員として参加する。
6. 財産及び日本ルーテル神学大学の専任教員の人事について両教会に関係する場合には理事会が該当する教会と協議して決定する。
7. 日本ルーテル神学大学の財政に対して適正な割合に基づいて両教会より支援する。但し、その割合については3年毎に更新するものとする。
8. 日本ルーテル神学大学の健全な経営については基本金の増加が必要であるので両教会においてこのために協力する。
9. 学生に関する諸問題、カリキュラムなどについては、教授会の議にゆだねられる。但し、日本ルーテル教団の神学教育プログラムの専任教師は、共通の問題に関して日本ルーテル神学大学教授会に陪席して意見をのべることができる。
② また日本ルーテル教団は、その神学教育プログラムの責任者をおくことが出来る。

10. この協約にいう協力関係がなくなった場合の財産上の問題は日本ルーテル神学大学寄附行為の定めるところに従ってなされる。
11. この協約は必要に応じ両教会の同意を得て改訂することができる。
12. この協約は 昭和 年 月 日改訂し、
 昭和 年 月 日発行する。

資料引用

第6回常議員会、1971.11.16-17 P387～P388

資料 216 JELC と伝道協力委員会(JCM)加盟教会・協会との協約案

日本福音ルーテル教会(JELC)と伝道協力日本委員会(JCM)加盟の教会及び協会との協約

日本福音ルーテル教会と日本福音ルーテル教会の働きに協力するアメリカ及びヨーロッパの教会及び協会は、その成立の歴史的背景及び共通の信仰告白をなしつつ主イエス・キリストの福音宣教にひとしく召されていることのゆえに、今後さらに宣教のための実をあげることを目指して、次の協約を締結する。

I 宣教師の働き

1. 日本福音ルーテル教会は、基本的総括的な伝道構想をたて、それぞれの地域についての必要な調査をふまえつつ、具体的な伝道計画を立案する。
2. 日本の教会の主体的な伝道計画に参加することを期待される宣教師については、日本の教会の要請に基づき、JCM において協議のうえ、これに協力する教会及び協会が、これらの宣教師を派遣する。
3. 宣教師は、日本に到着の後は、日本語をはじめ働きに必要な勉学の期間が与えられる。
4. 宣教師の任務及びその任地については、日本福音ルーテル教会がこれを定める。
5. 宣教師は、その所属する教会または協会の方針に立脚しつつ、日本福音ルーテル教会の憲法規則及びこの協約に従って与えられた任務を行う。
6. 日本福音ルーテル教会は、宣教師が万一にも教会の方針及び秩序に反することがあった場合には、慎重な調査をなしたうえで、適切な指導を努める。
7. 宣教師について特別な理由または事情が発生した場合には、
 - ①宣教師は、日本福音ルーテル教会及びその所属する母国の教会または協会の承認を得て辞任することができる。
 - ②日本福音ルーテル教会は、その事情を確認したうえで宣教師の任務を取消し、彼の所属する教会または協会と協議のうえ適切な処置をなすこととする。

II 宣教師会

1. 宣教師は、その所属する母国の教会または協会の方針に立脚しつつ、日本における宣教師の働きを有効、円滑ならしめるために、宣教師会を組織し、規約を定めてその運営に当たることができる。
2. 宣教師会は、宣教師の住居、語学修得、旅行、子女の教育その他生活にかかわる事項を取り扱う。

3. 宣教師会は、信仰生活上の向上、相互の理解促進及び任務の遂行に関して、日本福音ルーテル教会の方策及び計画について話合うことができるが、教会の行政に關与し、またはその方策及び計画について議決することはできない。
4. 宣教師会は、その目的にかなう運営の責任を果たすための必要経費について、その所属する母国教会または協会にこれを要請することができる。
5. 宣教師会は、日本福音ルーテル教会の方策及び秩序に反している宣教師を認めた場合には、教会と連絡協議し、教会の善処に協力する。
6. 宣教師会は、宣教師の住宅についての責任を実質的に負うが、その保安全管理に關する法律上の必要措置については、日本福音ルーテル教会がこれに協力する。

III 必要経費についての支援

1. 日本福音ルーテル教会の主体的な計画についての必要経費は、本来教会自体の責任にかかわるものであるが、主のみわざとしての宣教についての共同の責任と協力を根ざしつつ、人(宣教師)に關してだけでなく、資金に關しても、JCM に加盟する教会及び協会は、自らの事情の許す範囲において支援をなすこととする。
2. JCM 加盟の教会及び協会は、日本福音ルーテル教会の一般経費、土地及び建物資金、神学校の経費、教会の經營する諸施設の必要経費、教会が計画し実行する諸般の働きに要する経費等に関して、日本福音ルーテル教会の要請に基づき、これを年毎の JCM において審議のうえ、その決議するところに従って支援する。
3. JCM において決議された支援金に關しては、JCM に加盟するそれぞれの教会及び協会において、その分担額について承認された後、それぞれの教会または協会の定めた方法によって、日本福音ルーテル教会に送金される。
4. 日本福音ルーテル教会が、JCM に加盟する教会及び協会の所在するアメリカ及びヨーロッパの国々に留学生を送る場合、その推薦について JCM において審議のうえ、その受けいれと経済的支援について決議し、受けいれに關わる教会または協会の承認を得て、これを実行する。

IV 連絡

1. 日本福音ルーテル教会と JCM との間の公式な連絡のすべては、前者にあっては事務局長、後者にあっては委員長の名においてなされとする。
公式な連絡の写しは、日本福音ルーテル教会総会議長及び JCM 書記に必ず送るものとし、その他については内容に關係ある者にこれをおくることとする。
2. 日本福音ルーテル教会と JCM に加盟する教会及び協会との間の公式な連絡のすべては、前者にあっては事務局長、後者にあってはそれぞれの責任者の名においてなされるものとする。
公式な連絡の写しは、日本福音ルーテル教会総会議長及び JCM 書記に必ず送るものとし、その他については内容に關係ある者にこれをおくることとする。

V 特別協約

日本福音ルーテル教会と JCM に加盟する教会または協会との間に、宣教師に關する財産の保安全管理あるいはこれに類する事項に關して特別契約を締結することができる。

但し、この場合はその協約の写しを、JCM に加盟する他の教会及び協会に送るものとする。

VI 協約の改正

この協約は、日本福音ルーテル教会と JCM 加盟の教会または協会との合意によってその一部を改正し、または廃止することができる。

但し、この場合は改正または廃止に関して、事前に JCM の意見を聞くものとする。

VII 協約の実施

この協約は、JCM において日本福音ルーテル教会代表と共に審議された後、日本福音ルーテル教会総会または常議員会と JCM 加盟の教会及び協会のそれぞれの決議機関の承認を得た後、19 年 月 日よりこれを実施する。

この協約の実施に伴い、日本福音ルーテル教会との間に既に締結されている協約は、この協約に吸収される。

以 上

資料引用

第 5 回総会、1972 年 5 月 2 日-4 日 p27～p29

靖国神社国営化法案抗議声明

自由民主党総裁
田中角栄殿

1974年5月2日

我々は靖国神社国営化法案に対し、繰り返し反対の意志を強く表明してきました。それにもかかわらず、自由民主党が内閣委員会において同法案を、審議もすることなく強行採決したことに対し、深い憤りを覚え、強く抗議します。

靖国神社国営化法案の目指す靖国神社国家管理、慰霊顕彰が宗教と良心とに対する国の介入であり、日本国憲法第20条(信教の自由)及び第89条(公金使用の制限)に違反するばかりか、基本的人権と諸自由権を侵害することは明らかであります。

従って、我々はこの法案が平和と民主主義を基調とするわが国の道を誤らせるものであることを深く憂い、キリスト者としての良心からこの法案に断固反対します。

また、我々は自由民主党がこの法案を即時撤回することを強く要求します。

宗教法人 日本福音ルーテル教会
第六回 総会
総会議長 宝珠山幸郎

教会員各位

1974年5月2日

去る4月12日、自由民主党は衆議院内閣委員会において、審議抜きで、靖国法案を強行採決しました。このことに対し、日本福音ルーテル教会第六回総会は上記のごとく抗議と撤回要求の声明を自由民主党あてに表明しました。

この法案の根深い問題については、我が教会もすでに繰り返し指摘し、訴えてきたところではありますが、日本基督教団をはじめ各教団、教派、さらに各地での抗議の意志表示や活動が展開されています。

日本福音ルーテル教会の各教会、各会員におかれては、この問題を契機として、ただ神のみを神とする自らの信仰を賜物として感謝のうちに確認し、この問題やこれと関連する諸問題への理解を深め、学習し、また、夫々の仕方で息の長い活動を強められるよう訴えます。

宗教法人 日本福音ルーテル教会
第六回 総会
総会議長 宝珠山幸郎

資料引用

第6回総会、1974年5月2日-4日 p14

声 明(自立に踏み出すに当って)

1970年、熊本における第4回定期総会において、私たちは日本福音ルーテル教会の自立を全教会の課題として取りあげ、その第一歩として、1974年末をもって経済的自立の目標を確認しました。

私たちは今その年を迎え、宣教の自立と経済的自給の道を歩みだすにいたったことは、人知でははかり知ることのできない神の恵みとあわれみによるものであると、強く信じます。

私たちは、80年余におよぶ長い年月の間、日本伝道を開始し、日本福音ルーテル教会を出発させ、多くの宣教師を送り、靈的にまた経済的に援助を惜しまれなかった海外諸教会・諸団体に対して深い感謝の念を抱くものであります。また、兄弟教会としての関係は、私たちの教会の自立によって絶えるものではなく、さらに一層の親密さを増して持続され、日本宣教の歩みが、世界宣教への共同の働きにつながっていると信じています。

私たちは、自立に踏み出した日本福音ルーテル教会の今後のけわしく、しかも光栄に満ちた歩みを思います。国内・国外の諸教会の交わりと祈りの中で、いよいよ主のご委託に応え、教職・信徒一致して宣教の働きに邁進してゆく決意と責任とをここに確認し、表明するものであります。

1974年5月2日

日本福音ルーテル教会
第六回定期総会

資料引用

第6回総会、1974年5月2日-4日 p18

解題・解説

第9章 自立の実質化への努力（1975年～1991年）

第1節 自立への出発

第2節 収益事業の意味

資料219 靖国神社国営化に反対する声明(第8回総会、1978年5月2日-4日)

第8回総会にて自由民主党の法案及び関連する政治行為により「建国記念の日」行事への総理府後援、自衛官護国神社合祀、首相などの靖国参拝等の実質的な既成事実の積み上げにより、国家が宗教に介入する事実上の靖国国営化が推し進められていることへの反対声明を採択し、自由民主党総裁・福田赳夫に提出した。

資料220 宣言文～平和と核兵器廃絶を求めて～(第10回総会、1982年8月27日)

1982年6月のニューヨークで開かれた第2回軍縮特別総会における核兵器廃絶の動きに呼応しつつ、平和と核兵器廃絶を求める宣言文を第10回総会にて採択した。

資料221 一致信条書の出版に関する宣言(第10回総会、1982年8月27日 p17)

第10回総会にて宣教百年の歴史への前進を期す事業として、ルーテル教会信条集「一致信条書」の現代語訳の完成出版を祝する宣言を採択した。

資料222 小児陪餐についての提案(第12回総会、1986年8月26日～28日、p16)

教会が一致した理解をもって対処するために、小児陪餐のあり方と実施に関して、第12回総会で提案を行った。

資料223 カトリックとの「洗礼の相互承認」提案(第12回総会期教師会総会、1988年8月22日、p9)

戦後のエキュメニズムの時代にあつて、日本福音ルーテル教会は、1980年から本格的に年2回から3回の割合でローマ・カトリック教会及び聖公会との間で共同エキュメニズム委員会を行い、他教派との対話の中での現代社会におけ

る宣教の刷新を目指してきた。1988年6月に「洗礼の相互承認」取り交わした。

資料 224 JACE 宣教協約(JELC と ELCA) (第 14 回総会期教師会総会、1990 年 8 月 29 日、p56)

ELCA の発議により、南カリフォルニア地区の教会(Resurrection Lutheran Church)において、1986 年から協力伝道として開始された「日系人協力伝道」(JACE)の協約書が交わされた。

資料 225 IECLB 宣教協約(JELC とブラジル・ルーテル告白福音教会) (第 14 回総会期教師会総会、1990 年 8 月 29 日、p54-55)

1964 年から最初の宣教師・藤井浩牧師をブラジル・ルーテル福音告白教会 (IECLB) との宣教協力によりサンパウロに派遣することから始まったブラジル伝道は、その後、塩原久牧師、土井洋牧師、竹田孝一牧師を派遣し、その都度、必要な宣教協約の改定を行った。

資料 226 百年記念計画書(第 14 回総会、1990 年 8 月 29 日、p14-15)

1993 年に宣教百年の時を迎える当たり、1990 年 8 月の第 14 回総会にて、百年記念計画書を教師会の議を経て採択した。内容は「宣教運動の取組み」、「事業、行事の事項と日程予定」、「事業、行事の推進の委員会構成図」である。

資料 227 「即位礼・大嘗祭」の信仰表明(第 14 回総会、1990 年 8 月 29 日、p49)

新天皇の即位が 1990 年 11 月 12 日に執り行われる「即位礼・大嘗祭」に対する疑義の信仰的表明を行った。国民主権と象徴天皇という現行憲法の大原則を厳格に遵守する儀式を行うことを政府に要望する信仰表明を教師会の議を経て第 14 回総会にて採択した表明文書である。

資料 219 靖国神社国営化に反対する声明

靖国神社国営化に反対する声明

我々は、靖国神社国営化法案とその背後の意図とに対し繰り返し反対の意志を強く表明し、1974年の強行採決に対しても特に強く抗議しました。

最近、靖国神社国営化法案を再び推進することが取沙汰されるとともに、「建国記念の日」行事への総理府後援、自衛官護国神社合祀、首相などの靖国参拝等に見られるように、実質的な既成事実の積み上げが推し進められています。このような形で国家が宗教に介入し、事実上の靖国国営化を推し進めることが、日本国憲法の基本と諸条に反することは明白であります。

我々はキリスト者の良心にもとずいて、このような動きの背景となっている諸要素の深い問題性に注目し、靖国神社国営化法案とそれに通じる一切の動きに対し断固反対いたします。我々は自由民主党がこの法案及び関連する一切の動きを即時撤回することを要求します。

1978年5月 日

日本福音ルーテル教会第8回定期総会
総会議長 賀来周一

自由民主党総裁

福田 赳夫 殿

日本福音ルーテル教会全教会と全会員への訴え

我が教会の第8回定期総会は、別記のような「靖国神社国営化に反対する声明」を公にしました。

津地鎮祭問題の判決に現れた「神道行事は習俗である」との考えをはじめ、「建国記念日」行事の総理府後援、自衛官護国神社合祀問題、首相などの伊勢や靖国参拝、さらに国歌・国旗や元号問題など、最近の動きは国家神道体制に向けてまことに積極的であり、歴史をふりかえるとき我々キリスト者にとってばかりでなく、むしろ国民全体の問題として誠に憂うべきものであります。

我々はこの日本にあってキリストに召されました。キリスト者であって日本人であることを、安易に受けとるのでなく、与えられた賜物・課題として受け取り、その栄光を思いつゝ、自ら厳しい道を選びとって歩まねばならないと思います。

我が教会の全教会・全会員において、この問題・課題を取り上げ、考えるように、また、これについての学びを深めるように訴えます。この取り組みの中で、キリストのみを主とする信仰の告白がいよいよ強くされ、日本とその社会のたゞ中でこの信仰

によって生き、キリストを宣教することへと結集していくように望みます。

1978年5月 日

日本福音ルーテル第8回定期総会
総会議長・賀来 周一

資料引用

第8回総会、1978年5月2日-4日

資料 220 平和と核兵器廃絶の宣言文

宣 言 文

～平和と核兵器廃絶を求めて～

今日、米ソ両国を中心に、核軍備拡大の争いがますます激化し、核戦争の危機が増大し、私たちは人類絶滅の危機的状況のもとにあります。

去る六月、ニューヨークで開かれた第2回軍縮特別総会における核兵器廃絶を求める世界の声は、さらに力強く全世界にこだまし、広がりつつあります。

この機にあたり、私たちキリスト者は「平和を作りだす人たちは幸いである」(マタイ 5:9)との主イエスのみことばに励まされて、いまこそこの世に対して、平和を訴え、核兵器廃絶のために行動していかねばなりません。

特に、世界で最初に、原爆の悲惨を体験したヒロシマ、ナガサキをかかえる日本のキリスト教会に属する私たちは、世界の同信の兄弟たちに、核戦争の悲惨と愚かしさと、核兵器廃絶の緊急性を伝えることが、大いなる使命であると考えます。

「その剣を打ちかえて、すきとし、そのやりを打ちかえて、鎌とし、国は国に向かって剣をあげず、彼らはもはや戦いのことを学ばない」(イザヤ 2:4)

主のこの幻が、実現されるため、私たちは争いを和解に導きたもう主の働きに、積極的に参加することを、ここに決意します。

1982年8月27日

日本福音ルーテル教会
第十回総会

資料引用

第10回総会、1982年8月27日

宣 言

天父の豊かな祝福により、この度、ルーテル教会信条集——一致信条書の現代語訳の完成出版を見たことは、単に日本福音ルーテル教会の歴史上銘記すべきことであるのみならず、原典からの現代語訳として世界に類を見ない出来事である。

信条の教会としての基いを培うべき貴重な神の賜物として感謝するとともに、聖霊の豊かな御誘導のもと、いよいよ信仰告白の確かな教会として、宣教百年の歴史への前進を期すものである。

右宣言する。

一九八二年八月二七日

日本福音ルーテル教会
第十回総会

資料引用

第10回総会、1982年8月27日 p17

「提案内容」

陪餐について

かねて課題とされてきた陪餐の問題については、教会が一致した理解をもって実施することが望ましいので、次のように提案する。

1. 洗礼を受けている者は、堅信を受ける以前であっても、聖餐に与ることができる。
2. それゆえ、子供も、恵みを恵みとして受け入れることができるために各々の年齢に応じて、適切な信仰教育を受ける。
3. 初陪餐は、教会と親との共同の責任において、子供の信仰の応答を得て行われる。また、教会間においてできるだけ共通な目安をもつために、学齢時までこれを受け入れるよう努める。
4. 現時点において学齢時を過ぎている未陪餐者についても、適切な聖餐教育を行い、初陪餐にいたるようにする。
5. 陪餐会員という呼びかたをはじめ、必要な規則の改正をすると共に、陪餐教育のための教材の開発、子供と共にする礼拝の検討などを行う。
6. これを機会に、洗礼と聖餐について全教會的に信仰学習を深めることに努力する。

資料引用

第 12 回総会,1986 年 8 月 26 日～28 日 p16

1988年6月17日

洗礼の相互承認の提案

日本におけるローマ・カトリック＝ルーテル共同委員会は、両教会における洗礼の理解について、『リマ文書』をもとに協議し、その結果を「洗礼に関する合意」の文書にまとめました。さらに、両教会の洗礼式及び式文を検討した結果、両教会において行われた洗礼はひとつであることを確認して、相互にその洗礼を有効と認めることが適当であると判断し、これを両教会の責任ある機関にそれぞれ提案します。

ローマ・カトリック＝ルーテル共同委員会共同議長
(ローマ・カトリック教会) 司教 佐藤 敬一
(日本福音ルーテル教会) 副議長 内海 望

資料引用

第12回総会期教師会総会、1988年8月22日、p9

日本福音ルーテル教会・アメリカ福音ルーテル教会 宣教協約

第 11 期常議員会より懸案事項であったアメリカにおける日本福音ルーテル教会とアメリカ福音ルーテル教会の協力伝道に関して、次の記載の事項を「JACE に関する協約」と認め、第 14 期定期総会に提案する。

JACE に関する協約

- 1) JELC は、ELCA の Minority Mission のために、高塚郁男牧師を宣教師として派遣する。
- 2) 宣教師の派遣に関する諸問題
 - ① JACE の宣教師は継続して JELC の牧師として資格を持つ。
 - ② 宣教師の年金及び社会保険は JELC の規則に基づいて、JELC が支給する。ELCA はその他一切の経費を負担する。
 - ③ JELC は、宣教師への霊的支援を行い、広報紙及び他の手段にとって JELC 会員とその宣教師に関する情報を分かち合う。
 - ④ JELC 宣教師は ELCA 牧師としての権利と特典を所有する。
 - ⑤ ELCA は、JELC 宣教師の活動に関する年間報告書を JELC に提出する。
 - ⑥ 宣教師の任期は ELCA による JELC への要請により延長可能である。
 - ⑦ JELC の現状においては、ELCA は JELC よりの宣教師を追加する計画は持っていない。
- 3) JACE 牧師に関し問題が生じた場合は、まずフォスター牧師、岸野牧師と相談し、そこで解決が得られない場合は、DGM を通して JELC に連絡すること。
- 4) JACE に関する両教会の連絡は、他の場合と同様に、DGM を通してのみ行うこと。
- 5) JACE 牧師の休暇に関する件は、JELC が今秋の両教会の協議会に提案すること。
- 6) この会議の記録草案は、スエンサイド牧師とパーソン牧師とで作成し、両教会の機関承認を得た後、正式記録として発行する。

1990 年 6 月 29 日

日本福音ルーテル教会
第 5 回常議員会

資料引用

第 14 回総会期教師会総会、1990 年 8 月 29 日、p56

資料 225 JELC とブラジル・ルーテル告白福音教会の宣教協約

日本福音ルーテル教会とブラジル・ルーテル告白福音教会 宣 教 協 約 書(訳文)

日本福音ルーテル教会（JELC）、とブラジル・ルーテル告白福音教会（IECLB）は、世界の、一つにして聖なる使徒的教会の主を信じる信仰を告白し、共に、この世界における神の宣教への参加のために召され、遣わされていることを告白する。また両教会は、互いにキリストの肢体の一員として受け入れ、共に生活と信仰の経験、宣教の手段と必要を分かち合うよう召されていることを告白する。従って、両教会は、働き人の交換を促進することに関心を持ち、宣教の手段とその評価、宣教への協力と参加を互いに提供し、特にブラジルに居住する日本人の間での宣教活動に関し、以下の宣教協約を締結する。

I 基本的位置付

1. サンパウロの現日系教会及び将来ブラジルに設立されるであろう IECLB の日系教会（PA）は、全て原則として現行の規則に基づく組織（教区と地区）内につながって IECLB の教会及び教会区となる。
2. これらの日系教会に関する全ての問題は、IECLB の規則に従い正当な手続を経て解決される。
3. 財政的支援、人材、その他の支援に関する日系教会の要請は、IECLB の常議員会が、それらの要請を承認した場合、IECLB と JELC の間で協議決定される。

II 人事に関する件

4. 日本人の牧師は、その奉仕の分野が IECLB の常議員会によって承認された場合、その働きが必要とされるところに IECLB によって JELC より招聘される。
5. 日本人牧師は、IECLB の牧師会に属し、海外から来た他の牧師と同じ権利と義務を持つ。
6. 赴任地に派遣される前に、招聘された牧師のために 6 か月間のポルトガル語学習コースが準備される。
7. ポルトガル語コースの後、その牧師は IECLB の人事担当者と会い赴任先の教会と IECLB の規則に関する必要な情報を受ける。
8. 招聘された牧師は、それぞれの地区の規則に従って、ブラジル人牧師と同等の給料を得る。
9. JELC はその牧師に対する日本での健康保険と年金掛金を負担する。その牧師はブラジルにおける医療援助の権利を得るためにブラジルの最低給与に従って、INPS（健康保険と年金のためのブラジルの制度）を負担する。またその牧師は CAF（IECLB の健康保険）に加入することが望ましい。
10. 所得税に関してはブラジルの現行の法律に従う。
11. JELC はブラジル勤務の牧師の給料を負担する。IECLB は毎年 11 月

30日までにその給与に必要な金額を請求する。

12. JELCは、日本から赴任地までの旅費、運送費及び語学研究費を、語学研究期間の給料も含めて負担する。また、これは休暇帰国中の旅費諸経費、最終帰国に当たっての旅費、諸経費も含む。
13. IECLBにおける日本人牧師の任期は6年とする。4年経過後、その牧師は2-3ヶ月間の休暇をとって帰国する権利を持つ。その休暇期間は教区が教会の仕事の責任を負う。従って、その牧師が帰国する前に両者で十分話し合うこととする。
14. 日系教会、JELC及びIECLBの三者間で合意された場合、その牧師の任期は、更に6年延期することができる。

III ポルトアレグレにおける働きの組織と塩原久牧師の配置

この働きを組織立てるために次の通り合意した。

塩原牧師はポルトアレグレでの仕事を始める。その場合には、ポルトアレグレの日系信徒、求道者達は引き続きサンパウロ日系教会、又はポルトアレグレのブラジル福音ルーテル教会に所属する。初期の間は、建物がないので、諸集会や聖日礼拝のために、ポルトアレグレのブラジル福音ルーテル教会（CEPA）に属する近隣の一つの教会の礼拝堂や集会室を使用することができる。そのようにして、塩原牧師の働きを開始し、ポルトアレグレのブラジル福音ルーテル教会、ポルトアレグレ地区、第4教区、IECLBの事務局長と協力して、更に検討を加えながら、この働きは継続される。ポルトアレグレのルーテル教会間の人的交流を深めるために塩原牧師は月に一度はそれらの教会の聖日礼拝に奉仕することが望ましい。

IV 塩原久牧師と大野健牧師の場合

サンパウロ日系教会は、両牧師の立場を明瞭にし、よく理解し、それをIECLBの事務局に報告することが示唆されている。その基本的な考えは次通り。

サンパウロ日系ルーテル教会は、二人の牧師を持つことになる。その二名の牧師はサンパウロ日系教会によって課せられた働きをなすものとする。両牧師は、それぞれサンパウロとポルトアレグレ地区に在住し、伝道活動をするが、両牧師は二牧師を擁する同一教会区（Parish）に属するものとする。

1990年6月

ブラジル・ルーテル福音告白教会
総会議長 Gottfried Brakemeier

日本福音ルーテル教会
総会議長 Teiichi Maeda

資料引用

第14回総会期教師会総会、1990年8月29日、p54-55

日本福音ルーテル教会

百年記念計画書(案)

1. 理念 日本福音ルーテル教会は、1993年に宣教百年の時を迎える。私たちは、この百年を神の救済史の下で省りみ、新たなる世紀にあって「恵みと信仰と信仰と聖書」に生かされた神の民の福音宣教の躍進をはかる。

- II 課題
 1. 百年の歴史を点検し、21世紀を展望した宣教態勢の編成
 2. 宣教の教会としてのルーテル散会の教会論の整備
 3. 礼拝が育む、信徒・教職の継続的な信仰養育の確立

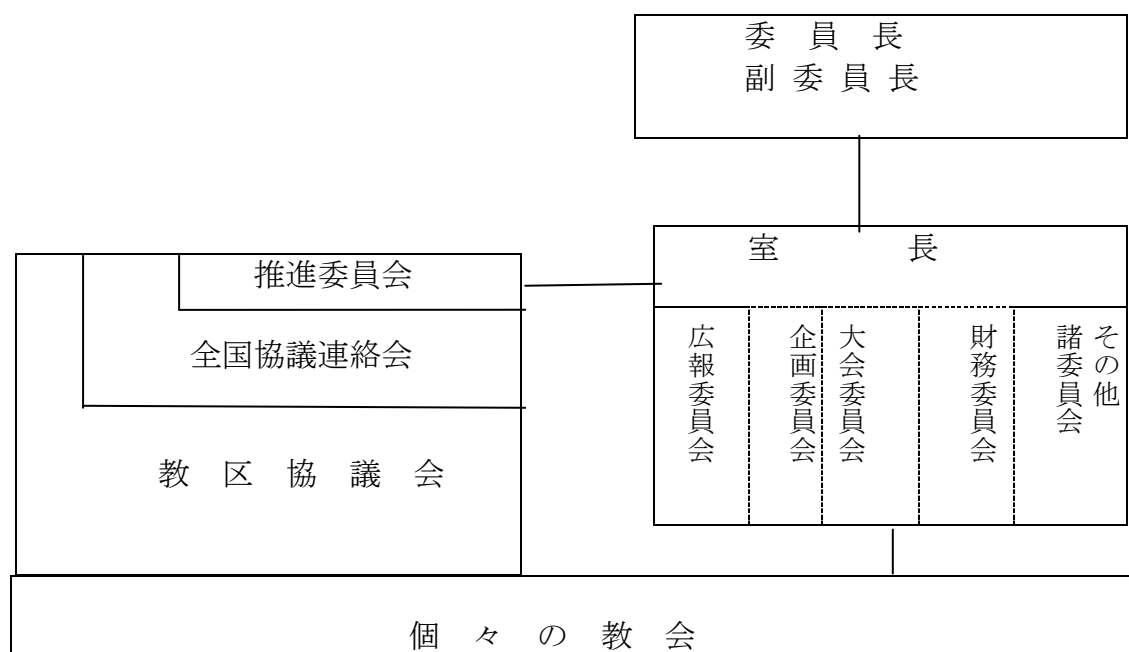
- III 宣教運動の取組み
 1. 各個教会
個々の教会の宣教進展のプログラムの策定と実施（伝道の実際）
教区・全体教会としての共同体の形成(学習の実際)
教会の多様な働きへの信徒・教職の主体的参画態勢の開発
 2. 教区
教会共同体としての教区の宣教方策の策定と実施
宣教の責任領域としての教区内の開拓伝道の計画と実施
賜物を結集した宣教研究の推進
 3. 全体共同教会
百年事業として別途に掲げる計画の実施
信仰育成にかかわる教会教育の計画と実施
歴史的にかかわりをもつ諸施設諸機関との宣教共同体の確立

- IV 事業、行事の事項と日程予定
別紙記載

V 事業、行事の推進の委員会構成図

実務委員会→横欄	推進委員会 ↓ 縦欄
	委員長 1
	副委員長 1
広報、企画、大会、財務募金	記念事業室長 1
	常議員 3
	教区長 5
	教区推薦委員 5

組 織 図



備考/ その I 計画運営の組織

1. 推進委員会

委員長	1<90年実施>	(総会議長)
副委員長	1<90年実施>	(総会により選任された信徒委員)
記念事業室長	1<90年実施>	(総会により選任された教職委員)
常議員代表	3<90年実施>	(本教会常議員から推挙された者)
各教区長	5<・・・>	(教区総会により選任された教区長)
教区推薦委員	5<90年11月>	(教区常議員会から選任された者)

2. 実務委員会(以下は推進委員会が必要人数を選任し、他の委員会の設立可)

企画委員会	広報委員会(広報室長を長とする)
財務・募金委員会	大会委員会

3. 中央委員会
推進委員会及び実務委員会により組織する。
4. 教区協議会
各教区において、原則的に各個教会代表をもって協議会を組織する。
5. 全国連絡会
教区協議会を基盤とした全国協議連絡会

備考/その2 推進委員会及其の責務

1. 推進委員会は、記念事業室長に係わるスタッフ機能を中心とし、基本的事柄についての議定機関となる。
2. 委員長は職責委員として・本教会常議長会を代表し、基本的思想についての助言をおこなう。
副委員長は、委員長から付託された事項を分掌する。また本教会常議員同席待遇となる。
記念事業室長は、本計画の中核者となり、委員長及び副委員長と協議しつつ、計画実効を指揮し、その任期は1991年から1994年末まで専任室長となる。
また、その職責期間は、本教会の「担当常議員」となる。
教区長及び教区推薦委員は・教区の総意を反映しつつ、また教区と個々の教会へ情報の提供と指導を分掌することができる。また教区推薦委員についてはその任期は1991年から1994年末までを原則とする。

備考/その3 実務委員会及びその責務

1. 計画の細部についての実務を担い、重要事項について、「記念事業室長」を通して推進委員会へ提案、また「記念事業室長」の下で実働業務を分掌する。
2. 委員会とその職務細則は推進委員会がこれを定める。

備考/その4 中央委員会及びその責務

推進委員会と実務委員会の合同協議機関とし、意志の疎通及び処理の迅速化を目的とし、本委員会自体の決議機能は有しない。但し、推進委員会或いは実務委員会が所帯事項について決議を付託した場合は決議能力をもつ。

備考/その5 教区協議会及び全国連絡会

本計画の基盤となる組織体であり、これの組織と活動の展開細部については推進委員会がこれを定める。

VI 予算

予算総枠を1億2千万円とする。

収入計画は、献金・募金による。

内訳 一般献金 8千万円
特別献金 4千万円

目安 一人一日10円を3ヶ年にわたる献金=8千万円
又は、一人1万円献金 =8千万円
又は、現時点協力金1ヶ年分 =8千万円

支出事項.

宣伝費	大会費
海外交流費	会議費

宣教研究費	学習費、記念誌編集、発刊費
記念事業室経費	事務員人件費
会議費	記念建築教会聖卓費
その他	募金経費

VII 以上の計画書実施のための本総会における措置

1. 本計画書の承認の件
2. 会期中に現常議員会と次期常議員会の臨時会議による室長及び副委員長の推薦とこれの信任の件
3. 「記念事業室」の設置に伴う事務局機構改正承認の件
4. 特別会計「百年記念特別会計」設置承認の件
5. 上記特別会計に関する実行及び補正予算に関する常議員会への付託の件

資料引用

第 14 回総会、1990 年 8 月 29 日、p14-15

「即位礼・大嘗祭」を前に信仰の表明

1. 救い主イエス・キリストをとおしてご自身をあらわされ、聖書と教会によって証しされている三位一体の神こそが真の神である。私たちはこの神のみを神として信じる。
したがって、その信仰のゆえに、それ以外のいかなるものをも神として受け入れることはできない。
2. 私たちは聖書の神が愛と平和、正義をこよなく愛し、そのことの地上での実現を望み、歴史の究極の主として聖霊をもって諸国、諸民族、すべての人々に働いておられることを信じる。
また、キリストの体である教会が、「み心の天に成るごとく、地にも成させたまえ」と祈ること、そのために信仰に立って、時代の動きにあらゆる感覚を研ぎ澄ませ、学び、必要とあらば声をあげることを求められていることを、私たちは信じる。

「即位礼・大嘗祭」に関する政府への要望

1. (即位礼について)
新天皇の即位にあたって、きたる 11 月 12 日に執り行われようとしている「即位礼」の中心が天皇による「高御座(たかみくら)」からの即位の宣明だと伝えられていますが、明治憲法下の絶対主権をもった神権天皇の場合とまったく同様に、天孫降臨神話に基づき国民に君臨することを示す「高御座」からの即位宣明が行なわれることに大きな疑義を感じないではられません。
少なくとも国民主権と象徴天皇という現行憲法の大原則を厳格に遵守する、新しい儀式となるよう、私たちは強く要望します。
2. (大嘗祭について)
政府自身は「大嘗祭」の神道的性格を認めざるをえなかったため、これを「国家行事」とはしませんでした。それにもかかわらず、また憲法にもその他の法律にも何の根拠もないのに、政府は「皇室の伝統」という名目でこれを「公的行事」と位置づけ、国会は「即位礼」と合わせて 81 億円の国家予算を議決しました。
このことは憲法が定める政教分離の原則に明確に抵触しますので、私たちはこれに反対し、政府がこれを「公的行事」としてこの儀式に関与することと、予算をこのために執行することを中止するよう、強く要望します。

資料引用

第 14 回総会、1990 年 8 月 29 日-31 日、p49

解題・解説

第10章 宣教百年前後（1992年～1994年）

第1節 宣教百年計画と事業室の設置

第2節 宣教百年

第11章 「宣教2世紀」を歩み始めて（1994年～2002年）

第1節 1994年から1998年

第2節 1999年から2002年

資料 228 「神学教育機関(神学校)改組((第16回総会、1994年8月24日～26日)

1994年の第16回総会に日本ルーテル神学大学より、「30年間にわたり呼びならしてきた大学名が大学の実体をあらわさない」との理由から大学名変更計画案が提出された。総会は、その趣旨を尊重しつつ、かつ大学の経営についての根本的検討を行う「神学大学将来構想検討委員会」を日本ルーテル教団の委員も含めて設置することを承認した。総会に投げかけられた問題は、以上の点につきなかつた。「神学校」の改組の骨子である「神学校の4年制」と「学長・校長」の分離、職務、任期の明確化する神学教育機関の検討を推進していくことが緊急の課題であった。そのための神学校改組の基本方針も総会は承認した

神学教育機関（神学校）改組等に関する件

提案者：常議員会

提案の背景

1. 1991年6月、第14総会期第2回常議員会において、神学大学からの申請に応じて、同大学の定員増に関わる4億円の資金貸付援助を決議した際、教会の神学教育機関としての神学大学及び神学校のあり方について、神学校の校長の任期制の導入、神学校の4年制の導入、神学校と神学大学の二重学籍制の導入等に関し、協議機関を設置することが、神学大学の同意のもとに、決議された（常議員会議事XIV-95～XIV-98参照）。
2. 上記決議を基にして、1991年11月に、第16回定期総会までを設置期間とする「神学教育機関検討委員会」が設置された。その構成は、委員長を総会議長の職責とし、委員を5名、事務局長を常時陪席者とする事とした。
3. その後、1991年12月に日本ルーテル神学大学に、1992年4月に日本ルーテル教団に、それぞれに同じ目的の6名による委員会が組織され、これら3者によって本件を協議していくこととなった。
4. 上記3者は、1992年7月16日に第1回目の会合を開き、以下の3点を決議した。
 - 1) 本会は、日本福音ルーテル教会、日本ルーテル教団の各常議員会、及び日本ルーテル神学大学理事会より、それぞれ任命された委員によって構成される三者協議会であり、神大・神学校を中心とした両教団の神学教育機関のあり方について検討し、一致且つ実現可能な改正案を、それぞれ総会・理事会に提議するものとする。
 - 2) 本会の名称を『神学教育協議会』とする。
 - 3) 本会の今後の方向
 - 一、神学校の4年制導入に関して
 - 二、学長・校長の働きと任期について上記の課題を、当面主たる問題として検討し、それに伴う実質的・具体的課題について、三者が協議していくものとし、次回までに日本福音ルーテル教会が、そのための草案を作成する。
5. 以上の趣旨は、前回第15回定期総会に「神学教育機関協議会報告」として、報告されている（第15回定期総会審議資料VIの13、14頁参照）。
6. 神学教育協議会は、日本福音ルーテル教会が作成した草案をもとに、1994

年7月5日に第2回、7月26日に第3回、8月15日に第4回の会合を開き、神学大学からの修正提案、1994年8月9日に開かれた神学校の4年制導入に関しての教育プログラム検討小委員会からの提案等を含めて審議し、合意に達した部分については、3者それぞれの決議機関に提議し、合意に至らなかった部分については、さらに協議を継続することとなった。

提案1 校長の選出方法、権限の範囲に関して

1. 神学大学学長と神学校校長の選出方法を分離するために、日本ルーテル神学校の校長選任裁定に以下の趣旨を盛り込む。

校長は、次により行なう選挙によって候補者を選ぶ。

ア 選挙権者：日本福音ルーテル教会または日本ルーテル教団の教師であつて日本ルーテル神学大学または日本ルーテル神学校の専任の神学教師として任を受けている者

イ 被選挙権者；日本福音ルーテル教会または日本ルーテル教団の現職の教師

2. 上記校長選任裁定の実施妹、1998年4月就任の校長の選任からとする。
3. 神大学長と神学校校長が異なる場合の神学校校長の権限の範囲は、次のとおりとする。
 - (1) 神学校の校長は、学校法人日本ルーテル神学大学の理事となる。
 - (2) 神学校の校長は、神学校カリキュラムを含む神学教育プログラム全般を編成し、神学校の教授会に提案する。神学校の教授会は、神学大学の神学科と協議して、神学校のカリキュラムを決定する。
 - (3) 神学校の校長は、神学校の専任の人事に関して、学長の意見を聴して、その任免を行う。神学大学と神学校との兼任となる人事については、学長、校長ともに推薦をすることができるものとし、任命権者の学長は校長の意見を聴して、神学大学と神学校との兼任となる人事について任免を行う。
 - (4) その他の権限については学長と校長が協議決定し、理事会の承認を得る。その場合、大学が任命する神学科長が校長と異なる場合にはその神学科長も含めて、学長、校長、神学科長の権限の範囲について3者で協議決定し、理事会の承認を得る。
4. 校長に就任する者が、日本ルーテル神学大学または日本ルーテル神学校の専任の神学教師として任を受けている者以外である場合には、その校長にかかる人件費は、日本福音ルーテル教会と日本ルーテル教団が負担するものとし、その負担割合については、両者で協議決定する。

提案理由：

現在、日本ルーテル神学大学学長と日本ルーテル神学校の校長との関係は、原則的には、学長として選出された者が校長を兼ねるという形になっている。その学長は、教会派遣ではない社会福祉学科の教員等を含めた選挙権者に

よる選挙によって候補者が選ばれ、理事会に推薦される。教会は、神学校の校長について、そのようにして選出された神学大学の学長の兼任として、神大との事前協議の機会なしに、任命の同意を求められている。

およそ組織機関の運営の成否が、その組織機関の長の入選にかかること大であることは言をまたない。

教会としては、教会の後継者養成機関としての神学校の長は、教会の意思によって決定される仕組みを確保したい。そのために、神学校の長は、教会が派遣した神学教師のみを選挙権者とする選挙によって選出する方法を採りたい。

提案 2：神学校を下方に 2 年延長することに関して

1. 別紙「神学校改組の素案」を基に、日本福音ルーテル教会、日本ルーテル教団、日本ルーテル神学大学の 3 者で協議し成案を得る。
2. 上記 1 により得られた成案の実施時期を 1998 年 4 月からとする。

提案理由：

日本福音ルーテル教会と日本ルーテル教団は、教職の養成を目的に、戦後設立した各種学校「日本ルーテル神学校」を 4 年制の「日本ルーテル神学大学」に改組し、その卒業後の教育機関として併設した 2 年制の各種学校「日本ルーテル神学校」と合わせた中で当初の目的である教師養成を行ってきたが、その日本ルーテル神学大学に「社会福祉学科」を設置したこと、また「神学科」にも他教派の学生を迎えていることなどは、将来教職を目指す神学生にとっては視野の広さを身に付ける良い機会と場所であることを認めるものである。しかしながら、教職志願の学生に対しては、他の学生とは異なる「教職の道」を志す者として、霊的・信仰的研鑽共同体における生活と訓練の必要を覚えるものである。日本ルーテル神学大学の神学科の充実を図る一方、教職志願の学生に対しては、その 3 年次進級と同時に召命と適格性を確認し、その後の一貫した指導のもとで教職としてのアイデンティティの確立を図り、加えて、社会人の教職志願に対してもその道を広げる。

提案 3：日本福音ルーテル教会、日本ルーテル教団、日本ルーテル神学大学により構成されている「神学教育協議会」を、日本福音ルーテル教会第 16 回定期総会以後も存続させる。そのために、神学教育機関検討委員会の設置期間を第 17 回定期総会終了まで延長する。委員 5 名は現在の委員が勤める。

提案理由：

1. 日本福音ルーテル教会に設置された「神学教育機関検討委員会」は、日

本福音ルーテル教会第 16 回定期総会終了をもって解散することとなっている。

2. 従って、「神学教育協議会」は、日本福音ルーテル教会第 16 回定期総会終了をもって自動的に解散することとなる。
3. 本件改組等が成就するまでには、なお、日本福音ルーテル教会、日本ルーテル教団、日本ルーテル神学大学の 3 者による協議が必要である。

付帯意見：

1. 神学校校長には、将来の教会の教師となる者への精神的影響力とそれを発揮できる勤務態勢（学生との個人的交わりの時間の確保）が期待される。
2. 神学校を 4 年制の一貫教育とすることは、神学大学卒業から現行の 2 年制の神学校への入学の可否を調べる際に働いていたチェック（適格性の再検討）機能が、失われるのではないかと懸念があるが、4 年制の一貫教育とすることの中に各学年への進級毎に厳重な適格性の再後討を行なう制度を導入する（どの学年でも不適格と認定し進路の変更を勧告することができる）ことによって、より高いチェック機能をもった制度を実現することができるのではないか。
3. 本件改革内容のうち、3 者による合意（それぞれの決議機関における承認）が得られた事項については、施行時期以前であっても、財政その他の事情により、実施できる状態になったものから順次実施することができるものとする。

付帯報告：

1. 日本福音ルーテル教会から神学教育協議会になされた提案「校長の任期は、4 年を 1 期として、連続して 2 期を越えない」は、合意に至らず、継続して協議することとなった。
2. 日本ルーテル神学大学から神学教育協議会になされた提案のうち
6、Dean（学監、等）配置
 - ・神学生教育全般の責任を負う。学校経営責任とは切り離す。
 - ・任命は教会との協議による。人件費、Office にかかる経費は教会負担。は、合意に至らず、継続して協議することとなった。

以上

資料引用

第 16 回総会、1994 年 8 月 24 日～26 日

日本福音ルーテル教会史資料一覧

第1章 日本伝道の開始（1880年～1901年）

第1節 「明治二五年」

第2節 宣教師来日

第3節 佐賀での伝道開始と展開

- 資料1 南部一致シノッド・ボードの日本伝道開始報告 (USS. 887.11.24-29)
- 資料2 シェーラーの日本からの第一信 (LV. 1892.3.31)
- 資料3 シェーラーとピーリーの紹介 (USS. 1892.6.22-27)
- 資料4 ピーリーの日本からの第一信 (LV. 1893.1.19)
- 資料5 佐賀での最初の礼拝 (『ピーリーの日本伝道開始の記録』 p16-18)
- 資料6 志水徳松洗礼 (ピーリー授洗) 1893.3.26 (『ピーリーの日本伝道開始の記録』 p18)
- 資料7 シェーラーの病気と帰国の報道 (LV. 1896.11.26)
- 資料8 シェーラーの辞任受理 (BMU. 1897.4.6)
- 資料9 ルーテル福音教会『礼拝式』、1897.6.1
- 資料10 シェーラー病気と帰国報告 (USS. 1898.5.11-16)
- 資料11 ピーリー報告・1898年ー1899年日本伝道報告 (USS. 1900.5.16-20)
- 資料12 1898年度日本伝道統計 (LV. 1900.5.31)
- 資料13 第一回教役者会 1900.5.31-6.2 (路帖教報創刊号 1900.7.12. 7頁)
- 資料14 路帖教報創刊号 1900.7.12 「発刊の主意」
- 資料15 内務省令第39号 1900.8.1 (路帖教報 1900.8.9 4頁)
- 資料16 1893年4月～1900年9月佐賀教会会員統計 (路帖教報 1900.11.8.4頁)
- 資料17 佐賀教会献堂式礼拝式文、1900年12月13日 (路帖教 1901.1.10. 1頁)
- 資料18 フィンランド宣教師来日 (路帖教報 1901.3.14 3頁)
- 資料19 路帖会員表 (路帖教報 1901.8.8 3頁、4頁)

第2章 新しい方策で（1902年～1910年）

第1節 宣教方策の拡大

第2節 教会の伝道

第3節 神学教育の始まり

- 資料20 1901年度日本伝道統計 (USS. 8th. 1902.5.7-11)
- 資料21 神学校開校と神学生募集特別公告 (路帖新報 1902.6.25 1頁)
- 資料22 路帖新報「発刊の辞」 (路帖新報 1902.6.25 1頁)

- 資料 23 佐賀幼稚園生徒募集 (路帖新報 1902.9.25 1頁)
- 資料 24 伝道開設 10周年記念特別公告 (路帖新報 1903.2.25 2頁)
- 資料 25 伝道開設 10周年記念祝会日程 (路帖新報 1903.2.25 2頁、3頁)
- 資料 26 ピーリー帰国の日程 (路帖新報 1903.3.10 4頁)
- 資料 27 ピーリー帰国報道 (路帖新報 1903.4.10 1頁)
- 資料 28 伝道開設 10周年記念祝会報告 (路帖新報 1903.4.10 5頁、6頁)
- 資料 29 神学生募集特別公告 (路帖新報 1903.6.25 1頁)
- 資料 30 ピーリーとボード書記スミスとの往復書簡 (USS,9th. 1904.7.27-31)
- 資料 31 日本伝道に関するピーリーの意見書 (LV. 1904.5.12)
- 資料 32 ボードによる日本伝道規定 (USS,9th. 1904.7. 27-31)
- 資料 33 熊本教会献堂式、1905.6.20 (『日本福音ルーテル教会史』 p79)
- 資料 34 私立熊本予備高等学校生徒募集 (路帖新報 1908.9.1 1頁)
- 資料 35 資料 在日日本アメリカ南部福音ルーテル教会ユニテッド、シノッド宣教師社団設立申請書・定款(1909.3.5)
- 資料 36 在日日本アメリカ南部福音ルーテル教会ユニテッド、シノッド宣教師社団設立許可書(1909.6.21)
- 資料 37 福音路帖神学校開校・授業内容(路帖新報 1909.10.1 6頁)
- 資料 38 九州学院敷地購入 (路帖新報 1909.12.1 1頁)
- 資料 39 遠山参良プロフィール (LCV.1910.8.11)
- 資料 40 「日本福音ルーテル社団」定款 (U S S. 12th. 1910.9.6-11)
- 資料 41 三ボードの日本伝道協同計画 (ローノーク会議) (USS. 12th. 1910.9.6-11)
- 資料 42 九州学院神学部課目・講師 (路帖新報 1910.10.1 4頁)

第3章 自立への第一歩 (1911年～1920年)

第1節 九州学院の開設

第2節 宣教 20周年事業と伝道戦線の拡大

第3節 憲法規則制定と教会組織化の始動

- 資料 43 機関紙「るうてる」第一号創刊の辞 (るうてる 1911.5.15 1頁)
- 資料 44 明治天皇崩御「哀悼の辞」 (るうてる 1912.8.15 1頁)
- 資料 45 「明治天皇陛下御大葬敬弔式」(るうてる 1912.10.15 5頁～6頁)
- 資料 46 婦人宣教師派遣報告 (USS. 13th. 1912.11.12-19)
- 資料 47 博多南博幼稚園設立告示 (るうてる 1913.3.15 6頁)
- 資料 48 博多南博幼稚園開園式 (るうてる 1913.5.15 6頁)
- 資料 49 宣教 20年記念概要 (るうてる 1913.6.15 5頁)
- 資料 50 1913年教勢統計 (るうてる 1913.7.15 6頁)
- 資料 51 ブラウン議長報告「日本伝道」(JCLM.1913.11.4)
- 資料 52 九州学院文部省認定 (1913.12.16)
- 資料 53 創立 20年記念史紹介 (るうてる 1914.5.15 付録 3頁)

- 資料 54 『創立 20 年記念史・序』(1914.4.15. 創立 20 年記念史 1 頁)
- 資料 55 九州学院略史 (1914.4.15. 創立 20 年記念史 99 頁)
- 資料 56 博多南博幼稚園概略 (るうてる 1914.6.15 4 頁)
- 資料 57 1914 年度日本伝道統計 (JCLM. 1914.6.26)
- 資料 58 婦人宣教師エカードとパワス派遣 (USS. 14th. 1914.11.10-13)
- 資料 59 小城幼稚園園舎建築 (USS. 14th. 1914.11.10-13)
- 資料 60 E・T・ホールン博士への山内直丸の弔詞 (るうてる 1915.5.15,3 頁)
- 資料 61 九州学院文部省指定認可 (1915.11.29)
- 資料 62 九州学院神学部専門学校認可 (1916.4.23. 『日本国政事典』第六巻図書センター)
- 資料 63 九州学院財団法人認可・定款 (1916.5.5)
- 資料 64 第 1 回年会、1916.9.26 (『日本福音ルーテル教会史』 p157)
- 資料 65 博多教会献堂式 (LCV. 1916.11.23)
- 資料 66 特別公告「久留米教会会堂建築」(るうてる 1917.2.15 4 頁)
- 資料 67 九州学院財団法人認可・定款(英文) (USS. 15th. 1917.11.9-13)
- 資料 68 教会資産一覧 (USS. 16th. 1918.11.10-13)
- 資料 69 神学校再編成調査委員会報告 (JCLM. 1918.8.20-26)
- 資料 70 神学校移転問題 (JCLM. 1918.8.20-26)
- 資料 71 久留米教会会堂献金依頼 (るうてる 1918.10.15 8 頁)
- 資料 72 1918 年度日本伝道統計 (るうてる 1918.11.22 7 頁)
- 資料 73 予定協約案全文 (るうてる 1918.11.22 7 頁)
- 資料 74 日本福音ルーテル教会憲法原案 (第 1 回総会 1920.4.8)
- 資料 75 協同基礎章項 (第 1 回総会 1920.4.8)
- 資料 76 女学校設立調査と場所検討委員会報告 (JCLM. 1920.4.6-13)
- 資料 77 第 1 回総会記録 (るうてる付録 1920.5.25 1 頁)

第 4 章 充実に向けての新たな展開 (1921 年～1931 年)

第 1 節 神学校の東京移転

第 2 節 社会福祉業の開設と九州女学院の創設

第 3 節 教会自給と信徒運動

- 資料 78 東京教会会員による公開状 (るうてる 1921.3.15 7 頁～8 頁)
- 資料 79 東京教会会員による開書 (るうてる 1921.6.25 6 頁～7 頁)
- 資料 80 夏季学校開催趣旨 (るうてる 1921.6.25 7 頁)
- 資料 81 神学校の移転決議 (1921.9.12-15. 第 2 回年会議事録 18 頁)
- 資料 82 神学校の移転に関する報告 (JCLM. 1921.9.12-15)
- 資料 83 東京教会人事問題 (JCLM. 1921.9.12-15)
- 資料 84 石松量蔵「故ブラウン博士を憶ふ」(るうてる 1922.1.10 2 頁～3 頁)
- 資料 85 山内直丸の人事に関する協議 (JCLM. 1922.9.9-15)

- 資料 86 山内直丸脱会決議 (JCLM. 1922.9.9-15)
- 資料 87 「C.L.ブラウンの死」哀悼文 (JCLM. 1922.9.9-15)
- 資料 88 稲富肇の招聘と按手札執行に関する決議 (JCLM. 1922.9.9-15)
- 資料 89 女学校推進委員会報告 (JCLM. 1923.4.4-9)
- 資料 90 慈愛園献堂式 (るうてる 1923.5.15 7頁)
- 資料 91 関東大震災報告 (るうてる 1923.10.15 8頁)
- 資料 92 アメリカ政府の排日運動に関する宣教師会の宣言 (るうてる 1924.8.15 1頁)
- 資料 93 関東地方震災救護報告 (1924.9.6-10.第5回年会記録 71頁)
- 資料 94 関東大震災活動委員会報告 (JCLM. 1924.9.11-24)
- 資料 95 排日運動に関する日本福音ルーテル教会の開書 (るうてる 1924.9.15 7頁)
- 資料 96 排日運動に関する ULCA ボード決議 (るうてる 1924.10.15 7頁)
- 資料 97 九州女学院建築委員会報告 (JCLM. 1925.9.4-8)
- 資料 98 日本ルーテル神学専門学校献堂式 (『日本福音ルーテル教会史』p257)
- 資料 99 九州学院宗教教育方針 (JCLM. 1925.9.4-8)
- 資料 100 九州学院チャペル献堂式 (るうてる 1925.11.15.10頁)
- 資料 101 1926年度宣教師・日本人教職・伝道師・教師一覧表 (JCLM. 1926.1.6-7)
- 資料 102 九州女学院献堂式 (るうてる 1926.5.15.6頁)
- 資料 103 大正天皇奉悼文 (るうてる 1927.1.15.1頁)
- 資料 104 新憲法規則承認 (1928.5.4-9.第9回年会記録 53頁)
- 資料 105 東京教会献堂式 (るうてる 1928.7.15.11頁)
- 資料 106 婦人会聯盟規約 (るうてる 1929.9.15.8頁)
- 資料 107 ルーテル教会信仰告白四百年記念会 (るうてる 1930.5.15.12頁)
- 資料 108 日本福音ルーテル教会憲法、1931.4.17

第5章 嵐の時代の始まり (1932年～1941年)

第1節 ひたすら内部充実へ

- 資料 109 社団組織改組 (1932.10.4-6.第13回総会記録 65頁-66頁)
- 資料 110 四十年史梗概 (るうてる 1933.8月号3頁、9月号4頁、10月号5頁)
- 資料 111 宣教四十周年感謝決議 (るうてる 1933.10.15.7頁)
- 資料 112 教会自給10年計画実施報告 (1936.3.4-9.第16回年会記録 140頁-143頁)
- 資料 113 教会合同不参加の決議 (第18回総会記録、1938.3.9-11)
- 資料 114 宗教団体法案の処理 (第19回総会議事録、1939.3.8-10 93頁)
- 資料 115 教会合同委員推薦の決議 (第19回総会記録、1939.3.8-10)
- 資料 116 基督教連盟代議員報告 (第19回総会記録、1939.3.8-10)

- 資料 117 宗教団体法と基督者（るうてる 1939.4.15.1 頁）
- 資料 118 教団規則の作成経過（20 回総会議事録、1940.3.6-9 14 頁）
- 資料 119 皇紀二千六百年記念伝道計画案（20 回総会議事録、1940.3.6-9. 92-94 頁）
- 資料 120 教団規則に関するボード決議(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, July 18,1940.)
- 資料 121 教団規則に採択に関する件(第 21 回臨時総会記録、1940.10.15-16)
- 資料 122 教会合同の決議（第 21 回臨時総会記録、1940.10.15-16）
- 資料 123 福音ルーテル教会との合同（第 21 回臨時総会記録、1940.10.15-16）
- 資料 124 社団財産移管に関するボード決議(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 23,1941.)
- 資料 125 社団財産の保全と定款(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 23,1941.)
- 資料 126 社団の改編決議（JCLM. 1941.2.19-20）
- 資料 127 宣教師帰還に関するボードの通知と関連資料（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, May 1,1941.）
- 資料 128 宣教師帰還に関する報告（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, May 1,1941.）
- 資料 129 ホーン議長報告(JCLM. 1941.5.5-8)
- 資料 130 宣教師帰還に関する報告（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, October 23,1941.）
- 資料 131 宣教師スタイワルトとヘプナーの帰還（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 22,1942.）
- 資料 132 宣教師スタイワルトの帰還の経緯(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, April 23,1942.）
- 資料 133 宣教師三名の帰還最終報告(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, July 23,1942.）

第 6 章 教団参加の時代（1941 年～1945 年）

第 1 節 合同と教団形成の背景

第 2 節 日本基督教団への参加、部制とその廃止

第 3 節 第 2 次世界大戦下の教会

- 資料 134 教団規則に関する経過報告（第 22 回総会議事録、1941.5.1-3）
- 資料 135 教会合同（第 22 回総会議事録、1941.5.1-3）
- 資料 136 福音ルーテル教会との合同経過報告（第 22 回総会記録、1941.5.1-3）
- 資料 137 日本基督教団との教会合同報告（第 22 回総会記録、1941.5.1-3）
- 資料 138 日本基督教団設立参加関連議案の決議（第 22 回総会記録、1941.5.1-3）
- 資料 139 『るうてる』終刊号論説（1942.9.15 出典:日本基督教団資料集第 2 編、P191）

第7章 再建の頃（1945年～1962年）

第1節 戦後の教団とルーテル教会

第2節 戦後の世情と伝道

第3節 新しい宣教団体とルーテル教会の合同

- 資料 140 宣教師派遣を要請する「日本委員会」報告（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, October 24-25,1945.P221）
- 資料 141 「日本委員会」報告と宣教師派遣方針（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 30-31,1946.P10-12）
- 資料 142 宣教師派遣に関する報告(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, April 24-25,1946.P68-70)
- 資料 143 ボード日本委員会報告 ホール辞退、ミラー、エルト^スの派遣(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June 24-26,1946, P117-118)
- 資料 144 「ルーテル会の誕生」の呼び掛け(ルーテル会誌、1946.7.20)
- 資料 145 日本伝道報告 宣教師着任(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, November 11-13,1946, P186-190)
- 資料 146 伝道計画に関する建議案（再建総会記録、1947.1.23-24）
- 資料 147 ボードへの教会再建報告(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, February 3-5,1947, P34)
- 資料 148 ボードへの再建準備総会報告（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, May 12-14,1947, P124）
- 資料 149 再建に関する声明（臨時総会記録、1947.1.1.13）
- 資料 150 ボードの日本報告（JELC の位置付け）（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 19-21,1948, P22）
- 資料 151 ボードの日本報告（新たな宣教師派遣）（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, January 19-21,1948, P26）
- 資料 152 宣教師館と土地建物支援(ULCA Board of Foreign Mission Minutes, November 8-10,1948, P225-228)
- 資料 153 再建後第一次総会「我らの決議」（るうてる 1948.12.15.1頁）
- 資料 154 宗教法人組織(総会記録、1948.11.20-24,p17-18)
- 資料 155 神学校土地建物報告(総会記録、1948.11.20-24,p39)
- 資料 156 神学校報告(総会記録、1948.11.20-24,p55-60)
- 資料 157 教会発展計画（総会記録、1949.5.3-5,p19-25）
- 資料 158 大学設置委員会報告（総会記録、1949.5.3-5,p93-97）
- 資料 159 日本福音ルーテル教会と ULCA との共同（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June 20-22,1949, P154）
- 資料 160 国際基督教大学設立への資金援助に関して（ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June 20-22,1949, P154）
- 資料 161 久留米大医科専門学校の取得と移管（ULCA Board of Foreign

- Mission Minutes, February6-8,1950, P26-8)
- 資料 162 アウガスタナ・ルーテル教会の日本伝道参入 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, February6-8,1950, P28)
- 資料 163 国際基督教大学設立支援に関して (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, February6-8,1950, P30-31)
- 資料 164 久留米医科専門学校の取得報告と決議 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June19-21,1950, P127-130)
- 資料 165 JELC と ULCA 海外伝道局との特別協約 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June19-21,1950, P189-190)
- 資料 166 第 27 回総会議長報告(第 27 回総会記録、1950.5.2-4)
- 資料 167 神学校委員会報告(第 27 回総会記録、1950.5.2-4 p110-111)
- 資料 168 議長報告(第 28 回総会記録、1951.5.8-10 p25-33)
- 資料 169 アウガスタナ・ルーテルミッションとの協約(第 28 回総会記録、1951.5.8-10 p4,p5, p10)
- 資料 170 アウガスタナ・ルーテル教会との協約事項締結(第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, P62-63,114-117)
- 資料 171 60 周年記念事業委員会報告 (第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, p118-119)
- 資料 172 神学校委員会報告 (第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, p136-137)
- 資料 173 日本ルーテル神学校報告(第 28 回総会議事録、1951.5.8-10, p133-135)
- 資料 174 東京学生センター(Tokyo Student Center) (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, December 5-7,1951, P247)
- 資料 175 日本福音ルーテル教会とアウガスタナ・ルーテル教会との共同 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, December 5-7,1951, P248-255)
- 資料 176 宗教法人「日本福音ルーテル教会」設立公告(「るうてる」, 1952.1.15, p5)
- 資料 177 福音ルーテル教会との合同契約(第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P102-104)
- 資料 178 神学校共同経営交渉委員報告 (第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P105-106)
- 資料 179 平井清議長報告 (対外関係) (第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P27-30)
- 資料 180 平井清議長報告 (対内関係) (第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P25-27)
- 資料 181 平井清議長報告(宗教法人認可) (第 29 回総会議事録、1952.4.22-24, P33)
- 資料 182 日本福音ルーテル社団報告(第 29 回総会記録、1952.4.22-24, P124)
- 資料 183 東京学生センター(Tokyo Student Center) (ULCA Board of Foreign

- Mission Minutes, December 2-4,1952, P297)
- 資料 184 アバコ (AVACO) (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, December 2-4,1952, P305)
- 資料 185 福音ルーテル教会との合同準備委員会報告 (第 30 回総会記録、1953.5.5-7, P10,P114)
- 資料 186 神学校共同経営委員会報告 (第 30 回総会記録、1953.5.5-7, P117)
- 資料 187 教団認証 (第 30 回総会記録、1953.5.5-7, P34)
- 資料 188 JLMA (日本ルーテル宣教師会) の規則 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, October 21-23,1953, P340-350)
- 資料 189 全ルーテル協議会委員会報告 (第 31 回総会記録、1954.5.4-6, P227-228)
- 資料 190 北米一致ルーテル教会との特別協約破棄の件 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, November 9-11,1954, P525)
- 資料 191 ルーテル各派合同接渉委員会 (第 31 回総会記録、1954.5.4-6, P8,14,257)
- 資料 192 日本福音ルーテル教会 60 年史出版委員会報告 (第 31 回総会記録、1954.5.4-6, P11)
- 資料 193 北米一致ルーテル教会への感謝決議文 (第 31 回総会記録、1954.5.4-6, P17-18)
- 資料 194 全ルーテル合同接渉委員会報告 (第 32 回総会記録、1955.5.3-5, P184-191)
- 資料 195 日本ルーテル神学校学校法人設立 (第 32 回総会記録、1955.5.3-5, P118)
- 資料 196 牧瀬議長辞任報告 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, February 7-9,1956, P46-48)
- 資料 197 全ルーテル合同接渉委員会報告 (第 34 回総会記録、1957.5.7-9, P58)
- 資料 198 故山内量平牧師記念事業委員会報告 (第 34 回総会記録、1957.5.7-9, P50-51)
- 資料 199 デンマーク伝道会(DMS)との協約 (第 36 回総会記録、1959.5.5-7, P3~P5)
- 資料 200 キリスト教伝道団(CMB)との協約 (第 36 回総会記録、1959.5.5-7, P5~P6)

第 8 章 自立に向けて (1963 年~1974 年)

第 1 節 海外教会との協力態勢 JCM の時期

第 2 節 「アスマラ発言」とその波紋

第 3 節 自立達成の努力

- 資料 201 日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会との協約 (第 39 回総会記録、1963.4.30-5.2 P74~P77)

- 資料 202 デンマーク伝道会(DMS)との協約に対する覚書 (第 39 回総会記録、1963.4.30-5.2 P55~P56)
- 資料 203 東海ルーテル聖書学院の移管に関する件 (第 5 回運営委員会、1964.4.6-8 P16,P22~P23)
- 資料 204 ブラジル伝道計画案(第 5 回運営委員会、1964.4.6-8 P16,P20~P21)
- 資料 205 北ドイツ・ミッションとの協約 (第 1 回定期総会、1964.5.6-7 P20~P21)
- 資料 206 日本ルーテル教団との神学教育に関する協約 (第 5 回常議員会、1965.7.7-9 P191~P193)
- 資料 207 日本ルーテル神学大学移転経費 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, June 14-16,1965, P379)
- 資料 208 日本福音ルーテル教会とアメリカルーテル教会(ALC)協約 (第 5 回常議員会、1965.7.7-9 P209~P210)
- 資料 209 日本ルーテル神学大学学長報告 (ULCA Board of Foreign Mission Minutes, November 8-10,1965, P650-651)
- 資料 210 東海ルーテル聖書学院寄附行為 (第 6 回常議員会、1968.1.10-12 P338~P342)
- 資料 211 ドイツ福音ルーテル教会連合及び北ドイツ伝道協会と日本福音ルーテル教会との関係報告(第 4 回常議員会、1969.6.17-19 P177~P178)
- 資料 212 日本ルーテル神学大学報告(第 4 回定期総会報告,1970 年 5 月 5 日~7 日、p145~146)
- 資料 213 日本福音ルーテル教会とドイツ合同福音ルーテル教会協約案 (第 6 回常議員会、1971.11.16-17 P384~P385)
- 資料 214 ブラジル福音ルーテル教会と LWF の協約書 (第 6 回常議員会、1971.11.16-17 P385~P386)
- 資料 215 日本福音ルーテル教会並びに日本ルーテル教団との間における神学教育に関する協約改訂案 (第 6 回常議員会、1971.11.16-17 P387~P388)
- 資料 216 JELC と伝道協力委員会(JCM)加盟教会・協会との協約案(第 5 回総会、1972 年 5 月 2 日-4 日 p27~p29)
- 資料 217 靖国神社国営化法案抗議声明((第 6 回総会、1974 年 5 月 2 日-4 日 p14)
- 資料 218 自立踏み出すに当たっての声明(第 6 回総会、1974 年 5 月 2 日-4 日 p18)

第 9 章 自立の実質化への努力 (1975 年~1991 年)

第 1 節 自立への出発

第 2 節 収益事業の意味

- 資料 219 靖国神社国営化に反対する声明(第 8 回総会、1978 年 5 月 2 日-4 日)

- 資料 220 宣言文～平和と核兵器廃絶を求めて～(第 10 回総会、1982 年 8 月 27 日)
- 資料 221 一致信条書の出版に関する宣言(第 10 回総会、1982 年 8 月 27 日 p17)
- 資料 222 小児陪餐についての提案(第 12 回定期総会、1986 年 8 月 26 日～28 日 p16)
- 資料 223 カトリックとの「洗礼の相互承認」提案(第 12 回総会、1988 年 8 月 22 日、p9)
- 資料 224 JACE 宣教協約(JELC と ELCA) (第 14 回総会、1990 年 8 月 29 日、p56)
- 資料 225 IECLB 宣教協約(JELC とブラジル・ルーテル告白福音教会) (第 14 回総会、1990 年 8 月 29 日、p54-55)
- 資料 226 百年記念計画書(第 14 回総会、1990 年 8 月 29 日、p14-15)
- 資料 227 即位礼・大嘗祭」の信仰表明(第 14 回総会、1990 年 8 月 29 日、p49)

第 10 章 宣教百年前後 (1992 年～1994 年)

第 1 節 宣教百年計画と事業室の設置

第 2 節 宣教百年

第 11 章 「宣教 2 世紀」を歩み始めて (1994 年～2002 年)

第 1 節 1994 年から 1998 年

第 2 節 1999 年から 2002 年

- 資料 228 「神学教育機関(神学校)改組((第 16 回総会、1994 年 8 月 24 日～26 日)